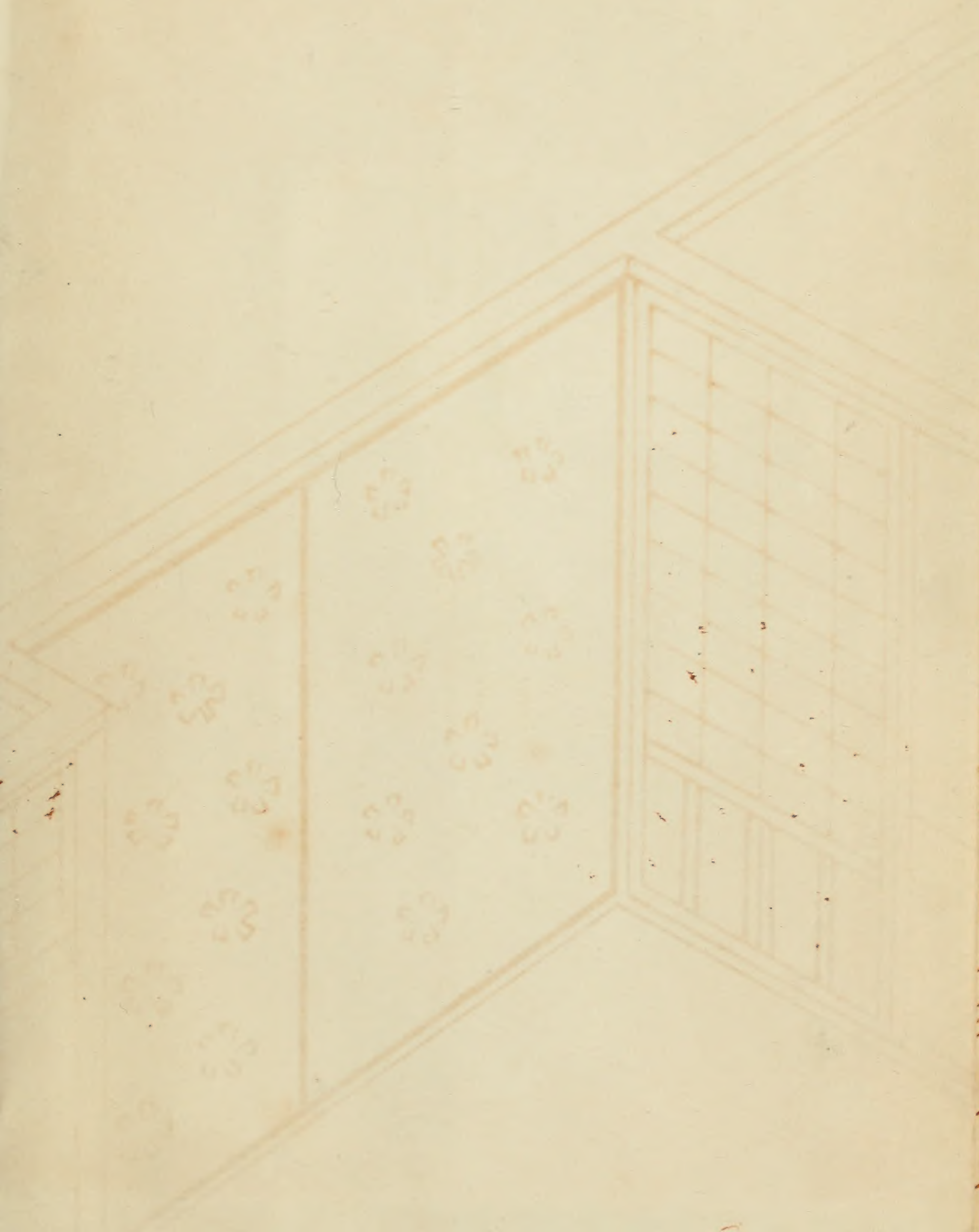






大南北全集

第十五巻

大南北全集 第十五卷

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

東京 春陽堂刊行

お願ひ

毎巻刊行遲延が重なりまして何とも相濟みません。何分にも、活字本を原稿にするのと違ひまして、印刷所へ廻すまでに非常な手數がかゝります爲に、兎角故障が起りがちで、恐縮に堪へません。併し、皆樣のお庇で、あと二册といふまでに漕ぎつけました。

茲で、特に皆樣にお願ひがあるのです。それは、追ひ〳〵卷が進んで參りますうちに、最初は迚も見當らぬと諦めてゐた南北の脚本が、その後折々發見されて參りまして、既に六種ほどに及びました。假にも全集でございますから、これらは是非收容いたしたいのでございますが、豫定の十五册では、到底それは不可能な事なので、更に二卷を增して十七册と致し、これ等新發見の脚本の外、南北作の草双紙小說數種と、南北脚本全部の解題、及び名題上のカタリ等を出來得る限り收容する事と致しました。豫定以上に卷を殖すのは本意ではございませんが、見す〳〵發見された脚本を逸するのも殘念ですし、全集を完全に近づける爲でもございますから、是非御贊成下さいまして、僅か二册の事ですし、折角今まで御講讀を願つた事ですから、十七卷までお附合ひを願ひたいのでございます。

大南北全集十五卷に引き續き別表通り二卷を追加發刊し、當全集の會員の方々に限り特に御頒ち致す

事と相成りましたに就ては、御豫約當初の御申込金を第十七囘目の會費に充當させて頂き、引つゞき毎月會費を御拂込み願ひ度う存じます。

尙ほ追加二卷分會費は從前通り一册金四圓五十錢（外に送料市内金十二錢・地方金二十七錢 滿鮮・臺灣・樺太金五十五錢）づゝ御拂ひ込み願ひます。

萬一此の際一時御うち切りの方は御手數ながら至急其の旨御通知被下樣御願ひ申上げます。

本全集の御申込を本會直接でなく他の取次書店へ御申込みの會員諸賢は引きつゞき其の書店へ御申し込み下さい。從前通り配本はその取次書店から致します。

左に、今まで刊行の脚本目錄と、以後收容のものとを掲げて置きます。

次回配本

卷	脚本
第一卷	四天王楓江戸粧（賴光四天王土蜘蛛退治） 彩入御伽草（小幡小平次お妻八郎兵衞） 靈驗曾我籬（龜山と權八と嫁切り）
第二卷	貞操花鳥羽戀塚（高尾の文覺と暫） 伊勢平氏額英幣（淸元の茶筌賣り）

第十巻	第十一巻	第十二巻	第十三巻	
紋盡五人男（雁金五人男意氣地競） 三賀莊曾我島臺（笹野權三とお千代半兵衛） 曾我中村穐取込（天日坊と曾我の後日）	藤川船𦪷話（龜山仇討と小三金五郎） 靈驗龜山鉾（龜山仇討とお妻八郎兵衛） 鬼若根元臺（お染久松顏見世道行）	御國入曾我中村（權三權八と三勝半七） 東海道四谷怪談（お岩小平の怪談） 盟三五大切（船頭笹の屋三五郎）	浮世柄比翼稻妻（不破名古屋の鞘當） 櫻雜石尊贐（伊賀越の新敵討）	八重霞曾我組絲（お園六三小絲綱五郎）

大南北全集　第十五卷　目次

挿繪目次

口繪解說

■卷頭に大きく入れた錦繪は、「獨道中五十三驛」のうち、岡崎の猫の圖で、三世菊五郎の似顏である。尤も初演當時のではなく、再演の折のであるが、この狂言の眼目の幕であるから、特に三枚續きの一枚を取つて大きく出して見た。

■「獨道中五十三驛」の各所へは、錦繪を數葉入れた。いづれも初演當時のもので、國貞の筆である。一枚、二五七頁の前へ入れたものだけは、後にこの狂言が草双紙になつて出た時の挿繪を拔いたのである。この挿繪も、矢張り三世菊五郎の似顏になつてゐる。

■同じ狂言の櫓下番附を、二葉挿入して置いた。一枚のは、五十三驛の趣向に因んで、道中双六の體裁にしてある所が面白い。

■五四五頁の前へ入れた錦繪は、お國御前の亡靈が現はれる場の狩野元信で、初代豐國の筆である。牡丹燈籠に蝙蝠をあしらつた構圖が、いかにも巧い。二番目の累と與右衞門の二枚は、いづれも再演の時の錦繪で、國貞の筆である。

■「金幣猿島郡」の中へ入れた三枚續きの錦繪は、瀨川菊之丞の道成寺である。本文解說にも記した通り、最初は菊之丞が道成寺を踊る筈で、斯うして錦繪まで出版されたのであるが、病氣のために芝翫に讓り、そこで奴道成寺に變更されたのである。卽ちこれは上演前の豫想錦繪で、國貞の筆である。

■「阿國御前化粧鏡」と「金幣猿島郡」は、初演の繪本番附があつたから、例によつて本文の各所へ挿入して置いた。


一勇斎国芳画



解說及年表

獨道中五十三驛(ひとりたびごじふさんつぎ)

南北が、文政十年、七十三歳の六月に、河原崎座へ書きおろした脚本で、死去より二年前の作である南北の作中、これほど、彼れの長所と短所の兩極端を、發揮した脚本は少ないであらう。

東海道五十三驛を、舞臺面に應用するといふ趣向は、この作が初めで、其頃としては全く奇想天外というべきであつた。尤も、當時大流行であつた、十返舍一九の「膝栗毛」からヒントを得た事は疑ひもないが、それを芝居へ持込んだのは、流石に思ひつきの巧い南北だけの事はある。殊に、「膝栗毛」の兩主人公を、狂言中へ組み入れたなぞは、最も恰悧な手法であつた。彌次郎兵衞喜多八が芝居へ現はれたのは、全くこれが最初であつた。その彌次喜多の活躍も、小田原の五右衞門風呂の趣向以外は、全く南北創意の滑稽である所にも、彼れの抱負と良心が覗へる。篇中、「沼津の村芝居」の一幕は、南北が斯方面での技倆を遺憾なく發揮して、實に面白い。團十郎菊五郎を役者に使つたのはまだしも、人としての菊五郎の短所を、ソックリ筋の中へ盛りこんだなぞ、南北もなか〳〵人が惡い。

何にしても、五十三驛の宿次を、それ〴〵舞臺に現はさうといふのが眼目の思ひつきだから、大道具が大變なものだつた。この頃の大道具といへば、精々一幕に盛る場數は二三場限りであるし、幕間も長かつたから、悠々と道具を飾りつける餘裕もあつたが、そんな事をしてゐたのでは、到底この新狂言の脚色を完全に演出する事は出來ないといふので、南北は、大道具師長谷川勘兵衛と相談して、道具の轉換法に新らしい試みをした。勘兵衛も懸命の智慧を絞つて、一幕の中に十何場も盛りこめるやう、廻り舞臺や居所變りに、新機軸の方法を案出したのみか、舞臺一面に本水を漲らせて大井川と見せ、そこへ本雨を降らせて、その水中で早替りをさせたり、怪猫の飛行には宙乘りに改良を加へて大いに凄味を見せたり、等々、一場面毎に、今までは見られなかつた新らしい試みをしたので、觀客は驚喜して喝采したのだつた。この芝居が、炎暑の最中にも係らず、記錄破りの大入りを占めたのは、一つは大道具の功であつた。以後暫らくは、大道具本位の狂言が流行した位であつた。

　さうした機智的技巧以外、南北の特徴は到る所に溢れかへつてゐる。慘忍、怪奇、猥雜、滑稽が特にこの脚本では强調されてゐる。短所として、殊に目につくのは、世界の極め方であらう。五十三驛の狂言として、趣向を敵討と怪談に定めたのは、當時の觀客心理に迎合する南北の用意として、頷けるのであるが、その世界定めの仕方が實に亂暴だ。先づ敵討の方を「龜山」に取り、それに「染分手綱」の世

界を加へた上「權八小紫」「おはん長右衞門」「白石噺」まで交ぜて、その上へ「膝栗毛」の衣をかけたといふのだから、實に複雜の上にも複雜になつてしまふが、當時の觀客は、それでも平氣であつたらしいのだから驚ろく。が、それにしても、この狂言は、重ねられた世界の數の多さではレコードだ。

初演の役割は左の通りであつた、

伊達の與作。漁師、助市後ニ法華長兵衞（三ヤク三世坂東三津五郎）息女、重の井姫。民部女房、おのぶ（三ヤク岩井粂三郎）由井民部之助實ハ中野藤助。藤川水右衞門後ニ入山津の江戸兵衞。大工、牡丹獅子の八。蝮の次郎吉（四ヤク七世市川團十郎）藤川官太夫（七世片岡仁左衞門）石井半次郎。お松妹、お袖。幇間、喜作（三ヤク尾上松助）鬼坊主願哲實ハ奴段介。帶屋長右衞門後ニ喜多八（二ヤク桐山紋治）赤堀源吾。八ツ橋村左次兵衞。うぶら權兵衞（三ヤク大谷門藏）按摩、慶政後ニ彌次郎兵衞。島田の萬九郎（二ヤク坂東彥左衞門）與作女房、小萬。賤機山のお倉（二ヤク片岡松太郎）由留木馬之助。栗原丹藏（二ヤク片岡我十郎）赤羽屋五郎作（津打門三郎）奴、逸平（尾上菊藏）山形屋義兵衞（市川川藏）女非人、おはぎ（尾上梅五郎）悴、與之助（片岡藤十郎）小萬母、お浪（市川おの江）石井左内。智行上人。佛作助（三ヤク成田屋宗兵衞）信濃屋お半後ニ藝子いろは（坂東玉三郎）奴、大津の又平實ハ由留木調之助　荻野伊三郎）八ツ橋村のお松。丸子猫石の精。權八姉、八重梅後ニ葛飾お十。自然生小僧三吉假名粂名屋德藏後ニ日本駄右衞門實ハ丹波與八郎。大工。小西の八。秋葉山の三尺坊。白井權八。竹村定之進（八ヤ

（三世尾上菊五郎）

この狂言は大成功を占めたので、後年も度々上演されたが、不思議にも、この狂言に限つて、その再演の度毎に、時期や俳優の關係で、大改訂が加へられ、いつもまるで變つたもの〻やうにされてしまふのが例だつた。つまり「獨道中五十三驛」の中から好い箇所だけ取つて、それへ、その時々の作者が、更に種々な別の筋を添加して、その上、全部の役名まで變へてしまつて上演するのだから、殆んど面目は一新されてしまふのが常だつた。

二度目の上演は、天保六年二月の市村座で、名題を「梅初春五十三驛」といひ、春だけに、背景の世界は曾我にして、中村重助、三升屋二三治、五世鶴屋南北等が補作したのであつた。この補作者達が、原作の「獨道中五十三驛」から受繼いだのは、左の件だけだつた。

○先づ心棒になる役は、矢張り盗賊にして、役名を稻葉幸藏とつけた。これは當時評判になつた鼠小僧次郎吉の當込みだつた。

○姫が葛籠へ入れられ、その裝束を猫が着る筋。姫の役名は、頼朝息女大姫になつた。

○お半長右衛門の石部の宿、桑名の船中、及び龜山仇討の件。但し筋は多少變つてゐる。

○古寺の猫は眼目だから勿論保存されたが、筋も段取りも大分變つた。

○大井川の本水に蓮臺渡し、鐵砲の件、夜啼き石の件。

○非人の宿に虚無僧の宿り、及び腹裂きの件。但し非人は地獄の清三といふ立役に直し、お松の腹を裂かうといふ時に、守り袋から曾て自分の契つた女と判り、お松の腹は裂かずに自分が切腹するといふ筋に直した。

○權八は保留したが、筋は變り、權八が女姿で關所を通る事や、五右衛門もどきの樓門の件なぞが附加された。

保留されたのはこれ等であつたが、特に附加された趣向で新らしいのは「薄雲の幽靈」であつた。島原の傾城薄雲が、若殿を慕つて廓を拔け出し、鈴鹿山で惡人に殺される。その位牌は、古寺の場に至つて若殿の懷へ入ると、夜半に薄雲の幽靈は若殿の懷から出るといふ筋である。懷から幽靈の現はれる趣向が新らしいので評判になつた。小夜の中山夜啼き石の、うぶめの姿も、この薄雲の幽靈といふ事にしてあつた。

八百屋お七の件も附加された。お七といつても、年增の踊りの師匠で、古主權八の爲に、辨長坊主を谷へ蹴落して、寶劍を奪ふといふやうな筋であつた。

春狂言だけに、箱根山の場では曾我の對面を見せた。一體の役名は、馬琴の「賴豪阿闍梨怪鼠傳」か

ら取つて、序幕に稲葉幸藏が頼家から鼠の術を譲られるといふのを發端としたのは、全く鼠小僧を當込みたい爲なのであつた。

この興行も成功した。その時の役割は

曾我十郎。白須賀十右衛門（非人宿の虚無僧、及び、古寺の猫を退治の役）地獄の清三（江戸兵衛の役）に三枡源之助。十六夜（お袖の役）おはんに坂東玉三郎。息女大姫（重の井姫の役）明石のお松、小紫に尾上榮三郎。薄雲太夫、小夜衣お七、工藤祐經、白井權八、土左衛門傳吉、猫石の怪、稲葉幸藏（與八郎の役）が三世尾上菊五郎。中野藤兵衛（逸平の役）大江因幡之助（民部之助の役）曾我五郎が十二世市村羽左衛門。

第三回目の上場は、弘化四年七月の市村座で、名題は「尾上梅壽一代噺」と附けた。これは、三世菊五郎が江戸の舞臺を引退する、一世一代のお名殘狂言であつたから、役者にとつては最も記念すべき五十三驛の狂言を選み、これへ尾上家特有の怪談狂言を附加したもので、改訂者は、三世櫻田治助、三世並木五瓶、清水正七、松島陽助、梅澤宗二、等であつた。大體の結構は「梅初春五十三驛」に據つたが、猶左の通り新作の幕も交つてゐる。

○權八の立ち腹――この狂言では白井權八を非常に働らかし、伯父の本庄助太夫が犬神を祀つて主家を呪ふのを知つて、助太夫を切る。のち大磯の廓で小紫に馴れ染めたが、犬神の祟りをうけて

小紫はじめ大勢を切り殺し、六郷川で捕り手に圍まれ、船中で立ち腹を切るといふ筋であるが、船中の立ち腹は非常に好評であつたので、この場だけは今でも、他の狂言に附加して演じる事がある。

○羅漢――これは次の「阿國御前化粧鏡」で初めて演じられた父松助の當り役を、この時、序幕に附加したのである。

○天竺徳兵衛――これは父松助が始めた役で、菊五郎自身も十數度勤めたが、一世一代といふので特に五十三驛の中へ書きこんでもらつたのである。別に、日本駄右衛門、唐土姫をも出して、三國同盟の盗賊といふ趣向にしたが、これは文政七年八月、中村座所演「音菊高麗戀(をとにきくいてふのくせもの)」を其まゝ借りて來たのである。日本駄右衛門には別に、袋井釣船屋の場で、二枚目の手代から盗賊に變るといふ場を附けて、その持ち場とした。

○死神――これはこの時初めて加へた趣向であつた。默阿彌の「加賀鳶」に傳はつて、今に殘つてゐる。

全體に「夏祭」と「秋葉權現」の世界を冠せたのであつた。役割は

天竺徳兵衛、羅漢、薄雲、猫石の精、土左衛門傳吉、非人の團七（江戸兵衛の役）死神を三世尾上菊五郎。腰元

琴浦（お袖の役）八重梅（お松の役）を藤川花友。啓士姫、小紫が坂東しうか。日本駄右衛門、玉島逸當（非人宿の虚無僧と、猫退治の侍ひ）が澤村宗十郎。月本因幡之助（民部之助の役）が十二世市村羽左衛門。

次に五十三驛の狂言が出たのは、嘉永三年五月の市村座で、「忠臣藏五十三紀」といふ三世櫻田治助の作で、義士の東下りを中心に、膝栗毛を交へたものであつたが、これは「獨道中五十三驛」とは關係がない。又、安政元年八月の河原崎座に、默阿彌は「吾嬬下五十三驛」を書きおろしたが、これも純創作のみで、僅かに猫の怪だけは趣向を借りたが、これとて古寺ではなく、大名の後室で、鍋島の猫を利かせたものであつた。

萬延元年五月の守田座では、三世櫻田治助の「花擴籠五十三驛」が出たが、これは「伊賀越」と「御堂前の仇討」を合併したもので、五十三驛といつても特殊な驛路の背景が少なく、隨分支離滅裂の作だつた。たゞ、權八の立ち腹だけは「尾上梅壽一代噺」から借りて無理に附けてあつた。權八は市川市藏が演じた。

文久元年七月の市村座では、默阿彌作の「東驛いろは日記」が上演された。これも義士の東下りで、南北物とは緣が遠いが、たゞ「古寺の猫」だけは、其まゝに見せた。三世菊五郎には孫に當る、十三世市村羽左衛門（後の五世尾上菊五郎）に、猫を勤めさせたのであるが、何分にも羽左衛門は、この時十

九歳の若年なので、老婆の姿を見せる譯にはゆかず、そこで、猫が美しい踊の師匠に化けてゐる筋に直し、南北以來お約束の、十二單衣の姿は、小町の踊を見せるといふ趣向を構へて嵌めこんだ。これを退治する役は、義士の不破數右衞門であつた。

明治元年二月、中村座の「千歳鶴東入双六」は、三世瀨川如皐が鹽梅したものであるが、「獨道中五十三驛」の中から、京都より草津まで、及び石部の宿屋、桑名の船中、八つ橋村、秋葉山、の四幕を其まま取つて使ひ、その外、猫は若い後室にして、白井權八が退治る筋とし、その猫の祟りで、權八が小紫を殺すところは、「尾上梅壽一代噺」の大磯をソツクリ使ひ、犬神を猫に直したまでゞあつた。その外、二三、新作の場面も添へてあつた。その時の役割は

自然生の三吉、妹お袖（坂東彦三郎）權八、奴逸平（澤村訥升）重の井姫、小紫（岩井紫若）猫の精、お半（澤村田之助）左次兵衞、三尺坊（嵐吉三郎）お松（市川新車）民部之助（市川米升）

明治四年九月、中村座上演の「東海奇談音兒館」は、「尾上梅壽一代噺」から、羅漢、古寺の猫、薄雲桑名の船、を取り、外に默阿彌の「小春穩沖津白浪」から、玉島幸兵衞の件を拔いて添加したものであつた。この時分になると、もう五十三驛の狂言といふのは名のみで、決して正直に京都から江戸までを狂言にするのでなく、いはゞ眼目の件のみを拾つて、繼ぎ剝ぎに並べるだけで、隨つて、特殊な舞臺轉

換法なぞは、忘れられてしまつたのである。

この時の役割は、次の通りであつた。

駄右衛門、羅漢、薄雲、古寺の猫、幸兵衛（五世尾上菊五郎）因幡之助、お絹（五世坂東三津五郎）古寺の雇ひ女おくら（尾上梅五郎、現今の松助）

明治十一年九月の中島座上演「東海名所噂珍猫」は、大體を「東海寄談音兒館」にして、これに白井權八と、非人宿の腹裂きを加へ、猫の怪を若い後室に直したものであつた。役割は

駄右衛門、猫の怪、幸兵衛（中村壽三郎）羅漢（松尾猿之助）八重梅、稻葉小太郎（尾上幸藏）非人德兵衛（吉川路鳥）權八（中村重藏）おきぬ（澤村曙山）

明治二十年七月、中村座上演の「五十三驛扇宿附」は、默阿彌の作で、白井權八を中心にして、古寺の猫を添へたものであるが、權八といつても、白粉氣の無い大若衆であり、古寺の猫も豐臣家の仇を報じようといふ筋だから、南北の五十三驛とは、內容は勿論、味ひも全然變つたものになつてゐる。たゞ老婆に化けた猫の怪が、十二單衣で鐵漿をつけてゐるといふ、あの姿一つだけを「獨道中五十三驛」から借りたのであつた。南北の原作から、今日まで保存されたのは、この猫の姿一つだけだと云つてもいい。この、猫が十二單衣を着るといふ趣向は、南北も、猫の怪を思ひついたもの〻、どんな姿にしたも

のかと迷つてゐた時、隣家の猫が、官女を描いた錦繪を咬へて、偶然座敷へ入つて來たので、それから十二單衣の姿を思ひついたのだといふ話しが殘つてゐるが、その因緣のある姿だけが今日に殘つたのも面白い。

本卷に收錄した臺帳には、鈴ヶ森の場までしかない。卽ち、品川から江戸の場が當然一幕無ければならない。權八も民部之助も結末が附かない譯だが、卷末の口上にもある通り、正本が出來なかつたのであつた。無論南北としては、腹案を持つてゐた。蝮の次郞吉が切腹して、法華長兵衞の拾つた一薬へ血汐を混じて權八に服ませると、權八の金瘡は癒え、雷丸の一腰はめでたく取戾す。民部之助には捕り手がかゝるといふのが、大詰だつたに違ひないが、非常な大入大當りだつたので「箱根山の場」で打出し「鈴ヶ森の場」の脚本は出來てゐても、實際は上演しなかつたものである。大入の芝居では、完全に大詰まで演じないといふのが、昔の芝居の習慣であつた。尤も、この狂言は隨分長いから「箱根山の場」まで演じた位で、丁度よかつたのであらう。

阿國御前化粧鏡（おくにごぜんけしやうかゞみ）

南北としては初期の作で、文化六年六月、木挽町の森田座に上演された夏狂言である。初期の作をこの卷へ收容したのは、甚だ年代順に逆行した次第だが、原本謄寫の期間の關係で、どうしても本卷へ入る順になつてしまつた、この點はお見遁がしを願ひたい。尤も、本篇は、南北初期の怪談物の代表作であるし、「獨道中五十三驛」は、南北最後の怪談狂言であるから、對照させるのも、まんざら無意味でもあるまい。

この夏狂言興行の相談があつた時、芝居の中では反對者が多かつた。今さら松助の怪談物でもあるまい、不當りなのは見え透いてゐるから、御免蒙むるといふ者が續出した。それは多く芝居茶屋の方面で、歩を持つのが嫌だからであつた。この反對の爲に、芝居興行は覺束なかつたが、南北が松助を勵まして、無理から開場する事になつた。殆んど松助の手興行ともいふべきものであつた。開場して見ると非常な大當りで、僅か一二軒の芝居茶屋のみが、利益を占めるのを傍觀するやうな始末になつたので、反對者も今さら後悔して詫びを入れるやうな次第であつた。松助としても、南北としても、記念すべき夏狂言であつた。

最初は、本水を使ふ天竺德兵衞を、矢張り松助が演じる筈であつたが、南北の發案で、天德は花形の悴榮三郎へ讓り、松助には雜漢と、お國御前の亡靈とを書き與へた。この雜漢が非常に當つたのであつ

た。お國御前の怪談に「お岩婦子」から牡丹燈籠の趣向を取つて使つたのも面白い。お國御前に、中老の女の戀を見せたのも、ちよつと近代的の臭ひがする。「世繼瀬平内の場」が、後年の「四谷怪談」の、原をなしてゐる事は、云ふまでもない。一體に、南北の作としては、非常に引緊つた出來である。これは一座の無人といふ事が、却つて役に立つてゐるのだ。

二番目の累與右衛門は、俗に「湯あがりの累」と稱して、三世菊五郎が傑作の随一とも侍へられ、生涯に十數度上演したものであつた。

初演の役割は左の通りであつた。

天竺徳兵衛實ハ赤松次郎致則。不破伴左衛門重勝實ハ岩倉夜叉丸。土佐又平重興後ニ木津川與右衛門。累井筒の累（四ヤク尾上榮三郎）狩野四郎次郎元信。村越良助（二ヤク花井才三郎）小栗宗丹實ハ岩見太郎左衛門。羽生屋助四郎（二ヤク市川宗三郎）大上團八。馬士・駄荷藏。山住伊平太（三ヤク坂東善次）世繼瀬平。足輕、彦平。見世物師、藤六（三ヤク坂東彦左衛門）駿河前司久國。累井筒の妙林（二ヤク松本小次郎）田舍娘、お玉實ハ勝元妻遠山。山三妻葛城。藝者・小さん實ハ元信妹縮合（三ヤク小佐川七藏）腰元、春野實ハ銀杏の前。與右衛門妹、お宮（二ヤク岩井梅藏）腰元、撫子。藤六妹、おかね（二ヤク岩井龜次郎）腰元、宮路。下女、おさの（二ヤク岩井龜松）茨木逸當。藪垣寒竹（二ヤク尾上斧藏）判人、權九郎（松本雷藏）那迦犀那尊者實ハ竹杖外道。佐々木後室お國御前。渡し守、

浮世又平（三ヤク尾上松助）名古屋小山三。箱廻し、金五郎（二ヤク森田勘彌）

二度目の上演は、文化十四年八月の中村座、この時は尾上松助の三回忌に當つたので、名題も「追善累扇子」と附けて、この狂言を出した。尤も、一番目は、「天竺徳兵衛韓噺」を、信田小太郎の世界に直したので、二番目の累だけを、初演通り演じた。その役割は

累、與右衛門（二ヤク三世尾上菊五郎）助四郎（五世松本幸四郎）金五郎（坂東彦三郎）小さん（中山龜三郎）藤六（淺尾友藏）良助（關三十郎）又平（三世坂東三津五郎）

三度目は天保三年八月の河原崎座で、名題は「天竺徳兵衛韓噺」を踏襲し、一番目は矢張り天竺徳兵衛、二番目が累與右衛門であつたが、この時は一番目へ、お國御前に關する筋を改訂して、二幕ほど添加した。これは、狩野四郎次郎元信を中心にしたので、元信は傾城遠山に馴染を重ねたが、お國御前の嫉妬強く、遂に切腹するといふ筋で、これから二番目へ緣を引くやうにした。村越良助を奴岡平と直して活躍させる事にした。以後は、この時の改修の方法が行はれてゐる。

又平（四世坂東三津五郎）金五郎（尾上松助）藤六（成田屋宗兵衛）お宮（尾上琴糸）お國御前（尾上梅五郎）利兵衛（坂東鯛助）權九郎（中島勘左衛門）おさの（岩井德之助）おかれ（岩井春次）伊平太（坂東彦左衛門）妙林（惣領甚六）岡平（坂東三津太郎）助四郎（大谷友右衛門）遠山、小さん（二ヤク岩井粂三郎）四郎次郎、

累、與右衞門（三ヤク三世尾上菊五郎）

翌天保四年九月の市村座でも「かさね菊絹川染」として、二番目だけを上演した。

お宮（小佐川常世）金五郎（尾上松助）伊平太（坂東三津右衞門）妙林（嵐領甚六）おかれ（坂東佳調）又平（關三十郎）利兵衞（大谷會呂平）藤六（山下京四郎）小さん（尾上榮三郎）助四郎（片岡市藏）累、與右衞門（二ヤク三世尾上菊五郎）岡平（十二世市村羽左衞門）

天保九年六月の中村座「音菊家怪談」も、前回通りの段取りであつた。

岡平、又平（二ヤク坂東彥三郎）遠山、小さん（二ヤク尾上菊次郎）助四郎（淺尾奧山）伊平太（中村鶴藏）利兵衞（市川森五郎）藤六（大谷會呂平）妙林（尾上菊四郎）お國御前、お宮（二ヤク中村芝鶴）金五郎（尾上松助）元信累、與右衞門（三ヤク三世尾上菊五郎）

天保十二年十一月の河原崎座では「室町殿所好番組」で、前回通りの段取り。この時は、累與右衞門を、お菊幸助と假に改めてゐた。夏狂言でない所爲であらう。

元信、お菊、幸助（三ヤク三世尾上菊五郎）又平（市川九藏）妙林（大谷廣右衞門）お國御前、權九郎（二ヤク市川升五郎）伊平太（市川宗三郎）利兵衞（市川團八）藤六（市川虎五郎）助四郎（片岡市藏）岡平（尾上多見藏）小さん（市川壽美之丞）おさの（松本にしき）お宮（尾上菊代）おかれ（叶珉子）金五郎（八世市川團十郎）

弘化三年八月の中村座では、「累扇月姿鏡」で、この時は天竺德兵衞の件だけ拔いてあつた。

元信、與右衞門、累（三ヤク三世尾上菊五郎）お宮（岩井松之助）妙林（中山現十郎）金五郎（尾上菊十郎）伊平太（中村鶴藏）利兵衞（市川廣五郎）權九郎（嵐冠五郎）又平（尾上多見藏）藤六（尾上音右衞門）お國御前、おかね（ニヤク尾上梅三郎）小さん（尾上梅幸）助四郎（六世松本幸四郎）

三世菊五郎が江戸で勤めたのはこれだけであつたが、この外、上方や其他の地方で、隨分度々上演してゐる筈である。

安政三年七月の森田座では、「菊累音家鏡」として、三世の門弟菊次郎が二番目だけを上演した。

又平（森田是好）小さん（吾妻市之丞）助四郎（大谷友松）金五郎（坂東玉三郎）伊平太（大谷德松）藤六（市川團八）利兵衞（市川成藏）妙林（市川雷助）おさの（松本にしき）おかね（中村芝鶴）お宮（尾上歌柳）岡平（大谷友右衞門）幸助、おきく（ニヤク尾上菊次郎）

金幣猿島都

文政十二年、中村座の顏見世狂言で、南北の絶筆である。番附連名の肩書にも、「一世一代鶴屋南北」と書いた所を見ると、この狂言きりで引退の心算であつたのかも知れぬ。一世一代の作をして、南北は

間もなく死んでしまつたのだ。

「日高川」、「相花王」の院本を應用してあるのが珍らしい。南北の作としては「獨道中五十三驛」の中へ「箱根靈驗躄仇討」を使つた位なもので、義太夫物を翻案したのは少ないのである。瀧夜叉姫の姿へ將門の靈が宿つて男女双面になる。清姫の怨念と忠文の亡魂とが合體して双面になる、この對照が作の狙ひ所であらう。

大詰の道成寺は、清姫の亡靈で、脚本中に菊之丞が出て口上を云つてゐる通り、最初は菊之丞が普通の娘道成寺を踊る豫定であつたが、菊之丞は病を推して出勤といふ事になつたので、急に座頭の芝翫に振りかはり、そこで「奴道成寺」といふ趣向になつたのである。これが「奴道成寺」の嚆矢である。常磐津、富本、長唄の三方掛合ひといふ、贅澤な地方を使つたのも、これが最初の試みである。菊之丞は以後健康すぐれず、これから一年目に死んでしまつた。

それにしても、この時代の菊之丞の勢力が強かつた事は、この脚本だけ讀んでもわかる。女形の身で男の身振りをして、序幕に、座頭の芝翫を踏みつける仕草があるなぞ、思ひ切つて女形道德に外れた事をやつてゐる。女形の精神を破壞したのは、この菊之丞だと云はれるのも尤もである。

本卷に收錄した臺帳には、五立目が一幕缺けてゐる。この幕では、四立目の末にちよつと姿を現はし

た田原の千晴や、大蘆原四郎將平に、時廻り五ツ半平なぞが搦んで、顏見世式の世話がゝつた趣向があつたらしいが、底本に落ちてゐるので是非がない。

役割は左の通りであつた。

伊豫掾純友實ハ壽太郎一子金剛丸。田原の千晴。通圓の如月尼實ハ將平姉御厨（三ヤク三桝源之助）文珠丸賴光。能勢源吾近貞（二ヤク市川八百藏）侍女、櫻木。近貞妻、八重垣（二ヤク吾妻藤藏）乳八、しみの戸（中山文五郎）神澤彌九郎照宗。中村芝藏安面（二ヤク中村芝藏）左大將實朝實ハ高橋文太夫。劍の峰眼助（二ヤク中島勘左衞門）犬上兵藤。屛風坂の菩平（二ヤク嵐冠五郎）無言次郎啞成。山霧の雲太（二ヤク松本虎藏）陸奥三郎角面。水無の川の瀧太（二ヤク市川理字藏）阿波之助盛遠。梯子登りの猿松（二ヤク坂東和三郎）雲助、闇の八。風元の飛八（二ヤク中村鶴次）十太丸（三桝大三郎）將門妹、七綾姫（中山龜三郎）伊丹の伴七。女體山の岩藏（二ヤク淺尾歌四郎）山伏、滿海實ハ大内之助安俊。生田七郎信良（二ヤク市川門三郎）寂莫僧都。黑雲坊（二ヤク坂田半五郎）大芦原四郎將平。四ツ塚大作實ハ伊賀壽太郎有信。箕田の仕。八坂の淨藏（四ヤク嵐冠十郎）滿仲息女、瀧夜叉姫實ハ相馬將門の亡魂。庄司娘、お淸。秀鄕妻、矢橋（三ヤク五世瀨川菊之丞）田原藤太秀鄕。坂東太郎有武實ハ伊豫掾純友。右衞門尉藤原忠文。狂言師、升六實ハ淸姬忠文亡靈（四ヤク中村芝翫）多田冠者滿成。男體山の石黑。白雲坊（三ヤク中村傳九郎）

この狂言は「奴道成寺」が、形を變へて今に傳はつた外は、再演されなかつた。

渥美淸太郎識

獨道中五十三驛（ひとりたびごじふさんつぎ）





ひとり旅の
役人替名

役人替名

こびき町

獨道中五十三驛

序幕

京都三條大橋の場
紫宸殿雛祭の場
石山寺道中双六の場
野路の玉川の場
石部宿旅籠屋の場
鈴鹿山だんまりの場
關の地藏堂開帳の場
龜山城下仇討の場
庄野より四日市の場
桑名沖難風の場

役名——藤川宮太夫。大江息女、重の井姫。坊主、願哲。石井半次郎。赤堀源吾。按摩慶政後

彌次郎兵衞。由留木馬之助。伊勢參り、五郎吉。里見小源次。大野文平。仕丁、藤作。同、兵内。岩倉運八。馬士、ぐれ八。腰元、藤浪。奴、逸平。腰元、若葉。石井左內。奴、大津又平實ハ由留木調之助。馬士、自然生の三吉實ハ丹波與八郎後ニ桑名屋德藏。赤堀水右衞門。帶屋長右衞門後ニ北八。赤羽屋五郎作。飛脚、太郎助。盗人、崖藏。同、かつさき九郎。同、鴨居の雁八。雲助、灘六。信濃屋後家、おかや。堂守り、西念。女非人、おはぎ。鬮の小萬。信濃屋お半。一子與之助。白井權八。由井民部之助。鶍の權兵衞。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕。上の方に、橋の袂を見せ、よき所に高札場、石の榜示杭。爰に水右衞門、深編笠、大小、尻からげにて、與惣兵衞を殺し、刀を突き立て、手拭にて手疵を結へゐる。官太夫、股立ち、大小にて、九重の印を持ち、願哲、坊主にて、袋入りの雷丸を差し、中間一人を縊め殺しゐる。すべて京都三條大橋、夜の體。雨車、時の鐘にて幕明く。

官太　悴、出かした。これこそは九重の印。して、願哲には、雷丸を

願哲　縊り殺して、まんまと此方へ

官太　二品共に、手に入る上は、この身の大望。エヽ、忝い。併し、悴水右衞門には、薄手を負うたと

相見える。少しも早く、この所を。

ト水右衞門、刀を納め、こなしあつて、下座へ入る。

願哲 かねてあなたのお頼みゆゑ、日暮れを待つて日の岡から、附けてくるとも白川筋、たうとう爰の橋詰めで、下郎めは愚僧の引導。官太夫さま、ずツしりとお布施に、有附かにやァなりませぬぞえ。

官太 事成就の上からは、褒美は望み次第。まづそれまでは、二品とも、其方へ預ける程に、必らず人目にかゝらぬやう。

ト件の印を渡す。

願哲 そんなら何と仰しやります。御褒美のその代り、この二品を預かれとか。

官太 それこそは、由留木の重寶九重の印。さりながら、その印こそは南天竺の、今有舍那記奄頓連の秘文を籠めたる守りゆゑ、龍宮城にてこれを望む間、必らず船中を厭ふ。又、その雷丸は、血汐をあやせば忽ちに、雷鳴轟く、希代の劍。

願哲 すりや、この品が、お手に入れば

官太 兄たる若殿馬之助どのは、誠は身が胤にて、小笹の方と密通の折から宿せしを、大殿にも御存じ

あれども、それを荒立て云ふ時は、家の瑕瑾と、知らぬ顔にて置かるゝうち、大殿には御病氣。その砌り、二品の寶は、弟調之助へ相渡せとの事。さある時には此方の手筈。それゆゑ本國篠山より、與惣兵衛を待ち受け、人知れず討つて捨て、折を見合せ某より、差上げるものならば、家督は差詰め馬之助どの。

願哲　それのみならず、御子息の水右衛門どの、重の井姫に心を掛けられ、送りし文も途中にて捲上げたれば、どうせ生けては置かれぬ。それはさうと、大切なるこの品を、子供衆二人ありながら、どういふ譯で私しへ

宮太　預ける仔細は、水右衛門は、實の悴とは申せども、赤堀の家相續いたしをれば、別家の事なり、また兄の定之進は、幼名源之丞と申して、これなる與惣兵衛が悴。弟源吾めは、兎角事を破り勝ちゆゑ、彼れこれ以て心ならず、それゆゑわざと其方へ。

願哲　エヽ聞えました。シタガ、二人のこの死骸、此まゝ置くは事の破れ。寺岡ならぬ寺役に、この鴨川へ水雜炊。

宮太　イヽヤ、計らふ仔細もあれば、矢ツ張り此まゝ。

願哲　然らば愚僧は、人知れず、

官太　夜半に紛れて、この場を早う。

願哲　官太夫さま。

官太　願哲坊。

願哲　心得ました。

官太　はや行け。

願哲　ハツ。

ト時の鐘、雨車になり、願哲、二品を持ち、下座へ入る。向うより中間一人、提灯を持ち、跡より長合羽の侍ひ、竹村定之進、傘をさし、頭巾にて顔を隠し出てくる。これにて官太夫、小隠れする。兩人、舞臺へ來り、件の中間、與惣兵衛の死骸に爪づき、よく／＼見て

中間　ヤアコレ、爰に與惣兵衛さまが。人殺し／＼。

ト提灯を捨て、下座へ遁げて入る。定之進は驚き、身構へしてゐる。官太夫、そろ／＼花道の方へ行きかける。小柄を抜いて手裏劍に打つ。定之進これを受けとめる。官太夫は向うへ逃げて入る。これを追うて定之進も向うへ追つて入る。時の鐘にて、道具變る。

本舞臺、三間の間、高足の紫宸殿。黑塗りの高欄、同じく欄間。左右に櫻の立ち樹、同じく吊り枝。簾を下ろし、爰に里見小源次、大野文平、隨身の形にて階の左右に扣へ、藤作、兵內、仕丁の形にて扣へ、彌生雛祭りの模樣よろしく、下がり葉にて道具納まる。

小源　頃も彌生を幸ひに、大江の御息女重の井姬さまを妃と准へ、若殿馬之助さまの雛遊び。

文平　その御趣向ゆゑ、我れ〳〵も、階下を守る隨身の出立ち。さるにても姬君には、兎角に心解けぬ御樣子。

兵內　それゆゑに、我れ〳〵までも、雛祭りにこの姿。然し、肝腎の寢る時は、離れ〴〵の床のうちではあるまいかな。

藤作　畢竟、お屋敷なりやこそ。どうやら天王樣でも擔ぎさうな形でござる。

皆々　左樣でござる。ハヽヽヽ。

トばた〳〵と音して、管絃になり、簾を卷き上げる。中に由留木馬之助、冠り裝束の形、太刀を引ッ提げ行かうとする。侍ひ二人、留めてゐる。

侍ひ　まづ〳〵、お鎭まり遊ばしませう。

馬之　イヽヤ、留めるな〳〵。斯くまで慕ふを素氣なくも、恥辱を與へし重の井姬。いづれへ參りしぞ。

汝ら側にありながら、存ぜぬとは申されまい。サヽ、それ申せ。

侍ひ　サア、私しどもはお錠口に、お待ち請け申せしが、更にお出でも無きゆゑに、所々方々とお尋ね申せしに、お姫様にはお裝束の其まゝにて、お庭傳ひに何處へやら。

小源　すりや、姫君には、御殿の內には

藤作　お出でなきとや。

四人　イヤ、大變な儀でござる。

馬之　返す〴〵も憎ッくき奴。たとへ館を離るゝとも、遠くは行くまい。皆も續け。イデ、某が。

ト侍ひを突きのけ、花道へかゝる。渡り拍子になり、向うより、奴の又平、毛槍を突き廻して、キッとなつて

又平　待つた〳〵。暫らく、お待ちなされませい。

馬之　我れへ恥面かゝせし重の井姫、追ひ行く道を遮ぎつて

四人　留めて出でたる其方は。

又平　元は當家の若殿樣、兄御の勘氣に大津繪の、雷ならぬごろつきは、その名も吃の又平と、いま改めて馬之助さま、お見知り置かれて下されませ。

馬之　その又平が何ゆゑに、留めて出でたるその心は。
又平　あなたのお爲。
馬之　なんと。
又平　殿上人の形に似ぬ、その荒々しきお心では、内裏女郎も振らねばならぬ。
四人　なんと。
又平　サア、振るとは奴がこの槍で、色よい返事を突とめて。
馬之　して又、槍が返事とは。
又平　戀には心も長柄の槍、手管の管槍樣々に、その數槍も千段の、遂にはほぐれて大身槍、さらば御殿へ、振りこむべいか。

ト鳴り物になり、又平、皆々を押戻し、舞臺へくる。

四人　然らば奴が請合うて
又平　きつと色よい御返事を。
馬之　賢うは云ひ廻せど、元が白痴の調之助、大切なる家の寶、二品ともに紛失させ、今はその態、恥かき足らいで大津繪の、筆の命毛、やう／＼と、其かぼそい根性ゆゑ、勘當せしに、又もや推し

て予が旨通り。これぞと申す功もなく、それとも其方がにじり書き、なんぞこの繪に德があるか。

又平　東坡が露竹は、露を含んで紙中を濕ほし、金岡が馬は草を食むと、一心凝つたる奴が筆勢。疑はしくばこの畫面。

ト懷より大津繪を出す。

四人　なんのおのれが。

ト四人かゝるを、又平よろしく立廻り、きつとなる。この時、風の音して、件の大津繪を空へ吹きあげる。皆々、空を見て

小源　渦卷き上る風に連れ

文平　雲に紛れて、アレ〳〵。

藤作　如何なる邪法か。

馬之　何とも怪しい。

トきつとなる。この時、向うにて

源吾　名畫の德が、それ〴〵の、筆意をそれにて、御覽に入れん。

ト誂らへの鳴り物になり、向うより腰元藤浪、振り袖形、褄折り笠にて、藤の枝を擔ぎ、顚哲、排壁

にて七つ道具を脊負ひ、慶政、座頭にて、杖をつき、褌の垂れを犬咬へ、石井半次郎、若衆の形、袴、大小にて鷹を据ゑ、赤堀源吾、上下、大小にて、衣を肩へ掛け、傘を脊負ひ、鬼の面と叩き鉦、奉加帳を一つに結び、これを持ち出て來り、皆々花道へとまる。

小源　今、この奴めが、怪しの振舞ひなす折柄、皆それ／＼の大津繪出立ち。

藤作　何ゆゑ留めて出でたのだ。

藤浪　譯は何やら知らねども、若殿樣のお諫めに、お側勤めの藤浪が、かたげた藤のうら若き、今日の趣向の思ひ附き。

願哲　坊主頭を幸ひに、顏は垢にて汚れた儘、穢いところが武藏坊。

慶政　蟬丸さまの流れを汲み、座頭は杖を、つく／＼ぼうし、按摩、肩癖、慶政が、お療治ながら、お屋敷へ　くる道すがら狂ひ寄る、犬は丹波のしつぺい太郎。

半次　志賀、唐崎が預かりの、鷹を据ゑしは半次郎。

源吾　鬼一口の角折つて、かん／＼叩く唄念佛、顏は眞赤い赤堀まで、何がな君を慰めんと

五人　參上仕つてござります。

又平　待ちかねた／＼。サア／＼早う、爰へ來た／＼。

ト鳴り物にて、皆々舞臺へくる。

源吾　彌生の御祝儀と申し、殊に又、今、室町どのよりお上使は、御家督繼ぎ目の儀、重ね〴〵

五人　恐悅至極に存じ奉りまする。

馬之　事定まれど、思ふに任せぬ憎ッくき重の井、たとへ何れへ逃げ去るとも、草を分けても尋ね出し一度枕を交さねば、身が武士道が

顯哲　そんなら、なんと仰しやります、お姬樣は駈落ちをなされましたか。然らば私しが尋ね出し、是非にお取持ち、とサア申したところが、人も知つた小町と辨慶、色の道は實にうとい……コレコレ藤浪、其方も、とも〴〵お姬樣の、靡くやうにしてくれまいか。

藤浪　どうしてマア、年端もゆかいで、其やうなませた事を。わたしや否でござんす。

慶政　そんなら拙者めが、座頭の盲目探しに探して來ようか。

源吾　兎や角申すうち、時刻が。イデ、源吾めが引き戻して

馬之　身共に恥面かゝせたる、姬の行くへを手分けなし

皆々　イデ、我れ〴〵が

ト立ちあがる。この時、向うにて

左内　イヽヤ、お行くへは石井左内、それへ參つて、申し上ぐるでござりませう。

ト序の舞になり、左内、上下、大小にて出て來り、直ぐに舞臺へくる。

半次　すりや、親人。重の井さまには。

左内　全く姫君には、我が君を嫌ひ給ふに非ず、誠は佛道御歸依あつて、佛門に入る堅きお願ひ。御父君にも御承知あつて、石山寺の秋月禪師を師と賴まれ、今日よりは染衣のお姿。さすれば五戒を保つ御身を、又ぞろお召しあつても、君のお寢間にあつて益なき事。これも定まる佛緣と、お諦らめられ、然るべう存じまする。

馬之　すりや、父上のお許しにて

源吾　尼となつては、兄が願ひも

又平　ヤ。

慶政　さりとは惜しいものでござる。

半次　すりや、姫君のお心を、舅御樣にも御推量あつて

左内　アヽコレ、只何事も、佛は見通し。

馬之　まだしもそれが定ならば、せめてはこれで、旛、天蓋。

ト烏帽子裝束を脱ぎ、左内へ渡す。

左内　藤浪どの、この品持參し、ちつとも早く方丈へ。

又平　この又平は女中のお供。併し、お上使、後方までに。

藤浪　そんならこれより

馬之　某とても上使のお受け、且つは重の井剃髮の、吟味を遂ぐる其ために。

左内　この左内めは、何かの手番ひ。

四人　我れ〳〵はお供の用意。

藤浪　直ぐにわたしも。

ト立ちあがるを、願哲、留めて

願哲　藤浪どのは、愚僧がちつと

ト捕へる。

藤浪　エヽ、怖らしい。否でござんす。

ト突きのけるはずみに、願哲が懐より手紙落ちる。この時、半次郎の据ゑし鷹、手を離れて、右の手紙を咬へ飛び行く。

半次　ヤヽ、大切なるあのお峯

左内　雲井はるかに、アレ〳〵〳〵。

半次　跡を慕うて、オヽ、さうぢや。

ト風の音になり、半次郎、向うへ入る。これを犬附いて入る。慶政、愕りして

慶政　ヤア、おれの大切なあの犬を、逃がしちや築地へ歸られねえ。跡追ツかけて、さうだ。

ト同じく向うへ走り入る。左内、思ひ入れあつて

左内　忰が事も心にかゝれど、それは私し。サア、藤浪どの

藤浪　左内さま。

又平　サア、ござらつしやいまし。

ト唄になり、左内先に、藤浪、件の裝束を持ち、又平皆々附添ひ、下座へ入る。馬之助、願哲、源吾殘り

源吾　馬之助さま、かねての大望

馬之　コリヤ。

ト管絃になり

して、官太夫へ、頼み置いたる一條は。

願哲　官太夫さまのお頼みゆゑ、赤堀さまと心を合せ、輿惣兵衛めをおッ方附け、寶は此方へ捲きあけたれど、見咎められては一大事と、雷丸は源吾さまへ渡し、また九重の印は、草津の萩の根下に埋め置けど、心がゝりゆゑ、折々見るに、その所爲かして、時ならぬ萩の盛り。

馬之　出かした〱。して又、源吾めは雷丸を

ト源吾、うぢ〱しながら

源吾　サア、その一腰は

ト思ひ入れ。

馬之　その雷丸は

源吾　サア、お手渡し致さんと存ずるうち

馬之　如何いたした。

源吾　何を隱さう、祇園町の、山形屋の抱へ、小萬と申す藝子に入れ揚げしが、それも石井の下郎、輿作めに引ッたくられ、身共は金の遣ひ損。

願哲　其お手際を御存じゆゑ、渡してくれよと兄御様よりこの手紙。

ト懐より出さうとして無きゆゑ、狼狽へ、あちこちと探し

イヤア、大變ぢや〳〵。

馬之　コレ、願哲、何を其やうに狼狽へるのぢや。どうしたのだ〳〵。

願哲　イヤ、どうしたどころか。官太夫さまよりの密旨の御狀

源吾　落せしと申すのか。それは大變事。

ト三人あちこち尋ね廻して

ハヽア、慥かに先刻のアノ鷹めが

願哲　大切な手紙を渫つて行つたか。紋治が鷹を生んだといふ鷹もあれば、親の物は子の物と、持つてうせたか、情ない。

源吾　とはいひながら兄よりの、密書とあれば心がかり。

馬之　鷹は義鳥にして、三年餌めば、たとへ外れても、その人の拳に返る。さある時にはその密書、石井親子が目にかゝらば

源吾　これもまた心懸り。

馬之　心にかゝる其うちにも、只忘られぬ重の井姫。



源吾　その儀は拙者が今一應、もしもゆかぬその時は

ト件の鬼の面を取つて

毎年春の末つ方、噂に殘る鬼の怨念、白羽の立つが人身御供。

トこの以前より、後へ藤作、出かゝりゐて

藤作　すりや、その鬼の面にて鬼と僞り

源吾　その神託はもどかれず

藤作　重の井姫は又もお妾。

馬之　そんなら必らず……とはいふものゝ、何かにつけて邪魔になる調之助。

願哲　石井親子も人知れず

源吾　折を窺ひ、諸ともに

馬之　コリヤ。

トあたりへ思ひ入れ、よき見得にて、管絃になり、簾下りる。鳴り物になり、この道具變る。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、岩組みの道具、左右、松の樹木、同じく吊り枝。正面、高足、朱塗

りの欄干、上の方より筋かひに石段、上の方、岩間より清水の樋を小桶へ取り、堂の上に重の井姫、十二單衣の雛の形にて、經机を置き、若葉・藤浪、腰元にて、三方に烏帽子、裝束を載せ、持つてゐる。すべて石山寺の道具よろしく、音樂にて納まる。

若葉　殘りなく、千里の山を目の下に、左は瀬田の青柳橋、比叡の嵐に散る花は、晝も湖水に螢かと、どうもいへぬこの景色。道理こそ爲時さまのお娘御、紫式部さまが源氏とやらを、爰のお寺でお書きなされたげな。

藤浪　兎角に上々のお姫樣方は、お寺がお好きと見えるわいなう。

若葉　それぢやというて、弘法さまではあるまいし、爰のお寺で御剃髪とは、あまりと申せば、お痛はしい。

藤浪　ま一度御思案遊ばして

若葉　御變替へ遊ばすが

二人　よろしうございませう。

ト此うち重の井姫、讀誦の思ひ入れあつて

重の　「うき身をし、渡ると聞けば蜑小船、法に心をかけぬ日はなし」。……たとへ一夜の枕でも、交せ

しからは、女子の道は破らじと、誓ひも固き石山寺の、聖の教へに尼の身と、お顔は知らねど、いとしいお方へ。

若葉　イエ〳〵、そりやあまり一圖な思し召し。たとへなんと御意なされても、平に御剃髪は、お止まり遊ばしませ。

藤浪　其やうに、きな〳〵思し召さずとも、ちと御境内でもおひろひ遊ばすが

二人　よろしうございます。

ト馬士唄になり、向うより又平、件の奴にて、一升徳利と竹の皮包みを提げ、自然生の三吉、脚絆三尺帯の形、火の用心の紙莨入れ、馬の沓を腰に挾み、出て來り

三吉　モシ〳〵、わしやァ門前の茶屋へ、米を附けて來たのだ。無性に、來い〳〵と、どこへ連れてござる。

又平　どこといつて、頼みてえ事があるから、マア、來いといふのに。

ト三吉を引摺り、舞臺へ來り

モシ〳〵、お姫様、お前様があんまりふさいでござるゆゑ、そこで何ぞお慰みにと思ふうち、馬士が寄り合つて賽を抛つてゐるゆゑ、お慰みにお目にかけようと思つて、連れて參りました。

三吉　コレ〳〵、この奴さんはとんだ事をいふ。こりやァわしらが仲間で遣り取りする三つぼの狐。

ト云はうとして口を押へる。

若葉　ナニ、狐とや。

藤浪　オヽ怖。

ト思ひ入れ。

若葉　して、狐をどうするのぢやえ。

三吉　ナニサ、今やつてゐたのは……ナニサ、それ〳〵、ありやァ道中双六サ。

若葉　それなれば、わしらも知つてゐる程に、お慰みに相手にならうわいな。

藤浪　こりや面白からう。サア〳〵、お姫様、あなたもお慰みに遊ばしませ。

三吉　エヽ、とんだ話しだ、ナニサ、双六ぢやァございやすめえ。

又平　でも、今、双六だと云つたぢやァねえか。サア〳〵、始めて、お目にかけやれ〳〵。

三吉　サア、さうは云つたが、肝腎の双六が……オヽ、ある〳〵。

ト腰に挿したる油紙の扇を出し

コレ〳〵双六と申したのは、これでございます。東海道五十三次、宿々の名物、關所、川々の駄

賃附け、詳しく書いてござります。

又平　サア、お姫様も遊ばしませ。

ト重の井姫が手を取つて、無理に連れてくる。若葉、藤浪も附添ひ下りる。

又平めは、爰で酒と致しませう。

ト竹の皮包みを出し、徳利の口より酒を飲みゐる。この時、かすめて入相の鐘。

重の　それぢやというて、自らは、どうする事やら。

三吉　ナニサ、造作はござりませぬ。斯うでござります。

ト三尺帯の間より、賽を一つ出し、振つて見せ

ソレ、一より一宿。二が出れば、二宿づゝ行くのでござります。

又平　コレサ、一なぞと云つちやア、お姫様にやァ解らねえ。矢ツ張り、一つの事でござります。

若葉　サア〳〵、そんならこの小石は、わしがしるしぢやぞや。

トあたりにある小石を取つて、扇の上へ載せる。

藤浪　わしはこの松葉ぢやぞや。お姫様、あなたは

ト重の井姫、思ひ入れあつて、簪をとつて

重の　これになとしてたも。

ト出す。若葉取つて

若葉　杏葉菊のお簪。お姫樣のぢやぞや。

藤浪　こりやあなたには、梅幸が御贔屓と見えまする。

三吉　おつなものが御贔屓だ。去年來たが、好かねえ奴。

又平　サア〳〵、早く始めねえか。大分暗くなつた。ドレ、灯を持つて來よう。

ト又平、醉つたこなしにて奥へ入る。

三吉　そんならわしがしるしは

ト莨入れの中より、香箱の片々を出し

これがわしのでござります。そんなら振出しますぞ。

ト双六音頭になり、賽を振つて

ソリヤ、四なれば程ケ谷、ツイと富士の裾野へ參りやす。

ト重の井姫に廻す。重の井姫見て、思ひ入れ。

重の　そんなら妾が

ト振る。

三吉 二なれば川崎と。

ト段々廻す。

若葉 エヽ、もう一つの事で神奈川ぢやわいな。

藤浪 わしは品川ぢやわいな。

ト三吉また賽などとつて

三吉 ナニサ、女中方、お靜かにござるがよい。時に、お姫樣え。なんぞ賭け事が無くちやァ張合ひがござりませぬ。斯うしませう。わしが負けたら……と云つたところが何も賭ける物が……オヽ、それ／＼、門前へ繋いで置いた馬を上げませう。又お姫樣が負けたならば……モシ、その時には、承知かえ／＼。

ト思ひ入れ。

重の ハテ、どうなりとあなたの……サア、そりや其方の心次第に。

三吉 きつとさうかね。親の頭に松三本、じぶを食ひツこなしだヨ。

トこの時、奥より又平、手燭を持ち、醉うたる體にて出て來り

又平　勝ち目は、どうだな〳〵。側がいゝと思つて、贋をせまいぞ。お姫樣、油斷なされますな。

ト云ひながら手燭を置き、寢入る。

三吉　ソラ、六で鞠子と參ります。サア、お姫樣。

ト廻す。重の井姫、三吉の顏を見詰めてゐる。脇の方へ賽を投げる。三吉、捨ぜりふにて、賽を探し取つて、

アヽ、お姫樣は大磯だ。

重の　それとお顏は知らねども、渡せし品のあればこそ、いつか尋ねて大磯と、思へどこの身の儘ならぬ。

ト若葉、振りながら

若葉　人目の關や箱根の關、逢うて三島の原過ぎて

三吉　話したならばその時は、思ひ興津の海よりも

重の　深くも迷ふ自らの、心も知らで白須賀の

若葉　二道かけぬ二川と

藤浪　堅くも守る石藥師。

三吉　その心ゆゑ此方でも、後の證據と庄野宿、肌身離さず大事に掛川。

ト段々振り廻す。トヾ三吉、上がつて

オットヽ、しめたぞ〳〵。ぞりや、わしが先きへ上がつた。サア〳〵、約束通りだ。お姫様は、わしが存分にせにやァならねえ。

ト重の井姫を捕へる。腰元兩人、隔て

若葉　これはしたり。馬士の身で、お姫様を捕へて、どうせうと思やるのぢや。

重の　ハテ、大事無いわいの。一旦約せし上からは、この者の心任せに

若葉　それぢやというて、あなたには、御剃髪の折といひ

藤浪　且は尊き御寺にて。

重の　ハテ、佛も元は凡夫とやら。この者には重の井が、話す事があるゆゑに、其方衆は、マア、奥へ

若葉　それぢやと申して。

重の　ハテ、行きやいなう。

二人　ハイヽ。

ト合ひ方になり、兩人こなしあつて、奥へ入る。三吉、思ひ入れあつて

三吉　モシ〳〵、お姫様、これは大きにお慮外申しました。只今のは、ありやアほんの座興でございます。ドリヤ。私しも、お暇を致しませう。

　ト行かうとするを、重の井姫、留めて

重の　約束の上からは、是非とも自由にならねばならぬ。

三吉　それだといつて、馬方が、どうしてあなたを

重の　この賭け事より自らが、大事にかけて

　ト懐中より、袱紗に包みし件の香合の片々を出し

　其かたし。

　ト三吉、合せて見て

三吉　ヤヽヽ。そんならあなたが、五年以前大原の神事で、雑魚寝祭りの暗まぎれ

重の　ついした事で只一度。どうぞ行く末添ひ遂げたく、後の證據と渡せし香箱。

三吉　模様は水に鴛鴦の、しつくり合うたも、盡させぬ縁。

重の　その時宿せしお腹の嬰兒。

三吉　そんならあの時、たつた一度で、

重の　それから今の由留木家へ、引取られしが、男嫌ひと云ひ通し、あなたへ立てる女の操。
三吉　して／＼、二人がその仲に、儲けしその子は
重の　石井左内が情にて、人知れず産み落し。與惣兵衛と相談して、藁の上より餘所外へ
三吉　それとも知らず、この年月。そんならおれゆゑ、今までに
重の　肌を穢せば道立たずと、それゆゑ尼にと、この御寺へ。
三吉　思はずめぐり逢つたのも
重の　觀音樣の引合せ、
三吉　とはいふものゝ、馬士の身で
重の　それも妹脊で結んだ縁。
三吉　その心なら、人の見ぬ間に。
重の　ア、モシ。
三吉　五年振りだの。

ト抱く。又平、醉うて寝てゐたりしが

又平　アヽ、知らぬが佛だ／＼。

ト大音にいふ。二人恟りして飛び退き、三吉、又平を見て

三吉　エヽ、恟りさせた。奴どのは寐言ださうな。

ト重の井姫に囁き、あたりを見廻し、掛樋の下にある桶を取つて來り、雪洞の上へ冠せる。これにて又平起きあがり

又平　アヽ、寐たワ〳〵。引ツかけた心持ちはどうもいへぬ。ころりとやつたが、もう何時ぢや知らぬ。さうしてマア、灯が無うて、何處が何處やら、お姫樣もまた、おれ一人を置いて、何處へござつたやら。馬士めはどうした。誰れぞ灯を、貸してくれぬか〳〵。……誰れも居らずばおれ一人。目が無ければ、由留木の嫡子調之助。

トきつと云ふ。兩人もほぐれてキツとなり、これより合ひ方になり、又平、手を合せて

南無大慈大悲の觀世音。非業に去りし丹波與惣兵衞、頓生菩提。假りにも我が乳人役、三條の橋詰めにて、盗賊の手にかゝり、無念な最期も皆我れゆゑ。弟の石井左内、これも定めて無念にあらんが、仕官の身の上、兄の敵もえい討たれず。悴一人ありと雖も、官太夫が養子となれば、他人も同然。まだも頼みはその昔、手廻りの女お三とやらに、懷姙させし二人の子、總領は丹波與八郎、妹は明石のお松、音信不通に縁切りしが、今は池鯉鮒の八つ橋村とやらへ縁づきしと

の事。心がゝりはこの二人。委細は下部、伊達の與作に申し含めしと、常々聞きしが、この者にてもあるならば、定めて敵は討たんずなれども、行くへ知らねばこれとても、又二つには姙娠の忰も矢ッ張り與作が介抱。それとも知らず、うか〳〵と、それで親子の孝道が、立たうと思ふかイヤサ、茲なたはけ者めが。……とサ、與惣兵衛がこの世にあるなら、定めて此やうに云はれうが、この世になきゆゑ、これとても

ト三吉に當てゝいふ。この以前より、奥より左内出て窺ひゐる。三吉、思ひ入れあつて

三吉　さては、素性は丹波の家にて、

重の　お前の親御は與惣兵衛さま。

三吉　とサ、知つたところが跡の祭り。父の最期もえい知らず、なに面目に存らへん。せめては未來で申し譯。

ト探り寄つて、又平の脇差を取る。重の井姫も思ひ入れあつて

重の　そんならわたしも共々に

三吉　南無阿彌陀佛。

ト腹切らうとする。

左内　ヤレ、待て、早まるな。其方が死なば女房まで、二人が死なば幼子が、誰れを便りに成長なさん

又平　親への孝道立てんと思はゞ、まだこの上にも姿を變へて、父の敵と寶の詮議。

三吉　其お詞を聞く上は、この身は盗賊、强盗とも、なつてもお家の寶を取り得ん。もしも敵にめぐり逢はゞ、その時こそは父上に

又平　手向けん時のその曠れ着。

ト以前の烏帽子、装束を探り取つて渡す。三吉、探り見て

三吉　こりやコレ慥かに、高位の装束。

又平　馬士にも衣裳を、この場の餞別。

左内　差し古せども身が差添へ。

三吉　こりや、一腰は、伯父御様より

左内　伯父とは誰が事。伯父甥ならぬ馬追ひへ、酒手の代り。

三吉　とは云ひながら、せめてお顏を。

ト三吉、冠せし栫を取る、四人、顏を見合つて

重の　明けてそれぞと名乗られぬ、わたしが爲にも舅御樣。

又平　亡きその跡を弔らふも、失ふ寶のその行くへ、尋ね求めて敵討ち。

左内　その時こそはこの左内が、實の甥ぞと改めて、先づそれまでは、明けてはどうも

ト　また件の桶を冠せる。皆々、思ひ入れあつて

三吉　すりや、しおほせたその上で

重の　やがて名乘らんその時は、暗き矢橋も晴れ渡り。

又平　再び興す丹波の家名、その時こそは主從の

左内　伯父の名乘りも

重の　夫婦の名乘りも

三吉　そんならそれまで

重の　二人が仲の

左内　小桶は左内が取上げて

ト　また桶を取る。四人、顏見合せて

心引かれず、これより直さま。

重の　何から何まで。

三吉　ハッ。

左內　早くお行きやれ。

又平　相待ち申す

三吉　やがて吉左右

ト三重、時の鐘になり、三吉、裝束を抱へ、重の井姫を連れ、向うへ入る。又平、思ひ入れあつて入る。左內、跡見送り

左內　獅子は我が子を谷へ落し、その勢ひを見ると聞く。子は父親を失へば、岩を裂いてこれを探すと。調之助さまの諫めにめでゝ、やがて寶の吉左右を

ト思ひ入れ。この時、風の音して、空より以前の鷹、浚ひし手紙を落す。左內、見て

ナニ〳〵、……「かねて申し含めし通り、此たび本國丹波篠山より、御家督の儀に附き、お家の寶雷丸、まつた九重の印、丹波與惣兵衛下さんと致し候ふ間、途中に於て、人知れず殺害なし、二品を奪ひ取り、それを功に某が胤なる馬之助へ、首尾よく家督ある上は、重き恩賞遣はされべく候ふ。藤川官太夫、下部段介へ。」……ヤヽ、さては兄を殺害なし、二品の寶を奪ひしは、彼の官太夫が仕業であつたか。さるにても、宛名は則ち下部段介。一つには骨をひしいで兄の敵、

二つには寶の詮議。この一通が手に入る上は、まづ差當る馬之助どの、これを證據に糺明させん。

オヽ、さうだ。

ト行きかゝろ。この以前より、後に源吾、手槍を持ち、窺ひ寄つて、左内を貫く。左内、立廻り、手負ひにて、キツとなつて

おのれ、源吾め。騙し討ちとは卑怯未練な。

源吾　イヽヤ、卑怯ではない。主人の云ひ附け。

左内　ナニ、主人の云ひ附けとは。

トこの時馬之助、出かゝりゐて

馬之　宮太夫と心を合せ、與惣兵衛を殺害なし、寶を奪ひしは、皆某が計らひだ。それを知つたる其方ゆゑ。

左内　斯くまで積る惡逆無道。たとへ深手は負ふとても、やはか一太刀。

トまた立廻つて段々手を負ふ。この時、奥より腰衣の同宿出て、これを見て、「ワツ」と云うて向うへ入る。源吾、左内を突き伏せ、止めを刺さんとするを、馬之助、留めて

馬之　ヤレ、待て、源吾。

ト囁く。

源吾　成る程。天晴れ妙計。

ト件の手紙を引裂き、雪洞にて焼捨て、奥へ向ひ

我が君へ刃向ふ狼藉者。方々、出合はつしやい／＼。

ト呼び立てる。奥より又平、手燭を持ち出る。向うより半次郎、袴股立ち、跡より逸平、奴の形にて附添ひ、走り出て來り

三人　して、狼藉者とは何者でござるな。

ト三人、左内を見て

半次　ヤヽヽヽ。こりや、養父左内どの。

逸平　何奴が親旦那を。……見れば數ケ所のこの槍疵。

又平　さるにても、相手は何者。

馬之　外でもない、この馬之助。

三人　すりや、何ゆゑに

ト音樂になる。

馬之　現在主人に、家來の身として、云ひ掛けひろぐその上に、劍戟を振ふ無禮な奴。やむ事を得ず、源吾めが槍先に。さはいへ、不仁の至りぞと、世の人口を防がんため、未だ止めは。

半次　御立腹はさる事ながら

又平　忠義一圖の左內さま、良藥は口に苦く、金言は耳に逆らふと、それゆゑにこそ、かゝる仕合せ。

逸平　何を申すもこの深手。どういふ譯かは存じませぬが、罪の次第によつては、切腹をも仰せつけらるべきを、忠勤至き大旦那樣。小者、はしたか何ぞのやうに、あまりと申せば酷たらしい。

源吾　汝、下郎の分として、殿の御前でツカ〳〵と。この如く劍戟を以て、御主人に立ちかゝる無法者源吾お側にありながら、家來の身として見遁がしならうか。半次郎どの、何とてござる。

半次　サア、それは。

馬之　まだも息のあるうちに、其方達に見せて殺すが、これ、面晴れ。ソレ、源吾、早く止めを。

源吾　心得ました。

ト左內に跨り

主人に刃向ふ人非人め。この源吾が、この場に於て。

ト左內の咽喉を貫く。皆々無念のこなし。この時、向う、バタ〳〵にて、里見小源次、麻上下の侍ひ

又平　すりや、内々室町どのに、申し出せしその願ひ、御承引ござあつて、由留木の家督

馬之　卽ちこれなる馬之助へ。

又平　イヽヤ、上意の上からは、いま改めて馬之助どの、尋ぬる一儀これあるゆゑ、それにてとくと承らん。

ト馬之助を引きのけ、上座へ直る。管絃になり

馬之　たとへ何と申すとも、寶詮議日延べの願ひ、室町どのにも聞濟みあつて、家督は卽ち某へ。

小源　それゆゑにこそ馬之助さまへ、順を以て、道を糺すが、天下の掟であるを差置き、何とも以て。

侍ひ　ハヽア。

小源　大殿様より調之助さまへ、火急のお使ひ。別に賜はる品がござる……ヤアノ〳〵、用意の三方、急いでこれへ

ト又平が前へ出す。開き見て

にて、走り出て來り

ト奥より侍ひ、三方に腹切り刀を載せ、持ち出て來り、馬之助の前へ直す。悔りして

馬之　ヤヽ、この短刀を、何ゆゑあつて身が前へ

又平　その仔細、申し聞かさん。……未だ部屋住みの身を以て、推して姫との婚禮に、恐れ多くも内裏のまなび。これ第一のお咎め。武官の身にてありながら、假りにも大君の御裝束、時に取つての謀叛の兆。その首討つて二品の、寶の日延べ致せよと、室町どのよりの御内意。

馬之　ぢやと申して。

半次　さなき時にはお家の浮沈。

又平　但しは、某踏みつけ、腹切らさうか。

馬之　サア、それは

又平　潔く切腹あるか。

馬之　サア、それは。

三人　サア〳〵〳〵。

半次　さりとては又、御未練千萬。

逸平　して、これなる源吾めは。

又平　討つて捨てるも刀の穢れ。門前より追ひ拂へ。

逸平　お暇出でし上からは、ちつとの間も御前に叶はぬ。キリ〳〵この場を、立たつしやい。

ト引のける。

源吾　居ろといつても此方で居ないワ。ナニ、コレ、高が知れた、百石や二百石。大男なら一かたけにも足らねえワ。

逸平　こま言云はずと、立たつしやい。

源吾　エヽ、行くといふに。

ト逸平、源吾を追ひ立て、向うへ入る。この時、半鐘鳴る。小源次、思ひ入れあつて

小源　最早刻限。

又平　とく／＼それにて。

馬之　未練には非ざれど、佛の庭に血汐をあやさば

又平　イヽヤ、尊とき法の庭、幸ひ、大悲の教へには、五逆滅相。せめて未來は

半次　その介錯は半次郎。

又平　とく／＼用意。

馬之　南無阿彌陀佛。

ト腹へ突き立てる。半次郎、刀を振上げる。これにて鳴り物になり、この道具變る。

本舞臺、三間の間、向う一面の淺黄幕。東西舞臺前とも、一面に萩の盛り、生ひ茂り、この間々に流れ水の浪板。上の方に、、、、、野路の玉川と書きし石の榜示杭。下手に柳の立ち木、同じく吊り枝。舞臺眞中に三吉、廣袖、一本差し、件の裝束を引提げ、十二單衣の重の井姫を脊負ひ、立ち身。紙砧の音、蛙の聲、本調子の合ひ方にて、道具納まる。

ト直ぐに空へ滿月を引出す。三吉これを見やり、思ひ入れあつて

三吉「明日も來ん、野路の玉川萩こえて

重の 色ある浪に月宿るらん。」

三吉 その月淸き玉川に、恥らふこの身の芥川。

重の 昔男も及びなき、その殿振りにいやましの

三吉 思ひがけなき高位の姿、さりとはひよんな業平も

重の 眞を云はゞ侍ひの

三吉 胤も今さら世にお乳の人。馬方、船頭、或ひは非人、又は山賊、强盗と、樣を變へるも寶の詮議

重の たとへいづくの野邊までも、どうぞ一緒に

三吉 イヤ、行く先それと白玉か、何ぞと人の咎めなば

重の　ハテ、その時は妾が身は、露と答へて消えなんと
三吉　その心底なら、これより直ぐに、業平もどきで東路へ
重の　そんなら、此まゝ
三吉　ちつとも早く。

ト浪の音になり、下座より、半素袍の下ばかりの侍ひ大勢、松明を照らし、バラ／＼と出て來り、兩人を取巻き

皆々　動くな。

ト三吉、重の井姫を下ろし、後へ圍ひ

三吉　こりや理不盡に、何とする。
侍一　ヤア、ぬけ／＼と僞り者。形もそぐはぬ其いでたち。察するところおのれこそ
侍二　重の井姫を石山より、連れて立退くその曲者。
侍二　詮議なす我れ／＼が役目。サア、尋常に姫を渡して
一同　繩にかゝれ。
三吉　イヽヤ、一旦我が手に入つたこの女、うぬらに、うまく／＼渡さうか。

一同　さういや、いつそ、踏み附けて

三吉　何を小癪な。

ト禪のツトメになり、三吉、一腰を拔き、皆々と立廻り、トヾ一同、下座へ逃げて入る。三吉、これを追ひかけて入る。重の井姫殘り、うろ／＼して

重の　コレ、長追ひして怪我してたもるなえ。跡先き知らぬ野末の道、妾一人で如何にせん。早う戻つて下さりませ。與八郎さまいなう。

トあちこち、ウロ／＼してゐる。時の鐘、浪の音になり、向うより逸平、旅奴の形にて、上り下りの荷のつきし馬の手綱を持ち、槍を擔ぎ出て、直ぐ舞臺へくる。

ア丶心細い。便りない。便る軒端も荒野の果。こりやマア、どうしたらよからうぞいなう。

トこの聲を聞いて、逸平、月影に透し見て

逸平　ヤ丶、さう仰しやるは、姫君樣ではござりませぬか。

重の　ヤア、さう云やるは、左内の下部逸平か。よい所へ來てたもつたなう。

逸平　思ひがけない。夜中と申し、この所へ只お一人。

重の　さいなう。石山寺で剃髮染衣と、思ふ折から計らずも、思ひ染めし戀しいお方、互ひの形見と所

持なせし、香箱もしつくり巡りあひ、それから迷ふ煩惱の、出家を止まり、其お方と連れ立つて、この所まで落ち延びしが、追ッ手の者が大勢來て、繩掛けんとあるゆゑに、それを相手に手追ひして、妾一人只爰に。

逸平　ムウ……して、その戀しい男とは、何處の何人。

重の　サア、其お方は。

ト この時、下座にて、バタ／＼と人音する。

アレ、あの人音は。

逸平　イカサマ、人目にかゝつては又ぞろ御難儀。其お方の御姓名も、ゆつくり後で承らん。まづ、あなたには、幸ひのこの葛籠の內。

ト 手早く馬に附けたる葛籠を下ろし、重の井姫の十二單衣を脫がせ、葛籠を抱へ、姫の手を取つて

暫くこれにて。

ト 萩の茂りたる後へ隱れる。浪の音になり、向うより源吾、頰冠り、尻からげに出て來り、あたりを見て

もう夜が明けるに間もあるまい。時ならぬ萩の盛りは、根下へ隱せし九重の印の奇特。人に氣取

られては一大事。今の内に、それ〳〵。
ト刀を抜き、榜示杭の下を掘り、錦の袱紗に包みし印を取出す。此うち、逸平、重の井姫を葛籠に入れたる心にて、これを脊負ひ出て、行きにかゝる。源吾と顔見合せ
ヤ、わりや奴の逸平、怪しい葛籠。慥かに中には。
トかゝるを逸平、立廻つて
逸平　イヤ、この葛籠より、主人の敵の赤堀源吾、殊に、何やら掘出した、怪しき一品、奴に渡し、覺悟しろ。
源吾　イヽヤ、その品。
ト兩人立廻りのうち、月隱れる。これにて暗がりの思ひ入れ。件の印を奪ひあふはずみに、草叢へ取落し、源吾、無性に探れど知れぬ思ひ入れ。逸平、こなしあつて
逸平　イヤノ〳〵、敵討ちは若旦那。我れは一先づ姫君を。
源吾　ナニ、姫君とは。
逸平　この間に、さうだ。
ト逸平、葛籠を脊負ひ、一散に向うへ入る。源吾、思ひ入れあつて

源吾　ハヽア、草叢へ落したと思つた印も、さては今の奴めが。イヤ、こりや斯うしては

ト一散に逸平の跡追ひかけて向うへ入る。舞臺に今の十二單衣、件の印落ちてゐる。馬士唄になり、向うよりぐれ八、馬士にて、小田原提灯を持ち出る。跡より五郎吉、月參りの伊勢參りの形、奥州逆井村同行二人と書きし笠を持ち、出て來り

五郎　モシ〳〵、もう何時でござりませうね。

ぐれ　今に夜が明けませう。伊勢參りどんだの。夜通しかえ。

五郎　アイ、わしやァ奥州逆井村の者サ。お伊勢樣から京を見物して、今歸りサ。

ぐれ　ハア、さうかえ。

ト云ひながら、馬を見つけ

ヤア、こりやァおれが馬だ。奴どのを乘せて、後へ提灯を取りに歸つたが、馬を乘り捨て……それに片荷の葛籠が見えねえが、泥坊にでも會つたのか。何にしろ、斯うしても置かれめえ。併し此方の荷は恙なし、奴どのの荷ばかりは、ハヽア、途中で乘り逃げか。まだ駄賃は取らず、いまいましい目にあつた。

ト呟きながら馬を曳き直す。

五郎　そりやマアどんだ目に會ひなすつた。併し、馬に別條なくつて仕合せだ。

ぐれ　さうサ、伊勢參りどの、隨分靜かにござれ。

五郎　アイ〳〵。

ト兩方へ別れ、ぐれ八は馬を曳きながら、件の印を踏む。五郎吉は十二單衣を踏む。ドロ〳〵にて兩人、足の竦む思ひ入れ。

二人　アイタヽヽ。

ト兩人、二品を拾ひ上げ、提灯にて見て

ヤア、こりや結構な。

ト思ひ入れ。下座にて人音するゆゑ、ぐれ八は印を懷にして馬を曳き、急いで下座へ入る。

五郎　なんだか結構な物を拾つたわえ。賣つたら定めし、錢になるだらう。

トまた人音するゆゑ、五郎吉、小隱れする。下座より慶政、以前の姿にて、丸裸にて出て來り

慶政　たうとう追剝ぎに身ぐるみ取られ、この通り眞ッ裸。裸で道中がなるまいし、いま〳〵しい。

トあたりを、ウロ〳〵して、逸平が持ち來りし槍を見つけ

ヤア、槍が一本落ちてある。ハテ、やり放しな奴があればあるものだ。この槍を賣つて、路銀の

足しになとしようかえ。

ト下座、バタ〳〵にて、三吉、慶政の衣裳に着替へ、件の装束をかゝへ、頭に手拭を冠り、出て來る。

これにて慶政、小隠れする。

三吉　人目にかゝりし姿をば、又も變へるは幸ひ、座頭の身形。旅の按摩と姿をやつし。併しこの場で見失ひし、姫の行くへ。もしや追ッ手に捕へられしか。但しは先へ落ち延びしか。ハテ、心ならぬ

ト慶政、後より窺ひ寄つて、件の槍を構へ

慶政　おのれ、泥坊。

ト槍を突きかける。三吉この穂先を捕へ、立廻つて、眞中より槍を切り折り、石突の方を取り、慶政をポンと當てる。慶政、當てられながら、件の装束を持つたまゝ、タヂ〳〵となつてへたる。三吉、槍の折れを杖に突きながら

三吉　丁度、杖まで、

ト五郎吉、窺ひ出て、慶政の持つてゐる装束を取り

五郎　ヤ、これも同じく結構な。

三吉　ヤ。

ト振り返る。五郎吉、裝束を頭より冠り、體を隱す。三吉、こなしあつて

按摩、鍼イ。

ト一聲呼び、時の鐘になり、足早に向うへ入る。これにて靜かにこの道具變る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。向う大形の襖。下手、赤壁、丸の中に、石部油屋と記し、上の方に折曲りの障子屋體。この側に風呂場を取附け、誂らへの五右衛門風呂据ゑてあり。掛け行燈、軒口に伊勢金毘羅の月參り札掛けてあり。いつものところ門口、すべて石部宿旅籠屋の體。爰に幕の内より、おわた、お安、留め女にて客を引いてゐる。馬士唄にて道具納まる。

ト旅人の仕出し大勢、捨ぜりふにて、行き違ふ。屋體には伊勢參りの崖藏、金毘羅參りのかツさき九郎、同じ形の雁八、思ひ〳〵の旅形にて、足を洗うてゐる。

やす　お泊りなされませ〳〵。

崖藏　カウ〳〵、姐さん、この草鞋は失なさないやうにして置いてくんな。

やす　ハイ〳〵。

九郎　草鞋掛けも一緒に置きますよ。

わた　皆さん、御一緒でござりまするか。

雁八　ナニサ〳〵、國々は別だが、道連れになつたのサ。座敷も何も一緒でようござる。

やす　ハイ〳〵。

トそこら片附けてゐる。向うより宿役人、觸れ書を持ち、出て來り

役人　オイ〳〵、お觸れだよ〳〵。

わた　おふれ〳〵。風の神をおふれ。

役人　惡く洒落るな。コレ〳〵、この人相書は、エヽ、何とかいふ泥坊が、何とかいふお姫樣を、何とかいふ所から連れて逃げたさうだ。アヽ、何とかいふ役人樣が、詮議をしろと云ひ附けて行かれた。もし此方の内へ。斯ういふ者は泊らぬか。

崖藏　何とかいふ字づくして、さつぱり解らねえ。

九郎　お姫樣の駈落ちだの。

やす　マア、旦那の歸るまで、それを置いてお出でなされませ。

役人　さうしませう。きつと氣を附けさつしやい、アヽ、解らぬお觸れだ。

わた　私どもにも判りませぬ。

雁八　姐さん、どこの座敷だえ。

やす　サア／＼、此方へお出でなされませ。

ト宿役人下座へ、皆々は奥へ入る。おわた、觸れ書を片附ける。馬士唄になり、向うよりおかや、婆アの拵らへ、浴衣の上ッ張り高からげ、旅形。娘お半、同じく旅形、跡より以前のぐれ八、雨掛けを擔ぎ出てくる。東の口より帶屋長右衛門、町人の旅形、合羽にて、跡より供男、雨掛けを擔ぎ、出てくる。跡より宿引き、二人の菅笠を持ち出て來り、双方捨ぜりふにて舞臺へ來り、おかや、長右衛門を見て

かや　モシ／＼、そこへござつたのは、長右衛門どのではござらぬか。

長右　さう云はつしやるは、柳の馬場の、信濃屋の阿母かえ。

かや　アイナア。

長右　ヤレ／＼、お久しや／＼。

かや　コレイナア、有やうは、わたしやお前の迎ひに出たのぢや。お前は子供の折、江戸へ奉公にござつて、今は相應な町人の所へ、養子にならんしたとの事。そこで親御の幸之進さまは、始終は内

其うち先月幸之進へ呼び戻すか。又は向うで養子にしても、約束の娘は貰はうというてござる。只今上京。さまは御病死。

長右　左樣でござります。實親の病死の知らせがござつたゆゑ、取るものも取りあへず、

かや　サア、上つてござると聞いたゆゑ、迎ひがてら、娘を連れて伊勢參宮。なれども、いはゞ娘にも服の掛つた事なれば、どうかと思うたが、併しこの子の實親といふは、駿州由井の憲法紺屋、次郎作といふもの。わたしが身延へ參詣の歸るさ、養女に貰うたお半。またお前へ云ひ號け、爰で會うたは互ひの仕合せ。マア／＼、お前もお力落し。併し、お前は御無事で、おめでたうござります。

トこの話しのうち、おわた出て

わた　モシ、お泊りかえ／＼。お泊りなされませ。

宿引　オイ／＼、おわたどん。旦那はお泊りだよ。

わた　それは有り難うございます。モシ、あなた方も、お泊りなされませいな。

かや　さうしませう。今夜は爰へ泊つて、ゆつくり、お前とも話しませう。

長右　さうなされませ。

宿引　ソレ、お洗足を。

わた　ハイ〳〵。

ト盥手桶を持ち來る。皆々捨ぜりふにて、足を洗ひ、屋體へ上がる。

宿引　お荷物は此方へお出しなされませ。

ぐれ　モシ、荷物をお渡し申します。

かや　ハイ〳〵、御大儀でござんした。

わた　どうせ御一緒でござりませう。

長右　一緒でよいとも〳〵。

宿引　ハイ〳〵、左樣なれば。

ト荷物を一緒にして持ち、奥へ入る。

わた　お脚絆を濯ぎ出して置きませう。

ト皆々の脚絆を持ち、奥へ入る。

かや　イヤモウ、何から先へ云はうやら。モシ、長右衛門さま、爰にゐるのがわしが娘、親御幸之進さまと約束した、お前の云ひ號けの、お半でござりますわいなア。

ト長右衛門、お半を見て

長右　エヽヽヽ、あのお子が、わしと云ひ號けかえ。

かや　オイナウ。

長右　アヽ、この子がわしの女房になるのかえ。

かや　まだ一向年がゆかぬによつて、お前の世話勝ち、氣には入るまいが、末始終面倒見てやつて下され。

長右　イヤ、阿母、ほんまにこの子が

かや　ほんまでなうてかいの。

ト長右衛門、お半を、よく／＼見て

長右　奇妙……福徳の三年目、去年の春の富より嬉しい。

トお半、長右衛門を、つく／＼見て

はん　コレ、母さん、そんならあのお方が、云ひ約束の

かや　オイナウ。其方の婿どのぢやわいなう。

はん　エヽ。

ト悔り。

かや　何を其やうに悔り。

はん　それおやというて、あのマア顔。

かや　ヤア。

はん　わしや、ツッとモウ。

ト辛氣なこなし。長右衛門、いそ〳〵して

長右　こりやモウ、親の病氣が結ぶの縁、もう〳〵、江戸へは歸られぬ。今まで知らずにゐたが、口惜しい〳〵。

供男　モシ〳〵、それでも江戸の養家へは、法事しまひ次第、歸ると仰しやつたではござりませぬか。

長右　サア、さうは云うたが、もう歸らぬ。何も養父の家に義理は無い。今までは江戸にゐて、北八といふ名であつたが、京の内へ戻れば、押小路の帶屋長右衛門といふ旦那樣、實家の名跡立てねばならぬ。

はん　それでもあなた、是非江戸へお歸りなされずばなりますまいなア。

長右　イヤ〳〵、わしが斯う云うて置いて、騙して、また江戸へ行かうかと思うて、娘心に案じるの

か。コレ、必らず案じる事はない。もう／＼、どのやうな事があつても、江戸へは行かぬ／＼。

はん　イヽエイナア。さう仰つしやらずと、矢ッ張り江戸へお出でなさる方が

長右　ヤア。

はん　サア、あなたが京へお歸りなさらにやよいがと、それを案じて。

かや　コレ、この子は、なんぼ年がゆかぬとて、わつけもない。

はん　それじやというて、わしや。

ト思ひ入れ。

ぐれ　成る程、こりや病も起りさうなものだ。婿さんのあの顏では。……イヤ、その病氣を癒すには、よいお守りがござりまする。

かや　お守りとあれば、此方も金箱の娘。兎角災難遁がるゝやう、お守りが大切ぢや。して、馬士どの、其お守りは、どのやうなお守りでござるぞ。

ぐれ　モシ／＼、其お守りは又と無い、有り難いお守り。

ト前に拾ひし九重の印を出し

これは、わしが草津で拾ひました結構なお守り。百文なら上げませう。

かや　何ぢや、百ぢや。百では高い。お守りは十二銅が當り前なものぢや。
ぐれ　お前、お守りを根切つては、驗がわるうござります。
長右　コレ〳〵、其お守り、おれが買つてやりませう。大事な女房に掛けさせる守りぢや。

ト百文投げてやる。

ぐれ　左樣なら差上げませう。

ト件の印をおかやに渡し、百文取る。

かや　それでもお前、氣の毒だね。
長右　ナニサ。ちつとのうちも江戸にゐたから、錢金は綺麗サ。
供男　嘘ばつかり、今までつひぞ百と纏まつた錢を、遣つた事はありませぬものを。正月、髪結ひに初剃りさへ
長右　コリヤ〳〵。ツカ〳〵と何を吐かす。
供男　それだといつて、大風ばかり。この長の道中、馬に一つ乘りもしないで。
長右　これはしたり。……コレ〳〵、てめえは、これから直ぐに江戸へ引ツ返し、この樣子を養父へさう云つて、もう江戸へは歸られぬ趣きを、云うてくれ〳〵。

供男　おらが旦那は、鏡を見た事が無いと見える。

長右　又ぬかすか。

ト奥よりおわた、出て來り

わた　モシ〳〵。サア、あちらの座敷へお出でなされませ。

かや　ほんに、さうしませう。コレ、お半、此お守りは、何ぢややら、結構らしいもの。わが身の肌に附けてゐや。

トお半の懐へ右の印を入れ

サア、長右衛門さん。

長右　ハイ〳〵。サア、お先へ。

かや　左様なら御免なされませ。

わた　サア、お出でなされませ。

ト馬士唄になり、おかや先に、お半、おわた附添ひ、奥へ入る。ぐれ八、下座へ入る。おやす出てくる。

長右　カウ〳〵、女中。わしは直ぐに風呂へ入りたいが。

やす　ハイ〱、お風呂はこれでござります。お浴衣もこれに置きまする。

ト上手の風呂を教へ、疊みたる浴衣を置き　奥へ入る。

供男　モシ〱、お前さん、江戸を立つて、一度も湯へ入らつしやらぬが、なぜ又今夜に限つて

長右　湯へ入らずに居られるものか。あゝいふ女房を持つからは、ちつとは磨いて

供男　泥坊を見て繩だね。

長右　これでも綺麗になるわえ。

供男　むくろじの因縁を知らぬな。

ト馬士唄になり、供男、奥へ入る。長右衛門は捨ぜりふにて裸になり、風呂へ行く。五右衛門風呂の底の沈みたるを、蓋と心得、取除けて、片足入れかけ、火傷して

長右　アツヽヽ……この風呂は底が無い。

トいろ〱思ひ入れ。側にある手水場の下駄を見つけ、こなしあつて

ハヽア、これだな。こいつは風雅だ。

ト下駄を穿き、風呂の中へ入る。馬士唄になり、向うより慶政、件の裸身、跡より前幕の犬、褌の先を咬へ、出てくる。

慶政　シツ〳〵。この畜生め。もうおのれに用は無いワ。まだ大津繪の趣向だと思つてゐるか。コリヤなんぼ畜生でも、おれが姿を見て、ちつとは氣の毒だと思へ。彌次郎兵衛とも云はるゝ侍ひが、若殿の切腹から、其まゝ邸を、たうとう駈落ち。昨夜草津で追剝ぎにあひ、身ぐるみ取られて眞ツ裸、柔弱非力の某ゆゑ、命を的の盗人には、迚もかな

犬　ワン。

ト啼く。

慶政　それゆゑ、あんな奴には、ちつともかま

犬　ワン

慶政　とはいふものゝ、錢は無し、行く先とても定まらず。こりや一とし

犬　ワン

慶政　せにやならぬ

犬　ワン。

慶政　ハテ、間の好い畜生め。

ト慶政、犬を蹴倒す。これにて犬逃げて下座へ入る。

犬までおれを馬鹿を見るやうにしをる。

ト褌の間より袱紗包みの一巻を出し

まだも頼みはこの一巻。こりや先年亡びたる、楠家の軍術奥儀の秘書、故あつて身共所持すれど運よくこれは昨夜取られず。この品好む武家方へ、賣り渡せば、金に有りつく品なれど、差當つては持ち腐れ。今夜泊る旅籠もなし、昨夜から何も食はず、腹がへつてちつとも歩かれず。旅はくひ物、くらひ物とは、よく云つたものだなア。

ト思ひ入れあつて舞臺へ來り、あちこち見廻しゐる。此うち長右衛門、風呂よりあがり、體をあふぎながら、慶政裸でゐるゆゑ、風呂を尋ぬると心得て

長右　モシ〳〵、お前、風呂を尋ねさつしやるなら、爰でござりまする。

ト云はれて、慶政、思ひ入れあつて

慶政　ハイ〳〵、それは有り難うござりまする。マア、御ゆるりと。

ト入る氣になる。

長右　今よく沸いて來ました。サア、お入りなされませ。

慶政　ハイ〳〵。

ト我れを忘れて、件の一巻を、浴衣の間へ隠し、狼狽てゝ風呂へ入らうとして、同じく足を火傷して

アツヽヽ……モシ／＼、あなた、この風呂へは、どうしてお入りなされました。

長右　ハイ、風呂へ入るには別にむづかしい事はござりませぬ。體を濡して、足から先へドンブリと。

慶政　それはかねて承知して居りますが、この風呂には底がござらぬから

ト云ひながら、長右衛門の脱ぎ捨てし下駄を見つけ

ハヽア、解りました。これは珍らしい。

ト右の下駄を穿いて風呂へ入り

ヤレ／＼、結構々々。

ト此うち長右衛門は側にある浴衣を着ようとする。件の一巻轉げ出る。長右衛門、取上げ

長右　ハテ、こいつはおつな物が、

ト何心なく懐へ入れ、浴衣のまゝ奥へ入る。慶政これを知らず

慶政　アヽ、いゝ心持ちだ。南無妙法蓮華經。……「ヤアぬかしたり猫傾城、その手で深味へかきのめされ」

ト悪い聲にて浄瑠璃を語る。此うちお安、膳を持ち出て來り

やす　モシ〳〵、こりや、あなたのお召し物でござりまするか。
慶政　イヤ〳〵。
ト伸び上がり見て、思ひ入れ。
オイ〳〵、おらがのだ〳〵。
やす　左樣でござりますか。モシ、お膳も爰へ置きます。夜具も直ぐに持つて參りまする。
慶政　エヽ。……イヤ、そいつは有り難い。
ト狼狽てヽ風呂よりあがる。お安これを見て
やす　オヤ〳〵、お前さん、下駄を穿いて風呂へお入りかえ。惡い冗談ばッかり。
慶政　ナニ、惡い冗談。爰の內が惡い冗談だ。底の無い風呂といふがあるものか。足を火傷するゆゑ、
そこで下駄を穿いて入つた。
やす　モシ〳〵、底はある筈でござります。
ト風呂場を見て
ほんに、底が取除けてござります。
慶政　それは蓋ではないか。

やす　これは五右衛門風呂というて、早く沸くやうに底が浮いて居ります。その底を踏まえて入るのでございります。
慶政　ハヽア、そこの所に氣が附かなんだ。
やす　御ゆるりとおあがりなされませ。
　ト　お安、奥へ入る。慶政、長右衛門の脱ぎ捨てし着物を着て
慶長　ハテ、よくしたものだ。まづ間違ひで湯へ入ると、それから着物が出來るし、飯にありつく。寐所が出る。こいつは奇妙々々。……ヤヽ、あまりの嬉しさに、今の浴衣が見えぬが、あの中の……ハヽア、そんなら今の男が。
　ト　奥へ行きさうにして
イヤ〳〵、あれを取返しに行けば、折角着た着物を取られる。ハテ、儘ならぬ事だ。よし〳〵、後に彼奴が寐靜まつた時分に、あはよくば路銀まで……ドリヤ、食事にありつかうか。
　ト　思ひ入れあつて膳を持ち、奥へ入る。奥より逸平、以前の葛籠を持ち出て來り、あたりを窺ふ。向うより灘六、雲助の形にて、白羽の矢を持ち出て來り、門口より窺ふ。内には逸平これを知らず
逸平　姫君様、さぞ窮屈でござりませう。先程承りましたあなたの戀人、與惣兵衛さまの落し胤、與

八郎さまとは、下郎めも、只今までかつふつ存せず。併し、その與八郎さまは、自然生の三吉小僧とかいふ盜賊と

ト あたりへ思ひ入れ。この時下座よりぐれ八出で、門口の灘六と囁く事あつて、向うへ入る。灘六は猶も樣子を窺ふ。

サア、それも慥かに寶の詮議。あなたは正しく大江の姫君、御剃髮のお望みありしところ、與八郎さまゆゑ墮落して、お心柄とはいひながら、玉の臺に引きかへて、奴の脊中に葛籠の中。これも浮世の皆成行き。悔んで返らず、この上は、主人の敵を尋ぬる次手、與八郎さまのお行くへも探し求めて、お逢はせ申しませう。

ト 此うち灘六、持つたる白羽の矢を門口へ突刺し、わざと足音高くさせて

灘六 サア〳〵、爰の内だ〳〵。

ト これにて逸平、葛籠を後へ圍ふ。

サア〳〵、皆の衆、早くござれ〳〵。

ト 向うより、ぐれ八案內して、神主附き、百姓大勢、簑笠にて出て來り

神主 イカサマ、この内に矢が立つたワ。

灘六　みんな入つて、探せ〳〵。

　　　ト皆々、ドカ〳〵と内へ入る。

神主　神のお告げに違ひなく

皆々　この葛籠だ〳〵。

　　　ト手を掛ける。逸平とめて

逸平　こりや理不盡に、この葛籠を何とする。

灘六　何ともせぬ。この葛籠の中には大江の姫君、重の井姫、隠れたる事、神は見通し。

逸平　なんと。

神主　この白羽の矢に短册が、附いて立つてゐるからは、鈴鹿の魔神へ、生贄に供へるのだ。

逸平　すりや、神の告げにて

灘六　暇がいつては神の祟り、皆の衆、早く

皆々　合點だ〳〵。

　　　ト葛籠へかゝる。

逸平　イヤ、合點のゆかぬ詞の、はし〴〵。神は非禮を受け給はず、正しく騙りの拵らへ事。葛籠は滅多

に
灘六　エヽ、四の五と面倒だ。ちつとも早く
逸平　イヽヤ、渡さぬ。
ト逸平、灘六、立廻りのうち、皆々寄つて葛籠を持ち、向うへ一散に入る。
南無三、葛籠を。
ト灘六を毆り退け
いづくまでも
ト跡追ひかけて向うへ入る。灘六も續いて入る。この物音に、奥よりおわた、お安出る。おかや、お半の手を引き、長右衛門附いて出てくる。
わた　今のは慥か鈴鹿山の、鬼ケ窟の人身御供。
やす　今朝から逗留の奴どのゝ、荷物の中がお姫様とやら、側にゐてさへ知らぬものを、ほんに神様は見通し。
かや　人身御供とは恐ろしい。斯ういふ娘を持つた身は、餘所の事でも、怖やの〳〵。
長右　なんの、餘所の事を構ふ事は無い。鬼に食はるゝ娘も運づく。それに引きかへ今爰で、めでたう

祝言する喜び。人の運は、これ程にも違ふものか。お半ぼう、さぞ嬉しからう。

はん　わたしや、いつそ祝言するより、人身御供の方がましぢやわいなア。

かや　其やうな事云はずと、爰で逢うたが幸ひ、卽ち吉日。ちよつと祝言のまなび。

わた　これはおめでたうござります。ちよつと、お酒を持つて參りませう。

やす　そして、直ぐにお床を爰へ取りませう。

トおわた奥へ行き、銚子杯を持つて來る。此うちお安、よき所へ床を敷き、屛風を立てる。長右衞門、いそ〳〵して

長右　これは氣の利いた手合ひ達ぢや。そんなら爰で

かや　善は急げぢや。サアお半。

はん　それぢやというて、わたしやモウ。

かや　ハテ、恥かしい事はない。其方から飮んで、聟どのへ。

ト嫌がるお半に、無理に杯を持たせ、おわた、つぐ。お半、飮む眞似して酒を明け、杯を拋り出し、ツンツンしてゐる。長右衞門、これを戴き

長右　思ひがけなきこの祝言。この杯の一滴が、わしが爲には壽命の藥、養老の瀧、菊の酒、天の甘

露も、これには及ばぬ。

ト一つ受けて飲み干し

仲人無ければ聟のわしが、二役勤めて、一つ。……「高砂やこの浦船に帆を上げて、後は何だか知りませぬ。」

ト謡ふ。

皆々　エヽ、おめでたうござりまする。

かや　仲人は宵の程。

やす　お床も爰へ延べたれば、

かや　お半も爰で

はん　イヽエ、わたしも一緒に

ト立つを、長右衛門引留め

長右　ハテ、恥かしい事はないわいの。

はん　それでもどうも

皆々　ゆるりとおしげりなされませ。

ト合ひ方になり、皆々奥へ入る。

はん　モシ、母さん。

ト立たうとする。

長右　これはしたり。いかに年が行かぬとて、祝言すればおれが女房。亭主と一緒に、寝るに怖い事があるものか。

はん　それぢやというて。

長右　ハテマア、自由になつてゐるや。

はん　アレ、否ぢやわいな。

ト この途端、バタ〳〵にて、向うより三吉、慶政の着物に、頭巾を冠り、按摩の形にて駈けて出て來り、直ぐにガラリと内へ入り、門口を締める。これにて長右衛門、悔りして

長右　エヽ、悔りさせた。貴樣はなんだ。

三吉　ハイ。……按摩でござります。

長右　ハテ、仰山な入りやう。惡い所へ

はん　よう來て下さんしたなア。

三吉　お療治を致しませうか。

長右　イヤ〳〵、按摩に望みはない。早く行つてもらひませう〳〵。

はん　アヽ、コレイナア、折角來たものを、揉んでもらひなさんせ。

長右　エヽ、邪魔らしい。併し、其方の詞を背いても惡い。そんなら、按摩さん、ちつとばかりやつて下さい。

三吉　ハイ〳〵。

ト合ひ方になり、長右衛門の後へ廻り、肩を揉む。長右衛門、思ひ入れあつて

長右　コレお半、其方は年がゆかぬゆゑ、恥かしい事もあらうが、親の許した云ひ號け。その云ひ號けの夫のおれを、嫌ふ樣子。よう物を積つて見や。江戸では北村屋八兵衛というて大金持ち、北八北八と、人にも知られ、今度京の本家へ歸れば、帶屋の長右衛門。何方へ廻つても仕合せのよい男、その御新造樣になる其方、何も不足はありさうも無いもの。親にまで樂をさせるがその身の孝行。コレ、見や、ちよつとした路銀でさへも、この位ゐ持つてゐる。まだその上に、斯ういふ大切な品がある。

ト慶政が持つて來た一卷を出し

金でも買へぬ大切の寶物。斯ういふ福神を嫌ふといふがあるものか。

ト此うち三吉、始終これに目を附けてゐる。

三吉 モシ、そりやア何でございまする。

長右 何だといつて、盲目が聞いて役に立つものか。コレ、お半、いま云つた事が解つたなら、おれの云ふ通りに

はん なんぼ親の云ひ號けでも、お前のやうな

長右 ヤ。

三吉 成る程、娘御の云ふのが尤も。こんな面で云ひ號けも

長右 なんだ、この按摩は。盲目で目が見えるか。

三吉 イヽエ、皆目

長右 こんな面とは。

三吉 面と申したのは……わしが面の事でございます。

長右 面がようても、目が見えなくつちやア何にもならぬ。おれは少々不器量だが、目は明らか。

三吉 モシ、旦那、お前さん目は二つあるが、鼻がございませんね。

長右　馬鹿な事を云ふ。この位る立派な鼻が。
三吉　でも、觸つて見ても知れませんよ。餘ッほど奥の方だと見えます。
　　ト無性に顏を撫で廻す。
長右　エヽ、何をする。おれの鼻が手探りで知れるものか。鼻は低いが、目は明らか。ちよつと薄暗がりでも、コレ〳〵、爰にあるこの書附けでも見える。
　　ト件の觸れ書きを取つて
なんだ、これは人相書だな。「一つ、年頃二十四五歲、中脊にして色白く、眼中清しく、右の高頰に黑子一つ、右の者は自然生小僧三吉と申す馬士にて、大家の姫を奪ひ、立退く曲者、召捕つて差出す者に於ては、褒美たるべきものなり」……この通り。なんと眼は鮮かであらうがの。
　　ト三吉これを聞き、思ひ入れあつて
三吉　そんなら配符がもう廻つたか。ハテ、恐ろしい。
はん　戀に上下の隔ては無いと、思ひ合うた仲ならば、お姫樣と馬士と、さぞかし道々仲ようして。それに引きかへ、心に思はぬ
長右　婿は金持ち。手入らずのお娘を

三吉　ヤレ、殺生な。

長右　ヤ。

三吉　ハテ、羨ましい。

ト思はず長右衞門の頭をピッシャリくらはす。長右衞門、悧りして

長右　アイタヽヽ。この座頭は、なぜ、おれが頭を

三吉　イエ、お頭のお療治を。

長右　イヤ〳〵、もうよい。てめえが爰にゐては、お半と氣味合ひの邪魔になる。もうよい程に、早く出て行け。

三吉　でも、お下をば。

長右　うるさい按摩だ。いゝといふのに。

三吉　ハイ。

ト三吉、そろ〳〵探り、長右衞門が側にある脇差をソッと懐へ引込み、門口へ出て、思ひ入れ。

長右　まだ行かねえか。

三吉　お療治代を。

長右　ソリヤ。

ト端錢を三吉の足のあたりに投げてやる。探り取つて

三吉　有り難うござります。

ト門口を外より締める。合ひ方になり、長右衛門、嫌がるお半を無理に引立て、やがて

長右　エヽ、來やれといふに。

入れあつて

ト唄になり、屏風を引廻す。此うち三吉、門口にて、件の脇差を懐より出し、旅人の足を洗ひし盥の水にて、片脇の石を取出し、寝刃を合せながら、きつと目を見開き、白刃を見る。本釣り鐘、思ひ

三吉　今宵も最早、子の下刻、陰中の陰、九分にして、破軍、西に光り微なり。時刻もよしや旅人が、所持する品は、慥かに名だゝる……もしや尋ぬる品ならば、取り得し上にて姫の在所、先づ差當るあの旅人、路銀もしツかり。それ〳〵。

ト凄き合ひ方になり、門口を、めり〳〵と破り、内へ入り、屏風の内へ忍び込む。此うち、慶政寛ひ出て、この體を見て、慄へ〳〵、門口の破れし所より逃げて出て、一散に向ふへ入る。屏風のうち、バタバタと音して、お半逃げて出る。内より帯を踏まへる。この途端に屏風倒れる。内に長右衛門、裸にて

縛られ、三吉、白刃を突附けゐる。

はん　そんなら今の、按摩さんは。

長右　座頭と見せたも、さてはこの頃噂ある

三吉　知れた事、泥坊だワ。

長吉　ヤヽヽヽ。

三吉　うぬが所持する今の品、取得ん爲の出來合ひ按摩。詞の甘い其うちに、路銀もろ共その一品、キリ〳〵爰へ、出しやァがれ。

長右　イエ、この品は。

三吉　こゝま言云はずと、出しやァがれ。

長右　ハイ〳〵、元が拾つたこの一品、何事も命か物種。自由にお取りなされませ。

ト三吉、長右衞門の懐より、一巻と路銀を出す。

ヤア、そんなら路銀も。

三吉　やかましいわえ。

ト件の一巻を開き見て

こりやコレ、楠家の軍學の祕書。ハテ、思ひも寄らぬ……これも何ぞの。

ト懷中する。この時奧より、以前の崖藏、九郎、雁八、手下の形にて、おかやを縛り出て來り

三人 お頭、首尾は。

三吉 先へ入り込む、手下の者ども。

崖藏 家內の奴等を縛り上げ、有り金、又は金目の代物

九郎 また旅人の荷物や路銀

雁八 殘らず浚つて

三人 こかしましたよ。

三吉 出かした〳〵。

長吉 そんならわしらが荷物も、風呂場へ脫いだ着物まで

かや わしらも殘らず丸裸、因果な宿へ泊り合せて、この難儀を

長右 云ひ號けの女房と、姑に逢うた嬉しさ引きかへて。併し女房に怪我もなく、こればかりがまだしも取得。

三吉 みんな見やれ。この面で、手入らずのこの娘を、せしめるとは押しの強い

崖藏　イカサマ。まだ手入らずのお初穂を、そんな野郎に戴かせるは惜しいもの。
九郎　行きがけの駄賃に、モシ、頭、爰で娘を
三吉　それだといつて、可哀さうに
三人　わしらが押へて。
　　ト立ちかゝる。お半、こなしあつて
はん　アモシ、其やうになされずと
三吉　エヽ、得心か。
はん　アイ。
三人　頭、おつだね。
長右　コレ／＼、お半、長右衛門といふ夫がありながら、其やうな泥坊に
三人　どうしたと。
長右　イヤ、お泥坊様、その娘は、わしの女房、それを横盤とはお胴慾、あなた間男でござりまするぞ
九郎　やかましいわえ。いくら女房とぬかしても、娘は不承知。
三人　ナアお娘。

はん　今からわたしをどこへなと、連れて行つて下さんせ。

かや　コレ娘、いかにわしとはなさぬ仲、實の親は由井の紺屋、次郎作が娘ぢやとて、いつの間に其やうないたづら者に。

はん　アイ、なんぼ親の云ひ附けでも、好かぬお方をどうしてマア。親を捨てゝも思ふお方に、附くが女子の操とやら。その代りには、コレ申し、どうぞ母さんの命ばかりは。

三吉　氣遣ひするな。そんなら、いよ〱、おぬしはおれに

はん　必らず見捨てゝ、下さんすなえ。

三吉　さういふ氣なら盜人冥理、なんで見捨てゝよいものか。

長右　コレ〱、お半、おのれ、おれが見る前でその體裁。エヽ、おのれはなア。

ト寄りかゝる。

三人　ビク〱ひろぐと、芋刺しだぞ。

ト手下三人、長右衛門をおかやと一つに縛り附ける。脊中へ負つたやうな形に見える。

三吉　お娘、では、おれと一緒に餘所へ行く氣か。

はん　アイ、たとへいづこの浦までも、

長右　おのれ、行く氣か。
三吉　知れた事だワ。うぬらは勝手にどこへなりとも。此方は、そろ〳〵
三人　頭、出掛けやせう。
　　ト三吉、お半の手を引き、皆々附添ひ、花道へかゝる。
かや　なんぼ生さぬ仲ぢやとて、母を振り捨て、不孝者めが。
はん　母さん、発して下さんせ。
長右　お半が代りに引取りし、婆アを脊に長右衞門、これも因果な生れ附き、二人駄面の川水に
かせ　浮き名を流す泡沫の
三吉　あはれな態わえ。
皆々　ハヽヽヽヽ。
長右　ハア。
　　ト泣き落す。
三吉　サア、來やれ。
　　ト靜かなる禪のツトメにて、三吉、お半の手を引き、皆々向うへ入ろ。長右衞門、おかや跡見送り、

こなし。此まゝ道具變る。

本舞臺、うしろ黑幕、この前一面の岩組み。眞中に岩窟、これに古びたる白木綿の戸帳、靈鬼窟と書きあり、上の方に杉の神木、注連を飾り、これに女の顏を描きし板、大いなる釘にて打附けあり。一面に杉の吊り枝。すべて鈴鹿山の道具。爰に毒蟲の彌藏、仕丁の形にて、白衣と鬼の面を持ち、灘六、簑笠にて松明を持ちゐる。山颪にて道具納まる。

彌藏　灘六、首尾は。

灘六　喜ばつしやい。まんまと首尾よく姫は此方へ。アレ〳〵、向うに見える松明こそ、それに違ひない。官太夫さまへお渡し申せば、互ひに褒美。

彌藏　この面にて鬼神の形をなしなば、心弱き女の事、忽ち姫は氣絶なさん。そこを幸ひ御主人へ。

灘六　またその上にこの書狀。これは遠州赤羽屋、五郎作へ質入れなしたる、雷丸の劍の儀につき、官太夫さまへ屆ける狀。これも次手に、こなたの手から。

彌藏　心得た。

ト右の狀を取る。

灘六　心がゝりは、姫の供した奴めが、跡追ひかけて來ては、何かの邪魔。
彌藏　とても事に、道にて其奴を
灘六　おッ方附けて、跡からわしは
彌藏　ちつとも早く
灘六　合點だ。

ト灘六、一散に向うへ入る。

彌藏　何かの手番ひ、これでよし。この上は岩窟にて、ソレ。

トこの時、戸帳の中より手を出して、彌藏の首を押へる。

ヤヽ、先に誰れやら。

ト振り切らうとする。内より強く引くゆゑ、引摺り込まれる。すぐに山颪しになり、向うより以前の大勢、松明を灯し、棺を擔ぎ、神主附添ひ出て來り、よき所へ下ろし

神主　ヤレ〳〵、みんな、御苦勞々々。最早丑三ツの刻限、魔神の出現に間もござるまい。
皆々　美しい娘を鬼に喰はすとは、恐ろしい事ぢやなう。
神主　イヤ〳〵、さうでない。なんぼう美しうても、神の指圖で喰はれるとは、よく〳〵前世に罪のあ

る女でござらう。……アレ〱、あの神木に女の顔が釘で打附けてござるが、あれもどこの女の嫉妬で、呪ふ事と見えまする。あゝいふ罪をするから、女はいづれ鬼なぞに食はれますて。

皆々　ハテ、恐ろしい事でござるの。

神主　イヤ、恐ろしいといへば、今に鬼が出やうも知れませぬ。

　　トこの時、雨車、雷鳴り出す。

皆々　今の内、早く逃げませう〱。

神主　サア〱、ござれ〱。

　　ト皆々、わや〱云うて向うへ入る。山颪しになり、戸帳の内、バタ〱と音して、彌藏、一太刀切られ、中返りして出て、すぐに棺へかゝる。棺の中より白刃出て、彌藏を見事に切り倒す。これをキツカケに戸帳落ちる。内に白井權八、丸に井の字の紋の着附け、拔刀、件の鬼の面と白衣を片手に持ちて立ち身。これと共に、棺をメリ〱と毀し、中より由井民部之助、若衆、武者修行の形にて、同じく丸に井筒の紋所、拔刀にて出る。これにて空へ半月現はれる。双方これを見やり、キツと見得。誂らへの鳴り物になり

民部　石床洞に止まつて、荒く空しく拂ふ。

權八　玉案林に拋つて、鳥獨り啼く。
民部　それは即ち仙家の賊。
權八　爰は名におふ鈴鹿の岩窟。
民部　古へ田村將軍の、退治給ひし鬼神の靈魂、爰に殘ると愚人の流言。
權八　その虛を計つて姬君を、奪はん奸者の企みと聞き、先へ入込み窺ふところ、贄の棺は姬ならで
民部　大日本を武者修行、贄の婦人の身に代り、入り來りしも鬼神の正體、見極めんずと思ひしに、賊とも覺えぬ其いでだち。
權八　我れも武道を修行の旅路、かゝる深山幽谷を、夜陰に一人さまよふも、我れに勝りし武術の猛男出會はん事もと日頃の望み。
民部　ハテ、不敵にも小人の、賴もしき心掛け、幸ひ木の間に洩れし月影、この場に於て互ひの手練、太刀筋交すその以前、名乘る手前が姓名は、着せし衣類の紋どころ、丸に井筒を御自分にも
權八　丁度似寄りの手前が定紋。氏は白井の
民部　アイヤ、互ひに浪人、名乘りは詮なし。身共も氏は、由井の何某。
權八　それゆゑ互ひに

民部　井筒の定紋。
權八　年も、姿も
民部　似寄りし二人。
權八　この場の武術をくらべこし。
民部　振分け髪の頃よりも
權八　磨き置いたる魂ひを
民部　つい云ひ掛けし
權八　井筒の角菱。
民部　丸く納めぬ
權八　武士の意地づく。
ト兩人、ツカ〳〵と寄つて、權八、刀を拔きかける。民部之助これを留めて、キツと見得。鳴り物變つて、立廻りよろしく、此うち月隱れる、兩人、空を見やり
民部　葉越しの月の雲隱れ
權八　隱れし輝のその在所。

民部　イヽヤ、存ぜぬ。それよりも、残りし勝負を

權八　何を小癪な。

トまた立廻り、倒れし彌藏起きあがり、この中へ入る。彌藏の懷より件の書狀落ちる。これを民部之助拾ひ、懷中して、權八、民部、双方より、彌藏を見事に切る。彌藏、苦しむ。民部は權八を仕留めし心、權八は民部を切りし心にて、兩人、思ひ入れあつて

兩人　ハテ、雉子も鳴かずば

ト兩人思はず恟りして、双方へ飛び退く。彌藏、見事に返る。兩人、裾にて刀を拭ふ、双方一時に木の頭。よろしくキザミにて、ひやうし

幕

道具出來次第、この幕切つて落す。

本舞臺、淺黃幕。眞中に九尺の開帳小屋、白木綿の幕を張り、この前に須彌壇、この上に花立て種々の供物あり。下手に關の地藏開帳の立て札。同じく大塔婆立てあり。上の方に葭簀張りの掛け茶屋。床几二脚ほど並べ、爰に垂れ駕籠一挺。この駕籠の上に秋葉山奉納の白刃を附けし額結びつけあり。駕籠舁き二人、この側に茶を飲んでゐる。茶屋の亭主、茶を汲んでゐる。西念、堂守りにて鉦を叩き

ゐる。下手におはぎ、女乞食。與之助、菅笠を冠り、さゝらを持ち、踊つてゐる。參詣の仕出し大勢立つてゐる。双盤、伊勢音頭にて、賑やかに道具納まる。

與之　島さん、紺さん、花色さん、遣てかんせ、抛らんせ。

仕出　ハア、山田の相の山の押ッ冠せだな。

同　可愛らしい好い小僧だ。

皆々　サア／＼、遣りませう／＼。

ト皆々錢を遣る。

はぎ　ハイ／＼、有り難うござりまする。

亭主　お入りなされませ。お茶お上がりなされませ。

皆々　今日もよいお天氣でござります。

ト皆々茶屋へ入る。

亭主　ハイ／＼、どなたもお早うござります。

ト皆々へ茶を汲んで出す。

仕出　いつも／＼賑やかな事。お開帳は大當りでござるの。

亭主 イヤモウ、毎日の群集。取分け、今日は四月八日、お釋迦樣の御誕生で、藤澤の智行さまがお出でなされて、お十念がござりました。又、お開帳にもござるとの事で、お法衣も頭巾も、爰へ置いてお出でなされました。

皆々 それは有り難い事でござるの。

西念 これに安置し奉るは、洛陽大德寺の開山、一休禪師開眼の地藏尊、六道能化の活佛でござる。近う寄つて御拜をなさるとも、なさらぬとも御勝手次第。只お賽錢さへ上げれば、其お賽錢を、この活佛の堂守りが、救ひ取らんとの御誓願は、くび〳〵と浴るほど、のんだりそれか。

ト善き舌で云ふ。

仕出 あの坊さんは、いつも〳〵醉うてゐるの。

亭主 左やうサ。おへない飮んだくれでござります。

西念 その筈サ、酒盛如來のお弟子だもの。

駕甲 嘘アねえ。噂をしたら、おいらも飮みたくなつた。

同乙 ちよつと向うでやつて來べい。

ト駕籠へ向ひ

モシ、旦那、ちよつとお待ちなされて下さりませ。

駕甲　サア〳〵、來や〳〵。

ト駕籠舁き兩人、下座へ入る。仕出し、捨ぜりふにて、東西へ別れて入る。

はぎ　エヽ、この餓鬼は、ちつとの内も野良をかはく。精出して踊らねえか。……よく、メソ〳〵と泣きやアがる。不吉な餓鬼だぞ。

ト頭を喰はせる。双盤になり、向うより講中の者二人、出て來り

コレ〳〵、西念どの〳〵。

ト西念、居眠りしてゐるゆゑ、講中、側に有り合ふ鉦を仰山に叩く。西念、愕りして

西念　これに安置し奉るは

講甲　アヽコレ、西念どの、貴樣また、醉つたの〳〵。

西念　アヽ、愕りした。いま美い女と酒盛りをしてゐる夢を見てゐたが、惜しい事をした。

講乙　お株で、下らなくなつてゐるぜ。よくそんなに酒が飲めるの。

西念　なぜ。咽喉に穴が明いてゐるから飲めるのサ。何も不思議な事はねえ。また酒でも飲まなくつて一口もゐられるものか。奉納といつちやア、牛蒡や薩摩芋の揚げたのばかり。おらア坊主でも、

こんな物は食はねえ。
講乙　なぜ〳〵。
西念　「坊さん牛蒡食つて縛られた」といふ例しがある。
講中　何を云はつしやる。
西念　それだから今朝智行さまが、置いて行つたこの袈裟、法衣と頭巾。そいつを質に置いて、海老でも鮑でも買つて食ふ氣だ。なんといゝ氣前だらう。
講甲　とんだ事を云ふ。その法衣や袈裟を、わしらは取りに來たのだ。
西念　なぜ〳〵。
講乙　なぜといふ事があるものか。今日は四月八日で、灌佛の法會だから、お開帳には又、智行さまがござる筈。その品々を取つて來いとの事。それでわざ〳〵來たのだ。質に置かれて堪るものか。
西念　ナニ、今日は何だと、灌佛だ、人を馬鹿にした。乾物ものが食はれるものか。生臭がいゝ。
講甲　よく食ふ事ばかり云ふ坊主だ。マア、何にしろ、その袈裟法衣を寄越さつしやい。
西念　コレ、持つて行つて何にする。
講乙　智行さまに、お開帳を頼むのだ。

西念　コレ、馬鹿な事を云はつしやい。開帳が人頼みをする程むづかしいものか。智行さまも坊主なら
おれも坊主だ。智行さまの頭ばかり圓くて、おれが頭は三角か。何も坊主毛色を分ける事はねえ
わえ。

講甲　おへねえ氣まぐれだ。管を卷かずと、袈裟や法衣を早く寄越さつしやい。

西念　そんなに欲しくば持つて行きやァがれ。

ト袈裟法衣、頭巾を投げ出す。

講乙　勿體ねえ坊主だな。

西念　ナニ、寺町の髪結床へ行きやァしめえし、勿體ねえも凄まじい。間抜け講中め。

講甲　この生臭坊主め。講中に向つて間抜けと吐かしたな。

西念　云つたら、どうした。

講乙　ふてえ坊主だ。住持の所へ引摺つて行かにやァならねえ。

講甲　サァ〳〵、あゆびやァがれ〳〵。

ト兩人にて西念を引摺り出す。

西念　うぬらは、この名僧を打ちやァがつたな。

二人　やかましい。うしやアがれ。

ト茶屋の男、捨ぜりふにて留める。西念、無性に惡態をつく。講中これを捕へ、袈裟法衣、頭巾は舞臺へ置いたまゝ、捨ぜりふにて掴み合ひながら下座へ入る。

はぎ　ヤレ〳〵、とんだ氣まぐれな坊さんだ。今のごてつきに錢を取りそくなつた。いま〳〵しい。間の惡い事だ。

ト双盤になり、太郎助、飛脚の拵らへにて出てくる。下座より赤羽屋五郎作、町人の旅形にて、供男に箱入りの刀、兩掛けの荷を擔がせ出て、兩人舞臺にて摺れちがひ、五郎作は向うへ行きかける。太郎助、荷物の札を見て

太郎　モシ〳〵、少しお待ちなされて下さりませ。

五郎　私しでござりますか。

太郎　左樣でござります。お荷物には、遠州濱松宿、赤羽屋五郎作と記しござりまするが、お前樣が

五郎　ハイ、卽ち五郎作でござりまする。して、お前樣は。

太郎　ハイ、私しは三州八つ橋の、左次兵衞の女房、お三と申す者の使ひでござりまするが、さる方より內々申し參りましたは、雷丸と申す短刀が、お前樣のお手に入つたとの事、その御相談を致し

くれよと、金子も少々持參いたしましたて。

五郎　ハテ、それはよい所でお目にかゝりました。その雷丸は京都にて求めまして、それから諸所をめぐり、只今歸り道でござります。して又、金子は、何ほど御持參なされました。

太郎　三十兩持參いたしましたが、して、その刀は。

五郎　即ちこれでござります。

ト箱の中より雷丸の短刀を出して見せる。此うち供の男居眠りゐる。

併しながら、二十兩位ゐでは、この品は手離されませぬ。

ト箱へ入れて、床几の上へ置く。

太郎　して、どの位ゐなら、お賣渡しなされまするな。

五郎　京都にて六十兩の抵當に取りました品、隨分値賣りも出來さうな、代物ではござりますれど、元金ならば上げませう。

太郎　成る程、左樣に仰しやる品、兎やかうも申されますまい。殊に、女の身で、わざ／＼私しを賴み飛脚に立てます位ゐの譯。こりや隨分御相談が出來さうな譯でござりまする。

ト此うちおはぎ、件の短刀をソッと取出し、駕籠の上に附きし額に打ってある白刃と摺り替へ、素知

らぬ顔をしてゐる。兩人これに心附かず

五郎　兎も角もお話し致しませうが、爰は道中、幸ひあの茶屋で

太郎　左樣いたしませう。

ト兩人、供を連れて茶見世へ入る。おはぎ、跡見送り

はぎ　今の話しの樣子では、大金になる代物。こいつはまんが直つて來たわえ。

トこの時駕籠舁き二人、出て來り

駕甲　これは〳〵、大きに手間どりました。サア〳〵、急いでやらう。

ト駕籠を舁上げ、行きにかゝる。おはぎ、悩りして

はぎ　コレ〳〵、その額はちつと

ト結へし額へ手を掛ける。

駕甲　エヽ、乞食め、何をしやアがる。

トおはぎを突倒し、駕籠は一散に下座へ入る。おはぎ、起きあがり

はぎ　オヽイ〳〵。その駕籠待つてくれ〳〵。

ト下座へ行きさうにする。與之助、同じくおはぎに附添ひゆく。

エヽ、邪魔な小僧だ。ちつとの内待つてゐろ。

ト地藏堂の中へ與之助を入れて

餘ツほど遲れた。ドレ一走り。オヽイ〳〵。

ト駕籠を呼びながら下座へ入る。馬士唄になり、向うより鶉權兵衞、雲助の形にて、馬を曳き、この馬に小萬、京の藝子の形にて乘り、出て來り

權兵 コレ、小萬さん、向うがもう關の地藏樣だ。お開帳を拜んで行きなさい。

小萬 コレイナア、お前、わたしの名を、どうして知つてゐなんすえ。

權兵 とぼけなさんな。京都祇園町の藝子、關の家の小萬さん、街道まで聞えたお前。わしも二三度京へ通しに行つた時、餘所ながら見覺えて知つてゐやすよ。

ト小萬これを知らず、心遣ひの思ひ入れ。權兵衞、此うち舞臺へ來り、下手へ馬を引据ゑ、小萬を抱きおろして

ソレ、與作に早く逢はれるやうに、地藏樣でも拜みなせえ。

小萬 ほんにマア不思議な。わたしが名といひ、與作さんの事まで

權兵 知らなくつてどうするものか。與作は矢ツ張りおれが仲間の馬士、常住お前の話しをして、のろ

けて居るのよ。

小萬　そんなら與作さんは、この近所にゐなさんすか。

權兵　ゐるとも〳〵。お前の乘つて來た馬は與作が馬だ。おれが借りて出たのよ。

小萬　さうでござんすかいな。ほんに、丁度好いお方に。コレイナア、お前、どうぞ與作さんに

權兵　サア、逢はせる事は造作もないが、お前はどういふ始末で、一人爰まで來たのだ。

小萬　サア、わたしはお前、あの與作さんが、石井の家來で、兵助さんといつた時分、ふと云ひ交して一度が二度、たび重なりし遊所通ひ。それゆゑお主の御勘當。今は與作と名を改め、野末の駒を命の手綱と、文の便りに、聞いた時のその悲しさ。又その中へ搗てゝ加へて、由留木の御家中、赤堀源吾といふ人が、わたしを身請けするというて、身代の手附け六十兩、親方さんへ渡したゆゑ、それが苦になり、わたしは病氣。其うちに源吾さんも、お屋敷を勘當との事。それからわしも祇園町を、駈落ちして與作さんの、行くへを尋ねに、はる〴〵と、知らぬ旅路の憂き苦勞も、わたしゆゑ勘當の、身とならしやんした與作さんゆゑ、逢うて段々便りにと、それでわたしは

權兵　駈落ちして來たとは、心中者だの。

　　トこの時、地藏堂の中より與之助出て

與之　先乘りさん、お山さん、やてかんせ、抛らんせ。

トさゝらを摺り、踊る。小萬、見て

小萬　ほんに可愛らしい子ぢやないかいなア。

權兵　ナニ、こりやァ相の山の乞食の子サ。

小萬　乞食の子にしては、人柄の好い顔だち。可哀さうな事でござんすなア。

トこの時、下座よりおはぎ、出て來り

はぎ　ヤレ〳〵、早い駕籠舁きめ。皆暮に見失ひ、たうとう無駄骨。いま〳〵しい。

ト與之助を見て

コレ〳〵この餓鬼はなぜ爰へ出てゐる。迷子になつたら、どうせうと思ふ。よく世話を燒かせる餓鬼だぞ。

トこづき廻す。小萬、側へ寄り

小萬　アヽコレ、可哀さうに、其やうにせずとも。

はぎ　ハイ〳〵。イエモウ、お構ひなされまするな。大の蟲持ちで、メソ〳〵泣いてばかり。いつそ、くたばつてしまへばようござります。

小萬　ても、むごたらしい、お前の子ぢやないかいなア。

はぎ　イエ〳〵、わたしの子なら仕方もござりませぬが、こりやァ與作といふ人の所から、預かつた餓鬼で、まさか息のあるうちは、乾干にもされぬもの。それにマア、里扶持といつちやア、一文も寄越さず。わたしも元からの乞食でもなけれど、食ふ事がならぬゆゑ、せう事なしに乞食をするのサ。これもみんなこの餓鬼ゆゑ、ほんに〳〵、こんな埋らぬ、厄介者はござりやせんのサ。

權兵　そんならその子は、與作が子か。それぢやァ矢ッ張りお前の腹から

小萬　イエ〳〵。これを思へば、常々與作さんの話し。大江家のお姫樣、相手の知れぬ不義をして、身持ちになりしを、左内さまの計らひにて、人目を忍び平産あり、與作さんが預かつて、人知れぬ所へ、里に遣つたといふ事を話しなさんしたが、慥かにお名は與之助さま。

はぎ　ほんに違ひはござりませぬ。よくお前、云ひ立てを御存じだね。

權兵　知つてゐる筈よ。與作と云ひ交した、祇園町の藝子、小萬さんだものを。

はぎ　オヤ〳〵、さうかえ。それは、マア〳〵、よいお方にお目にかゝつた。……サア〳〵、お前、與作さんと縁ある人なら、この子を返します〳〵。

ト與之助を小萬へ突附けて

ヤレ〳〵、これで厄介を、拂つた〳〵。

小萬　モシ〳〵、與作さんから預かつたこの子を、わたしに返すとは、そんなら與作さんは

はぎ　里扶持の工面が出來ぬから、この頃は行くへ知れず。

小萬　エヽ。

はぎ　噂を聞けば、遠州小夜の中山の近所に、侘び住居との事。わたしもそこまで尋ねて行かうと思うても、路銀も無し。お前も亦この子を引取るが迷惑なら、里扶持の勘定しておくれ。それもならずば、この餓鬼を、男の子でも大事ない、宮川町か、紀州街道の、三日市へでも叩き賣つて、金にせにやァならぬ。結構なお山さん、よもや里扶持の勘定せざァなるまいがな。

小萬　サア、其お子を引取つても、女子の一人、又これから遠い旅路。

ト思ひ入れあつて頭の櫛を拔き

コレ、女中さん。其お子の里扶持とやら、どの位る上げてよいやら知れねども、與作さんの行くへを尋ねてから、此方へ引取るそれまでのうち。これを賣りなとどうなとして、少しの間其お子の、御介抱をお頼み申します。

トおはぎ、この櫛を取つて見て

はぎ　そんなら里扶持の代りに、この鼈甲の櫛をわたしにおくれかえ。

小萬　不足ではあらうが、どうぞそれで。

はぎ　ほんまにおくれかえ。オヤ／＼、結構な、投賣りにしても十四五兩が物は……ほんに／＼、都の藝子さんだけ、氣前のいゝあなた。イヤモウ、あなた、お世話いたさなくつてなんと致しませう。わたしもこれから足を洗つて、遠州へ尋ねて參りませう。モシ／＼、あなた、與作さんにお逢ひなされても、乞食をしてゐた事は、これ／＼でござりますぞえ。どうぞ沙汰無しにお頼み申します。

小萬　そんならそれで得心かえ。

はぎ　得心の段かいな。これからすぐに足洗ひの相談。わたしはこれでお別れ申しませう。ハイ／＼、大きに有り難うござります。よいお方にお目にかゝりました。ホヽヽヽヽ。サア／＼、お坊さん、おんぶをなされまし。

ト與之助を脊負ひ

こりやあなた、大きに有り難うござります。これで今の駕籠の額が、ちつとは埋つた。併し、あれも惜しいもの。

小萬　エヽ。

はぎ　ハイ、又お目にかゝりませう。

ト双盤になり、おはぎ、無理に追從云うて下座へ入る。權兵衛、跡見送り

權兵　エヽ、よくしやべる女だ。あゝ現金にはならぬものだ。ハヽヽヽ、サア小萬さん、これからちつとも早く。

小萬　イエモウ、お前とは、えい行くまいわいなァ。

權兵　そりや、なぜ。

小萬　與作さんは、疾に遠州とやらへ行つてござんすげな。

權兵　ヤ。

小萬　それに馬まで貸したなぞと、わたしを騙して、こりや外へ。

權兵　成る程、さう推量したら隱すも無駄。おぬしを與作に逢はせると、騙して、正は、赤堀源吾どのに渡す工面よ。

小萬　して、こなさんは源吾どのに。

權兵　ゆかりかゝりは無けれども、おれの主人は大江の家中、本庄助太夫さま、源吾どのゝ兄、官太夫さ

まと心を合せ、大江由留木の兩家を奪はんと、密事まで段々合ふ程の仲。それを氣取つて同家中、白井兵左衞門が悴權八、主人助太夫さまを討つて立退く。それゆゑおれも、この通りの浪人。主人同士の緣引きにて、源吾どのゝ世話になるうち、又ぞろや源吾どのも浪人。なれども、身請けの濟んだおぬしを、外へ、うまく取られちやァ、六十兩の埋め場も無し、浪人した源吾どのゝ武士が立たぬ。丁度逢つたが物怪の幸ひ、おぬしは是非とも源吾どのへ。

小萬　てつきり、こんな事であらうと思うたわいな。わたしも一旦親方の所を、駈落ちして出たからは元より覺悟の命一つ。與作さんに逢はぬうちは、なんぼ果敢ない女子でも、さう自由にはならぬわいなア。

權兵　自由にならうがなるまいが、是非とも連れて行かにやァならねえ。

ト小萬の手を取る。

小萬　わたしや否ぢやわいなア。

ト振り切る。

權兵　一緒に步べ。

小萬　エヽ、知らぬわいなア。

ト双盤になり、權兵衞、小萬を追ひ廻す。小萬、砂を打ちつけ、下座へ逃げて入る。權兵衞、眼へ砂の入りし思ひ入れにて

權兵　うぬ、逃がしてよいものか。

ト同じく下座へ入る。馬士唄になり、向うより長右衞門、裸にて、ブラ〳〵出て來り

長右　アヽ、思へば人の身の上ほど、解らぬものはない。誰れあらう、北村屋八兵衞、北八々々と人も知つた町人が、石部の宿で泥坊にあひ、裸で道中しようとは思はなんだ。なれども腹がへつた。向うは關の地藏、マア〳〵、あすこへ行つて

ト舞臺へ來り、以前の袈裟法衣を見附け

なんだ袈裟法衣……幸ひこれを着て

ト法衣を着て袈裟を掛け

法衣で形は出來たれど、奴頭はおつなもの。

トあたりを見廻し

あるワ〳〵。

ト地藏の冠りし茜木綿の頭巾を取つて

これを冠つて、これから何ぞ食物を……あるワ〳〵、芋の丸揚げとは忝い。

ト御盛り物の揚げ芋を取つて無性に食ふ。

殘り一本は中食に、何ぞ包む物を……あるぞ〳〵、肝腎の一卷は取られたれど、袱紗は殘つてある。これに包んで。

ト袱紗へ芋を包む。バタ〳〵と人音するゆゑ、長右衞門うろたへ、地藏の錫杖を持ち、正面に向き、地藏になる。下座より小萬出て來り、長右衞門の後へ隱れる。直ぐに權兵衞出て來り、あちこち探し

權兵　ハテ、めんえう。たつた今、爰へ逃げて來た小萬が、見えぬといふは不思議だ。外に人は無し、地藏がゐても役には立たず。

長右　默れ。

ト大きな聲をする。權兵衞、悄りして

權兵　エヽ。

ト不思議さうに見て

この地藏は生きてゐるやうだが、併し、桐山に似てゐるやうでもあり、もしや物を云ひはせぬか。

ト少しゾッとしたる思ひ入れ。長右衞門、仕濟まし顏にて

長右　善哉々々。汝元來慾心増長、それを見出さん爲に、假に女と現はれ、汝が心を引き見しなり。
權兵　ヤア、。
長右　善哉々々。あはよくばあの女を、賣らんとなしたる、その罪少なからず、よつて人界地獄へ連れ行くなり。
權兵　イヤア、。
長右　善哉々々。女の事は思ひ切り、おのれが面を、よく〱淨玻璃の鏡へ映して見ろ。女にはくひやひ無し。まだ〱、一昨年死んだおのれの女房から、言傳があつた。
權兵　ナニ、女房から言傳がありましたか。なんと申しました。
長右　善哉々々。汝が女房の言傳には、婆娑で地獄をしたゆゑに、あの世へ行つても地獄へ落ちる。
權兵　そんなら地獄に居りますか。悲しや〱。
長右　善哉々々。なれども地藏が情にて、極樂へ導きたり。その女房が申すには、極樂も大入りにて、土間も棧敷も賣切れて、蓮の臺には居所が無いから、割込み半座を分けて待つてゐるから、早う來いと。
權兵　ナニ、待つてゐるから早う來いと。

ト思案して

イヤア、、滅多には行かれぬ。まだ娑婆に仕残した用があると云つて下さりませ。

ト長右衛門を見て

どうもをかしい。桐山に正の地藏様だ。

長右　善哉〳〵。

ト紛らす。

權兵　なんだかおつだ。

ト寄らうとする。此うち西念、講中、茶屋仕出し、大勢出て來り

西念　貴樣はなんだ。

權兵　どうもしねえが、をかしな地藏。

西念　ナニ、地藏がをかしい。この馬士は地藏を馬鹿にする。地藏が馬鹿にされちやア、この堂守りが濟まねえぞ。

長右　さうとも〳〵。其やうな奴をこの宿へ置くと、宿内の爲にならぬ。早く宿外れから追ひ出してしまへ。追ひ出さぬと、わいらまで卷添へに地獄へやるぞ。

皆々　イヤアヽ。
長右　きり〳〵送れ。
西念　脊に腹は代へられぬ。
皆々　きり〳〵行かつしやい。
權兵　とんだ目にあふものだ。
皆々　サア、來さつしやい。

ト双盤になり、皆々權兵衛を連れ、向うへ入る。

長右　大べら坊め。サア〳〵、女中、もう氣遣ひない。

ト小萬を前へ出す。

小萬　わたしや、ほんまの地藏樣かと思うてゐたわいな。危ふい所をあなたのお庇で
長右　嬉しいと思ふなら、なんぞ禮を
小萬　サア、其お禮は。
長右　其お禮には

ト抱きつくを、恟りして突きのけ、

小萬　アレ、惡い事を。

長右　ナニ、惡い事をするものだ。

ト小萬を無理に抱かうとする。この時、向うより慶政、以前の形にて、スタ〳〵出て來て、この中へ入り、ごつちやになる。小萬、下座へ逃げて入る。長右衞門、慶政を見て

長右　うぬは泥坊だな。うぬが着てるのはおれの着物だ。此方へ寄越しやアがれ〳〵。

慶政　イヤ〳〵、着物より大切な、おれが一卷、此方へ返せ。

ト武者振り附くを、振り放し

長右　うぬ、泥坊め。

ト兩人立廻り、をかしみ、いろ〳〵あつて、よろしく道具變る。

これにて舞臺一面、黒幕を振り落す、下手に殘りし開帳札變つて、龜山城下の下馬札になり、時の鐘、馬士唄になり、向うより源吾、白の行衣、金毘羅參りの神酒箱を脊負ひ、大小にて出て來る。下座より半次郎、同じく白の行衣、脚絆、大小にて、以前の額を脊負ひ、秋葉參りの形にて出て來り、兩人、心づかぬ思ひ入れにて

源吾　お旅人は、金毘羅へ御下向かな。
半次　イヤ〳〵、拙者は遠州秋葉山へ参詣の者でござる。おてまへ様は、金毘羅御参詣かな。
源吾　左様でござる、餘程夜更けに立ちましたが。
半次　イヤ〳〵、もう夜の明けるに間もござるまい。アレ〳〵、東が明るくなりました。
源吾　イカサマ。この様子では、今日も天氣でござらう。

ト鶏の聲する。城の時の太鼓。これをキツカケに、黒幕を切つて落す、向う一面、龜山の城の遠見。爰にて、初めて兩人、顏を見合せし心にて

半次　ヤ、、其方は赤堀源吾ならずや。
源吾　さいふは石井半次郎か。
半次　ハテ、よい所で逢うたなア。

トきつとなつて

いかに、源吾。若殿馬之助と申し合せ、わが父石井左内を討つたる事、覺えやあらん。この所にて出合ひしは、汝が不運、某が、優曇華の花。最早叶はぬ、尋常に、親の敵と勝負せよ。
源吾　小癪な丁稚め。いかにも左内は、身が手にかけた。汝も共に返り討ちだぞ。覺悟ひろげ。

半次　無益の廣言。恨みの一太刀。イザ

源吾　イザ

二人　イザ〳〵〳〵。

ト鳴り物になり、兩人、脊負ひし品を取除け、拔き合せ立廻り。此うち、長右衛門、慶政、駈けて出て來り

長右　着物を返せ〳〵。

慶政　一卷を渡せ〳〵。

ト立廻りの中へ入り、あちこち突き廻され。慶政は落ちたる白刃の附きし額を拾ひ、一散に下座へ逃げて入る。長右衛門もうろたへて

長右　ヤア、拔いた〳〵。喧嘩だ〳〵。

ト喚きながら、下座へ入ろ。兩人は構はず立廻り、この時、下座より、菖蒲革の侍ひ大勢、棒を持ち出て來り

侍ひ　ヤア、何者なれば御城下にて、刃傷に及ぶ不屆き者、仔細を申せ。たつて鎭まらずば、踏み附けて、召捕れ〳〵。

ト各々わめく。

半次　ヤレ、聊爾あるな、方々、某ことは由留木の藩中、石井左内が倅、同苗半次郎、これなる者に父を討たれ、お上へ願ひし敵討ち。即ち御免許の墨附も、所持なし罷りある。

ト懐中より状を出して侍ひに渡す。これを取り、改めて

侍ひ　ナニサマ、かゝる墨附ある上は、相違なし。敵討ちとあれば、武門の義理、直さま我れ〳〵検分の役目、心置きなく、勝負あれ。

半次　忝き御芳志、この場に於て

源吾　何を小癪な。

トまた立廻りよろしくあつて、トゞ半次郎、踏み込んで源吾を切り倒し

半次　親の敵、思ひ知つたか。

ト止めを刺す。

皆々　お手柄〳〵。

トこの前へ浅黄幕を振り落す。

右の下馬札。庄野宿の棒杭に變る。下手より段々と松の並木を引出す。馬士唄になり、向うより慶政、件の額ばかりを抱へて出てくろ。長右衞門も同じく追ひかけ出て

長右　ヤレ〳〵、足の早い野郎だ。着物を返せ〳〵。

慶政　イヤ、着物より一卷を寄越せ。おれも路銀が一文も無さに、龜山で拾つた納め太刀、これなと賣つて路銀にと思ふうち、あんまり駈けたので、刀の身は、何處かへ振り落して、鞘ばかり。いまいましい。

長右　そんな事より着物を返せ。

慶政　エヽ、しつこい男だ。

ト一散に東の歩みへ駈け出す。長右衞門同じく追ひ駈けて入る。この時雷鳴る。東の揚げ幕より權兵衞、刀の身を持ち、足を手拭にて結へ、跛を引きながら出て來り

權兵　アヽ、小萬めを源吾さまに渡して、金にしようと思ふうち、關の宿でとんだ奴に交ぜツかへされたうとう小萬をつん逃がしてしまうた。方々尋ねるうち、龜山の城下で源吾どのは、石井半次郎に討たれたとの事。その近邊をまごつき歩くうち、夜明け方に踏んがけたこの刃物で、思はぬ怪我。おれが足を切ると、忽ち雷が鳴り出したが、此奴は慥か噂に聞く、雷丸とやらぢやアないか

知らん。何にしろ、持つてゐたら、何ぞの役に。これから江戸へ行つて、旦那を殺した權八を、探し出して、こいつも褒美。うまい〳〵。

ト舞臺へくる。禪のツトメになり、向うより灘六、葛籠を脊負ひ、駈けて出る。跡より逸平、追ひ駈け出て來り、直ぐに舞臺へ來て

逸平　又ぞろ葛籠を目がける曲者。

灘六　一旦目がけた重の井姫、生贄をやりそくなつて、やう〳〵見つけたこの葛籠。此方へ渡せ。

逸平　小癪な。うぬらに渡さうか。

ト立廻りのうち、灘六、權兵衛を突きのけ、下座へ逃げて入る。逸平同じく權兵衛を突きのけ、下座へ追つて入る。權兵衛、起きあがり

權兵　アヽ、痛い〳〵。狂人見たやうな奴等だ。アヽ、こいつは駕籠にでも乘らずばなるまい。

ト此やうな事を云ひながら下座へ入る。これにて舞臺の道具、段々上の方へ引く。

小高き土手を引出す。爰に土竈を据ゑ、菓子の箱など並べ、茶店の臺に腰かけ、右の掛け茶屋を引出す。庄野宿の棒杭變つて、いゝ、石藥師と書きし石塔になる。東のあゆみより慶政、長右衞門駈けて出て來

り、互ひに疲れたる體にて

慶政　アヽ、せつない〳〵。

長右　さても〳〵、息の達者な男だ。おれは息が切れて、どうもならない。

慶政　おれだといつて、咽喉がひッつくやうだ。なんと、物は相談だが、ちつと靜かに駈けようではないか。

長右　マア、何にしろ、水でも湯でも、一口飲まねば、堪へられぬ。幸ひ向うに茶店がある。ちつと休息してから、また駈けようではないか。

慶政　貴様、錢があるか。

長右　錢がある位ゐなら、貴様に相談はかけぬ。其方の懐ろを當てサ。

慶政　ハテ、よく似た事もあるものだ。おれは一文もないが、向うは親仁だから、飲み逃げとやらかさう。

長右　どうせ、駈け次手だから、また駈け出すがよい。

ト兩人、舞臺へ來り

慶政　オイ〳〵、父さん、茶をぬるくして下さい。

親仁　ハイ〳〵。

ト茶を汲んで出す。兩人、無性に替へて飲む。

長右　アヽ、いゝ心持ちだ。時に、父さん、關から爰までは何里ある。

親仁　ハイ、七里半ござります。大分お早く入らつしやいました。

慶政　早い筈だ、七里半駈け通しだものを。息の切れるも尤もだ。

長右　イヤ、七里半で思ひ出した。あんまり駈けたので腹がへつた。斯ういふ時に有り難い、この一卷を戴くと、直ぐに腹が一杯になる。

ト件の袱紗に包みし丸揚げを出し、戴いてムシヤ〳〵食ふ。

慶政　コレ〳〵。この男は、大切な一卷を、なぜ、ムシヤ〳〵食ふ。

長右　その一卷は石部の宿で、泥坊に取られてしまつた。これは關の地藏の供物、薩摩芋の丸揚げだ。

慶政　そんなら一卷は、あの夜の泥坊めに。……それは仕方もないが、元おれが一卷だから、その代りの薩摩、おれに半分食はせないか。

長右　どうして、一卷より大切な命綱、半分やられるものか。

慶政　そんなら四半分でもよい。

長右　旅は道連れ、仕方がない。

ト芋を少し分けてやる。

慶政　あまり吝いくれやうだなア。

長右　時に、どうせ京へは歸られず、江戸へ行くにも、直素直に、この態では行かれまい。

慶政　とてもの事に、今までの通り、駈ける張合ひで行かうではないか。

長右　よからう〱。併し、互ひに名が知れなくてはならぬ。貴様の名は

慶政　彌次郎兵衞といひます。して、こなたは。

長右　わしは北村屋八兵衞。北八々々といひます。

慶政　そんならこれから、仲よく二人で

長右　東海道を駈け通し。

慶政　北八どの。

長右　彌次郎兵衞どの。

慶政　イザ、お駈けなされい。

長右　まづ〱、お先へ。

慶政　然らば駈けますぞや。

長右　サア、御遠慮なく。

慶政　ソリヤ、駈けます。

長右　續いて駈けます。

ト兩人、一散に駈けて下座へ入る。

親仁　あの手合ひは茶代も置かず、駈けて行つたが、こりやおれも追ひ駈けずばなるまい。茶代を寄越せ、茶代を寄越せ。

ト同じく追ひ駈けて入る。これにて大拍子になり、舞臺の道具殘らず引いて取る。爰にて正面の淺黄幕切つて落す。

本舞臺六間、一面の親船の體、苫を掛けてあり。うしろ浪幕、舞臺前浪手摺り。上の方に少し小高き岩組み、この上に大きなる蛤あり、四日市、船の道具。右の親船、舞臺前まで押し出す。浪の音にて道具納まる。

大薩摩〽實に蒼海の白浪旋風にばふして中天に船を浮べ、又は泥梨へ分け入るよと、いゝ、けんきてんど

う常にして、慣れたる船は桑名屋と、名に押し切るぞ勇ましき。

ト淨瑠璃切れる。ドロ〳〵になり、件の蛤、パックリ口を明き、中より白氣立上る。これをキッカケに正面の船の苫を刎ね除ける。この内に桑名屋德藏、（實は自然生三吉の丹波與八郎）廣袖の上へ搔卷を引ッかけ、大百日の鬘、大煙管を持ち、海賊の拵らへにて、右の白氣に目を附けてゐる。側に信濃屋お半、慄へゐる。德藏、キッと思ひ入れあつて

德藏　傳へ聞く、勢州名古の浦には、春夏の間佳暖の日に、必ず海上に蜃氣立つといふ。諺に、天照神、尾陽の熱田へ神幸あるゆゑ。その形、凰輿行幸、又、諸侯行列の體、或ひは樓閣宮殿の形、鮮やかに現はれて、漁師往々見る事あり。忽ち須臾の間に消ゆるとある、噂に聞けど見るは初めて案ずるに、只潮水の氣、陽精にやあらん。乘じて昇るこの白氣……陽炎の類にやあらん。ハテ、奇異なる珍事を、見るものぢやなア。

ト これにて蛤、白氣もろとも消えて、風納まる。

はん　ほんに、今のは何でござんすぞいなア。

德藏　あれは俗にいふ蜃氣樓。蛤の機關よ。

はん　ほんに不思議な。

徳藏　ハテ、海上にはあれに限らず、いろ〳〵の事がある。さのみ珍らしくも無いてや。

トこの時、苫の後より崖藏、九郎、雁八、ぐれ八、盗人の手下にて出て

四人　お頭、どうやら風も直りました。

徳藏　さればサ。今朝から霧の晴れぬを見れば、まだ〳〵後には

はん　エヽ。

徳藏　何も怖い事は無いわサ。……コレ、皆の者、安治川も下田も沖には見えぬが

崖藏　今日はまだ漁船ばかりでごんす。

徳藏　ハテ、なんぞ運送の渡海がありさうなものだ。それといふのも、この頃の、毎日の大暴れゆゑ、

九郎　左やうサ。この子を船へ乘せた日から、白馬ばかりサ。

徳藏　それぢやァ、何ぞの祟りでも。

はん　わたしが肌には水難のお守り。まだその上に、石部で供の人に貰つた、お守りがござんすばかり。それをしつかり肌に附け、拜んでゐれど此やうに、浪が荒うて、怖うて〳〵。

徳藏　ハテ、ついぞ乘りつけぬ沖中、怖いと思ふも尤もだが、おれさへゐれば氣遣ひない。しつかりおれに、とらまつてゐやれ〳〵。

ト お牛を引寄せる。

崖藏　モシ〳〵、頭、お前また、新造の舟玉樣だと思つて、信心が過ぎますぜ。

ぐれ　それよ。板一枚下は地獄、板子の上は極樂。

九郎　手入らず者を往生させたは

雁八　日本一の

四人　色男さま〳〵。

德藏　エヽ、嬲てるな〳〵。船乘りは一日暮らし。明日を賴まぬ商賣ゆゑ、パツ〳〵と遣ひ捨て、榮耀をするのが一日の得。とりわけて、惡い風波を乘ッ切るが、名代となつた桑名屋德藏、ちつとは氣休め。大目に見やれ。

トこの時、浪の音烈しく、下手より小舟一艘、この中に葛籠を乘せ、灘六、櫓を押し立つて出てくる
皆々見て

皆々　灘六、いゝ仕事か〳〵。

灘六　いゝとも〳〵。追分の繩手で、引ッ浚つたこの葛籠。

ト皆々上より繩梯子を下げる。灘六、葛籠を抱へ、正面の船へ上がり

中には慥かお頭の、尋ねる女が。

徳藏　すりや、この内に。

ト浪の音になり、逸平、拔き身を咬へ、錨綱に取附き、浪を潜つてくる心にて浮き上り、錨綱に傳はり上へ上がり

逸平　大切なるこの葛籠、やはか、うぬらに。

ト無二無三に切りまくり、德藏に切つてかゝる。德藏、キツと押へて

徳藏　いらざる奴がほてゝんがう。皆の者、疊んでしまへ。

皆々　合點だ。

ト身拵らへする。

逸平　小癪なる海賊めら、この葛籠の中には、大切なる重の井姫、隱れ在すを盜人めら、金目の荷物と心得て、奪ひ取るのは益無き事。それとも、たつてこの葛籠へ、手をさツかければ、死物狂ひ、何百人でも切捨てだワ。

徳藏　ムウ。すりや、この内には、いよ〳〵、姫が。

逸平　丹波與惣兵衞さまが腹變りの忰、與八郎さまへ戀慕にて家出の姫君、御先途を見屆けて、與八郎

さまを尋ね出だし、姫君手渡しするまでは、たとへ命は落すとも、葛籠は滅多に、渡さぬ〳〵。

徳藏　ハテ、健氣なる下部が詞。コリヤ、その與惣兵衛が悴與八郎といふは、斯くいふ徳藏が實名だワ

逸平　ハテ、心得ぬその詞。それには慥かな。

徳藏　證據は姫に逢ひさへすれば。

逸平　すりや、この場にて。

ト葛籠に手を掛ける。

徳藏　アヽイヤ。

トあたりへ思ひ入れあつて

この場で明けては……爰へ來れば對面は、ゆるりと後で。由留木家へ嫁したる姫、元は大江の息女にて、我れに貞女を立てんがため、石山寺にて剃髪の、折に幸ひめぐり逢ひ、以前一度の契りにさへ、子まで儲けし結緣ゆゑ、直さま連れて立退く道、草津の對路の玉川にて、追手に出合ひ追ひ散らさんと思ふうち、見失うたる重の井姫。

逸平　ムウ。成る程、その詞が何よりの證據、さすれば與八郎さまであつたよなア。下郎は卽ち石井左内が下部。御主人樣にも横死なされ、それと申すも赤堀が仕業にて、お家も散り〳〵、若旦那半

次郎さまも、別れ／＼に立退く道、計らずも草津にて、姫君にお目にかゝり、葛籠に隠してお供なし、石部の宿にて又ぞろや、鈴鹿の鬼神の贄と僞はり、姫君を引出す企み。跡を慕うて行きしところ、折から中野藤助、由井の民部と改名して武者修行、即ち彼れに行き合せ、姫君を救ひ、その身は姫の棺に忍び、實否を糺すとあるゆゑに、姫君を葛籠に隠し、その後勢州龜山にて、敵源吾に出ツくわし、跡追ひかけて參りしところ、これなる男が又ぞろや、葛籠を目がけ、渡せとあるゆゑ爭ふうち、源吾めは見失ひ、敵を捨てゝ、たうとう爰まで、爭ひ來りしこの姫君。然るに幸ひこの所で、思ひがけなくあなたに面會いたす上は、姫君渡せば奴が安堵、この上は丹波、石井の兩家の再興、寶の行くへ詮議が肝要。これと申すも佞人の官太夫、戀の意趣にて草を分け、あなたを詮議。御油斷あるな、與八郎さま。

德藏　オヽサ、われも疾より官太夫が、家を奪はん結構とは知つたるなれど、二品の寶出ぬ時は、家の繼ぎ目も叶はぬゆゑ、身を山海に横行なし、強盗の首領となつて、寶の詮議眞最中。さるが中にも、親人といひ、また伯父まで、人手に、やみ／＼討たるゝとは、よくも武運に盡きたるか。思へば思へば、口惜しい。

ト向うを見て、キツと思ひ入れ。この時、一面に暗くなり、浪の音烈しく、船段々躍りあがる。

皆々　ヤア、早手だ〳〵。

ト騷ぐ。この時、錨の綱ふッつり切れて、メリ〳〵と舵柄の折れる音する。

皆々　サア〳〵、大變。これぢやァ帆車も切らずばなるまい。

ト立ち騷ぐ。船はいよ〳〵搖れて漂ふ。

はん　どうぞ助かる仕樣は無いかいなう。

ト轉びながら徳藏に取附き、逸平は葛籠を抱へ、徳藏はお半を小脇に抱へ、舳へ立より、浪を見て、

キット思ひ入れ。

徳藏　海上の面霧深くして、浪の水悉く濁り、海月、飛び魚の浮み上るは、早手にあらで、押浪、怪風あつていかなる大船をも覆す、多くは西北の海に起ると聞きつるが、今朝より霧深く、海月數多浮み、水面の濁りしは、この船、事急に及んだるか。懸かるべき港もなく、錨の綱まで切れたれば、所詮助かる道もなし。

皆々　ヤア〳〵〳〵。

はん　こりやマアどうせう、どうせうぞいなア。

ト徳藏、お半をキッと見て

徳藏　その昔、景行天皇の王子、日本武尊、東夷征伐の砌り、まツこの如く怪風にて、御座船の鷁頭鷁首も破損して、既に危ふく見えし折から、供し給ひし御妃、橘姫の、尊に向つて仰せあるは、我れ身を以て海神へ生贄に供へ、風波を鎭め、御船を守護し奉らんと、誓つて海底へ飛入り給ふ龍神感應なしけるにや、忽ち海上穩かに、やす／＼港へ着く。皇子の御感斜めならず、戀情のあまり吾妻戀しと嘆き給ふ。文字を其まゝ吾妻と名く。斯かる例しに習はんな、恐れ多くも烏滸なれど……コレお半、よツく聞け。其方を伴ひこの船に、移りし日より浪荒く、既に今日只今に極まつたる多勢の命、俗說には似たれども、船中に海神の好む者、乘り合はする時は、これを海底へ沈めずば、風波治まらずと云ひ傳ふ。其方も賤しき女なれど、契りを籠めし結緣にて、某を大切の、夫と思はゞ、今もいふ、橘姫の昔に習ひ、命を捨てよ、コレ、お半。

はん　成る程、心得ました。殊に、あなたは今聞けば、重の非さまと夫婦の契約、お子まで儲けし仲と聞く。素性賤しきわたしこそ、末は捨てられ悋氣の炎。女の操を捨てんより、この場の難儀のお役に立つて、死ぬるが本望。

　トお半、思ひ入れあつてキツとなる。

徳藏　情も薄き兒女にまで、命捨てさせ、本意にあらねど、紛失の寶、二つには、親の敵を討つまでは

大切なる身が命。大の蟲より小の蟲。……コリヤ、其方が命は、與八郎が貰うたぞ。長い未來は一蓮托生。これを冥土の土産にして

はん　エヽ、嬉しうござんす。其お詞を聞く上は、なんの命を惜みませう。

ト舳へツカ〳〵と行く。

逸平　コレ、待つた。こなたに命捨てさせて、どう姫君を。

ト留めるを振り切り

はん　とてもこの身は賤しき女子。せめて多くの命の代り、身は拙くとも女の念力、橘姫に劣りはせじいかに海神、わが一命を贄となし、風波を鎭め、この船を、事なく港へ着かしめ給へ。

逸平　それではどうも。

ト留めるを振り切り、お半、海の中へ飛び込む。水煙りパッと立つ。

德藏　ハテ、年若なれども、健氣な女。

逸平　思へば不便な。

二人　南無阿彌陀佛。

トこれにて浪の音かすめ、船は、だん〳〵と穩かに鎭まる。

皆々　あの娘が飛び込んだので
逸平　神も納受、ましく　てや、
徳藏　風も靜かに。
ト後を見返る。これをキツカケに浪幕を切つて落す。向う打抜き宮の宿、名古屋の城一面に見ゆる。
逸平　今の風波ともろともに、向うに見ゆるは
ありやモウ、宮の
皆々　鄕士の濱でござります。
徳藏　これも女が念力にて、姫に恙も。
灘六　おれが仕事のこの葛籠。
ト葛籠へかゝろ。徳藏、拔討ちにポンと切る。灘六、見事に中返りして、海へ飛び込む。
皆々　これは。
ト徳藏、磁石を見て
徳藏　重舵イ。
トこれを木の頭。白刃を差出す。逸平、手拭にてこれを拭ふ。件の大勢、丸の中に系といふ字の帆を

半分ほどいて揚げる。双方宜しく、キザミにて、拍子幕

あとシャギリ

この幕、有松絞り、鳴海絞りの幕なり。

二幕目

三州池鯉鮒八つ橋村の場
岡崎宿矢矧の橋の場
遠州秋葉山絶頂の場

役名――由井氏部之助實ハ中野藤助。お松妹、お袖。鬼坊主願哲。八つ橋村左次兵衞。伊勢參り、五郎吉。庄屋、彥兵衞。馬子、どぶ六。同、よだれの十。山形屋義兵衞。女非人、生皮のおはぎ。智行上人。八つ橋村のお松。丸子猫石の精。秋葉山の三尺坊。日本駄右衞門實ハ丹波與八郎。

本舞臺、三間の間、正面高足の御殿、欄干附き狐格子。欄間より古簾を掛け、軒に草履草鞋を吊し、よき所に圍爐裏。上の方八つ橋、杜若盛りの體。門口は竹の簀戸、すべて三州池鯉鮒の宿、八つ橋村

往昔業平の住ひし御殿跡。隨分そこれし道具。てんつゝにて幕明く。

ト直ぐに念佛太鼓になり、爰に庄屋彦兵衞、百姓二人、ワヤ〳〵云うてゐる。左次兵衞、やつし親仁の拵らへにて、草鞋作りゐる。

彦兵　コレ〳〵、左次兵衞、其やうに落ちつく事はない。庄屋のわしにばかり口きかせて、おぬしが女房のお三婆アが、三十兩の年貢金のお咎め。その一件は、マア、どうせうと思やるぞいの。

左次　ハテ、そりや庄屋どのが云はいでも、現在の婆めが牢舍した程の事。それといふも、わしが方で尋ねる、雷丸といふ劍、その手附けは三十兩。その金が欲しさに、年寄りの癖に、年貢金を盗みしゆゑ、男ならば水牢、女だけまだしも輕けれど、いま此うちで金は出來ぬ。其うちに婆めが牢死。さすれば彼奴が不仕合せといふもの、どうも仕方がござらぬわいの。

彦兵　ハテ、この人は、よく落ちついた挨拶。一體、この八つ橋村の御殿跡は、昔、在原の業平さまが、杜若がお好きで、この在所へ御殿を拵らへ、歌を詠んだのでござつた。その跡が此やうに、そこね毀れし古館、貴樣が借りて見世商ひ、店賃も寄越さず。マア〳〵、それは跡へ廻して、年貢金の三十兩、早く拵らへて婆どのを、牢から出す工面さつしやいの。他人の事ぢやアない、こなたの女房の科を、助ける心はござらぬかいの。エヽ、無得心な親仁ぢやわいの。

左次　それぢやというて、出來ぬ金が、どう出來るものぢやぞいの。氣の毒に思ふなら、こなさん達、才覺して貸してくれぬかいの。

彦兵　イヤ、どう云へば斯う云ふと、太い人ぢやわい。なう、村の衆。

百一　さうでござる〳〵。よい娘を二人まで持つて、その相談が出來ぬかいの。

左次　娘はあつても、猫ばかり可愛がり、親の事は構はぬわいの。

彦兵　サア〳〵、お婆の納まり、どうさつしやるのだ。

左次　どうとも勝手にさつしやれいの。

彦兵　エヽ、他人向きの挨拶。それでは濟まぬ〳〵。

三人　サア〳〵、返事さつしやれ〳〵。

トわや〳〵云ふ。矢張り件の鳴り物。奥よりお松、女郎あがり、病氣の體、誂らへの猫を抱き出て來り、この中へ入り

まつ　マア〳〵、靜かになさんせいな〳〵。

左次　オヽ、娘のお松か。構やるな。捨てゝ置け〳〵。

彦兵　コレ〳〵、娘御。實の親ではあるまいが、此やうなマア、無法を云ふは。

まつ　サア／＼、何事も聞いてゐやんすわいなア。云ひなさんす通り、父さんは義理あるお方、わたしが爲には實の母さん。ひよんな事にて恐ろしい、今ではお代官の牢舍の身。何を申すも、わたしが身も、この間まで江戸のお邸に御奉公。病氣についてお暇もらひ、歸つて聞けば母さんの難儀何を申すも皆金づく。いづれ、その三十兩は、わたしが今宵曉方までに、拵らへませうほどに、お代官樣へよろしう、お願ひなされて下さんせえ。

ト女郎めいたるセリフよろしくある。

彦兵　成る程、こなたの爲には實の母親、見捨てゝは置かれまい。殊に、あの婆どのが常の話しに、アノわしの娘は、辰の歳、辰の日、辰の刻に生れましたと、わしへの話し、いよ／＼貴樣は。

まつ　アイ、辰の年月揃うて生れたわたしぢやと、母さんが常々案じてござりました、志しのおいとしさ。今度の難儀は、娘のわたしが、この身に引請け

彦兵　そりや孝行ぢや。さうさつしやれ。そんならわしは、こなたの事を、お代官樣へも申し上げ、明日は未明に年貢の金差上げまする、お婆の牢舍を御免の願ひ。コレ、村の衆、さうしませうか。

兩人　さうさつしやりませ／＼。

彦兵　それに附けても、爰の左次兵衛は無得心な男。道理で總領の江戸兵衛は、よい男ぢやに、非人の

交はり。

左次　ヤ、どうしたと。

彦兵　イヤ、娘ッ子　頼みますぞや。……ハテ、無道な親仁ぢや。

ト念佛太鼓になり、三人、わや〳〵云うて向うへかゝる。揚げ幕より山形屋義兵衛、旅形、一本差し判人の拵らへ　三度笠を持ち、跡より伊勢参り五郎吉、裝束二つを風呂敷に包み、これを脊負うて、菅笠をかむり、兩人とも草鞋の切れたる體にて出て來り、摺れちがうて三人は向うへ入る。義兵衛、軒の草鞋を見附け、門口へ來り

義兵　コレ、あの草鞋を二足下さい。

左次　アイ〳〵。十六文でござります。

ト吊せし草鞋を二足取つて渡す。義兵衛、錢をやつて、門口へ菅笠を敷き、草鞋を拵らへにかゝり

義兵　ハテ、爰の内は、立派な内の古くなつたのだな。

五郎　邸跡と見えやすね。

ト合ひ方になり、兩人、草鞋の紐をすげる。内の兩人、思ひ入れあつて

左次　コレ、お松。一體てめえは實の娘でもなく、生れ在所は播州明石、縮織りのあの噂が、おれが所

へ連れ子のお松。聞けば其方に兄もあるげな。心が悪さに行くへも知れず、おれも又、肉身分けた倅の江戸兵衛、身状が悪さに、今では皮剝ぎしをると世間の噂。妹のお袖めは、女の身で僅かな商ひ、わが身も知つての通り、雷丸といふ劍の手附けに渡してやつたは、嚊めが盗みし年貢の金。實の母が難儀を救ふ三十兩、曉方までに。

まつ　アイ、成るたけわたしが働らいて、母さんの難儀を助くる三十兩。もし、その金が出來ぬ時には

左次　其方はどうする心ぢや。

まつ　ハテ、その時は、わたしがこの身を賣つてなりとも。

左次　イカサマ、その身を賣らずば、金になるまい。

トこの話しのうち、義兵衛、門口より草鞋穿き替へながら、お松を、ヂロ〳〵と見てゐたりしが

義兵　アモシ、其やうな相談なら、わしがして進ぜませう。

まつ　ヤ、お前は今の。

義兵　アイ、草鞋買うた旅の者……伊勢參りどの、ちつと待つて下さい。

五郎　心得ました。商賣づくなら。

義兵　御免なされませ。

ト合ひ方になり、兩人、内へ入り

こりやアお初に逢ひましたが、わしはこの海道を、女奉公人の事につき、不斷往來する、山形屋義兵衞といふ判人でござるが、何を隱さう、爰の娘御は、この間も目を附けて置きました。猫を抱いたるその姿は、イヤ、一かどのよい代物。勤め奉公する氣なら、不躾ながら相談して進ぜませう。

ト お松、思ひ入れあつて

まつ　そんならアノ、わたしら親子が、今の話しを聞きなさんして、アノ、お前が抱へてやらうと云はしやんすか。何をいうても、アノ江戶の、お屋敷方に奉公のわたし、勤めとやらの身とならば。

義兵　ハテ、そりやァ吞み込んでする相談。屋敷者とは云はつしやるが、どうやら素人めかぬ其となり。それが此方の望みゆゑ、五十兩なら抱へる心。併し、爰に持ち合せ三十兩、手附けに渡して後金は。

左次　して、こなさんは、どこのお人ぢや。

五郞　ハテ、遠くでもない、岡崎女郞衆はよい女郞衆にならつしやらうに。

ト風呂敷包みをおろし、莨をのむ。

左次　アヽ、お前、連れの衆か。

五郎　アイ、わしはこの海道の伊勢參り、此お人の道連れサ。

ト此うち義兵衞、財布入りの三十兩を出し

義兵　得心なれば、他人交ぜず、親判で三十兩渡しまするワ。

まつ　お前が、いよ〳〵相談をなさんすなら、その金で母さんの、牢舍を助ける三十兩。ちつとも早う
コレ、父さん。

左次　承知ぢや〳〵。……モシ〳〵、お前、この親仁めが印形で

義兵　金を拵らへて渡すまで、三十兩の假受取り、これへ貴樣の

ト矢立の筆にて懷紙へ受取りを認め

ちよつと印形。

左次　心得ました。

ト莨盆の引出しより印形を出し、押す事あつて

そんならこれであの姿が、難儀を救ふ三十兩。

まつ　ちつとも早う、牢舎を助けるその金を

左次　合點ぢや／＼。

ト財布のまゝ懐へ入れる。義兵衞、受取りを懐中する。

五郎　コレ／＼、親仁どの、とてもの事に、わしは貴樣へ頼みがござるて。外でもないが、この間道連れの旅人が、貸しの抵當に預けたこの代物。質に置くとも、賣拂ふとも、どの道金にしたうござるが、その相談を頼みまするて。

ト風呂敷包みを出す。

左次　アヽ、埒もない。盗み物やら知れぬ代物。其やうな世話は、出來ぬわいの／＼。

五郎　ハテ、さうではあらうが、路銀が無うて難儀します。何分貴樣を

左次　エヽ、ならぬといふに。拗こい事を。

ト爭ふはずみに包み解けて、中より裝束十二單衣、パラ／＼落ちる。左次兵衞見て

ヤヽ、こりや十二座の衣裳ぢやないか。

五郎　大方そんなものと見えます。

ト此うちお松取上げ、よく／＼見て

まつ　こりやコレ、高位のお方のお召しなさるゝこの裝束。思ひ廻せばこの里は、その古へ業平さま、暫しも爰に御座ありし、三河の國の八つ橋村。この素性も無きわたしが内へ、此やうな品の來たのも、これも緣でがな。……モシ、御難儀とあるなれば、この品はわたしが預かり、妹が歸らば、あの子に話して、預かる人もあるなれば。

五郎　何分お前頼みます。質屋へ見せて下さいまし。其うち、わしは爰の内に、木賃でなりと泊めてもらはう。

義兵　わしもこれから、昨夜泊つた宿へ行て、證文認め、後金添へて。

左次　羽織引ツ掛け庄屋が方へ、この金持つて娶めが相談。

まつ　ちつとも早う、父さん。

左次　ドリヤ、帶締め直して行かうか。

ト唄になり、左次兵衞金を持つて上手へ、義兵衞は、早足に向うへ入る。五郎吉は包みを殘し、奥へ入る。お松殘り、思ひ入れ。合ひ方になり、時鳥の聲。

まつ　誰れあらう、歴とした侍ひの、與惣兵衞さまの娘のわしが、五年以前に村の病氣、人參代に、江戸吉原で賤しい勤め。親御の恥と思ふゆゑ、屋敷勤めと僞はれど、廓にゐるうち思はずも、馴れ

なじんだる民部さま、お情宿せし二つ身の、それゆゑ内々親方さんも、生み落すまで在所へと、歸つて見れば、母さんの御難儀。それといふのも由留木家の、寶を取り得ん年貢の金。頼みに思ふ兄さんは、幼い時に別れたまゝ、どこにどうしてゐるさんすか。今に思へば吉原にて、京町の猫通ひけり揚屋町、人の口端にかゝりしも、いとしと思ふ民部さま、あなたにどうぞ今一目、お目にかゝつて、二度の勤めを」

ト此うち猫は件の装束へじやれかゝるを見て

アヽ、これはしたり。こりや大事の預り物、爪でも立つて。

ト件の装束二品を風呂敷に包み、猫を追ふゆゑ、猫は奥の方へ走り入る。

それに附けても高位のこの品。今のお人が、どうして爰へ。

ト思ひ入れ。唄になり、向うよりお袖、木綿振り袖、在所娘の拵らへ、高からげにして、手拭を冠り、糸立てに、杜若、その外夏草を入れ、これを抱へ、草花賣りの拵らへにて出て來り、直ぐに門口へ來り

そで　ハイ、姉さん、いま戻りましたわいの。

まつ　オヽ、妹お袖、いま歸りやつたか。サ、茶を進ぜませうか。

トいろ〳〵世話する。

そで　アイ〳〵。わたしも此やうに、毎日々々、池鯉鮒の里へ草花商ひ、殊に、毎年四月二十五日より五月の五日までは、馬市が立つてナ、人立ち多き町ゆゑ、商ひがてら有やうは、わたしが爲には義理ある母さん、牢舍の御難儀お助け申す、その金なりと出來やうと、女子の果敢ない

まつ　アヽ、コレ、妹、そりや忝い、わが身の眞實、姉が爲には實の母さん、いま改めて其方に禮を云ふ程に、その代りには、どうぞ止めてたも。

そで　止めてとは、そりや何をいな。

まつ　外でもござらぬ。恐ろしい、人を呪うて、親の爲にはなりますまい。この後、怖いあのやうな事を。

そで　エヽ、そんならそれを。

まつ　コレ、わが身はなう。

トお袖を引寄せ、キツとなる。合ひ方變る。

コレ、妹、生さぬ仲でも姉妹ぢやもの、その素振りでは大概は。合點のゆかぬ氣色ゆゑ、いろいろと氣をつけて、夜々は猶更に、寢た振りをして窺へば、コレ〳〵

トいろ〳〵花を包みし糸立てを見ようとする。お袖あわてゝ、見せじとする。はずみに包みの中より五寸釘金鎚、ばら〳〵と落ちる。お袖隠すを、お松取つて

コレ〳〵、この釘、金鎚は何の爲に持つてゐやるぞ。どのやうな事かは知らねども、なぜマア、姉のわしに隠し、人を呪ふの大膽は、そりや、聞えぬ〳〵、聞えぬわいの。

ト思ひ入れ。お袖、こなしあつて

そで　モシ、姉さん、堪えて下さんせ。モウ〳〵、有やうに申しまする程に、必ず叱つて下さんすなえ。人さんを呪ふといふその譯は、いつぞや都に奉公いたす其うちに、石井左内さまの若黨、中野藤助といふお方に馴染み、不義の様子が顯はれて、二人はお暇。一先づ東へ藤助どのはござんして、それから後は音信不通。その上わたしは懐妊の、隠すに辛きお腹の様子。どうか斯うかと思ふうち、力に思ふ藤助どの、江戸吉原で女郎に馴染み、その女も懐妊と、人傳には聞くものゝ、その女の名も知らず、たゞ藤助どのゝ馴染みを重ねし傾城づら、憎うて〳〵ならぬゆゑ、胸に据ゑかね、鈴鹿なる、鬼の窟へ人知れず、誓ひし念も今日が滿願。なれども先のその女、命に別條無いやうに、面體ばかりは見苦しう、なさしめ給へと心願も、面體變らば男の心、變るは治定と思ふゆゑ、池鯉鮒の山を鈴鹿になぞらへ、夜な〳〵通ひましたるは、男を思ふ女の念力。様子

と申すは此あらまし。姉さん、必ず叱つて、下さんすなえ。
まつ　テモマア、怖いその話し。悋氣は女の愼しむところ。この上ともに其やうな事は、ふッつりと思ひ切つてたも。姉もこの身につまされて、聞捨てならぬお腹の嬰兒。殊には、石井の御家來とあるからは、緣のないといふではなし、この後とても、怖い心は止めてたも。今にも其方の思ふ男に
そで　めぐり逢ひなば、お前が許して、
まつ　姉が取持ち、添はせてやる。
そで　エヽ、嬉しうござんす。
まつ　わが身は喜び、この姉は、又ぞろ勤めの
そで　エ、勤めとはえ。
まつ　サア、屋敷の勤め、事によつたら
そで　アノ、お屋敷へ。
まつ　それも、母さん助けたく、あのお屋敷へ二度の勤め。
そで　そんならお前は
まつ　三十兩の金の代りに、事によつたら。

そで　エ。

まつ　ドリヤ、その知らせを、待ちませうか。

ト唄になり、思ひ入れあつて、上の障子の中へ入る。お袖こなしあつて、正面の瓦燈口へ入る。合ひ方になり、引違へて左次兵衛、件の金を持ち、麻羽織を引掛け、出て来り

左次　サア〳〵、これから庄屋が方へ行て、事によると代官所へも行かにやアならぬ。ア丶、あの婆はよい娘を持つて仕合せ者だ。

ト門口へ出て、懐の金を探し

姉めが身を賣り、この金は拵らへたが、ナニ、これを庄屋方へやつて、婆が牢舎を助けるものだ。この三十兩を後金にして、雷丸を買ひ取つて、劍はおれが物よ。婆は矢ッ張り牢内に、雷丸は官太夫さまへ差上げて、おれば手柄に。ちつとも早く、劍の後金、さうだ〳〵。

ト行かうとして、何心なく花を包みし糸立てを明ける。中より鈴鹿の守り木札に、女郎の顔描いてあるを取つて

こりやア何だ。女の面を札守りへ描いたは、仙女香の看板か。何しろ爰らへ札を打ち附けて置かう。

ト見やろうち、件の釘、金鎚を見附け、これを取つて

アヽよい物があつた。幸ひ〳〵。ドリヤ、この柱へ打ち附けて置かう。

ト門口へ件の木札を釘にて打ち附ける。此はずみに女給の顔のあたりへ釘にて打つ。この時障子の中にて

まつ　アヽ苦しいわいなア。

トお松、苦しむ聲する。左次兵衞聞きつけ

左次　アヽありや姉のお松が聲、アヽまた風でも引返したか。

ト何心なく又釘にて打つ。障子の中にて

まつ　アヽこの顔が、アヽ苦しいの〳〵。

左次　アヽ又、聲がする。コレ、お松。どうした〳〵。

ト木札は柱へ打ち附け、屋體の方へ駈けてくる。この時中よりお松、顔を押へて出て、あたりへ倒れる。左次兵衞、駈け寄り介抱する。この音にお袖も駈けて出て

そで　コレ、姉さん、どうしなさんしたぞいな〳〵。

ト介抱する。お松、顔を押へて切なき思ひ入れ。左次兵衞、財布の金を持ち、うろ〳〵して

左次　コレ〱、お袖、姉のお松は、こりや急病ぢや。醫者どのを呼びに行くから、われは其うち側を離れず、合點か〱。

そで　アイ〱、そんなら早くお前はお醫者さんを。

左次　ドリヤ一走り行つて來ようか。

ト門口へ出て、向うへ行く振りして、金財布を出し

べら坊づらめ。ナニ醫者を呼びに行かうか。おれはこの金で雷丸を此方へ受取り、宮太夫さまへ差上げるワ。さうとは知らず、母の爲ぢやと身を賣つて、おれに渡した三十兩。ナニ、婆めが難儀を構はう。思ひもよらず、三十兩、エヽ、忝い。

トこの時、風の音して、空より前幕の鷹舞ひ下り、件の財布を攫つて飛びゆく。左次兵衛、うろたへ

ヤア〱〱、大事の金を、鷹めがうせて攫つて行つたか。アヽコレ、その金返せ。鷹よ〱。

ト風の音にて、鷹は向うへ舞うてゆく。左次兵衛、この跡を追うて揚げ幕へ入る。

そで　モシ〱、姉さん、氣を慥かに持つて下さんせ。

まつ　おいなう。隨分心は慥かぢやが、何ぢややら、俄に顏が發熱して、釘を刺さるゝやうな顏の痛みは、こりやマア、どうした病やら。コレ、妹、わしが顏を見てたもいの。

そで　ほんに、そりやマア、どういふ病でござんすやら。

ト　お松、顔を上げる。この顔、惡女の面になる事。お袖、恟りして

オヽ怖。そりやマア、どうした病ぢやぞいなア〳〵。

まつ　コレ〳〵、妹、何をマア、其やうに。何が其方は怖いぞいの。

そで　アイ、怖いといふは、ソレ、そのマア、お前の。

まつ　わしがどうしたぞいの。

そで　サア、それはな。

ト　云はうとして思ひ入れあり。

イエ〳〵、何も變つた事はござんせぬが、思へば〳〵、なんで俄に。

まつ　エ、何が俄に。

そで　サア、俄な病氣も早う直つて、こんな不思議な。

ト　思ひ入れあつて、云はぬこなし。

まつ　ハテ、この子としたことが、何が其やうに不思議ぢやぞいの。ホヽヽヽ。コレ、妹、ちつとは其方、嗜みやいの。

ト何心なき思ひ入れ。お袖、合點のゆかぬこなしにて

そで　アイ〳〵、嗜んで居りますわいな。

ト思ひ入れ、あたりに取りちらしある鏡臺、鐵漿つけの道具をよき所へ片寄せ、心得ぬ思ひ入れ。唄、時の鐘になり、向うより由井民部之助、實は中野藤助、鈴鹿山の姿にて、大小菅笠を持ち出てくる。この途端屋根より件の猫這ひ出る。こなたより毛色變りし友猫、這ひ出てくる。この時小蝶出るを、猫は飛びつき、取らんとする事、友猫もこの時思はず立上がり、シヤンと立つ。蝶は舞つて入る。これより誂らへの合ひ方、風の音にて、二疋の猫立ちあがり、何やらん踊る如き振りになる。

民部　ハテ、訝しい。手飼ひの猫のあの振舞ひ。獸の中にて猫は陰なり、陽氣盛んなればその毛を垂る。昔、南蠻國より渡り、その後姿を消し、逸物の命婦となつて、大内にありしを捕へて、宇都の山邊に捨てしに、陰氣凝つて石となる。その逸物に似寄りの斑ら、あの軒づらに何やらん怪しき様子。殊には民家に變りし家造り。爰は三河の八つ橋村、折も折よき杜若、昔男の古へを、思ひ出だして在原の、その故事の慕はしく、ハテ、奥ゆかしき民家ぢやなア。

ト思ひ入れ。風の音やんで、猫も走り行く。民部、跡打眺め

今の斑らも何れへか、とまり定めぬ武者修行、今宵はあの家に、宿りを頼まん。さうぢや。



ト門口へ來る。此うちお袖、行燈を點しゐる。

そで　お頼み申したい。旅の者でござる。今宵一夜を明かさせて下され。

そで　ハイ、それはお易いお頼みなれど、爰は宿屋ではござりませぬ。お泊りならば池鯉鮒宿へ。

ト門口を見て、思ひ入れあつて

民部　ヤ、お前は藤助どのぢやござんせぬか。

民部　さう云やるは、屋敷に勤めたお袖ではないか。ヤレ〳〵、久しや。

そで　サア、わたしも、今も今とてお前の噂。マア〳〵、内へ。

ト袖を扣へ、いそ〳〵する。民部、門口より入らんとせしが、思ひ入れあつて

民部　イヤ〳〵、迂濶にこの家へ藤助は。……それといふのも、其方が親こそ、心よからぬ官太夫が下部と聞く。いはゞ身共は石井の若黨、それゆゑ迂濶に。

ト思ひ入れ。

そで　成る程、尤もでござんす。その疑ひを晴らすには。

トお松が方へ來り

モシ〳〵、姉さん、今もお前に話したる、其お方がござんしたわいなア。

まつ　ヤア、それは幸ひ。早う内へお連れ申して。

そで　でも、父さんにも。

トもぢ〳〵してゐる。

まつ　ハテ、大事ないわいの。……モシ〳〵、お出でなされたお客樣。わたしは袖とは同胞でござりまするが、わたしは俄に氣分が惡うて、それへ參つて御挨拶も何とやら。殊に、父さんは物事わからぬ在所育ち。お宿というては出來ますまいが、それには何ぞ。

トあたりを見て、包みの中の衣裳を見つけ

オヽ、よい物がござります。田舍祭りの十二座の、この裝束をお召しなされて、この度わざ〳〵京都より、この八つ橋の杜若、御覧の爲にお下向の、お公卿樣と申して、父さんを僞はり、お宿申して、いつまでも

そで　それではどうして、父さんが

まつ　ハテ、大事ないわいの。正直な子ではあるぞ。サヽ、ちやつと。

そで　そりや嬉しうござんす。

ト裝束を持ち行き

サアく、これを着て、お公卿様ぢやと云ひなさんせ。

民部　アヽ、これを着れば泊めらるゝか。併し、官太夫の身寄りとあつては。

そで　ハテ、そりや姉さんが、よい思案があるといな。

ト捨ぜりふにて紛らし、民部之助に装束を着せ、烏帽子を冠せる。

民部　これはく。誠に十二座のやうぢや。して、其方の姉御は、どれにぢや。ちよつと逢うて。

そで　イエく、姉さんは俄に持病が。

ト顔の醜きを隱すこなし。

民部　それでも其やうに心づかひ。禮も云ひたし、マア、ちよつと、お目にかゝつて。

ト お松の方を見て

アヽ、お前がお袖どのゝ姉御でござりまするか。お聞きでもござりませうが、何か屋敷に奉公の其うちは、互ひに若氣のひよんな事。イヤ、モウ、お恥かしうござりまする。

まつ　エヽ、お前さんが妹の噂のお方様か。何か不拙なあのお袖、さぞマア、お氣にも叶ひますまいがそこをどうぞ末々まで、御面倒御覧じて。

トふと民部之助の顔を見て

ヤア、お前は、民部さんかいなア〳〵。思ひがけない、どうしてマア。

ト寄つて飛び退き、お松が顔を見て、惘りして

民部　アヽ、コレ〳〵、この女中は馴れ〳〵しい。併し、身共も只今にては、民部之助とも申すが、以前は藤助。殊に、お前のやうなお方に、近附きは、持ちませぬぞ〳〵。ハテ、馴れ〳〵しい。

まつ　エヽ、胴慾な其お詞。コレ、民部さん。わたしやお前に別れてより、懐かしいやら、お腹の様子親方さんのお情でな、親里へ来てゐやんす。殊に、お袖は、わしが義理ある妹ぢやわいの。

民部　その妹御と云ひ交したる、以前は藤助。姉御には、お初にお目にかゝりまして。

まつ　エヽ、何ぢやぞいなア。いつマア初めて逢ふもので。見忘れるも程がある。殊更この身は二つ身の、それを知らぬと、眞顔になつて云はしやんすは。……アヽ、聞えた。こりやお前、いつの間にか妹に馴染み、こりや二人してこの姉を、今更突出し者に、しなさんすかいな〳〵。

そで　アモシ、どうしてわたしが、其やうな心は無いが、其お詞は。……そんなら常々民部さんといふ男があるとのお話しは、この藤助さんの事かいな〳〵。

民部　アヽ、イヤ〳〵、此方心覚えの無いでもなけれど、その女とは面體の相違。云ひ交したる女の顔、見忘れてよいものか。察するところこの女中は、こりや狂人であらう。オヽ、狂人であら

う〳〵。

まつ　ナニ、狂人ぢや。アイ、成る程、わたしや妹に見替へられ、狂人ぢや〳〵。これが氣が違はいでならうかいな。契約なせし大事の男、現在妹に見替へられたか。エヽ、恨めしい。口惜しいわいなア。

民部　コレ〳〵、女中。身共がこなたに契約せしとは、決して左樣な。

まつ　イエ〳〵、そりや聞えませぬ。江戸に勤めの其うちに、あの吉原で松山が、まだ新造のその時に初めて逢うたその時は、コレ〳〵。

ト片脇より風呂敷に包みし孔雀染めの振り袖を出し

この振り袖をわたしが着て、初に逢うたを、忘れてかいなア、民部さん。

民部　誠に覺えあるこの振り袖。その松山なら覺えはある。石井の縁者、丹波與惣兵衛どの、其お方の娘の松山。

まつ　それ程覺えありながら、なんで知らぬとあのやうに。

民部　サヽ、その松山に名高き太夫、それが今更駿ケ家に、髪も着類も變らうが、面體までも、なに變らん、それゆゑ知らぬと申した民部。

そで　エヽ、すりや、姉さんのお噂の、民部さまとは藤助さん。

ト思ひ入れ。

まつ　ナニ、面體が相違とや。さう云はしやんすりやたつた今、俄に顔が發熱して、針を刺さるゝ面の惱み。

トこなしあつて

民部　疑はしくば鏡の面に、その面體を。

トあたりの鏡臺を取つて差出す。お松、寫し見て、大きに驚く事あつて

まつ　ヤヽ、今日の今まで何事なき、この面體がこれ程までに、我が身で我が身を見紛ふは、もしや妹が今の話し。鈴鹿の神へ、呪ひし女は

そで　その名は知らねど、一心に、恨み重なる女中といふは、アノ姉さんでござんしたか。

民部　すりや、藤助が民部之助と、變名なせしも存ぜぬお袖、殊に、姉とも知らぬ身の、呪ひし女は現在の

ト思ひ入れあつて、門口に打ちし件の木札を見附け、ずんと立つて引きめくり來り、裏を返し見て

さてこそ、その名なけれど女の面に、嫉妬の釘を打附けしは、その念屆いて松山が、面體變りし

ものならん。年端もゆかぬ女ながらも、嫉妬の念力なりけるか。ハテ、恐ろしい。

ト思ひ入れ。お松、キッとなつてお袖を引据ゑ

まつ　エヽ、おのれはなア。義理ある姉を妹の身で。さうとは知らで、此わしは、不便がりしが腹が立つ。口惜しいわいの〱。その大恩あるこの姉を、ようも〱此やうに、夫も見紛ふ面體に、呪やつた〱。エヽ、腹の立つ。

ト守り札にてお袖を打ち据ゑ、口惜しき思ひ入れ

そで　アヽ、尤もでござんす〱。恨みの女は姉さんと、露聊かも知るなれば、なんの此やうに呪ひませうぞ。モシ、姉さん、こりやマアどうせう、なんとせうぞいなア。

まつ　ナニ、今となりその云ひ譯。これも鈴鹿の神の咎め。サア〱、面體を元のやうに直してくれ。早う直してくれいやい。

民部　オヽ、尤ものその詞。併し今更其やうに。

まつ　もうこの上は、お前さへ得心なれば、どうぞ、お否であらうとも、懐姙の子はお前の胤。さすれば未來永々女夫。サア〱、この家を出て、お前と添ふ。サア、來て下さんせ〱。

ト手を取り立ちあがる。

民部　そりや此方は變ぜぬ魂ひ。武士の一言金鐵同然。たとへ面體變るとも、身共が女房、相違はない

まつ　エヽ、嬉しうござんす。其お心ならこの家を出て、いづくの浦に暮らすとも、女の念力。サア、來て下さんせ〱。

そで　マア〱、待つて下さんせ。妹の身として大膽な、越度は越度。わたしも一旦契約して、主さんの胤を宿してゐるからは、女房も同然。そのマア男を、どうして外へやられませう。姉と知らいで呪うたも、いはゞ男を思ふゆゑ。

まつ　イヤ〱、どのやうに云やつても、お腹に宿せしあなたのお胤、それぞ違はぬ女房の證據。それに今更　たんのマア、民部さまは、姉の男ぢや〱。

そで　イエ〱、藤助さまは妹が夫。わたしが男でござんすわいなア。

まつ　ナニ、小差し出た。退きやいなう。

そで　お前、退いてゐなさんせ〱。

まつ　なにを姉に向うて、退きやいなう〱。

ト兩方より民部之助の手を取つてあちこちと引ッ張る。この時念佛太鼓になり、向うより義兵衛、左次兵衛を引ッ張り、駕籠を吊らせ出てくる。左次兵衛、空ばかり恨めしさうに見てゐる。跡より生皮

のおはぎ、前幕の女非人にて、女郎屋の女房に拵らへ、旅姿にて、供男一人、旅姿にて、割掛けの包みをかたげ、はるか後に下がつて出て來り、先の人數は內へ入る。おはぎは門口にゐる。

左次　エヽ、あの鷹めは、どこへ飛びをつたやら。イヤ、飛んだ事だ。

義兵　コレサ、早く證文に判をさつしやいよ。

まつ　エヽ、腹の立つ。退きをらぬかいの。

ト　お袖を手荒く突き飛ばす。

左次　ヤイ／＼、この姉めは、おれが實の娘を、どうしをる／＼。

ト　民部見て

民部　イヤ／＼、これには、だん／＼樣子の、

ト　左次兵衛をなだめる。

左次　ヤア、この人は何だ。どこから來た神主どのぢや。

民部　イヤ／＼、身共は神主ではない。何ぢや……それ／＼、此たび京都より杜若といふ題を賜はり、この八つ橋村へ歌枕に參つた、在原の行平といふ、雲の上人ぢやぞ。

左次　ナニ、在原の行平さまぢや。そんな人は須磨の浦へござりませ。それに爰へござつたは、姉妹の

義兵　娘を、松風村雨にする氣ぢやの。

義兵　たとへさういふ事もあるにしろ、此方は先約、三十兩といふ金を渡した此お松。駕籠を持つて來た。サア〳〵、てまへは、マア駕籠へ。

トお松の手を取つて引ツ張り、この時顏を見て

ヤア〳〵〳〵、こりやアどうだ〳〵。ちつとのうちにその面體。こりやアどうしてそんな顏に。コレ〳〵、親仁どの、こりやどうぢや。

左次　ヤア、われはおれが留守のうちに、火傷でもしたか。こりやア、大變だ〳〵。

義兵　貴樣の大變より此方が大變。こんな面の女が、ナニ女郎になるものか。見世物に出しても錢は戻りの因果物。これぢやア濟まぬ。どうさつしやる〳〵。

まつ　サヽ、尤もでござんすが、此やうにわたしが顏の變つたも、コレ、この札に打附けし神の咎め。これといふのも、妹が仕業。エヽ、腹が立つわいの〳〵。

義兵　コレ〳〵。樣子は何か知らねえが、どうでその顏では此方は變更へ。サア、親仁どの、三十兩、返してもらはう〳〵。

左次　コレサ、その三十兩は今門口で、鷹が浚つて。これが誠に、親仁骨折り、鷹にとられた。

義兵　イヤ〳〵、それぢやァ濟まねえ。金が返されずば、爰にゐる娘。妹といふからは、これを代りに、連れて行かうワ。

左次　アヽ、どうして〳〵、その妹はおれが實の娘、織子の代りに、ナニ遣るものか。

義兵　それでも是非とも、この娘を。

トかゝるを、民部之助、留めて

民部　アヽ、コレ〳〵、この娘は身が云ひ號け、どうして外へ。

義兵　そんならお前、その身の代を立替へるか。

民部　サア、金子といふては。

義兵　それ見たか。退いてござれ。サア、親仁どの。三十兩のあの金は。

左次　ハテ、この娘を連れてござれの。

トお松を突きつける。

義兵　イヤ〳〵。こんな化け物はいらぬ。貴樣に返した。

ト突きやる。

左次　エヽ、此方もいらぬ。

義兵　わしもいらぬ。

ト兩方よりお松を突き飛ばす。民部之助、お袖、氣の毒なるこなし、この時おはぎ、ツカ〳〵と入り

お松を圍つて

はぎ　イヽヤ、この子はわしが抱へよう。

義兵　ヤ、そんなら惡女のこの女、三十兩に。

はぎ　わたしが抱へる。判人さん、お前から出た、ソレ。三十兩。

ト三十兩、胴卷より出して渡す。

義兵　コリヤコレ、小判で三十兩。これさへ取れば、此方は安堵。

左次　して、お內儀は、此やうな玉を。

はぎ　買つて行きやす。あの門口で何かの小みやり。いゝ見かねたゆゑに女の身で。わたしや駿河の二丁町白子屋といふ女郎商賣。お伊勢參りの歸り道、八つ橋村の杜若、見物ながら來て見れば、爰のお內で女中の難儀、見かねしゆゑに三十兩、用立つからは、怪我であらうと、醫者にかけて、本復次第廓の勤め。また、一生片輪なら、尼にしたとて僅かな、女一人を助けるが、後生と思うて抱へるこの子、この上ともに親兄弟

左次　縁切りたくば切つてやります。親でも子でも無いといふ、證據は爰に。

ト　あたりより守り袋を取つて來り

こりやお松が掛け守。中にあるのは生れた臍の緒。辰の年月揃うた生れ。サ、これ渡しまする。

勝手に連れて。

ト　おはぎに渡す。

はぎ　そんならこれが、年月揃ひし

まつ　辰の年度の生れのわたし。

はぎ　買ひ取りました。氣遣ひさんすな。

ト　守り袋を懷中する。

まつ　御恩の程は詞にも。母の難儀に苦海の身賣り、殊更二度のわたしは勤め。今別れては、いとしいお方に。

ト　民部之助へ思ひ入れあつて、つかつかと駕籠へ乘り

この上ともに、どうぞ尋ねて。

民部　氣遣ひしやんな、逢ひに行く。マア、それまでは、幸ひと、足を止むる妹が夫。

そで　現在姉さん、勤めの身、跡に殘つて、どうもお前と

左次　聟に取らうが、お前は公卿。金さへあれば相談します。併し、鷹めはどこへうせたな。

義兵　わしはこの金淺はれぬ、道々用心。

まつ　賴み置くのは母さんの、牢舍の難儀、わたしに代つて民部さん、どうぞお願ひ申しまする。

民部　母の難儀は某が。……殊には面の變りし病。夜風をいとふこの小袖。

ト孔雀染めをお松に渡す。

まつ　お心附きしこの小袖、嬉しう受けて。

ト受取る。

はぎ　孔雀染めなる振り袖が、この家にあれば、そんなら女中は、いよ〳〵以前は。

ト思ひ入れ。

まつ　恨みは恨み、妹はこの世の女夫、先の世は。

民部　刀に掛けて

まつ　エヽ、嬉しうござんす。

ト垂れを下ろす。

そで　アヽ、モシ。

ト寄るを、民部之助隔てる。

はぎ　駕籠やらしやんせ。

ト唄、時の鐘になり、四つ手駕籠にお松を乗せ、おはぎ、供男、義兵衛附き、向うへ入る。左次兵衛民部之助、お袖殘り

そで　苦海の勤めに身を賣りし、あの姉さんの心の中、さぞやわたしを。

民部　ハテ、今更いうても詮なき繰り言。して、母親を助くる金は

そで　アノ、父さんが

左次　アヽ、滅相な。金はあつたが鷹に淩はれ、爰には一分も

民部　ヤヽ、それではお上へ願ふ手蔓も。ハテ、何として。

ト思ひ入れ。念佛太鼓になり、向うより八つ橋村といふ弓張りを持ちし百姓先に立ち、跡より、やつし白髪鬘の母親の死骸を戸板に乗せ、百姓二人これを吊り、庄屋彦兵衛附いて、わやわや云うて來り

彦兵　コレコレ、親仁どのどの。命乞ひの三十兩、殊の外に手間どり、その上婆どのは、牢舍のうちに病氣にて、いとしや、先方牢死して、死骸を渡すとお代官のお指圖に、近所の者が貰うて來た。

百姓　娘達が見たら、さぞかし泣かうに。アヽ、笑止々々。
　アヽ、氣の毒な事をしました。
　　ト よき所へ死骸を差置く。
左次　ナニ、婆めが死んだといふのか。
そで　そんなら、これが母さんかいな。お前の牢舍を助けんと、あの姉さんは身を賣りし、その甲斐もなう、こりやマアどうせう、なんとせうぞいなア。
　　ト 死骸に縋り、思ひ入れ。
民部　すりや、この死骸が、松山の實の母親、娘に逢はで淺ましいこの樣子、南無阿彌陀佛々々々々々々。
左次　コレ〳〵、庄屋どの、婆の死骸は下されたが、年貢の金は。
彥兵　サア、その樣子も尋ねたら、當人が牢死の上は、その金も其まゝにと、これで、さらりと濟み口でござるわいの。
左次　アヽ、さうか。ヤレ〳〵、それで落ちついたが、それにしてもあの鷹めは。
　　ト 思ひ入れ。

彥兵　サア〳〵、死骸を渡せば、わしらは歸ります。跡でゆるりと回向してやらつしやい。コレ、婆様、ではない爺樣、近頃、笑止々々。

ト皆々、わや〳〵云うて、向うへ入る。

民部　母の病死のこの樣子、あの松山が聞いたなら、さぞや嘆かん心の中。

そこで　どうぞ今宵は御回向を。

左次　念佛ならばあそこがよい。人の目にかゝらぬやう、あの簾の中へ持込んで置かう。手傳うて下され。

ト民部之助、左次兵衞荷うて、二重舞臺へ持ち行き、よき所へ置く。民部之助、件の十二單衣を見附け

民部　この裝束とこの品の、民家にありしも何とやら。

左次　合點のゆかぬは、奥へ泊つた伊勢參り。

民部　併し思はぬこの裝束、母の死骸に白無垢代り、經帷子も恐れあり、これ打着せなば未來にて、佛の交はり、佛果を得ん。直ぐに此まゝ。

ト母の死骸の上へ、十二單衣を着せる。お袖見て

そで　思ひがけなき高位のお姿。

左次　これ死花の咲いたる譬へ。

民部　我れらは回向を。

ト唄になり、欄間より古簾下りる。あと合ひ方、左次兵衛お袖、殘つて

左次　ヤレ〳〵、何かと無駄骨を折つた。併し、今の侍ひ、よう寢た時分に、コレ、娘、あの一腰は、そつと盜んでおれに渡せ。合點か〳〵。

トお袖、思ひ入れあつて

そで　エヽ、そりやなんで、ぬしの刃物を。

左次　ハテ、知れた事。公卿と云うたはおれを騙す。わいらが寄つての拵らへ事。あの者は石井の小者、中野藤助、今では由井の民部之助、劍術指南をしをると聞く。いつぞや勢州龜山にて、おれが主人の源吾さまを、半次郎めが、親の敵と討ちをつたその節、助太刀したは慥かに民部と思ふゆゑ、何氣なう泊め置いて、主人の敵、今宵のうちに。コレ。

トあたりの鉈を取つて

われが爲にも主の敵だ。手引きして殺させろ。

そで　すりや、あのお方を、お前は、いよ〳〵。

左次　劍術勝れしあの民部、寢入りし所へ忍びゆき、殺らす工面だ。手引きを頼むぞ。必ずぬかるな。

そで　お前の手柄になる事なら、成る程、手引き致しませうが、ならう事なら、母さんの、忌日の事なり、今宵はどうぞ。

左次　エヽ、役に立たずめ。猶豫いたさば、此まゝ踏んごみ。

ト急いでゆく。お袖、縋つて

そで　アモシ、左樣あるなら、今宵の手引き、見事いたして見せませう。

左次　出かした娘。して又、寢間へ、合圖の知らせは。

そで　あの簾のうちへ窺ひ寄つて、蚊遣りの火影を合圖と定め

左次　その時こそは。コレ。

ト引寄せて囁く。お袖こなしあつて

そで　心得ました。必らず蚊遣りを

左次　忘るゝな。

そで　アイ。

左次　コリヤ。

ト行燈を吹き消す。誂らへの合ひ方、時の鐘になり、お袖、思ひ入れあつて、探り〳〵奥へ入る。左次兵衞、下の方より、砥石、手桶を探り取つて、鉈を砥ぐ事よろしく、此うちよき時分、簾の中にて蚊遣り燃え立つ。左次兵衞、キツと目を附ける。ドロ〳〵になり、古簾の破れより、その形抜群なる大猫の面見えて、目を開き、キツとなる。左次兵衞、恟りして

ヤヽヽヽ、簾のちぎれに見ゆるは、猫の面の、さも凄まじき

ト鉈にて簾を切つて落す。こゝに猫の怪、十二單衣の姿、老女の拵らへにて、蚊遣りの火を焚き、猫の顔にて、鏡臺、鐵漿附け道具を並べ、鐵漿をつけてゐる。左次兵衞、恟りして慄ふ。猫の怪、振向いてキツと見る。口のまはり鐵漿つきゐる體。薄ドロ〳〵、誂らへの鳴り物。猫の怪は二重より悠々と下りてくる。左次兵衞、慄へ〳〵、下座へ逃げて入る。屋體の上へ五郎吉、裸身へ業平の裝束を着て出るを、お袖、民部と心得、附いて出てくる。猫は舞臺よき所へ行く。

そで　藤助さんか。

五郎　イヽヤ、おれだワ。あの侍ひは、おれの着物を浚つて駈落ち。

そで　そんなら、あなたは、爰を遁がれて。

五郎　おれを裸に。あと追ひかけて。

ト行かうとする。

そで　イヽエ、お前は。

五郎　エヽ、面倒な。

ト立廻る。猫の怪、振返つて見る。五郎吉「ソレ」と顔を隠す。猫の怪、欄間の方をキツと見る。上より鼠あまた、バラ〳〵と落ちて死ぬ。お袖驚き

そで　アレ、欄間から鼠が落ちて

ト愕りする。大ドロ〳〵。猫の怪よき所にて消える。二重舞臺へ古簾下りて兩人を隠す。知らせに附き道具變る。

本舞臺、矢矧の橋のかゝり。天水桶、柳の大樹、吊り枝を飾り、すべて東海道岡崎の宿。馬士唄、時の鐘にて道具納まる。

ト向うより雲助三人、琉球包みの長持ちを擔ぎ、唄うたひながら出てくる。橋の上より彦兵衛、麻上下、羽織の姿にて出て來り

彦兵　モシ〳〵、若い衆。智行上人さまは、もうお出でなさるか。

人足　アイ、今そこへござりました。わしらは先に藤川宿へこの荷物。サア〳〵、やらかせ〳〵。

彦兵　アヽ、コレ〳〵。その長持は藤川までかな。赤坂までは通らぬかいの。

人足　イエ〳〵、藤川までのつもりで參りました。

彦兵　それでは人足を出さねばなるまい。ハテサテ、今日は問屋場の混合ふ日だ。アヽ、どうぞ人足が廻ればよいが。

人足　イヤモウ、道中の賑はふは、わしらが爲には豐年でござります。サア〳〵、やらかせ〳〵。

卜唄を唄ひながら、橋を渡つて入る。彦兵衛殘る。矢張り馬士唄にて、向うより民部之助、五郎吉が單衣を着て、大小を絲立てに包み、これを負うて、ヽヽヽ太神宮と書きし菅笠を冠り、出て來り

民部　ハイ〳〵、伊勢參りに御報謝。

彦兵　アヽ、コレ〳〵、てめえ伊勢參りか。なんと、今日一日人足になつて、荷を擔ぐ氣はないか。駄賃は取れるが、どうだ〳〵。

民部　アヽ、どうして〳〵。わしは肩がきゝませぬから、重荷は擔げませぬが、なぜまた其やうに、俄に人足を拵らへさつしやるのだ。

彦兵　そりやア今日、智行さまのお通りで、問屋が混合ふからの事。てめえ達も邪魔にならぬやう、片寄つてゐませうぞ〳〵。

民部　エヽ、左樣でございますか。道理こそ後の宿に、大勢寄つてゐましたわい。

彦兵　てめえ、いゝ所へ來た。お待ち申して、お十念を受けてゆくがよい。

民部　成る程、こりやアいゝ所へ來かゝりました。お十念を戴いて參りませう。

ト片膝へ寄つてゐる。木魚入いの合ひ方にあり、向う、ワヤ〳〵して、供侍ひ二人、先を拂ひ出る。跡より智行上人、鼠の頭巾、法衣、高からげ、草鞋にて拂子を持ち出てくる。跡より旅中間、旅侍ひ其外町人、羽織の講中、仕出し大勢、

一同　エヽ、お十念を、お願ひ申しませう〳〵。

ト出て來て、舞臺へ來る。彦兵衞、手を突き

彦兵　ハヽア、お上人樣へ申し上げます。當宿の者ども、お十念をお願ひ申しまする。何卒この儀、偏へにお願ひ申しまする。

智行　念佛の行者、信心の輩、十念願ふは神妙々々。然らばこれにて。

一同　エヽ、有り難うございまする。

トわや／＼云うて、智行の前に蹲る。智行、こなしあつて、珠數を出し

智行　南無阿彌。

一同　南無阿彌。

トよろしく十遍となへて

智行　南無阿彌陀佛。

一同　南無阿彌陀佛。……エヽ、有り難うござります。

ト此うち智行、大勢の中より、民部之助を、よく／＼見て

智行　念佛の行者のうち、年若なれどもあれなる男子。奥床しきその骨柄。ハテ、惜しいかな。

ト合ひ方になり、思ひ入れ。

我れ佛學の外、天文、地理も、胸に疊みて記えあるに、あれなる男の人相を見れば、只者ならぬその生立ち、天が下を窺ふところのその器量。然りと雖も、いま天下靜謐にして、かゝる大義は思ひもよらず。時到らねば、却つて不吉の相となる。ハテ、惜しいかな。これ即ち、善は悪に近きの道理。して、其方は、いかなる者にてありけるぞ。ハテ、奥床しきその生立ち。

トきつと云ふ。民部之助、思ひ入れあつて

民部　ハイ、私しは駿河の國、由井の宿にて紺屋の忰、藤助と申すもの。只今にては武家奉公、氏も系圖も、この身に取つては。

智行　すりや、町人の胤なりとな。氏素性なき者ならば、猶々不思議のその人相。正に末々、其方こと、天下を望むの萌しは正しく。その惡念を止むるは

ト合ひ方變る。懷中より袱紗に包みし六字の名號を出し、こなしあつて

こりやコレ智行が一代に、一度ならでは認めぬ、十界成佛の六字。いかなる惡念ある者も、一度拜するその時は、善道に導かん事疑ひなし。これを汝に與ふる間、肌身離さず所持いたせ。構へて後々大義の企て、勸むる輩あるとても、愼しむべきはこれ第一。心得たるか、それなる男。

ト名號を渡す。民部之助取つて

民部　元より斯樣な賤しき者、何しに左樣な大義の企て。お志しのお名號、有り難く申し請くるでござりませう。

智行　今より、ふつ／＼思ひ切り、せめて出家の心あらば

民部　七里けつぱい。我れらは神道。

智行　ハテ、惜しいかな。これも宿世の因果ぢやなア。

ト唄、時の鐘になり、皆々左右を開つて、橋を渡り入る。民部之助、見送り

民部 ヤレ／＼。いはれぬ出家の示しにて。暫時の隙入り。さりながら、おれに與へしこの名號。物は試しぢや。

ト懐中より出して思ひ入れ。

それにしても、八つ橋村で、同宿の伊勢參りが、形を其まゝ、目立たぬやうには着て來たが、定めてお袖が、跡で尋ねてゐるであらうに。マア、日は暮れる。この橋の上で、ドリヤ一睡、やりませうか。

ト脊負うたる絲立てを敷き、橋の上へ笠を顏に當てゝ、手枕で寢る。時の鐘になり、向うより願哲坊、三立目の大津繪辨慶の鎧にて、長刀を持ち、あとより手下盜賊、四人、一本差し、忍び頭巾、龕燈を照らし、出て來り

盜甲 そんなら、いよ／＼願哲は、おいらが頭へ隨つて

盜乙 手下になつて働らく心か。さすれば、おいらは同腹中。

盜丙 仲間入りにはしつかりと

盜丁 馳走になるぞよ／＼。

願哲　ハテ、この手合ひは、おぬし達にも云ふ通り、遠州三河のその間、強盜の帳本たる、日本馱右衛門、誠は丹波與八郎、實否を糺す其ために、手下となつて窺ふも、官太夫さまのお指圖。それゆゑ坊主がいつぞやの、大津繪姿を其まゝに、辨慶の此いでたちは、心は熊坂長範だッ。

四人　イヤ、受取り憎い熊坂だな。

願哲　所をこじつけ長範が、手見せの働らき、てめえ達も油斷なく

四人　押し込み、かッさき、をどりこみ。

願哲　愚僧に續いて、サア／＼、來やれ。

ト皆々舞臺へ來り、橋を渡るとて、寢入りゐる民部之助の足を踏む。民部之助、起きあがつて、キッとなり

民部　ヤイ／＼。此奴等は、寢てゐるものを踏みにじり、挨拶もなく行き過ぎるは、不作法千萬。明盲目。

盜甲　ナニ、明盲目とは此方の事か。

盜乙　身の程知らぬ野伏りめ。なんでおいらが

四人　明盲目だ。

民部　その明盲目の譯云うて聞かさう。野宿のこの身は賤しくも、この笠に、コレ、しつかりと、文字は即ち大神宮、あり〳〵と書いてあるのを、土足に踏み立て蹴立てたのは、神を恐れぬ無法の大勢。わしが前へ兩手を突き、三拜なして通ればよし、さなきに於ては、一人でも、通す事罷りならぬ。禮儀を知らぬうじ蟲めら。

ト笠を見せてキツと云ふ。

願哲　此奴が〳〵。乞食の身を以て、うじ蟲などとは緩怠至極。斯く云ふは、日本駄右衛門が手下の者いらざる口出し致したら、爲になるまい。物貰ひ、キリ〳〵爰を

四人　なくなれエヽ。

民部　その強盗とは、横しまにして惡といへども、惡しきを知つて惡事をなすは童も同然。取るに足らざる人非人、見遁かしくれる。おのれら、爰を、キリ〳〵通れ。

願哲　ヤア、推參なその一言。宿無し風情に、我れ〳〵が、後れを取つては仲間の聞え。おのれ、爰にて討ち果すぞ。

民部　ナニ、推參な。命は助ける。三拜いたせ。

願哲　その廣言がこの世の別れ。皆も合點か。

四人　合點だ。その舌の根を。

ト一度に拔きつれ、切つてかゝる。風の音烈しく、民部之助、糸立てに隱せし一腰を拔き、切り散らす。この時懷中の名號を落す。願哲取上げるを、民部之助、手早く取返し、キツとなる。この時、ドロ／＼烈しく、民部之助の前へ黑雲下りて、姿を隱す。皆々見て

盜甲　ヤア、黑雲一むら。アレ／＼／＼。

盜乙　今の曲者、失ひしか。

盜丙　跡を慕うて

願哲　皆々續け。

トどろ／＼、カケリになり、黑雲向うへ行く。皆々この跡を追うて一散に入る。これにて道具變る。

本舞臺、正面黑幕。前通り杉の並木。上の方誂らへの銅燈籠。すべて遠州秋葉山の景色よろしく道具納まる。ト山颪し。大薩摩になる。

〽それ、設我、得佛の花開き、四斷眞如の月冴えて、谷の水音、山颪し、梢木の間も木魂して、實にや魔界といひつべき、深山の奥の天狗風、いと物凄く吹き渡り

トこの文句納まると、誂らへ凄き鳴り物になり、雲霧本刑開ると、爰に秋葉山の三尺坊、白衣、鉄丸、誂らへの天狗の拵へ、見越さげにて、宮島太夫をとりし杖を持き、岩臺の上に立ち身。その下に民部之助、雲中より落ちたる體にて、気を失ひ倒れゐる。この見得にて、兩人を引出す。知らせにつき、鳴り物打上げ、風の音、鍵打ち合ひ有て、三尺坊、よろしくあつて

三尺　それ、天は清らかにして心と定む。地は濁りにして形を現はす。雲中にて下界を見る、既に危ふき若き命拾ひ。心を附けよ民部之助。

トこれにて民部之助、氣付き、キツとなつて

民部　ハテ、心得ぬ。矢倉の前にて賊に出合ひ、掴み合ひしと思ひしに、それより夜は夢うつゝ、目を見開き、見てあれば、何處かそれとも知らざるが、爰は山中。我が名を呼びしは、何とも以て。

三尺　それぞ御身の我れなるぞ。

ト聞て

民部　して又、御身は何人にて。

三尺　有りと思へば無く、又無きとてもこの如く、姿は僅かに、ありくと、雲に跨り、満空の楽しみ霞を起して雲に飛行し、世界を眼下に水の音、

民部　さては御身は。
三尺　この山中に年を經し、三尺坊とは我が事なり。見えん爲に現はれしぞ。
民部　その御方が何ゆゑに。我れに見え給ふぞや。
三尺　實に尤もの尋ねぞや。昔の契りを語らん爲。
民部　ヤヽ、なんと。
ト鳴り物繁り。山颪し入りし合ひ方。
三尺　今ぞ示さん汝こそ、以前の前生、只者ならず。湊川にて亡びたる、楠多聞兵衛正成が一子、幼名は多聞丸、成長の後楠正行。その前生と知らざるや。
民部　して又、その儀を、何ゆゑ御身は。
三尺　示し聞かする我れこそは、尊氏が爲に世を去りし、應塔の宮守長なるワ。魔界に入つてこの如く、詞交すと知らざるや。
民部　さては噂に聞きたりし、魔界に交はる親王の
三尺　その身も今は天狗道、晝夜の苦しみ熱鐵の、苦患を助くる十界の、その名號を受けたるその身、再び我れに與へなば、恩を謝すべき事こそあれ。別儀にあらず、汝が惡念、後にはその身を失は

ん。それを不便と思ふがゆゑ、止めん爲に見ゆるなり。

民部 こは心得ぬ御一言。後々この身の災ひとは。

三尺 それぞ汝が前生は猫なるゆゑ、人これに馴染み、功を積みて、必ず其方、天下を望むの萌し出でんが、なか〳〵成就なりがたし。さるによつて、智行が與へしその一卷、我れに渡さば、其方が實義にめでゝ、堅くもこの儀を契約なす。心を附けてその身の榮えを。

民部 事新らしき御示し。さはさりながら、人として、名を滿天に揚げんこそ、人間の望むところ。今まで匹夫と思ひしに、正行の再來と聞く上は、足利に膝を屈せんいはれなし。元より望まぬこの名號、所望とあらば御身に差上げ、今より我れは日本國を武者修行。時を窺ひ、旗揚げなし、事ならずとも楠の、血筋を現はす我が存念。

ト三尺坊こなしあつて

三尺 ハテ、情なきその一言。然らばこれにて其方に、知らし置かんは外ならず。楠の血筋にせよ、我れならでは知らざる前生、それをば人に知らする爲、楠氏のその系圖、持ち傳へて益なきものゝ手にあれば、これに近づき、汝が方へ申し請け、後々系圖を持ち傳へよ。

民部 こは有り難き御示し。然らば御身の望み給ひし、六字の名號、直さまこれにて。

ト三尺坊八六字の名號を渡す。

三尺　アヽ、喜ばしや、心の安堵。最早望みは叶うたれば、後々天下の憂ひたる、その道賊はかゝる靈地に、片時も置く事叶ふまじ。早々下界に立歸れ。

民部　とめ置かるゝとも、やはか魔界に。

三尺　その一言に見ゆる別れ、後々後悔仕らん。

民部　然らばこれより。

三尺　走るに及ばぬ、下界へ見送り得させんず。

ト此うち後より山賊二人、窺ひゐて

二人　怪しき曲者。

トかゝる。それを相手に立廻り、大ドロ／＼にて三尺坊引抜き、天狗の形となつて、鳴り物變る。

民部　ヤヽ、其お姿は。

三尺　嬉しや望みのこの名號、これより直ぐに飛行せん。

民部　我れはこれより。

二人　おのれらが。

ト紐ひつく。よろしくドロ／＼にて、三尺坊は雲にて消える。あと三人立廻りあつて、キッとなる。よき時分、下の方へ三尺坊現はれ

三尺　見よ／＼、民部、下界の境これかぎり。今ぞ別れのしるしを見せん。

ト大ドロ／＼になり、三尺坊、民部を連理引きに引附ける。杣二人やらじとするを、術にて取つて投げ退け、その隙に民部を引附け

來れや、民部。

ト大ドロ／＼鳴り物烈しく、民部を引揚げし體にて、兩人を、だん／＼上へ引揚げる。これに隨ひ、下の道具知らせに附き、低くなり、杉の木は枝ばかり見ゆる。よき時分、雲の幕を振り落す。

本舞臺、正面秋葉山、銅の大鳥居。後淺黄幕。上の方、杉の大樹。こゝに油提灯吊つてある。下の方に石の榜示杭、秋葉山道掛川宿と記し、すべて東海道掛川宿の體。ドロ／＼にて、雲の幕切つて落す

ト眞中に民部之助、氣を失ひ、石にもたれゐる體。ドロ／＼打上げる。かすめて駄路、馬士唄になり

民部之助、心附きたる思ひ入れ。

民部　秋葉山にて怪しき御方、我れに示して前生まで、心に覺えて暇をこひ。その時聖に貰うたる、名

號渡して歸り道、雲霧かゝると覺えしが、思はず爰へ落ちたる樣子。あたりを見れば

ト よく／＼見廻し

こりやコレ、掛川秋葉山の鳥居。今日岡崎の矢矧の橋より、アノ爰までの道のりは

ト指を折り、こなしあつて

宿もすんでに十一宿、その道のりも二十五里。それを思はず一夜のうちに

ト懐より鈴鹿で手に入る手紙を出し

「八平次さまへ赤福屋五郎作」。こりや雷丸の樣子を記せし

ト思ひ入れ。此うち後より雲助二人、窺ひ出て

雲甲 そんなら岡崎、矢矧から、藤川、赤坂、御油、吉田、雲の上から見下ろして

雲乙 二川、白須賀、新井、舞坂、宿料も遣はず直ぐ通り、濱松、見附、袋井まで。天狗のお供で馬駕籠に

雲甲 乘らねど雲に乘つたので、駄賃いらずの仕合せ者。雲に乘つたら雲助の、おいらが仲間になる氣はないか。

ト差寄る。民部之助、聞いて

民部　アヽ、そんなら野宿の雲助か。成る程、わいらが云ふ通り、二日にあまる十一宿、暫時のうちに袋井まで、これも秋葉の御利益ならん。エヽ、有り難うござりまする。

ト鳥居の方に向ひ、拜するを見て

雲甲　コレ〳〵。雲から落つればわれも雲助。どうでも仲間に

二人　入れねばならぬ。

民部　アヽ、又しても仲間呼はり。雲には乘つても雲助には

雲乙　ならずばわれが懐の、八平次さまとある、手紙をおいらに

二人　見せてもらはう。

民部　ヤ、この手紙か。こりや短刀の在所の手がゝり。わいらが見たとて、何の役にも立たぬ品。

雲甲　八平次さまとあるからは

雲乙　ちよつとおいらが。

ト懐へかゝるを、突き退け立廻り、此うち馬士唄聞える。民部之助、二人を引附け、キツとなる。この時捨て鐘の頭へ打込み、紙帳を破り、日本馱右衛門、實は丹波與八郎、百日鬘、大廣袖にて、顏を出し、この體を見る。舞臺の三人、立廻りよろしく、民部之助、隱し持つたる一腰を抜き、二人を切り倒

す。この時駄右衛門、舞臺へ出て來り、後より民部之助が懐中の手紙へ手をかけ、キツとなつて、これより凄き鳴り物になり、立廻りのうち、駄右衛門、懐中したる、石部の宿にて手に入りし楠の系圖の一卷を落す。民部之助これを拾ひ、駄右衛門は雷丸の手紙を取り、兩人よろしく、だんまりの立廻りにて、トヾ左右へ別れて、星影にかざし、ちよと見る事あつて

駄右　手紙の文言、雷丸。

民部　正しく系圖は楠の

駄右　ヤ。

ト兩人とも懐中する。木の頭。駄右衛門、花道へ行く。よろしく拍子　幕

この幕、掛川銅鳥居の模様、鳴り物變つて、花道を駄右衛門、振つて入る。知らせに附きシヤギリ。

三幕目

日坂入山津村の場
小夜の中山夜啼石の場
同無間の鐘の場
金谷島田大井川の場

役名――石井半次郎。八つ橋村左次兵衛。島田の萬九郎。盗賊、銅八。赤羽屋五郎作。栗原丹藏。一子、與之助。菊川の友六。山形屋義兵衛。狩人、岸七。同、洞六。女非人、おはぎ。奴、逸平。與作女房、小まん。與作母、お浪。日本駄右衛門實ハ丹波與八郎。八つ橋村のお松。竹村定之進。伊達の與作。非人、江戸兵衛實ハ藤川水右衛門。

本舞臺三間の間、正面松並木、吊り枝、うしろ藁葺き長家の脊戸口、出入りあり。家の軒に、晒し表の草履、竹の皮の草履なぞ吊し、下の方榜示に東海道日坂宿と記し、すべて入山津村、非人宿の體。四つ竹の合ひ方にて幕明く。

ト爰に江戸兵衛、實は水右衛門、五十日鬘、手拭をかむり、切繼ぎやつし、蓆を敷き、草履を拵らへてゐる。岸七、洞六、狩人の形にて、鐵砲へ猿の打ちしを一疋つけて賣りに來てゐる體。

岸七　コレサ〳〵、江戸兵衛、おいらはいつでも貴樣の所へ賣りに來るが、其やうに値廉につける事はねえ。

洞六　さうサ、もうちつと買はつしやいな。

江戸　どうして〳〵。夏皮は値にはならぬ。それでよくば、賣つてゆくがよい。

崖七　エヽ、どうなるものか。賣つてしまへ〱。

江戸　サア、それでよしかえ。ソリヤ、八十五文。

ト遣る。

洞六　エヽ、賺いものだ。山仕事をするより、お觸れのお尋ね者を尋ねる方が、はるかましだらうな。

江戸　コレ〱、お尋ね者とは、そりやア誰れを尋ねるのだ。

崖七　アヽ、てめえ知らねえのか。お代官からのお觸れは、因州の武士白井權八、殊に、海賊花名屋德藏、それも今では變名して

洞六　今のその名は日本駄右衛門。これも虚無僧の形にやつして徘徊するから、召捕つて出す時は、御褒美は望み次第。もし手に餘らば、鐵砲で打つても大事ないとの事。

崖七　その上に、官太夫さまとやらが、石山から駈落ちした、重の井姫といふも、見附けたら連れて來い、それも否だといつたら、首にしても大事ないと、尋ねる最中。

洞六　さういふ仕事にかゝるのが、濡れ手で粟の儲け口。てめえも草履を拵らへる手間に、その仕事にかかるがいゝぞよ。

江戸　イカサマ、そいつは話しが出來るわえ。併し、重の井姫とやらは、お前方も、滅多に殺しては惡

いぜ。

崖七　なんの、いらぬお世話。助けて置いたとて、姫が非人の色にはなるまい。

洞六　サア、行かう〳〵。

ト矢張り四つ竹の合ひ方にて、兩人、向うへ入る。

江戸　そんなら、あの親人が、人知れず姫の詮議。殊に、おれが所へ内々で金を送らしつたも、丹波與惣兵衛を殺した時、思はず受けた刀疵。今では金瘡、癒す藥も官太夫さまから、コレ。

ト頁入れより藥を出し

藥はあつても、辰の年月日時揃ひし女の生血。……あの女は、もう歸りさうなものだが。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより前幕のおはぎ、小風呂敷包みを持ちしお松の手を引き、出て來り

まつ　モシ〳〵。爰はもうお前さんのお内かえ。

はぎ　ナニサ。外にちつと用があつて。その内へ寄つて行くのサ。

まつ　エヽ、左樣かいなア、わたしや又お内へ參つたと存じて。

はぎ　サア、來な〳〵。

ト舞臺へ來て

江戸兵衛さん、いま歸つたよ〳〵。

江戸　アヽ、歸つたか。そして賴んだものは、あつたか〳〵。

はぎ　あつた段か。喜びなさい〳〵。

ト江戸兵衛、お松の顏を見て思ひ入れ。

江戸　モシ〳〵、女中さん、此かみさんにちつと話しもあるから、マア、今夜は此方に泊りなさい。

まつ　何分よろしうお賴み申しまする。

江戸　そんなら斯うしなさい。爰には蚊が多いから、わしが內へ行つて橫になつてござりませ。必らず遠慮しなさんな。

まつ　アイ〳〵、左やう致しませう。駕籠より出まして、大きに足を痛めました。どうぞ其お內を借りまして。

江戸　さうしなさい〳〵。コレ〳〵、この口から入つての、內は穢ないがその代り、お前の內だと思つて、勝手にしてござりませ。

まつ　ハイ〳〵、有り難うござります。モシ、おかみさん、左樣なら、わたしはお先へ。

はぎ　さうしなさんせ。わたしも後から。

江戸　寝ころんで行きな。

ト合ひ方、入相の鐘になり、お松、包みを抱へ、件の口へ入る。江戸兵衛、跡見送り、莨入れより錠を出し、門口へシヤンと卸し

これでよし〳〵。……コレ、おはぎ、あいつが面は、ありやア化け物だ。あんな者に、誰れが金を出して

はぎ　それだから大抵、嬉しかつた事ぢやアないわな。

江戸　さうして親元は。

はぎ　三州の八つ橋村で、苦しがりの母の難儀に、金の代りに。

江戸　そりやアいゝが、年の事は

はぎ　辰の年月日時の生れ。その證據は、コレ。

ト件の守り袋を出して渡す。江戸兵衛開き、臍の緒の書附けを讀む事あつて

江戸　成る程、年月揃うた女が生れ。して、親の名は。

はぎ　百姓の左次兵衛といふ者。まだ外に妹も一人。

江戸　ムウ、八つ橋村で左次兵衛。そいつは慥か、道中名うての目明し。それぢやア今の女は、與惣兵衛が娘の、……ほんに、てめえ、骨折りであつたの。斯う見たところは、きつとした、商賣屋の嬶アだ。乞食とは見えぬわい。

はぎ　そいつは嬉しいの。お前の頼みでしつけぬ仕事。その代り、江戸兵衛さん、お禮があらうの。

ト寄り添ふ。

江戸　置きやアがれ。併し、人に云ふなよ。

はぎ　そりやア承知サ。ドリヤ、行水をして來ようか。

ト合ひ方、時の鐘になり、向うへ入る。江戸兵衛、殘り

江戸　あの女を頼んで、辰の年月揃ひし女が生膽、首尾よく引寄せ、金鑚りの、腕の疵を。……アヽ、殺生にかゝらねばなるまい。

ト時の鐘になり、この道具廻る。

本舞臺、毀れ壁。いつもの門に。竹藪。よき所に閻爐裏。壁へ獸の皮を吊し、上の方、板戸の納戸、古行燈をともし、お松、圍爐裏の中に蚊遣りを仕掛けゐる。時の鐘、合ひ方、蟲の音にて道具納まる

まつ　アノマア、府中のおかみさんは、どこへござんしたやら。わたし一人爰へ寄越して、何ぢややら氣味のわるい内。それに附けても、お懐かしいは民部さま。義理ある妹のあのお袖と、さぞ今頃は睦まじう、エヽ、羨やましい。

ト思ひ入れ。この時、天井の方へ鼠出で、バツタリと何やら落す。悄りして

オヽ怖。何やら爰へ。

ト行燈にて、よく／＼見る。皮を剝きし猿の手を取上げて驚き

これはしたり。こりや赤子の手を鼠が引いて。ハテマア、氣味のわるい内。上から物の落ちぬ所へ。

ト思ひ入れ、あたりを見て、獸の皮なぞを見附け、

ヤヽ、こりや、いろ／＼獸の皮。そんなら赤子と見えたのは、猿ぢやさうなが、此やうな怖い所に、一夜でも、どうして／＼。モウ／＼、野宿をしても。

ト包みを抱へ、門口へ出ようとする。この時外より江戸兵衞、出刃庖丁を雜巾に包み、窺ひ出て、ガラリと戸を明ける。お松、悄りして慄ふ。

江戸　どこへ行くのだ。

まつ　アイ〳〵。こりやお内の御亭主さん、わたしや連れのおかみさんを、尋ねてちつと
江戸　あの女なら、錢湯に行つた。
まつ　そんなら、わたしも
ト行かうとするを引廻して
江戸　ナニ、行くにやァ及ばぬ。無駄な事だ。
まつ　イエ、外に用事がござんすゆゑ。
江戸　ナニ、用が。……用があらうが、話しは出來ぬ、コレ、女中さん、そんならこなさん、何も譯は知らずに來たのか。
まつ　アイ、譯は知らねど、お内儀さんが、情の金も三十兩、母の難儀に、この身は勤めに。
江戸　こりやァ大笑ひだ。そんな面で大枚金も三十兩。あの金出したもこの江戸兵衛、どうしてそれで勤めがならうか。
まつ　エ。して、外に何ぞわたしを。
江戸　この年月の書き物から。
ト件の守りを見せる。

まつ　そりやアノ、わたしが、辰の年月揃ひし臍の緒の、その書き物がどうしたえ。

江戸　命を買つた。

まつ　エヽ。

江戸　命も命、辰の年、日時揃ひし女の生膽。それが欲しさに苦患は助ける。その代りにやァあの世は樂々、そこで往生かんねんだ。生膽ばかりが三十兩、なんと膽が……潰してくれちやァいけねえぜ。

まつ　そんなら命を取らう爲、わたしを騙して、アノ爰へ。見ればどうやら、この内も

江戸　乞食はしても、お剰り貰はぬ、情を知らぬ江戸兵衛が、仕事にかゝつて來たのが往生。

ト砥石を出して出刃を砥ぐ。お松、いろ／＼あつて

まつ　イエ／＼、この身は賣れど、なんで命を賣るものぞ。あのおかみさんに逢うた上。

ト駈け行くを引ツ捕へて

迎ひの女も此方の手先。たとへ泣かうが、喚かうが、跡先き遠き一軒家、牛馬を剝ぐは常ながら、ちつと手馴れぬ女の生膽、稽古の爲にして見る仕事、痛い目堪へて、くたばつてしまへ。

まつ　そんなら、どうでも、助けては。

トこなしあつて

成る程、非業に死ぬるのも、これも何ゆゑ、母の爲、命は、さら／＼惜しまねど、民部さまの情のおどもり、日の目も見せず殺すのが……それは格別、語らふ男を、義理ある妹に見かへられ、恨み云はいで死ぬるのが、どうもわたしや口惜しい。只この上のお慈悲には、恨みのたけをこまん／＼と、書き殘して死にたうござりまする。どうぞ其うちわたしが命。

江戸　その位な事は聞分けてやらう。サ、書くなら早く。

ト硯箱を出して差附ける

まつ　アイ／＼、どうぞ少しの間

ト懷中を見て、紙を落せし思ひ入れにて

折惡う鼻紙とても。

江戸　おれも持たぬワ。そこらの物へ何なりと書いてしまへ。サア、屆けてやらうワ。

ト此うちお松、持つて來りし包みの中より、孔雀染めの振り袖を出し、この裏の白きを見附け

まつ　幸ひわたしがその以前、新造なりの小袖の裏、白い所へ恨みのたけを

江戸　其うちおれは、われが腹を裂く、刃物はこの出刃、痛まぬやうに小石を當てゝ

まつ　小袖の裏は恨みの文言、可愛さあまつて民部どの、義理ある妹も、ナニ安穩で

トきつと思ひ入れ、向うを見詰める。江戸兵衞見て

江戸　エヽ、きり〳〵しろえ。

ト蹴飛ばす。お松「ハア」と泣き落す。江戸兵衞、ニツタリ笑ふ。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、元の松並木、脊戸口の道具に戻る。爰に逸平、旅奴の形にて葛籠を脊負ひ、崖七、洞六、鐵砲にて取卷き、栗原丹藏、半纏、股引の侍ひ、黑仕立ての捕り手四人、立ちかゝり、逸平を圍みゐる禪のツトメにて納まる。

捕手　動くな。

逸平　こりや狼藉なお侍ひ。何ゆゑあつて下郎めを。

丹藏　ヤア、吐かすな〳〵。うぬが脊負ひし葛籠の中、正しく大江の重の井姫、不義の相手は與八郎、いま强盜の日本駄右衞門、彼奴等に、いよ〳〵極まらば、首打ち來れと官太夫さまの仰せを受け附け廻したる栗原丹藏。キリ〳〵葛籠を渡すまいか。

崖七　あなたへ訴人は狩人の

洞六　おいら二人が日代の役。奴め、姫を
皆々　渡せエヽ。
逸平　なに、小癪なる支へだて　聞分けないと、奴が相手。
丹藏　エヽ、面倒な。ソレ、召捕れ。
捕手　やらぬワ。

ト逸平にかゝり、立廻り、禪のツトメになり、向うより旅人二人、三立目のしつぺい太郎の犬の首につなぎ錢お拂ひを結びつけ、綱を附けて引いて出て來り、この中へ入り

旅人　ハイ／＼、御免なされませ。
丹藏　ヤイ／＼。おのれらは旅人なるか。お尋ね者の姫を詮議の最中。加勢いたさば褒美をくれん。身共に隨ひ、働らけ／＼。
旅人　ハイ／＼、褒美とあらば犬も働らけ。オヽ、シキ／＼。

トけしかける。この時、犬は敵役に喰ひつく。皆々驚き、這々にして下座へ逃げ行く。犬は附いて追ひかけ行く。逸平も行かんとする。

丹藏　慥かに重の井。

ト葛籠へかゝる。これより、誂らへの鳴り物になり、逸平、丹藏、いろ〳〵立廻りあつて、この道具廻る。

本舞臺、元の非人の家になる。

ト凄き合ひ方、時の鐘、蟲の音。爰に皮干し板にお松をかすがひどめにして、荒繩で縛り、よき所へ立てかけ、闇爐裏の中に焚き物をくべ、蚊遣りを仕掛け、件の小袖の裏に書置の認めあるを、古行燈にて江戸兵衛讀んで居る體にて、道具納まる。

江戸　アヽ、この書置の樣子では、そんならわれは、與惣兵衛の娘、腹變りにて、與八郎が爲には妹の明石のお松。ハテサテ、どこにどうした事が。

まつ　そのマア武士の娘にて、人並ならぬ皮剝ぎの、おのれら如きの手にかゝり、畜類同樣、この世から、獸に等しきこの有樣。エヽ、おのれはなア。

江戸　イヽヤ、その畜生の皮は剝いでも、おらァ誠の非人ぢやァねえ。名におふ藤川官太夫、その御子息のこの江戸兵衛。惚れた女は重の井姬、送る艶書を見附けた與惣兵衛、それゆゑにこそ邸を追放。その怨みある與惣兵衛ゆゑ、親子が寄つてぶッ放し、その時受けたこの金瘡。われが爲には

おれは敵だ。それ聞いたなら、口惜しいか。口惜しくつても板ばッつけ。どうして手出しがなるものか。

トあざ笑ふ。お松、無念の思ひ入れにて

まつ　そんなら父さんを殺したのも、おのれが仕業であつたよなア。その敵たるおのれが爲に、命を落すが口惜しい。手が叶はずば、喰ひついてなとおのれを。エヽ、誰れぞ來てくれぬかいなう。

トいろ〳〵身を揉み

エヽ、何の因果で此やうに、憂き目にあふか。口惜しいわい。口惜しいわいなう。

江戸　道理だ〳〵。成る程、われは因果者。それに引きかへ此方は仕合せ。敵を討つべきわれまでも、縛りからげて腹を裂き、その生血が藥となる。敵のおれを助ける良藥。みす〳〵爰で返り討。イヤ、返り討も多く見たが、皮干し板での此ざまは、ハテ、珍らしい。コレ、その上われが兄といふ、與八郎めも後からやる。われから先へ、くたばつてしまへ。

まつ　聞けば聞く程、その恨み。喰ひついても、この繩が、エヽ、死にともない〳〵。誰れもゐぬかいなう。アレイ〳〵。

江戸　高吠えするな。その鳴くのがこの世の別れ。今が皮切り、辛抱しろ。

ト「アレイ〳〵」と踠くお松の胸元を出刃を以て突込む。これにて苦しみ、身悶えするを、江戸兵衛よろしくこなし。この時　腹の中より赤子出て泣く。江戸兵衛、恟りして

なんだ。赤子か。エヽ、不便な餓鬼だ。

ト引出して門口へ捨てる。この時、薄ドロ〳〵にて、お松、眼を見開き、江戸兵衛をキツと見る。

なんだ。まだ死なねえのか。エヽ、執念ぶかい。

ト死骸の板を蹴飛ばし、隅より素焼の壺を出し、捨ぜりふにて生膽を出し、壺の中へ入れ、片口を出し、懐の薬を半分引明けて、血を浚し、一つにして

こいつは餘ッほど飲みにくからう。

ト顔をしかめながら、グッと飲む。時の鐘、バタ〳〵になり、向うよりおはぎ、そぼろなる姿に着替へて駈けて出てくる。後より件の犬、駈けて出てくる。おはぎ、犬を追ひ散らして

はぎ　エヽ、畜生め。乞食だといつて吠える事はねえ。シツ〳〵。

ト門口へ來る。江戸兵衛この聲を聞き

江戸　おはぎぢやァねえか。

はぎ　江戸兵衛さん。して、お前、あの女はどうした。

江戸 藥に交ぜて、あいつが生血で。

はぎ エヽ、嫌だなう。

江戸 これから、この死骸を、表の流れへどんぶり、手傳つてくりやれ〳〵。

はぎ アイ〳〵。承知しました〳〵。

ト兩人して死骸の附きし戸板を奥へ持ち行く。よろしくドンと水の音。兩人、出て來り

モシ、江戸兵衛さん、わつちはおつな事を聞いて知らせに來ました。アノ海賊の棄名屋德藏、變名して日本駄右衛門、また因州の白井權八、その駄右衛門が今日この邊へ、旅虚無僧になつて來たと宿内の騷ぎ。殊に、虚無僧が二人まで通つたから、いづれ其うち一人はお尋ね者、召捕つて出せば、褒美との事。油斷しなさるな〳〵。

江戸 そいつはいゝ仕事が出來たな。

はぎ そりやァさうと、お前の飮んだ藥は、どんな丸藥だ。

江戸 ナニ、丸藥ぢやァねえ。コレ、こんな藥だ。

はぎ ドレ、ちつとお見せ。

ト藥の包みを取つて見て

オヤ〳〵〳〵、これが血で服む藥かえ。わつちらは酒で服む藥なら服んでも見ようが、人間の血ぢやア氣がねえの。

ト此うち件の犬、捨てゝある赤子を咬へるゆゑ、赤子頻りに泣く。おはぎ見附けて

ヤ、この畜生め。赤子を咬へて、どうしやアがる〳〵。

ト追ひ廻す、犬は咬へながら、向うへ走り入る。

エヽ、畜生め。その餓鬼を、どうしやアがる〳〵。

ト藥の包みを持つたまゝ追ひかけて入る。江戸兵衛これを見送り

江戸　コレ、おはぎ〳〵。まだその藥は服むのだ。置いて行け〳〵。飛んだまゼツ返しだ。……それはさうと、着物が血だらけになつた。ドレ、着替へずばなるめえ。

ト着物を着替へる事。かすめたる禪のツトメになり、向うより伊達與作、旅虚無僧の姿、風呂敷を脊負ひ、天蓋のまゝ出て來る。後より崖七、洞穴、鐵砲を持ち、窺ひ〳〵出てくる。與作、花道にて

與作　今日は思はず道行く梵論字に、逢うて修行の話しから、ツイ日を暮らして宿さへも、泊り定めぬ一人旅。アヽコレ、どうぞ今宵一夜を。……オヽ、あの内へ行て頼んで見ようか。

ト門口へ來り

モシ、頼みませう〳〵。

江戸　誰れだ〳〵。どこからござつた。

輿作　イヤ、わしは旅の虚無僧でござるが、今晩一夜、泊めて下さりませぬか。

江戸　ナニ、旅虚無僧だ。しめた。來たな。……泊めませう〳〵。

ト お尋ね者と思ひ、いろ〳〵思ひ入れ。

輿作　それは忝うござります。ヤレ〳〵、嬉しや、御免なされませ。

ト天蓋のまゝ内へ入り、草鞋を解く。崖七、洞六、嘵き合ひ、門口の藪の中へ忍ぶ。

江戸　ヤレ〳〵、お前、よく泊らしやつたの。サア〳〵、そんな鬱陶しい物は、取らつしやいまし〳〵

ト額を見ようといふ思ひ入れ。

輿作　イヤ〳〵、竹修行のこの身にて、天蓋取るは至つて不躾。宗門の掟、矢張り此まゝ。

江戸　ナニサ、掟も何もわしは構はぬ。それでなければお互ひに、顔は知れず、近附きになつたとて、變哲もない念頃仲。暑くろしいに、その天蓋は

輿作　でも參るから早々に、天蓋脫ぐは無作法ゆゑ、矢張り此まゝ。

江戸　ハテ、鬱陶しいに、いらぬ辭儀。

ト日を附けてゐる。時の鐘になり、向うより日本駄右衛門、實は丹波與八郎、これも旅虚無僧の拵らへにて出てくる。あとより黑仕立ての捕り手出て、花道にて

捕甲　お尋ね者の、正しく駄右衛門。

捕乙　さなきに於ては白井權八。天蓋取つて

二人　我れ〳〵が。

ト天蓋へ手をかける。駄右衛門、尺八にて兩人を打ち据ゑる。これにて兩人逃げて向うへ入る　駄右衛門、足早に門口へ來り

駄右　御免なされませ。

トつか〳〵と内へ入り、戸を締める。兩人、恟りして

江戸　見れば修行の虚無僧どの、あわてた樣子でござつたが、盗人にでも會はしつたか。

トこなしあつて

駄右　左樣でござる。思ひがけなう、だしぬけに、道の邪魔する狼藉者、よんどころなう此お内へ。……

見ましたところが、御僧にも、疾より泊つてござるのかな。

與作　アイヤ、此方とてもたつた今、お宿の無心申しかけ、草鞋の紐を解いたばかり。そこへ御僧も又

一人。

江戸 狼藉者に出合つてのけ、困らしつた虚無僧どの、見捨てにならぬがわしが氣性。不自由合點ごろついて、泊まる氣ならば幾人でも

駄右 お宿なされて下さるか。

江戸 虚無僧ならば泊めますする。おつな噂のその中へ、また面の出た旅虚無僧、二人に一人はお尋ね者

二人 ヤ。

江戸 アイヤ、遠慮に及ばず、泊らつしやりませ。

駄右 然らば一夜を。

ト草鞋を解く。

江戸 サア〳〵、遠慮なしに、爰へござりませ。

駄右 それは千萬忝うござる。

江戸 さてお修行者、お泊め申す分にやア、何もお互ひに遠慮はいらぬ。その天蓋を取らつしやるがよい。

駄右 イヤ〳〵、竹修行いたすからは、天蓋取らぬが宗門の掟。

江戸　イヤサ、さうぢやアあらうが、暑苦しい。遠慮に及ばぬその天蓋。
　ト手をかけるを拂つて
駄右　これが卽ち掟でござる。
江戸　ヘイ、マア。兎も角も。……暑さうなものだが。
駄右　それは格別、御挨拶も申さぬが、先へござつた其許の御生國はな。
與作　身共は矢張りこの近在。住家と申すももう僅か。して、其許は。
駄右　此方事はそれぞとも、所定めぬ旅の空。
與作　竹を修行にこの國へ
駄右　如何にも左やう。
與作　ハテ、似た事も
　ト駄右衞門へ目を附けて
あるものでござるな。
　ト思ひ入れ。此うち江戸兵衞は兩人へ心を附ける思ひ入れにて
江戸　モシ〳〵、泊めては進ぜるが、見さつしやる通りのわしが内、蚊帳も無ければ蒲團一枚、お恥か

しいが有るとは云はない。その代りにやア打解けて、今夜は話して夜を明かす。それに附けても先へござつた虚無僧どの。お前が其まゝござつては、後のお客も憚か遠慮。マア、お前からその天蓋を。

與作　サ、その儀は何分御容赦に。

駄右　左樣ござらば此方も、矢張り此まゝ。掟でござれば。

江戸　ハテ、虚無僧といふものは、情の鬪いが宗旨の楯か。但し二人が面體を、見せぬが掟とあるからは、どうするものだ、是非がない。泊めたが不請だ。ドリヤ、酒でも沸かして進ぜませうか。

ト合ひ方變つて、行燈を見て

南無三。油が無かつたか。アヽ、儘よ。焚火で間に合はさう。

ト爰にて行燈消ゆる。

與作　ヤ、蓆、疊に、夥しい、血の滴りが。

駄右　成る程、爰も。

トこれにて江戸兵衞うろたへ、砥石を取つて焚火の上へ載せる、これにて暗くなる。

與作　アヽ、御亭主には、何か焚火へ。

江戸　燻すが御馳走。

二人　ヤ。

江戸　ひどい藪蚊を防ぐには、煙るがいゝと思ふから。

與作　それでも焚火を。

江戸　煙くとも、辛抱さつしやりませ。

與作　我れらも辛抱いたさうが

駄右　床が低いか、澤山な。

江戸　蚤がゐますか。……待ちなさい。蒲團も無ければ敷き物に、これでも二人へわしは又、女が小袖を座蒲團代り。

ト圍爐裏の側へ、件の振り袖を裏返しに敷き、その上へ上がり、あたりに掛けし猪の皮を二枚取つて二人に出す。二人それを敷き

與作　こりや獸の生皮、蒲團の代りに暑苦しい。

駄右　これでは却つて蚤が出て

與作　皮の蒲團の御馳走は。そんならお內は

江戸　乞食非人サ。

輿作　アノ、御亭主は

江戸　非人の江戸兵衛。

輿作　すりや、この内は皮剝ぎの、旅籠屋ならぬ御報謝に

駄右　泊り合せた此方も、こけこんだりし乞食町、その御馳走に合ひ宿は

輿作　美濃が近江であらうなら、寐物語りも蚊にくはれ、敷いた蒲團も生皮の、それに引替へ色氣ある、
　こりや振り袖を御亭主は。

ト探り見て思ひ入れ。

江戸　乞食の蒲團は振り袖の、家にも似ざる不相應、泊めた二人の客僧は、いづれ一人はお尋ね者。

ト件の出刃を出し、圍爐裏に置いた砥石に當て、音せぬやうに砥ぎ立てる。

輿作　何か、キシ〳〵きしむ音が。

駄右　かくれざとう（茶立蟲）か但し又

トよき時分より崖七、上の方、洞穴、下の方より窺ひ出て、鐵砲の筒先を向けて、二人を覘ふ。三人これを知らず

江戸　家鳴りのするは竹簀の子、それで、キシ〳〵古家の

兩人　その鳴る音か。

ト思ひ入れ。江戸兵衞、出刃を研ぎ、手拭にて拭ふ。この時、左右の兩人、火蓋を切る。ドンと本鐵砲の音。この丸外れて、狩人各々手盛りをくうて兩方へ當り、立ち身にて苦しむ。この筒音に驚き、二人の虚無僧、一度に天蓋を取りて身構へ。江戸兵衞、出刃を見せじと膝の下へ隱す。これにて眞中の焚火、燃え立つ。三人顏見合せ、左右の狩人、見事にかへる。一時の仕組み。誂らへの合ひ方になり、キッと見得。

江戸　天蓋取つたる二人がしやッ面。

與作　忍び窺ふ曲者が、外れたる丸に

駄右　手盛りの筒先。

江戸　眠氣覺ましに魔除けの鳴り音。

駄右　御念の入つた

江戸　主が馳走。

與作　すんでの事に

江戸　エ。
兩人　危ない事の。
江戸　若い衆手合ひが夜仕事の、怪我が思はぬ亭主が不手前、……ドレ、澁茶なりと。
　ト合ひ方になり、江戸兵衛、奥へ入る。駄右衛門、小袖の裏を見て
駄右　ヤ、、小袖の裏に女の手跡。
與作　仇にはあらぬ、こま〴〵と、民部とやらへ恨みの文言。
駄右　兄與八郎と記した上、播州明石のお松とあるからは、もしや妹の
與作　生血の附きしは。
　ト兩方より小袖を引ッ張り見る。この時、江戸兵衛、スッと出て、手早く小袖を取り、前の流れへ打込む。兩人こなし。
江戸　イヤ、水に流して、何事も
駄右　この場をくろめる、主が胸も
江戸　お尋ね者の駄右衛門が、二人がうちに
與作　いかにも詮議の駄右衛門とは、わしが事だ。

江戸　ヤ、そんなら貴様が

駄右　イヽヤ、盗賊の駄右衛門は身共が事。

與作　ヤ、包むその名を明らかに

駄右　駄右衛門なりと自身の白狀。心ありげなその一言。

　　ト怪しむ思ひ入れ。

江戸　お尋ね者の駄右衛門に、但し一人は權八か。

與作　よし又、詮議の二人でも、皮剝ぎ如きの手に合はうか。痴けた事を。

江戸　合はぬところを、二人はおれが。

　ト出刃を持つて打つてかゝる。立廻りよろしく、此うち與作、ありあふ藥鑵を目潰しに打ちつける。誤まつて圍爐裏へ落ちて、水は散亂して焚火消ゆる。これにて忍び三重になり、二人は、探り／＼、包みを背負ひ、天蓋を持ち、與作は東の花道、駄右衛門は本花道へ別れて行く。江戸兵衛、切り立て切り立て探り、思ひ入れあつて

江戸　取逃がしたか。

　ト これを聞き、東西の二人、一時に天蓋をかむる。これを木の頭。


日坂
坂東三津五郎

エヽ、いま／＼しい。

ト持つたる出刃を口に咬へ、キッと尻をからげる。二人は別れて向うへ走り入る。これにて舞臺へ一面の黒布振り落す。

本舞臺一面の黒幕、前通り、藪心に土手松の吊り枝。上の方、影を見せたる切り出し、よき所に誂らへの夜啼き石、すべて東海道、日坂宿、並木の體。山颪しにて道具納まる。

ト向うより人足四人出て來り

人足　コレ／＼、いま聞く通り、山留木の御名代、官太夫さまのお通り。邪魔になる夜啼き石。サアサア、早く取除けよう。

三人　さうしませう／＼。

ト捨ぜりふにて、てんでに鋤鍬にて石のまはりを掘り返し、いろ／＼捨ぜりふにて、右の石を手繰りにして下座へ持ち行く。山颪しになり、向うより以前の犬、赤子を咬へしまゝ走り出る。後よりおはぎ、これを追ひ駈け、出て來り

はぎ　この畜生め、そのマア赤子を、どこへ咬へて行きやアがる、此方へ寄越しやアがれ。

ト追ひ廻す。これにて犬は下座へ入る。おはぎ、矢張り追ひかけて入る。禪のツトメになり、向うより逸平、手負ひのなり、葛籠を脊負ひ、丹藏と立廻りながら出て來り

丹藏　サア、素奴め。キリ〳〵姫を渡してしまへ。

逸平　ヤア、大切なる姫君樣、やはかおのれに渡さうか。

丹藏　キリ〳〵此方へ

逸平　なにを。

ト矢張り禪のツトメにて、兩人立廻り、いろ〳〵あつて、丹藏も手を負ひ、逸平も深手の體にて、葛籠へ撞となつて

逸平　エヽ、口惜しい。無間山までこの葛籠、姫を隱して與作に渡し、立歸らんと思ひしに、この深手では、とても存命。モシ、重の井さま。

ト丹藏、起きあがつて

丹藏　うぬ、その葛籠を。

トかゝるを又立廻り、逸平、丹藏を見事に切つて捨てる。丹藏、其まゝ谷へ落ちる。逸平も、ヌヂヌヂとなつて谷へ落ちる。すぐに、ドロ〳〵になり、前の石、コロ〳〵ところげ出てよき所へとまる。

石の中にて赤子頻りに泣く。これより薄ドロ〳〵、一つ鉦の合ひ方になり、件の石、パラ〳〵と砕け中よりお松の幽靈、件の赤子を抱いてスックと立つ。この時向うより銅八、盗人の拵へにて、ウソウソ出て來り、本舞臺へ來て、フト幽靈を見て、慟りして「アッ」と倒るゝ。此うち寢鳥、凄き合ひ方。

銅八、やう〳〵心附き

銅八　アヽ、こいつは堪らぬ〳〵。

ト立たうとしても、腰の立たぬ思ひ入れ。やう〳〵花道の方へ行きかける。お松の幽靈「モシ〳〵」と思ひ入れにて呼び返す。これにて銅八、慄へ〳〵側へ來て

アヽ、どうぞ、助けてくれ〳〵。

ト云ふを、お松の幽靈、赤子を出して、この子を頼むといふ思ひ入れ。銅八、呑み込んで

なんだ。この子をおれに頼む」ムウ。隨分頼まれてやるから、早く、消えてくれ〳〵。

トまた行きかゝる。お松の幽靈、思ひ入れにて何やら云ふ。銅八、これを聞いて

ムウ。日本駄右衛門といふは與八郎。その葛籠の中には、與八郎どのへ行く、重の井姫が入つてゐるから、どうぞこの葛籠を頼むといふのか。……そして、その葛籠はどこにある。

トこれにてお松の幽靈、指さし教へる。

らう。
よし〳〵。その駄右衛門といふはおれが親方。そんならこれから、この赤子と、葛籠を屆けてや

ト怖々側へ寄り、赤子を抱き取り、葛籠を脊負ひ、立たうとしても立たれぬ思ひ入れ。これにてお松の幽靈、嬉しやと思ひ入れ。ドロ〳〵烈しく、掛け煙硝にて消える。銅八、ムックと立ちあがり、思ひ入れあつて

そんならこれからお頭へ。さうだ。

ト山颪しになり、一散に向うへ走り入る。これにてよろしく直ぐに引返す。

幕

本舞臺、三間の間、遠州無間山の體。草葺きの世話屋體。正面、納戸口、押入れ。上の方、窟、松の大樹、誂らへの釣り鐘を掛け、上手、障子屋體。いつもの所に門口。これに名物ゝゝゝ飴の餅の看板。下手に飴の壺。重箱、勝手道具を取散らし、舞臺前岩組み、谷の切り穴。在鄕唄にて幕明く。

ト爰に旅人の仕出し、腰を掛け、餅を食うてゐる。小萬、世話女房にて茶など出してゐる。菊川の友六、やつしの形、上の方の釣り鐘へ撞木を搚らへ、綱を附けて、撞くやうに仕掛けてゐる。

小萬　どなたも、お茶を上げませうかえ。
旅人　イヤ〳〵、もうようござる〳〵。わしらは日坂泊りぢや。そろ〳〵行きませうか。
小萬　まだ日高でござりまする。ゆるりとなされませ。
旅人　大きに長居しました。イヤ又、名物の飴の餅、旨いことでござります。
皆々　サア〳〵、行きませう〳〵。
小萬　ようお出でなされました。
トてんつゝになり、旅人は、わや〳〵云うて向うへ入る。小萬、友六を見つけ、駈け寄つてこれはしたり。お前、いつの間に、其やうな悪い事なされます。
友六　コレサ、わしもさう思つたが、この頃はあんまり工面が悪いから、無間の鐘を撞いて、ちつと工面を直すつもりで。
小萬　イエ〳〵、あの鐘はナ、こちの内の預かり鐘、撞く事はきつい御法度。殊に、その鐘撞くと、未來で蛙が責めるといふわいな。
友六　ナニ、その蛙怖くないの。泥鰌汁の好きなおれが、恐れてなるものか。富を突くよりは早手廻しと、そこでソツと撞木を拵らへ、持つて來てのこの仕事。お前、だんまりでゐなさい。その代り、

お前に喜ばせる事がある。阿母は留守かえ。

小萬　今日は中山寺の觀音樣へ、あの與之助を連れて、行かれましたわいなア。

友六　そんなら待つてゐて話しあり。コレ、必らず、あの撞木を附けた事は、沙汰なし〳〵。

小萬　ハテ、惡てんがうも程があるわいなア。

ト在鄕唄になり、向うよりお浪、老けたる拵らへ、やつし形の與之助、からくり花火を大分持ち、出て來り、直ぐに門口へ來り、

なみ　娘、今、戻りましたわいの。

小萬　オヽ、母さんか。與之助も、今日は天氣がようて、御參詣が、さぞあつたでござんせうな。

與之　コレ〳〵、母さん。わしや此やうなよい花火を、買うて戻つたわいなう。

なみ　イヤモウ、買はにやならぬと云やつて、たうとうわしをねだり出したわいの。

友六　モシ、母さん、後生參りかえ。

なみ　オヽ、友六さん、なんと思うてござんしたえ。

友六　わしはこなさんに、ちと無心があつて。と云つて別の事でもないが、あの聟の與作どの、元は武士なれど、酒の上が惡いゆゑ、お前の心に違ひ、この間は家出して、內へも戻らず、ところへあ

の親仁の左次兵衛が、息子與作が身の上の詫び、親子連れで今朝から來て、是非頼むといふゆゑに、どうぞこなさん、料簡して、やらんせいの〳〵。

トこれにてお浪、小萬、顔見合せ、思ひ入れあつて

なみ　そりやモウ、いかいお世話でござんすが、とても、あの與作が酒は直りますまい。ナウ、娘。

小萬　アイ。いはゞ、わたしが氣に入らいで、置去りにしてござんした與作さん。わたしや何とも申されませぬ。兎角、母さん次第でござんすわいなア。

友六　さうであらうて。併し、酒の上の事はわしが請合ひ。いづれ連れて來ます。必らず、頼みます頼みます。

なみ　アヽモシ、折角のお頼みぢやが、とつくりと娘とも、相談いたしたその上で。

友六　ハテ、今日は幸ひ、日もいゝから、何分にも頼みます。いま連れて來ますぞや。頼みます。

なみ　これはしたり。それぢやというて

友六　頼みましたぞや〳〵。

トてんつゝになり、一散に向うへ入る。

なみ　あのマア人わいの。得心もさせいで、エヽ、滅相な。……とはいふものゝ、家出してより餘程の

間、さぞマア其方は。

　ト小萬を見て思ひ入れ。

此やうにはいふものゝ、常から惡氣の無い與作、酒を飲むと心が荒うなつて、親、女房の見界ひなう、殊に、親の左次兵衛は、東海道で名うての目明し、何かにつけて心が置かれ、その子の與作は、與惣兵衛さまに奉公して、わしも昔はあなたに勤め、其方は都で藝子して、馴染んだはあの與作、不奉公ゆゑお邸はお暇、殊に、若旦那與八郎さまの御子息、あの與之助さま。

小萬　いつぞや關の地藏で、お目にかゝつたその日より、お連れ申して世間へは、我が子と見せて朝夕に、與之助、どうせいかうせいと、お主のお子を我が子のあしらひ。殊更昨夜與八郎さま、葛籠の中には重の井さま、浮世を忍ぶお二人が、お出でなされて隱居家に。……かゝる時節にあるからは、御家來筋の與作どの。

なみ　成る程。歸してやるも力になり。さはいへ、今に短刀の、求める金も……アヽ、苦の世界ぢやなア。

　ト思ひ入れ、てんつゝになり、向うより友六、天蓋、尺八などを持ち、左次兵衛、二升樽を持ち、百姓二人附添ひ、跡より與作、やつし形、しよげたる體にて、ワヤ〳〵云うて出て來り

左次　これは友六どの、大きにお世話になりまする。
友六　ナニサ、お互ひの事だ。
與作　モシ〳〵、お前方。何かと御苦勞にござりまする。
百姓　もう〳〵、酒は飲まつしやらぬがよいぞや。
ト此せりふ云ひながら皆々、門口へ來り
友六　サア〳〵、阿母。連れて來たぞや〳〵。
ト内へ入る。
左次　これは阿母、大きに御無沙汰を致した。お變りもなうて、めでたい。……コレ〳〵、悴、此方へ入つてゐろ〳〵。
トこれにて與作、内へ入り、百姓の後へ廻り、もぢ〳〵してゐる。
なみ　お前も御息災で、おめでたうござります。
左次　イヤモウ、息災ばかり。年寄つて苦勞しまする。お袖めは家出する。姉のお松は生さぬ仲、藁の上から貰うた與作は、爰の内へ入り聟させ、生れついての惡酒で、皆樣のお世話といひ、わしも、だん〳〵と意見して、眞人間になつたゆゑ、詫び言ながら連れて來ました。コレ〳〵、小萬、阿

母の手前、執成しを、頼む／＼。

小萬　アイ／＼。主の惡酒さへ直つてなら、母さんぢやというて、なんのマア。

友六　さうとも／＼。コレ、與作どの。爰へ來て、阿母に挨拶さつしやれ。サア、爰へ出さつしやれ。

與作　ハイ／＼。こりやマア、どなたも大きにお世話でござりました。……コレ、小萬、てまへも阿母の手前、頼むぞよ。……モシ、母さん、わしはモウ、あの位ゐ好きな酒を、金毘羅樣へ大願をかけもう／＼、これ程もたべませぬ。爰のお内を出ましてより、彼處や此處にごろついて、常から好きな尺八で、虚無僧になつて旅稼ぎ、何處も同じ鳥の鳴く音と申すが、手前の内ほど、結構な事はござりませぬ。もう／＼、生れ變つたやうになりました。阿母、どうぞこれまでの事は料簡なされて、お内へ置いて下さりませ。……オヽ、與之助か、大きくなつたな。

ト手を突いて挨拶する。

小萬　あのやうに云うてぢやから、よもや間違ひもござんすまいわいな。

なみ　イヤモウ、あの與作が酒さへやめてくれゝば、申し分の無い生れ。それ聞いて、わしも、安堵しましたわいの。

友六　この人も大きに、うんぜうした樣子でござるて。コレ、與作どの、サア／＼、虚無僧の道具一式、

渡しましたぞや。

ト持つて來りし品を、よき所へ置く。

左次　時に、魚でも買つて來るところぢやが、今日は不漁ゆゑ、コレ、この酒は、忰には不向きぢやがわざとお神酒に上げて下され。

ト二升樽をそこへ出す。

小萬　これはしたり、酒で不首尾な主の土産に、このマア、樽は。こりや貰うたも同然といふところでござんすが、酒返しはせぬものといへば、こりや請けて置きませう。ナア、母さん。

左次　それは忝うござる。忰が事が濟みさへすれば、直ぐにお暇といふところぢやが、この邊に用もあれば、世話ながら、今宵は泊めてもらひませうか。

なみ　アヽ、そんならお前は、今宵泊つて。……蚊帳も狹いが、それ合點で。

左次　イヤモウ、蚊に喰はれても、めげる事ぢやござらぬわいの。ハヽヽヽ。

小萬　それはさうと、お前、もう御時分でござんせう。何が無うても、お茶漬なりとも。

左次　それは忝い。御馳走になりませうか。……コレ、忰、われも空腹であらうぞよ。

與作　アイ。久し振りで勝手へ參り、お前の相伴いたしませう。

友六　コレ〳〵、必らず酒はならぬぞ。
與作　きつと禁酒でござります。……どなたも晩ほど、お禮に參りませう。
百姓　なんの〳〵。それには及びませぬ。
小萬　そんなら、こちの人ゝ舅御樣。
左次　ドリヤ、御馳走になりませうか。
　　ト唄になり、小萬、與之助の手を引き、左次兵衞、與作附いて奧へ、友六、百姓は捨ぜりふにて向うへ入る。お浪殘り、思ひ入れあつて
なみ　今、與作が、禁酒したとは云やつたが、持つて生れたあの惡酒、どうも合點が行かぬ。殊に、土産と舅の持參のあの酒も、見るは目の毒、幸ひあそこに手桶の水、この酒と入れ替へて。オヽ、さうぢや。
　　ト合ひ方になり、思ひ入れあつて、上の方の裏手の手水鉢の水を明け、その中へ樽の酒を程よく明け、手桶を取つて來り、柄杓にて樽の中へ水を入れて、思ひ入れあつて、元のやうにして
これで、よし〳〵。あの酒好きな與作、うつかり酒は。……それにしても隱居家に、お忍びなさるお二人樣、もし姫君の大事とあらば、不便ながらも。

ト思ひ入れ。この時、下の方より歩き一人出て來り

歩き　コレ〳〵、阿母。お尋ね者の事について、村の會所へ、ちよつと、ござりませ〳〵。

なみ　アイ〳〵。そんならちよつと、聟どのや娘に話して。

歩き　ハテ、急な事ゆゑ、お前、來て下さりませ〳〵。

なみ　ハテ、マア、せはしない。

ト歩き、お浪を引ッ張つて下の方へ入る。てんつゝになり、向うより赤羽屋五郎作、町人の形にて、島田の萬九郎、廣袖やつし、一本差し、大弓に矢を添へ、擔ぎ出てくる。この時トヒョになり、空へ件の鷹、足に財布の搦みしまゝ舞うてくる。兩人見て

五郎　コレ〳〵、萬九どの、わしはこの間から病氣ゆゑ、掛合ひがしにくい。そこで、如才のない貴樣を頼む。雷丸の金の事は、こなたの見込みで。

萬九　ようござります。どうでお前の掛合ひではわかりませぬ。わしが手ひどく今日中に、方を附けて進ぜませう。

五郎　何分貴樣に任せますぞ。……それはさうと、その大弓は何でござる。

萬九　お前もお國にゐながら。この遠州では、大弓御免でござる。わしもこの間、町人の癖に、稽古し

ます。そこでその的場へ、歸りに出かけて行くつもりサ。

五郎　アヽ、さうでござるか。併し、大的を射るとちがひ、鳥などを射る事は、まだ出來ますまいの。

萬九　出來ないで堪るものか。空飛ぶ鳥でも、そりやア見事な事サ。

ト件の鷹を見つけ

五郎　アレ〱、あの空へ、鳶か、鷹か、何か足へ掴んで飛んで來たが、あれをこなた

萬九　そりやア隨分射るね。あの空の鳥を、射て見ませうか。

五郎　そいつは、見たい〱。

萬九　まづあの鳥を、的に見立て

ト空を見て思ひ入れ、弓に矢を番ひ、切つて放す。弦音して、鷹の足に掴みし財布の紐を射切り、財布は上の方釣り鐘の龍頭の上へ落し、鷹は空へ飛び行く。

五郎　イヤア、きついものだ〱。

萬九　イエ〱、鳥は射落さねば殘念。併し、足に掴んだものを、どこへか落して行きましたが。

ト方々見る。

五郎　ナニサマ、何かそこらへ落したと見える。

萬九　サア、參りませう〳〵。

ト門口へ來る。

五郎　サア、阿母、來ましたぞや〳〵。

ト兩人、內へ入る、小萬、出て來り

小萬　アイ〳〵。どなたでござります。

ト兩人を見て

こりや五郎作さま、今日も又。

五郎　相もならず來ましたは、雷丸の三十兩。今日わからねば、これ〳〵。

ト懷より袱紗包みの、短刀を出し

いま先樣へ賣りに行くのよ。阿母は留守か。返事を聞きに來ました。

萬九　金谷の宿に逗留の、官太夫さまへ持つて行きがけ、寄りましたは、五郎作どのでは解らぬから、そこでこの萬九郎が、面役で賴まれて來ました。サア、小萬どの、どうで出來ない金なれば、淸く向うへ賣らせるがよいわサ。

トよき時分、與作出て窺ふ。

小萬　アヽ、モシ〳〵。その短刀を外へ賣る位ゐなら、此やうに譯をいうて、お頼み申しは致しませぬ。どうぞ四五日、日延べなされて。

萬九　どうして〳〵、そりやアならぬ話しだ。さうあらうと思つて、わしが來たのだ。もう〳〵、待つだけ待つたら、云ひ分はあるまい。サア〳〵五郎作さん、賣つて來ませう。

五郎　さうしませう〳〵。

　　ト行きかける。

小萬　アヽ、モシ〳〵。そこをどうぞ料簡なされて。

兩人　エヽ、ならぬといふに。

　　ト振り切つて行かうとする。この時、與作、前へ出て

與作　アヽ、モシ〳〵。お待ちなされませ。

兩人　ムウ。こなたは誰れだ。

與作　ハイ。私しはこの家の入り聟、與作といふ者でござりまするが、今、云はしつた雷丸は、阿母の爲にも大事の主人、尤も親旦那は不慮の横死、若旦那のお行くへも知れねども、いはゞ、わしらは家來筋、一合取つてもわしも武士、その貰ひのある事を、萬更、まじ〳〵見ても居られま

せぬ。玆の道理を聞分けて、あの短刀は阿母へ、どうぞ買はせて下さりまし。

萬九　そりやァ尤もなお頼みだ。何か、貴様がアノ入り聟の與作どのか。

與作　左樣でござります。

萬九　五郎作さん、いゝ男だねッ

五郎　さうサ、男はいゝが、大の惡酒。評判の惡なまサ。

ト思ひ入れあつて

萬九　モシ、こりやァお前、お初にお目にかゝりましたが、わしは萬九郎と申す者、五郎作さんに頼まれて、斷わりに來ましたが、聞けば、お前もお侍ひさうなが、今のやうに云ひなさる事なら、そりやァ向う方を斷つて、お前の方へ賣りませうが、今その金が參りやすかえ。

與作　サア、そこでござります。金というては、只今には。四五日の日延べの事を

萬九　措きなさいな。なんの事だ。買はせろといふから、此方も向うを變替へて、金はといへば、日延べとは、そりやァ、お前、解らない話しだ。よしなさい。退いてゐなせえ。なんの事だ。侍ひの、武士だのと、男ばかり立派で、おへねえ間抜けぢやァないか。

トこれにて與作、思ひ入れ。五郎作、見て

五郎　コレ〳〵。腹が立つなら早く爰へ、金を出して買はッしやい。

萬九　金が無くば、退いてございな〳〵。

小萬　コレイナア、こちの人　お前の挨拶でも、あの衆は、待たぬかいな〳〵。

與作　サア、今のやうに云はれては、皆あの衆が尤もで、おれに仕様が

小萬　サア、尤もでござんせうが、さういうてはお主様へ、わたしも、母さんも立たぬわいな。お前も、腑甲斐ない。……モシ〳〵〳〵、お二人さん。いま申しまする通り、あの品が外へ参りましてはお主人様へ主も、わたしも。

五郎　コレ〳〵、その主人は與惣兵衛とやらいふ人。その主人は死んだぢやござらぬか。

萬九　息子はあつても日蔭者。どこへ義理があるものか。コレ、それともに、きつとした仲人が入つていつのいつまでには買ひますから、それまで待てと、男らしい者が出さへすりやア、話しがならうが、ナニサ、あのやうな間抜けが出て、あれでも男か。イヤ、大笑ひだ。

ト小萬、酒樽を見つけて思ひ入れ。

小萬　アヽ、モシ〳〵。左様なら、女のわたしゆゑ御不承知。それも尤も。きつと致しました仲人を入れませうほどに、その時どうぞ。

兩人　それがあるなら、話しを直して。

小萬　アイ。ちつとお待ちなされて下さりませ。

ト合ひ方になり、門口へ出て與作を招き、件の酒樽を持ちゆき、この酒を飲んで挨拶してくれと小聲になり頼む。與作、惘りして

與作　エヽ、滅相な。おれは金毘羅樣へ一生、酒は

小萬　オヽ、さうでござんせうが、いま聞かしやんす譯ゆゑに、一口飲んで、

與作　恐ろしや／＼。どうしてそんな事が。

小萬　ムウ。そんならお前、常から云はしやんした、御主人の事は思はずかえ。

與作　ハテ、御主人は大切ぢやヮ。

小萬　そんなら飲んで日延べの事。

與作　それぢやというて。

小萬　さうでござんせうが、わたしが願うて止めた酒。それをまた破らしやんすは、わたしが頼み。どうぞこの酒、飲んで下さんせいなァ。

與作　成る程なァ。神佛の罰よりも、恐ろしいは主人の罰。慾に目の無い親仁どの。おれがお主は與惣

兵衛さま、かゝりや繫がる姑も、元は丹波の矢ッ張り由縁。こりやモウいつそ、願酒を破つて。

ト樽の酒を茶碗へつぐ。

小萬　そんならお前、飲んで下さんすか。

ト手を合せる。與作、グツと飲むと、水なるゆゑ、恟りして

與作　ヤア、こりや酒では

ト云はうとして、キッと氣を變へ、引受けて飲む事。

小萬　エヽ、ようその酒を。

與作　まだ／＼飲むワ。酒さへ飲めば千人力。大男でも負けぬぞ。

ト萬九郎、五郎作、内より見て

萬九　見れば與作は　無性に煽るな。

五郎　アヽ、酒を飲んでは、いつもの地金。

萬九　事の無いうち仲人は

五郎　サア／＼、小萬、仲人は、どうぢや／＼。

小萬　ハイ／＼。仲人は只今支度最中でござります。

五郎　なんだ支度だ。

萬九　支度も贅澤もいらぬワ。その仲人を、出せ〳〵。

小萬　サア、その仲人は。

ト此うち與作、無性に飲む。小萬、早う出てくれと仕方する。與作、内へ入り、眞中へ出て

與作　仲人はおれだ。

トどつかり坐る。

兩人　ヤア。

與作　その仲人は、不肖ながらわしサ。おれ樣だ。二人の手合ひ、仲人だぞ〳〵。

ト醉うたる體にて云ふ。

兩人　コレ〳〵、アノ仲人は、矢ツ張り與作か。

小萬　外というても賴むお人、主を賴んで今の對談。

與作　わしがするのだ對談を。コレ〳〵、二人の手合ひ、しつこい事だが、待つて下さい。わしが賴みだ。待つてもらはう〳〵。

萬九　コレ、貴樣が仲人か。待てといふなら、待ちもしようが、いつまで待つのだ。

與作　明日まで。
兩人　ナニ、明日まで。
與作　まゝ、明日が間違つたら、明後日。それが違つたら、その先へ、だん／＼送りに待つてもらはう
　その積りに賴むぞえ。よしか／＼。
　　　ト始終誠の生醉ひの思ひ入れ。
萬九　コレ／＼。この男は人を何だと思ふ。そんな解らぬ仲人があるものか。とんだ飲んだくれだ。
五郎　こいつは又。醉つたな／＼。
與作　どうして醉つた……醉つたらどうする。醉つて云ふぢやねえが、ほんの事だが、其また金が出
　來ずばどうする。それをならぬといつて、外へ賣つて見ろ。只置くものか。唐變木め。
萬九　ナニ、此奴は大風な事をいふな。外へ賣つたらどうするえ。
與作　やつて見ろ。只置くものか。
萬九　置かぬといつて、どうしやァる。
與作　斯うするわえ。
　　　ト莨盆にて頭を打割る。

萬九　アイタヽヽ。

五郎　どうした〳〵。

萬九　頭が割れた〳〵。

小萬　コレイナア。あの人の頭を。

ト與作を止める。

與作　どうともしねと吐かしたから、どうともしたのだ。コレエヽ、おれも以前は武士の飯を食つた與作だ。今でこそ狩人よ。鐵砲も御免で渡つてゐるぞ。それに又、ふざけた事を吐かすと、コリヤこの鐵砲で定九郎もどきだぞ。サア、待ちますといふ一札を書け。書かねえとこれだぞ。

ト後の鐵砲を取つて火縄を附け、二人の方へ筒先を向ける。兩人、驚ろき

兩人　アヽ、コレ〳〵。鐵砲で撃たれてたまるものか。

與作　一札を書かねえと、これだぞ。

小萬　アヽコレ、また例の悪酒。併し、その鐵砲で

與作　彼奴等二人を並べて置いて

兩人　アヽ、コレ〳〵。云ふ通りにしようから、その鐵砲は。

與作　そんなら、書くか。
兩人　アヽ、書きます〳〵。
與作　書くなら、おれが名宛てにして、外へ一切賣るまいといふ。その一札に印形しやれ。
五郎　それでは貴様が十分だ。
兩人　どうもそれは。
與作　書かぬと、これだぞ。
ト鐵砲を向ける。
五郎　書きます〳〵。
萬九　早く書かッし。
五郎　アイ〳〵、書きます。
ト矢立の筆にて鼻紙へ、サラ〳〵と書いて、爪印なして
ハイ〳〵。卽ち爪印。
與作　これでよし〳〵。金が出來たら、跡から行かう。
ト取つて

五郎　そんならわしらは、
萬九　島田の宿で待つてゐよう。
與作　必らず賣るな。
兩人　どうして〳〵。……イヤ、とんだ證文を取られた。

ト唄、時の鐘になり、兩人、向うへ入る。小萬、思ひ入れ。

小萬　コレ〳〵、こちの人。酒を留めたはわたしが誤り。せつない時の神頼みと、神樣への僞りも、いはゞ、お主と親のため、サア、ちつとも早く金毘羅樣へ、申し譯して下さんせ。
與作　エヽ、打ッちやつて置け。ナニ、酒をやめるものか。
小萬　これはしたり。ちよつと漱ひして神樣へ、申し譯して下さんせ〳〵。
與作　エヽ、よしやれよ〳〵。

ト思ひ入れ。小萬、手水桶の柄杓を取つて、水と心得差出す。與作、捨ぜりふにて、思はず柄杓の酒にキツと心附き

ヤア、こりやコレ、酒を。
小萬　エ。

與作　アヽ、まだあるぞ〳〵。

ト樽を振つて見て思ひ入れ、向うバタ〳〵。與作、醉うたる體にて寢る。時の鐘になり、栗原丹藏、ぶッさき羽織、袢纏、股引、大小の姿にて、捕り手四人附きそひ、走り出て來り

丹藏　ソリヤ。

四人　動くな。

ト取卷く。

小萬　モシ〳〵。こりや、どうなされます〳〵。

丹藏　ヤア、とぼけな、おのれ。この家のうちに、お尋ねの日本駄右衛門、まつた女は重の井姫、隱まひあること慥かめて、召捕りに向つたり。キリ〳〵二人を

四人　渡すまいか。

小萬　イヱ〳〵、どうして左樣なお尋ね者を

丹藏　ヤア、出さぬに於ては、奧へ踏ん込み。一詮議。

ト此うち奧より以前の左次兵衛、與之助の手を引き、出て來り

左次　モシ〳〵、旦那、家探し爲ても容易に知れぬ。此奴は駄右衛門が忰でござれば、此奴を責めて白

狀させなば

小萬　ヤヽ、そんならお前も目代となつて

左次　犬に入り込むこの左次兵衛。この小僧めを苛なんで。

　ト かゝる。この時、與作起きあがり、左次兵衛の足を取つてのめらせる。悔り、起きあがり

ヤイ、悴、われはなぜ、親を投げたのだ。

　ト 生醉ひの思ひ入れあつて

與作　コレサ、こなたはあんまり、まんがちといふものだ。今日爰へ詫び事して歸つたも、有やうはこの内に、お尋ね者を隱まつたと聞いたから、詮議をしようと、こなたがおれに賴むゆゑ、こいつはまんざらでもない仕事と、あやまり廻つて、爰の内へ、お尋ね者を詮議に來たのだ。それにこなたは、わしにも構はず　騷ぎまはるは、一人で褒美にする氣か。そいつはしよにんだの。貴樣はその氣でも、わしは不承知だワ。ハテ、初手から半口乘つての話しだ。さうぢやアないか。ナア、小萬。

　ト 醉うたる振りにて管を捲く。

小萬　ヤヽ、そんなら急に詫び事して、家へ歸つてござんしたは

與作　當ての無い事をするものか。モシ〳〵、旦那。この小僧は、わしが子だと世間へ見せかけ、實は與八郎が餓鬼だ。して見れば、表向きのおれは親だ。そんなら親の勝手にする事よ。わしが云ふ事に無理はあるまい。そこが生酔ひ本性たがはず。……よしかえ、もう一杯やりませう。

ト樽を引寄せ、飲みかゝる。左次兵衞、見て

左次　あんまり見事だ。おれも一杯。

ト寄るを突き退け

與作　どうして〳〵、酒にかけちやア親子の見界はない。誠に親子他人の始まり。……もう一杯飲まう

左次　成る程、酒を飲み出しては、親にもまさつた惡なまだ。コレ、そんなら餓鬼を責めさいなんで、お尋ね者の在所を云はせろ。

丹藏　いよ〳〵この家にうせるなら、役所へ知らせる合圖には、幸ひこれなる花火の煙硝、さしくべ見せなば十重廿重、取卷く圍みの狼煙同然。

左次　して又、此方で二人とも、召捕つたら、その時は。

丹藏　それを知らすは無間の鐘、數も五つに打つたなら、その時こそは圍みも開かん。

左次　然らば親子、この家に頑張り

丹藏　身共は山根の役所を固め、道がさぬ手配り。左次兵衛殘つて、油斷なく、

左次　とくと承知いたしました。

丹藏　きつと役目を云ひ附けたぞ。

ト左次兵衛へ花火を渡す。暮れ六つの鐘になり、丹藏、家來を連れ、向うへ入る。

與作　もうお歸りかえ。ようお出でなされました。ハヽヽヽヽ。……サア、これからは、小僧、われにまた、父さまが聞く事があるぞ。

トよろしくして與之助にかゝる。小萬とめて

小萬　アヽコレ、なんでこの子を。

與作　やかましいわえ。たかゞ、盜ッ人の駄右衛門の子悴だ。おれがふん縛つて、聞く事があるから。

ト與之助を引出して縛りあげる。

與之　アレ、父樣、手が痛いわいの〳〵。

小萬　これはしたり。その子がなんで御存じであらう。滅相な事して下さんすな。母さんも早う戻つて下さんせいなア。

ト此うち左次兵衛、行燈へ火を附ける。下の方よりお浪、走り出て來り、この體を見て

なみ　ヤヽ、なんでマア、與之助を。

小萬　モシ／＼、母さん、折角留めたあの酒を、よんどころなうわたしが勸めて、それゆゑ例の、病が起つて。

なみ　して、その酒は、どれにあつたを。

小萬　ソレ、その樽を與作さんが。

なみ　あの酒なれば、入れ替へ置いたに。

ト云はうとする。

與作　どうしたと。

なみ　合點のゆかぬ。

ト思ひ入れ。

小萬　そんなら母さん、酒というたは。

ト云ひかける。

與作　エヽ口をたゝくな。

ト跡を云はさず、突きとばす。小まん、たぢ／＼として、思はず舞臺前の谷間へ轉げ落ちる。與作、

思ひ入れ。

なみ　ヤアコレ、思はず小萬を

左次　ヤヽ、娘を谷へ。

ト驚ろくお浪を引附け

与作　エヽ、邪魔になる婆アだ。てめえも一緒に。

トお浪を有りあふ繩にて縛り

左次　爰らの柱へ猿轡。

与作　小僧も婆アも一緒にして。

ト兩人をよき所へ縛り

左次　合點だ。さて、これからは二人が居どころ、

与作　根太板までも剥がして在所を。よしかえ〳〵。

左次　承知だ〳〵。ドリヤ、彼奴等が。

ト合ひ方になり、奥へ入る、お浪、身を揉みあせつて

なみ　エヽ、こりやマア、おのれはなア。お主様のお子を勿體ない。まだその上に御恩のある、お二人の在所を云へとて、この子まで。いかなる惡魔が見入つたぞいの。

與作　措きなさい。女房が飮んでくれろといふから飮んだ酒。持つたが病だから、この位ゐな事は當り前サ。これからはこの餓鬼を、問ひぜうにかけて。それで云はにやア、ぶんのめしても云はせるワ。なんぞくらはせるものが。

トあたりを見て、竹の皮の卷いたるを見つけ、見世の先より取つて來り

アヽ、いゝ薪ざつぱがあつた。サア、昨夜、爰の内へ與八郎といふ、てめえの父さま、重の井といふ母さまをば、連れて來たであらうが。どこに隱れてゐる。それを云へ〳〵。

與之　知らぬわいなう。

與作　ナニ、知らねえ事があるものか。吐かしやアがれ。云はにやア、うぬをこれで。

ト竹の皮にてくらはす事。此うち左次兵衞出て

左次　どうだ〳〵。云はずば薪でぶちのめせ。それで吐かさずば、その餓鬼を婆アが見る前、蚊に責めさせろ。有やうは、したみ酒を持つて來たも、その道具に使ふつもりよ。あの酒を吹きかけて、蚊責めにしな〳〵。

與作　アヽ、なにか。あの酒を吹きかけるのか、アヽ、酒のすたるが惜しいものだ。

ト與之助に引附け

サア、これからは蚊責めにするぞ。丁度殘つたこの酒を、小僧が體へ吹ッかけて。

ト樽の水を茶碗に明け、頭より惣身へ吹ッかける。

左次　さうだ〳〵。もつと吹ッかけろ〳〵。

與作　アヽ、餓鬼にかゝつて大汗になつた。手足の汗へ水でもかけて。

ト手水桶へ行き、柄杓にて件の酒をすくひ、兩腕へ掛ける事。與之助の側へ寄り、樽の水を吹きかける。

なみ　エヽ、年端もゆかぬその子をば、むごたらしい。そんなら矢ッ張り誠の酒。飲んでの業とはいひながら、それ程までに心も荒う

與作　これでも云はずば松葉燻し、早く云へ〳〵。

與之　知らぬわいなう。

ト此うち、與作の惣身へ蚊夥しく群がる思ひ入れ。

與作　アヽ、情の剛い。サア、松葉燻しだ。

ト手前が蚊に責められるこなし。

左次 思ひ入れ、燻せ／＼。

ト與作、蚊遣り火鉢へ松葉をさしくべ

與作 サア、云はぬと、松葉燻しで云はせる。

ト團扇にて煽ぐ。與之助の方へ行かぬやうに、左次兵衛の方へ煽るゆゑ、煙にむせび、目の見えぬ思ひ入れにて

左次 これは煙いワ。イヤ、目口が明かれぬ。煙いワ／＼。併し、小僧を燻し殺すな。

ト無性に咳をせき、煙にむせぶ。お浪心附かず、與之助が苦しむと心得

なみ アヽコレ、あの人でさへあの苦しみ。さぞやあの子は苦しからう。もう／＼、この苦しみを見る上は、あの子とわしがこの縄目、解いてさへ下さつたら、成る程、主人の與八郎さま、重の井さまの在所も隱さず、

左次 白狀すると、云ふのか／＼。

與作 姑が白狀さつしやれば、縄目は解いて、なう、親仁様。

左次 さうとも／＼。サア／＼、解くから、白狀さつしやい／＼。

ト兩人立ちかゝつて二人の繩を解き

兩人 サア、解いたから、二人の行くへを。

なみ 其お二人は庭つたひ、屋の棟離れし隱居家に

左次 さてこそ知れた。悴、ぬかるな。

與作 それで樣子が。

ト思ひ入れ。お浪手早く、件の仕掛けし鐵砲をさしむける。兩人驚き、與作、有りあふ屏風にて圍ひ

ドツコイ、滅多に。

左次 そんなら婆アは有やうに。

なみ 云うた上には、この姿が、かよわきながらも火蓋を切り、おのれら殺して、お二人の、お命助けて落しやる、その心にて明白に、白狀したる上からは、おのれら二人は。

ト筒先を向ける。與作、飛びかゝつてお浪を突き退け、鐵砲を引ッたくる。

與作 いらざる女のほててんがう。併し、在所の知れたる上は、

左次 詞を番ひし合圖の知らせ。

ト件の花火を取つて圍爐裏へ打ち込む。煙硝火パッと立つ。これにて向うにて竹法螺、太鼓を打つ、

此うち向うより萬九郎、友六、身輕に拵らへ、窺ひ〳〵出て來り、下手へ忍ぶ。お浪、與之助を圍ひ

なみ　すりや、役所より、この家の隱まひ者を、洩らさぬ手配り。

ト驚ろく。

左次　伜は其奴ら動かすな。おれはこの家の隱居所の、二人の者をば

與作　親人早く。……もうこの上は

ト左次兵衛を見て、ホロリと思ひ入れ。

左次　ヤ。

ト思ひ入れ。氣を變へ

與作　ござりませ。

ト思ひ入れにていふ。

左次　合點だ。

ト暖簾口へ入る。

與作　南無阿彌陀佛、

ト火蓋を切る。筒音高く。左次兵衛「ワツ」と苦しむ。

なみャゝ、與作は親の

與作　思はず打ちしも、隱るゝ駄右衛門。

　ト屋體へかゝる。中より日本駄右衛門、百日鬘、黒羽二重、浪人の姿、懷へ赤子を入れ、ツカ〱と出る。與作、キッと見て

　この程見受けし旅の梵論字。さてはこなたが日本駄右衛門。

駄右　入山津村で思はずも、面會なせしは與作でありしか。

與作　たとへ以前は主從でも、今は盜賊、お尋ね者。

駄右　見事、汝が搦め捕つて。

與作　天の網にかゝつたこなた、遁がるゝ道はござりますまい。

駄右　主に刃向ふ不忠の其方。イデ、某が。

　ト與作、切つてかゝる。駄右衛門、拔き合せ立廻り。始終思ひ入れよろしく、與作、駄右衛門へ體を差し附けて

與作　若旦那。刃向ひ立ては養父の義理。一旦濟めば、イザ、與作めを存分に。

駄右　この期に及んで卑怯の一言。

トまた切りつける。

與作　駄右衛門死すれば、開くる閣み。

駄右　ヤ、なんと。

與作　エヽ、お情ない、若旦那樣。

トこれより草笛入りの合ひ方。山颪し、掠めてドン〳〵。

誰れござらうぞ、由留木の御家來、與惣兵衛さまの御實子にて、いかに寶を詮議の爲とはいへど、盜賊、夜盜の配符の廻ると聞きしゆゑ、身は紛らはしき駄右衛門に、見紛ふばかりの旅虛無僧。なれどもお顏は存ぜぬ與作、もし御大事とある時は、あなたに代る下郎が心底。されども拙者にお疑ひ、切りつけ給ふも御尤も。只願はくば山賊の、その世渡りを、若旦那、どうぞ止めて、下さいませい。

駄右　ムウ。その心にてありながら、何ゆゑ忰を責め苛み、この身の在所を尋ねしは。

與作　それぞ拙者が養父の慾心、眼くらんで官太夫に賴まれ、あなたのこの家に忍びある事聞きいだし、私しまでを同道なし、召捕らんといふ企みゆゑ、如何はせんと思ふに幸ひ、樽の中には何者か、入れ替へ置きしは酒ならで、水のありしを幸ひに、飲んで醉ひしと姑を僞り、水を酒ぞと與之助

さま、蚊責めの上に割木の笞。それも痛まぬ竹の皮、惡に根强き親仁を僞り、また姑の口よりも、お二人樣の隱れ家を、聞いて力にならんが爲の、命を的の心底は、現在親を鐵砲にて、打ちとめたるがこの身の潔白。親にも代へしお主の大事、とゞはこの身をお身替りと、思ひついたる拵らへ事、必ずともにお疑ひ、お晴らしなされて、下さりませ。

駄右　その本心を聞くからは、何をか包まん。さいつ頃、袋井宿にて、不思議と手に入る一通は、雷丸を質入れの、宛て名は卽ち八平次、預かる町人、赤羽屋五郎作とあるこの手紙。

ト二幕目の手紙を出し

我れはこれより箱根山、二所權現へ大願かけ

與作　首尾よう旦那の敵を討つて。

なみ　して又、それなる幼な子は。

駄右　非業に世を去るお松が胎内、胤は名におふ民部之助。今宵ひそかに官太夫、大井川を渡ると聞く道に待ちうけ、日頃の恨み。

與作　それぞ幸ひこの鐵砲。

駄右　用意をなして、これより直ぐに。

ト差出すを取つて思ひ入れ。

なみ　でも、あのやうに取卷く上は、圍みを開かす無間の鐘、五つの數を打つならば

與作　あの鐘撞いて圍みを開かせ、跡に殘つてお尋ねの、與八郎は我れなりと、この身に引受け、あなたに代つて

駄右　すりや、某は勸めに任せ、重の井引連れ、一旦爰を立退かんが、必らずともに雷丸を

與作　氣遣ひなされず、裏道づたひ。

なみ　道の案內は私しが。

駄右　然らば直さま。……さうぢや。

ト葛籠を脊負ひ、お浪、與之助を連れ、案內して奧へ走り入る。與作、殘つて

與作　あなたを落してやつたれば、圍みを開かす無間の鐘、合圖の五つを。

ト駈けよつて釣り鐘の綱に取附く。この時窺ひゐたる萬九郎、友六出て

萬九　圍みを開く計略の

友六　その鐘撞かせてなるものか。

與作　邪魔すな。そこ退け。

兩人　所を、おいらが、
ト邪魔する立廻り。早めの合ひ方になり、與作、鐘の綱に取附き、兩人支へるなよろしく立廻り、件の鐘を撞く事。トヾ五つ打ち切る。これにて龍頭より鷹の落せし金財布、前へ落ちる。遠巻きの太鼓、打ちあがる。

與作　嬉しや、圍みを。
ト金の財布を見て
ヤ、こりやコレ、金の入つたる財布。どうして爰には。員数もたしか三十兩。

兩人　それを。
ト取らうとかゝるを切り散らす。兩人、下座へ逃げて入る。この時、谷間より小萬、藤蔓に取り附いて這ひあがり

小萬　コレ〳〵、與作さん。思はず谷間へ落ち、危ふい命を、やう〳〵助かる上に、お前の本心、聞く嬉しさ。

與作　天の與へのこの金は、雷丸を片時も早く、金谷の宿へ持参して。
トよき時分、お浪、與之助、窺ひゐて

なみ　その役目こそこの婆が、雷丸を受取りに。

與作　然らば母には短刀を、小萬は奧の與作が大小、着替への小袖を。

ト金をお浪に渡す。

小萬　心得ました。

なみ　和子も一緒に。

ト時の鐘、山颪しになり、お浪、與之助を連れ、金を懷中して向うへ入る。與作、殘り

與作　御兩所落しやつたれば、我れこそ日本駄右衞門と、命を的のこの身の覺悟。殊さら親を殺せし天罰。御身に代つて潔よう、駄右衞門なりと書き殘し

トあたりを見廻し、思ひ入れあつて

さうぢや。

ト獨吟になり、二枚折りの屛風を見附け、硯箱引きよせ、我れこそ實の駄右衞門といふ事を書き殘す。

唄一くさりあつて、奧より小萬、小袖と帶を持ち、出て來り

小萬　モシ〳〵、與作どの、小袖はわたしが預かれど、アノ、大小は、どこにござんすえ。

與作　ハテ、竹を修行のその砌り、脊負うた包みに。

小萬　さうかいな。心が附かいで。

　　ト又奥へ走り入る。與作、思ひ入れあつて

與作　この身ばかりか、小萬も、姫の

　　ト思ひ入れあつて

　南無阿彌陀佛々々々々々。

　　トまた獨吟になり、やつしを脱ぎすて、小袖に着替へる事よろしく、奥より小萬、大小を持つて出る。

　　唄一ぱいに切れる。合ひ方、時の鐘。

小萬　サア〳〵、大小持つて來たぞえ。これが即ちお前の祝ひ。

　　ト差出す。與作取つて脇挾み、小萬をヂツと見て

與作　可哀やわれは

　　ト小萬、屏風を見附け

小萬　ヤ、こりやコレ、書置。

　　ト寄るを、與作思ひ切つて、小萬の首をポンと打ち落す。本釣り鐘の頭を打つ。

與作　苦痛をさせじと一思ひ。首に云ひ譯、この書置。

ト誂らへの合ひ方。

ナニ〱「書き殘し候ふ事、我れ武運拙く、幼少より武家に育ち、盜賊夜盜又は海賊となり、四海を横行し候ふところ、實家の大變聞き捨てがたく、紛失の寶を詮議し、父の敵を討たんと心を碎くと雖も、舊惡遁れがたく、この所に切腹いたすものなり、まつた女房重の井姫、古主の娘に候へば、助けたく存じ候へども、これとてもろともに、最期をとげたき望みに候ふゆゑ、この所にて共に相果つるものなり。日本駄右衞門、實は丹波與八郎。」……これにて思ひ置く事なし。ヤイ、女房、やがて未來で一蓮托生。アラ、心地よや。南無阿彌陀佛々々々々々。

ト腹へ突き立てんとする。この時、萬九郎、友六、窺ひ寄つて

兩人　捕つた。

ト與作に組みつくを振りほどき、友六を切つて捨てる。丹藏、捕り手四人、窺ひ出て

丹藏　駄右衞門、捕つた。

萬九　イヤ、この駄右衞門は

ト後より組みつきながら云はんとするを、云はせじと、其まゝ腹へ突き立つる。後の萬九郎苦しむ。與作、思ひ入れあつて引廻し

輿作　イザ、お役人、

ト丹藏をキツと見ながら、萬九郎を前へ廻し、見事に切つて捨てる。丹藏、縄を出す。

手柄にさつしやい。

トよろしく引廻す。これにて黒幕を振り落す。

本舞臺、正面黒幕。前通り蛇籠。上の方榜示杭、これに東海道金谷宿大井川と記し、浪の音にて幕明く。

ト下座よりお松の死骸、皮剥ぎの板のまゝ簑をかけ、人足二人吊つて出る。あとより山形屋義兵衛、孔雀染めの振り袖の濡れしを肩へかけ、川越し人足四人、何れも丸裸にて、ワヤ〳〵云ひながら出て来り

人一　コレ〳〵、旅人、こなさんは滅法界な、その女の浮き死骸を引揚げて

四人　どうさつしやる〳〵。

義兵　ハテ、この女の死骸は、わしが八つ橋村で相談しかけたよしみもあれば、不便と思つて、その女の持つてゐたこの振り袖、死骸に添へ、島田の無縁寺へ葬るつもり。そこで貴様達、川向うまで

死骸を越して下されぬか。

人二　エヽ、とんだ事をいふ人だ。殊に、宮太夫さまといふ由留木の御家老が、お急ぎゆゑ、夜に入つての此お通り。

人三　うす汚いその死骸、どうして向うへやられるものか。

人四　それとも酒手がしつかりか。それを聞いての話しにしませう。

義兵　これはしたり、佛の爲だ。後生だと思つて、やつて下さい〳〵。

四人　なんの、後生で川越しがなるものか。否でござるぞ〳〵。イケ馬鹿々々しい。

ト呟いて向うへ入る。

義兵　コレサ、そこを佛の爲と思つて。

ト捨ぜりふにて、ワヤ〳〵云つて、義兵衛、持つたる振り袖を花道、切り穴のほとりへ取落し、向うへ皆々入る。知らせにつき、浪の音、時の鐘、舞臺板、だん〳〵に寄せ板にて、よき所へ引いて取ること。

本舞臺、一面の水船にて、本雨、河水の中へ降つてくる。よき時分、行列三重になり、下の方より金

ヽヽ谷宿と書きし高張り二本持ち、川越し二人出てくる。跡より袖合羽の侍ひ、槍擔ぎの中間、赤合羽にて四五人、肩車にて水を切つて出て、皆々上の方へ入る。直ぐに三階残らず川越しにて、蓮臺の上へ乗り物を乗せて、捨ぜりふにて出て來り

皆々　水が増したぞ。なぐられるな／＼。

同　合點だ／＼。

トよき所へ來る。この時、筒音高く、乗り物へ當りし體にて、煙硝火パッと立つ。皆々驚き

皆々　イヤア、鐵砲が來た。狼藉者々々々。

ト口々に罵る。この時、駕籠の中にて

定之　ヤア、仰々しい。鎭まれ／＼。

トこれにて皆々鎭まる。乗り物の戸を明ける。中は竹村定之進、剃立て、ぶッさき羽織、野袴の姿にて、刀を杖に思ひ入れあつて

長の道中、路次に於て、斯様の事もあらんかと存じ、養父に代つて定之進、乗り代りに、案の如くの飛び道具。正しくあたりに曲者忍んで。

皆々　すりや、官太夫さまには、

定之　入れ代りしに、危ふい事。
皆々　でも、鐵砲が只今あなたへ。
定之　たはけた事を。乘り物掠つて、丸は水中。
皆々　危ない事を。
定之　別條なければ、島田の宿へ。

ト戸を閉す。

皆々　水が增したぞ。
定之　乘り物やれ。
皆々　ハア、。……浪が高いぞ／＼。

ト鳴り物になり、皆々蓮臺を荷ひ、上の方へ入る。矢張り本雨降つてゐる。本釣り鐘の頭を打ちこむ。土間の眞中より、日本駄右衞門、以前の姿、鐵砲を提げ、スツクと立ち身にて、思ひ入れあつて

駄右　嬉しや、手ごたへ。官太夫めが正しく脇腹。併し忍んで、事の樣子を。

ト歩みより花道へ來り

併し、詮議いたすは治定。この飛び道具を持參せば、却つて難儀。程よき所へ捨て置いて。



ト思ひ入れ。この時下座にて

皆々 狼藉もの〱。

トこの聲を聞き、思ひ入れあつて鐵砲を抱へ、ツカ〱と揚げ幕へ入る。知らせにつき、正面の黑幕切つて落す。

本舞臺、向う打ぬき、島田の宿の體、遠見に見せたる道具、馬士唄にて道具納まる。

ト爰に江戸兵衛實は水右衛門、件の雷丸を持つて立ち身。半次郎、旅形、大小にて、これを支へてゐる見得。ちよつと立廻つて

半次 こりや、おのれ、大切なる雷丸。與作が母の働らきにて、持歸つたる道の狼藉。やはかおのれに渡さうか。

江戸 やかましいワ。この短刀は此方も尋ねる雷丸、入用の品ゆゑ、おれが貰つた。此方へ寄越しやれ。

半次 ヤア、無法の一言。この半次郎が持ち行く短刀。妨げひろぐと切り下げるぞ。

江戸 ナニ、そばへたる其たは言、キリ〱そこを。

トかき退けて行かうとする。半次郎やらじと立廻りのうち、川越しの人足四人、バラ〱と出て來り

四人　旅人の喧嘩か。なんだ〳〵。

江戸　川越し手合ひか。コレ、その丁稚は盗人だ。殺して死骸は水葬禮、骨は盗まぬ。おれが承知だ。

四人　合點だ。盗人ならば

ト皆々かゝる。立廻りのうち、江戸兵衞は短刀を持ち、上の方へ走り入る。半次郎、追ひかけんとするを川越し四人組み附き、各自縫ひぐるみにて立廻り、半次郎、四人を相手に、禪のツトメにて立廻りよろしくあつて、トゞ四人を上の方へ追ひ込んで入る。時の鐘、浪の音になり、水船下の方より、誂らへの蓮臺へ葛籠を乘せ、駄右衞門、咬へ煙管にて乘り、川越し四人かつぎ出る。上の方より江戸兵衞、頬かむりにて蓮臺へ乘り、川越し四人、同じく荷ひ出て來り、舞臺本水の中にて行きあひ、江戸兵衞、駄右衞門が莨の火を見つけ、煙管を出し、これを吸ひ附けることあつて、兩方へ別れるとき、駄右衞門の川越し

川一　コレ〳〵、てめえ達、向うへ行つたら、河原で拾つた、鐵砲を持つて來てくれろよ。

川二　合點だ〳〵。屆けてやらう。とんだ所に捨てゝあつたな。

ト江戸兵衞、鐵砲と聞き、よろしく思ひ入れあつて、下の方へ入る。知らせに附き、下の方より淵を引出す。この上に鮎を取る魚梁を飾り附け、道具とまる。

ト矢張り禪のツトメにて、バタ〳〵になり、半次郎、以前の門人を相手に立廻りながら出る。跡より駄右衛門、窺ひ出てくる。

半次　手並に懲りぬ匹夫ども。道おッぴらいて、通すまいか。

四人　ヤア、慥かに石井半次郎。

半次　ムウ。その半次郎なら何とする。

川一　侍ひに頼まれて、爰でうぬを

四人　殺らすのだ。

ト打つてかゝる。ちよつと立廻りのうち、後より駄右衛門出て、皆々を切りちらす。これにて門人逃げて入る。半次郎、駄右衛門を見て

半次　思ひがけなき侍ひの、我れへ助力の其許樣は。

駄右　縁に繋がる丹波與八郎、寶詮議にこの海道、

半次　さては噂に聞き及びし、與八郎さまにてありけるか。

駄右　川越しどもが口々に、石井といふ名に知つたる御邊。して又、この場の刃傷は。

半次　與作が詐にめぐり逢ひ、計らず手に入る雷丸、この所にて又ぞろや

駄右　奪ひ取られしか。……して、その者の面體は。

半次　面を隠せば、慥かにそれとは認めねど、只者ならぬそぼろの曲者。

駄右　それぞ只今、川中にて、行逢ひたりし曲者ならん。彼奴こそ、いつぞや入山津村にて、妹お松を手にかけし、非人の江戸兵衛。

半次　御存じなれば詮議の手がゝり。

駄右　遠くは行くまい。跡追つかけて

半次　與八郎どの。

駄右　ござれ。

ト兩人、行きかける。この下座にて

皆々　川がとまつた〳〵。

兩人　ヤヽ、そんなら川が

ト向うを見てキッとなる。この時ドンと本鐵砲の音。煙硝立つ。駄右衞門の足に當り、立ち身にて苦しむ。半次郎見て

半次　ヤヽ、飛び道具にて與八郎どの。



ト立ちよらんとする。駄右衛門、タヂ〳〵となつて、本木へドンと落ちる。この時、下座より以前の四人出て半次郎へ打つてかゝる。立廻り。四人を追ひ込む。下座へ入る。時の鐘になり、梁小屋より件の江戸兵衞、鐵砲を持ち、頰冠りをとつて出て

江戸　まんまと一打ち、與八郎。ムウ。

トにつたり川中を見る。これを木の頭。

素敵な蚊だわえ。

トよろしくキザミにて、拍子　幕

この幕、紅葉に藤の枝、照葉の蔦、藤枝蔦の細道の模様の引幕引きつけると、大ドロ〳〵にて日覆より魂下がりて、以前の振り袖を落せし所へ落ちる。煙硝火立つて、お松の亡靈、件の振り袖、誂らへの新造の姿にて、團扇を持ち、下駄にてセリ上がる。この時、空へ螢大分舞ふ。誂らへの鳴り物になり、これを追ひながら、華やかに向うへ入る。知らせに附き、シヤギリ。

四幕目

岡部宿松並木の場
鞠子在古寺の場

同　猫石怪異の場
府中二丁町の場
三保浦淨瑠璃の場

役名——藤川宮太夫。石井半次郎。鬼坊主の願哲。お松妹、お袖。幇間、喜作。伊勢參り五郎吉。揚屋の亭主、東六。山形屋義兵衛。中間、團助。仲居、お山。同、お大。紺屋の次郎作。賤機のお倉。藝子、いろは實ハ信濃屋おはん。由留木調之助。お松の亡魂。猫石の精。權八姉、八重梅。竹村定之進。漁師、三保七實ハ本庄助市。民部女房、おのぶ。由井民部之助。藤川水右衛門。

藤枝、蔦の細道の幕の前にて、口上役觸れあつて、入ると、上の方へ、是より西、東海道岡部宿といふ榜示杭出る。

バタ／＼になり、揚げ幕よりお袖、病鉢卷きにて、赤子を抱き、走り出てくる。跡より五郎吉、襦袢一つにて、追ひかけて出て來り

五郎　コレ／＼、お娘、てめえは八つ橋村のお袖だな。殊にてめえが産んだ子は、民部とやらが胤、彼奴がお庇で裸にされて、それから小揚げの世渡り。その代りには、これからおぬしを、宿場へくら

はし、埋め方をせねばならぬ。サア〳〵、來やれ〳〵。
ト捕へる。
そで　アヽコレ、滅相な。それをわたしが知るものかいな。わたしやアノ藤助さまのお跡を慕うて、産れたこの兒を、早う見せたいわいの。
五郎　おれもよい目に逢ひたいわいな。
トしなだれる。
そで　エヽ、退かんせいな。
ト爭ひゐる。馬士唄になり、向うより民部之助、旅形、大小にて走り出て來り、この體を見て、五郎吉を引退け、お袖を圍ふ。
五郎　イヤア、われは八つ橋村で逢つた侍ひだな。われがお庇で、今に此ざま。その代りには、このアお袖を。
ト立ちかゝるを、民部之助キッとなつて
民部　女童と侮つて、指でもさすと免さぬぞ。
五郎　うぬ、さう吐かしやア、その褞袍を。

トかゝるを、立廻つて見事に投げる。これにて五郎吉起きあがり

覺えてうせろ。

ト這々の體にて幕の引附けへ入る。お袖、駈寄り

そで　モシ〳〵、わたしやお前のお跡を、いろ〳〵尋ねて歩くうち、産み落したはお前の胤、しかも男

子でござんすわいなア。

ト抱いた子を見せる。民部之助、こなしあつて

民部　すりや、この幼な子が身共の胤とな。殊に、男子とあれば、猶更めでたい。さはさりながら、其

方が樣子、何とやら顏色が。もしや病氣といふやうな。

そで　アイ。わたしやお前にお別れ申してより、何とやら氣持ちも惡しう、それから此やうに痩せ衰へ

たも、どうやら物の怪。それにつけても、只氣にかゝるは、アノ姉さん。

民部　あの松山が面體まで、變りし上に、その身を賣り、駿河の遊里と聞くなれば、あれが在所も尋ね

たし。そんなら爰から

そで　連れ立つて參りませう。

ト赤子を抱き、身拵らへする。念佛太鼓になり、幕の引附けより、賤機のお倉、在所女の拵らへ、草

苅り籠を脊負ひ、薄の葉に包みし自然生の山の芋を提げて出て來り、二人を見て、摺れ違ひしが、振り返り

くら　モシ〳〵、憚りながらお前樣は、由井の紺屋の御子息、中野藤助さまぢやござりませぬか。

民部　成る程、その名を知つたおてまへは

くら　ハイ〳〵、私しはその砌り、御奉公いたしました、水仕の倉でござりまする。只今にては在所に參り、馬草を刈つたり、片手間に、御覽じませ、此やうに自然生を、山を尋ねて掘つて參り、鞠子の宿へ持つて行て、名物のとろゝ汁、賃錢取つて世の營み。マア〳〵、お久し振りでお目にかかりましたなア。

民部　オヽ、その詞で思ひ出した。お倉であつたか。只今にては身共は侍ひ。この女は身が女房、產後の病氣。殊更、某もこの者を連れて、東海道は少々遠慮。もし裏道を存じてをらば

くら　ハイ〳〵、お氣遣ひなされますな。私しがお供いたし、裏道へかゝりますは、蔦の細道細づたひ、當所に住めば、私しが案內。

民部　然らば其方、よいやうに。

そで　旅は道連れ、女中さん。

くら　サア、斯うお出でなされませ。

ト時の鐘、しめやかなる唄になり、三人捨ぜりふにて、民部之助、お袖の病氣をいたはり、お倉先に立ち、東のあゆみへかゝり、中の間へ來りし頃、知らせあつて、舞臺の幕切つて落す。

本舞臺、古寺の道具、平舞臺に飾り、吊り欄間、これに紅葉蔦まとひ、正面佛前のかゝり。左右の道具好みあり。よき所に行燈をともしあり、よろしく道具納まる。

ト爰に猫の怪、白髮の老女鬘、破れし十二單衣の袖を脱ぎかけ、頭に黄綿を置き、糸車にて糸を取つてゐる。件の三人、向うを廻り、花道へ來り

民部　コレ〳〵、お袖、心持ちはどうぢや〳〵。マア、靜かに歩みやれ。

そで　アイ〳〵、氣分は、だん〳〵ようござんすが、何をいうても夜道ゆゑ、足が痛んでなりませぬ。どうぞ爰らに、泊り家は無い事かいな。

民部　されば、間道ゆゑ、宿屋というては

くら　そりや困つたものでござりまする。わたしが在所も餘程あり、どうぞ爰らに、

ト向うを見て

モシ〳〵、向うに灯が見えまする。あの内へ參じまして、無心いうたら、もしひよつと

民部　成る程、左樣いたさう。サヽ、もそつとぢや。歩いて見や〳〵。

ト矢張り彈き流しの唄、時の鐘にて、いたはり〳〵、舞臺へ來り

くら　アヽ、爰はお寺さうな。爰らに寺は無かつたが、どうして俄かに。

ト思ひ入れあり

マア〳〵、わたしが頼んで見ませうわいなア。

ト門口へ來り

ハイ、ちとお頼み申しませう。私しどもは蔦の細道へかゝりまして、日は暮るゝ、旅の女中さんは御病氣。どうぞお泊めなされて下さりませ。

ト猫の怪、これを聞いて

猫怪　なんぢや。夜道の旅に女中の病氣。そりや難儀でござんせうが、宿屋にあらぬこの古寺、これでもよくば。

ト云ひながら門口へ來る。

くら　エヽ、お寺でござりまするか。病氣の事なりや、お寺へなりと、今宵一夜を

そで　どうぞ泊めて下さりませ。
　　　トこの聲に猫の怪、お袖を見て
猫怪　ヤ、さう云やるは、義理ある娘のお袖ぢやないか。
そで　エ、わたしを娘と仰しやりまするは。
　　　ト思ひ入れあつて
ヤヽ、お前さんは八つ橋村の、義理ある母さん。慥かお前は
民部　身共も聞きし牢死の樣子。その後しかと見屆けねど
そで　わたしもその夜に家出して、跡の樣子は
猫怪　知らぬも道理。牢死なしたる年寄りの、時來らぬかその後蘇生。わしや仕合せと、蘇生へつたわ
いの。
そで　そりやお仕合せな事。それはさうと、お前の其お姿はえ。
猫怪　こりや八つ橋村で、死骸の上へ何者か、掛けて下された裝束を、今に此やうに假り着して
民部　心覺えの其お話し。それで高位の其お姿。
猫怪　して又、其方の身の納まりは

そで　わたしもその後しるべの方にて、産み落したるこの幼な子。

猫怪　そんならその子が。そりや出かしやつた。わしが爲には義理ある初孫。思へば姉のお松も懐姙して、あの姉は

ト云はれて、お袖、術なき思ひ入れにて

そで　サア、その姉さんは、仔細あつてナ。

猫怪　これも家出か。

そで　アイ。何やら先は、

トつかへる。

民部　アイヤ、心願あつて物參り、たしか智行のお加治を受けに。

猫怪　して、道連れのお前は何者。

民部　へイ、拙者めは袖に連れ添ひまする者。この上ともに

猫怪　アヽ、さうかいな。ようござりました。サヽ、入らつしやりませ〳〵。

くら　これはよい所へ參りましたわいなア。

ト皆々内へ入り。座に附く。

猫怪　アヽ、命があれば、また逢はるゝと、お袖は格別、お侍ひ様には、お初に逢うて、此やうな隠れ家へ。モシ、この上とも、娘が事、よろしうお頼み申しまする。

民部　イヤモウ、不思議な御縁で、いはゞ、親子の間柄。私し事は、以前は中野藤助と申せしが、只今にては由井の民部。この上ともに、お目掛けられて下さりませ。

猫怪　これはしたり、其お詞に痛み入る。聞けば、娘は病氣との事。幼な子もあるなれば、風があつては何とやら。あのマア、奥の座敷へなりと。

そで　其お詞に甘へまして、奥へ參つて、この子の添へ乳。

猫怪　併し暗うて、蚊も多し、灯の用意も

くら　ハイ。そりやわたしが、藤枝の城下で、買うて參つたともし油。丁度幸ひ。

ト草刈り籠より、竹筒に入れたる油を出す。

猫怪　そんなら娘は、ゆるりと奥で。

民部　何かとお世話にあづかりまする。

ト唄、時の鐘になり、民部、幼な子を抱き、お倉、竹筒を持ち、お袖を介抱して奥へ入る。これより掠めたる木魚の合ひ方

猫怪　すりや、あの者どもは、阿部川近き賤機山、蔦の細道迷ひ來て、この古寺へ一夜の賴み。アヽ、世に亡きこの身と知らざるも、愚の人の心ぢやなア。

ト思ひ入れ。この時、お倉、赤子を抱き、竹の筒を持ち、出て來り

くら　モシ／＼、阿母樣。奥へ油はついで參りました。この行燈へつぎませうか。

猫怪　オヽ、そんならついで下さんせ。

くら　左やう致しませう。

ト赤子をよき所へ置き、油をつぐ。赤子泣く。

オヽ、よい子ぢや／＼。いま抱いてあげまするぞ。

猫怪　アヽ、せはしない。ドレ、その子を爰へ寄越さんせ。

ト赤子を抱き、いろ／＼あつて

オヽ、よい子ぢやの、よい子ぢやの。婆がうま／＼やりませう。コレ、其方はわしが、大事の大事の孫ぢやぞや。笑うて見せや。……くつ／＼／＼。

トあやしてゐる。この時、猫一疋、鼠を追うて走り出る。物音にお倉、驚き

くら　オヽ怖。何やら爰へ。

猫怪　イエ〳〵、怖い物ぢやないぞえ。そりやわしが飼ひ猫ぢやわいの。
ト引寄せて膝の上に置く。

くら　エヽ、さうでござりまするか。
ト矢張り此うち木魚の合ひ方、風の音。この時、欄間へ又猫一疋、蛇を咬へ出る。この蛇、下へさがり、お倉の額へ觸るゆゑ、悔りして

アヽ又、何やら、
ト飛び退く。

猫怪　これはしたり。何も其やうに……コレ、斑よ〳〵。爰へ來い〳〵。
ト思ひ入れにて呼ぶ、猫は蛇を捨てゝ猫の怪の側へ來る。

くら　これはマア、いかいこと猫が居りまするな。お好きでござりまするか。

猫怪　さうでござります。コレ、こなさん、その長虫を捨てゝ下さんせ。

くら　アヽモシ、どうしてマア怖らしい物を

猫怪　エヽ、臆病な。そんならわしが、
ト蛇を取つて、あたりへ捨てゝ

コレ、この子は、わしが寐かしてやらう。こなさん、奧へ行て、あそこに搖籃があるほどに、取つて來て下さんせ。

くら　アイ〳〵。ツイ取つて參りませう。坊さんは婆さんに抱かれて、心持ちがよいかして、すや〳〵なされて……ドレ、取つて參りませう。

ト木魚の合ひ方、風の音にて、お倉、奧へ入る。赤子、泣き出す。猫の怪、いぶりつけて

猫怪　オヽ、泣きやるなノ〳〵。婆がよい物やりませう、おしつけ又盆になると、この寺へ娘子供が大勢來て、面白う踊るわいの。それも見せます。その盂蘭盆の踊りはの。女子どもが手を揃へ

トこれより猫の怪、盆踊りの唄を少し唄ふ。それより地へ取り、誂らへの合ひ方。この時、件の二疋の猫、そろ〳〵と立つて踊る事。猫の怪、音頭を取る。猫は二疋とも唄に合せて踊る。この時分、お倉、奧より出て來り、この樣子を見て驚ろき

くら　アヽモシ、猫が

ト大聲するゆゑ、猫は驚ろき、狼狽へて奧へ走り入る。猫の怪、振り返つて

猫怪　これはしたり。また驚ろいてかいの。

くら　ぢやというて、今、猫が二疋とも、どうやら立つて

猫怪　アヽ、滅相な。なんで其やうな事があらうぞいの。

　トこの時、赤子、頻りに泣く。猫の怪いぶり附ける。

くら　モシ〳〵。アノ、奥に、搔卷は見えませぬわいなア。

猫怪　アヽ、さうかいの。年寄りといふものは、物覺えの惡い。

　トまた赤子泣く。猫の怪いぶり附けてゐる。奥よりお袖、そろ〳〵と出て來り

そで　モシ〳〵。いかうこの子がせわりまするが、殊に、わたしもついにない、乳が張つて來やんした
ドレ、その子をわたしに

猫怪　オヽ、乳が澤山で仕合せぢやわいの。

そで　サア〳〵、うま〳〵あがれや。

　ト取附いて赤子を抱く。

左様なら、わたしやお先へ、臥りまするぞえ。

猫怪　ハテ、子持ちの事ぢや。先へ寐や〳〵。

そで　アイ〳〵。……して、お前は寐やしやんせぬか。

くら　わたしや阿母さんのお側へ臥りませう。

そで　そんなら、母さん。

猫怪　早う寐やいなう。

ト合ひ方、時の鐘。お袖、子を抱いて奥へ入る。

くら　左様なら私しも、お先へ臥りまするぞえ。

猫怪　オヽ、遠慮なしに寢さんせ。併し、寢るものというても、恥かしい事ながら……アヽ、なんぞこなさんに

ト古き打敷を取つて來り

サア／＼、これなと引合うて、枕もこれを、

ト古き位牌を二つ出し

サア、寐やしやんせ。

ト風の音、本釣り鐘、蟲の音、凄き合ひ方。打敷を敷合うて横になる。お倉、思ひ入れあつて

くら　何ぢややら、夜の更けるに隨つて、物凄いやうに覺えまする。

猫怪　なんのマア。この山寺に住むからは、怖いと思うて、一日も暮らさるゝものかいな。併し、あの鉦の音が聞えるかえ。

くら　どうやら殊勝な鉦の音でござりまする。
猫怪　その筈の事。ありや未來の鉦ぢやわいの。
くら　アヽ、氣味の惡い。
　　ト打敷を引ツかぶる。
猫怪　これはしたり。なに怖い事がある。ありや極樂の鉦。それを聞く者は、後生がよいといふわいの
あのやうな又、殊勝な鉦の音といふは無い。コレ、まだ鉦が聞えるが、聞えませねか。ヤヽ、も
う寢てかいの。ハテマア、若い者といふものは
　　トお倉を度々搖り起す事あつて
アヽ、よく寢附きやつたの。
　　ト合ひ方變り、行燈の方を見て
人目が無くば常々に、好めど足らぬこの山中。今宵ぞ爰で、あの油を。
　トきつと思ひ入れ。この時、風の音、捨て鐘。猫の怪　寢所より、そろ〳〵と這ひ出し、後を窺ひ窺ひ、行燈を引寄せ、その中へ顏を差入れる。その影、猫に映る。長き舌を出し、ピチヤ〳〵と油をねぶる事。お倉、何心なしに顏を出し、これを見て、「ワツ」と飛び退き、逃げんとするを、猫の怪、そ

の裾を捕へ、キットなつて
そんならわが身は、見やつたの。
くら　イエ〱、何もわたしや
怪猫　イヤ〱、見たであらう。殊に、其方は子の年の女、常々妾が好もしい、子年の女。命は貰ふ。
サア、念佛なりと申してゐや。
くら　どうぞ助けて
ト逃げ行くを、手を伸し、お倉が襟髪を捕へるを、振り切るとて、思はず猫の怪と向ひ合ふ事。中を隔てゝ、ヂリ〱と猫の怪睨める。お倉、ヂリ〱と竦む事。よきキッカケに、猫の怪、お倉の襟元へ飛び附き、咬へし心。お倉苦しみ、振り切つて逃げんとして、仰向けになる。猫の怪、この時、中腰になり、前へ手を突き、お倉を見て、キッとなる。この時、顔はなまなりの猫の面になる。お倉、よろめき〱逃げるを、手を出して毆り倒し、あちこちを嚙む事。トヾ襟元を咬へ、破れ障子の中へ引込む。この内で人を嚙む音して、障子へ血煙立つ。この時向うより五郎吉、お袖を尋ねる心にて出で來り
五郎　なんでも二人の奴等は、慥かにこの寺へ泊つたと見える。あのお袖めを首尾よく殺つて

ト捨ぜりふにて、あちこち探して、思はず障子の中を覗き、「ワツ」というて飛び退いて慄ふ。障子を明け、猫の怪、以前の老女の顏に戻り、口の端、血に染みたる顏を出して、ヂロリと見る。五郎吉うろたへ、「ワツ」というて下座へ逃げて入る。猫の怪、そろ〳〵出て來り、下の方へ行き、手桶の水を盥へ打明け、つくばつて、ピチヤ〳〵と水を飲む事。ト、畜生の如く洗ふ事。矢張り好みの合ひ方、奧にて赤子泣く。民部之助、幼な子を抱きて出て來り

民部　ヤレ〳〵、この子のせわるので、さぞおやかましうござりませう。

ト云ふに、猫の怪振り返る。怖き顏ゆゑ恟りする。猫の怪、心附き、ちやつと元の顏になり

猫怪　これはしたり。婿どのかいの。

ト民部之助、思ひ入れあつて

民部　心の迷ひか知らねども、慥かに今のは

猫怪　すりや、其方は何ぞ

民部　イヤ、別れて何も

猫怪　見ぬのかえ。

民部　ハイ。

ト思ひ入れにて云ふ。

猫怪　それで妾も

民部　姑どの。

猫怪　婿どの。

トきつと見得にて

ドリヤ、まどろみませうか。

ト唄、時の鐘になり、こなしあつて、上の方へ入る。民部之助、跡見送り

民部　心得ぬはあの姑。いつぞや牢死と眼前に、八つ橋村にて見屆けしに、それに最前蘇生なせしと、あの詞。何とも以て心得がたき、

ト思ひ入れ。幼な子泣き出す。

オヽ、たがよ／＼。

トいぶり附ける。この時奥よりお袖、出て來り

そで　民部さん、そこにかいなア。

民部　オヽ、お袖。目が覺めてか。

そで　アイ、何やら怖いお寺の内、やう／＼と寢入りしに、あの姉さんを夢に見て、一倍わたしや主の事が案じられ、思へば／＼、妹の身で、呪ひし釘は、女の念力、醜い顔に致したも、皆わたしから起つた事。その現在の實の母さん、あなたの手前、どうもわたしや

民部　ハテ、そりや氣遣ひない。今も母御の云はるゝには、松山ことは駿河の國、此あたりに名醫あつて、顔の構へも大方は、直つたとの事。それなれば、其やうに。

そで　エヽ、さうかいなア。わたしや又松山さんの、實の母さん、主の手前へ心遣ひ、それで一倍病氣もつのつて

民部　ハテ、氣の弱い。必ず、きな／＼思やんなや。

ト思ひ入れ。禪のツトメになり、向ふより鬼坊主の願哲、一升樽と、藁で結へし豆腐とを、割掛けにして肩に引掛け、鉦と撞木を持ち、スタ／＼と出て來り

願哲　ヤレ／＼、暗い晩ゆゑ困つたわい。水死の佛を葬むるによつて、先へ行つてくれと頼まれ、近道ゆゑに、蔦の細道へ入つたところ、直ぐに日が暮れて道は知れず、寺の名も忘れた。アヽ、どうぞ聞きたいものぢやが。

ト舞臺へ來る。この時前幕の、しつぺい太郎の犬、下手より出て、願哲を吠える。悔りして飛び退き

エヽ、この畜生め。おれが出ると、この春も吠えをつた。エヽ、極道め。シイシイ

ト追ひ散らす。犬は入る。願哲、あたりを見て

ア、、爰に寺があるな。爰かも知れぬ。……モシ〳〵、頼みませう。葬ひの來る寺は、爰でござるかな。

民部 どうでござりまするか。わしらは今夜泊つた旅の者。何事も、存じませぬ〳〵。

願哲 アヽ、さうでござるか、併し、寺というても外にはあるまい。大方爰であらう。御免なされませ

葬ひに來たものでござります。竈を借りて、豆腐も煮ようと思ひます。

ト内へ入ろ。お袖見て

そで モシ〳〵。怖らしい坊さんが見えたぞえ。

民部 ナニ、怖い出家が

ト見て

モシ〳〵。爰に葬儀はござりませぬぞえ。サ、歸つて下され〳〵。

願哲 ナニ、歸れ。この男は、坊主の玉子ぢやァあるまいし。寺へ坊主の來るのは當り前ぢや。マア、

それよりは、第一、寺へ女を置くのが御法度だワ。して、こなたは、野郎の和尚か。

民部　成る程、無住なこの寺。住持は身共ぢや。サヽ、置く事ならぬ。歸つてもらはう。それを又歸らぬと、料簡があるぞ。

願哲　ナニ、料簡がある。こりや面白い。この坊さんが相手になつて。サア、野郎の住持め。料簡は、どうぢや。

民部　その料簡は。斯うするわえ。

ト豆腐を取つてくらはす。豆腐は碎けて散る。願哲、頭を抱へ

願哲　アイタヽヽヽ、頭が割れた〳〵。相手は住持だ。頭が割れたワ。

ト喚く。この時、下の方より五郎吉、出て來り

五郎　なんだ〳〵。どうしたのだ。

願哲　コレ〳〵、見さつしやい。あの住持野郎め、坊主の頭を豆腐でぶちこはした。その證據は、コレコレ、頭の缺けが此やうに、こぼれてゐる。濟まねえぞ〳〵。

五郎　アヽ、こゝら中にこぼれてあるのは、頭の缺けか。おらア初めて見たわえ。

トこの時民部、五郎吉を見て

民部　ヤヽ、おのれは先刻の男めぢやな。

五郎　ヤア、さう吐かすは、お袖夫婦の奴等だな。爰に居やうと目を附けて來たのだ。コレ、坊さん、こなたも手傳つて、あの女を

願哲　合點だ〳〵。寺で女をちよろまかすか。さうはさせぬぞ。これからおれが、酒の力で千人力。ヤアマア、待てよ。一杯氣を附けて。

ト樽より茶碗へついで飲む。

五郎　ハテ、この坊さんは、酒を飲むより、おれが片腕になつてくれぬか。

願哲　サア、その片腕も、一杯きめて。

トまた飲む。

五郎　コレ〳〵、そんなに飲むなら、おれにも獻さつし。

願哲　イヽヤ、この酒はおれ一人で

五郎　ハテ、吝い坊主だ、一杯飲ませろ。

願哲　イヽヤ、愚僧が獨吟々々。

ト一人で飲む。五郎吉これを飲まんと、樽を爭ひ〳〵、下の方へ入る。

民部　何ぢややら、彼奴らは、益體も無い事ばかり云ひをつて、譯も無い奴らではあるぞ。

　　　ト此うち赤子頻りに泣く。お袖、介抱して

そで　今日は取分けこの子のせわり、どうやら虫氣と見えまする。お前、熊の膽か、よい丸藥はござん
　せぬか。

民部　イヤ〳〵、常から藥の貯へせぬゆゑに、其やうな物は、どうして〳〵。併し、虫氣と聞いては、
　其まゝにもして置かれまいが、爰は人里離れし邊土。おりや宿へ行て、藥を買うて來ようほどに
　隨分其方は、その子を大事に。

そで　アイ〳〵。併し。お前がござんしては、氣味のわるい此お寺。母さんの手前。ならう事なら、わ
　たしも一緒に、行かうわいなア。

民部　これはしたり。夜道といひ、其方も病人。その上、小兒も虫氣とあれば、どうして連れて行かれ
　やう。ちよつとわしは一走り、買うて來るほどに、ちつとのうち、風をひかぬよう。コレ〳〵、
　その屛風を風防ぎに、その子を抱いて、サヽ、寢てゐや〳〵。

　　　トあたりにある蓆屛風を立て、お袖を寢させる。

そで　早う戻つて下さんせえ。

民部　直ぐに戻るわいの。アヽ、苦々しい事ではあるぞ。

ト　お袖は屏風のうち、民部之助は門口へ出る。これより竹笛の入りし凄き合ひ方、薄ドロ〳〵。民部の足元へ、お松の亡魂、青鼠の着附け、淺黄の帶、洗ひ髪に象牙の簪、女郎の姿にて、ツイと出る。民部之助、怪しみ、見て

民部　そこにゐるのは、誰れぢや〳〵。コレ、何者ぢやぞいの。

まつ　アイ、わたしかえ。

ト　いつもの顔にて會釋する。

民部　ヤ、其方は松山ぢやないか。

まつ　アイ、よう知つてゐるさんすの。

民部　知らいでなんとせう。民部ぢやわいの。見れば面體よう直つて、わしも安堵したわいの。

まつ　さうかいな。わたしも恥かしいあの面、やう〳〵の事で、元のやうに直つたが、定めしお前は、お否であらうなア。

民部　なんのマア、おれに其やうな心があるもので、マア〳〵、此方へ來やいなう。

ト　手を取つて内へ伴ひ

見れば夜に入り、供をも連れず

まつ　怖い目いとはず參つたは、お前に逢ひたさ、恨みも云ひたさ、それゆゑに。
民部　尤もぢや〳〵。が、コレ、屏風のうちには、妹のお袖、隨分ともに、靜かに云や〳〵。
まつ　ソレ、見なさんせ。妹のお袖にお前の氣兼ね。それぢやによつて、わたしや悲しい。
　　　ト泪ぐむ。
民部　コレ〳〵、泣く事はない〳〵。殊に、この內には、こなたの實の母親が……それぢやによつて、わしが心配。もう〳〵、この上ともに、おれが心は、決して〳〵、末々見捨てはせぬ。コレ、二世も三世も、斯うぢやわいの。
　　　ト抱きしめて思ひ入れ。
まつ　逢うたら恨みを云はう〳〵と、思うてゐたが、見るに目の毒。さはさりながら、只恨めしいは。
　　　ト屏風の方へ思ひ入れあるを
民部　ハテサテ、野暮な。コレ、マア、秋風がこの身に、しみ〴〵。
　　　ト寄りそうて、思ひ入れ。よき時分より願哲、酒に醉つて、よろ〳〵と出て來り、外にてこの體を見て
願哲　イヤ〳〵、畜生め〳〵。こりや堪らぬわえ。

ト鉦と撞木を持つて、内へ轉け込む。

民部 ヤ、こりや今の出家か。

願哲 ナニ、今の出家か。オヽ、出家ぢや〳〵。出家、侍ひ、遁がれぬ仲ぢや。コレ、畜生め、此やうな古寺へ、吉原のおいらんを引き込み、ちん〳〵鴨はまだ早い。ちん〳〵青鷺、どでごんす。イヤ、うまいな〳〵。

民部 コリヤ、和尚どのは、話せるワ〳〵。

願哲 話せる段か。今でこそ念佛講の觸れ坊主。枕念佛を取りおいて、ちと、洒落れようか〳〵。

民部 イヤ、よからう〳〵。

願哲 さて、御樣子をかんがみるに、おいらんは愁ひの樣子。その泣く泪を取り捨てゝ、笑ふ門には福來る。これより我れらが、七福神の七おもて。面で七役早變り、大黑天が最初でござい。

ト三味線入り禪のツトメになり、願哲、捨ぜりふよろしく、七福神の早變りする事、いろ〳〵あつて

これで七福、どつと褒めたり。

民部 イヨ〳〵、こりや一段と見物ぢやわいの。

願哲 これは益體、御免〳〵。

　　　ト他愛なく寢る。

民部　これはしたり。もそつと何ぞ隠し藝を。コレ〳〵、お坊〳〵。アヽ、よう寢たさうな。

　　　トこの時屏風を明け、お袖、出かゝり

そで　モシ、お前さん、藥を買ひにござんしたと思うたら、矢ツ張りそこにござんしたかえ。そして、
　　誰れやら女中の聲が

　　　ト見ようとするゆゑ、民部、手早く有りあふ打敷を、お松の亡魂に打掛け

民部　イヤ〳〵、誰れも爰には……オヽ、それ〳〵、爰にゐるのは先刻の出家、それも死んだやうにな
　　つて、寢てゐるわいの。

そで　そんならどうぞ、あの熊の膽を。

民部　オヽ、直ぐに行つて來ませう。必ずわしが歸るまで、かまへて爰を

　　　ト心づかひの思ひ入れあつて

　　今度こそ一走り。ドリヤ、買うて來ようか。

　　　ト唄、時の鐘、蟲の音になり、民部、足早に向うへ入る。お袖、跡を見送り

そで　どうぞ早う戻つて下さんせえ。なんぢややら、氣味が惡うて

ト抱いてゐる子をいぶり附けるこなし。ドロ〱になり、かむりし打敷、自然と脱ける、とお松の亡魂、なまなりの顔になり、異形の姿に變り、そろ〱と立ちあがり、ひよろ〱して、寢てゐる願哲が顔を覗き見る。これにて願哲、うなされる思ひ入れ。お袖、これを聞きつけ

ア丶モシ、お前、おそはれてかいな。此やうな事なら、なんの主を、藥買ひにはやるまいもの。斯ういふ時には、神佛より賴みは無い。怖いといふも、松山さん、もしひよつと、死なしやんしたなんぞといふ、其やうな事になつたら、わしやどうせう。どうしたらよからうぞいなア。

ト此せりふのうち、お松の亡魂、お袖が顔をキツと見詰めて、思ひ入れある。

ア丶、思ふまい〱、此やうに思ふのも、心の迷ひ。此やうな時は憂を晴らして、ドリヤ、莨なとのみつけて

ト寢ころびしまゝ、莨をつぎ、莨盆の火入れに火の消えたるゆゑ、枕元の行燈の火へ、長煙管を差出す。この時お松の亡魂、向うへ廻り、行燈をソツと引く。お袖、煙管が屆かぬゆゑ體を乘出し、手を伸して附けんとする。また亡魂、行燈をソツと引く。お袖、また屆かぬゆゑ、乘出し、手を伸して附けんとする。また亡魂、行燈を引く。これにてお袖、二三度乘出す事あつて、心附き

ハテ、めんえうな。この行燈が、どうやら段々

ト何心なう行燈の向うを見る。お松の亡魂、恨めしげにお袖を見る。お袖「ワツ」というて起きんとするを、お松の亡魂さし寄つて、お袖が咽喉を押へて、仰向けにして、キツと顔を見る。

ア丶、尤もでござんす〳〵。成る程、わたしが呪うたばかりで、お前の顔が變つたは、わたしが仕業。その恨みあるその上に、お前の思ふ民部さんを

トこの時、亡魂、また咽喉を締める。

ア丶、苦しうござんす〳〵。モシ、尤もぢやわいな。殊に、お前の様子といひ、もしやひよつと

トこの時、亡魂、さめ〴〵と泣く。

そんならお前は、非業にこの世を

ト驚ろいて、赤子を抱き逃げんとするを、亡魂、髻摑んで引寄せる。お袖、苦しみ

ア丶モシ、堪忍して下さんせ〳〵。さう聞いては猶々尤もでござんすが、今更仕様も……アモシそこな御出家さん、起きて下さんせいなア。

ト願哲の方へ行かうとする。ドロ〳〵にて、亡魂、連理引きに引き戻す。お袖、苦しむ。その聲に願哲、目を覺まし、恟りして、有りあふ打敷をかぶり、手早く鉦を打ち鳴らし

願哲　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト念佛申す。お松の亡魂、キツとなつて、向うを見て

まつ　エヽ、恨めしい。今少し夫民部、歸らぬならば、憎くい女め。只恐るべきは夫の懐中、所持するところの軍術の一卷に、あらゆる諸神の祕法の祕文、それに恐れて、近寄る事も叶はぬか。とはいへ、憎くい女めは、やはか此まゝ置くべきか。

そで　そんなら、どうでも

願哲　南無阿彌陀佛々々々々〳〵々。

ト鉦を打つて、慄へ〳〵回向する。凄き合ひ方、一つ鉦、薄ドロ〳〵、お袖は苦しむ事。赤子泣く。お松の亡魂、これにて、ヂリ〳〵と壁の方へ寄り、この時その身は壁にて消える。お袖、倒れ伏す。願哲、慄へてゐる。ドロ〳〵、打ちあげる。時の鐘。向うより民部、息せき歸り來り

民部　さぞマア、お袖は、待つたであらうに

ト何心なう内へ入る。願哲、悔りして

願哲　なまいだ〳〵。

ト無暗に鉦を打ちながら、向うへ逃げて入る。民部之助、悔りして

民部　これはしたり。出家は何をうろたへて

トこの時、赤子泣く。

オヽ、又せわりをるか。お袖は寝てか。

トお袖の倒れゐるを見て

ヤ、お袖ぢやないか。何として此やうに、

ト呼び生けて、いろ／＼介抱する。お袖、心附く。

そで　ヤア、戻つてかいな／＼。遅かつた／＼。遅かつたわいなア。いま爰へ姉さんがござんして、非業にわしはこの世を去る、恨めしいは妹と、わたしを捕へて、折檻なさんした。お前が一足早いならば

民部　すりや、松山はこの世を去りしか。それも前世の約束事。さりながら、姉の怨念残りし上は、コレ、お袖、今より其方が縁切つたぞ。

そで　エヽ、姉さんの恨みあるゆゑ、わたしと夫婦の縁切るとは、そりやマア、なぜに、女夫の結びは

民部　不審は尤も、さりながら、其方と女夫になる時は、姉の死靈の離れずして、後々ともに爲ならず
それぢやによつて夫婦の縁を

そで　イエ／＼、それは胴慾でござりまする。たとへ姉さんの死靈の恨み、取り殺されてもいとひませ

ぬ。どこまでお前の女房、離れる事ぢやござんせぬわいなア。

ト縋つて思ひ入れ。

民部 オヽ、尤もの志し。さりながら、今こそ明かすわが胸中。我れこそ楠正行の後胤なりと、秋葉山にて詳しき示し。それにて俄に、大義の企てなせば、事を計るに女を同道、他聞の聞え計りがたし。それゆゑ縁切る、女房お袖。左やう心得、今より其方は

ト此うちお袖、胸苦しき思ひ入れにて

そで そりや胴慾でござりまする。姉さんの恨みのたけ、お前にまで見限られ、わたしは何としやんせう。其お詞に、一倍病ひの重りてか、このマア胸が。アヽ、苦しい〳〵。わたしや此まゝ

トいろ〳〵踠き、ト、縡切れて落入る。民部之助、駈け寄り

民部 コレ、氣を慥かに。コレ、お袖。

ト介抱して

ヤヽ、こりやモウ、縡は切れたか。エヽ、是非もない。

ト思ひ入れ。薄ドロ〳〵になり、下の障子屋體の破れより、細長き手をさしのべ、お袖の襟元を捕へズル〳〵と障子の中へ引き込む。民部、愕りして

さてこそ怪しい一間の内。

ト屋體へかゝり、障子を取りのけろ。内に、お袖の首無き死骸あり。薄ドロ〳〵にて、件の屋體の中より、魂ひ、ふはり〳〵と向うへ飛び行く事。民部、驚ろき

すりや、死靈の業に、お袖は可哀や。さすれば今より幼な子は、乳に離れて泣き死に

ト思ひ入れ。ドロ〳〵にて、この時、上の方の障子の内より、毛の生えし畜生の手を出して、爪を磨ぎ立てし體にて、赤子を握み、引き込む。

又もやこなたに。

ト駈け寄りて、障子を蹴離す。内に猫石の怪は、件の老女にて、赤子を片手に握み、立ち身。民部、キツと詰め寄り

こりや最前の老女よな。

猫怪　愚や民部。唐土にては後漢の明帝の十年、天竺より佛像經卷を贈る、日の本にては繼體帝十六年に渡るといへど、それを用ひず。我れその時南蠻國にて計らずも、經虎・猺狐の生を合して、一つの靈獸を生ず。經鼠の愁ひを除かんと、日本に渡るといへど、魔界の生とて、其まゝに用ひざれば、山に入り、陰に凝つては陽に發し、名づけてこれを火車といふ。縮まる時には姿を化し

女三の宮と、大内の、宿直も後に柏木の、衛門と共に東路へ、下る道にて山中に分け入り、人を害せば、身は情なや畜類と、姿隠せば童の、かよわき肩に地中の、庭戸に据ゑたる大石も、わが業通に、その姿、後には人もおぢ恐れ、事によつては、雲を起し、身はさかしまに炎の光り、彼れこそ魔界の中なりと、悪業受けし猫石の、精靈なりと知らざるや。

　　トきつとなる。大ドロ〳〵。

民部　さてこそな。

猫怪　假にも朝夕年たけし、我れとも知らず恩愛の、受けし娘は松山にて、その怨念と合體なし、恨みは盡きじ唐猫の、萬劫盡きぬ身なるゆゑ、鬼神に劣らぬわが業通。見よ〳〵、汝、修羅の苦患のその有樣、炎の車へ誘引せん。早々來れ、民部之助。

民部　ヤア、たとへ汝、いかほどに、魔風の一吹きあるにもせよ、所持なすところのこの一卷、いま目前に。

　　ト懐中の一卷を出す。この時、以前のしつぺい太郎の犬走り出て、猫の怪目がけて飛びかゝる。これに恐れて猫の怪苦しみ、タヂ〳〵となる。猶も民部之助、一卷を差しつける。犬は飛び附き〳〵、あたりへ入る。この時、古寺の道具一時に變り、大ドロ〳〵にて、舞臺は殘らず茅原となり、猫の怪は大

きなる猫石となる。

宇都の谷の猫石と、聞いてはあれど、この珍事。寺と見えしもこの茅原。ハテ、恐ろしき事どもぢやなア。

ト思ひ入れ。時の鐘、風の音になり、向うより、願哲、鉦を打つて先に立ち、後に白木の輿、これに山形屋義兵衞は判人にて、旅なりのまゝ阿彌陀笠をかむり、施主の體にて、百姓大勢附添ひ、出て來り。

百姓　コレ〳〵、旅のお方。お前は、とんだ所で施主にならつしやるの。

義兵　それ〳〵。いかに判人だといつて、旅先でまで施主になるとは、怪しからぬ話しサ。

願哲　併し、お前もよう人の世話をさつしやる。このマア、川流れの女の死骸は、なんで又お前が

義兵　ハテ、一旦わしが買ひかゝつた、八つ橋村の松山。非業の死を遂げ、その死骸が川流れ、氣の毒と思ふから、葬つてやりまする。

願哲　その古寺は今夜の樣子で、どうやら不氣味な……併し、大勢來ては千人力。早く葬ひを片附けさつしやい。

義兵　サア〳〵、頼みます〳〵。

ト皆々舞臺へ來る。

願哲　イヤア。今まであつた古寺が、こりや、どこへやら引ッ越しか。

皆々　寺が見えぬワノ〵。

ト騷ぐ。民部之助、見て

民部　コレノ〵。こなたは今まで爰にござつた出家でないか。

願哲　左やうノ〵。先刻にも云ふ通り、愚僧は頼まれ、女の葬ひ、連れては來たが、今までの、寺が爰には

民部　樣子あつてのこの珍事。して、その女は、いづくの何者。

義兵　この女といふは、吉原で、女郎の松山、親里は八つ橋村、非業の死を遂げ、大井川へ浮き死骸、葬むる我れらは、即ち判人。

民部　すりや、松山が死骸とな。不便や夫の民部にも、さぞや無念が

願哲　さてこそノ〵。松山が男なら、石井の小者藤助が、今は變名、民部之助。怪しい奴と世間の噂、いづれも油斷さつしやるな。

百姓　合點だノ〵。代官所へ引く、動くまいぞ。

ト皆々、輿を下して、民部之助へ立ちかゝる。

民部　ヤア、狼藉な。手向ひ致すと、免さぬぞ。

願哲　エヽ、面倒な。縛らつしやい。

皆々　合點だ〳〵。……腕廻せ。

ト民部之助へかゝる。義兵衞うろたへて逃げく入る。本雨降つて來り、大雷鳴りになり、民部之助は皆々を相手に立廻り、切り拂ひ〳〵、件の輿の上へ上がり、キッとなつて空を見上げ

民部　さては以前の猫石の、その念凝つて火車と現はれ、女の死骸へ立ちかゝるか。

願哲　ソレ、面倒な。民部之助を

皆々　遁がしはせぬぞ。

ト立ちかゝるを、民部之助よろしく立廻り、此うち大雷鳴り。後の猫石、兩眼を開き、火焔を吹きかける。其あたりより猫の怪現はれ、件の輿へ立ちかゝる。民部之助やらじと止むる。立廻りに猫の怪、引拔きにて、老女の裝、姿も共に、半身斑の大猫となつて、キッと見得。皆々「ワッ」といふて倒るゝ。

民部　さてこそ火車の正體を

猫怪　民部が懐中、あの一巻、近寄る事の叶はねば、女の死骸は、八萬奈落へ。

ト輿を打ち砕き、松山の死骸に、お袖の首を提つて立ちあがる。

民部　ハテ、凄まじき火車の振舞ひ。

猫怪　雲に飛行し、此まゝに

ト大ドロ〳〵烈しく、松山の死骸の帯際を摑み、お袖の首を咬へ、キツとなる。早笛にて、猫の怪を段段と上へ引揚げ、日覆際まで上がる。願哲はじめ皆々「ワツ」というて逃げて入る。民部之助キツとなつて

民部　二人が屍は、やはか火車には

ト空を見詰める。この時、大ドロ〳〵にて、猫の怪、前の方へちよつとおこづく。これをキツカケに烈しき鳴り物になり、死骸を引ツ抱へ、首を咬へ、よき所より双股の尾を現はし、この見得にて、向うへ中乗り。民部之助は跡追ひかけ、揚幕へ入る。よきキツカケに踊り地になり、浮いたる鳴り物。直ぐに舞臺は東海道府中の宿、二丁町女郎屋の道具に變る。

本舞臺、三間の間に本緣附き高二重。向う長暖簾。軒に「井筒」と書きし團子提灯。上の方一間の障

子屋體。この前に柴垣、石の手洗鉢。いつもの所に枝折り戸。下手に用水桶。すべて駿州彌勒町、揚屋の道具。踊り地にて道具納まる。

ト直ぐに向うより旅乗り物、團助、中間にて附き添ひ、その外に中間二人引添ひ出て來り、舞臺へ來る。團助、ちよつと乗り物に囁く事あつて

ト奥にて

團助　頼まうぞよ〳〵。

仲居　アイ〳〵。

ト仲居お山、お大、赤前垂れにて來り

やま　これはマア、どなたか。よう入らつしやりました。

だい　サア〳〵、こちらへお入りなされませ。

團助　コリヤ〳〵、女ども。かしましく申すな。此たび將軍家よりの仰せにて、當所三保の明神、御普請お手傳ひの役目にて、御下向ありし由留木の御家中、定之進どのに御内用にて、お越しなされし御方、お忍びなれば、小座敷へ御案内いたせ。

やま　ハイ〳〵、畏りました。明神樣御普請のお役人樣、定之進さま、この間から四五日の居續け、

酒浸しになつてお出でなされまするが、あなた方、お連れ様なら

だい　お知らせ申しませうかいなア。

團助　すりや、噂にたがはぬ定之進どのゝ身持ち。

ト乘い物に向ひ

お聞きなされましたか。……實否を糺すまで、定之進どのへは沙汰なしに。

やま　そんなら、あの奥座敷の、阿部川を見晴らし、涼しい所へ

だい　御案内いたしませう。

團助　ソレ、お乘り物。

仲居　ドレ、お座敷を片附けませうかいなア。

ト踊り地になり、お山、お大は奥へ、乘り物は團助附添ひ、上手へ入る。矢張り踊り地にて、向うより願哲出て來る。跡より水右衞門、そぼろなる浪人にて附き出て來り、花道にて願哲に囁く。願哲うなづく。兩人こなしあつて本舞臺へ來り、願哲、門口を覗く事あつて、また門口へ出て囁く。水右衞門うなづき、下手へ小隱れする。願哲、内へ入り

願哲　コリヤ、誰れもゐねえか。頼むぞ〳〵。

ト これにて奥よりお山、出て來り

やま　アイ〳〵。どなたぢやぞいなア。

ト願哲を見て

エヽ、穢い、乞食ぢやないかいなア。

願哲　べら坊め、乞食といふ者があるものか。お客だ〳〵。コリヤ、奥にござる宮太夫さまに、用事があつて參つた者だ。サア〳〵、なんぞ出せ〳〵。

やま　エヽ、知らぬわいなア。

願哲　早く奥へ案内せい。

やま　いま知らせるわいなア。

ト矢振り踊り地にて、お山、奥へ入る。

願哲　ヤア、騷ぐな〳〵。成る程、定之進どのが、晝夜うつゝになるのも尤もだ。おれもおツつけ宮太夫どのへ歸參すれば、その時は、酒も、肴も、心の儘だ。ヤア、爰に酒もあるわえ。こいつは奇妙だ。

ト肴を引出して、銚子の口より直ぐに飲み、肴をムシヤ〳〵食ふ。この時、奥にて「アイ〳〵」と返事する。恟りして

エヽ、折角旨く飲んだところを、悔りさせやァがつた。イヤ〳〵、悔りといへば、定之進めが預かりの普請金のうち、水右衛門どのが働らきで、盗み取つた三百兩、預けて行つたが、おれが持つてゐては矢ッ張り不氣味。どうぞ暫くこつてりと。

トあたりへ思ひ入れ。この時、奥より團助出て來り

團助　コレサ、願哲どの、宮太夫さまがお待兼ねだ、早く來やれ〳〵。

願哲　オツト、合點だ。ドレ、お目にかゝつて。

ト行かうとして立戻り

イヤ〳〵、水右衛門さまから預かつた三百兩、おれが持つてゐては人の怪しみ。この金は暫らくおぬしに。

團助　そんならその金を、おれに預かつてくれろといふのか。

願哲　てまへが持てば、人目に立たぬといふものだ。

團助　して、その出所は。

願哲　定之進が預かりの普請金。

團助　さういふ事なら、氣遣ひしやるな。

ト三百兩受取り、懐中する。

願哲　それでおれも安堵した。

團助　そんなら、おれは阿部川まで、ドリヤ、一走り行つて來ようか。

ト流行り唄になり、團助、向うへ入る。

願哲　官太夫さまの御用なら、慥かに御勘氣御赦免で、以前の段介。うまいな〳〵。

トこの時、奥にて、バタ〳〵と音するゆゑ、願哲、思ひ入れあつて、障子屋體へ入る。奥よりいろは（實は信濃屋の娘お半）振り袖新造、扱帶の形。次郎作は木綿やつし、親仁の拵らへ、亭主東六附いて、せり合ひながら出て來り

次郎　濟まんぞ〳〵。

東六　この親仁どのは何を騷ぐのだ。

次郎　これが騷がずにゐられようか。この娘はどこから買つた。それを、糺さにやァならぬ〳〵。

東六　ハテ、どこから買はうが、いらぬ世話。貴樣、なんぞゆかりでもあるのか。

次郎　ゆかりどころか、こりやおれが娘ぢや。わしは由井の宿で紺屋商賣、憲法染めの次郎作というて總領の倅は、小さい時から武家奉公が望みで、石井左内さまの所へ若黨奉公にやり、妹のこの娘

を一人樂しみに育てゝゐるところに、京都から身延參りの女中が通りかゝつて、この娘を見て、養女にくれいとたつての望み。尤も身代もよう思ふゆゑ、所を聞けば、京都押小路、信濃屋といふ事ゆゑ、一人娘ぢやけれど、片田舍に育たうより、都の水に育つたなら、女の道も覺えようと、思ひ切つて養女にやつた、娘のお牛。もう年頃な、よい娘盛りになつたであらうと、樂しんでゐた甲斐もなう、噂を聞けば、おのれは、養家の阿母と一緒に、伊勢參りに出た道、石部の宿で、押込みに入つた泥坊に惚れて、現在養母を見捨て、泥坊と一緒に逃げたとの事。ところで、今、この女郎の姿、これも大方、その泥坊が賣つたのであらう。おのれは〳〵、マア、情ない、いたづら者ぢやなア。

東六 コレサ〳〵。其方の入り譯はどうだか知らぬが、この娘は吉田船で、入水のところを助けられ、その入用に判人が、おれの所へ預けたゆゑ、證文無しに抱へ、いゝいろはといふ女郎にして、この井筒屋へ預け置き、井筒屋のいゝいろはといへど、抱へた主は白子屋の佐助。

いろ ついした事のいたづらから、思ひそめた其お方と、共に漂ふ伊勢の海、尾張路さして行く船の、命の瀬戸の風荒く、それゆゑこの身を男の爲、一心こめてわだつみへ、犧に供へ、入水せしが、死なれぬ命か、思はずも、助けられて、此やうに、浮き川竹の勤めの形も、もしや、ま一度其お

方に、逢ふ事もと思ふうち、噂を聞けば、其お方は

次郎　死んだといふのか。それも大方天の網、捕へられたものであらう。それはまだしも。もう〳〵、爰でめぐり逢ふからは、どこへも去なす事ぢやない。われが兄の藤助も、由井の民部と名を變へて武者修行に出たとの事。その跡で、左内さまが亡くなられ、お主の家へも歸られず、故郷へ戻る道すがら、この中思はず阿部川で、めぐり逢うたゆゑ、無理に內へ連れて戻つて、今は元の染め物商賣、相應な嫁を取つたが、兄めも奉公のうちに、云ひ交した者でもあるやら、何かの望みがあるというて、兎角嫁と一つ寢せず。嫁は又嫌はれながら、夫大事に、わしへも孝行。それは〳〵深切なもの。これからわが身を連れて行き、二人にも逢はさうわいの。

東六　どつこい。いゝ氣な事を云ふぞ。得手勝手に連れて行かれて、堪るものか。金出した奉公人、殊にお客の定之進さまが、二百兩で

次郎　請け出すなら、わしも由井の憲法紺屋、田地を賣つても、二百兩で、此方へ請け出す。

東六　なんの、こなたの身代で。よし二百兩出來るにもしろ、お客の方が先約だ。

次郎　せんやくでも、練り藥でも、現在親が、金出して、連れて行くのだ。

東六　さう自由にはならねえよ。

次郎　わしが自由にして見せる。待つてござれ。

ト東六を突きのけ、奥へ入る。

東六　ヤレ、とんだ強情な親仁どのだ。

ト同じく奥へ入る。いろは殘り

いろ　思ひがけなう、假染めにも、云ひ交したる戀しいお方。身のすぎはひは道ならぬ、盜賊の名を流すも、もしや寶の詮議とやら。本名は丹波與八郎さま。其お望み叶はずして、遂に大井川にてお果てなされし、はかない御運。直ぐに我が身も共々に、消えなんと思ひしが、せめてゆかりの兄御樣に、お目にかゝらば、あなたのお心、附けての上と、惜しからぬ、命長らへ憂き勤め。

ト懷より紙の戒名を出し

俗名丹波與八郎さま、南無阿彌陀佛々々々々々。

ト回向する。この時願哲、藤川官太夫、ヌツと出て

願哲　さてこそおのれは、お尋ね者の、日本駄右衛門、本名は丹波與八郎の、ゆかりの者とあるからは

官太　紛失の二百兩、大方われが盜んだであらう。

いろ　どうしてわたしが。

宮太　イヽヤ、怪しい。盜賊にゆかりの女、引ツ立てろ。

願哲　心得ました。

いろ　イヽエ、知らぬわいな。

ト「さる程に寺々の鐘」の謠ひになり、いろは逃げ廻る。願哲、追ひかける。いろは、二重へ上がり、暖簾口へ駈け込む。願哲續いて行かうとする。この時暖簾口より、萠黄地に白く唐草を染めたる油單を掛けし伏せ籠を引き出す。願哲これに隔てられ、たぢろぐ。この時兩方より、仲居のお山、お大も雪洞を差出す。

願哲　これは。

やま　今日の趣向は東なる、江戶吉原へ五丁引け、殘る二丁のこの廓。爰へ取越す揚屋の俄、お客の趣向の道成寺。

だい　戀の手習ひ、いろはさんを、身受けのかねいり、鐘供養。

宮太　其かねいりの二百兩、疑ひかゝる女めを、庇うて出でたる伏せ籠のうち。

願哲　鐘樓の鐘と見立てなら、幸ひ坊主のこの願哲、祈り上げるは瞬くうち、なんの造作も有明の、釣り鐘こそは

ト「すは〳〵動く」の謠になり、願哲、身拵らへして、伏せ籠を引き退ける。中に竹村定之進、袴の形にて頭より羽織をかむり、いろはを抱へゐて、願哲かゝるを、ちよつと立廻つて、見事に投げのける。

羽織をかなぐり捨て

定之　それ見よ、お客が現はれたり。

ト一口謠ふ。

宮太　ヤヽ、わりや悴

願哲　定之進さま。

山大　御酒も少しは醒めましたかえ。

定之　杯に、向へば變る人ごゝろ。醒めれば又飲む、飲めば又醉ふ。彼の潯陽の江の酒盛りにも、劣らぬ樂しみ。よろ〳〵とする足元は、道成寺やら、猩々やら、これが誠の亂拍子。持越し酒の腹鹽梅、なんぼう恐ろしきものあたりにて候ふ。……袖の梅〳〵。

山大　ハイ〳〵。

ト藥を定之進にやる。

宮太　ヤイ、悴。現在親の見る前で、取り所の無いたは事。そちや人事をも辨へぬか。

定之　ホヽウ、これは誰れかと存じたら、親人様。銘酊いたして、お見外れ申した。これが兎角に酒の科、眞平御免下さりませう。何はしかれ、これなるいろはを、追ひ廻してござつたのは、親人様かな。堅い顏して、新造買ひかな。イヤ、中々隅へは置かれぬ。こゝな親人の、通り者様めが。

願哲　イヤ〳〵、左樣な譯ではござりませぬ。その女には、詮議がござりまする。

定之　ホウ、其方は坊主ぢやな。さては醫者……醫者にしては見立ての惡い。女の病は癪のつかへ。女に疝氣があつてよいものか。ハヽヽヽヽヽ。

願哲　イヤ、そりや詮議のお口合ひでもござりませうが、その女は盗賊の張本、日本駄右衛門がゆかりの者。御普請金二百兩、紛失の疑ひかゝつた女ゆゑ

定之　ハテ、それで詮議か。人のせんぎを頭痛とは、この事ぢや。コレ、よく聞けよ。當所、三保の明神、御普請奉行は定之進、その預かりの金子二百兩、紛失にもせよ、詮議いたさば、身共がする。出家の其方に、誰れが

願哲　エ。

定之　又、盗賊日本駄右衛門がゆかりの女と、疑ひかけるが、駄右衛門が盗賊ぢやとて、語らひし女まで、盗人根性があると、きまつた事でも無いわサ。殊に、駄右衛門は首になつて、この世に亡き

人。また盗賊のゆかりばかりで、疑ひがかゝらうなら、この定之進も矢ッ張り盗賊。

願哲　どうしてあなたが

定之　ハテ、日本駄右衛門の實名は與八郎、卽ち身共が實家の由縁といへば、養父たるこの親人まで、盗賊のゆかり。

宮太　ヤ。

定之　詮議立てを致したら、藪を叩いて蛇とやら。只ぬらくらと……サア〱、酒を持て。

山大　ハイ〱。

ト酒肴を出す。

宮太　ハテ、口がしこく云ひ廻しても、大切な役目を承りながら、かゝる身持ち。それゆゑ二百兩の金子も紛失。お上よりお咎めあらば

定之　祿食つた報い、腹一つ。さのみお案じなされずとも、打ちくつろいで御酒一つ。女子ども、酌いたせ酌いたせ。

ト定之進、杯を取る。この時、向うより團助、走り出て來り

團助　ハッ、お尋ねありし、石井左内が悴半次郎、あの阿部川にて川越しが、やう〱捕へて、この所

へ、召連れましてござりまする。

官太　出かした〳〵。これへ引け。

團助　ハツ。

ト向うへ向ひ

繩附き、これへ引かつしやい。

ト向うにて

中間　ハア、。

ト合ひ方になり、半次郎、浪人の形にて、繩にかゝり、中間二人この繩を取り、大小を持ち出て來り

下にゐさつしやい。

ト半次郎、下にゐて思ひ入れ。官太夫、半次郎を見て

官太　すりや其方が、石非左內が悴よな。

半次　いかにも、同苗半次郎でござる。この身にとつて、かゝる繩目にあふべき事、さら〳〵覺えござらぬを、理不盡に捕へ、この如く、何科あつて某を

官太　イヤ、覺えないとは卑怯者。現在身共が弟たる、源吾を勢州龜山にて、討ち果したる半次郎。弟

の敵。

ト定之進、半次郎を見て

定之　すりや、あの若人が、甥の源吾を

宮太　討つたる敵の半次郎、この場へ召捕り來りし上は、直さま敵を討たざれば、養父へ義理も立つまいに、色と酒とに性根を奪はれ、素知らぬ顔は、他人根性。實の伯父なら討つであらうに。

定之　イカサマ、養父の實の弟、源吾を討ちしは半次郎、某とは實家の從弟。血筋の緣に引かされては養父へ濟まぬ武士の義理、さらば身共も改めて、

ト居ずまひを直し

女ども、大小これへ。

トお山に、後にある大小を取らせ

斯く姿を改むれば、藤川宮太夫が悴定之進、武士の政道、いま爰で。……いかに、石井半次郎。何ゆゑあつて身が甥たる、赤堀源吾、浪人いたして八平次、彼れを殺害なしたる意趣、逐一申せ。

なゝ、なんと。

ト半次郎、定之進を、つくづく見て

半次　ハヽヽヽヽ。强酒賢なし、獨酒また愚なりとは、おことらを指していふべきか。あはれ、丹波の御子息も、酒色に溺れ、それほどまで。酒興の說法、取るには足りねど、身が八平次を討ち果せしは、現在、親の石井左內、彼れが爲に討たれしゆゑ、共に天を戴かぬ仇敵。折よく勢州龜山にて出會なし、親の敵と、いかにも討つた。又、貴殿の實父與惣兵衛どのも、都三條にて暗討ちにあひ、その敵さへ得知らず。いかに養子とはいひなから、敵を尋ぬる所存も無く、のめ〳〵として居らるゝは、それでも武士か、侍ひか。刀の手前も恥ぢぬのか。それに引かへ、この半次郎は武士道立つて、親の仇、討ちしとあつて、この繩目。殊に、源吾は、殿樣の御前にて、勘當受ければ、これ以て、御身達に緣も無ければ、敵討ちといはれん筋はなし。それとも非道に某を、敵と呼ばゞ容赦なく、この場で運を極めんが、見事、勝負を決する心か。

定之　サア、それは、

半次　サア、

二人　サア〳〵〳〵、

半次　腰拔け武士の魂ひが、半次郞が身に立たうと思ふか。愚かな事を。

定之　ホイ、これは閉口。あんまり早く云ひ込められた。併しながら、理の當然。兄弟、伯父、甥に緣

が切れなば、成る程、敵といふ筋も

願哲　イヤ／＼、そりやあなた、御卑怯だ。それでは養父の宮太夫さまへ、義理が立つまい。

定之　ハテ、又しても出家の差し出。一體、其方は何者ぢや。

願哲　エ、。

宮太　イヤ、あの者は以前の家來、一旦暇は出したれど、今日からは元へ戻して、以前に變らぬ下部の段介。

定之　すりや親人の

宮太　いかにも家來だ。

願哲　さすれば下郎が爲にも主人の敵。あなたは義理ある甥の敵。この場で早く。

定之　でも、殿の御前で、勘當された源吾ゆゑ、その敵とて討つなれば、これ即ち私し事。武士の意氣地に討つては討たれ、討たれては、又その仇を討たうなら、億萬劫を經るとても、恨みの盡きる期はあるまい。

宮太　すりや、どうあつても

定之　ハテ、又敵討は天下の御法度。野暮をいはずと、兎角浮世は、酒の事／＼。

ト官太夫、願哲、呆れし思ひ入れ。この時奥にて

水右　イヤ、その敵は身共が討たう。

ト水右衛門、のそ〳〵と眞中を通り、舞臺へ下りて來る。願哲見て

願哲　あなたは以前の若旦那。

水右　官太夫が總領、藤川水右衛門、勘當受けて斯くの浪人、それゆゑ跡へ、ぬく〳〵と、養子にござつた定之進、他人の家を丸呑みに、しようと思ふ慾心から、義理も、法も、打捨てゝ、命が惜しさに四の五のと、敵討ちを遁がれる心と見たゆゑ、面押拭うてこの場へ出たも、流石血筋の實の甥、源吾が最期の無念さゆゑ。源吾が敵は水右衛門、只今この場で討つて見せう。

定之　すりや、其許が

官太　この官太夫が實の忰、其方が爲にも義理ある兄だヮ。

定之　イヤ、たとへ兄でござらうとも、親人の勘當なりや、親子でも無し。親子で無ければ某と、兄弟でも無し。兄弟でなければ、義理も無し。いつまで云うても同じ事。

水右　知れた事、勘當の某なれば、お身とは元より兄弟でないが仕合せ。その義理知らずの腰抜け武士と、僅かな緣でもあると云はれては、どうか身内が、ぞく〳〵と、むさい、汚い。ヤレ、穢らは

しや〳〵。そんな人非人に論は無益だ。サア、これからは實の甥、源吾が敵の半次郎、この場に於てぶッ放す。覺悟しろ。

半次　寄りも寄つたり無道人。この半次郎は、親の敵を討ちおほせ、望み足りたる上からは、惜しむ命にあらねども。願はくば伯父者人、與惣兵衛さまの敵をも、討つたる上にて、二品の、寳詮議し家再興、願はんものと思ひしに、いかなれば、石井、丹波の兩家には、斯くまで武運拙くて、照らす月日もあらざるか。思へば〳〵口惜しい。

水右　よまひ言はそれぎりか。今が最期だ。……親人、刀を拜借。

宮太　出かした、悴　これですッぱり。

ト刀を拔き、渡す。水右衞門受取り

水右　童を爰へ引摺り出せ。

願哲　ハッ。

ト半次郎を引据ゑる。この時、障子の内にて

調之　水右衞門とやら、暫く待て。

水右　ヤ。

ト振り返る。上手の障子開く。内に由留木調之助、莨盆を扣へゐる。

宮太　あなたは若殿、

定之　調之助さま。

調之　いかに、宮太夫、某未だ幼少の砌りなれど、忰たる水右衞門、父の御前にて改易を蒙り、其方も勘當せし事、明白なるによつて、與惣兵衞が忰を、養子に遣はしたる父のお指圖。それに又ぞろ今日只今、水右衞門を忰なぞと、私しに呼はるは、この調之助を若年と侮つての致し方。水右衞門が勘當は、其方一存にて免したのか。

宮太　イヤ、全く以て。御前にて勘當いたせし、これなる忰、何しに拙者が一存にて。

調之　年に似合はぬ宮太夫が政道。近頃以て、行屆かぬ致し方。それにて老職が勤まらうと思ふか。たはけ者めが。

宮太　ハヽッ、恐れ入つたるお叱り。さりながら、御覽の如く、大切なる普請奉行の役を崇むりし、養子の定之進が身持ち放埓、役目の怠り。殊には、普請の用金二百兩紛失。これとても遊所通ひにいゝこもう致せし不屆き者。それゆゑ御用の間も相缺け、親の身に取り、恐れ入つてござるゆゑ、定之進には切腹いたさせ、何卒實子の水右衞門、最早心も直りますれば、御改易御赦免あつて、忠

義はじめに右の御用を。

調之 イカサマ、役目を怠り、奢りに長ぜし定之進が科、此まゝに打捨て置いては、政道が立たず、キツと糺明申し附くる。……併し、かゝる不届き者とも知らず、大切の役目申し附けしは、予が目違ひ、切腹いたさせなば、却つて身が恥辱を、世上へ流布も同然。又、官太夫にも、養子に切腹いたさせ、實子を取立てゝは、世の人口も何とやら。そこを存じて、願ひに任せ、定之進は改めて勘當。父に代つて水右衛門が、勘當免し、直さま定之進が役目の代り。

官太 すりや、悴水右衛門の勘當免し、御普請奉行の役目を

調之 申し附くる上からは、定之進に代つて出精いたせ。

ト官太夫、水右衛門顔見合せ

官水 エヽ、有り難うござりまする。

いろ そんなら今日から定之進さまは

やま 御勘當でござりまするか。

官太 いかにも。縛り首にも致すべき奴なれども、若殿の御仁心、命助けて勘當いたす。

水右 拙者はこれより御普請奉行。

宮太　コリヤ〳〵。宮太夫が家來。身が衣類と着替へを持て。

家來　ハツ。

ト下座より家來、廣蓋に衣裳、袴、大小を載せ、持ち出る。

水右　そんなら、これを

宮太　直さまこれにて。

願哲　サア〳〵、お召しなされませ〳〵。

ト願哲手傳ひ、水右衛門に衣裳を着せる。水右衛門、大小差し

水右　斯く姿を改むる上からは、元の藤川水右衛門。大切なる奉行の役。扶持離されの定之進、座が高い。下がらつしやい。

ト合ひ方になり、水右衛門、のし〳〵と二重へ上る。定之進、しを〳〵と舞臺へ下りる。お山お大いろはも同じく附添ひ、下りる。この時下座より、次郎作出て來り

次郎　ヤヽ、そんなら娘を身請けのお客樣は、御勘當か。……ヤヽ、あなたは悴藤助が、御奉公先の若旦那。このマア繩目は、どうした事で

願哲　ヤイ〳〵。かしましい。扣へぬか〳〵。

ト叱る。

次郎　へイ／＼。

ト不思議さうに下手に扣へる。

半次　人間の榮枯は、あざなへる繩の如し。心柄とて定之進どのゝ、榮耀も忽ち勘當の、それに引かへ水右衛門どの、思ひがけなき身の幸ひ。

定之　不義の富貴は浮べる雲、悔むは愚か。某も、昨日の大盡、今日の乞食。廓の遊びも十分の、滿つれば缺くる世の諺、勘當受くれば主も無し、義理立て致す親兄弟の、縁が切れゝば、この上はない。この身の幸ひ。アヽ／＼、野暮な武士の附合ひ、ほつと致した。あゝいふ野暮な手合ひと、ヤレ、親ぢやの、兄弟のと、縁を組んでゐたかと思へば、どうか身内が、ぞく／＼するやうで、むさい、汚い。ヤレ、穢らはしや／＼。ハヽヽヽヽヽ。これから我れらは天井拔け、誰れに遠慮もなみ／＼と、酒と色にて暮らすのが、何より樂しみ。

調之　願ひの通り、定之進には、勘當受けて、さぞかし……イヤ、この度の浪々も、主親の、即ち罰と心得よ。ハテサテ、不所存者め。

水右　サア、この上は元の如く、勘當免れた上からは、親に繋がる實の甥、源吾が敵の半次郎。この場

に於て。

官太　いかにも緣は血筋の敵。イザ、悴。

調之　イヤ、その敵討ち、相成るまい。

官太　でも、悴が元へ戻れば

調之　たとへ血筋の緣にもせよ、水右衛門は大切な、普請奉行の役目でないか。

官太　エ。

調之　小敵と見て侮らず、もしも勝負の運により、返り討にあふ時は、どの命を以て役目を勤める。

水右　サア、それは。

調之　命は君へ奉る、これが武門の奉公ならずや。

水右　サア。

ト思ひ入れ。

調之　忠義の道は知らぬぢやまで。ハヽヽヽヽヽ。さりながら、半次郎が父左内、殺害なせしは、予が兄の馬之助どの。その砌り、助太刀なせし赤堀源吾、兄はその場に切腹なせど、源吾はその砌り勘當せしは、せめて敵を討たせん爲なれども、兄の官太夫、弟の最期を無念に思はゞ、幸ひこ

れなる坊主こそ、主人の敵なれば、この場に於て半次郎と、勝負を決し、討ち、討たるゝは互ひの運。

願哲　どうして〳〵、私しが、縛つておいたら、格別の事。本の勝負は。

調之　すりや、現在主人の敵でも、討つ氣は無いか。

願哲　それぢやと申して。

調之　其方が討たねば外々に、討つ事ならぬ役目の主用。

水右　コリヤ〳〵、段介、何も案じる事は無い。たかゞ、小童。後には身共が附いてゐる。

ト呑みこませる。

調之　予が直々の檢分なれば、助太刀は一人も叶はぬ。

半次　すりや、この場にて。

調之　半次郎の繩を解け。

皆々　ハツ。

ト半次郎の繩を解き、大小を渡す。

調之　互ひに意趣あるこの勝負。心おきなく

願哲　主人の敵。
半次　伯父の敵の慥かに片割れ。
願哲　エ。
調之　双方支度。
半次　ハッ。
水右　段介、ぬかるな。
願哲　心得ました。
定之　オット、急くまい〳〵。敵討ちの、始まり〳〵。
　ト太鼓を打つ。
半次　イザ、
願哲　イザ〳〵〳〵、
　ト鳴り物になり、兩人拔き合せ、立廻りのうち、半次郎危ふくなると、定之進、太鼓を打つ。
次郎　太鼓だ〳〵。
　ト棒にて願哲を止める。官太夫、水右衛門氣を揉む。また兩人立廻り、半次郎踏ん込んで願哲の眉間

を打つ。

水右　ソレ、太鼓だ〳〵。

ト定之進、知らぬ顔して居眠つてゐる。半次郎、附け入り、切り込むゆゑ、願哲、受け太刀になり、水右衛門、堪へかねて手裏剣を打つ。半次郎、すかさず身をかはす。この小柄、願哲の胸板へ立つ。願哲「ワツ」と苦しむ。

南無三。

ト思ひ入れ。官太夫、堪へかねて抜きかける。定之進、頻りに太鼓を打つ。

次郎　助太刀は、ならぬ〳〵。

ト官太夫を棒にて當てる。此うち、願哲に半次郎とゞめを刺し、小柄を抜き取る。

調之　小腕なれども天晴れ手練。大事の敵、討ちおほせぬは段介が不運。又敵討ちは天下の御法度。官太夫親子、よも助太刀は致すまい。

官太　すりや、此まゝに

調之　半次郎もこれより、雷丸と九重の印、二品もろとも詮議して、石井、丹波の両家を再興。

半次　ハツ、有り難き御仁政。この上ともに。

調之　與惣兵衛が敵も大概……手がゝり知れなば、これをも首尾よく。心得たか。

半次　ハツ。

官太　思へば〳〵、家來一人、棒に振りしも、定之進めが

定之　太鼓の掛引き、きついものか。

官太　兎角に邪魔な。

ト團助に目で教へる。

團助　仲間のよしみ、追善代りに

ト定之進へ切りかけるを、定之進、突き廻し、扇にて押へる。この時、團助が懐より、最前の二百兩を落す。定之進、手早く取り上げ

定之　ヤ、、數も大方二百兩。覺えの打ちがへ。

團助　南無三。

ト又かゝるを、定之進、見事に切り倒し、手早く金を取り上げ

定之　思ひがけなき奉納の金、

官太　ヤ。

定之　イヤ、これが奉納の引摺り込み。それゆゑ勘當、この體裁。

官太　そんなら、われが。

定之　盗み取つたも、いろはが身の代。ソレ、親元へ。

ト投げ出す。次郎作取つて

次郎　娘が身拔き。エヽ、有り難い。

水右　イヽヤ、後の役目を蒙る某が、御普請金を自由には

調之　イヤ、あの金ゆゑに定之進が勘當。金が出づれば科も無く、役目を元へ戻しなば、水右衛門は矢張り浪人。

水右　エヽ。

調之　あながち詮議に及ばぬ事ぢや。

水右　エヽ、片贔屓な……イヤ、結構なお裁きだ。

調之　一旦心穢れた者の、手に觸れたりし二百兩、神の普請の用には立たぬ。

官太　でも、みす／＼二百兩。

調之　出所を詮議したなら、そこら、こゝらに科人が……イヤ、最前より餘程の隙いり。殊に、この程

水右　普請の延引、武將へ聞えも如何なれば、今より直ぐに明神の、社頭へ參つて何かの手配り。
宮太　奉納の役目の水右衞門、棟梁どもを呼び寄せて、日ならず成就いたすやう、割り普請の工夫いたすでござらう。
調之　某とても同道いたし、帳面その外、御用の吟味。
水官　然らば一緒に
山大　お供いたすでござりませう。
半次　わたしらも、大門までお見送り。
ト調之助、官太夫　水右衞門、下手へ來る。
調之　然らばこの後運に叶ひ、伯父の敵も討ちおほせ、二品出づるものならば
水右　歸參は卽ち予が胸に。
　痩せ浪人の分として、敵討も片腹痛い。まだしも童の半次郎は、身共が甥を武士らしく、親の敵と討ち取つたに、それに引きかへ、大腰拔けの定之進、實父の敵も得知れず、負け惜みの穿鑿。天酒でも無理にとち喰はずば、世間へ濟むまい。すんでの事に藤川の、名跡までも穢すところ。天の照覽明らかにて、水右衞門が忠心現はれ、家名を繼ぐも天の爲す業。

定之　イヤモウ、何事も天次第。人が笑はうと、指さゝうと、樂に暮らすが一生の德利の德。スッテンテンの三味線枕、死なざやむまい義理の二字。これぱつかりが

半次　エヽ。

定之　野暮だてな。

調之　表面から、見えぬながらも、日頃に變つて

官太　酒色に溺るゝうつけ者。

水右　今まで身共を浪人させ、親の知行を、ぬく〳〵と、喰ひ潰したその勘定。いま相續の水右衛門、土足にかけて

ト定之進を蹴倒す。定之進、其まゝ横にコロリと寝る。

ハテ、張合ひの無い。

調之　實に細瑾を顧みぬ、大丈夫なる、あたら家來を……イヤ、家來の兩人。

官太　若殿樣。

水右　まづ、お入りあられませう。

ト唄になり、調之助先きに、水右衛門、官太夫附添ひ、その外若い者、中間、お山、お大、附いて、

向うへ入る。半次郎、いろは、次郎作殘り、思ひ入れあつて

半次　心得がたき定之進どのゝ心底。若殿の詞の端。正しく官太夫親子こそ、伯父の敵。殊に、お家に仇する曲者。此まゝ置かんも本意ならず。

いろ　わたしも身儘になる上は、過ぎ去りし夫、與八郎さまの父御、この身の爲には舅御の敵。

次郎　忰藤助が爲には、若旦那のあなた樣、兄と一緒に心を合せ

半次　跡追ひかけて親子もろとも。事によつたら、寶の手蔓

いろ　これより直ぐに

半次　ちつとも早う。

次郎　サア、ござりませ。

ト三人身拵らへして、ツカ／＼と花道まで行く。定之進、起きあがつて

定之　ヤレ、待て、三人。今おことらが駈け出して、何を證據に敵呼はり。

三人　ヤ。

定之　いかに若いといひながら、同勢多き藤川親子、無慚に命落す心か。

三人　サア、それは。

定之　さりとては思慮も無く、したゝか醉つた身共より、一吸飲まぬお身達が、コリヤ、きつう醉うて
居るさうな。

トこれにて三人、舞臺へ戻つて來り

三人　そんなら、あなたの本心は。
定之　まこと骨肉同姓の、弟に敵を討たせんと、千々に心を碎くわやい。
半次　心得がたき其お詞、弟與八郎どのは
いろ　疾にこの世を
定之　去りしと世上へ流布させしも、敵へ油斷させんが爲。寶詮議に盜賊の首領となり、その名も卽ち
日本駄右衞門。遠州にて頭を刎ねられ、獄門にかゝりしを、某實見すれど、父上のお噂ありし
高瀬の黑子無きは、慥かに似せ首。
半次　すりや、與八郎どのは存命で
定之　世を忍ぶのも寶の詮議。又二つには親の敵。
三人　して、その敵の實名は。
定之　サア、その實名が明らさまに、名乘られぬゆゑにこそ。大切の御用金、奪ひ取つて身の科を、作

りて今こそ申し譯、武士の覺悟の

ト兩肌を脫ぎ

この切腹。

ト腹卷きを取る。下に鐵砲疵受けてゐること。

三人　ヤ、これは。

ト竹笛入りの合ひ方になり

定之　いつぞや都三條にて、父の横死のその場所で、思はず通りかゝりしに、我れを目がけて打つたる手裏劍。

ト懐より、發端にて手に入りし小柄を出し

模様は後藤の千疋猿。これぞ養父の官太夫、對に彫らせし二つの小柄。一つは實子の水右衛門。勘當の砌りに遣はせしとかねて聞く。殘る一つは養父の所持。さすれば敵は養父とも、又、勘當の水右衛門とも、分明ならねば、所詮敵は討たれぬこの身。明らさまには云はれぬ義理。それゆゑ身持ち放埒に持ち崩し、勘當受けて縁を切り、行くへ知れざる弟を、尋ね出してこの様子、語らんものと思ふうち、大井川にて計らずも、身が乘り物へ擊つたる鐵砲。これは正しく弟が、

我れを父の乘り物ぞと、思ひ違ひて撃ちかけしと、推量せしゆゑ、苦痛を堪へ、今日まで潤となぞらへて、服藥なして、命延はりしも、現在兄を打つたりと、沙汰させまじぎ爲ばかり。それゆゑこの身に科を拵らへ、切腹なりと披露して、死したる後はこの樣子、一旦夫と契りたる、これなるいろはに打明かし、與八郎へ告げさせんと、身請けなしたもこの儀ゆゑ。ところに、計らず、半次郎、めぐり逢ひしは猶以て、女が力に。まつた、いろはが兄といふは、半次郎が家來とやら。この人々に賴み置かば、氣遣ひなし。何卒弟與八郎、尋ね求めて、親の敵、二品ともに詮議して、丹波、石井の兩家を再興。くれぐ\/賴み、二つには、義理にしがらむ定之進、武士道捨てゝ相果てし、切なき心を弟に、傳へてくれよ、半次郎。

半次 ハヽア、其お心と知らずして、愚にも先刻より、過言、雜言、勿體なし。さるにても、敵の證據のその小柄、二つあるとの其お詞にて、思ひ當るは最前の、段介と勝負の節、某へ打ちかけし、水右衞門が所持の小柄と、コレ。

ト出して引比べ

模樣は變らぬ千疋猿。

定之 それこそ最前官太夫が、あの場で讓りし自分の差添へ。さすれば以前打ちかけしは、これぞ彼れ

を勘當の砌り、所持なせし小柄なれば、敵は正しく水右衛門。
半次　かゝる證據のある上は、寶詮議の與八郎どの、面會なしてもろともに。
いろ　わたしも戀しい與八郎さま
次郎　兄が爲にもお主の敵、これから直ぐに、三人、心を一致にして
半次　やがて本望。氣遣ひあられな定之進さま、さはさりながら、此まゝに、はかなきお別れ、
いろ　思へばこの身を受け出す金、それが科とて勿體ない。
定之　ハテ、それでなうても鐵砲疵、所詮存命思ひもよらず。最早只今知死期時。

ト弱る思ひ入れ。

三人　そんなら最早、お命は
定之　イヤ、めでたい門出。不吉の涙。
三人　それぢやというて
定之　草葉の蔭からよき吉左右、待つてをるぞよ。
三人　モシ。

ト三人、定之進に取り附き、これにて、タヂ〳〵として、屋體の側へ來り

定之　ムウ、……めでたい。

トにつたり、思ひ入れあつて、ガックリとなる。

三人　ハアヽ。

ト泣き落す。これにてこの前へ、一面に黒幕を振り落す。

淨瑠璃名題

松涼し

あれ天人も　須臾三保浮氣實

世話女房

清元延壽太夫
同　政太夫
同　志喜太夫

三絃　清元榮次郎
同　磯八

相勤めます役人

尾上松助　坂東三津五郎
尾上菊五郎　岩井粂三郎
市川團十郎

本舞臺、向う一面の浪幕。この所に極彩色の板松の並木。上の方に振りよき磯馴れ松。この枝に前幕

の孔雀染めの振り袖掛けてあり。この側に「羽衣の松」と書きし高札。下手に藁葺きの漁師小屋。軒に斧、麻繩など掛けてあり。すべて駿州三保の洲崎、綺麗に飾り附け、舞臺眞中に船を立て、これに帆莚干してあり。ずつと上の方に淨瑠璃臺、清元連中居並び、浪の音、一聲にて道具納まる。

〽風早の、三保の海邊を漕ぐ船の、浦入り騷ぐ、浪路かな〳〵。

ト眞中に帆莚取れると、内に漁師助市、柿の筒袖、絞りの浴衣、腰簑にて、大きな斧に倚りかゝり、釣り竿をかたげ、居眠つてゐる。

〽樣は入り江の淡水の底よ、すまし過ぎたで、汐が無い〳〵、しよんがえ　〽海女のいさりのざれ唄も、いづれ戀路をこがるゝ船よ、そこへ一針釣りの糸、風に結ばる縁ぢやとて、今度思はずこの浦へ、吹き附けられし仕合せは、冥加至極も浪煙り、晴れて夕日に三保の浦、松も霞の三重襷、景色に見惚れたゝずめり。

トこの文句のうち、助市、目を覺まし、よろしく振りあつて納まる。思ひ入れあつて

助市 ハヽア、絶景かな〳〵。紫蓋の巖頭、嵐疎らにして雲七百里の外に納まり、と唐の歌にもいひし如く、三保の洲崎の浪靜かに、又、芙蓉の峰、愛鷹に連なりし有樣。いつ見ても〳〵、倦む時あらぬこの風景。イヤモウ、どうもいへぬ〳〵。

トあたりを見て、松ヶ枝にかゝりし振り袖を見附け

ヤ、所に目馴れぬ孔雀染めの振り袖、この松ヶ枝にかゝりあるは……この松こその昔、天津乙女の、羽衣を掛けしと聞く。その風情に似通ふ振り袖、我れこそ伯了ならねども、獨り淋しさこの所へ、天人でも下れよかしと、思ふ折ふし、派手なる振り袖。時にとつては、心も浮き島。併し道々、町の女郎が、この海へ身でも投げたのではないか。ハテ、どうも合點がゆかぬわいの。

〽眺めに倦かぬ有度濱に、天の羽衣むかし着て、ふりけん袖のそれならで

ト向うより民部之助、やつし、石持ちの紋附き、麻の輕衫を穿き、片襷。おゐ六、田舍染めの振り袖棲端折り、同じく片襷にて、手拭に染めた物の布を大分入れて、これへ竹を通し、兩人して、これを提げて出で來り

〽これは衣を染め物や、藍のかげんも吉岡の、憲法染めと人毎に、由井の宿から三保の洲の、張り場へ通ふ干し物も、水入らずなる若い同士、離れぬ仲とどこまでも、つけて清見が關ならで、外の女は留める氣の、悋氣ぢやないが、これまでに、惡性駿河の二丁町、後に見なして此方から、おかひ町とは、てもさても、有り難いではないかいな、仲もよそ目にうら大和屋と、あんな女夫に成田屋も、噂嬉しく恥かしく、連れて引きあふ手と手拭、提げてたゆけく

來りける。

ト民部、おのぶ、花道にてよろしく振りあつて、本舞臺へ來る。

のぶ　アレ、見なさんせ、こちの人。毎日々々この洲崎へ、干し物に來るわたしらが、ついぞ見馴れぬ釣り人さん。

民部　それよナア。その上、あの羽衣の松に、美しい振り袖のかゝりあるといひ、取りも直さず、羽衣の昔の樣。マア、なんであらうと、聞いて見よう。

ト民部、助市の側へ來り

コレ〳〵、釣り人どの。ついぞ、この浦には見馴れぬ人ぢやが

のぶ　お前は、どこから、來なさんしたぞいなア。

助市　これは、此あたりに住む、伯了と申す漁夫にて候ふ。……イヤ、それは昔の故事も、聞いたばかりで見るは初めて。四五日あとの沖荒れに、漂流して、この浦へ、吹き上げられし漁師の助市。風待ちのうち、トロ〳〵と、一睡の夢の間に、この松ヶ枝にかゝりし振り袖、これこそてつきり天の羽衣。天人が來るのであらうと、樂しんでゐたところへ、天女も及ばぬぼつとり者。併し、夫婦連れで來られては、少し當ての辻が、違ふやうな心持ちぢやて。

民部　そんなら、漂流して、この浦へござつたのか。ヤレ〳〵、それはさぞかし難儀でござらう。わしらは爰の者でもござらぬが、由井の宿の吉岡紺屋

のぶ　毎日々々、この三保の洲へ、干し物に來る者でござんす。

助市　ハヽア、噂に聞いた憲法染め、夫婦仲よう張り場の干し物、ハテ、羨ましい。幸ひの二人の衆、この羽衣の松の由來、又は處の名所、舊跡、近所の衆とあるなれば、話して聞せては下さらぬか

民部　イヤモウ、處に住めどかたくなの、田舍育ちの事ゆゑに、名所とも、舊跡とも、知らぬながら、多少の緣、覺えただけは今こゝで、

助市　イヤ、それは有り難い。

民部　まづ、羽衣の松の故事、人も知つたる事ながら

〽いにしへ遠き天津空、月宮殿には天人の、數を三五に分ちつゝ、一月夜々の天乙女、仕事を定め、役を爲す　〽中に浮氣のおいそれ乙女、下界の男を釣りに出て、餌の羽衣取上げられ、せう事なしの、どれ合ひ女夫。

トおのぶ、前へ出て

〽その睦事は、誰れ白浪の、寄する渚にすなどりの、汐汲む肌にひきしめて　〽コレ、申し

〽縁でこそあれ、此やうに、人間さんと肌ふれて、覺えぬ賤の手業さへ、して見たがりの女夫氣は、嬉しからうぢやあるまいか、それを疑ふお前の心、嘘、僞りは人にこそ、わたしや眞實、お月さんかけて、離るゝ心はないわいな。

ト助市、押分けて

〽オヤ、名所話しをかこつけて、男やもめを側に置き、その氣味合ひは御免なれ、わしらも國では、ちつくり、そつくり、袖褄引つかけた、夜網の船の櫓拍子に〽昨夜の寐酒がまはり過ぎたで、夜がな夜一夜妹せゝる、妹ぢやとて、憎む事ではなんけんけれどな、朝出の船に腰がふらつきや危なうござる、今朝はいなさで、浪が高さに、案じられ申すとナアエ〽これが互ひの誠ぢやえ。

ト助市よろしく納まる。

のぶ　ほんに女子はこれ程に、誠を盡せど、矢ッ張り男は

助市　性が無いやら、有るやら、アヽ、見せたいな〳〵。誰れぞわしが相手になろ、氣紛れな天人でも、どうか來さうなものぢやなア。

〽まつに折よく、景色よく、月の武藏の青葉時、浮れやすさの旅ごゝろ。

ト向うより八重梅、中年増の拵らへ、前垂れの上より眞田の上締めをして、手拭をかぶり、藤倉を穿き、竹に搦みし火繩を持ち、莨のみながら出てくる。

〽身延參りの戻りがけ、ついでに寄つて彌勒町、商賣向きと、女の身でも、せうが生れは有り難い、東育ちを駿河まで、遊びながらに三保の浦、供は幇間の喜作とて、旅の憂をも忘れ草、笑はせ上手の仇口も〽輕いはずきに藤倉や、砂踏み分けて美しう、拾ふ梅貝、櫻貝、〽それ／＼そこにも珍らしい〽どれ、どこに〽イヤ、そりや赤貝の持ち合せ〽エヽ、てんがうなと煙管の火皿〽オヽ、熱、熱い砂路を道草も、急がぬ旅の氣散じと、打連れてこそ來りけり。

ト此うち後より喜作、幇間の旅形にて、小さき風呂敷を脊負ひ、菅笠を持ち出て、兩人、花道にて、よろしく振りあつて、舞臺へ來る。助市、思ひ入れあつて

助市　ヤア、そりやこそ／＼、天人が中年増に化けて、來たぞ／＼。

喜作　この人はなんだ。おらがおかみさんを化け物だ、とんだ事を云ふ。正眞正銘、江戸吉原仲の町のお茶屋のおかみさんだよ。身延參りから此方へ廻つて、駿河の二丁町を見物して、よい子供でもあつたら、藝者に抱へて

ト八重梅、これを消して

八重　これはしたり、誰れも聞きもせぬ事を、さう事細かに云はいでもの事。……ほんに、爰は三保の洲崎、羽衣の松とやらは

民部　即ちこれでござりまする。羽衣ならぬ、あの振り袖。

助市　そこで天人の新造が來るであらうと思うたに、中年増とは、てん違ひな。

ト八重梅の顔を見て

ヤ、ハテ、よう似たワ。

トこれにて民部も、八重梅へ目を附け、思ひ入れ。

八重　エ、そりや誰れにえ。

助市　サア、誰れと白井の

民部　ムウ。成る程。いつぞや鈴鹿にて

八重　エ。

のぶ　男顔してすつきりと。お江戸育ちは又格別、傾城町のお方には、似合はぬ人柄。

喜作　そりやその筈の事。元は屋敷出、名は八重梅。

助市　ヤ。さてこそ双子の

八重　イエ、八重梅といふは、廓で流行る小唄節。

民部　して、その唄は

八重　サア、それは、……慥か斯うであつたわいなア。

〽花に嵐もよいとの浮き世。散らざ櫻も秋ごゝろ、梅が咲けかしな、イヨ、八重梅が枝を、手折る振りして必ずこさせとさ、縁を招くえ、必ずこさせとさ、夢になりとも、なうさての、逢ひたさ見たさは飛び立つばかり、籠の鳥かや恨めしや、さんさよしなや、よしなやさんさ、さんな、よしなの思ひ草。

ト八重梅よろしく振りあつて納まる。

民部　それほど、逢ひたい見たいといふは、さては御亭主が、旅へでも出られたのか。

八重　イヽエ、わたしはやもめ鳥。尋ぬる人は

助市　アノ弟

八重　エ。

助市　イヤ、男持たぬとあるからは、わしも妻なしの色上戸。話しのなりそな

ト八重梅へ寄り添ふ。喜作隔て

〽どつこいさうは參るまい、なんぼ思案の外なればとて、ちよつと逢ふからひつたりと、縋鳥黐ぢやあるまいし、自慢ぢやないが、こちのおかみさんは、色里に住む甲斐もなく、色嫌ひ、氣障氣が無うて、地酒が好きで、浮かして我れらがお辭儀の花よ、ちよいと浮かれませえ。

ト喜作は八重梅の手を取り、引出して思ひ入れ。

喜作　おも楫、取り楫、ホイ、火事は巽で、お客が仲で、のろけゐる間にモシ、旦那、着きました。

〽客を迎ひの辻占も、浮かれぬものではないわいな。

ト民部、前へ出て

〽浮かれたところへ附け込んで　〽婿に行くとて算盤まで覺え、鼻が、これ／＼で嫌はれたア、しよことがない／＼と、いうた顏、鏡でよく見れば、我が身ながらもゾッとした、ア、しよことがねえ／＼　〽嫁にやろとて洗濯まで覺え、臍が出臍で嫌はれた、ア、しよことがねえ／＼と、いうた顏、鏡でよく見れば、我が身ながらもゾッとした、ア、しよことがねえしよことがねえ。

トおのぶ、前へ出て

〽及ばぬ戀と諦らめて、こちから相應田舍同士、宿のおじやれの心意氣 〽君が來ぬ夜はまぶたも合はぬ、涙のふちへ枕をツィはめた 〽いかになよ、旅の殿さ、お草臥れであるべゑに、おくわひらつん出しめされば、はだけ申さうさてなア、今日にもお歸りとお笑止や、これは、殿さア、寢まるかな、蚤が多くて、掴んでほうばるべい、かゆくばやはらかにひつかくべい、ヤレサテ、ヤレサテお笑止や 〽恥かしや。

トおのぶ、よろしく納まる。助市、前へ出て

〽我れらはずんと稼ぎ男で、亭主に持つならば、お徳用向きぢや、その癖律義で、正直で、しかも達者で、申し分御座なく候の證文かけて、まづ初春は、七つ起きして、道中双六、寶船、獨活や白魚、扇々、夏は冷水、琵琶葉湯、萌黄の蚊帳や、心太や、てん蓙、秋の蟲賣り、燈籠賣り、それ、ゆり、はす/\、冬は大福餅、納豆々々、蕎麥や、しつぽく、風鈴も、裸參りやお百度で、戀には身をもいとはぬと、新内節や祭文の、門附けさんも聞き覺え 〽さるほどに、これは又、西行の坊さんが、富士の白雪眺めんと、風呂敷脊負うて、笠着て、杖突いて、いとゞたなちりを、ちん/\くるりとからげて、東をさして下らるゝ、どこを廻ろか

江口の里で、女郎衆が捕へて、コレノヽ、坊さん、西といふ字は西と書く、西へ行くべき西行なるに、なぜに東へ下らんす〽ぬしも東へ一飛びに、飛ばれちやならぬ天津風、年増の姿しばしとゞめん。

ト よろしく振りあつて、八重梅にしなだれかゝる。

八重 ほんに、氣輕な釣り人さん、先刻にからの詞のはし、さう云はんしても、どうも合點が。

助市 イヤ、ほんの、嘘のと疑ひも、ならぬ戀なら諦めて。

八重 ア、モシ。

ト 助市を留めて、チツト思ひ入れ。

〽思はせぶりに、じやらノヽと、なぶつておいて、眞にうけさせて、笑はしやんすと知りながら、迷ふ心のはかなさは、我が身で我が身が野暮らしい。

ト 八重梅は松にかゝりし振り袖を取り

〽ほんに思へば、この振り袖の、似合ふ時分であるならば、あと先思はぬ戀の德、今は心も沖の石、人こそ知らねうつろひし、櫻が池の仇心、うつゝの山の夢ならば、覺めぬ願ひの藤枝に、しがらむ蔦の細道も、ふた道かけるぢやないかいな、男緣なきやもめどり、ならう事な

ら世を清見潟、晴れて女夫といはれうならば、賤機山の營みも、草薙村の手業をも、なんのいとはぬ心から、厚原村の厚皮と、さげすまるゝも身の覺悟、どうぞ返事を駿河なる、富士に仕掛けし戀の山。

ト八重梅、この口說きのうち喜作に囁く。喜作、うなづき思ひ入れ。

〽こいつはおつに鳴澤の、ふりかゝつたる五月雨が、中に吉田の粹な雨、やどりも、丁度この藁家、ちよつと狩場の臥す猪の床、夢野の鹿で妻戀を、オツト合點と獨りして、取持つ役はいつとても、しやべり草臥れ、氣くたびれ、ほつとするこそ道理なれ。

ト喜作、振りあつて、助市八重梅を、無理に下手の小屋の中へ入れる。

のぶ　ほんに思はず結ぶの緣。

喜作　わしはこれから小吉田で、駕籠も一挺誂らへて、直ぐに江戸へ引ッ越し亭主。

〽ざつと極まつた婿入り、嫁入り、すぐに輿入れ、江戸入り　〽こもいり、山椒いり、名代の飴ぢやなけれども、のろけて、とけて、べた〳〵と、うまい仲ではないかいな　〽ついでに一杯引かけて　〽色と酒とは片山しぐれ、いかな日とてもやみはせぬ、ナア　〽どつこい持て來い、一生は夢の間、さ、浮いて暮らしやれ、とう〳〵〳〵、どうでも白地の染め浴衣、

身も輕々と江尻前、小吉田さして急ぎ行く。

ト喜作よろしく振りあつて、向うへ入る。此うち、後へ梶六、灘八、柿の筒袖の形にて櫂を持ち出で
來り

梶六　謀叛人、動くな。斯く姿を變へて入込みしに、案にたがはぬ民部之助、足利どのを覗ふ由。

灘八　上聞あつて、我れ〳〵が、討手の役に向うたり。サア、尋常に、繩かゝれ。

民部　何を云ふやら、そんなむづかしい事は知りません。こんな人達にかまうてゐては、商賣の邪魔になる。サア、女房ども

のぶ　エヽ。

民部　何をうつかり、いつものやうに。

ト以前の手桶を出し

さらば仕事に、かゝらうか。

〽染めやれ〳〵、君樣のおもはく好みに、色も變らぬ染め物は、そも何々ぞ。一に友禪、二に錦、三に漣、四に絞り、五つ今樣、はやり染め、六つ紫、無地紋や、七つ鳴海の摑み染め、八つ八重染め、九つ紺地に、つや〳〵と、十で木賊の色もよく、染めて、晒して、さら〳〵

と、晒す垣根も美しや。

ト此うち既六、灘八かゝるを、立廻りながら、手補の中より布を出し、上手の松より下手の小屋へ張る事。この文句の切れに、下手張りし繩切れて、布、縦になり、旗のやうに見ゆる。これに菊水の紋染めてある。この時、ドロ〱になる。日覆へ黒雲、これに軍扇附いて下がる。民部之助、これをキッと見て思ひ入れ。鳴り物になり

民部 ハテ、心得ぬ。漢公、秦をうけしの時、月にさはるといつし黒雲のきざし。ハヽア、不吉なるかな。さては、我が前生をさとせし修羅魔王、大望成就ならざるの、しめしなるか

のぶ エヽ。すりや、いよ〱お前は。

民部 いかにも。楠正行の再誕、由井民部之助正雪。松にかゝりし菊水は、即ち我が氏、楠家の白旗、かゝる大望あればこそ、今まで其方に辛かりしぞ。よしや大望空しくとも、語らひおきし味方を以て、やがて都へ攻め上らん。

のぶ 夫に附くが女子の道、わたしも共々

民部 命を捨てるか。

のぶ アイ、覚悟でござんす。

梶灘　その旗渡せ。

民部　小癪な事を。

〽思ひ込んだる猛勇の、姿勇まし古木の松、しがらむ妻も姫かづら、甲斐々々しくも組み附く捕り手、投げ退け、突き退け、あと先も、見えみ見えずみ三保の浦、霞に紛れて

ト民部之助おのぶ、梶六灘八を投げ、一散に下座へ入る。梶六、灘六起きあがり

梶六　南無三。取逃がしたか。

灘八　跡追ひかけて

兩人　さうだ。

ト浪の音になり、兩人下座へ駈けて入る。時の鐘、メリヤスがゝりの淨瑠璃になる。

〽縁は異なもの、いづくの果に、結び捨てたるものぢややら、一方ならず、薄からず、染めて戀とも夕浪の、引いて歸るが、嬉しうてならぬ。

トこの文句にて小屋の中より、八重梅、助市出て、兩人こなしあつて

助市　そんなら、いよ〳〵、權八が双子の同胞。

八重　サア、わたしも行くへを尋ねる爲、わざと廓に……マア、何事も、とつくりと

助市　サア、これから直ぐに江戸へ行て
八重　わたしが内へ
助市　引ッ越し亭主は有り難いが、初めて逢うて氣心も
八重　ハテ、いまに晴るゝも、アレ〱、あの雲の
助市　風に任せて、
ト後の浪幕切つて落す。向う打抜き、田子の浦の景色見える。
アレ〱、向うに田子の浦
八重　いま見納めの
兩人　名殘りの景色。
〽はるかに見やる驛路さへ、わしが思ひをえい知りもせず、心興津のなんぢややら、由井はどかれぬ他人氣は、痱にさはるぢやないかいな、たとへ百歳逢うたとて、ちよつと初めて逢うたとて、思ひ合うたる心と心、なんの變りがあろぞいの、末よし原に結ぶ緣、積る思ひも解けそめて、もう疑ひは夏の富士、憎や返して雲の峰。
八重　地金現はすわたしが心。

助市　やがて聞いたら、この胸も
八重　富士にかゝりし雲もろとも
助市　ヤ。
八重　粋な風ぢや、モシ。

ト助市に寄り添ふ。これを木の頭

〽晴れて姿や見せぬらん／＼

トよろしくキザミにて、ひやうし

この幕、夏の富士を書きし幕を引く。あとシヤギリ。

幕

五幕目

沼津芝居の場
千貫樋の場
地獄盆踊りの場
箱根山中の場
金剛院別荘の場



役名――石井半次郎、旅人、北八。亡者、願哲。同、赤堀源吾。庄屋、馬右衛門。旅人、彌次郎兵衛。亡者、さほ九郎、刎川久馬。醫者、當庵。木戸番、染兵衛。亡者、づぶ六。同、おかや。堂守り、西念。小道具師、捨八。箱根の甘酒屋。雲助、闇八。同、源五。役人、新吾。百姓、婿七。亡者、どぶ六。同、義兵衛。菊川兵馬。由井の次郎作。小萬母、お浪。信濃屋お半大工、小西の八。丹波與八郎。大工、牡丹獅子の八。藤川水右衛門。大江息女、重の井姫。

知らせに附き、富士の幕を後へ寄せる。時の鐘になり、向うより北八、法衣の形にて出で來り

北八 アヽ、只さへ旅は憂いものといふが、長の道中を食はずに歩くといふは、さて〱辛いものだ。路銀も無いゆゑ、夜通し歩き、眠さは眠し、疲れはするし、それに又、この彌次郎兵衛は何をしてゐるか。

ト云ひながら舞臺へ來る。幕の内より囚人駕籠、これに金澤無宿蝮の次郎吉と書きし札を下げ、これを雲助二人して擔ぎ、後より黒四天の捕り手二人附き、鶉權兵衛、腰繩にかかり、新吾この繩を取り、雲助一人、風呂敷包みの雜物を擔ぎ、出で來り

人足 ヤイ〱、方寄れ〱。

ト北八、愕りしながら、よく〱見て

北八　なんだ、殿様だと思つたら、科人だな。おきやァがれ。科人に方寄つて、ましよくに合ふものか。

捕手　ヤイ／＼、大切な囚人、役人の我れ／＼が附いてゐるのに、慮外な奴の。

北八　なんだ。役人だ。役人衆でも、天智天皇でも構ふものか。此方は錢無しで旅をするのだ。囚人にけじめをくつて堪るものか、途方もねえ。

ト無性に太平樂をいふ。權兵衞、北八を見て

權兵　カウ／＼、貴様の錢の無えのを、ナニ、あなた方が知るものか。とんだ事を云ふ男だ。

北八　なんだ。てめえも科人の癖に、悪く洒落るな。

權兵　おらア科人ぢやァねえ。見知り人だ。

北八　見知り人の用心、小用心が、聞いて呆れらア。

新吾　此奴、大分洒落る奴だな。

捕手　裸身へ法衣を着て、怪しい風體の奴だ。

同　一緒に縛つて、江戸へ引いて行く。腕廻せ。

ト北八を捕へる。北八、振り切つて逃げようとする。捕り手、十手にて北八の眉間をくらはせる。これにて傷つく。

北八　ヤア、ぶつたな〳〵。疵が附いたぞ。濟まねえぞ〳〵。

皆々　やかましいわえ。

　トてんつゝになり、北八を打ちのめす。この時、捕り手の一人、雜物の風呂敷包みを落し置くこと。

捕手　あんな者に構はずと、サア、急げ〳〵。

　トこれにて皆々足早に向うへ入る。北八殘り

北八　アイタヽヽヽ。こいつは、とんだ目にあはせやアがつたな。アヽ、血が大そう出る……エヽコレ、どこぞへか、もう逃げてしまやアがつた。弱い奴だ。髪はこんなにむしられるし、マア〳〵血止めは幸ひ、紫のこの袱紗。

　ト序幕に芋を包みし袱紗を出し、これを頭へ載せながら、落ちてある包みを見附け

ハヽア、さては今の奴等が落して行きやアがつたさうだ。

　ト包みを明ける。中より派手なる女帶、振り袖、その外、鼈甲の簪など出る。

ヤア、こいつは奇妙々々。あの泥坊が盗んだ雜物と見える。よくしたものだ。少々疵は附けられても、この代物を〆めるとは德用向き。これを賣つて路銀の足しに、又もや爰へ探しに來ぬうち、ちつとも早く。

ト風呂敷包みを抱へ、一散に幕の内へ入る。時の鐘になり、向うより馬右衛門、庄屋の形にて、張り子の魂ひに灯をともし、捨八、切り首、その他いろ〳〵の小道具を擔ぎ、跡より彌次郎兵衛附いて出て來り

彌次　ヤレ〳〵、この人魂の灯で、大きに助かりました。

馬右　わしらはこの道から、沼津の在の夜芝居へ行きます。お前はこれから眞ッすぐにござれ。

彌次　ハイ〳〵。そんなら芝居は、沼津の在でござりまするか。

馬右　處の者が寄つてする地芝居サ。勿論、江戸役者も交つてゐますよ。

彌次　それで解つた。こりやァ芝居の道具だね。わしは先刻、本當の物と思つて、氣味が惡うござりました。

捨八　わしはその芝居の頭取でござるから、自身に細工をして、今夜持つて行くのでござる。それより氣味の惡いは、この先の松原にて、惡い狐が出て、旅人を化かしてどうもならぬ。氣を附けて行かつしやれ。

彌次　エヽ、惡い狐が出ますかね。

馬右　兎角、女に化けて人を誑らかします。もし又、女が出たなら油斷さつしやるな。

捨八　この六尺棒を進ぜませうから、用心に持つてござるがよい。
　　ト馬右衛門の持つてゐる六尺棒を、彌次郎兵衛に渡す。
彌次　ハイ〳〵。これは有り難うござります。左樣なら、これから眞ッすぐに參りますか。
捨八　そこの別れ道まで連れ立ちませう。
馬右　サア〳〵、ござれ〳〵。
彌次　これはお世話でござります。
　　ト馬右衛門、人魂を下げ、先に立ち、この三人幕の内へ入る。これにて柝直る。
本舞臺、向う一面の淺黄幕。枝松の並木、上下、稻むら。爰に北八、件の簪を頭へ挿し、紫の袱紗を帽子のやうに置き、法衣の上へ女帶を締めてゐる。時の鐘にて幕明く。
北八　アヽ、頭の疵が、ヅキ〳〵する。それに附けても、彌次郎兵衛は、もう來さうなものだ。
　　ト時の鐘になり、下座より彌次郎兵衛、六尺棒を持つて出てくる。
　　カウ〳〵、彌次公々々。何をしてゐた。大分遲かつたの。
　　ト彌次郎兵衛、後へ飛び退き、身構へして

彌次　ドツコイ〳〵。そりやこそ、出たな〳〵。後の道で聞いたぞ。この畜生め。うぬ、女に化けそくなつたな。法衣を着た女があるものか。サア、早く正體を現はさぬと、この六尺棒で斯うするぞ。

ト北八をくらはせる。

北八　アイタヽヽヽヽ。コレサ〳〵。何をするのだ。化け物でもない。何でもない。おれだよ〳〵。北八だわな〳〵。

彌次　北八も凄まじい。そんな形の北八があるものか。お客と蔭間とごたまぜの姿だな。この松原に惡狐が出るといふ事聞いたゆゑ、コレ、この六尺棒を持つて、その狐を退治ようと思つて、わざわざ來たのだ。この彌次郎兵衛さまの目にかゝつては、もう叶はぬ。今にぶち殺して食つてしまふワ。

北八　大さうな事を云ふ。成る程、この形を見て、不思議を打つも尤もだが、先刻、道で拾つた風呂敷包み。それで、これを賣つて路銀にしようと思ふのだが、そんなにおれを怪しいと思ふなら、これから別れて、おれ一人、路銀を拵らへて、豊かに江戸へ行くワ。

彌次　さういへば、まんざら狐のやうでもないが、また本當の北八なら、そんなに頼もしくない事を云はずと、今までさへ連れになつたものを、おれにも半分、分けてくれてもよさゝうなものだ。

北八　それでも、おれを、ぶち殺すと云つたではないか。
彌次　それは狐だと思つたからサ。後の道で嚇されたから、なんでも女が出たら、ぶち殺さうと思つてゐたところ。そんならいよ〳〵、狐ではないか。
北八　正眞正銘、中まで人間だ。
彌次　ドレ、あちらを向いて見せさつし。
北八　なんぼ陰間姿になつたといつて、直ぐにあちら向けとは氣の早い。この頃冷えたで、痔の氣味合ひだ。お間には合ふまい。
彌次　馬鹿な事を云はつしやい。脚氣でも起りはしまいし。もし尻尾でもありはしまいかと

ト北八の後を探り見て

そりやコソ。

ト捕へる。

北八　アイタヽヽヽヽ。それは疝氣だ。

ト彌次郎兵衛見て、悔りして

彌次　さても大きな。

北八　なんと狐ぢやァあるまいが。
彌次　狸か馬かと思はれた。
北八　何を云はつしやる。
ト彌次郎兵衞、こなしあつて
彌次　アヽ、これで落ちついた。時に、この松原に狐が出るとの噂を幸ひ。通る旅人を嚇かして、もつと路銀をせしめようではあるまいか。
北八　成る程、よからう。幸ひ、この振り袖を着て、肩車に斯う。
ト囁く。時の鐘になり、向うより牡丹獅子の八、袢纏、股引、仕事師の形にて、小さき辨當箱を風呂敷包みにして持ち、出て來る。直ぐに本舞臺へ來る。北八、振り袖を着て、肩車に乘り、彌次郎兵衞は北八の着たる法衣にて體を隱し、ゆさ／＼出て
申し／＼。
ト呼ぶ。牡丹獅子の八、よく／＼見て
牡丹　なんだ、こいつは。べら坊に脊の高い女だな。ハヽア、うぬは化け物だな。
北八　アイ、お化ぢやわいなア。

牡丹　エヽ、生ぬるいお化だな。なんぼ箱根から先でも、今どきそんな化け物が流行るものか。今、大男は評判だが、大女の化け物は、久しい後に品川へ出たツきりだ。

北八　此奴、悪く洒落れるな。さつぱり化け物を怖がらぬ奴だ。張合ひの無い。

牡丹　ナニ、化け物が怖いものか。誰れだと思ふ、江戸ツ子だぞ。見そくなやアがつたか。早く消えてなくなれ。なくなりやうが遅いと、殴り殺すぞ。

北八　イヤモウ、頭には懲りたものだ。おのれ、怖くないか。

牡丹　怖くはねえ。をかしな面の化け物だ。をかしいわえ。

北八　もゝんがア。

ト苦い顔をする。

牡丹　面ア見やがれ。

ト噴出して笑ふ。

北八　これでも怖くないか。

ト無性に、いろ〳〵な顔をする。

彌次　コレサ〳〵。そんなに動くと首の骨が折れるやうだ。アヽ、痛い〳〵。

ト うつかり云ふ。牡丹獅子の八、これを聞きつけ

牡丹　ヤア、胴中で物を吐かすな。とんだ化け物だ。

ト北八を突き倒す。これにて北八、肩より落ちる。

ワアイ。化け物が胴切りになりやアがつた。

彌次　愛想の盡きた重い體だ。

牡丹　さては此奴等は、往來の者を嚇かして、路銀をふんだくる追剝ぎだな、太え奴等だ。

ト北八の持ちし六尺棒を引ツたくり、無暗にぶつ。

北八　御免なされませく。

牡丹　旅人の爲だ。うぬら、ぶち殺してくれべい。

ト打つてかゝる。北八、彌次郎兵衞、下座へ逃げ込む。

ハヽア、大べら坊め。併し、追ツ駈けて行くほどの事もねえ。三保の明神の御普請も、首尾よく仕舞つて歸りがけ、儲けた錢は、みんな二丁町へ嵌つてしまふし、矢ツ張りてびの編笠。聞けば沼津の在に地芝居があるさうだ。そこへ行つてごろ附いたら、江戸へ歸る路銀位ゐは出來さうなものだ。なんにしろ、行つて見べい。

ト牡丹獅子の八、鼻唄うたひながら下座へ入ると、引違へて下座より駕籠舁き兩人、山駕籠に小西の八、大工の形にて、居眠つて乘つてゐる。これを擔ぎ出て

駕甲 オイ、棒組み、ちよつと下ろしてくだツし。

トよき所へ駕籠を下し

駕乙 カウ、親方はよく寢てゐるさつしやるが、見たやうな旦那だな。

駕乙 見た筈よ。三保の普請に來た江戶の大工衆だ。中途で江戶へ中歸りにでも行つたと見える。

駕甲 棒組み、親方の寢てゐるうち、後の松原に出來てゐるぜ。

駕乙 ちよつと行つて、張るべい〳〵。

ト兩人、下座へ入る。向うより鶉權兵衞、以前の形、新吾附添ひ出て來り

新吾 先刻の間拔けのお庇で、大事の雜物を落してしまつた。

權兵 とんだ事をしたなア。どうせ今尋ねたといつて有る事ぢやアねえ。

新吾 それでもあれが無えと、役人樣の前へおれが濟まねえ。

權兵 濟まねえといつて、落した物をどうなるものか。てめえ、これからどこぞへ逃げるがいゝ。

新吾 それでも貴樣の番をしてゐて、どうして逃げられるものか。雜物を落した上、貴樣を逃がして見

權兵　さつせえ。おれの首が無いワ。

權兵　ハテ、氣の弱い事を云ふ男だ。おらア鶉權兵衛といつて、もと本庄の下部。それゆゑ、いつぞや助太夫さまを、討つて立退いた權八も、おれが見知り人になつて、捕らせてやつた。養父を討つた權八ゆゑ、おッつけ磔刑に出るであらう。それに又、今度、稼ぎ手の蝮の次郎吉も、おれが捕めえさせたゆゑ、お上の御奉公は、これで二度勤めてある。何もおれが科人といふ譯でもねえから、爰からおれをゆるめて、放してくれりやア、てめえにも出世をさせるワ。

新吾　ムウ。貴樣をゆるめてやれば、おれの出世になる事でもあるか。

權兵　サア、その譯といふのは、いつぞや龜山の城下で、雷丸といふ短刀の身を拾つた。これは由留木家の家の重寶。江戸にゐるうち、おれが持つてゐては、人目にかゝるゆゑ、品川に借家の內の、緣の下へ深く埋めて置いた。これを知つてゐる者は、天道樣におればかり。其うち次郎吉の一件で、旅へ出て、この通り。おれも舊惡のある體ゆゑ、ひよつと次郎吉が口で、一つに牢舍しまいものでもない。さうして見ると、おれが內は、人の住居となり、誰れも氣の附く氣遣ひはなけれど、捨てゝおいては心がゝり。それゆゑ、丁度幸ひの事は、由留木の御家老官太夫さまの御總領水右衛門さま、今度勘當がゆりて、親の家督相續して、立派な御家老。この度箱根の湯治場に來

てござるとの事。この水右衛門さまに、あの短刀を差上げれば、一かどの御家來に。默つて取立てヽ下さる。さうすれば、てめえも侍ひに推擧してやるワ。

新吾　さう話しのやうに巧く行かうかの。

權兵　うまく行かなくつてサ。論より證據は、今から直ぐに、てめえは箱根の瀧の湯へ行つて、水右衛門さまにお目にかゝり、右の短刀の話しをして、おツつけ權兵衛が持つて來ますといへば、てめえが身の上も悪くはせぬワ。

新吾　ムウ。さういふ事なら、今から直ぐに瀧の湯へ。

權兵　併し、もう時が

新吾　なにサ、おれは一時五里歩く名代の早足サ。

權兵　そんなら必らず

新吾　わしも出世の小口だ。急いで行きやせう。

ト權兵衛の腰繩を解き、新吾、一散に向うへ入る。

權兵　あの雷丸を、水右衛門さまへ差上げれば、この身は出世。

トこの時、駕籠の垂れを上げ、小西の八、伸びをしながら

小西　アヽ、いゝ心持に醉つた。水が飮みたい。三島女郎衆の化粧水をツ。おきやァがれ、面がいゝ。山を越すと、直ぐに化け物が、野暮に大きな投げ島田ツ。……待てよ、いま雷丸と云つたのは

權兵　エ。

ト行きかゝるを、小西の八出て權兵衞を捕へ

小西　コレ、待たツし。雷丸と云ひさして、おれを見て逃げ出すが、雷丸は、貴樣知つてゐるか。

權兵　イヤ、知らないノ。

小西　でも、今、雷丸を水右衞門どのへ、渡すと云つたぢやァないか。

權兵　ナァニ、そりやァお前の聞きぞくなひだ。

小西　イヤ、おらァ耄祿しやァしねえ。そんなに隱すと猶聞きてえ。サア、云はつせえ。

ト權兵衞の胸倉を捕へる。

權兵　なんだァ、この男は、人の胸倉をつらめえて、どうするのだ。

小西　雷丸の在所を云やれよ。

權兵　おれがそれを知るものか。

ト小西の八を突き飛ばして、一散に下座へ入る。

小西　うぬ。野郎め。待ちやァがれ。

　　ト跡追ひかけて入る。時の鐘にて、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、菰張り、竹矢來、田舍芝居の木戸口、同じく田舍役者の紋看板、諸所に盆提灯を大分ともし、夜芝居の體。木戸口に白紙の幡を吊し、これに菅原傳授手ならひかゞみといふを書き、爰に西念、坊主にて木戸番。築兵衛婿七、處の若い者。捨八は以前の小道具師。馬右衛門は以前の庄屋、當庵は慈姑頭の醫者。外に、百姓大勢、弓張り提灯を持ち、牡丹獅子の八は以前の形の上へ麻上下を着て、乘込みの體。双盤、シヤギリにて、道具納まる。

皆々　サア〳〵、めでたく〆めませう。シヤン〳〵〳〵。

　　ト皆々不器用に手を打つ。

馬右　ヤレ〳〵、親方、この度は大きに御苦勞。只今までは、地の者ばかりで芝居を致しました。それと申すも、この觀音堂大破に附き、勸化芝居でござる。爰にゐるのが堂守りどの、この芝居の座元。わしは講がゝりの事ゆゑ、頭取の馬右衛門と申す者でござる。

西念　ハイ〳〵。わしは關の地藏の堂守りでござつたが、あんまり酒が好きゆゑ、たうとうよい〳〵に

なつて、この沼津まで流れ込んだ坊主でござる。役者をしたり、木戸番をしたり、大抵急がしい事ぢやァござりやせん。この間も、わしが外郎賣りの役をしました。せりふなぞは鮮やかサ。ちよつとした所が、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、菊桐、三菊桐。

トよい〳〵にて判らなく云ふ。

當庵　コレサ、座元の坊さん、そんなに判らない事を云はつしやるな。外聞が悪い。江戸役者がござるに、貴様が、中でいつち下手だ。わしはこれでも女形が得手物サ。昨夜の忠臣藏では當てました。

牡丹　何をなされました。

當庵　お輕と猪と二役しました。

築兵　お輕より猪の方が評判がようござつた。

婿七　ほんに生きてるやうだと云ひました。

捨八　猪が、牡丹に戯むれ、といふ所の踊りは見ものでござつた。

西念　猪が踊りを踊るのは初めて見た。馬鹿々々しい。

當庵　でも、よい〳〵の外郎賣りには増しだんべい。

西念　醫者のお輕があるものか。

當庵　坊主の力彌もないものだ。

馬右　これはしたり。又、役の事でいぢり合ふのか、鎭まらつしやい。江戸の親玉が來てござるのに…

…時に、こなたは、いよ／＼江戸の團十郎どのか。

牡丹　ハイ、團十郎サ。目を見て物を云ひなさい。

馬右　成る程、錦繪で見たが、目の大きな男サ。併し、絆纏、股引とは、人柄の惡い團十郎どのだの。

牡丹　なにサ、こりやア、それ／＼、道中は役者の形をして通ると、強請られるからサ。

馬右　ハヽア、そこでやつしてござつたのか。それでも荷物でも來さうなもの。

牡丹　イエ、後から供が持つて來やす。大方、酒匂川に留められてゐやせうよ。

馬右　持つてござるのはなんだ。

牡丹　こりやア辨當箱サ。

馬右　辨當箱まで自身に持つてござるのか。成る程、商賣には精を出さつしやるの。

ト向う、バタ／＼になり、權兵衞、一散に駈けて出て來り、直ぐに木戸口へ駈け込まうとする。

皆々　カウ／＼。でんぼうはならぬ／＼。

ト留める。權兵衞は懷より小錢束を撒り出し、木戸口の中へ駈け込む。

なんだ、あの人は。唖ださうだ。

ト又、バタ〳〵になり、小西の八、同じく追ひかけて出て來り、續いて木戸口へ入らうとする。

皆々 オツト、でんぼうはならぬ〳〵。

小西 おらアこの芝居に用があるのだ。

皆々 なんの用がある〳〵。

小西 なんでも、いま爰へ入つた野郎が

ト又入らうとする。皆々留めて

皆々 そんな事をいつて、只見ようとは、ならねえ〳〵。

小西 イヤ、おらア入つてもいゝものだ。

皆々 なぜいゝ〳〵

小西 おらア、役者だ〳〵。

皆々 ついぞ見馴れぬ男だ、嘘を云はつしやい〳〵。

小西 見馴れねえ役者の筈だ。おらア江戸役者だ。

皆々 なんといふ役者だ〳〵。

小西　おらア江戸の何よ……團十郎だ〳〵。

皆々　そりやこそ嘘だ。團十郎は、疾に來てござる〳〵。

小西　ナニ、團十郎が來てゐる。ナニ、こんな所へ團十郎が來るものか。

皆々　團十郎どのは、爰にゐる〳〵。

ト小西の八、牡丹獅子を見て

小西　ヤア、わりやア、八ぢやアねえか〳〵。

牡丹　コレ〳〵、滅多な事を。おれは團十郎だぞ〳〵。

ト呑み込ませる。小西の八うなづき

小西　ムウ、成る程、お前は團十郎さんだの。そんなら、おれが名も知つてゐるか。

牡丹　知らなくつてサ。お前は何だらう。梅幸だらう。イヤ、菊五郎さんだ。……モシ〳〵。この人はわしが江戸で兄弟同然にする、菊五郎サ。

馬右　ハア、さうか。ヤレ〳〵、噂に聞き及んだ梅幸どのか。

小西　イエ、菊五郎サ。

牡丹　菊五郎も梅幸も同じ事だ。

小西　一人兩名か。とんだお尋ね者だ……その菊五郎の梅幸は、わしでござりやす。

馬右　さて〳〵、よくござつた。これでは大芝居になつて、繁昌いたすでござらう。早速ながら、狂言は「菅原」でござる。梅幸どのは、さしづめ菅丞相をする氣であらう。

小西　なんだ。山椒醬油の鰯だえ。

馬右　イヤ、天神樣の事サ。

小西　わつちが天神樣かえ。そいつはちつとむづかしい。併し、せりふを覺えなくつてもいゝかね。

皆々　なぜ〳〵。

小西　ハテ、だんまりの天神といふからサ。

牡丹　おきやアがれ。わしが役は何でござりやす。

馬右　お前はさしづめ荒事師だから、梅王に源藏。役人が足らぬから、ちよつと加役に、似せ迎ひに出てもらはねばなりませぬ。

牡丹　似せ迎ひでも、とぼし迎ひでも承知だが、給金はいくらくんなさる。

馬右　今まで、どの位ゐ取らしつた。

牡丹　先腮で、日に三分づゝサ。

馬右　ハテ、厭いものだ。
牡丹　前借りに、ちつとお借り申さなくつてはなりやせん。
馬右　それも承知サ。何事も勸化芝居の事だから、上がり次第に拂ひませう。
西念　サア〳〵、そんなら幕のうちに、ちよつと稽古をしませう。
馬右　何か道具の支度もあらう。サア〳〵、みんな來て手傳つて下さい。
皆々　サア〳〵、親方、樂屋入りをさつしやい〳〵。
小西　なんでもあの野郎は芝居の内、見附け次第に雷丸
牡丹　ナニ、雷丸とは。
小西　ナアに、此方の事よ。

ト牡丹獅子の八も思ひ入れ。

皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。

ト双盤になり、この人數、ワヤ〳〵云うて、木戸口へ入る。木魚入りの合ひ方になり、向うより北八、件の彌次郎兵衛を脊負ひ、出て來り

北八　イヤモウ、する事、なす事、皆ぐれはま。彌次公、どうだ。ちつと痛みは去つたか。

彌次　アヽどうして〱一足も歩かれぬ。大さうぶちのめされた。その上、腹がへつてどうもならぬ。なんぞ食はしてくれぬか。

北八　いゝ氣な事をいふ。貴樣はまだ、おぶさつてゐながら、そんな熱を吹く。おれも腹がへつた上に捨てゝもおかれぬから、昔の名は長右衞門、女姿で男を脊負ふは、ほんの逆さま。これも因果な二人の惡緣。

彌次　思へば果敢ないこの身の上。

北八　なんたる因果の

二人　寄合ひぢやなア。

ト兩人よろしく思ひ入れあつて、本舞臺へ來る。この時、木戸の内より、馬右衞門、當庵、西念出て

西念　わしは婆アの役は、斷りだ〱。當庵どのが、年配といひ、相應な役だ。

當庵　これはしたり。おれは若女形。婆アの役がなるものか。苅屋姫ならするわ。

馬右　そんな押しの強い事を云はつしやるな。こなたはせりふがむづかしいから、龍田の死骸がよい。

當庵　只、死人ばかりの所か。それはあやまる。

馬右　その代り、後に役がござるから、死骸をさつしやい。

常庵　死人の役は造作もない。丸むき死人のやうにして見せますべい。
西念　これはその筈の事。常住人を殺しつけてゐるから、得手ものだ。
馬右　又そんな事をいふ。時に、和尚は宿彌太郎だ。
西念　そいつは有り難い役だな。
常庵　平常賽錢をくすね太郎。うつて附けだ。
馬右　これはしたり。さう喧嘩をしてはどうもならぬ。……困つた事には、覺壽と苅屋姫がない。
　　トこれを聞いて、北八、思ひ入れあつて、彌次郎兵衛に囁く。彌次郎兵衛呑み込み、こなしあつて
彌次　コレ、太夫、爰らに駕籠はあるまいか。
北八　いま供の人に賴んでやつたれば、いまに來るであらうわいなア。
　　ト条三郎の聲色でいふ。馬右衛門、二人を見て
馬右　こなた衆はなんだ。
彌次　ハイ、わしは坂東三津五郎といふ江戸役者。
北八　わたしは条三郎でござんすわいなア。
馬右　なんだ。三津五郎に条三だ。……ハテナ、今日は大分江戸役者の見える日ぢやな。初手のが團十

郎、菊五郎。あの二人はさうらしくもあるが、後の二人は、大和屋とは受取り憎いな。
ト兩人、思ひ入れあつて
彌次　エヽ、そんなら團十郎、菊五郎が來て居りますか。
馬右　さうサ。貴樣達は、三津五郎、粂三といふ役者ではあるまい。
北八　アイ、粂三の弟子の、夢三といふ女形でござんす。
彌次　わしは三津五郎の兄で、四津五郎といふ立役サ。
馬右　さうであらう。錦繪でも見たが、三津五郎は、そんなに頭は長くなかつた。
當庵　鼻の低い粂三もないものでござる。
北八　オヽ、恥かし。
馬右　時に、一幕助けてやらつしやらぬか。
彌次　助けますとも〳〵。
北八　その代り、飯は食はせるでござんせうな。
馬右　ハテ、意地の穢ない女形ぢや。隨分飯は食はせるが、役は苅屋姫に覺壽。直ぐに爰の明く幕ぢやが承知か。

北八　イヤモウ、飯さへ食はせて下さんすりや、なんでも致します。
彌次　わしが役は覺壽かえ。覺壽なア／＼氣が知れぬ。
北八　わたしが役は苅屋姫、稽古も急の事なれば
馬右　只、八聲場の所ぢやから、泣いてゐさへすりやよいてや。
北八　泣くのはわたしの得手もの。無性に泣けばよいかえ。
西念　マア／＼、これで一幕は極まつた。
當庵　サア／＼、稽古にかゝりませう。
彌次　わたしは腰骨を打たれたが、幸ひ婆アさんの役は打つて附けぢや。
馬右　サア、樂屋へござれ。
北八　どうぞお飯を
三人　よく食ひたがる女形だ。
彌次　やう／＼糧にありつきました。
ト双盤になり、この人数、木戸口へ入る。この時、向うより新吾、一散に駈けて出てくる。木戸口より權兵衛出て來り

權兵　すんでの事にあの野郎に、聞き嗅られた短刀の在所。
新吾　さういふは權兵衛どのか。
權兵　オヽ、てめはどうして爰へ。
新吾　水右衛門さまから、こなたへ內用。
權兵　エヽ、もう箱根へ行つて來たか。ヤレ、早い足だ。して、その內用とは。
新吾　雷丸を話したところ、水右衛門さまにも殊ない喜び。それに附き、石井丹波の餘類の奴ら、又は白井の身寄りの者を尋ね、見當り次第、コレ。

ト懐より藥の包みを出し

この毒藥を騙して飲ませ、人知れずおッ方附けてくれろとお賴み。
權兵　すりや、この毒藥にて。よし〳〵。

ト毒藥の包みを取つて懐中する。

新吾　併し、その毒藥は、二十四時殺しといつて、二十四時經つ時は、生き返るとの噂。それゆゑ、一旦毒にあたつた時、ぶち殺すとも、叩き殺すともさつしやれ。
權兵　よしサ〳〵。たとへどれほど強い奴でも、一旦毒をくらはして、毒にあたつた其うちに、本殺し

とやらかせば、骨は折れぬといふものだ。てめえはこれから引ッ返して。

ト新吾に囁く。兩人よろしく思ひ入れ、双盤になり、この道具廻る。

本舞臺、向う觀音堂の飾り附け、須彌壇の上の物を取退け、二重舞臺にしたるところ。欄間に、いろいろの納め提灯、これを場吊りのやうに飾り、點火しあり。上の方に障子二枚、繩でゆはへ附けてあり。爰に彌次郎兵衛、苧にて拵へし鬘、覺壽の形。北八は苅屋姫、當麻は龍田の死骸にて、臥てゐる。馬右衛門、上下を着て、後見の形。捨八、案兵衛、婿七、中間の役にて、皆々扣へゐる。双盤にて道具納まる。

馬右　東西々々。狂言中にはござりますれど、口上を以て申し上げまする。當觀音堂大破に就き、勸化芝居を取立てましたるところ、御信心とござりまして、斯樣に御賑々しく御參詣下さりまする段座元堂守り、西念坊は申すに及ばす、講頭の私し、その外、總地中、いかばかりか有り難き仕合せにござります。隨ひまして、この度江戸表より、兩三人役者を呼び寄せましてござりまする。すなはち、名前御披露仕りまする。市川團十郎、尾上菊五郎、坂東三津五郎舍兄四津五郎、岩井夢三郎、其外地の役者、車返しの茂右衛門、黒瀬村の勘太、岩幡の源右衛門、罷り出で相勤め

ますする。次手ながら御贔屓様より下されましたる、花觸れにござりまする。……白木綿六尺、麥一袋、船谷の後家より勘太へ下さる。一つ、玉蜀黍三本、胡麻三合、横走りの郷左衛門さまより源右衛門へ下さる。一つ、線香十把、白米二袋、柴瀬山の東南より座元堂守りへ下さる。……先づはこの所、菅原傳授二段目の切り。ちよぼ語り間に合ひませんから、私しが口三味線で御不請下さりませ。其ため口上、左樣。……サア／＼、始めて下さい／＼。

婿七　頭取の口上が長いから間が拔けた。

馬右　東西々々。サア／＼、苅屋姫どの、始めさつしやい／＼。

北八　もう泣き出してもようござりますか。……ハア／＼。

ト無性に泣く。

彌次　コレ、其方が泣くのでおれが悲しい。ハア。

北八　アヽ、悲しや／＼。ハヽア／＼。

馬右　コレ、そんなに泣いでばかりゐずと、せりふを云はつしやい。

北八　それでも泣きさへすればよいと云はしやつた。ハア。……ほんに、せりふは生覺え。今日はいかなる悪日か、父上には生別れ、また姉さんには死別れ、女房は石部で取られてしまふ。路銀は盜

まれ、腹はへる。

馬右　コレ〳〵。そんなせりふは、無いぞ〳〵。

北八　コリやマア、どうせう。悲しやなア。ハア。

彌次　わしは龍田が其方の側にゐると思ひ、其方はわしが側にゐると、思ひ違ひが、この醫者どのゝ不運。イヤ、龍田の不運。ほんに敵が討つてほしいわいなア。

ト この時、下の方より、牡丹獅子の八、似せ迎ひの形、法衣の露を取り、半素袍にして、紺の足袋な侍ひ烏帽子のやうにしてかむり、出て睨み

牡丹　ヤア〳〵、婆ア。

築兵　コレサ〳〵、まだお前の出る所ではない。

婿七　爰は宿禰太郎の出る所だ。

牡丹　それでも團十郎が遲く出ちやア外聞が惡い。なんでも人より先へ出なけりやアならねえ。

捨八　それでもまだ、出が早い〳〵。

牡丹　早くつてもいゝ。爰らの所へ出ようぢやないか。

馬右　それでは狂言が出來ない。もうちつと待たつしやい。今に出します。

牡丹　いつまで待たせるのだ。
馬右　もうちつとだから、辛抱さつしやい。
牡丹　長く待たせると、また出るぞ。
馬右　今におらが知らせる。それまで待たつしやい。
　　ト無理に牡丹獅子の八を下手へ入れる。
北八　ハア、悲しや／＼。近年に無い悲しい事ぢやなア。
皆々　サア／＼、宿禰太郎は、どうした／＼。
西念　オット、騒ぐまい／＼。爰に居る／＼。
　　ト西念、打敷を上へ引ッ張り、如意を腰へ差し、悠々と出て來り
　母人、お嘆きなさるな。涙は死人の爲にはなりませぬ。これからは女房龍田が水死の追善。俗名は羽根田當庵。菩提の爲に講中の面々、一人も動かつしやるな。殺した奴を引ッ張り來り、これにて談議仕らん。
馬右　〽緣ばたに、つッと大あぐら。
　　ト西念、須彌壇の上へ坐り

西念 サア、まづ取附きに居る各々や。高座の前へ、近う〳〵。
築兵 ハイ〳〵、一番にお呼び出しは、御褒美を下されやうてな。
婿七 私しにも下さりませ。
捨八 貰ふ事なら、他分には洩れませぬぞ。
西念 イヤ、褒美とは大慾界。龍田が死骸、池にありしを、どうして知つた。
築兵 どうも頭を見よう筈はござりませねど、この木から傳うた血を證據に
婿七 池が血へ流れましたゆゑ。
築兵 それはおれが云ふのだ。
婿七 エヽ、慾どうしい。一人で云はずと、おれにも云はせるがいゝわサ。
築兵 貴樣は外の事を云はつしやい。
婿七 そんなら昨夜の判官のせりふを云ふべい。
捨八 おれも與一兵衛をもう一遍云はう。
馬右 コレサ〳〵。とんだ所で喧嘩をする。鎭まらつしやい〳〵。
西念 なんでも仲よく云ふがよい。池が血へ流れ込んだは、即ち血の池、この世からなる地獄の有樣。

恐ろしや〳〵。

三人　南無阿彌陀佛。

西念　さるによつて、人間といふものは、いつ何時死なうやら知れぬものなり。

三人　南無阿彌陀佛。

西念　死ねば即ち命が無いぞや。

三人　南無阿彌

西念　さるによつて、息のあるうち、無性に人を借り倒し

三人　南無阿彌。

西念　酒もたらふく、飲むがよし。

三人　南無阿彌。

西念　手當り次第、色もしろ。

三人　南無阿彌。

西念　その手でなければ佛にならぬぞ。

三人　サツサ、さうだ〳〵。なむあみだんぶつ〳〵。

ト皆々拍子にかゝつて踊る。

馬右　コレサ〳〵。この手合ひは、狂言をしないで、談議を始めたのか。アヽ、埒も無い。

ト牡丹獅子の八、また下手より出て

牡丹　ヤア〳〵、婆ァ、

ト力む。

馬右　アヽ、また出たか、まだ早い〳〵。

牡丹　早いといつて、いつまで待つてゐられるものか。

馬右　エヽ、聞分けの悪い。もうちつとだから、待たつしやいよ。

牡丹　今度はもう待ちませぬよ。

馬右　承知だといふに。

トまた無理に牡丹獅子の八を下手へ入れる。

彌次　嬉しや、娘の敵が知れたわいの。

北八　敵が知れたか。ヤレ、悲しや〳〵。ハア。

ト泣く。

馬右　もう〳〵、泣かずともよい〳〵。
西念　敵が知れたとは、お目高〳〵。
彌次　イヤ、目高でも、金魚でも、池の中で死んだ龍田、よう緋鯉めに合はしたな。
馬右　惡く洒落れる覺悟だ。
彌次　娘の敵はこの婆が、切つて〳〵切りさいなまねば、腹がへる。……イヤ腹が癒ぬ。婿どの、刀を借りませう。
馬右　〳〵ツヽン。婿殿達磨の持ちさうな如意おッ取つて、向う目當ては奴にあらで、油斷の太郎がどてッ腹、ぐつと突ッ込み
ト口三味線にて淨瑠璃を語る。彌次郎兵衛は西念の差してゐる如意を取り、無性に西念を抉る。
西念　アヽ、コレ〳〵。そこには灸がえぼつてゐる。靜かに抉らつしやい〳〵。
彌次　イヤ、覺えないとは、云はさぬ〳〵。
西念　アヽ、コレサ、擽つたいよ〳〵。
ト踠く。
彌次　アレ、あの龍田が口に咬へたは、其方の褌の先、死ぬまいといふあの龍田を、聲立てさせぬ無理

殺し、これがほんの、死ぬまい無理ごろし。(新製麦こがし)

西念　一袋十二文。

馬右　洒落れさつしやるな。肝腎な所だ。

彌次　母が娘へ手向けの刀。肝先へこたへたか。

ト抉る。

西念　アヽ、擽つたい／＼。

ト馬右衞門ちよぼを語る。西念、落入りし思ひ入れ。彌次郎兵衞は西念の口へ手を當て、息を見る。

西念、顔をしかめ、鼻をつまむ。

彌次　コレ、なぜ鼻をつまむ。

西念　何か嗅がせたではないか。

彌次　馬鹿な事を。息があるか、無いか、探つて見たところだ。

トこの時、龍田の死骸寝てしまひ、鼾をかく。

當庵　勘平どのは三十に

ト寝言を云ふ。

馬右　コレノ＼、沈醉つたさうだ、死骸が物を云つてつまるものか。ハテ、よくまぜッ返す手合ひだっ

ト當庵を後へ片附けて

サア、仕方がない。爰の所は先へ飛びませう。サア／＼、似せ迎ひどの／＼。

牡丹　合點だノ＼。

ト牡丹獅子の八、出て來り

今度は本當に、ヤアノ＼、婆ア。

馬右　伯母御と云はつしやいな。

牡丹　おらア伯母御は疾に亡くなつた。

馬右　エヽ、強情な。これは菅丞相の伯母御サ。

牡丹　ヤアノ＼、菅丞相の伯母御っ

ト馬右衛門乘り、地を口三味線で云ふ。

ヤアノ＼、伯母御。

馬右　いつまで、伯母御を云つてゐる

牡丹　ヤアノ＼、伯母御。あんまり久しく出ずに居たから忘れてしまつた。ヤア／＼、伯母御。

馬右　しつこい伯母御だな。

トまた口三味線で乘り地を云ふ。

牡丹　木で作つた菅丞相は、なんにもならぬから、本當の生きた菅丞相を渡せ。とてもない物おいらに渡して、よくのツぺりとした、さぼてん婆アめ。

馬右　アヽ、間の惡い乘り地だ。

彌次　それにさぼてんがいるものか。……とてもないとは何おつしやる。最前丞相は渡しました。

牡丹　ドツコイ〳〵。こんな丞相が唐にもあろか。

ト蓮臺の上へ炬燵櫓を乘せ、張り輿と見せたる中より、小西の八、腰高の茶臺を冠り、衣を後ろ前に着て、擂粉木を笏にして、炬燵を冠つたまゝ出る。

皆々　炬燵の化け物が、出た〳〵。

馬右　後から出ればよい事を。

ト馬右衛門、炬燵を取つてやる。

彌次　よう返して下された。慥かにわしが受け取りました。

牡丹　どこへ〳〵。ハテ、面妖な。あちらで見れば木で作つた菅丞相。爰へ連れてくれば本當の菅丞

相。見どころで違ふか。何しろこれは元の所へ。

ト小西の八を元の所へ入れようとする。

小西 もう引ッ込むのか。

牡丹 知れた事。今の所へ。

小西 あんな窮屈な所へ誰れが入るものか。なんぼだんまりの天神でも、ちつとは何か云はせるがいゝ。みんなばかり狂言をして、おれには何も云はせねえな。そんなに餘所の者だといつて、依怙贔屓をする事はねえ。おれもなんぞ云ふべい。

馬右 とんだ氣の強い天神樣だ。そんなら仕方がない。また先へ飛びませう。サア〳〵、せりふを云はつしやい〳〵。

小西 云はないでどうするものか。……伯母御、騒がつしやるな。お久し振りだねッ。

馬右 ッの字は云はないでもよささうなものだ。……〽覺壽は木像だかへ、菅丞相の右手の方、御座を並べて直しおく。

ト語る。此うち彌次郎兵衛、下手より小さき賓頭盧尊者を抱へ、小西の八の側に置く。

彌次 親子が企みの顯はれしも、この賓頭盧のお庇。かゝる例しもある事か。

小西　あるとも／＼。斯ういふ例しは、昔、左り甚五郎が彫つた龍は、蓮池の水を飲みに出て、今は鎖ひで留めてあり。其お堂はわッちらの棟梁の建てたのサ。全體上野でも、淺草でも、お堂造りといふのぢやアねえ。宮造りといふのだ。恐らく堂宮の繪圖は、わッちらの棟梁でなけりやア、憚りながら、日本廣しといへど

馬右　コレサ／＼。菅丞相が繪圖の話しをしなくつてもいゝわな。

小西　ツイ浮かれたのだ。……これはわッちが二度まで拵へ直した仕事だから、形見だと思つてくんなせえ。

馬右　アヽ、人柄のわるい天神様だ。……〽形見と思しめされよと。

ト語る。

彌次　伯母が寸志の餞けせん。腰元ども／＼。

婿七　誰れもゐません。

馬右　そんな事を云はずと、出さつしやいな。

婿七　エヽ、人使ひの惡い。

ト北八は西念の着たる打敷を冠り出て

北八　ハア、悲しや〳〵。
小西　あの中で泣いたのは、年寄りの冷水か。
馬右　空耳だらう。
小西　默つてゐさつし。……今、啼いたのは軍鶏か。烏の啼く音か。鳶が啼けばお日よりに
馬右　〳〵啼くは生ある習ひかや。心の嘆き隱し歌。
　　　ト小西の八、考へて
小西　啼けばこそ、卯月八日は茅場町、むべ山風の音のよきかな。
馬右　コレサ、そんな歌があるものか。
小西　エヽ、うつちやつておかつせえな。よくおれが云ふ事といふと、文句を云ふぜ。そんなむづかしい事を云ふならよしやせう。もう天神はやめだ。
牡丹　カウ〳〵。それぢやァ狂言が出來ねえ。
小西　出來なからうが、おれが構ふものか。此方はしらの職人だ。天神樣の役が出來ねえといつて、遠島になる事もあるめえ。また本當にさせる位なら、道具も本當にしやァがれ。天神樣の木像といつて、賓頭盧を出しやァがつて、赤い坊主の天神があるものか。

馬右　イヤ、それは田舎芝居の事なれば。

小西　そんならおれがせりふも、やかましく吐かしやァがるな。おらァ否だ。もうしねえ。

北八　コレ、父上様。ハア、悲しや。

小西　エヽ、よしやァがれ。父上もすさまじい。その面で

北八　あられもない、コレ、父上。

小西　貧乏人の豆煎りぢやァあるめえし、あられもないといふ面か。

北八　ハア、悲しや。

ト小西の八に寄り添ふ。

小西　エヽ、不吉な。いゝ加減にしやァがれ。

ト北八を蹴倒す。北八、ウンと目を廻す。

皆々　ヤア、苅屋姫が、目を廻した〳〵。

彌次　姫が目を廻しては、覺壽がすまねえぞ。下手人は、天神だぞ〳〵。

馬右　ヽア〳〵、靜かにさつしやい〳〵。

牡丹　ヽア、よい。呼び生けるがいゝ〳〵。

皆々　苅屋姫やアイ。

　　ト北八、心附き、ピク／＼する。

　少しは氣が附いた様子だ。

西念　オイ／＼、龍田どの／＼。ちよつと脈を見てやらつしやい。

當庵　おれは死人だから構はぬ。

牡丹　もう狂言ところぢやアねえ。本當の死人が出來さうだ。お前、醫者なら、ちよつと見てやらつしやい／＼。

當庵　ドレ／＼、さういふ事なら。

　　ト北八の脈を見て

　ハヽア、苅屋姫は、こりやア疝氣だな。

彌次　さやうさ。この頃冷えましたので、少し起つて居りました。

當庵　ところで、いま陰囊を蹴上げられたゆゑ、グッと氣絶したと見える。これは心が落ちつくと直ります。

牡丹　ハヽア、そんなら苅屋姫は疝氣か。こいつは大笑ひだ。

馬右　マアノ＼、氣の休まるまで、ちつと寝かすがよい。

北八　イエノ＼、寝ともないから、どうぞお飯を一膳。

皆々　斯う食ひたがつては大丈夫だ。ハヽヽヽヽヽ。

馬右　さて、團十郎どの、こなたが引受けたあの菊五郎どの。どうも氣が強くて無理ばかり云つてゐては、狂言が出來ませぬ。二言目には腹を立つて、一座が誠に困ります、まづ／＼、爰は菊五郎どのゝ、首を切らねばなりますまい。

牡丹　エヽ、そりやァ、なんの科で。

馬右　どうもあゝ氣が強くつては、首にせねばなるまいではないか。

小西　なんだ。首を切る。此奴等は途方もねえ。天下の無え國ぢやァあるめえし、天神様をしそくなつたといつて、首を切られてたまるものか。切るなら切つて見ろ。サア、殺せ／＼。

馬右　コレサ／＼、そんなに騷がつしやるな。芝居内では、暇を出す事を、首を切ると云ひます。

牡丹　エヽ、そんなら暇を出すのかえ。

馬右　出さねばなるまいではないか。あの通りだものを。ナア、皆の衆。

皆々　左やうサ、わしらもあの人がゐては、險呑で勤まりませぬ。

馬右　アレ、あの通り、大勢と一人には代へられぬから、菊五郎一人、首にせずば納まりませぬ。どうぞお前、その趣きを、さう云つて下さい。
牡丹　サア、お前方の云ひなさるのも御尤もだがね、まさか一人突き出すのも氣の毒、わしにやァなんとも云はれねえが、大概な事なら不請しなせえな。
馬右　不請といつて、みんなが納まらなくなつてなりませぬ。
皆々　菊五郎どのが出るなら、わしらは否でござる。
牡丹　あゝ云はれてはどうも仕方がねえ。
小西　カウ〳〵、團十郎さん。お前さう云つちやァ好もしくねえ。畢竟おれが役者だと云つて入込んだも、先刻の野郎……イヤサ、先刻のやうにごてついたのは、おれが惡い。たつた一人突き出されて、首を切られたと云はれちやァ、皆さんの前も外聞が惡い。一座の衆へ、詫び事をして下さい。
牡丹　モシ、頭取さん。あんなに云ふから、どうぞもう一遍料簡して。その代り、この後は、ちつとも怒らせる事ぢやァござりませぬ。
馬右　イヤ〳〵、どのやうに云つても、一座には代へられぬ。菊五郎どのは、首だ〳〵。

牡丹　そんなら、どうでもなりやせぬか。

皆々　サア〳〵、後の狂言が大事だ。出て行かつしやい〳〵。

小西　そんなら、どうでも仕方がござりやせぬ。これ程あやまるのに、置いてくれざア、いゝワ。どうするものか。また外の芝居へでも行きやせう。

皆々　こんな者を、どこで抱へるものか。

小西　どうしたと。

トむつとする。

牡丹　コレサ、それが悪い。

ト留める。

北八　わしが疝氣を蹴倒した天神様が

彌次　首になるとは。

二人　ハテ、よい氣味な。

トこの時、土間の中より權兵衛、舞臺へ上がり

權兵　ヤア、先刻から見てゐたが、この苅屋姫は大泥坊だ。蝮の次郎吉が雜物を盗みやアがつたな。

北八　ほんに貴様は
牡丹　さう云やァ沼津の松原にゐた、うぬら二人は追剝ぎだな。
北八　南無三、顯はれた。
ト逃げようとする。
權兵　動きやァがるな。
ト小西の八、權兵衞を見て
小西　ヤア、見附けたぞ。サア、野郎め、雷丸の在所を。
牡丹　そんなら雷丸は。
權兵　南無三。とんだ所を
ト又、小西の八を突き退け、一散に向うへ駈けて入る。小西の八、同じく行かうとする。牡丹獅子の八、留めて
牡丹　待て。雷丸とは、かねて尋ぬる
小西　われが知つた事ぢやァねえわえ。
ト牡丹獅子の八を突き退け、一散に向うへ駈けて入る。

牡丹　詮議の手がゝり、跡追ひかけて

　ト同じく向うへ駈けて入る。

北彌　こりや斯うしては

　ト同じく向うへ駈けて入る。皆々、呆れし思ひ入れにて

皆々　とんだまぜッ返しだ。

　ト禪のツトメにて、この道具廻る。

本舞臺、向う一面の淺黄幕、正面に屋根附きの千貫樋の飾り附け。舞臺前は浪板。上手に振舞ひの水の瓶・柄杓茶碗附き、小さき枠の中に飾りあり、禪のツトメにて、道具納まる。

ト向うより權兵衞、一散に駈けて來り、息の切れし思ひ入れにて、振舞ひ水を一口飲み、こなしあつて

權兵　ヤレ〳〵。惡しつこいあの野郎め。爰へ追ひかけて來るは必定。先刻の毒を試すは幸ひ。息が切れてこの水を。ムウ。……ソレ。

　トうなづき、瓶の中へ毒を入れる。パタ〳〵と音するゆゑ、權兵衞、小蔭へ隱れる。小西の八・一散

に駈けてくる。跡より牡丹獅子の八、追ひかけ來り、小西の八を捕へる

牡丹　おれも詮議の雷丸、われが行くへを知つて居る筈。サア、有やうに云つて聞かせろ。

小西　その行くへも、先刻の野郎が、雷丸と口走つたゆゑ、引ツ捕へて詮議せうと思ふうち、取逃がしたが、遠くは行くまい。邪魔せずと、こゝ離せ。

牡丹　イヤ、さう云つて、おれを出し抜き、われは官太夫と一つになり、身の出世をする氣だな。

小西　ハヽヽヽヽヽ。うぬが心に引比べ、詮議の野郎を、邪魔をして逃がした八内。われこそ心に一物が、あるとも、ねえとも、うぬには構はぬ。離しやアがれ。

牡丹　イヤ、詮議の手蔓、滅多に離さぬ。

小西　やかましいわえ。

牡丹　さう云や、うぬな。

トこれより摑み合ひの立廻りになり、トヾ兩人、舞臺へ來り、疲れし體にて、立廻りのうち、牡丹獅子の八、振舞ひ水を一口飲む。小西の八、これを見て、牡丹獅子の八を突き退け、同じく水を一口飲む。

サア、寶の在所を吐かせ。

小西　エヽ、邪魔しやァがるな。

ト　また立廻りになり、これより兩人、だん／＼毒の廻りし思ひ入れにて

牡丹　こりやどうだ。俄に體が

小西　おれもどうやら、アヽ、苦しいわえ。

ト云ひながら又立廻り、ト、兩人、撻となり、立ちあがらんとして立たれぬ思ひ入れ。兩人、血を吐き

兩人　ヤヽ、正しく毒氣の

ト悶え苦しむ思ひ入れ。權兵衞、小蔭より出て來り、ニッタリと笑ひ

權兵　ハテ、奇妙な毒もあるものだなア。

兩人　ヤヽ、さては、うぬが

權兵　コリヤ、騒ぐな／＼。丹波石井にゆかりの者、その外、白井本庄も、重の井姫の緣引きゆゑ、毒藥にておッ方附けろと、水右衞門さまの云ひつけだ。おれが隱した雷丸、氣取つたうぬら。それゆゑ爰まで誘き寄せ、振舞ひ水に仕込んだ毒、うまく喰つた二人が其ざま。ハテ、いゝ氣味だな。

兩人　さうとは知らず、うぬァ、よくも

ト兩方より立ちかゝる、權兵衛、兩人を蹴倒す。これにて牡丹獅子の八も小西の八も、上下の川の中へ落ちる。

權兵　ハヽヽヽヽ。脆い奴等だ。爰は幸ひ千貫樋、伊豆の海へ流るゝこの川、死骸も其まゝ、後腹病めず。うまい〳〵。

トこの以前より、しつぺい太郎の犬出て、權兵衛の足にくらひ附く。

アイタヽヽヽヽ。この畜生め〳〵。

ト刃物無きゆゑ、手にてくらはせる。

犬　ワン〳〵。

ト友を呼び、これにて山犬二疋ほど駈け來り、權兵衛を目がけ、くらひ附く。權兵衛、あちこち逃げ廻り、石など拾ひ打ち附ける。此うち一疋の犬は權兵衛の裾を咬へ、引く。これにて權兵衛、仰向けに倒れる。三疋の犬は權兵衛の上へ乘りかゝり、トヾ權兵衛を食ひ殺す、權兵衛、苦しむ。これにて、この前へ一面の黑幕を振り落す。

大ドロ〳〵になり、上の方へ、誂らへ地獄の大釜を引出す。この側に、異形なる杵に、蓮華を描きし

盆提灯を掛け、これに六道亡者中と書き、下手に、これより劍の山道と書きし榜示杭を出す。ドロドロにて道具納まる。

ト直ぐに踊り地になり、釜の蓋開く。内より赤堀源吾の亡者、經帷子にて踊りながら出る。續いて坊主願哲の亡者踊り出る。づぶ六、おかや、どぶ六、さば九郎、義兵衞、いづれも亡者の形にて踊り出る　願哲、音頭取りにて

願哲へ生死流轉はをかしなものよ。生きてるときや敵味方、死んだ處は變れども、八百三十六地獄一つ處へ生るゝと、盂蘭盆經に說かれたり。

皆々　ヨイ〳〵ヨイヤサ。

ト皆々よろしく踊る事あつて

源吾　サア〳〵、みんな、今日は盆の十六日、罪人の休息日だ。思ひ入れ騷ぐがいゝ。この赤堀源吾も娑婆に居るうち心を掛けた、小萬といふ女、これも死んださうだが、矢ツ張り與作と一緒に、善人だから、極樂の一つ蓮、隣りの國に居ても、顏見る事もならぬ、哀別離苦の苦しみ。

願哲　この願哲も、元の段介となつたが、半次郎の手にかゝり、また地獄で主從一緒になるとは、三世の緣、結ばずともよい事よ。

かや　わしは京の押小路、お半が母でござんすが、婿の長右衞門と芋田樂の罪により、摺り鉢地獄へ落されました。

さほ　それでもお前は仕合せだ。おッつけ三途の川の跡目になるではないか。

かや　左やうサ、この間目見得に行きましたが、まだ顏色が優しいとサ。

どぶ　それでもまだ優しいのか。

かや　もうちつと怖い顏を、爲習はねばなりませぬ。

さほ　わしは婆婆で何にも惡い事はせぬが、お針の所へ夜這ひに行き、袷を一枚借り倒した罪によつて、針の山へ上げられましたが、針の山は苦しいてな。

義兵　それでも針の山は、まだ景色がようござるが、わしは商賣に怠けて、油を賣つた罪によつて、黑闇地獄へ落ちました。誠に眞暗で、うつたうしうてなりませぬ。

づぶ　わしは又桑名の船で、切り込まれたゆゑ、水に縁ある氷の地獄サ。

どぶ　それは羨ましい。この節は涼しくつてようござらう。わしは鈴鹿山で、權八に殺されました。山で刃にかゝつたゆゑ、劍の山サ。野暮な所でござりやす。

源吾　イヤモウ、どこといつて地獄の内に、意氣な所は一つも無い。二六時中の苦しみ。これを思へば

婆娑で悪い事をしなければよかつた。今さら愚痴を云つても詰まらない譯だ。

願哲　その代り、今日と正月の十六日は、好き次第な事をしていゝ極樂の掟だ。サア〳〵、たつた一日の事、精出して、遊びませう〳〵。

義兵　餓鬼道や、畜生道の方の手合ひは來ませぬか。

さぼ　彼奴等は、亡者仲間の附合ひを知らねえ奴だ。

源吾　彼方は彼方で、何か趣向があらう。なんでも餓鬼や畜生の町内に負けてはならぬから、劍や針の山の手の者だと云はれぬやう、なんぞ思ひ附くがよい。

さぼ　なんと、この婆さんに、輕業をさせてはどうだ。

願哲　よかろう〳〵。おれが口上云ひにならう。

かや　わしが輕業をするのかえ。

源吾　無明の橋を渡る氣で、苧殼渡りでもするがいゝ。

かや　そんなら、ちよつと下稽古。

さぼ　わしらは下方へ廻りやせう。

源吾　鳴り物は、責め鼓や責め太鼓を借りてくるがよい。

皆々　疾に借りて來てあります。

ト皆々、異形の太鼓、笛、三味線など出す。顚哲は釜の蓋を締め、この上へおかやを乘せ、思ひ入れあつて

顚哲　さて、東西。お目通りに一座高く扣へましたるは、此たび娑婆下りの太夫、摺り鉢地獄のおかや信女。釜の蓋の上にし、獅子の香爐、或ひは業の秤の下がり前。次に到りまして、苧殼渡り。所所は口上を以て申し上げます。先づは、足固めが最初でござい。

ト鳴り物になり、おかや、釜の蓋の上へスツクり立ちあがる。

さて〳〵〳〵、この度の輕業は、兩手を突いて足を離し、逆さまに立ちます。この儀を名けて、逆さ囘向の逆緣々々。

トおかや、不器用に逆さに立つ。

さて〳〵〳〵、この次は、釜の上にて後へ反ります。下から棒にて、ちよい〳〵と突き上げまする。この儀を名けて、目蓮尊者の阿母たぢや。ハリトウ。

トこの外、いろ〳〵口上あるべし。ト、おかや、釜の上より轉げ落ちる。

皆々　どうした〳〵。

ト寄つて介抱する。

かや　腰骨を打つて、すんでの事に生返らうとしたわいなア。

ト鐃鉢の音になり、向うより小西の八、經帷子、胡麻鹽を當て、摺り鉢を冠り、出てくる。後より牡丹獅子の八、同じ形にて、經帷子を頭より冠り出て

牡丹　なんだか無性に通いの奴らが、頭をくらはしやァがる。

ト小西の八の姿を見て

ハヽア、あの人は摺り鉢を冠つて行くが、こいつは思ひ附きだ。モシ／＼、お前、その摺り鉢はどこで買ひなすつた。

小西　アイ、こりやァ今、通りの人に貰ひやした。無性に頭をくらはすから、これを冠つて行けとサ。

牡丹　ハヽア、さうかえ。わしも一つ欲しいものだ。

ト云ひながら小西の八と顔見合せ

ヤア、わりやァ八藏だな。

小西　さういふは八内か。

牡丹　サア、いゝ所で逢つた。聞きかけた雷丸の

小西　又しつこい、おれが知るものか。

牡丹　イヽヤ、聞かにやアならぬ。

ト兩人、爭ひながら舞臺へ來る。皆々見て

皆々　ヤア、亡者の新入りだ〳〵。

源吾　地獄で喧嘩は、ならぬぞ〳〵。

願哲　喧嘩なら、修羅道へ行け〳〵。

小西　なんだ、この手合ひは。をかしな形をしてゐるな。

牡丹　さういふ此方も、對な形だが

小西　ほんに爰はマア

兩人　なんといふ所だ。

源吾　爰は八萬奈落の底、

皆々　卽ち冥土の地獄國だ。

牡小　そんならおいらは

願哲　亡者の新入り。

皆々　死んで來たのだ。
牡丹　ハヽア、道理で、なんだか薄ッ暗い所だと思つた。
小西　これにて思ひ當つたは、婆娑で飲んだる振舞ひ水。
牡丹　それ〳〵、毒にあたつて息絶えしと、思ふ其うち、夢ともなく
小西　現ともなく、來て見れば、爰は地獄の六道の辻。
牡丹　そんなら、いよ〳〵死んだのか。
兩人　こいつは大變。
源吾　今日は七月十六日、仕合せな日に、わいらは死んだ。
願哲　騷ぎ次第の休息日、その代り明日から
皆々　二六時中の責め苦にあふのだ。
小西　どうで地獄へ落ちるからは、責められるのは當り前だ。
牡丹　モシ、地獄のお頭さん。新入りのわしらだ。何分よろしく
兩人　お頼み申しやす。
源吾　新入りの事なれば、大王樣へ申し上げずばなるまい。暫くこれに待つてゐろ。

小西 ハイ／＼、何にしろ急な事で、お土産も持つて參りません。

牡丹 どうぞ、ちつと樂な處へ、お賴み申しやす。

皆々 そんな自由がなるものか。

源吾 マア、何はともあれ、牛頭馬頭に申し上げよう。

皆々 その上、奧で一騷ぎ。

源吾 サア、みんな、來やれ／＼。

ト皆々、ワヤ／＼云うて下座へ入る。

牡丹 思ひがけなく命を落し、地獄へ來れば、寶の詮議も

小西 これといふのも、おぬしが邪魔をしたばかり。息が切れたゆゑ、飮まずともよい水を飮み、それが毒にて、死んだ二人。思へば憎いあの野郎め。併し、閻魔に願はなければ、幽靈にも出られまい。なんで又、おぬしは、あの雷丸を其やうに

牡丹 欲しがる譯は、おれが主人は大江の家中、本庄助太夫さま、その御主人の姬君が、尋ねてござる寶ゆゑ、詮議して差上げれば、重の井姬は元へ歸參、さすれば一旦斷絕せし、主人本庄の家も立つ道理。それゆゑ若黨八内が、姿をやつして此ほど詮議。

小西　おれも心は同じ事。元は大江の御家中にて、白井兵左衛門さまの若黨、干糠の八藏。若旦那の權八さまが、尋ねてござる雷丸、それの詮議の其ために、大工となつたこの八藏。

牡丹　そんならわれとは敵同士。白井の家より養子の權八、その養子たる身を以て、養父を討つた無道人。

小西　イヽヤ、助太夫こそ由留木家の、官太夫と心を合せ、家國奪はん企みと聞き、權八さまが養父を討ちしも、逆賊の汚名を殘させまい爲、即ち養父へ大孝行。

牡丹　親を殺して、なに孝行。敵の家來の八藏も、おれが爲には、主人の敵の即ち片割れ。いま改めて修羅道の、苦患も即ち主人へ忠義。

小西　さう云や此方も敵同士。爭ふうちに何方ぞか、爰で命を落したら、また生返る事もあらう。

牡丹　これを互ひの運に定めて

小西　そんなら爰で

牡丹　干糠の八藏。

小西　沓かけ八内。

牡丹　八と

小西　八とが

牡丹　冥土の勝負。

兩人　ヨイヤ、マカショトナ。

ト身拵らへする。

〽二八十六日は地獄も樂よ、二六時中のつい苦しみも、死後の罪なら青赤鬼に、わしや追ひ廻されて、四九の三十六地獄へ、一度は行かねばならぬぞえ。

トこの唄のうち、牡丹獅子の八は釜の蓋の閂を取り、小西と八と立廻る。此うち向うより權兵衞、裸にて胡麻鹽をあてゝ出て來り、この體を見て舞臺へ來り

權兵　二人ともに、待て〳〵。

牡丹　ヤア、わりやァ、おいらに毒を飮ました野郎だな。

小西　ほんに、われにやァ恨みがある。

牡丹　逢はう〳〵と思つたに

小西　ハテ、よい處で

兩人　逢つたなア。

權兵　ハテ、惡い處で逢ふものだなア。わいら二人が爰にゐるからは、慥かに冥土の地獄であらうと　ハテ、惡の報いはすさまじい。わいらを殺したその後で、たうとう狼に出ッくはし、刃物が無さにムザ〳〵と、畜生に喰はれ、それから冥土の六道にて聞けば、おれは畜生道へ行くのだげな　ハテ、地獄にも知る人と、とんだ處で逢つたなア。

牡丹　狼に喰ひ殺されたとは、まだしもうぬが自業自得。

小西　爰でこそ、雷丸の在所を吐かしてしまへ。

權兵　成る程、爰なら云つて聞かせる。雷丸は龜山で拾つて、江戸へ持つて行き、品川の橋向う、善助といふ家主の、借家は即ちおれが住居だ。そこの內の緣の下へ、深く埋めて隱してあるわえ。

小西　そんなら、品川宿の橋向う

牡丹　裏借家の緣の下とな。

小西　それ聞く上は

兩人　これから直ぐに。

權兵　行かれるならば行つて見ろ。爰は冥土、娑婆へ通路が叶ふものか。

牡丹　成る程、おいらも死んだ體。

小西　寶の在所は、みす／＼知れても

權兵　行く事がならぬゆゑに、それで詳しく話して聞かせた。娑婆で隱したを知つてゐる者は、おれが死ねば外に一人も無い。ありやア一生のすたり物サ。

小西　エヽコレ、折角聞いた寶の手がゝり

牡丹　知れたばかりで、取る事も叶はぬか。

兩人　エヽ、いまいましい。

トこの時、向う揚げ幕にて

大勢　八やアイ／＼。

ト小西の八、牡丹獅子の八、耳聾て

小西　遠くでおれを呼ぶやうだが

トまた日覆にて「八やアイ」と呼ぶ。

牡丹　おれが耳へも「八」と呼ぶが

兩人　いよ／＼呼ぶわい。

ト行きさうにする。權兵衛、留めて

權兵　ドッコイ、一旦冥土へ來た者は、後へは歸さぬ。
兩人　エヽ、退きやァがれ。
權兵　おれも一緒に、連れて行け／＼。
兩人　邪魔しやァがるな。
　　ト突き退ける。
權兵　アレ、新入りの亡者が、駈落ちだ／＼。
　ト喚く。下座より源吾、顚哲、その外、以前の亡者殘らず出て
源吾　後へ歸さぬ冥土の掟。
皆々　サア／＼、此方へ來い／＼。
兩人　イヤ／＼、なんでも呼ぶ方へ
　　トこの時また揚げ幕と日覆にて
大勢　八やアイ／＼。
　ト小西の八、牡丹獅子の八、向うへ行きさうにする。
皆々　やる事は、ならぬ／＼。

大勢 八やアイ〳〵。

ト呼ぶ。これにて小西の八は摺り鉢、牡丹獅子の八は釜の蓋の閂にて、皆々を毆り廻し、一散に向うへ走り入る。

皆々 ヤアイ、亡者の駈落ち。地獄の紛失。歸せ〳〵。オヽイ〳〵。

ト大ドロ〳〵になり、皆々喚く。これにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、一面の山幕、眞中に甘酒の小屋、軒口に山椒の魚を吊しあり。てんつゝ、馬士唄にて道具納まる。

ト爰に甘酒屋の亭主、茶碗へ甘酒を汲んでゐる。眞中に山駕籠一挺、この前に經帷子を着たる牡丹獅子の八、小西の八の死骸、倒れてゐる。富士の同者一人、浴衣にて白股引、行衣を腰に附け、鈴を襷へ斜に掛け、金剛杖を持ち、死骸の側に立ちかゝりゐる。雲助三人、杣二人、鋤と鍬をかたげ、皆皆寄つて立ちかゝりゐる。

皆々 八やアイ〳〵。

同者 八やアイ。氣が附いたか。

亭主　マア〳〵、早く水を〳〵。

雲甲　ソレ、水だ〳〵。

ト瀧壺より茶碗へ水を汲んで、死骸の兩人へ飲ませる。此うち死骸心附き、あたりを見て、思ひ入れ。

皆々捨ぜりふあり

雲乙　そりやこそ、生き返つた〳〵。

皆々　〆めたぞ〳〵。生きたぞ〳〵。

ト此うち山颪し、兩人、こなしあつて

牡丹　暫しが內も思はぬ苦痛

小西　この世へ出れば

兩人　これより直ぐに。

ト兩人スツクと立つて、東の方へ行きかけるを、亭主留めて

亭主　コレサ〳〵、此奴等は魔がさしたのか。生きたのか。

皆々　なんでも此奴は魔の仕業。

杣一　こんな奴は娑婆ふさげ。

杣二　地獄へでも、極樂へでも行くやうに、
雲助　いつその事、ぶち殺せ〳〵。
皆々　合點だ〳〵。
　ト皆々寄つて、兩人を鋤鍬にて打つてかゝるを、兩人さゝへて
牡丹　地獄の敎へを幸ひに
小西　これなる品にて
　ト鋤鍬を引ッたくり、皆々を見事に投げて
兩人　シテコイナ。
　ト身構へする。山颪しになり、兩人一散に向うへ入る。同者跡を追ひかけようとするを、皆々留めて
雲一　アヽ、コレ〳〵。こなたにはどこへ。佛は生きても、駕籠賃は出さぬぞ〳〵。
雲二　サア、駕籠の錢を、拂はつしやい〳〵。
同者　尤もだ〳〵。あの二人は江戸の友達、二人ながら八といふ名。千貫樋の流れに死んでゐたゆゑ、關所を越して葬らば、寺へ參るもよからうと、それでこなた衆を賴んで、佛の積りで山駕籠へ
雲三　病人にして通るのも、此方の算段にある事。

雲一　あまり唸るゆゑ、爰へ下ろして呼び生けたら、ぴん〳〵達者で、あの通り
杣一　乗り逃げされては、人質は富士同者。其奴を逃すな〳〵。
雲三　生きたら祝儀、死んだら酒手だ。
皆々　なんでもこなたは、やらねえ〳〵。
同者　これは又迷惑な。
ト皆々寄つて同者を捕へ、引ッ張る。この時、行衣を捨てること。
皆々　イヤ〳〵、やらねえ〳〵。
同者　ハテマア、彼奴等を
ト振り切り、一散に逃げて東の花道へ入る。雲助、跡を見送り
雲三　いま〳〵しい先達めだ。併し又、講中は後にもゐる、其奴等が來たならば
雲甲　それ〳〵。なんでも爰に頑張つて
皆々　待つてゐろ〳〵。
ト始終山颪し、皆々あたりへ腰を掛ける。驛鈴入りの馬士唄になり、向うより、いゝいろはのお半、若衆拵らへ、丸に井の字の紋附きにて、跡より石井半次郎、着流し大小、扱帯にて矢張り若衆の拵らへ、

次郎作附いて出て來り

半次　ヤレ〳〵、先づ關を越えたで、少しは安堵した。

次郎　左やう〳〵。この親仁も心遣ひ致したせゐか、びつしよりと汗になりました。

はん　マア〳〵、あれにて、足を休めて

半次　それがよい〳〵。

ト矢張り馬士唄にて、本舞臺へ來る。亭主、立ちかゝつて

亭主　モシ〳〵、旦那方。甘酒をあがりませぬか。

半次　イヤ〳〵、其やうな物は、此方に望みは無い。

亭主　そんなら甘酒をあがらねば、わしは、そろ〳〵店を。

ト片附けにかゝる。

次郎　コレ〳〵、亭主、なんぼ甘酒は飲まずとも、腰掛の端なりと

亭主　イエ〳〵、それはなりませぬ〳〵。

雲三　モシ〳〵、あなた方は御存じは無い筈。今日はこの瀧壺を見物に、權現樣の別當から、お客を連れてござるゆゑ、そこで今爰へは

次郎　成る程、さう聞いては致し方がない。併し、此方は足弱ゆゑ

半次　そろ〳〵と行かうぢやないか。

雲一　モシ〳〵。この山道でお足が痛みませう。小田原まで、お駕籠はどうでござります。

次郎　イヤ〳〵、駕籠の望みは

雲二　其やうに云はずと、廉いものだ。

三人　乘つて行きなさい〳〵。

トこの時、雲助三、お半の紋をよく〳〵見て

雲三　アヽコレ、この若衆は、どうやら小袖の紋が丸に井の字。

ト皆々見て

皆々　オヽ、丸に井の字だ〳〵。

ト口々に喚く。

半次　コリヤ〳〵。其方どもは、丸に井の字なら、なんと致す。

雲三　丸に井の字は、お尋ね者の權八ゆゑ。

仙一　お觸れの廻つた事なれば

皆々　その權八の、詮議をするのだ。
半次　それこそ因州の家中と聞く。此方は由留木家の浪人、石井とあるゆゑ、紋所の
雲三　ムウ。して又、あちらの前髪は
次郎　わいらが知つた事でないワ。
半次　身共が弟だ。
雲一　イヤ〳〵、先刻から見るところ、ぐにやら〳〵とした樣子。なんでも此奴は
　　ト　お半の懷へ手を入れる。
はん　こりや何ゆゑに、懷へ手を
雲一　コレ〳〵。慥かな證據は乳の樣子。女だ〳〵。
皆々　ナニ、女が關所を
雲一　オヽサ、女だ〳〵。
　　ト　皆々喚く。半次郎、思ひ入れあつて
半次　こりや、おのれらは云ひ掛け致し、慮外の振舞ひ。今一言云うて見ろ。
　　ト　刀へ手を掛ける。皆々寄つて

皆々　女だ〳〵。
ト半次郎、一刀を拔く。
皆々　ソリヤ、拔いたぞ〳〵。
ト捨ぜりふて立騷ぐ。この時お半の懷中より、三立目の、印の入りたる守り袋を引き出す。半次郎、切りかけるゆゑ、雲助三、金と心得、懷へ入れる。皆々、お半を引立てゝ向うへ入る。雲助二、山駕籠を擔ぎ、附いて入る。
次郎　おのれ、憎くき奴等めが。
半次　ソレ、匹夫めが跡追つかけて
ト山颪しにて、兩人、跡追ひかけて向うへ入る。捨て鐘の頭を打込む。正面の山幕を切つて落す。
本舞臺、向う浪幕、箱根山の景色、前通り小高き岩組み、以前の松の吊り枝殘り、上の方にズツと高き大瀧、誂らへの通り。この岩に藤かづらを這はせ、後に登る仕掛けあり。瀧より下は切り穴、瀧壺の體よろしく、眞中に施行の假小屋へ幕を絞り、伊豫簾おろしある。下手に施行の高札立てあり。矢張り山颪しにて道具納まる。ト竹本の淨瑠璃となる。

〽紅葉を、秋の錦と夕映えの、瀧に照りそふ風色は、相州箱根の山續き、名も瀧坂の流れよき、藤川が志しの、心の底はそれぞとも、知らぬ施行の法の緣、つどひ集まる乞食は、只布引きの如くなり。

ト爰に上の方に、刎川久馬、絆纏、股引、大小にて、挾み箱に腰を掛け、中間二人扣へ、下の方に女非人、乞食大勢立ちかゝりゐる。此うち、中間は、錢や米を與へる。尙も米俵二三俵積んである。

皆々　へイ／＼、お有り難うござりますノ＼。

中間　ヤイ／＼、限りもない非人めら、なんぼ主命でも、息も精も續くものではないワ。

久馬　コリヤ／＼、家來ども、暫く休息いたし、又々施行を

中間　畏まりました。

ト　これにて非人、ワヤ／＼云うてゐる。また下の方より非人二三人出て來り

三人　ハイ／＼、お願ひでござります／＼。

久馬　ヤイ／＼、おのれらはどれから參つた。只今暫く休息を致さんと、家來どもを差留めしに、又々これへ。

非一　ハイ／＼、私しどもは最前參りましたけれど、あまり群集いたしまするによつて、そこらを歩い

て、あの瀧を見に參りました。

非二 そこで、あまり見事な瀧ゆゑ、こんな處で、一杯やつたらよからうと存じて。

久馬 こりや大分面白い奴等ぢや。ソレ、家來ども、取らせい／＼。

〽ハット積んだる施行の錢、一人前に一貫づゝ、めい／＼取つて押し戴き

ト中間立つて、錢一貫づゝ三人へやる。

非三 これはマア有り難いお施行。なんと、あんこよ、こんな結構な、また有り難い事はないぢやアないか。

非一 オヽ、われが云ふ通り、これまでの施行は、五十づゝが關の山、また此お大名は格別。

非二 こんな日にあへば、乞食も捨てられたものではない。

非一 して、此やうな結構な御法事をなさるお方は、どなた樣の

久馬 コリヤ／＼、わいらが聞いたとて役に立たぬ事。併し、云うて聞かせるワ。此たび身が御主人、もと小身のお家柄、だん／＼との御立身、いま大名のお身なれば、せめては施しの爲、御法事と名けしは、この程より箱根の金剛院に御旅宿あつて、少々志しの爲の事ゆゑ、數多の者へ下さる施行。

三人　これは誠によい思し召し。

久馬　妹には、御主人、かね〴〵心をかけられし、姫……イヤ、女非人などの中に、身を成り下して、さまよひ歩くとの風聞。さるによつて、施行になぞらへ、彼の者を詮議の爲。

非一　そんならお志しは附けたり、

非二　女の詮議半分。

中間　兩方掛ければ、これがちやんぽん。

久馬　何をたはけた。……施行取らせば用無きわいら。

中間　サア、立て〳〵。

ト　これにて皆々捨ぜりふにて、下の方へ入る。

久馬　然らば又々明日の施行。別當方へ、家來參れ。

中間　ハヽア。

ト時の太鼓になり、久馬先きに、中間附いて上の方へ入る。

〽忠孝の、身にも因果はめぐりくる、片輪車の夫をば、乘せて箱根を女業、曳くもたよはき女氣に。

ト この文句のうち、山颪し捺めて、向うより非人小萬、實は重の井姫、やつし切継ぎ、女非人の形、好みの拵らへ、車の綱を曳き出てくる。この躄り車に乘つて、丹波與八郎、五十日鬘、切継ぎの形、竹杖を持ち、曳かれて出てくる。誂らへの合ひ方。

與八 「旅の客、雲踏む峰を越え行かん。

小萬 時雨は袖の下よりぞする。

與八 その恐ろしきこの山路、女業にも曳き馴れて、因果もめぐるこの車。

小萬 片輪車はその昔、照天の姫も此やうに、小栗判官さまとやら。

與八 曳いて熊野の温泉に、我れはそれには引きかへて

小萬 日毎に通ふ蘆の湯は、お前の病を直さん爲。

與八 我れも小栗にあやかりて、横山ならぬ横しませし、敵の行くへ

小萬 やがてめでたう、それ樂しみに

與八 ヤア

小萬 行かうわいなア。

〽車の助けや竹杖を、持つ手も撓む坂路を、箱根嵐の風の足、やう／＼たどり曳きとゞめ。

ト この文句一ぱいに、本舞臺へ來り、小萬は瀧壺へこなしあつて

〽嬉しや、爰と立ち寄つて。

小萬 ヤレ〳〵、しんどや〳〵。爰は瀧坂。この瀧津瀬は蘆の湯の流れ。この身を浸し、百日のその懐も、今宵が丁度……それにしるしは、今とても

與八 ハテ、疑はずとも正直の、神は見通し、何卒力を添へ給ひて

小萬 夫の病氣本復を

兩人 神慮に叶へ、たび給へ。

ト手を合して思ひ入れ。この時、伊豫簾の中にて

水右 恐ろしき、劍の枝の撓むまで、いかなる罪の、なれの果ぞや。

ト山颪し、三味線入り木魂の合ひ方、後ろの伊豫簾卷きあげると、藤川水右衞門、病ひ鉢卷、平括け一本差し。この後に菊川兵馬、刎川久馬、附添ひゐる。下手より以前の杣二人出てくる。

此たび江戸へ訴への道にて、さいつ頃、受けし手疵も本復すれば、權現と旅宿を定め、箱根七湯、めぐり〳〵て今日も又、歸る山路の道すがら、この瀧津瀬の名にめでゝ、瀧坂といひつらん。ハテ、眺めある景色ぢやなア。

久馬　今日の御饗應は、別當の云ひ附けにて

兵馬　双子のあたり、假の猪狩り

柚二　御意に任せて提げ重まで。

水右　然らばこれにて小筒を開き

兵久　我れ〳〵ども、御相伴。

水右　いづれも打寛いで、サヽ、一杯。……して、施行の儀は。

久馬　仰せの通り、施行も今日は相濟みましたれば、この瀧を御覽あつて

兵馬　御酒宴の御遊興。

水右　イカサマ、唐土の李白は、瀧を眺めて酒を樂しむ。

トあたりを見て

併し、清く流るゝ瀧の下、いまはしき非人の兩人。

久馬　成る程、見ますれば、むさい、穢ない態をして。

兵馬　ヤイ、わいらは、いづくより參つた。御酒宴の妨げ、早くこの場を

ト兩人、引ッ立てにかゝるを、與八郎見て、思ひ入れあつて

與八　イヤ、拙者はこの瀧へ心願ござつて。

久馬　爰立去らぬその上に、返答かへす無禮者。

兵馬　立たねばこれにて、我れ〳〵が

ト兩人かゝるを

與八　聞分けなき御兩所。いつかなこの場は

ト突き退け

立ちませぬ。

水右　無禮な非人。イデ、某が

ト拔きかける。小萬見て

小萬　アモシ、誰れも否とは

ト水右衞門を見て

慥か其方は由留木家に。

水右　ほんに、それゆゑ勘當受け、戀しと思ふ重の井の、姿そぐはぬ其いでたち。そんならわれが

ト寄るを、與八郎は小萬を隔て、三人キッとなつて見得。誂らへの合ひ方。

さてこそいつぞや姫が首、似せものなれど其まゝに、捨てゝ置きしも縁あらば、逢はうと思ふ念願の、通じはすれど二人連れ。さては噂に聞き及ぶ

與八　イヤ、その與八郎も世を早う、我れは家來の丹波與作。又これなる者は小萬というて、我が女房。

水右　何か解らぬ詞の端。よし又われが與作なら、腰膝立たぬその業病。小萬にもせよ、姫にもせよ、この水右衛門が所望いたす。我れへ落つれば女も仕合せ。

與八　飽くまで非道のその一言。思ひ出せばさいつ頃、遠州日坂入山津、非人の江戸兵衛、現在の妹を殺すと露知らず、宿を借りたるその時の

水右　いかにも、おれだ、この水右衛門。腹をあばいて松山が、生血の奇特、それゆゑに、元へ戻つてこの姿。その時宿せし虚無僧なら、いよ〳〵われはお尋ね者。

與八　イヽヤ、與作といふより外

水右　そんなら殺せし松山が、ゆかりも無ければ何事も、先づ差當るあの小萬。

與八　松山どのは主人の息女。さすれば敵の水右衛門

水右　イヽヤ、滅多に齒は立たぬ。小萬を得心させる手段、ソレ、申し附けたる老女を爰へ。

久兵　ハヽ。

ト立ちかゝり、思ひ入れ。

〽ハッと云ふ間も下知の下、かねて企みし母親に、容赦縄目の猿轡、引き立て引き立て立ち出づれば、それと見るより。

ト下座より雲助三、お浪へ猿轡をかけ、懐に赤子を抱へゐるを引ッ立て出る。

小萬 ヤヽ、アノ、其方は乳母……イヤ、母さん、こりやマアなんで

與八 コレ〳〵……急かずと様子を。

ト思ひ入れ。

〽水右衛門はしたり顔。

水右 なんと見たか。小萬なら、それにもしてやらうが、どこまでも重の井と、思ふ心の迷ひから、われを屋敷で口説いた時、送りし艶書を丹波與惣兵衛。それゆゑ我れを勘當の、遺恨の折に誰れともなく、ぶッぱなされたは自業自得。この節彼れを見當てたゆゑ、引ッ縛つてこの如く。否と云はゞ腰抜けもろとも、なぶり殺し。サア、否か、應か。どうだ。

〽非道の詞も差當る、人質取られて小萬も共に、無念の與八郎、齒ぎしみ齒ぎり、胸先へ差込む癪、ハッと悶える有様に、小萬恟り駈け寄つて。

ト皆々よろしくあつて

小萬　アヽコレ、與八郎さま。今、目の前に、敵はそれと知りながら、お名乘りなされて潔よく、勝負を遂げん甲斐もなう、折も折とてこの病氣。どうぞ仕樣は無い事かいの。

水右　どうして〳〵、仕樣があらう。應とさへ云へば、その腰拔け、餓鬼もろともに助けてくれるが、其方へ心中。人我れに辛ければ、我れまた人に辛し。魚心あれば水心。小萬、なんと憎うは、あるまいがな。

〽猫撫で聲の面憎さ、食ひついても〳〵と思へども、眼前我が子と夫の命、我が身一つに比ぶれば、なに惜しからんと思へども、云はゞ夫の妹の敵、身は八つ裂きの刑罰と、血を吐く思ひ道理なる　〽藤川は笑壺に入り、靜々立つて與八郎が、襟髮取つて、グツと引据ゑ。

ト水右衞門は與八郎を捕へ、思ひ入れ。

水右　サア、勝負せぬか。われが主人の丹波與惣兵衞、その娘の松山を、殺せしはこの藤川。與作なら主人の仇、與八郎なら妹の敵。サア、尋常に名乘つて勝負しろ。なんだ。ほえるか。無念なか。口惜しいか。足が立たずば手も叶ふまい。ハテ、いぢらしい。此やうな態で、とても敵は討たれまい。……これでもか。これでもか。

ト捕へてこづく。

〽砂に摺り附け、にじり附け。

なんと、小萬、これでも否か。

小萬 サア、それは。

水右 猶豫に及ぶは不承知か。不承知ならば、餓鬼もろとも、今、目の前で刺し通せ。

久兵 心得ました。

〽畏まつたと取つて引伏せ、刃ひらりと差し附くれば。

ト久馬、兵馬、白刃をお浪と赤子へ差附ける。小萬、駈け寄り、留めて

小萬 アヽ、コレ〳〵。マア〳〵待つて下さりませ。

水右 いよ〳〵抱かれて寝る心か。

小萬 サア

水右 サア

兩人 サア〳〵〳〵。

水右 色よい返事が、聞きたいわい。

小萬 〽絶體絶命、身の大難に、小萬が何と詮方も、なき身ぞと、思ひきはめて

サア、得心ぢやわいなう。

水右 抱かれて寝るとな。

小萬 アイ、……その代り、人々のお命を

水右 得心なれば、云うた詞は反古にはなるまい。命冥加な腰抜けめ。ソレ、縄附きを助けて取らせい。

久兵 ハツ。

〽ハツと其まゝ猿轡、縄目も一度に解き捨てゝ、岩根へかつぱと突きやれば。

なみ コレ、お姫様……イヤコレ、小萬どの。

與八 母人、無念でござる。口惜しい／＼。

ト思ひ入れ。

小萬 其お嘆きは尤もながら、是非に一羽は狩人の、網にかゝつた身の因果。この身さへ得心すれば、納まるこの場。わたしはこれが本望。與作さん、必らずその身を大切に

與八 出かした女房。これを思へば、仇に身を任せたる、常磐御前がよい手本。心の肌身を打解けて

小萬 サア、肌ふれるのは、この身の覺悟。

トちつとこなし

只何事も、お前がいとしさ。

水右　この藤川を清盛とは心地よい。劍を抱いて寐るも一興。これより箱根權現の別莊にて、比翼の床入り。サア、小萬、來い。

ト小萬が手を取る。久馬、兵馬は與八郎、お浪を圍ふ。

〽引立てられて行く思ひ、見送る思ひ鴛鴦の、胸の劍羽呑み込む藤川、人々あとに引き添うて、權現さして立歸る。

ト水右衞門、小萬の手を取り、久馬、兵馬附いて下座へ入る。この時、雲助三、下手へ隱れる。お浪こなし。與八郎、跡を見送り、無念の思ひ入れ。

なみ　尤もぢや〳〵。いはゞ敵を目前に、手出しもならぬ此しだら。

與八　よう呑み込ましてやつたれど、何として女の腕、却つて殺さるゝは知れた事。それが無念さ、不便さゆゑ。して〳〵、我が子の行く先は。

なみ　お氣遣ひ遊ばすな。知るべの方へ……先づ差あたる敵の跡を

與八　アヽ、コレ〳〵、何として。

なみ　加勢は乳母が小萬さまに。

與八　心急くのは尤もなれど、多勢の中へ踏ん込んでは、小萬もろともその身まで。跡に殘りしあの與之助、水子も共に死出の旅、不具の我れが、何として〱。

なみ　そんなら行くにも、行かれぬか。

與八　願ひある身は憂さ、辛さ。妹の敵は食ひ附いても、我が存念。我れは現在父の仇、誰れをそれぞと知れざるゆゑ、尋ぬる寶は二つまで、取り得ぬうちはいつかな死なぬ。それゆゑ、見す〱女房を見殺しに、せめて菩提は親子夫婦。逆さまながら忰めも

なみ　この場にお出で遊ばしたら

與八　せめて菩提に

なみ　御回向を

與八　俗名小萬、頓生菩提。

兩人　南無阿彌陀佛々々々々々々。

〽鉦鼓の聲も、心身を、つんざく如く。

與八　今頃は小萬めも死にやつたか。定めて苦痛は

なみ　コレ〳〵、お氣の弱い。わしも婿や、娘を殺し、生き殘つてこの思ひ。宿世の業と諦めても諦めたとて、たとへ武士でも、鬼ぢやとて、これが泣かずにゐられうか。これぞ地獄の笞より、猶々まさりしこの苦しみ。

与八　どう諦めたとて、たとへ武士でも、鬼ぢやとて、これが泣かずにゐられうか。これぞ地獄の笞より、猶々まさりしこの苦しみ。

なみ　これより苦しい重の井さま。思ひ廻せば

兩人　エヽ。

ト思ひ入れ。

〽南無阿彌陀佛々々々々々々、夫も珠數を繰り返す、回向に時をぞうつしける　〽女ほど實に恐ろしきものは無し、戀には凝つて千仭の、劍の中もいとひなう、やう〳〵遁がれ斷け戻る。

ト山颪し烈しく、バタ〳〵になり、下手より小萬走り出て、舞臺につまづく。與八郎、介抱して

與八　ヤヽ、小萬ぢやないか。

小萬　與八郎さま。よう爰にゐて下さんしたなア。〽しがみつく〳〵乳母は見て

なみ　ヤ、姫君樣。……あなたはどうして。

ト寄るな

與八　女房去つた。縁切つた。

小萬　エ。そりやマア、何ゆゑ。

與八　ヤア、何ゆゑとはうろたへ者。我れ腰抜けとなつたる上、父の敵、妹の仇、まづ差あたる其方に、妹が敵を討たせんと、思ふ心も、やみ／＼と、戀に引かれて歸りし汝、見下げ果てたる女よなア。

小萬　サア、尤もぢや／＼。其やうに病を悔ましやんすがいとしいゆゑ、敵の手へ捕はれとなり、これ幸ひと透を窺ひ、只一討ちに恨みんと思へども、お前の機嫌をそこねうとて、戻つては參りませぬ。もう／＼、云ふに云はれぬ、切ない、悲しい、憂き日をして戻つて來たも、お前の病氣を今一度、おのれと思ふ一念力、殘つた願ひが滿したさに

與八　ナニ、殘つた願ひとは。

小萬　サア、いつぞや都を落ちてより、大井川にて思はぬ難儀。夫の大病、腰膝立たぬ足なえの病ひ。敵が、討たれぬ／＼と、悔む主より女の身で、側に見る目がいとほしく、ま一度本復させまして父御の敵討たせんと、この命を代りに立て、權現を誓ひに掛け、水垢離取つて百日の、その朝夕

も今日限り、清め捧ぐるこの命。日數も滿ちて今朝までも、行法を遂げおほせ、いま一度で滿つる願。悲しや、思はぬ災難で、身は捕はれても、夫の爲に權現へ、捧げたこの身、のめ〳〵と、なんで死なうぞ、死にやせぬ〳〵。思ひ詰めたこの願望、幸ひ爰の流れより、この水上は蘆の湯の、藥師の利益もろともに、心に念じ、權現納受ましますか。しるしを爰にて女の念力。

與八　然らば我れも、もろともに

小萬　我れに力を添へ給へ。

　ト雲助三、窺ひ出て

雲三　さてこそわれは與八郎。

　トかゝるを、與八郎引き附け

與八　早く小萬は

小萬　オヽ、さうぢや。

　ト早目の合ひ方になり、小萬、身づくろひして思ひ入れ。

〽甲斐々々しくも身づくろひ、駈け寄る山路に散りしく木の葉、嶮しき岩根いとひなく、脛もあらはに分け登る、その身はむさゞび、木傳ふ猿、難なく瀧に近寄れば

ト此うち水音烈しく、小萬、瀧を見て、だん／＼と岩根を傳はり、蔦葛に取り縋り、登る事よろしく

〽音凄まじく飛び散る水勢、白絲みだす瀧の面、ざんぶと飛び込み、どう／＼／＼、落ちくる水を結びあげ、念力凝らして一心に、合掌なしたるその有樣、物狂はしく髮逆立ち、身の毛もよだつばかりなり。

ト小萬、瀧に打たれて思ひ入れ。此うち兵馬、久馬窺ひ出て、與八郎にかゝる。與八郎、兵馬を當てる。この間に久馬、與八郎を下の瀧壺へ突き落す、ドンと水音する。小萬、合掌して思ひ入れ。お浪、與八郎を見て

なみ　ヤア、誤まつて若旦那、あの瀧壺へ

久馬　其うち身共は、この子悴。

なみ　イヽヤ、若は渡さぬ／＼。

久馬　小癪な老ぼれ。

ト お浪を引退け、抱き子を取らうとする。お浪やらじと爭ふ。山颪し、水音烈しく、與八郎、瀧壺より這ひ上がり、この體を見て、久馬を取つて投げ、キッと見得。

ヤヽ、甦め、わりやア腰が立つたか。

なみ　ほんに、あなたはお腰が立つか。

與八　ヤア、思はず知らず、業病の、腰膝自由に

久馬　本復すれば、生けてはおかれぬ。觀念。

〽丹波目がけて切りかくるを、心得ひらりと身をかはし、刀もぎ取り只一討ち、首は虚空へ飛び散つたり。

與八　さてこそ小萬が念力通じて、奇特は目前。ヤア〳〵、小萬にあらぬ重の井姫。今こそ本望、病の平癒。やがてめでたう、本地へ歸參を

〽聲の響きは瀧の面、兩眼開き嬉しげに

トこの時小萬、立ち身にて目を開き

小萬　アラ、嬉しや。喜ばしや。權現納受ましまして、有り難やなア。

〽云ふぞと見えしが、一團の、靈火ひらめき、俄かに山鳴り震動し、在りし姿は藻拔けの衣、血汐の小袖瀧浪に、流れ落つるぞ怪しけれ。

ト大ドロ〳〵、これにて小萬、瀧の中へ消える。煙硝火パツと立つ。差し金の小袖、下へ流れ落ちる。與八郎立ちあがり、お浪と顏見合せ、心得ぬ思ひ入れ。

與八　さてこそ、姫は。

ト思ひ入れ。山颪し、バタ〳〵になり、向うより半次郎、お半に次郎作附き、雲助二人と爭ひながら

出て來り

はんヤヽ、あなたは丹波

半次　與八郎さま。

與八　そちやお半。どうして爰へは。

雲三　さてこそ、うぬらは

ト三人かゝるを、半次郎は雲助一なポンと切る。次郎作は二を當てる。

與八　して、これへ參りしその仔細は

はん　いつぞや船にて海に入り、死ぬる命を吉田船。それゆゑ駿河の二丁町にて思はずも

次郎　それから爰へ、娘も共に同道して、あなたの兄御の定之進さま、彼の官太夫さまへ御養子、身持ち惰弱に御勘當。その折、元の水右衞門

半次　勘氣を免し、親もろとも、發足のあと、兄上には、苦痛の惱みに大井川、思はず受けたる鐵砲は

正しくあなたと存ぜしゆゑ

はん　勘當受けて他人となり、死ぬる今際に御遺言。敵は現在養父にて、證據といふは與惣兵衛さま

次郎　死骸の側に行き合はす、それを目掛けて打つたる手裏劍

半次　象眼入れたる手綱の小柄。まがふ方なき水右衛門。

はん　云ふに云はれぬ養子の御身。

半次　それゆゑわざと勘當受け、切腹すればあなたに越度、掛けざる上にこの樣子。尋ね求めて今日只今、寶を取得て與八郎どの、早々敵を討たれよや。

與八　初めて知つたその樣子。その敵とも露知らず、いはゞ主人の重の井姫まで

次郎　その姫君は權現坂、賽の河原の浪打ち際、姿變れど面差しは

半次　怪しの死骸は重の井さま。そんならこれも

與八　さてこそ我れに力を添へ、魂魄凝つて亡き魂の、假に姿を現はして、神へ祈誓の靈驗あらはれ、本復ありしこの上は、父の敵に妹が仇、いはゞ、主人の重の井姫。彼の權現の別莊にて

半次　名乘り合せて敵討ち。

なみ　其うちお子樣、この乳母が

次郎　親仁も、とも〴〵、痩せ腕ながら

半次 後詰めは即ち半次郎。
與八 これより直ぐに、跡追ひかけ
雲三 丹波、觀念。
ト與八郎へ切り附けるを、見事に切り下げる。此はずみに以前の守り袋を、懷より落す。半次郎、取つて
半次 ヤヽ、こりや失ひし九重の印。
はん 大事にかけて石部より
與八 さてこそ風波はその奇特。知らずに明かせし
はん わたしが守り。
半次 慥かに拙者が
ト懷中する。
與八 預けてこの身は
トあたりに落ちてある行衣を取つて抱へ、
これこそ幸ひ、出でたつ姿は敵討ち。

雲三　うぬ。

　ト　かゝるを突き廻す。半次郎ちよつと支へて

半次　爰かまはずと

　ト　切り下げる。

與八　ムウ。……さうだ。

　ト　山颪し烈しく、一散に向うへ入る。跡より次郎作、お浪、お半、子を抱へ、同じく向うへ入る。この時、杣二人出て

杣　うぬをやつちやア

　ト　かゝるを、よろしく立廻つて

半次　何を小癪な。

　ト　これより禪のツトメになり、二人を相手に立廻り、トゞ二人を追ひ散らし、下座へ入る。双盤になり、この道具變る。

　本舞臺、正面打拔き、賽の河原湖水の景色。上の方に高足、高欄附きの屋體、簾を掛け、一面に山の

張り物。下の方に現人神の宮居。この道具納まる。

ト大ドロ／＼になり、心火二つ燃える、屋體の簾上がると、内に水右衛門、着流し、刀を杖に突き、心火に目を附けてゐる。矢張り、ドロ／＼、向うより與八郎、簑を着たる好みの形にて、松明を持つて、ツカ／＼と出て來り、この心火に目を附け、兩人キツトなつて見得、誂らへの鳴り物になる。

水右　ハテ、心得ぬ二つの心火。一つはいつぞや遠州にて、殺害なせし松山にて、一つの炎は重の井姫と合體なし、我れに仇なすこの有樣。

與八　陽とはいへど、これ全く、陰氣の凝りたる炎の振舞ひ。

水右　何にもせよ、目に遮るはいまはしい。消え失せう。立去れ。今、目前に

ト切り拂ふ。大ドロ／＼、心火は消える。與八郎、上の方を見て

與八　ヤヽ、慥かに彼れこそ敵の藤川。

ト飛びかゝらんとするを、水右衛門、立ち身にてヂロリと見て

水右　これへ來るは丹波與八郎。何しに爰へは。

ト與八郎、詰め寄り

與八　親の敵の水右衛門。證據は覺えの手綱の象眼。

ト小柄を出す。

水右　さては汝は本復なし、これへ來れば、卑怯にも、何をか包まん三條にて、うぬが親の與惣兵衛を
また思はずも松山を、殺せし上に重の井姫、戀の叶はぬ意趣晴らし、なぶり殺しにぶッぱなした
は、いかにも藤川水右衛門だワ。

與八　さてこそな。

水右　名乘つて聞かせる上からは、潔く勝負を遂けん。

與八　望む敵の水右衛門、サア、尋常に

ト簑を脱ぐ、白裝束になり、キット見得。

寶の印も取り得し上は、誰れ憚らぬ丹波與八郎。幸ひ爰も現人神、神力應護の力を借りて

水右　小癪な一言。

ト時の太鼓はげしく、向うより半次郎に次郎作附いて出て

半次　日頃思ひし念願屆き、花待ち得たる再會に、その後詰めこそ半次郎。

次郎　附添ふわれは憲法次郎作。

水右　さては、うぬらも

與八　とく／＼この場で、

三人　いでや勝負を。

ト三人詰め寄つて見得。この時、勢子太鼓になり、下座より捕り手六人、簑笠にて取卷き、棹に並び

皆々　與八郎、動くな。

與八　何を小癪な。

水右　うぬら一々返り討ちだ。覺悟なせ。

トひらりと拔くな木の頭、與八郎、半次郎、次郎作、詰め寄る。水右衞門、刀を擔ぐ見得。これをキザミにて、カケリになり、よろしく、ひやうし

この幕、小田原の幕を引附ける。あとシヤギリ。

幕

二番目　序幕

鈴ケ森の場

役名――蜆の次郎吉。法華長兵衞實ハ助市。女非人、おはぎ。六郷の船頭、長。飛脚、早八。堤軍藏。非人、だぼ七。佛作助。權八姉、お十實ハ八重梅。白井權八。

二番目役觸れ濟むと、知らせに附き、馬士唄になり、向うより飛脚早八、狀箱を刀の鞘に附け、ホイホイ／＼と駈けて出て來り、幕の引附けへ入る。右の鳴り物にて幕明く。

本舞臺、正面黑幕、よき所に六郷渡し場と書きし榜示杭、葭簀張り西瓜見世、軒吊りの團子提灯、茶見世道具を飾り、爰に早八、倒れ居るを、旅人三人、西瓜屋の亭主、介抱してゐる。上の方に差出しの四人駕籠、金澤無宿蝮の次郎吉と記せし木札を下げ、軍藏は絆纏股引きの侍ひにて、人足大勢附き警固してゐる體。

旅人　飛脚どの／＼。

亭主　霍亂かも知れませぬ。飛脚どの／＼。

ト呼び生けてゐる。矢張り馬士唄にて、船の着きし體にて、向うより旅人の仕出し大勢、ワヤ／＼云うて下座へ入る。舞臺の旅人、これを見て

旅人　ヤア、船が着いたぞ／＼。

トわや／＼云うて向うへ走り入る。亭主、呼び生けてゐる。この時、仕出しに交り、四つ手駕籠一挺、垂れを下ろし、駕籠舁き、捨ぜりふにて舞臺へ來る。軍藏、思ひ入れあつて

軍藏　飛脚體の者、氣を失ひしは、暑氣中りと見える。

亭主　左樣でござりまする。コレ、飛脚どの〳〵。

ト呼ぶゆゑ、早八、心附いたる思ひ入れ。四つ手駕籠の人足、中の樣子を見て、下手へ入る。

早八　ヤレ〳〵、草臥れたので、眠つたと見えるわえ。

亭主　モシ〳〵、お前、氣が附きましたか。

軍藏　して、おてまへは、どれからのお飛脚でござるな。

早八　へイ、私しは小田原飛脚でござります。昨日箱根に、敵討ちがござりました。丹波與八郎といふ者が、藤川水右衞門といふ侍ひを討ちましたゆゑ、由留木のお役所から、江戸表の上屋敷へ、早飛脚でござります。

軍藏　それは貴公、いかい早足でござるの。

早八　イヤモウ、小田原から駈け詰めに參りましたゆゑ、息を切つて只今の氣絶。して、お前樣は。

軍藏　身共はこれなる駕籠の中、蝮の次郎吉と申す者、お代官所へ差出す盜人、最早入相でもござらう。殊更、鈴ケ森には白井權八、お仕置に罷りなり、當時至つてやかましい盜賊の詮議。……江戸表まで同道いたさう。

早八　それは忝うござりまする。そろ〳〵お供いたしませうか。……これは世話でござつた。

ト入相の鐘になり、囚人駕籠を人足舁き上げ、軍藏早八同道して下座へ入る。下の方に前の四つ手駕籠下ろしあり、駕籠の中にて

八重　駕籠の衆〳〵。

ト呼ぶゆゑ、亭主、聞き附け、駕籠の側へ寄り

亭主　あの衆は酒でも飲みに參つたのでござりませう。御用かな。

八重　アイ、ちつと頼みが。

ト合ひ方になり、垂れを上げる。中に葛飾のお十（實は八重梅）世話女房の拵らへにてゐる。

イエ、別の事でもないが、わたしが連合ひが、いま品川のお方に逢ひ、あの萬年屋へ、相談事で參りましたが、用が濟んだら、早う暮れぬうちに行きたうござんすが、ちよつと迎ひに

亭主　ハイ〳〵、左樣なら私しが、ちよつと川向うまで參つてあげませう。

八重　そんならどうぞ、大儀ながら

亭主　ハイ〳〵。ドリヤ、行つて參りませう。

ト時の鐘、浪の音にて、亭主、向うへ入る。八重梅、思ひ入れあつて

八重　今の話しは箱根にて、丹波藤川仇討ちの、噂と共に世間の風聞。鈴ケ森にて弟權八、死罪になり

しも知らぬ身の、浅ましい死を遂げたるか。思へば〳〵

　ト愁ひのこなし。この時、向うにて

長　エヽ、濟まねえぞ〳〵。

　トこれにて八重梅、垂れをおろす。てんつゝになり、向うより船頭の長、非人の形の佛作助を引立て出る。後よりおはぎ、女非人にて、留めながら出て來り

はぎ　コレサ〳〵、年寄りを捕まへて、其やうにする事はない。

作助　サア、わしが惡くば、何分あやまりませう。料簡なされて下さりませ〳〵。

長　イヤ〳〵、濟まねえ〳〵。コレ、親仁、てめえは非人ではねえか。その身柄ゆゑ、白井權八を死罪の時、槍を突いた、その穢れた身で、直ぐに大師へ參るといつて、おれの船へなぜ乘つた。船玉樣を穢したぞ。それぢやア濟まねえ〳〵。

作助　サア〳〵、御尤もでございます。わしも非人の役ゆゑに、よんどころなう勤めました。その穢れた身で大師樣へ參りがけ、船に乘つたは不調法。併しながら、私しも非人とは申す者の、心まで穢れはいたしませぬ。

長　ヤイ〳〵〳〵、われが心掛けが、穢れたか、穢れぬか、それをおれが知るものか。うぬ、ぶんの

めして、船玉様へ云ひ譯するワ。老ぼれ乞食めが。

ト打つてかゝる。おはぎ留めて

はぎ　コレサ〳〵。不請しなさいな。見てゐるも氣の毒だ。酒でも買つて濟む事なら、ちつとばかりは出して……と云ひたいが、爰にあるのは、コレ〳〵。

ト懷より財布を出し、中より藥包みを出し

この包みは、「へいさらばさら」といふ藥、金高な代物だが、買ひ手がなければ持ち殺し。マアマア、そりやア格別。その親仁どのを、見遁がしてやんなさいよ。

長　イエ〳〵〳〵。此奴は連れて行つて、渡し船を洗はせる。サア、來やアがれ〳〵。

はぎ　ハテ、不請してやんなさいな。

ト長を留めるとて、作の藥を落し、長を留めながら、おはぎ、下座へ入る。作助、殘つて

作助　今の男が腹立ちの、穢れし身より天罰の、いはゞ、主人の權八さまを

ト思はず振り返り、垂れを上げし八重梅と顏見合せ

ヤ、あなたはどうして。

八重　家來作助。

作助　姉御樣か。

ト迯げんとするを、八重擁、走り寄つて作助を捕へ

八重　エヽ、おのれはなア。

ト合ひ方になり

いかに、今では非人の身、刑罪の役目に當ればとて、家來の身として、權八が最期の穗先。おのれは天命知らずの人非人。……サア、弟を生けて返せ、まどうて返せ。エヽ、おのれはなア。

ト引退して叩く、作助、跡より入りし思ひ入れにて

作助　御尤もでござります。只一通りにお聞きあつては、若旦那を槍先で、家來が主人を成敗せし、その云ひ譯も私しが、手前勝手か存ぜぬが、助太夫どのを討つて立退く權八さま、それゆゑにこそ女房も、本庄どのに勤めし女、夫婦の仲も敵同士、兄の彌市も本庄の、下部でござれば女房に附け、離緣いたして今では他人、弟の次郎吉めは、生れ附いての惡黨ゆゑ、異見をくはせる其うちに、權八さまは牢舍と聞き、南無三方と非人となり、願つて死罪の槍の役。これと申すも急所を除け、皮肉を縫つてとゞめも刺さず、その上二十四時のうち、天水咽喉に通ると其まゝ、息吹き返すと聞きしゆゑ、それゆゑ主人を、勿體ない、刃向ひましたこの親仁。姉御樣、樣子と申す

はこの通り。御免なされて下さりませ。

八重　すりや、弟を助けん爲に、家來の身にて非人となり、願うて役目を

作助　お助け申して置くならば、金瘡平癒の良藥は、「へいさらばさら」は、少々此方に心當り、辰の年月日時揃ひし、血汐を加へ服する時は、きはめて全快。殊に、悴の次郎吉の、生れも丁度辰の年月彼奴を尋ねて血汐の役にと、思ふうちに捕はれて、最前、駕籠にてこの路を

八重　それぞ先刻に怪しき山駕籠。その囚人は、其方の悴の

作助　あの惡黨の次郎吉め。あのまゝやつては血汐の出所。これより跡を追ひ掛けて、人足、警護の侍ひまで、皆切り散らして、悴が生血、取り得て其まゝ權八さまの

ト後の見世より西瓜の庖丁を取り

これ幸ひのこの刃物。何卒首尾よう悴が血汐。

八重　かゝる忠義の其方とも、知らぬ女子の淺はかに、恨み云うたも……コレ、どうぞ弟が

作助　お氣遣ひなされまするな。跡追ひかけて悴が生血。

八重　とはいへ不便な

作助　おさらばでござりまする。

ト時の鐘になり、一散に下座へ入る。八重梅、跡見送り

八重　さはさりながら、その血汐、手に入つたりとて、加へる良藥。

ト思ひ入れ。この時、おはぎ、懐を、探し〳〵出て來り

はぎ　サア〳〵、あのマア大事な藥は、日坂の乞食小屋から、おれが手に殘つたを、賣らう〳〵と思ふうち、ツイ落したが、こいつはとんだ事をした。

ト尋ねまはり、財布を見附け、手早く取つて

イヤ、あつた〳〵。エヽ、有り難い。誠にこの藥を落したかと氣を打つやつサ。これが實の「へいさらばさら」。ドリヤ、歸りませうか。

ト行かうとする。八重梅、この樣子を窺ひゐて

八重　アヽモシ、お女中さん。今お前の仰しやつた、藥のその名は、何といふ名でござんしたな。

はぎ　エヽ、なにかえ。わたしの申した藥のこの名は、「へいさらばさら」と申します。金瘡に利く藥サ

八重　名は聞きながら、これまでに、ついに一度も見ぬ藥。ちよつと見せて下さんせ。

はぎ　ナニサ、お易い御用。別して變つた藥でもないのサ。これでござんすわナ。

ト藥包みを渡す。八重梅、取つて

八重　エヽ、そんならこれが

はぎ　金瘡に利く奇妙な薬サ。

八重　エヽ、忝い。天の與へたこの薬。もしや弟が蘇生もなさば、無うて叶はぬ。

ト思ひ入れあつて

こりやアわたしが貰うたぞえ。

ト上の方へ走り入る。おはぎ、恟りして

はぎ　アヽ、コレ〳〵、それをやつてよいものか。コレモシ、女中さん〳〵。

ト追ひかけて入る。時の鐘、浪の音にて、道具變る。

本舞臺、向う黒幕、上の方松の大樹。舞臺前は浪板、禪のツトメにて道具納まる。

トばた〳〵になり、上の方より人足四人駈けて出る。作助は庖丁を振つて出る。軍藏と長も、立廻りながら出る。唔がりのこなし。

作助　おのれ、囚人次郎吉を渡せ。さなきに於ては、片ッ端から

ト切り立てる。長、この聲を聞いて

長　イヤア、さういふ聲は、先刻に聞いた非人の親仁め。モシ〳〵、お侍ひ様、こいつは、非人の、人足でござります〳〵。
軍藏　非人とあらば合點ゆかぬ。囚人次郎吉渡せとは、さては、おのれは
作助　囚人に由緣の者。この暗がりを幸ひに、あの次郎吉を此方へ渡せ。ならぬと云ふと、刃向うても
ト庖丁を振り廻す。
長　ソレ〳〵、拔いてゐますぞ〳〵。
軍藏　憎くい非人め。ソレ、召捕れ〳〵。
皆々　ぶち据ゑろ〳〵。
ト禪のツトメになり、皆々息杖にて打つてかゝる。作助、滅多切りに、切り立て〳〵。皆々と爭ひながら下座へ入る。引違へて下座よりおはぎ、似寄りの財布を持ち、駈けて出て來り、跡より早八、追ひかけ來り、財布を奪ひ合ひながら
早八　ヤイ〳〵、女、これはおれが小遣ひの殘り。その財布を、どうする〳〵。
はぎ　どうするとは、こりやアわたしが大事の「へいさらばさら」といふ藥。今の女に取られたを、お前が持つてゐるゆゑに

早八　コレサ、藥とはなんの事だ。藥ではない、小遣ひだワ。

はぎ　エヽ、おれが藥だ。

早八　イヽヤ、小遣ひだよ。

ト兩人爭ふうち、早八、件の狀箱を落し、兩人向うへ駈けて入る。これにて正面の黑幕切つて落す。

本舞臺、眞中に權八の磔刑柱。俵を掛けし死骸殘りあり。左右に拔き身の鎗を立て、捨て札、石の地藏。下の方よき所に件の囚人駕籠。この側へ飛脚の狀箱落ちてある事。うしろ黑幕、時の鐘、かすめたる浪の音、雨車にて道具納まる。本雨降り出す。駕籠の脇に、八重梅の死骸、三筋にいゝ場と染めし手拭にて締め殺したる體。よきキッカケに一つ鉦、凄き合ひ方になり、死骸に掛けし俵落ちると、白井權八、淺黃の小袖に、丸に井の字の紋を紺にて摺り込みし着附け、磔刑より蘇生して心附きし體にて目を開く。これにて囚人駕籠の垂れを上げる。蝮の次郎吉、誂らへの拵らへ、口におはぎの取られし藥の財布を咬へ、繩にかかりし體にて、出かけて思ひ入れ、これにて空へ月を引出す。双方、思ひ入れあつて

次郎　女が持つた財布のうち、慥かに金と思ひの外、役にも立たぬ藥の包み。アヽ、これに附けても思

はぬ殺生。
ト八重梅の死骸へ思ひ入れ。

權八 身は黃泉へ赴けど、天水咽喉へ通ると其まゝ、息吹き返し蘇生なす。それも急所を除けし槍疵。殊にとゞめを刺さざれば、運に叶うて今一度……これといふのも、家來が働らき。

次郞 締め殺したるこの女、道連れの來ぬうちに、殊には、駕籠を破つたからは
ト繩を取り捨て、行かうとする。權八、思ひ入れあつて

權八 若いの、待つた。
トこれにて次郞吉振り返り、思ひ入れ。

次郞 木の空からも、聲掛けて、待てとは、わしか。

權八 槍疵數ヶ所受けながら、天の助ける天水の、咽喉を通ればこの如く

次郞 よみがへつた仕合せは、目立たぬうちに
トこの時非人一人窺ひ出て

非人 生き返つたら
ト手早く槍を取つて突きかゝる。繩切れて、權八その槍に取り附き、飛びおりる。權八、槍を取捨て

ろ。非人、組み附き、立廻りのうち、片袖を引きちぎる。權八、投げやる。次郎吉、捕へて

次郎　殺生ついでに、此奴も往生。

ト締め殺す。非人は片袖を持ち、落入る。次郎吉、死骸を投げる。これにて片袖をあたりへ落し、倒れる。

權八　寶詮議の其ために、與八郎どの、拙者まで、心にもなき盜賊の、運命拙なくお仕置に、なりしこの身も又ぞろや。それにこなたは繩抜けの、その働きは、天晴れ名高き盜人の

次郎　ナニサ、そんな名のあるわしでもない。異名も蝮の次郎吉といふ、ちよつくら持ちの小野郎だが膽があるね。昔をいはゞ、熊坂が、兜頭巾に身を固め、引廻しの馬に乘つて來ようとも、びくともするのぢやァごんしねえ。阿波座烏は難波潟、五つ連れたる雁金も、五人男は根が盜人、藪鶯も京育ち、慇懃形の袴垂、お江戸でいはゞ、評判の、引窓與兵衛はわしが親分、夜盜の中の極惡黨、今にもづきが來ようかと、影膳食つて、待つてゐるのサ。

權八　この身も命惜しまねど、尋ぬる品を取り得るまで、姿を變へて今一度。さはいへ、數ケ所のこの疵の、平癒するまで折入つて

次郎　お頼みならば頼まれます。後へは引かぬわしが氣性。殊に、前髮、優形な、其となりは女も同

然。幸ひ爰で殺したる、女が着るもの風ふせぎ、人目を忍んで

ト件の死骸の上着を取つて、手傳うて着せる。權八は頭へ、死骸の懐にありし袖頭巾を冠り

權八　一旦爰を

ト行かうとして、落ちてある狀箱を見附け、取つて

こりや狀箱が

ト開き、封を切つて月明りにて讀む事あつて

ヤヽ、こりや箱根にて與八郎、九重の印取返し、親の敵水右衛門、討ち留めたるを知らせの文言、さすれば今に知れざるは、雷丸の短刀ばかり。

次郎　その短刀は由留木の重寶、大江の家では九重の、印を尋ねてお互ひに、替へ〴〵にして差上げる、それまで死なれぬお前の命。

權八　力と頼み、その品を

次郎　取り得るまでは、互ひに江戸で

權八　マア、それまでは八幡の、森で支度を。

ト兩人、思ひ入れあり。

次郎 金と思つて殺した女、役にも立たぬこの薬。

ト あたりへ捨て

サア、歩いて見なさい。

ト時の鐘、浪の音になり、次郎吉は權八の手を引き、兩人向うへかゝる。揚げ幕より法華長兵衛（以前の助市）着流し一本差し、三度笠を持ち、藤倉、大師參りの歸りにて出て來り、よき處にて摺れ違ふ事。長兵衛は舞臺へ來り、月明りにて、件の片袖と、藥の入りし財布を見附け、これを拾ひ

長兵 財布のうちには藥の包み、殊に、ちぎれしこの片袖。

ト女の死骸を見附けて

ヤヽ、こりやコレ爰に女の死骸。

ト顔を、よく／＼見る。兩人は花道へかゝる。

ヤヽ、慥かに女房。コレ、この手拭で

ト惆り、抱きかゝへる。この時、次郎吉は小石を取つて打ち附ける。長兵衛、身をかはす。兩人は向うへ遁がれ入る。長兵衛キッと見得になり、よろしく

幕

一寸口上

これより末、品川より日本橋までの仕組み、正本これなく、此幕にて打出しに相成り申し候間、

また／＼お斷り申上候。

千穐萬歳大々叶

阿國御前化粧鏡

（おくにごぜんけしやうかゞみ）

阿國御前化粧鏡

第一番目　三建目

佐々木館の場
伊吹山の場

役名――佐々木家老、小栗宗丹 實ハ 石見太郎左衞門。駿河前司久國。狩野四郎次郎元信。犬上團八。石塚鬼藤太。赤村郡藏。腰元春野 實ハ 銀杏の前。腰元、夏野。田舍娘、お玉 實ハ 勝元妻遠山。那迦犀那尊者 實ハ 竹杖外道。天竺德兵衞 實ハ 赤松次郎政則。

本舞臺、三間の間、中足の御殿、向う銀襖、四ツ目結ひの紋ちらし。前面、上下綟子の障子。左右の見切り、松の立ち樹。よき所に吳竹の一むらあり。爰に夏野、振り袖、腰元の形にて、三方へ錫の瓶子を戴せ、持つてゐる。春野、留め袖の腰元の形にて、三方に供餅を戴せ、これを持ち、此方に鬼藤太、郡藏、麻上下、大小にて、めい〳〵島臺を持つて立ちかゝりゐる。管絃にて幕明く。

夏野　今日しも若君豐若さま、當お館の氏神にて、多賀明神さまへのお宮詣で。

春野　それゆゑ祝ふ神酒供餅、氏神様へ捧げ物。

鬼藤　疾にもかゝる御祝儀の、有るべき筈を御父君、頼賢公の逝去といひ

郡藏　御臺所も打續き、産後に過去り給ひしゆゑ、御忌明けの今日の日を、直ぐにめでたく宮參り。

鬼藤　卽ち壽長久を、祝すしるしのこの島臺。

郡藏　執權、小栗宗丹どのへ

兩人　この由、取次ぎ下されい。

トこの時、奥にて

宗丹　オヽ、委細これにて聞取り申した。

ト管絃になり、宗丹、白髪、法眼袴にて出る。これにて皆々座につく。

有爲轉變とはいひながら、御主人佐々木頼賢公、まつた御臺所にも、思ひ設けぬ御逝去の後、一國に暫しのうちも、主なくては亂の基と、日を以て月にかへ、御忌明けを待つたる今日、若君にも氏神へ、宮詣で遊ばされ、御機嫌ようスヤ／＼と、身共が膝にて只今御歸館。各々方の獻上物、後方御覽に入れるでござらう。

兩人　萬事よろしう賴み入ります。

ト この時、向うにて

呼び 駿河の前司久國さまの御入り。

ト呼ぶ。

宗丹 ナニ、久國さまの

皆々 お入りとや。

ト太鼓、謠になり、向うより久國、長上下、大小、燕手にて出て來り、花道にてとまり

久國 今日嫡子豐若どの、多賀明神へ初めての、宮詣でと聞きしゆゑ、一家のちなみ前司久國、祝儀を述べんと、わざ〳〵これへ。

宗丹 誠に、御一家の睦み捨て給はず、よくぞや御光駕。

皆々 まづ〳〵これへ。

久國 罷り通るであらう。

ト太鼓、謠の切れにて、舞臺へ來り、二重へ上がる。

して、豐若には、はや下向おしやつたか。

宗丹 御意の通り、最早御下向。

久國　吉凶禍福は是非ないもの。大名の腹に宿りながら、三日も親に添ふ事か、藁の上から死別れ。さりとは笑止な豐若が身の上。これも何ぞの罰でがなあらう。

ト宗丹、女形、思ひ入れ。

宗丹　その儀について、久國さまへ御願ひ。何卒當家の跡目相續、異議なく嫡子豐若へ、仰せつけられ下さるやう、室町御所の御執成し、これのみ臣が一つの願ひ。

夏野　數なりませぬ私しどもゝ、お館に勤めますれば、朝夕ともにそれが氣がかり。

春野　どうぞ首尾よう御家督を

鬼藤　豐若へ賜はるやう

郡藏　家中の者ども一統に

宗丹　偏へに願ひ

皆々　奉ります。

久國　イヽヤ、その取次はエヽなるまい。七歳未滿といふ内にも、まだ生けうやら死なうやら、何とも知れぬ水子の豐若。治に居て亂を忘れず、今にも叛逆謀叛とあらば、士卒を指揮する一國の主。赤子で事が濟まうと思ふか。そんな願ひは罷りならぬワ。

宗丹　サア、御意ではございますれど、そこが公、寛仁の計らひ。
久國　ヤア、勸進でも勸化でも、そんな願ひが叶ふものかえ。
夏野　すりや、跡目のお願ひは

ト思ひ入れ。宗丹、此うち思ひ入れあつて

宗丹　誠に、此方の願ひに紛れ、お宮詣での御祝儀と、御入來の久國さま……ハヽヽヽヽ、何卒奥にて御酒一獻、きこし召し下さりませう。
久國　イカサマ、一家のちなみと罷り越し、祝儀の杯、取上げぬも何とやら。然らば奥にて、宗丹、一獻。
宗丹　有り難う存じます。ソレ、腰元はじめ各々にも、久國さまを御もてなし。
皆々　畏まりました。
宗丹　左樣ござらば、久國さま。
久國　案內しやれ。

トまた管絃になり、久國、奥へ入る。皆々、下座へ入る。宗丹殘り、「ムウ」と思ひ入れ。てんつゝになり、向うより團八、麻上下、大小にて、跡より遠山、田舍女の拵らへ、藁苞を脊負ひ出て來り

遠山　申し、お侍ひ樣、譯も云はずに來い〳〵と、こりや何の事でござりますえ。

團八　ハテ、何も其やうに怖がる事はない。御家老に逢へば直ぐに解る事。サア、身共と一緒に、來やれ來やれ。

ト矢張りてんつゝにて、舞臺へ來り

これは〳〵宗丹どの、これにござるか。今日やう〳〵、三井寺の門前で、一疋捕へて連れて參つた……サア、そこへ出やれ〳〵。

ト遠山が手を持つて引出す。遠山、宗丹を見てオツ〳〵と

遠山　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

ト宗丹、遠山を見て

宗丹　すりや、其方が、お乳をあげる奉公人か。

遠山　イエ〳〵、わたしは奉公人ぢやござりませぬ。久しい願ひで播州から、祇園會を見物ながら、竹生島のお開帳は、六十一年目でなければ無いとの事ゆゑ、お參り申しに出ました者。ハイ〳〵、どうぞ直ぐに、お歸しなされて下さりませ。

團八　コレサ〳〵、さりとは惡い料簡だ。なんの、播州の田舍に住んで、汐風に吹かれてゐやうより、

お屋敷に奉公すれば、べんべら物を引ッ張つて、旨い物は喰ひ次第。宗丹どのゝ目にとまれば、
また來年給金の、二分や三分は上がるといふもの。

ト遠山、思ひ入れ。

遠山　ムウ、そんなら爰は佐々木のお家。あなたは小栗宗丹さまかえ。

宗丹　いかにも身共は小栗宗丹。そちや播州の女子とな。

遠山　ハイ……成る程、思うて見れば、痩世帶しようより、いつそ今日から……御奉公いたしませう。

團八　コレ、口入れに二分出るぞよ。

宗丹　身が名を聞いて早速に、奉公いたす賤の女、爪はづれといひ器量といひ……女、請け狀いたして
遣はさう。

ト合ひ方になり、有りあふ硯箱を引寄せ、持つたる扇子へ江口の繪を描いて
極めの一札。

ト遠山これを受取り見て

遠山　西行法師に江口の遊女。アノこれが、請け狀とわえ。

宗丹　身共が妾に抱へたい。

遠山　エ。
團八　コレサ、宗丹どの、よい年をして、あの女を
宗丹　サア、悟り切つたる道心にも、迷ふは煩惱、ましてや凡夫。
遠山　ほんに、嘘にも草深い、田舍育ちのわたしをば、思うて下さりました扇子の請け狀。とつくり思案いたした上
宗丹　返事いたすか。
遠山　宗丹さま……後程お目にかゝりませう。
ト唄になり、遠山、苞を抱へ、下座へ入る。
團八　宗丹どの、貴殿は、どういふ料簡でござる。
宗丹　仔細といふはあの女、宗丹と聞き忽ちに、奉公するは合點がゆかぬ。それゆゑ彼奴を、糺して身元を
團八　慥か播州者とやら。
宗丹　もしや赤松
ト團八と顏見合せて思ひ入れ。

團八　それについて宗丹どの。かねての企て通り、頼賢夫婦を、おッ片附けてしまつた上からは

宗丹　コレ……成就の上は、かねて埋めし一品を、掘り出して、湖水へざんぶり。

ト團八呑みこみ、柴垣の下を鐺にて掘り、調伏の箱を出し

團八　誠に、名手と呼ばれし宗丹どのゝ、丹誠こめて描かれし、頼賢夫婦がこの人形へ、岩倉の夜叉丸が、祕密の奇特忽ち現はれ、二人の主人はコロリバッタリ、殘るは水子のあの豐若。

宗丹　捻り殺すは易けれども、只氣ぶさいなは狩野の元信。殊に將軍義政公、北山金閣に習らひ、東山に銀閣寺を造營、天井妻戸の繪は、即ち元信、某承れば、何卒一人功を立てんと、四郎次郎を自滅させる、その工風もして置いたれば、しまうて取れば諸事萬事、宗丹が心のまゝ。

團八　して、元信を自滅の工風は

宗丹　コリヤ。

ト囁く。

團八　流石は老功、出來ましたわえ。

ト向うにて

呼び　四郎次郎元信出仕。

ト呼ぶ。

宗丹　犬上團八、その一品を、ちつとも早く

團八　心得ました。

宗丹　ぬかり召さるな。

ト小太鼓の樂になり、宗丹、奥へ入る。團八、頬冠りして、箱を持ち、花道へかゝると、向うより元信上下衣裳にて、三方へ系圖を戴せ持ち出で、團八に目を附け、ツカ〳〵と押し來り、ちよつと立廻りあつて、團八を當てる。團八「ウン」と箱を取落す。元信、取上げて

元信　ムウ、白き箱を、黄なる絲にて結びしは木刻土。

ト思ひ入れあつて中より人形を出し

こりや御主人頼賢公御夫婦を、呪咀なせしこの願書。石見太郎左衛門と記せしは

ト思ひ入れ。この時、團八、心附き「それを」とかゝるを支へて

いま曲者が所持の一品、元信早速取り得てござるが、犬上氏には覺えがござつて、それゆゑお手を支へらるゝか。

團八　ヤ。

元信　中はいぶせき呪咀調伏……よも知つたとは申されまい。

團八　成る程、身共は存せぬ品……ではござれども、ちよつと拜見。

ト又かゝるを元信、腕首を捕へて

元信　イヤ、御存じなくば御披見御無用。但し、覺えがござつてか。

團八　サア。

元信　知らずばそれまで。無作法千萬。

ト團八を突きはなし

こりや元信が、納め置きます。

ト懐中する。團八、思ひ入れ。

團八　然らばどうとも、勝手次第サ。

ト空うそぶく。合ひ方になり、奥より春野、出て來り

春野　團八さま、これにお出でなされますか。久國さまが、何やらあなたに

團八　ナニ、久國さまが、身共に用とな。左樣ござらば元信どの。

元信　團八どの。

ト團八、ちよつと元信の懷へ思ひ入れあつて

團八　これにゆるりとござらつしやい。

ト管絃になり、團八、心を殘して下座へ入る。あと合ひ方。

元信　元信この程、お家の系圖を守護しまゐらせ、石山寺の觀世音へ、若君安寧長久に、御成長を祈りの爲、三七日の通夜のうち、ついぞ館に見馴れぬ女、そちや今參りの腰元か。

春野　左樣にござります。この程若君樣へ、お宮仕へ致しました、春野と申す不束者、お見知りなされて下さりませ。イヤ申し、元信さま、いま奥にて承りますれば、御臺樣のお妹御、銀杏の前さま東よりお上りあつて、まだあなたにはお目見得なされぬとの事ながら、いつ垣間見遊ばしてや、それは〳〵御執心。今にも元信さまお歸りあらば、是非とも女夫になり遊ばすと、お噂でござりましたぞえ。

元信　ナニ、アノ、銀杏の前さまが

春野　アイナア。

元信　それは一興。元信、御別館に御座ありし、お湯殿お國御前さまのお心に、道ならずも從ひしは、かたましきお心より、隱し置かれしお家の系圖、過ちなきやう取り得んと、忠義の計略、何しに

陪臣の身を以て、主君の片割れ、銀杏の前さまと……そりやどこまでも、お斷わり申しあげねばならぬ事ぢや。

春野　イエ〳〵、あのやうに思ひこんでお出で遊ばすものぢやもの、どうして其やうな事では、御得心がござりますまいわいなア。

元信　ぢやと申して勿體ない。殊には朋輩の思惑、慾に耽りし道知らずと、うしろ指さゝるゝも殘念。ハテ、どうぞお斷わり申す仕樣が

春野　モシ〳〵、なんと、斯うなされてはどうでござりませう。今のうちに誰れなりと、女房にお持ちなされて、下地から云ひ號けぢやと仰しやつたら、なんぼ主でも、ぬしある身に、無理に女夫にならうとも

元信　したり、そりや何よりの思ひつき。それでは是非とも仰せあるまい……とは云ひながら早速に

ト春野を見て

なんと、物は相談、そもじ、身共が云ひ號けの、女房になつては下さるまいか。

春野　サア、差當るあなたの御難儀、そりやモウ、どうなりでござりまするが、せう事なしの當座遁がれ、末も結ばぬ緣定めは

元信　イヤノヽ、そもじさへ得心なら、某に異心は無い。盡未來まで變らぬ夫婦。

春野　そりやアノ、御眞實でござりますかえ。

元信　なんの僞り、畫筆を取らぬ法もあれ。

春野　そんなら今から

ト思ひ入れ。

元信　女房ども。

春野　オヽ嬉し。

ト抱きつく。此うち下座より鬼藤太、郡藏、出かけ、窺ひゐて、この時、ツカ〳〵と兩人を捕へて

兩人　元信、お立ちやれ。

ト兩方より手を取る。元信、其まゝ兩人を投げのけ

元信　こりや何ゆゑ某を

鬼藤　御殿に於て不義の科。

郡藏　委細は後で立聞いたワ。

兩人　但しは不義でござらぬか。

元信　サア。

ト つかへろ。

兩人　なんと云ひ譯はあるまいがな。

ト この時、奧にて

宗丹　兩人ともに、扣へ召されい。

元信　ヤア、あの聲は

兩人　宗丹どの。

ト 襖の内にて

宗丹　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

ト 管絃になり、宗丹、蕗の臺を持ち、夏野・長柄の銚子を持つて出てくる。皆々、思ひ入れ。

皆々　これは。

宗丹　元信どの、貴殿お湯殿お國御前の、取り隱されしお家の系圖、心ならずも從ひ參らせ、無事に取り得て歸られし段、莫大の功とあつて、その節御臺の妹君、銀杏の前を宿の妻に、下し賜はるべきところ、御主君方の急變ゆゑ、これまで延引。今日若君、お宮詣でのおめでたに、取交ぜての

御祝言。

鬼藤　誠にこれが、槍先の功名とやら。

郡藏　さりとは、お羨やましい儀でござる。

元信　こは冥加なき仰せではござりますれど、銀杏の前さまと御縁を結びます儀は、餘りと申せば身の恐れ、御辭退申しあげます。

宗丹　アヽ、イヤ〳〵、なんぼ左樣申されても、御臺樣の御遺言、殊には貴殿、銀杏の前さまと、はや語らひ召されたではござらぬか。

元信　ナニ、アノ拙者が、銀杏の前さまと

夏野　サア、銀杏の前さま、まづ〳〵あれへ。

ト合ひ方になり、春野を上へ直す。元信、悄りして

元信　すりや、腰元の春野といひしは

宗丹　御臺所の妹君

夏野　銀杏の前さまでござります。

ト元信「エヽ」と當惑の思ひ入れ。

鬼藤　さうとは存ぜず我れ〳〵ども

郡藏　只今の無禮の段

兩人　眞平御免下さりませう。

春野　なう元信、不束な自らへ、畫筆取らぬ法もあれ、盡未來まで變らぬ女夫と云やつたからは、否はあるまい、嬉しいぞや。

元信　誠に、思ひがけないと申さうか。何とも云はれぬこの場の仕儀。露存ぜぬとはいひながら

宗丹　辭退召さると、主命にも背くの道理。

元信　ではござらうが、お請けの儀は

兩人　もどかつしやれば不義の科人。

元信　サア、それは

春野　女夫になつてたもるかや。

元信　サア

夏野　畫筆の誓ひがございます。

元信　サア

皆々　サア〳〵

ト元信思ひ入れあつて

元信　斯くまで思し寄せられし儀……元信、お請け仕つてござります。

ト平伏する。

宗丹　すりや、得心召されしとな。それで身共も安堵いたした。

夏野　さぞあなたにも、お嬉しうござりませう。

宗丹　サヽ、お土器を取上げあつて、元信どのへ

トこれより下座にて、めでたき謠になり、此うち杯ごとあつて

めでたい〳〵。幼主で立てぬ佐々木のお家、銀杏の前さまと、御婚禮濟みたる上は、今日よりしては、家督は狩野元信どの。

鬼藤　我れ〳〵が爲にも御主君

皆々　恐悅至極に存じます。

ト奥にて

久國　佐々木の家督定まる上は、お預かりの日月の印、久國、内見いたすであらう。

ト管絃になり、久國出る。

元信　すりや、久國さまが

久國　管領山名宗全が内意を受け、佐々木の家督相續の砌り、先例に任せ、預かるところの日月の印、内見いたせと、申し越されし前司久國。サア、とく〱寶をこれへと申しやれ。

宗丹　委細畏まつてござります……誰れかある、日月の印、急いでこれへ。

團八　心得てござる。

ト管絃になり、團八、三方へ印の箱を載せ、持つて出て來り、久國が前に置いて扣へる。

宗丹　足利の御先祖尊氏公より、代々當家に預かるところの、日月の印、イザ、お改め下さりませう。

久國　ドレ。

ト箱の蓋を取つて改める。二つの印無きゆゑ思ひ入れ。

鹿を指して馬と云ひし趙高、鷺を烏にまだしもの事。宗丹、こりや其方の權を示さんと、この久國を馬鹿にするのか。

宗丹　アヽ、イヤ〱、全く以てゝして、日月の印が、どうぞ致しましたか。

久國　どうぞどころか、眼を明いて見さつしやれ。

元信　ヤヽヽヽ、こりや大切な日月の御判

、投げ出す。元信、宗丹寄つて中を改め

宗丹　紛失なしたか。

元宗　ホヽホイ。

久國　紛失なせば家は斷絶、申し譯には家督の元信、切腹せずば相成るまい。

春野　エヽ。

元信　すりや某に

ト春野「モシ」と取附くを顔で押へ

承知いたしてござります。

、宗丹へ思ひ入れ。此うち宗丹こなしあつて

宗丹　守り藏しき日月の印、外より忍ぶ盜賊の、奪ひ取るべきいはれなし。察するところ犬上團八

團八　コレサ〳〵、宗丹どの、何を身共が知るものぞ

宗丹　知らぬとは、云はさぬ〳〵。最前までも別條なき、御判は汝が持參のうち、盜み取つたであらうがな。

團八　これは迷惑、神以て、親の頭に松三本、一向身共は存ぜぬ事。
宗丹　一應では白状せまい。ソレ、兩人、繩打ち召されい。
兩人　ハツ。

ト立ちかゝる。

團八　アヽコレ滅多な

ト此方へ逃げるを宗丹、裾をかい取つて押へ、下緒にて縛り、兩人へ渡す。

イヤ、とんだ目にあふものだ。
元信　ハツ、久國さまへお願ひ。全く元信、身命を惜しむにはあらねども、とくと寶を詮議なし、その上にては覺悟の切腹、暫しの御宥免。
久國　イカサマ、夕立雲の出たやうに、降つて湧いた俄の切腹、暫しの宥免願ふも尤も、暮れ六ツまでに有無の返答、一家のよしみに待つてくれうワ。
元信　すりや、暮れ六ツまでに
宗丹　寶の行くへ。
春野　六ツというても今一時。

久國　泣くか笑ふか。
元信　生死二つを
宗丹　久國さまには奥の間で
久國　元信、返事を待つてゐるぞよ。
鬼郡　立たう。

ト唄になり、久國先に春野、宗丹、夏野、奥へ入る。鬼藤太、郡藏、團八を引立て、下座へ入る。元信殘り、思ひ入れあつて

元信　合點のゆかぬ宗丹が今日の計らひ。銀閣寺造營も、おのれ一人が功になさんと、我れをば拒む日頃に引かへ、銀杏の前と退引きさせず、婚姻を取結びしは、もし預かりの日月の印、失せしを知つて若君の、お命助けん其ために、我れを計りし忠義の手段か。何はともあれ暮れ六ツまでに、寶出でねばこの身は切腹、命は露塵、お主の爲、惜しからねども宗丹の、善か惡かの心の底、ハテ、尋ね知りたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。此うち遠山、下座より出かけ、これを聞いてゐる、この時、兩人顏見合せ、元信ハツと思ひ入れ。遠山、何氣なき體にて、莨盆を持つて、元信が前に置き、下手へ下がる。

そちや田舍の女子さうなが、何用あつてこれへ參つた。

遠山　サア、アノ、わたしは……オヽ、それ〳〵、慥か若君樣の、お乳でござりますわいな。

元信　ナニ、慥か若君樣のお乳……ムウ、お乳であつたなア……コリヤ〳〵、無心ながら、茶を一つ貰ひたい。

遠山　ハイ〳〵、畏まりました。

ト此方へ來る。元信、後より拔討ちに切りかけるを、遠山、身をかはし、附入り、チツと留めて

元信　こりや何ゆゑに。

お家の大事、聞いたる女。

ト振りほどいて又切りかける。遠山、以前の苞にてシヤンと受けとめる、此はずみに苞の中よりバラリと一軸出る。元信、上よりこれを見て

遠山　サア、今日引越しの奉公人、おはもじながら、わたしがお土產。

この一軸は

ト元信、一軸を取上げ見て

元信　こりや義政公が御祕藏ある、土佐光信が鯉の一軸。さては入込む其許は

遠山　イエ、矢ッ張り賤の女、田舎の女。

元信　ハテナア。

ト思ひ入れ。合ひ方。下座より夏野出て

夏野　元信さまへ申しあげます。暮れというても間のない事ゆゑ、銀杏の前さまの殊ないお案じ。もし少しでもお心當りがござりまするか、問うて見いとのわたしがお使ひ。

元信　成る程／＼、女心に案じは尤も、さりながら、某思ふ仔細もあれば、さのみ氣遣ふ事はない。イヤナニ、夏野、某、名古屋山三方へ、お國御前へ隨ひし、惰弱の入り譯、お家の事、認め置きしこの密書。

ト手紙を出し

心知つたる其方へ、頼みの使ひ、元依へ、なんと届けてはくれまいか。

夏野　そりやモウ、わたしに叶うたお使ひ、隨分ともに、心得ました。

ト手紙を受取る。

元信　これにつけても、當途なき寶の行くへ。

遠山　そこが膝とも談合とやら、お役に立たずと打明けて、お話しあらば、又よい思案も

元信　そんなら奥で、とつくり仔細を

夏野　わたしは直ぐに元春さまへ。

元信　ちつとも早う

夏野　心得ました。

遠山　元信さま。

元信　賤の女、奥へ。

遠山　マア、お出でなされませ。

ト唄になり、元信先に遠山、一軸を抱へて奥へ入る。夏野殘つて、手紙をくはへ、帶をゆりあげ、向うへ行かうとする。此うち團八、ツカ〳〵と出て、この手紙を見附け、其まゝ手をかける。夏野、振り拂つて團八を見て

夏野　ヤア、お前は犬上團八さま、こりや縛しめを

團八　べら坊め、繩をかけるもかけられたも、ありやア曰くのある事だ。マア、その譯よりは元信から山三へ送るその手紙。

ト又かゝるを突き廻し

夏野　イエ、こりやわたしが里へ暑さの見舞ひ。そんな手紙ぢやござんせぬ。

團八　そんなら猶さら中の文言

夏野　ならぬわいなア。

ト行かうとする。團八、引留める。序の舞になり、ちよつと立廻りあつて、トヾ夏野、有あふ莨盆の火入を打ちつける。これにて團八、タヂ〳〵となる。此うち夏野、花道へかゝる。團八、見附けて、兩人「ソレ」と早三重になり、夏野が行く跡を團八、追ひかけて向うへ入る。管絃になり、奥より久國、下座より宗丹、窺ひ出て來り

宗丹　久國さま。

久國　小栗宗丹。

宗丹　奥にて申しあげたる通り、元信、自滅の上からは

久國　義政公より嚴命ある。銀閣寺の天井妻戸、描くは宗丹一人の功し。

宗丹　忝い。

久國　して、隱し置く日の印は。

宗丹　即ちこれに。

ト錦の袱紗に卷みし日の印を出し

某奪ひ取らんずと、思ふに先立ち何者やら、月の御判は疾に紛失。この御判は久國さまへお預け申し、その上にて月の御判の在所も知れ、二品揃ひしその時は、佐々木の家は宗丹へ

久國 その儀も久國、承知いたした。

宗丹 然らば日の印、イザ

ト久國へ渡す。

久國 しつかりと預かつた。

ト日の印を懷中する。この時、暮れ六つの時計鳴る。

宗丹 ありやモウ暮れ六ツ。

久國 元信、返事は、トゞ、どうだ。

ト奧にて

元信 その御返答、それへ參つて、申しあげるでござりませう。

ト管絃になり、元信、白無垢、水上下の形にて出てくる。宗丹見て、ニッコリと思ひ入れ。久國、元信の形を見て

久國　貰ひ行くへ知れぬゆゑ、覺悟の切腹、よい態〳〵。繫がるよしみ某が、介錯は致してくれう。

ト宗丹、愁ひの思ひ入れ。

宗丹　天に不時の風雨あり、人に不時の愁ひあり。銀杏の前が其許を、戀ひ慕はるゝを便なく思ひ、まつた若君の御目叶はず、彼れこれ以て宗丹が、お家のお爲と存じたが、元信どのゝ身の上に、かかる珍事は寶の紛失、それとも知らず媒介した、老が命で事濟まば、貴殿に代つて切腹なし、せめて麁忽の云ひ譯せんに、何を申すも表沙汰、悔んで返らぬ某が、心の内の本意なさを、推量して下されよ。

ト元信、思ひ入れあつて

元信　宗丹どの、こは何事。許らず某切腹も、こりやコレ定まる過去の宿業。とは云ひながら豐若君の疑ひに代るは身の本望。何卒お家の再興を、これのみ頼み入ります。

宗丹　そりや何がさて某が、天地の間を駈けめぐり、千辛萬苦いたしても、若君再び世に立て申さん。その儀は氣遣ひ召さるゝな。

久國　ヤア、何べん〳〵と悔み事、キリ〳〵腹を切つてしまへ。

元信　ナニサマ、猶豫は無禮の至り……誰そあるか。用意の三方。

ト下座にて

遠銀　畏まりました。

ト合ひ方になり、銀杏の前、三方へ最前遠山が持ちし一軸を載せ、持ち出で、元信が前に直す。遠山三方へ九寸五分を載せ、持ち出で、宗丹が前に直し、下手へ下がる。この短刀に何やら巻いてある。宗丹、見て、恟りして

宗丹　アヽ、コリヤ〳〵、身共へ何ゆゑ九寸五分。

遠山　サア、科はその身に覺えがあらう。

宗丹　ヤヽ、なんと申す。

ト久國、元信が三方の一軸を見て

久國　見れば元信へ据ゑた三方、九寸五分と思ひの外

遠山　それこそ武將義政公より、銀閣寺の妻戸を描く、手本に賜はる土佐光信が、昆明池の鯉魚の一軸

久國　すりや、これが

宗丹　ヤイ〳〵、切腹なすはあの元信、鯉魚の手本は身共であらう。三方を取違へたか。うろたへた女め。

遠山　ヤア、うろたへ者とは、慮外であらう。

　　　ト宗丹、思ひ入れ。

久國　して、慮外と申す、そちや何者。

遠山　管領細川修理之助勝元が、妻の遠山。

　　　トしやんと見得。

久國　ヤ。

　　　ト思ひ入れ。

遠山　皆、許して下さんせ。

　　　ト鼓の入りし本調子の合ひ方になり、遠山、ズッと上へ廻り、床几へかゝる。

久國　その勝元の御内證が

宗丹　何ゆゑ賤の

久國　姿と變へしは。

遠山　成る程、合點のゆかぬは理り。夫勝元、心を附けて窺ふところ、佐々木の執權宗丹こそ、主人の家を亂すのみか、天下を騒がす兆ある者。正しく彼れこそ赤松の家臣、石見太郎左衛門景純なら

ん。其方、賤の姿となり、實否を糺し來れよと、指圖に任せ入込む自ら、サア、それに違ひはあ
るまいがな。

宗丹　ハヽヽヽヽ、思ひもよらぬ管領の疑念、何を以て某を、石見太郎左衛門景純とは。

元信　オヽ、即ち證據は短刀に、卷きそへ置きしその願書。

宗丹　アノこれが

ト九寸五分に卷きし願書を開き見て

この願書の人形に、願書石見太郎左衛門とあればとて、なんで宗丹を、景純と申すのだ。

遠山　イヤ、景純こそ宗丹と、書かねど割符はこの扇。

ト以前の扇を出して

最前我れへ贈りし戯れ繪。とくと元信、人形に

元信　ハッ。

ト銀杏の前、ツカ〳〵と行き、遠山が扇を受取り　元信、願書の人形を持つて、銀杏の前元信、この

繪をよく〳〵引合せ見て

銀杏　墨繪彩色事變れど

元信　寸分違はぬ小栗が筆勢、餘人は知らず元信に、あらがひ立は無益であらう。

ト宗丹つかへろ。

遠山　サア、石見太郎左衛門景純と

三人　名乘つた〳〵。

宗丹　サア

皆々　サア〳〵〳〵

久國　かゝる證據のある上は、どうで遁がれぬ汝が命。本名名乘つて、繩にかゝれ。

宗丹　さては久國、其方まで

久國　汝と同心なしたるは、この日の印を騙かつて、某が手に入れん爲。

元信　ナニ、日の印は、あなたのお手に。

久國　いかにも。時日を移さず月の印、詮議仕出して持ち來らば、その時佐々木の再興は、一家のよしみに執成しくれう。それまで汝は風來者。この大切な一軸も、身共が一緒に預かり置く。

ト鯉の一軸を取上げる。銀杏の前、元信、思ひ入れ。

元銀　そんなら鯉魚の一軸まで

遠山　大事を思うて久國どのが……ハテナア。

宗丹　ヤア、利慾の手段にやみ／＼と、日の印奪ひ取られしか。もうこの上は包むに詮なし。いかにも我れこそ赤松の家臣、石見太郎左衞門景純たるワ。佐々木の家を横領なし、大望の足代と、頼賢調伏なせしも仇事。せめての腹癒せ。久國、觀念。

ト切つてかゝる。久國、立廻りに呉竹を一本切つて落す。元信、手早くその竹を取つて

元信　主人の天罰、思ひ知つたか。

ト宗丹が脇腹へ突き立てる。宗丹、尻居に撞となる。元信、竹槍を取り直す。

遠山　待つた元信。景純にまだ問ふ事あり。

宗丹　姓名明かしたその上で、問ふ事ありとは、ナ、何を。

遠山　その仔細は赤松滿祐、六代の武將義教公を弑せし砌り、奪ひ取つたる浪頭の御鏡、滿祐亡びしその後は、今に於て行くへ知れず。定めて景純、所持なしあらん。サア、速かに渡すまいか。

宗丹　いかにも、死ぬる今際まで、隱し持つたる浪頭の、この名鏡は某が、主人赤松政則どのへ、手渡しなして謀叛の旗揚げ、勸めん爲に肌身離さず、まツこの通り。

ト鏡を出す。

皆々　さてこそ名鏡。

ト遠山、手早く引取る。宗丹「それを」と立ちあがるところを、元信、ポンと首を打ち落す。此うち久國、鏡へ手をかける。銀杏の前、隔てる。この途端に鏡を取落す。ドロ／＼になり、返し板にて鏡、誂らへの蛙になる。銀杏の前、驚ろく。元信、血刀を拭ふ。遠山、元信は、この蛙を見て、キッと思ひ入れ。この途端よろしく、ひやうし　幕

本舞臺、三間の間、黒幕、左右に稻村の庚申塚。ちよつとしたる飾りつけ。爰に元信、股立ち、懷に赤子を入れ、水上下の肩衣にて、しつかりと結へ、銀杏の前を圍ひ、拔刀にてキッと見得。鬼藤太、郡藏、以前の形、高股立ちにて、槍を構へ、兩人を取卷いてゐる。禪のツトメのツナギにて幕引返す

銀杏　鬼藤太郡藏、こりや我れ／＼を何とするのぢや。

鬼藤　何とするとは佐々木の家、沒落なした上からは、扶持離されの一家中、それゆゑ前司久國さまの

郡藏　仰せを受けて若君もろとも、系圖の一卷してやらんと、落ちゆく二人の跡追ひかけ、爰まで來るも主従の

鬼藤　緣の切れ目に豐若どの

郡藏　所持した系圖も我れ〳〵へ
兩人　サア、尋常に渡してゆけ。
元信　ヤア、これまで祿を喰みながら、恩を仇なる人非人。いかにも系圖はこの通り
　ト一卷を出し
肌身に添へて大事の若君、守り奉る上からは、武勇は蜀の趙雲に、及ばずながら忠義の切尖。不忠の兩人、覺悟なせ。
兩人　こま言云はずと渡してゆけ。
元信　小癪な奴等の。
　ト系圖を銀杏の前へ渡し、これより兩人を相手に、いろ〳〵タテ。誂らへの鳴り物。このタテのうち赤子泣く事。元信、これをいぶりながら、よろしくあつて、トヾ兩人を見事に切り倒す。此うち銀杏の前、稻村に隱れゐて、この時出て
銀杏　元信どの、又もや追手の來ぬうちに
元信　片時も早う、この所を
銀杏　いづくの空へも

ト元信、銀杏の前の手を引き

元信　ござれ。

ト早三重になり、兩人、向うへ入る。大薩摩淨瑠璃になる。

〽それ釋尊のその昔、四千餘年と說かれたる、御法の聲は鷲の山、爰は伊吹の山深く、岩根枕に武者草鞋。

ト山颪しにて、黑幕切つて落す。

本舞臺、向う一面の岩組み、日覆より蔦かつらのまとひし松の吊り枝、よき所に誂らへの岩組み。爰に外道、那迦犀那尊者の拵らへにて、鐵鉢を持ち、眼を閉ぢて呪文の見得。こなたに德兵衞、武者修行の拵らへにて、岩にもたれ、眠りゐる。前に日幕の蛙、這つてゐる。この模樣にて、岩組とも眞中へ押出し、程よくとまる。

コイアイになり、德兵衞、フッと目を覺まし、この蛙を見て、キッと思ひ入れ。

德兵　ハテ、心得ぬ。世渡る業の浪の上、辛くも異國に漂船なし。天竺震旦經めぐつて、歸朝の後に發明なし、命を同じ的とせば、武門に入るこそ身の譽れと、思ひ立つたる天竺德兵衞。良禽は木を

選むの譬へ。良將求めん其ために、斯く武者修行の旅のぼり。暫し疲れを憩はんと、岩を枕の夢覺めて、見れば蛙の足跡に、殘せし文字は住吉の、浦のみるめの親ならで、蟷螂車を遮り、精鋭海を塡るとは、及ばぬ武邊に入らんより、櫓子船乘りで終れよと、我れへの示しか、いまはしい。イデ、切りすてゝ

ト刀を拔いて立ちかゝる。ドロ〳〵にて、タヂ〳〵となる。これにて蛙、また返し板にて前幕の鏡になり、直ぐに外道の手に入る。この時、初めて外道が姿、徳兵衞の目にかゝる、思ひ入れにて

合點のゆかぬ今の蛙、消ゆると其まゝ髣髴たる、異人の樣は、何人なるか。

外道　如是我聞、獨來獨去、斯く山住せる我れこそは、釋尊教化の佛說を受け、三界流轉を行道なす、羅漢の一人、那迦犀那尊者なるわやい。

ト徳兵衞、合點のゆかぬ思ひ入れ。

徳兵　ウム　釋尊在世の昔より、凡そ二千餘年の今、齡無盡の尊者たりとも、命あるべきいはれやあらん。

ト外道ニッコリとして、

外道　ホヽウ、その疑ひ理りせり。さりながら、いかで凡夫の思ひ及ぶべき。佛智眼にて汝が素性、初

めて逢へど照らし置いたり。語り聞かさんその上にて、疑念を散ぜよ、赤松政則。

ト徳兵衞、思ひ入れ。

徳兵　ナニ、我れを赤松政則とは。

外道　ホヽウ、知るまい〳〵。汝が誠の父といふは、村上源氏の嫡流たる、赤松滿祐。嘉吉の亂れに滅亡の折柄、乳人に抱かれ、同國播州高砂の浦に養育せられ、人となつたる天竺徳兵衞。心は強にありながら、民間に育ちしゆゑ、武門に仕へば事足れりと、僅かの望みは、小さい〳〵。家臣石見が健氣にも、汝を勸め旗揚げと、企てありしが時到らず、無念の最期を便なく思ひ、卽ち彼れが取隱せし、足利の重寶、浪頭のこの名鏡、我が術にて取り得置きしも、其方に與へて大望の、便りとせん爲ばかり。今より四海を掌握なす、大義を計れよ、大日丸政則。

ト鏡を徳兵衞へ渡す。

徳兵　さては今まで我が身の上、氏素姓なき船頭の、悴と思ひ居たりしも、誠は播州白旗の城主、赤松滿祐が一子たる。大日丸政則であつたよなア。この名鏡は尊者の賜物、大望計る便りとなさん。

外道　よきかな政則。その上に、人をなづくる奇術の祕密、敎へ得させん。眼を定めて、これを見よ。

ト其まゝ拳を以て岩を打ち割る。ドロ〳〵にて岩角、手の上にて蛙になり、飛び去る。徳兵衞、驚ろ

き、思ひ入れあつて

徳兵　ハヽア、奇々妙々なるその妖術。政則思ふに、これ全く、

外道　師弟を固むる其方に、何か包まん、尊者と見せしも我が妖術。誠我れこそ大山に跨り、芥子に入つて姿を隠す、竹杖外道といふ者なり。

徳兵　面白し／＼、外道の法も我が身には、大望成就の綱ならん。偏へに授與し下されよ。

外道　さあらば唱ふる、呪文を共々

徳兵　心得申した。

トこれよりノットになり、兩人思ひ入れ。

外道　南無たつたるま、ぶんだりぎやア。

徳兵　南無たつたるま、ぶんだりぎやア。

外道　ふんす丸さんだ丸。

徳兵　ふんす丸さんだ丸。

外道　しごしやうでん、あらいそ／＼。

徳兵　しごしやうでん、あらいそ／＼。

ト印を結んでキッと思ひ入れ。ドロ／＼になり、日覆より誂らへの白氣下りて、徳兵衛の懐へ入る。

外道　今ぞ奇術は思ひのまゝ。試みられよ、赤松政則。

徳兵　ドレ。

ト印を結ぶ。又ドロ／＼にて、蛙の聲夥しく、雨車。

行ふ奇術の不思議は忽ち、雨につれたる蛙のもろ聲。

外道　その身に奇術の徳ある上、猶も力を添へんず者あり。いま南朝の一族たる、恩地が忰、岩倉夜叉丸といふ悪僧あり。彼れへも妖術授け置けば、共に計つて本意を達せよ。

徳兵　すりや、恩地が忰、岩倉の夜叉丸といふ悪僧とな。飛龍の我れに猛虎の夜叉丸、心を合すものならば、やがて天下を覆へさん。アラ／＼、心よやなア。

外道　ホヽウ、天晴れ勇々しき一個の大將。

徳兵　これより直ぐに徒黨の結び。早おさらば。

ト此方へ來る。

外道　ヤレ待て政則。やがて天地に威を振はん、めでたき門出を、祝ひ申さん。

ト鐵鉢を手に取上げる。大ドロ／＼になり、鐵鉢の中より水氣立ち登り、これと共に雲氣立つて、よ

ろしき所にこの雲氣、鍍金の龍になり、逆のぼる。徳兵衛、これをキッと見て、ニッコリと膝を叩く
外道、思ひ入れ。この途端、ひやうし。　幕

第一番目 四建目　世繼瀬平内の場

役名‖腰元、夏野。醫者、生垣寒竹。犬上團八。世繼瀬平。お國御前。

本舞臺、三間の間、正面、淺黄幕、板松。爰に團八、前幕の形、夏野も同じ形にて、件の密書を奪ひ合ひゐる見得。禪のツトメにて幕明く。

ト兩人、立廻りあつて

夏野　こりや、こなさんは團八どの、爰まで追ひかけこの密書、渡せとあるとてウカ／＼と、滅多に渡してよいものか。道明けて通すまいか。

團八　默りやアがれ、どち女め、うぬが持つたる書翰こそ、四郎次郎元信より、名古屋山三へ送るところの密書であんべい。委細は正しく後室の、御所持あつたる佐々木家の、系圖をうま／＼取上げた、僞はり者の狩野元信。頼賢公の御後室、お國御前のお情を受けながら、本妻腹の豐若を、守

り立てんとする道知らず。即ち元信が手跡、お國御前へ御覽に入れ、餓鬼が在所も尋ね出す。證據の一通、渡すまいか。

夏野　さう知られし上からは、隱すに及ばぬ、この御狀、いかにも狩野の元信さま、お國御前の所持ありし、お家の系圖は御手に入り、お湯殿あがりの後室樣に、枕かはすも皆計略。若君の在所まで詳しく記せしこの文言、お國御前のお目にかけては、元信さまのお身の上。ならう事なら、武士の情と此まゝに

園八　イヤ、さうはならねえワ。後室樣は元信が、行くへ知れぬと聞き給ひ、日毎に重る御病體、都離れて久世の里、世繼瀬平が隱れ家に、病みほうけたる御有樣、さういふ所へその御狀を、御覽に入れて元信と、銀杏の前が事までも、御存じあつたら只事ぢやァあるまいワ。エヽ、女郎め、この園八にその狀渡せ。異議に及ぶと、命が無いぞ。

夏野　たとへ命に及べばとて、大切なるこの書翰、なんで渡さう、そこ退いて通さんせ。

園八　さう吐かしやァ命の瀨戸。女と云はさぬ犬上が、刀の引導。

ト拔いて切りつける。夏野、有あふ高札にてシヤンと受け

夏野　こりや、どうあつても女子一人を

團八　殺らしてしまふ。觀念ひろげ。

トまた切つて行く。立廻りよろしく、シヤンと見得。これより華やかなる鳴り物になり、團八、狀を取らんと夏野とタテあり、トヾ一刀切ろ。夏野「ウン」と苦しむ。此うちに懷中の密書を引ッたくり行かうとする。夏野、よろぼひながら寄るを、立廻りにて引附け、狀を咬へ、夏野を切り倒し、乘りかゝつて止めを刺す。時の鐘の送りにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、正面、障子の閉てきり、誂らへの門口、よき所に瀨平、親仁形、木綿やつしにて、藥鍋を掛けし七輪をあふぎゐる見得。彈き流しの唄にて道具とまる。

ト矢張り右の唄にて、向うより寒竹、慈姑頭の醫者にて、日傘をさし、供男、藥箱を持ち出て門口にて

寒竹　生垣寒竹お見舞ひ。

瀨平　これは寒竹老、お早いお見舞ひ。サヽ、これへ〳〵。

寒竹　お許しなさい。

ト上へ通り

コリヤ〳〵、角助、其方は、いま申しつけた藥種屋へ參り、書附通りを持參しやれ……コレ、藥箱は置いて行かうぞ。

供男 ハイ〳〵、左樣なら、藥箱はこれへ置きます。

瀨平 オヽ、行つてござりませ。

ト藥箱を置いて、供男、向うへ入る。

寒竹 さて、嚴しい暑さでござりますが、定めてお客人には、この程の大暑では、どうござつても

瀨平 イヤモウ、後室樣の御病氣は、重るばかりで、御全快の樣子も見えませぬが、あれでも平癒いたさうかの。

寒竹 ハテ、そこは愚老が匙加減で、隨分御平癒はござらうが、どうでも餘程手間取りませうて。その上あなたの御病體は、合點のゆかぬブラ〳〵病ひ。何とも以て

瀨平 ハテ、それはその筈の事でござる。殿樣にお別れなされてより、後室樣には、コレ、高うは申されぬが、お手廻りでお使ひなされた、若侍ひがござつたが、あなた樣のお情受け、その後その者は行くへなう、今以て便りの無いが、御病氣の根本。常から烈しき御心が、猶々以てこの程は、イヤモウ、お人使ひの惡いので、腰元婢女もそろ〳〵と、お暇願うて下がり居る。それゆゑ閑居

のお住ひも出來ず、この瀬平が隱れ家、久世の里へお連れ申して、局中老お祐筆、物縫ひ婢女奥家老、若黨中間門番まで、たつた一人のこの瀬平。イヤハヤ、困り果てまするて。

寒竹　イカサマ、それは貴公には、怪しからぬ御看病をなさるゝな。お一人でお手が廻らねば、なんなりと愚老も、お手傳ひ申さう。

瀬平　それは忝うござる。藥しかけて鏡臺の掃除、又は鐵漿壺の用意もして置かにやなりませぬ。男やもめが後室樣のお御仕へ。一向埒は明きませぬわいの。ハヽヽヽヽ。

トこの時、障子の内にて

お國　コリヤ、瀬平は居やらぬか。寢間の障子を開いてたも。

ト唄になり、瀬平、立寄つて正面の障子を明ける。内に、結構なる蒲團を敷き、お國御前、病中の拵らへにて、夜着にもたれゐる。寒竹、思ひ入れあつて

寒竹　これは後室樣には、今日の御顏色、いつに變りて、餘程うるはしう見受けましてござりまするが御樣子は如何お渡りなされますな。

お國　其方はこの程より、自らが病中を伺ふ、町醫の何某。早う見舞うてたもつたは、滿足に思ふ。苦しうない。サヽ、近う寄りや。

寒竹 ハッ、然らば御容體を伺ひませう。御免下さりませう。

ト矢張り合ひ方にて、お國御前が寢間近く差寄り、脈を引く事あり

昨日よりは、餘程お脈體も直りましたる樣子に存じられます。この廻りに續きますれば、日を追つて御全快にござりませう。おめでたう存じますて。

お國 すりや、自らが病は、本復いたすと云やるのか。

寒竹 左樣でござります。御本復は今の間でござります。瀬平どの、お喜びなされい。おしつけ御全快でござりませう。

瀬平 それはおめでたう存じます。少々も御全快遊ばさるれば、駕籠に召させまして、淀堤の風景、螢狩も又一しほ。

お國 アノ、川へ歩行いたしても大事なくば、サ、今から直ぐ行かうほどに、供廻り申しつけや。腰元ども〻召しよせ、髪梳きあけて、サ、用意しや。鏡臺持ちや。手水取りや。

ト立ちあがらうとする。

寒竹 アヽイヤ、それは餘り輕々しく存ぜられます。暑さの時分と申し、殊に夜風は至つて御身にあたります。瀬平どのには、餘り輕々しうお云やるから、ツイ只今のやうに、ハヽヽヽヽ。こりや

發端



三番目



瀬平　矢張り御寐所での、お慰みがよろしうござりませう。

瀬平　イカサマ、はや御本復とお云やるゆゑ、喜び次手にウカ〳〵と、御遊山がよろしからうと存じ、螢狩の船遊山のと、未だ御病中の後室樣へ、私しとした事が、いかい痴言を。ハヽヽヽ。こりや、なんぞこれにお出であつて、お慰みがありさうなものでござりまする。

寒竹　成る程、それがようござる。まだ〳〵御病中の後室樣、暑中とは申しながら、お風めしては、却つて御大切でござります。お枕許へ、其お衝立を差置くがよからう。

瀬平　左樣いたしませう。

ト有あふ誂らへの衝立を取つて立てんとする。

お國　アヽコレ、瀬平、其やうな物置いてたもるな。一倍もや〳〵して心悪い。よしてたも。コレ。瀬平、歩行いたして身に障らば、サア、なんなりと、よい慰みは、どうぢやぞいの。

瀬平　成る程、これにて卽席のお慰みには、なんであらうな。淨瑠璃小唄は不得手なり。聲色物眞似は存ぜぬ上、落し話しも當世では、流行おくれのこの親仁。戰話しに致しませうか。

寒竹　これはしたり、女儀に戰話しとは、あまり心が附かぬ。こりや斯樣仕りませう。愚老が重い口から、お話しを申しあげませう。

瀬平　こりや一段とようござらう。定めし怖い話しかな。
寒竹　イヤ〳〵、ちと和らかな、色氣のあるお話しでござる。
瀬平　アノ、話しも色粉になりますかな。
寒竹　何を云はつしやります。
お國　こりや聞き事であらう。いま云やつた、色氣のある話しとはや。
寒竹　イヤ、別してもないお話しでござりまするが、愚老が在所は山城の、宇治郡でござりまするが、この間川事ござつて、參りましたる道にて、宿を取りましたるその合ひ宿に、若い男と若い女の二人連れ、幼ない男子を抱きまして、逗留いたして居りましたて。
　　トお國御前は何心なく聞いてゐる。
瀬平　ハテ、道行めいたる趣向でござるの。して、それが面白い話しかな。
寒竹　ハテ、せはしない。マヽ、お聞きなさい。その男は、アヽ、何とやら申しました。オヽ、それそれ、四郎次郎とやら云ふ者さうにござります。女の名は、なんでござつた。銀杏でなし、アヽ、なんとか、…………オヽ、それ〳〵、銀杏々々、銀杏の前とやら申す女を連れまして、その宿に逗留いたして居りましたが、どうでもあれは色事と見えました。殊には若い身空で、小さいのを連

れての道中、樂しみあつても、ア丶、また苦しみもござりませうて。

ト此の話しのうち、お國御前、四郎次郎といふ事より、銀杏の前と聞いて、だん〳〵と思ひ入れ。

お國　コリヤ〳〵、いま云やつた四郎次郎とは、その年頃は

寒竹　ヘイ、二十四五とも見受けました。

お國　して、銀杏の前といふ女、年頃は廿歳あまりか。

寒竹　左樣でござります。

お國　して、その者どもに子があつたか。

寒竹　ヘイ、お小さいのは、慥か男子。

お國　二人が仲の胤なるか。もしや尋ぬる豐若なるか。何にしても、割符を合す其方の話し。もし四郎次郎、銀杏の前に極まらば、よう自らを僞はつて

トきつと思ひ入れ。立ちあがつて、よろ〳〵して、胸苦しき思ひ入れにて咳入る。瀨平うろたへ

瀨平　ア丶、また御病氣に障りましたか。エ丶コレ、御大切な御身を、

ト駈けよつて脊中を撫り

エ丶、この醫者どのは、役にも立たぬ事を云ひ出し、後室樣のお氣のむすぼれ。ア丶、埒もない。

其方へ退いてゐさつしやれ。エヽ、馬鹿々々しい問はず語りを。サア、歸らつしやれ〳〵。

ト呟き、白湯を飮ませ、いろ〳〵と介抱する。

寒竹 アヽ、これは不調法を申しました。併し、色氣のあるお話しが、よからうと存じまして、ツイ、四郎次郎とやら、銀杏の前とやらの

瀬平 エヽ、まだ云はつしやる。サア、早く歸らつしやれ〳〵。

寒竹 歸ります〳〵。併し、家來が參るまで、暫らく御勝手を

トもぢ〳〵して藥箱を持ち、捨ぜりふ云ひながら行かうとする。

お國 コリヤ〳〵待て。その者どもが、住家はいづれぢや。

寒竹 ハイ、いづれでござりますやら、その儀はとくと

ト思ひ入れ。

瀬平 ハテ、何も云はつしやるな。

寒竹 ハイ〳〵、左樣なら、餘人にお聞きなされませ。

ト合ひ方になり、寒竹、思ひ入れあつて奧へ入る。お國御前、思ひ入れ。

お國 すりや、今の噂が、元信に極まらば、預け置いたる佐々木家の系圖の一卷、もし自らへ敵たふ輩

の、手へ渡つては願ひの妨げ。アヽ、心がゝりは今の話し、

トよろ／＼として立ちあがり、行かうとする。瀬平、縋つて

瀬平　これはしたり、この御有樣で、いづれへ御歩行叶ひませう。モシ、後室樣、お心をお鎭めなされませ。世間に似た名も似寄りも、まゝある習ひでござりますわいの。

トきつと云ふ。お國御前、胸苦しき思ひ入れにて、ホッとこなし。時の鐘、バタ／＼にて、向うより團八、件の密書を持ち、走り出てくる。跡より黒具の捕り手二人、窺ひ附いて出て來り、團八は内へ入る。捕り手は門口に忍ぶ。

團八　世繼瀬平、在宿あるか。犬上團八、火急のお知らせ。お國御前の御身の大事。急ぎ取次ぎ頼み存ずる。

瀬平　ヤヽ、さうお云やるは犬上團八。幸ひ後室お國御前さまにも、これにお渡りなさるゝぞ。サヽ、御大事とは氣遣ひ至極。

お國　自らが大事とは、仔細ぞあらん。樣子を早う物語りや。サヽ、なんと。

團八　こは後室樣には、御病體と承る。御身の大事と申せしは、四郎次郎元信へ、お預けありしお家の系圖、四郎次郎の計略にて、御身を僞はり奉ると、委細を記せしこの密書、持參の女を討つ

て捨て、直さまこれへ持參いたした。イザ

ト密書を差出す。瀬平よりお國御前へ持ちゆく。手に取上げ、よく〳〵見て

お國 ヤ、こりやコレ元信が手蹟。先の宛名は山三元春。して、文言は。

ト開き見て

ナニ〳〵……飛札を以て申しあげ候ふ、然らば我れら、後室お國御前のお心に隨ひ候ふ事、道ならぬ者とお下げすみの程、お恥かしく存じ候ふ、この儀、佐々木の系圖、取隱され候ふ間、無事に取返し申さん爲の、僞はりに御座候ふ間、夢々惰弱なる者と思し召し下さるまじく候ふ、且又、若殿樣儀は、御臺の妹銀杏の前と、我れら附添ひ、大切に守り立て候ふまゝ、跡目の儀、よろしく願ひあげ奉り候ふ。月日、山三どのへ、狩野元信。

ト讀み終り、思ひ入れあつて

すりや、身を騙かり、誠と思ひし眞實も、銀杏の前に見替へられ、系圖を奪はん僞はりであつたか。エヽ、口惜しい。

トきつと向うを見詰め、思ひ入れあつて

さては山三と云ひ合せ、豐若を守り立て、妾を此まゝ埋れ木に、朽ち果てさせん企みよな……さ

ればこそ、今の町醫が申したる、詞に違はぬこの密書。割符の合ふは、天道我れに告げ給ふか。いづくにあるとも、尋ね求めて

トよろめきながら、密書を持ち、行きかゝるを、瀬平、制して

瀬平　これはしたり、後室樣、其お姿で、いづれに御歩行がなりませうぞ。モシ、お國御前さま。

ト此うちお國御前、向うばかり見詰めゐる。この時、門口に窺ふ捕り手、走り出て

捕一　ヤア、さてはこの家は、お國御前の忍びの隱れ家。見屆けた。この由直さま管領へ

捕二　殊に女を害せし曲者。

團八　それ聞かれては

ト拔いてかゝる。二人の捕り手、立廻つて、團八、一人の捕り手を切り倒す。この間に一人の捕り手向うへ走り入る。團八、思ひ入れあつて

お國御前の隱れ家を、知つたる忍びの侍ひ、助け置いては後日の妨げ。

瀬平　早くお行きやれ

團八　合點だ。

トごん〳〵にて團八、向うへ走り入る。矢張りお國御前は、搆はず狀を持ち、向うを見詰め、胸苦しき

思ひ入れにて、向うの方へ行かうとする。

瀬平　モシ、後室様、こりや、そのお姿で、あなたはどれへござります。

お國　騙かられたる上からは、元信が在所を求めて

ト行かうとする。瀬平、縋つて

瀬平　コレ、お國御前さま、あなたは今のお姿が、見えませぬかいなう。モシ、やつれ果てたる御氣色が、お前の目にかゝりませぬか。

ト留める。お國御前、思ひ入れあつて

お國　鏡臺持ちや。

瀬平　エ。

ト驚ろきしが、あたりにある鏡臺を持ちゆき、お國御前の前に出す。お國御前、鏡にうつる顔形を、よくよく見て、こなしあり

お國　門に立つたる厄神も、これにはいかで……鐵漿附けの道具持ちや。

瀬平　エ。

トうろたへる。

お國　持てと申すに。

ト急いて云ふ。瀬平、悧りして、鐵漿道具を揃へ、怖々お國御座の前へ持つて行く。お國御前、思ひ入れ。これより誂らへの凄き合ひ方になり、右の道具を引寄せ、鐵漿を附ける。よき時分、暮れ六ツの鐘。瀬平、行燈をともし、怖々お國御前の前へ置く。お國御前、鐵漿を附けしまふ。瀬平、側へさしより

瀬平　モシ、お國御前さま、後室さま、そのマアおやつれ遊ばしたお姿で、お歯をお染め遊ばして、あなたはどれへお出でなさるぞ。こりや大方、あなたの常々お尋ねなさる、四郎次郎さまの所へ、お出でなさるゝ御所存でござりまするかいの。後室さま、そのお姿で、どうして御歩行がなりませうぞ。モシ／＼、どうぞお出で遊ばす事は、お止まりなされて下さりませ。

トお國御前、鐵漿を附けしまひ

お國　コリヤ、瀬平……コリヤ、瀬平。

瀬平　ハアイ。

お國　髪とりあげい。

ト鏡臺に向ふ。瀬平、怖々後へ廻り、櫛を持つて、かきたまりしお國御前の髪へ櫛の歯を入れ、くゞ

らかるゆゑ、櫛取りの出來ぬ思ひ入れ。お國御前焦れて、手を伸し、瀬平が持つたる櫛を引つたくり我が手に髪を梳く。この毛、だん／＼と櫛の齒にかゝり、拔けて、けんつうになる。この時、奥より寒竹、出かゝり、これを見て、恟りして慄ふ。

瀬平　ヤア、お髪がそれ程

ト お國御前、拔けたる髪と密書を持ち、キツと見詰め、無念の思ひ入れあつて

お國　妾を僞はる門郎次郎、いづくにあるとも、女の念の

ト立ちあがらんとして、よろ／＼とする。瀬平「モシ」と最前の衝立にて留めるを、搔きのけ、門口の方へ來り、柱へ取りつき、キツと向うを見詰める。立廻りにて衝立はお國御前が裾の方に殘る。お國御前、胸を押へ、苦しむ思ひ入れ。

瀬平　モシ、其お姿で、どこを當途に

ト縋る。お國御前、キツとなつて

お國　此まゝ死すとも、ナニ安穩に。チエヽ

ト持つたる髪と密書を一緒に捻ぢきる。ドロ／＼にて、捻ぢきれし髪の毛より、血汐、タラ／＼と落ちて、側の衝立へかゝる。瀬平見て

瀬平　ヤ、其お髪から、生血のしたゝり。

お國　ヤ。

ト衝立へかゝりし血の様子を見て、我れながら驚ろき、ウンと反る。ドロ〳〵にて柱際へ心火燃える。瀬平はじめ、後に窺ふ寒竹、ハツと云うて倒るゝ。これをキツカケに、ひやうし　幕

ト幕引附けると、舞臺花道の附け際より燒酎火燃え出て、大ドロ〳〵にて、この心火、花道より三尺ばかり上を、向う揚げ幕の所へ入る。ドロ〳〵打上げ、シヤギリ。

第一番目　五建目　元興寺の場

役名――腰元朝顏。同、小萩。同、あやめ。同、撫子。茨木逸當。銀杏の前。馬士、駄荷藏。狩野四郎次郎元信。六部、土佐の又平重興。後室、お國御前の亡靈。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、稻村。上の方に一間の地藏堂、この軒にいろ〳〵の燈籠を吊し、夏草線香、澤山に手向けあり。爰に百姓大勢、めい〳〵燈籠を持ち、參詣の體。てんつゝ、念佛太鼓にて幕明く。

ト矢張りこの鳴り物にて、向うよりいろ〳〵の仕出し、地藏參りの體。參詣して下座へ入る。直ぐに向うより逸當、黑股引、大小にて、侍ひ二人附き出て、本舞臺へ來り

逸當　コリヤ〳〵、百姓ども。殊の外群集いたすが、何事ぢや。

百一　ハイ〳〵、コレ、爰に安置いたしたる地藏樣の、お祀りでござります。毎年六月二十四日には、參詣が夥しうござります。

百二　その上、村中が、御覽じませ、さま〴〵の燈籠を拵らへまして、地藏堂へあげますが卽ちお祀りこの地藏樣は、元興寺にお立ちなされたを、この所へお堂を建てましたのでござります。

逸當　すりや、荒れ寺の元興寺の地藏とな。よい折柄に身も參り合せた。コリヤ、百姓ども、申し渡す仔細。一通り承はれ。この度、佐々木家沒落につき、後室お國御前、民家にあつて病死との事。さるによつて管領よりの指圖を受け、罷り越した茨木逸當。四郎次郎が面體を存ぜず。もしこのあたりへ、年若き侍ひ、女一人同道なし、懷中に系圖の一卷所持の者こそ、元信に相違ない。詮議いたして身共へ渡せ。褒美は望みに任すべし。隨分ともにぬかるまいぞ。

百三　畏まりました。左樣なら懷中に、一卷とやら、系圖とやらを持つて居つたら、狩野元信、止め置いて、早速お知らせ申しませう。

逸當　もし來たらば油斷なく、身が役所へ訴へよ。心得たるか。

百姓　畏まりました。

逸當　家來、參れ。

家來　ハツ。

トまた念佛太鼓になり、逸當、家來を連れ、下座へ入る。百姓殘る。この鳴り物にて、向うより撫子着流しの形にて、誂らへの牡丹の燈籠へ灯を入れ、これを提げ出で、本舞臺へ來る。

百姓　これはいつものお女中樣、また參詣さつしやりましたか。

ト撫子、會釋して

撫子　お前方も、ようマア參詣なされました。旦那樣も、御參詣の筈のところ、今宵はわたしを御代參。コレ、御覽じませ、この牡丹の燈籠を、御堂へあげて、また持つて歸つて、明日の夜も御灯あげに參りますわいなア。

百姓　それは御奇特でござります。

撫子　ほんに、旦那樣の仰しやるには、歸りに女郎花を手折り來れよとの仰せ。女郎花は、どこにござんすえ。

百姓　ハテ、ツイこの河原に、夥しうござるて。

撫子　左樣なら、この牡丹の燈籠は、この軒へ、斯う吊して

ト軒口よき所へ吊し

サア、これでようござります。サ、お前方、女郎花のある野邊を、敎へて下さんせいなア。

百姓　敎へませう〳〵。サア〳〵、女中、斯うござりませ。

ト矢張り念佛太鼓になり、百姓大勢は、めい〳〵軒口へ燈籠を吊し、撫子附いて、捨ぜりふにて下座へ入る。この鳴り物に、てんつゝをかぶせ、銀杏の前、女菅笠を持ち、旅形にて出る。跡より元信、大小、おしよぼからげ白絹の股引にて、以前の子を抱き出てくる。跡より駄荷藏、馬士の拵らへにて、煙管を咬へ、捨ぜりふにて出て來り、直ぐに本舞臺へ來て

駄荷　これサ、お侍ひ樣、馬を貸しませう。女中を乘せてござりませサ。もう日が暮れましたに、お泊りまで召しませ。モシ、姐樣、よい馬を貸しませう。サア、乘つてござりませな。

ト元信を搔きのけ、銀杏の前が手を取らうとするを振りきり

銀杏　これは不作法な。なんでマア自らが、馬に乘つてよいものかいなう。玆な慮外者めが。

元信　ヤイ〳〵、最前からも云ふ通り、馬は所望でないと申すに、聞分けの惡い馬追ひぢや。殊に女子

駄荷　へ手出し致して、アヽ、こりや其方は醉つて居るな。

駄荷　左樣でござります。わしやァ醉つて居るよ。一杯くらつたまぎれに、ツイ女中に無駄事もするやつサ。モシ、酒手でやりやせう、乘つてござりませ〳〵。その代りには、わしが又、お前に乘つてあげるワ。どうだ畜生め。

ト銀杏の前にしなだれかゝる。元信、これを引退けて

元信　此奴、又しても〳〵、酒機嫌と此方にて、料簡すれば附けあがる馬追ひめ。武士たる身共が同道いたすに、女と侮り無法の振舞ひ。重ねて慮外いたすに於ては、眞二つにぶッた切るぞ。

ト刀へ手をかける。銀杏の前、とめて

銀杏　アヽコレ、短氣を出して下さんすなえ。

元信　でも、あまりといへば、法に過ぎたる馬追ひめ。

駄荷　コレ、お侍ひ樣、馬追ひがどうしました。往來を當にして、駄賃を取るがおいらの商賣、馬を貸さうと云つたがどうした。おどけた口もきいて見にやァ、商賣がならねえワ。その度毎に切られやうものなら、人種は盡きるワ。ほんに、天川屋ぢやァねえが、馬士の胤は盡きるわな。エヽ、馬鹿な侍ひだわえ。

ト元信を足蹴にして飛びのく。元信、思ひ入れ。

元信　こりやアおのれ、武士たる者を、土足を以ての今の緩怠。

ト堪へかね、拔かうとする。銀杏の前、留めるはずみに、元信、系圖の一卷を落す。駄荷藏、ちよつと取つて

駄荷　この卷き物は、こりやアなんだ。

元信　ヤ、それを。

ト手早く取つて懷中する。

銀杏　コレ、その一卷を易々と、お渡し申さぬうちといひ、殊に大事のその豐若。ナア、モシ、必らず短氣を出さんすなえ。

ト思ひ入れ。元信、こなしあつて

元信　成る程、この身ばかりか大切な、豐若さまを守り立てる、それまでは大事なこの身。彼奴等如きが小事にかゝつて、大義を捨てんは、誠に武士の本意でないわえ。

ト思ひ入れ。駄荷藏、タヂ〳〵として

駄荷　アヽ、おつな事を云ふ侍ひだわえ。豐若とやら何とやら、その抱いてゐる小僧。殊に今落したは

慥かに系圖の一卷とやら。

元信　なんと致した

駄荷　サ、今も爰らへお觸れが廻つた、佐々木家の系圖の一卷、持つてうせるは狩野四郎次郎とやら。お尋ね者といふ噂だ。こいつは的切り、それにゆかりか。マア、その女からせごした上で

ト立ちよるを元信、駄荷藏を取つて投げ、背打ちに打ち据ゑる。

アイタヽヽヽ。侍ひめ、うぬ。

ト立廻りあつて、駄荷藏、起きあがり、上の方へ來て

どうでうぬには叶はない。その卷き物を持つ者こそは、四郎次郎、此あたりと云ひあげる。侍ひめ、待つてうしやアがれ。

ト下座へ走り入る。

銀杏　アレ、お聞きありしか元信さま、系圖の一卷持つてゐる者こそ、狩野四郎次郎なりと、この道々噂があれば、もしやお前の身の上に

元信　あの馬追ひめが詞の端、おのれが無禮を顧みず、某を根葉に存じ、どのやうに觸れあるくも計り難し。さある時には、この若君のお身の御難儀。お國御前の隱し置かれしこの一卷、僞はり負ふ

せて此方へ、取返しは返せしが、この身に所持するものならば、四郎次郎の疑ひは遁がれまい。ハテ、これにつけても

ト思ひ入れあり、地藏堂の軒に吊せし牡丹の燈籠を見て

オヽ、幸ひのあの燈籠、もしや詮議の輩が來たなら、暫らくこの一卷を隱し置き、遁がれるだけは云ひ拔けん。それにつけても、この燈籠へ

ト一卷を出し、軒の牡丹燈籠の中へ隱す。

銀杏　誠に、こりや屈竟の隱し所、よもやこれでは御身の難儀を。さりながら、もしや詮議にあふ時は

元信　成る程、形代とても所持せずば、跡の云ひ譯。ハテ、何をがな。

ト思ひ入れあり、地藏の前にある大束の線香を取つて

せめてこれなと

ト以前の袱紗に包み、懷中して

これを所持して今にでも、詮議にあふものなれば、叶はずとても陳じて見ん。それでゆかねば一生懸命、詮議の奴ばら切つて捨て、一先づ君の御供せん。必らずともに、うろたへまいぞ。

銀杏　心得ました。

元信　暫らくあたりに様子を尋ねん。おぢや。

ト行かうとする。下座より逸當、捕り手を召しつれ、ツカ〳〵と出て

逸當　ヤア、狩野四郎次郎元信、管領よりの上意なるぞ。尋常に繩

捕手　かゝれ。

ト取卷く。

元信　待つた、お侍ひ。足弱を同道せし、旅人に向つて四郎次郎とやら、元信とやら、身に覺えなき今の一言。何ゆゑ狼藉おしやるぞ。

逸當　ヤア、僞はるな四郎次郎、身共は面體存ぜねども、慥かな證據あるにつき、陳じても叶はぬ所。サア、元信、速かに、腕

捕手　廻せ。

元信　ヤア、心得ぬ一言。慥かな證據とお云やるが、身共に何の證據がござる。狩野の四郎次郎といふ證據をお出しやれ。拜見いたさう。

駄荷　その證據はこの馬士。おれが訴人をしたのだワ。

ト云ひ〳〵出る。元信見て

元信　そちや只今これにて、我れ〳〵に無禮を働らき、ひどい目見たる意趣返し、此お侍ひを僞はつて、手を下ろさずにいづれもに、無駄骨折らして、その身の遺恨を、晴らす所存か。茲な僞はり者めが。

駄荷　默りやァがれ。ナニ僞はりを云ふものか。四郎次郎といふ事は、この駄荷藏が訴へたワ。證據といふは、われが懐、系圖とやらいふ卷き物を、持つてゐるのが慥かな證據だ。それでも覺えがないか。

元信　イヽヤ存ぜぬ。覺えがない。一卷とやら、決して所持した覺えはないぞ。

駄荷　ナニない事があるものか。お役人樣、必らず御油斷なされまするな。

逸當　いかにも。さほど慥かな證據があつても、あらがふる四郎次郎、サア、尋常に繩かゝれ。

元信　イヽヤ存ぜぬ、覺えない。一卷持たば四郎次郎、もし所持なさぬその時は、その疑ひは晴れますか。

逸當　そりや疑念には及ばぬ事。一卷持たぬその時は、疑ひもなき往來の旅人。此方に申し分はござらぬワ。

元信　然らば身共も、連れの女も、懐中改め、詮議おしやれ。

逸當　心得た。訴人の其方、相違なくば、二人が懐中、詮議いたせ。

駄荷　畏まりました。この懐に持つたは一卷、引摺り出して今の意趣返しだ。もう叶はぬワ。念佛でも
申してゐろ。

逸當　家來、圍め。

捕手　動くな。

ト十手にて取巻く。

駄荷　サア、侍ひ、マア、貴樣の懐から

ト立ちかゝつて元信の懐へ手を差しこみ、件の吹替へを引出し

さてこそ爰に。

元信　ア、それを

トかゝるを駄荷藏。思ひ入れ。

駄荷　何をピコつく。これ程爰に持つてうせたワ。モシ、お侍ひ様、正しくこれが系圖の一卷。お改め
なされませ。

ト逸當へ渡す。

逸當　さてこそ、訴人の者が申すに違はず、一巻を所持するからは、四郎次郎に相違あるまい。この一巻は

ト云ひながら、袱紗を明け、悔りして

駄荷　ドレ、お見せなされませ。

ヤア、こりやァなんだ。佛へ手向ける線香ぢやァないか。

ト取つて

ほんに、こりやァ大束の線香だ。先刻に見たのは慥かに巻き物、今では線香。誠にこれは、せんかう未聞の話しの種だ。せんかうに濁りを打てば善公。ハテ、詰まらぬものだ。

元信　サア、お侍ひ様、一巻とやらがござりましたか。

逸當　サ、そりやァ

元信　地藏の前へ手向ける線香、持參いたして罷りあるを、一巻なりと云ひ立つて、おのれが遺恨を手も濡らさず、厄病の神で敵討、馬追ひづれが詞を用ひ、それで役目が立ちますか。

逸當　サア、そりやァ

元信　お疑ひは晴れましたか。

逸當　成る程、こりやア此方が不念。四郎次郎元信ではござるまい。
元信　然らば疑ひ晴れまして、此まゝ濟ます御所存か。
逸當　イヽヤ、貴公へ云ひ譯には、家來ども、その馬追ひめ、動かすな。
捕手　動くなっ

ト駄荷藏を取卷く。

駄荷　アヽ、コレ〳〵、お侍ひ樣、この馬士めを、どうなされます〳〵。
逸當　ヤア、おのれ、僞はりを申し立て、身共に恥辱を與へし奴。あのお方へ申し譯、訴人のおのれを引立て行く。役所へうせう。
捕手　キリ〳〵うせう。
駄荷　ハテ、詰まらぬ目にあつた。
元信　左樣なれば我れ〳〵に、仰しやり分はござりませぬかな。
逸當　申し分はござらぬ。コリヤ、家來ども、四郎次郎を訴人の馬追ひ。拷問なして元信が詮議。僞はり者めを取逃がすな。
捕手　ハアヽ。

駄荷　なんの事だ。これぢやァ築地へ歸られまい。
元信　お侍ひ樣・お役目御苦勞。
逸當　引立てい。
捕手　立たう。
駄荷　立つて居ります。

ト三重、時の太鼓になり、捕り手、駄荷藏を圍み、逸當、先へ立ち、四人・向うへ入る。元信、銀杏の前、あと見送り

銀杏　元信さま。
元信　コリヤ。
銀杏　危ふい難を遁がれましたわいな。
元信　イヤモウ、一卷を隱せしゆゑ、この身の難を人に負はせて、その身はなんの別條なく、これといふのも、爰に立てられし地藏尊のお庇。ドリヤ、お禮參りに
銀杏　わたしも參つて行かうわいなア。

ト合ひ方になり、兩人、地藏堂の前へ行き、手を合せ、思ひ入れ。この時、下座より撫子、女郎花の

撫子　ほんに、夜に入つて、野中の草を尋ねたゆゑ、殊の外の隙取り。殊に、燈籠の御灯も消えてある
花を手折り出て
ドレ、また明日の夜に持ちませう。
ト牡丹の燈籠を取つて花道の方へ行かうとする。元信、これを見附け
元信　アヽ、コレ〳〵、女中、その燈籠を、どこへ持つてござるのぢや。
銀杏　滅相な、マア、大切な燈籠を、持つてござんしてよいものか。ちやつと置いてござんせいなア。
撫子　モシ〳〵、何を云はしやんすぞいな。この燈籠は、わたしが御主人様より、毎夜々々この地藏尊
へ、御灯をあげますこの燈籠を、持つて歸りますが、なんで滅相でござります。
銀杏　サア、それはナ
元信　アヽ、そんならその燈籠は、お前の御主人様が、御心願あつて毎夜々々、御灯をおあげなさるゝ
燈籠とな。
撫子　アイ、御主人様の御心願ぢやわいなア。
元信　成る程、それを持つて歸らつしやるを留めたは、此方が無理でござつた。さりながら、燈籠ばか
りは、どうも外へは。なう、銀杏の前どの。

銀杏　サア、わたしも左樣は思へども、何を云うても燈籠の主は、このお女中樣。

元信　見れば、在所風の女中と見えず、武家に育ちし態度恰好。御主人の心願と仰しやるが、して、このあたりに、武家の御殿がござるかな。

撫子　アイ、爰より僅か半道あまり、野末の草の假御殿、主君と申すは、後室樣のお獨り棲み。そのお方へ宮仕へ致します、女子でござりますわいなア。

元信　ハテ心得ぬ。かゝる邊鄙に女主の、假御殿とはいぶかしい……すりや、その燈籠は、其お館へ

撫子　アイ、持歸らにやなりませぬ。

元信　そりや御尤も。爰に一つの無心がござる、というて外の事ではござらぬ。御覽の通り足弱と申し乳呑を連れし旅人、宿りを求めず甚だ難儀仕る。私しどもを、お泊めなされては下さるまいか。

撫子　それは何よりお易いお頼み、さりながら、我れ／＼は召使ひ。女主の御主人へ、願つた上にて

元信　お宿なされて下さるか。コレ、銀杏の前どの、あのお詞を聞きやつたか。

銀杏　成る程、今宵の宿りをお願ひ申し、折を窺ひ、あの燈籠の

元信　コレ……マ、何事も、あなたに附いて、お館まで

撫子　御同道いたしませう。

元信　忝う存じます。
銀杏　サア、我が夫。
元信　ア、これにつけても

ト燈籠へ手をかける。撫子、ちよつと燈籠を引く。三人、思ひ入れあつて

撫子　斯うお出でなされませ。
元信　ドリヤ、御一緒に參らうか。

ト時の鐘、合ひ方、蟲の音にて、撫子、燈籠を持ち、先へ立ち、元信と銀杏の前は、赤子を懷へ入れ、思ひ入れあつて、花道へかゝり、向うへ入る。この道具引いて取る。

本舞臺、三間の間、中足にて結構なる御殿、枝折り戸。前に流れ。花道より揚げ幕まで本水かけてあり、爰に銀燭臺を照らし、朝顏、小萩、あやめ、奧女中の拵らへにて、花筒へ夏草を活けてゐる見得よき時分より琴唄にて道具とまる。

ト合ひ方、蟲の聲。皆々花を活ける事あつて

朝顏　モシ／＼、あやめどの、どう致しても小萩どのは、お宿が活け花の御指南なさるゝ程あつて、手

際が見事でござんす。わたしや南瓜の花を活けて見ようと思ふわいなア。

小萩　これはしたり朝顔どの、南瓜の花が、なんで活けられやうぞいの。まだしも唐辛子か、銀眞瓜の花は、釣り物へも活けます。イヤ又、活けて見やうなら、仙人掌ぢやわいなア。

あや　何をマアお前方は、阿房な事云はしやんす。それにつけても後室樣の、お尋ねなされた女郎花の花は、もう咲いたであらうに、燈籠を持つてござんした。このマア撫子どのは、もう歸りさうなものぢやござんせぬか。

朝顔　ほんに、後室樣が、お待兼ねであらうに、いかう遲い事ぢやわいな。

小花　いつそわたしが、迎ひに行て見ようわいなア。

ト立ちあがる。

あや　これはしたり、後室樣の御用もあらうに、鎭まつてゐさんせいなア。コレ、小萩どの、最前仰しやつた琴の絲は、掛け直してござんしたかえ。

小萩　アイ、そりやモウ、とつくに絲を掛けかへて置いたわいなア。

あや　そりやついぞない、よう心が附かしやんしたわいの。

ト時の鐘、唄になり、撫子、燈籠を提げ、銀杏の前と元信を連れ出て、花道にて

元信　モシ、女中樣、あの向うに見えます庵が、お前の御主人

撫子　後室樣の御殿でござります。申しあげますまで、お二人ながら、暫らく外面に、お待ちなされて下さりませ。

元信　心得ました。何分よろしう賴みます。

ト また唄にて三人、本舞臺へ來り、元信銀杏の前、門口に窺ふ。撫子、内へ入り

撫子　御傍輩衆、さぞ待兼ねてゞござんせうの。

小萩　撫子どの、戾らんしたかいな。

朝顏　ほんに今宵は一しほと、空も曇つて、さぞ難儀さしやんしたでござんせうの。

撫子　あいなア。殊に、後室樣のお尋ね遊はす、女郎花の盛りゆゑ、手折つて參りましたわいなア。

ト見せる。

あや　そりや、よう氣が附きました。して、いつもの燈籠わえ。

撫子　アイ、持つて歸りましたわいなア。これにつけても、あやめどの、今宵手折りし花よりも、又よい花を。お土產に持つて參じたわいなア。

あや　そりや、どのやうな花でござんすえ。

撫子　その花といふは、爰から見やしやんせ。

ト三人の女に、切り戸の外を見せる。皆々見て

あや　こりや珍らしい。所に見馴れぬ女郎花、よい花を、こなさん、どこから手折つて

三人　ござんしたぞいなア。

トこの時、御簾の内にて

お國「秋草を、形見とか見ん女郎花、衣の色に咲ける道の邊」

銀杏　あのお聲は

ト枝折り戸に立ちより、窺ふ。

皆々　後室樣。

元信　すりや、この館の……ハテナア。

ト琴唄になり、御簾を卷きあげる。爰にお國御前、結構なる襠褊の形、後室の拵らへにて、褥の上に座し、文臺を置き、脇息によりかゝり、結構なる短册と筆を持ちそへたる體にて、御簾卷きあがる。

皆々、手を突き

撫子　後室樣、これにお渡り

四人　遊ばされましたか。

お國　腰元どもが心願籠めし、佛へ捧ぐる御灯の、牡丹の燈籠、今宵も事なう持ち歸つたか。

撫子　ハイ、御心願の牡丹の燈籠、持ち歸りまして、卽ちこれに……又いつもの軒へ

ト よき所へ燈籠を掛ける。

お國　して、自らが眺めたう思うてゐる、野邊に咲くなる女郎花………撫子、其方、手折つて來やつたか。

撫子　ハイ、御覽の通り、咲き亂れたる女郎花、持參仕りましたわいなア。

ト 花筒に活け、お國御前の側へ持ちゆく。

お國　誠に、色よう咲いた女郎花、一しほによい眺め。ほんに可愛らしい、よう咲いたわいの。女郎花は此やうに色よう咲けど、自らが心を掛けし男郎花、いづれの野邊に咲く事やら。アヽ、たゞ戀しさの

ト 思ひ入れ。

撫子　サヽ、その色よき男郎花、また一本の女郎花、今宵の宿りと申すゆゑ、お叱りをもかへり見ず

ト 思ひ入れ。お國御前、こなしあり

お國　野邊に千種の男郎花、藻に棲む蟲は自らが、泣き焦れたる空蟬の、又の便りを松蟲と、胸に思ひの螢火も、消ゆる隙なき

ト きつと思ひ入れ、

撫子　女夫連れたる旅の空、殊に乳呑を抱きかゝへ、難儀と存じ召連れしも、お願ひ申して、今宵一夜を

お國　珍らしき客人どの、殊に女夫とあるからは、女子ばかりのこの庵へ、泊めたとて苦しうない。その者、これへ。

撫子　畏まりました。

ト 門口に向ひ

サア、お二人樣、主のお許しあるからは、少しも早う

元信　然らば御免下さりませ。

ト 銀杏の前附いて內へ入る。

銀杏　ほんにマア、思ひがけない、結構な此お住居。爰はマア、どこでござんすえ。

元信　これはしたり、上つ方の御殿かも知れぬに、コレ、滅多な事を云ふまいぞ……ハイ〳〵、これは


花井才三郎
豊国画

マア、お情をもちまして、二人の者に幼な子まで、蚊にせゝらるゝ苦勞もなく、お宿なされて下さるとは、エヽ、有り難う存じます。して、あれにおいでなされますが

撫子 此お館の後室樣、お側へ行て、お禮申さんせいなア。

元信 左樣なれば、御免を蒙むりまして……サア〳〵、其方も一緒に、お禮申しや。

銀杏 アイ〳〵、お禮申しあげるでござりませう。

ト兩人、お國御前が目通りへ近く差寄り

元信 ヘイ〳〵、御免下さりませ。私しどもは、夫婦連れの旅人、連れました幼な子は主人の若君、夜に入つて難儀仕るを、御高恩をもちまして、一夜を明かさせ給はる段、有り難う存じまする。

ト愛にて赤子泣く。

アヽ、これにつけても、この子は、どうぞ知るべを求めて、乳を飲ませたいものぢやが。

ト思ひ入れ。お國御前、キッと見て

お國 その子に乳房を與へませう。

元信 エヽ、あなた樣が

お國 乳房を與へん。その和子これへ。

元信　へイ〳〵、これは有り難う存じます。左樣なれば、憚りながら

ト子を差出す。お國御前、取つて、こなし、

お國　佐々木賴賢が御臺、園生が胎内に出生の豐若、我が身に仇なるこの幼な子。

トきつとなる。元信、悸りして

元信　ヤア、そのお聲は、主人の後室

お國　お國御前を四郎次郎、よも見忘れは致すまい。

元銀　エヽ。

ト悸りする。お國御前、赤子を抱へ、キッとなる。これより物凄き合ひ方になり

元信　すりや、この御殿は、お國御前がしつらひ給ふ、さては忍びの御閑居よな。

お國　よくも其方は、自らを僞はつて、隱し置いたる佐々木の系圖、戀に事よせ奪ひ取り、銀杏の前と二世かけて、夫婦の契約しやつたの。

元信　アイヤ、全く以て、何ゆゑに、あなたを僞はり奉らん。

お國　イヽヤ云やんな、僞はりぢや。證據は卽ちこの密書、其方の手蹟であらうがの。

ト前幕の密書を出して見せる。

元信　ヤ、その一通が、どうしてあなたの

お國　手に入つたると知らざるや。主を騙かる四郎次郎、其方が奪ひし系圖の一卷、あれなる牡丹の燈籠へ、隱し置きしも自らが、疾より存じて又ぞろや、取返せしぞ、うつけ者めが。

元信　さては系圖を入れ置きしを

銀杏　御存じありし後室樣、その上、若まで虜となし

お國　佐々木の血筋は根を絕つて、葉を枯らさうか、四郎次郎。

元信　サア、それは。

お國　但し今より心を改め、獨り淋しき自らが、枕の伽を、致すか元信。

元信　サ、その儀は。

お國　違背に及ばゞこの豐若。命を絕たうか。

元信　サア、それは。

お國　心に靡くか。

元信　サア

お國　サア〳〵〳〵、返事はどうぢや、四郎次郎。

トきつとなる。元信、思ひ入れ。

銀杏　コレ、四郎次郎さま、和子のお爲ぢや、後室樣へ宮仕へ。モシ、何事も仰せに任せて、ナア、コレ、御合點が參りましたか。

トこなし。元信、思ひ入れあつて

元信　眼前大事を抱へし身の、返事を否むも道ならず　銀杏の前が詞に從ひ、いかにも今より後室樣へお宮仕へ奉らん。何卒和子の一命を

お國　助け得させんその代り、銀杏の前はこの家に叶はぬ。爰から直ぐに追ひ返しや。

銀杏　すりや、自らは、お館には

お國　叶はぬ事ぢや。門外へ追ひ出し、猪狼の餌食ともなすが、せめてもこれまでの、自らが腹癒せ。女子ども、あの女を追ひ拂や。

女四　畏まりました。

あや　サア、銀杏の前、御前に叶はぬ

小萩　早う出や。

元信　すりや、銀杏の前を

お國　我が見る前で追ひ拂や。
元信　でも、此まゝに館を出でなば
銀杏　アモシ、お家のお爲、二つには、和子のお命助ける爲、わたしや此まゝ
ト枝折り戸の外へ出る。
元信　いかにお爲といひながら
お國　女を庇ふは僞はりか。
元信　アヽイヤ、全く以て
お國　銀杏の前を、追ひ拂や。
朝顏　女中、立たんせ。
銀杏　ハイ……おさらばでござります。
ト捨て鐘、唄になり、朝顏、小萩。銀杏の前を引立て、向うへ入る。
元信　御覽の如く銀杏の前、この席を遠ざけまする上からは、思し召しに叶ひましたか。
お國　心にかゝる山の端も、ないて焦れし男郎花、今日思はずも逢うて滿足。自らが心にさへ從はゞ、
この若が命も助け、あの燈籠の一卷も……コリヤ、女子ども、この若、それへ。

撫子　ハツ。

ト走り寄つて赤子を受取り、介抱する。

お國　手馴れし琴を、これへ持ちや。

あや　ハツ。

ト後に飾りし琴を、よき所へ持つてゆく。

撫子　常々お慕ひ遊ばせし、元信さまにお逢ひなされて、さぞ御滿足。

あや　卽ち長柄、お土器、めでたう用意仕りました。

ト長柄の銚子、三方に土器をよき所へ置く。

お國　オヽ、よう心が附きました。コレ、元信、今思はずも自らが、世を味氣なう思ふゆゑ、この短冊へ一首の歌。これを其方へ

ト以前の短冊を渡す。元信、取つて思ひ入れあり

元信「秋草を形見とか見ん女郞花、衣の色に咲ける道の邊」……誠に、世を味氣なう思し召したることのお歌。元信、お目にかゝりし上は、此お心に引かへて、やがてめでたう戀歌の一首。まづそれまでは四郞次郞、頂戴いたすでござりませう。

ト短冊を袱紗のまゝ懐中する。

お國　すりや、銀杏の前は只今より

元信　何しに未練が殘りませう。

お國　嬉しや滿足。まだこの上に自らが、其方へ詳しう云ひたい事も、唱歌に准へしこの爪琴。

元信　お調べあるも又一興……さはさりながら心得ぬ、野末にかゝる御殿の造り。

ト思ひ入れ。よき時分より差し金の蝙蝠、夥しく御殿の内を舞ふ。元信、きつと目を附け

ヤ、かゝるお居間に蝙蝠の

ト思ひ入れ。この聲に撫子恟り、途端に赤子泣く。お國御前、思ひ入れ。

お國　何を其やうに

トしなだれる。

元信　でも、蝙蝠の

お國　コレ。

ト琴をシヤンと掻きならす。琴唄のかゝりになり、時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、元興寺の荒れ寺、本尊の後、朽ちたる體。柳しげり、草蓬々たる有さま。よき所に油紙帳を吊り、笈を置き、六部野宿の體。紙帳の内に一ツ鉦の音して、蝙蝠、夥しく群がり、時の鐘、蟲の音、物凄き體にて道具とまる。

矢張り堂の内にては赤子の聲、琴唄かすめて聞える。ト向うより駄荷藏、銀杏の前を引立て、立廻りながら出て、直ぐに本舞臺へ來て

銀杏　こりや其方は、宵に逢うたる馬追ひぢやな。

駄荷　知れた事だア。狩野の元信、銀杏の前、金にすべいと思つたに、手盛りをくつたこの駄荷藏、爰で逢つたが天の與へだ。女め・一緒にうしやァがれ。

銀杏　イヤ〳〵、自らは元信さまのお爲に、この身を捨てゝ入水する。爰放してたもいなう。

駄荷　さてこそ、元信と云ふからは、四郎次郎に違ひない。彼奴が在所を、キリ〳〵吐かせ。

銀杏　イヤ、其お在所は、どうも云はれぬ。マア、爰放して

駄荷　エヽ、面倒な。うしやァがれ。

ト引附ける。銀杏の前、立廻り。よき時分より捨て鐘きびしく、紙帳を破り、又平、世話六部の拵へにて、顔を出し窺ふ。駄荷藏、これを知らず、銀杏の前を引立て行かんとする。又平、後より駄荷

藏を、引附ける。駄荷藏振りかへつて
ヤア、うぬは野宿の六部めだな。マア、その女を

ト かゝるを見事に當てる。駄荷藏「ウン」と倒れる。

銀杏　ヤア、其方は又平

又平　銀杏の前さま、何ゆゑお一人、この所へ

銀杏　不審は尤も。自らは元信さまと只二人、豐若さまを介抱なし、行くへ定めぬこの大和路、思ひがけなうお國御前、閑居へ便り、お家の系圖、若君まで、後室樣の手に渡り、夫のお側にある時は元信さまの御身の難儀と、その場を立退き、身を沈め、死ぬる覺悟ぢや。コレ又平、回向を賴む。南無阿彌陀佛。

ト 前の流れへ身を投げんとする。又平、これを留めて

又平　お待ち遊ばせ。合點のゆかぬ今の仰せ。お國御前は久世の里、その隱れ家にて歿り給ひ、御菩提所ゆゑ荒れ果てし、大和なる元興寺へ御埋葬。この世にござらぬ後室に、お逢ひなされし今のお詞。して、その館と仰しやるは

ト 赤子泣く。

銀杏　アレ、あの爪音の聞える所。殊に若君豊若の、せわらせ給ふあの泣き聲。

ト又平、思ひ入れ。琴の音、赤子の泣き聲する。

又平　誠や、かゝるいぶせき荒れ寺に、琴の音あるに幼な子の、泣き聲ほのかに聞ゆるは、もしや狐狸の業なるか。

銀杏　イヤ、ナウ、お館にあのお姿。

又平　ドレ。

ト堂の崩れより窺ひ見て

ヤヽ、後室はじめ並みゐる侍女。元信さまにも、その席に

ト駄荷蔵、起きあがつて

駄荷　ナニ元信が

ト駈けゆくを、又平、引廻し、立廻りあつて錫杖の仕込みを抜き、駄荷蔵を見事に切つて

又平　ハテナア。

ト思ひ入れ。時の鐘、風の音にて、この道具、元へぶん廻す。

元の御殿の道具に戻る。爰にお國御前、琴を調べゐる。元信、よき所に赤子を抱き、眠りゐる。後に
撫子、あやめ、朝顔、小花、ゐならび、軒に矢張り燈籠あり、琴唄、時の鐘にて道具とまる。

撫子　元信さま

あや　四郎次郎さま

四人　お目覺まされませう。

元信フツと心附いたる思ひ入れにて

元信　後室様の琴の音に、思はず知らず睡眠の、前後忘ぜし無禮の段

お國　絶えて久しき元信へ、聲も枯れ野の白らが、唄の唱歌も爪音も、調子も狂ふ

ト思ひ入れ。

元信　以前に變らぬ御音聲

四人　さぞお氣欝にいらせられませう。

お國　女子ども、元信を慰むる、銚子土器。

四人　畏まりました。

トこの時、下の方、生垣の蔭より

又平　その御酒宴のお相手に、拙者も罷りなりませう。

ト誂らへの合ひ方にて出で、よき所へ住ふ。

元信　ヤア、其方は又平ならずや。よくも存じて参りしぞ。

お國　ナニ、又平とは、元信ゆかりの下部よな。下ざまの身を以て、自らが目通りへ、酒宴の興に同席とは、緩怠至極、爰下がれ。

又平　イヽヤ、この席下がりますまい。合點のゆかぬ後室様、歿りたまふと聞きつるに、生けるが如き御有様。何とも以て心得ぬ。

元信　すりや、後室には、疾よりこの世を去り給ふか。

又平　疑がはしくば又平が、所持なすところの尊像の、奇特を以て

ト懐中より錦の袱紗に包みし厨子を出し、お國御前へさしつける。ドロ〱になり、お國御前、苦しきこなし、その姿忽ち生なりの異形なる形となり、前なる琴もこの途端に、大卒塔婆の括りたるになる。この時、下手より銀杏の前、窺ひ出て

銀杏　ヤア、後室様のお姿は

元信　この世を去りし死人の相好。

又平　さるにても館の結構、並みゐる侍女も、仔細ぞあらん。

ト尊像をさしかざす。大ドロ〳〵にて、御殿一度にバラ〳〵と變り、朽ちたる荒れ寺になり、緣側より茅薄生ひ茂る。この途端に四人の侍女、一度に消えて、めい〳〵損れたる賓頭盧、仁王の頭、如意輪觀音、靑苔附きし五輪になる。

元信　さてこそ妖怪、ござんなれ。

最前おくりし後室の、詠歌の短册。

ト懷中より出す。紙位牌になる。元信、驚ろき

日增院夏山妙道大姉。さては世に亡き御戒名。

ト思ひ入れ。

お國　アヽラ無念や、殘念や。恨みの念の去りやらず、再びこの土に歸り來て、詞交せし四郎次郎。共に奈落へ誘引せん。來れや元信。

又平　小癪な事を

元信　正しく系圖はあの燈籠。

ト幼な子を銀杏の前へ渡し、立ちかゝる。ドロ〳〵にて心火燃えあがり、燈籠のあたりへ立ちのぼる。

この時、燈籠砕けて、牡丹の花瓣、バラ〳〵と落ちて、古き佛前の燈籠となり、系圖の一卷、中より落ちる。

これぞお家の系圖の一卷。

ト手早く取上げる。

又平　御手に入りしか、元信さま。

お國　やはか渡さん、その一卷。

トきつとなる。又平、走り寄つて

又平　成佛あれや。怨敵退散。

ト持つたる厨子にてお國御前を打つ。大ドロ〳〵にて、魂ひ飛び去つて、煙り四方より立ちのぼり、お國御前の姿砕けて、髑髏残る。又平駈けより、髑髏を取上げ

ハテ恐ろしき、執念ぢやよなア。

ト三人キツと見得、大ドロ〳〵にて、燒酎火立つて、よろしく、ひやうし

幕

第一番目　大詰　名古屋館の場

役名——駿河前司久國。名古屋山三妻、葛城。名古屋小山三。腰元、宮路。下部、志賀内（實ハ犬上團八。下部、彦平。不破作左衛門（實ハ天竺徳兵衛。座頭、徳市（實ハ岩倉夜叉丸）

本舞臺、三間の間、高足の二重舞臺、一面の上障子、正面、金襖、彩色の花鳥。上の方に柳の立ち樹。下の方、松の立ち樹。柴垣、植込み、手水鉢、石燈籠を飾りつけ、舞臺前、水船に泉水のかゝり、よき所に少し小笹茂り、上の方に久國、上下衣裳にて刀を抜きかけ、立ち身。葛城、襠裲衣裳にて、これを隔て、宮路の腰元を圍うてゐる。序の舞にて幕明く。

久國　慮外な女を討ち果すを、なぜ葛城どの、とゞめ召さるな。

葛城　これはマア、久國さまの、いつにない御立腹。コレ、宮路、何をマア其やうに

宮路　サア、何も御慮外は致しませねど、御案内もなう、奥へお出でなさるゝを、お止め申したというてからに

葛城　そりや悪い、其方が悪い、ナ……サア、以後をきつと嗜みや。イヤ申し、久國さま、わたしがお詫び申します。マア／＼、御料簡なされて下さりませ。

久國　うぬ、ぶッ放す女なれども、葛城どのゝ詫びゆゑ、赦してくれるぞ。

葛城　ソレ、お禮申しやく〳〵。

ト宮路、ウヤ〳〵して

宮路　有り難う存じます。

トこれにて皆々住ふ。

葛城　さうして、あなたの今日のお出では。

久國　久國、今日參つた譯は……イヤ、女に申して詮ない事、承れば、夫山三には病氣とやら。然らば小山三元近に。

葛城　サア、その小山三どのには、室町の御前より、未だ下がりもござりませぬ……女に云うて益なき事とあれば、わたしが聞くにも及ばぬ事。

久國　おッつけ小山三、退出なさば、とくと面談。

葛城　それがよろしうござりませう。ソレ、宮路、久國さまへ、お茶なりと。

宮路　畏まりました。

ト立ちあがる。てんつゝになり、向うより彥平、石持の羽織にて尻からげ、門番の形にて、六尺棒を持ち、「下がれ〳〵」と云ひながら出る。跡より夜叉丸、座頭の拵らへにて、木琴を脊負ひ、竹杖を突

四幕目



又幕目



き、出て來る。

彥平　下がれ／＼と、これ程云ふに、下がらぬか／＼。

夜叉　ヤレハア、下がれの上がれのと、錢相場ぢやアあるまいし、口やかましいおさぶだア。

彥平　コレヤイ／＼、爰をどこだと思ふ。名古屋山三さまのお屋敷だワ。

夜叉　サア、それだアによつて、えざわざむくり申した。

彥平　そりやア、なぜ／＼。

夜叉　聞いてくんなさい。此お屋敷へは、おらが親仁が、先年上つてがいに、御最屓にあつかつたといふこんだが

彥平　ムウ。して、われが親仁の名は、何と云つた。

夜叉　三朝と云ひ申した。

彥平　成る程、三朝といふ座頭は、六年あとに此お屋敷へ來た事がある。しかもその時、矢ツ張りおれが、下がれ／＼と云つたが、ハヽア、そんならおぬしは、息子座頭か。

夜叉　さうだア。モシ、そんだから、通してくんさい。

彥平　サア、そんなら通してやりたいものだが、今日はお客もある程に、通す事はならぬ。下がれ／＼

ト棒にて叩き立てる。

夜叉　ヤレ、聞分けのない、通り申すよ。

彦平　ヤレ、情の剛い盲目めだ。

夜叉　ヤレ、情の張つた二本棒だ。

ト兩人爭ふ。

葛城　コリヤ〳〵、騷がしい、何事ぢや。

ト彦平、下にゐて

彦平　ハツ、只今御門の勤番いたし居りまするところへ、この盲人が、先年當お屋敷へ上がりました、三朝の悴と申して、通りますゆゑ、それで制しますのでござります。

葛城　さういふ事なら、なんぞ願ひの筋であらう。大事ない、これへ通しや。

彦平　畏まりました……サア、お坊、奧樣のお許しだ。ソレ、上がつたり〳〵。

夜叉　そりやこそな。親仁の時も、凹んだんべい。

彦平　嘘はない。

兩人　ハヽヽヽヽ。

彦平　サア〳〵、來やれ〳〵。

ト矢張りてんつゝにて、本舞臺へ來り

夜叉　ハイ、どんたもよろしう下さりませえ。

ト下にゐる。

久國　コリヤ〳〵、盲人、其方達には、生國を尋ねるが話しの最初。マア、いづれの者で、名は何と申す。

夜叉　わしかなア、わしやづない遠國だア。

久國　遠國と申すは、奧州であらう。

夜叉　オヤ、見通しだアよ。

宮路　さうして、名は何と云ふえ。

夜叉　德市と申しますて。

葛城　いま聞けば、先達て上がりし、三朝が悴とあれば、定めし三味線を、よう彈きやるであらう。

夜叉　アレハア、わしやァ不器用だから、三味ナア噛り申さない。その代りに、按摩ナア大將だて。

葛城　して又、なんの賴みで屋敷へは

夜叉　サア、按摩ナア名人だから、殿さアも奥さアも、定めて夜なべで、お草臥れナウなさるべいから、療治の企てべいと、それで罷り申した。

彦平　べら坊め、なんぞ願ひでもあるやうに吐かして、按摩を取る。イヤ、あんまり手もない座頭めだ、これでも、われが脊中へ脊負つて來たのは、座頭の坊のお定まり、琵琶か三味線であらう。國の名物、仙臺淨瑠璃でも、語つて聞かせろ〳〵。

夜叉　ヤレハヤ、このふとは、當推だアよ。わしが脊負つたア木琴だアでば。

久國　その木琴は先つ頃、洛中に流行いたした、珍らしき樂器。前司久國、所望したい。

葛城　ほんに、こりやよからう。久國さまへおもてなし、何をがなと思ふ折から

宮路　さぞ面白い事でござりませう。

彦平　それ〳〵、私しも前方聽きましたが、それは〳〵おつりきなものでござります。コレ、お坊、折角のお望みだほどに、その木琴を、やらかせ〳〵。

夜叉　アレ、親仁ナ聽きめして、わしがのはあんでもない。それだが、それえにおもしやるこんだナ、ちくとんべいぶん鳴らすべい。

ト木琴を出して前へ置き

わしが聲さア親不孝で、おかしかんべい。誰れぞそこで諷つてくんさい。

皆々　所望ぢや／＼。

ト これより下座へ取り、「だまされて咲く室の梅」の唄になり、夜叉丸、木琴を鳴らす事よろしくあつて納まる。

ヤンヤ／＼。

夜叉　いつまでぶッ叩いても同じ事ぢア。

久國　イヤ、なか／＼一興であつたわえ。

葛城　ほんに、夫の病氣慰めにもならうほどに。マア、奥へ行て、酒でも飲みや。

彦平　犬もあるけば、棒鱈にならぬやうに、頂戴しろ／＼。

夜叉　そいつはよかんべい。

久國　見たところが、屈竟の若い者。眼が明いてあるなら、なんぞの役にも……オヽ、幸ひ／＼、この祝儀に、紙花をくれう」

ト 懐より紙に包みし、二幕目のお國御前の落ち毛を出し、扇に乗せて

ソレ、祝儀の紙花。

夜叉　こりやア御馳走だア。

　　　ト夜叉丸へ突きつける。

　　　ト云ひながら、捻つて見て

お殿様、こりやア

久國　それこそは、佐々木の後室、お國御前が一念の、執着とゞめしこの黒髪、一字へ納めとらせんと

懐中なしたを其方へ紙花。

　　　ト夜叉丸、ムツとして

夜叉　こんな物を、あんにしべい。

　　　トそこへ投げ出す。薄ドロ／＼になり、この髪、蛇になり。うごめく。皆々、驚ろき

葛城　ても恐ろしい執着心。

久國　まだ怨念の晴れやらず

皆々　忽ち落ち毛の、蛇となりしは

　　　トこれを聞いて

夜叉　エ。

ト驚ろき立ちあがり、思はず目を明く。皆々、夜叉丸を見て

葛城　盲人、そちや眼が見えるか。

夜叉　あんのお前

ト下にゐて

痲疹で潰れで、皆目だアて。

ト思ひ入れ。

皆々　ハテナア。

夜叉　ドレ。お次で御酒さアねだるべいか。

葛城　そんなら盲人。

夜叉　奥さア

ト久國「ムウ」と立ちかゝる。葛城、キツと隔てる。

後方お目にぶらさがりませう。

彦平　ドレ、案内してやらうか。

ト唄になり、彦平先に夜叉丸、わざと探り〳〵奥へ入る。

久國　合點のゆかぬあの盲人。
葛城　それに不思議な今の蛇。
宮路　ほんに、お國御前さまとやらは、怖いお心でござりますなア。
葛城　イヤ〱、そりやお國御前さまばかりぢやない。可愛いゝ男を寢取られたら、誰れしも女子は同じ事。さういふうちにも、こちの人山三どのにも、もし惡性な事でもあると、そりや猶更、わしは巳の年巳の月巳の日巳の刻に生れたゆゑ、それは〱念の入つた、蛇の性ぢやわいの。
宮路　それはマア……よい事でござりますなア。
久國　初めて承つた葛城どのゝお年、巳の年巳の月巳の日巳の刻の誕生とは、ハテ珍らしいが、それは格別、いつ下がらうか知れぬ小山三。それより奧へ推參して、元春に面談せう。

ト立ちあがるを見て

葛城　イヤ、マアお待ちなされませ。取亂したる病の床へ、どうしてあなたを
久國　ハテ、いらぬ斟酌。

ト振り拂つて

元春に

ト奥へ行かうとする。葛城、入れかはつて

葛城　ても性急な久國さま。

久國　生れついたる短氣の蟲、奥へ踏んごみ、面談なすワ。

ト兩人、思ひ入れ。この時、向うにて

小山　待つた。

葛城　ありや慥かに小山三どの。

小山　元近、歸館いたしてござる。まづ〳〵お扣へ下されい。

ト大小入り、亂れのやうなる鳴り物になり、小山三、上下衣裳にて出てくる。跡より團八、奴の形にて、持草履を持ち、附添ひ出て、直ぐに本舞臺へ來り、小山三、兩人の中へ入る。

宮路　小山三さま、只今お下がり遊ばしましたか。

ト久國、團八を見て

久國　ヤア、其方は

ト團八「ア・モシ」と思ひ入れ。これにて皆々よろしく住ふ。

小山　これは〳〵、駿河の前司久國どの、只今あれより見受けますれば、姉者人と、何事のお爭ひでご

ざりまするな。

久國　イヤ、貴殿のお下がりを相待ちをつた。あまりの事に待詫びしさ、奥へ參つて御舍兄と、それを兎や角、跡での氣の毒。

小山　して又、拙者をお待ちの仔細は

久國　外でもござらぬ、佐々木の一族、狩野四郎次郎元信こそ、大切なる預かりの、日月の印を紛失させし大罪人、剩へ嬰子豐若、銀杏の前もろとも同道なし、皆暮れに行くへ知れず。名古屋山三元春には、親しき知音の事なれば、隱まひ置かるゝは定の者。受取り立歸るやうにと、久國御意を受けて參つた。とく〳〵お渡し下されい。

小山　こは存じも依らぬ只今のお詞。尤も四郎次郎儀は、我れ〳〵が親、名古屋山左衞門が、元服烏帽子親となつて、元信と名乘ります仲ながら、佐々木の家沒落の後は、音信とても承らねば

園八　イヤ、憚りながら、左樣でもござりますまい。文通の儀はこの奴も、思ひ當つた儀もござりますれば

葛城　コリヤ〳〵、新參者の其方が、何を存じて。殊に其方達が口出し致す席ではない。扣へて居やうぞ。

久國　アヽ、コレ〳〵、葛城どの、其やうに呵らつしやるな　跡先も辨まへぬ、下郎とは云ひながら、存じた事なら申すが正道。ヤイ、して、如何いたした。

團八　サア、元信がこの館に、隱まひあるかないか、そこのところは存じませぬが、とつくりお尋ねなされたら、在所は慥かにそんじよそこ、實正知れぬといふ事は

小山　ヤイ〳〵、默り居らう。すりや、其方が心では、元信が在所、我れ〳〵が

葛城　滅多な事を口外して、主人へ難儀をかけるのか。

團八　でも、定めしその在所を

小山　まだ吐かすか。慮外な奴の。この所に用事はない。次へ立て〳〵。

團八　ネイ。

ト思ひ入れ。

葛城　宮路、其方も次へ立ちや。

宮路　畏まりました。

團八　そんなら、お旦那。

ト久國と顏見合せ

ドレ、大部屋で休息せうか。

ト合ひ方になり、團八、宮路、下座へ入る。

葛城　ほんに、下部といふものは、何を聞いてか、しどもない、をかしいものではあるわいの。

ト久國、小山三の側へ寄り

久國　小山三、もし隱まひなくば、ないにして、いづれに居るか、行くへが聞きたい。

小山　これはしたり、久國どの、下郎が詞を誠にして

久國　イヽヤ、たとへ下郎が申さずとも、在所はよつく存じの筈。小山三どのが云はれずば、山三の奥方、存じた所を申してくりやれ。

葛城　夢いさゝか存じませぬ。

久國　アノ、小山三も

小山　毛頭存ぜぬ。

久國　然らば身共が、刀にかけて

小山　アノ、某に

久國　云はして見せう。

小山　そりや、如何して

ト久國、刀へ手をかけ立ちあがる。小山三、突きまはして立ちあがる。葛城、この中へ入り、三人よろしく、ちよつと立廻り。小山三の懐より摺込みの袱紗を落す。久國、手早く取上げ、裏の發句を見て

久國「傘に塒かさうよ濡れ燕」

小山　それを。

ト來るを、袱紗を持ちかへ

久國　傘は名古屋の卽ち定紋、濡れ燕はどれ合ひの、四郎次郎と銀杏の前、塒かさうは隱まはんと、書面を憚かる袱紗の返書、元信どのへ元春と、書いてあるのが何より證據。發句にそれと底意は知れた。これでも在所は知れぬのか。

小山　サア、それは……とは申すまい。

久國　なんと。

小山　傘に燕を取なせしは、五月雨月の兄が秀逸、自讃心で取あへず、短册ならぬこの袱紗、拙者が方より元信へ、送らんものと思ふうち、佐々木の家は沒取ゆゑ、ツイそれなりに懷中なし、この

場の仕儀に迷惑至極。

葛城　元より知らぬ在所のお尋ね……必らずともに久國さま、疑ひお晴らし下さりませ。

久國　すりや、どうあつても知らつしやらぬか。

小山　いかにも。

久國　そんなら面晴れし、佛神かけて、この誓紙へ血判おしやれ。

ト懐より連判狀を出す。小山三、受取り、開き見て

小山　こりや逆意の連判。

ト久國、引取り

久國　この誓紙へ血判するか。ならにやア在所を云ふ心か。

ト小山三、思ひ入れあつて

小山　在所知らねば云ふ事も、なんと誓紙へ、血判いたさう。

久國　すりやアノ、これへ。

葛城　アヽコレ、滅多な

小山　モシ……兄も勸めて共々に

葛城　すりや後までは何事も
小山　拙者が胸に
葛城　包む袱紗の
久國　發句の手爾波。
小山　奥の一間で、暫しが間
久國　小山三どの、久國奥で、相待ち申すぞ。
　　ト唄になり、久國、奥へ入る。兩人、跡見送り、二重舞臺へ上がり
小山　元信一家が忍び居る、在所を探す前司久國。何卒佐々木の越度となりし、寶の印を詮議なし、めでたく家の再興を、なさせんまでは當館に、密かに隠まひ置かせんと、心を籠めし袱紗の一句。
葛城　ほんに味より云ひくろめ、一つは遁がれ又一つ、朧氣ならぬ誓紙の連判。してマア事の納まりは
小山　ハテ、互ひに云はれぬ在所と連判。事に望めば愚人の久國。
　　ト討つて捨てるといふ思ひ入れ。
葛城　それでは、もしや
小山　武士の身の上、義ゆゑに命を

葛城　エ。

　　ト思ひ入れ。

小山　モシ。

　　ト制して唄になり、障子下りる。ト、どろ〲になり、よき所より夜叉丸、矢張り、座頭の形にて、印を結びたるまゝせり上がる。ト直ぐに引拔き、誂らへの形になり、本神樂のあしらひにて、夜叉丸あたりを見廻し、思ひ入れあつて

夜叉　建武の花と榮えたる、吉野の皇居も時なるかな、いま義政の世に到つて、南朝方は跡もなく、亡びし中に我れ一人、その場を遁がれ身を忍び、竹杖外道の奇術を學び、折を窺ふ岩倉の夜叉丸、然るに天竺德兵衛が、謀叛に與みし、この館へ、座頭となつて入込んだも、名古屋の重寶、飛龍丸の一振り、天下を掌握なさんには、無くて叶はぬ名劍ゆゑ、德兵衛にも今日姿を變へ、共々に入込む筈。どちらへなりと取り得れば、大望成就は瞬くうち。ドレマア、そろ〱寶藏から、飛龍丸の在所を嗅いで見ようか。

　　ト下の方へノサ〱來ると、障子の内にて

久國　怪しい賣僧め。そこ動くな。

ト管絃になり、障子上がる、久國、蕒盆を扣へゐろ。夜叉丸、見て

夜叉　こりや最前の久國とやら。我れを捕へて云ふ事ありとは。

ト此うち久國、下へ下りて

久國　汝が入込む初めより、只者ならぬと思ふに違はずその振舞ひ。望みある身の某へ、幕下とならば見遁がしくれん。心を改め、味方なさんや。

夜叉　ハヽヽヽヽ、いかにも久國、よい推量。我れこそ南朝、恩地が一族、四海を騷がす岩倉夜叉丸。汝如きに身をひそめ、膝を屈する者でない。無益の事を云はうより、某に味方しろ。

久國　ヤア、舌長なその一言。我れに與みせぬ者ならば、此まゝ見遁がし置くべきや。三寸繩に縛しあげ、室町御所に引ッ立てるぞ。

夜叉　ヤア、いらざる愚人め。たとへ鎖に繫ぐとも、神變不思議の幻術にて、忽ちこの身は雲霞、滅多にわいらが手に合はうか。

久國　そこを手練の太刀先にて、夜叉丸、汝を

ト白刃を拔いて切りかける。夜叉丸、キッと印を結ぶ。ドロ〳〵になり、久國、動かれぬ思ひ入れ。此うち奥より小山三、下座より團八出かけ、これを見て

小山　さてこそ怪しき、おこのえせ者。
團八　ドレ、奴めが引ッ縛つて。
　　　トかゝる。同じく五體竦む。
小山　者ども、來れ。
　　　トこれにて上下より股立ち鉢巻き侍ひ二人づゝ、鐵砲を持ち、バラ〳〵と出て
侍ひ　曲者、動くな。
　　　ト取巻く。
小山　身動きなさば、火蓋を切らうか。
夜叉　サア
團八　腕を束ねて繩かゝるか。
夜叉　サア
皆々　サア〳〵〳〵
小山　ソレ、打ちとめい。
侍ひ　ハッ。

ト筒先を向ける。

夜叉　ソレ。

ト舞臺前の水船へ見事に飛びこむ。パッと水煙り立つ。皆々これをキッと見て

皆々　これは。

久國　詮議ある曲者は、この水中へ飛び入りしか。

小山　出口々々をさし固め、門戸を閉ぢて館の隅々、吟味いたさば召捕らん。必らずぬかるな。

團八　油斷ならぬは水門口。正しく拔け道。

小山　其方達は、急いで裏手へ。

團八　心得ました。

ト侍ひは下座へ入る。團八は花道へ、ツカ〳〵と行く。よき程に向うにて「上使」と呼ぶ。これにて皆皆思ひ入れ。

久國　ナニ、上使とな。

小山　元近下城の折までも、何御沙汰なき上使の入來。合點ゆかざる今日の仕儀。

ト思ひ入れ。

久國　仔細は兎もあれ義政公より、上使とあれば、出迎ひ召されい。
小山　志賀內、引け。
團八　ハツ。
トこれにて團八、引返して下の方へ入る。太鼓謠になり、向うより德兵衞、燕手、長上下にて出て來り、花道にとまり
德兵　足利將軍義政公より上使として、新參ながら罷り越したる、不破伴左衞門重勝。
小山　俄の事ゆゑ、設けの席もしつらひませねど、まづ〳〵これへ、お通り下されい。
德兵　上使でござれば罷り通る。許し召され。
ト太鼓謠の切れにて、德兵衞、本舞臺へ來り、ズツと上へ通り
小山　出仕は一つ室町ながら、未だ知る人にも相成りませぬ。拙者は主、名古屋山三が弟、同苗小山三元近でござる。
久國　某ことは、駿河の前司久國、折よく來合せ、貴面いたす。
兩人　以後はお見知り下されい。
德兵　これは〳〵、拙者はこの度義政公の、お見出しにあづかる、不破伴左衞門重勝でござる。以後は

別懇に頼み存じます。

小山　何がさて、思ひ設けぬ上使の趣き、一通り仰せ聞けられ下さりませい。

徳兵　いかにも。

ト席を改め

義政公よりの上使。

小山　ハア、。

徳兵　この度、若君義尚公、御誕生の嘉儀として、義政公より名劍のお授けあるべきところ、然るべき一振りなし。これによつて、名古屋の家に相傳なす、飛龍丸の太刀、差上げよとの嚴命、了承あつて重勝へ、急ぎ一腰、渡されてよからう。

小山　すりや、家の重寶、飛龍丸の一腰……　御所望あるは身の面目、何しに違背はござらねども、兄元春へ一應申し聞け

トきつと云ふ。この時、下座にて

徳兵　上使と聞けば早速に、出迎ふ筈の名古屋山三、上を恐れぬ無禮の仕方。

葛城　館の主、名古屋山三、お上使樣へ、お請け致すでござりませう。

ト管絃になり、葛城、銚子、杯を持ち出る。徳兵衛、見て

徳兵　こりや元春と思ひの外、して其方は

葛城　卽ち山三が妻の葛城。元春ことは、いつぞやより所勞によつて、室町御所の出仕も止め居ります
れば、義政公にもよう御存じ。それゆゑ妻の私しが名代

徳兵　して、仰せ越されし上使の趣き、とくと承知いたされたか。

葛城　成る程、あれにて承知いたしてござります。御上使樣には御酒一獻、久國さまにも御相伴。

ト銚子杯を徳兵衛が前に置く。

久國　イカサマ、身共も御上使の、お相いたすでござらうが

小山　あまりと申せば粗末の至り。ハテ、何をがなおもてなし……オヽ、幸ひ。

ト合ひ方になり、以前の木琴を見附け、思ひ入れ、撞木の手拭掛けを木琴の上に置き、これへ最前の
袱紗を帆のやうにして、船に見立て、徳兵衛が前へ持ち來り

取りあへず小山三が、御上使樣へこの島臺。サヽ、これにて一つお過し下され。

久國　見れば以前の木琴へ、手拭掛けた袱紗の眞帆。

徳兵　お心添への寶船。イヤ、どうも云へませぬ。

ト 杯を取上げる。葛城、つぐ。

小山 イヤ、こりや福神の船ならず、國々渡海の檜垣船、しかもその名は大日丸。

徳兵 なんと。

ト思ひ入れ。

小山 板子一枚下は地獄と、恐ろしき業とはいへど、馴れては安き浪の上、その世渡りを引かへて、いらざる企て船頭が、山の上越す天下の望み、及ばぬ事に身の果は、獄門の木にかゝるであらう。

徳兵 イヽヤ、獄門台獄、磔刑承知。望みかゝつた大鵬の、心をなんぞ雀が知らん。あぐちも切れぬ小山三が、我れをもてなす船の島臺。心に叶はぬ。持つて下がれ。

ト立ち際に木琴を蹴返す。ドロ〳〵になり、この木琴の内より、以前の髪の毛の蛇出て、這ひまとふ。徳兵衛、これを見て怖るゝこなし。皆々キツと徳兵衛を見て

葛城 又もや以前の落毛の蛇。

小山 出づるや否や恐るゝ風情。

久國 こりや重勝にも、蛇は

三人 お嫌ひと見えますな。

ト これにて徳兵衞、キツとなつて

徳兵　イヤ、好きでござる。

ト 其まゝグイと引ツ握む。蛇、手にうごめく。

三人　アノ、お好きとな。

徳兵　好物ものゝ御饗應。重勝、賞翫仕つた。

ト 懐へ入れ

して、飛龍丸の名劍は

葛城　後刻あなたへ。

徳兵　然らば暫時

小山　御上使樣。

徳兵　案内おしやれ。

ト 唄になり、徳兵衞、葛城、小山三、奥へ入る。障子下がる。久國殘る。下座より團八出て

團八　久國さま。

久國　いま來つたる伴左衞門、正に彼奴こそ天竺徳兵衞、折を見合せ胸中を、明かして彼れと事を計

らん。

團八　味方に入れては鐵の、楯をついては敵はぬ德兵衞、柔らをくれて、此方の一味に。

久國　その儀はちつとも氣遣ひない。それにつけても先達て、我が取り置いたる佐々木の預かり。

ト懐より序幕の日の印を出し

この日の印を山三はじめ、家内の奴等に見せてはむづかしい。團八、われに暫しのうち

ト團八へ渡す。

團八　しつかりと預かりました。拙者がこの家へ身を寄せしも、何かの事を嗅ぎ出す爲。

久國　隨分ぬからず、心を配つて

團八　合點でございます。

久國　我れはこれより德兵衞を……ソレ。

ト管絃になり、下座へ入る。

團八　サア、面白くなつて來たわえ。久國さまの望みの通り、すつぱりうまくゆく日には、おれも忽ち國取り大名。併し、得てこんな事は、床へ廻る先になつて、貰はれるやうな目にあふものだ。

ト奥にて

宮路　ハイ／＼、畏まりました。

トこれにて團八、後に窺ふと、矢張り合ひ方にて、下座より宮路出て

ほんに、今日のやうな忙しい事はないわいの。ドレ、お燈籠へ灯の用意を

ト下の方へ來る。團八、後より抱きつく。

エヽ、誰れぢやいな。惡い事を……爰放して下さんせ。

トやう／＼振り拂ひ、團八を見て

志賀内どのぢやないかいの。

團八　成る程、今は志賀内だが、おしつけ、見やれ、馬に乘つて、槍を突かして見せるワ。コレ、宮路さうなる時は、おぬしが今ウンと承知さへすれば、直ぐにも女房だ。どうだえ／＼。

宮路　エヽ、毎日々々アタしつこい。わしやそんな事は知らぬわいな。

團八　サア、その知らぬところを教へてやりたい。ツイマア爰で

トまた抱きつかうとする。突きのけて此方へ逃げる。此うち捨ぜりふ。下座より彦平、ウカ／＼出て、この中へ入る。團八、彦平を捕へる。兩人、愕り。宮路、下座へ逃げようとするを、團八、捕へてくる。

彥平　エヽ、味をやるなノヽ。
團八　サア、その味をやらせないから、この通りだ。
宮路　コレイナア、そりやどうなりとおやけれど、わたしや色がましい事では、どうも
彥平　コレノヽ、そんなら物は相談、おれが水入らずに、仲人してやらうか。
宮路　サア、それでは
ト困る思ひ入れ。
團八　こいつは有り難い。コレ、親分、賴むワノヽ。
彥平　賴むと云はれては、一番肌を脫がずばなるまい。コレ、姐え、おぬしもどうで一度は、亭主を持たにやアならぬものだ。そんならアノ志賀內と、夫婦になつてやつてくれゝば、おれも賴まれた甲斐があるといふものだ。
ト宮路思ひ入れ。
宮路　アイノヽ……もう、お前までがそれ程に、云うて下さんす事ぢやによつて
彥平　承知かノヽ。
ト宮路うなづく。

サア、値がなつたといふものだ。とてもの事に、爰で内祝言をさせたいものだ。ドレ、西の宮を五ンつく當つて來よう。

團八　オツト、幸ひ爰に銚子杯。

ト有あふ銚子杯を出す。

彦平　イヤ、そいつは奇妙々々。

ト此うち宮路は抜き足して、ソツと下座へ逃げて入る。ドロ／＼にて、よき所へ誂らへ仕掛けの蛙出る。兩人、これを知らず、宮路と思ひ

サア／＼、嫁御から、飲んで獻したまへ／＼。

ト杯を蛙へさし、酒をつぐ。蛙、酒を飲む。彦平、その杯を團八へやる。團八、酒を飲むうち

めでたく一つ諷はずばなるまい。……高砂や、この浦船に帆を揚げて……めでたい／＼、子分といへば眞實の子も同然。これから二人ながら、孝行にして下さいよ。

ト蛙、口を動かす。

團八　アレ、舅がよくつて仕合せだと云ひます。

彦平　そりやァ嬉しい。成る程、おぬしが惚れたも無理はない。目許なら口許なら、ハテ、尋常な生れ

つきだぞ。どうぞ早く子を生んで、孫の顔を見せて下さい。

ト蛙、口を動かす。

團八　なんだ、もし女の子を生んだら、お玉とつけよう……お玉はよからう。

ト これより出鱈目のをかしきせりふ。いろ〳〵あつて

ナニ寐よう。おらア先刻から待ちかねてゐるワ。

彥平　エヽ、畜生め。

ト蛙の尻を叩く。蛙、ピョイと飛ぶ。

これから手酌で樂しまう。コレ、嫁御、おらア此方を向いてゐるから、ちつとも遠慮はないよ。

ハテ、そんな野暮な親ぢやアないわな。

ト此方向いて獨り酒を飲んでゐる。團八、蛙にしがみつく。ドロ〳〵になり、團八の持つてゐた日の印を咬へて、よき所へ消える。團八、悶絶する。彥平此うち心附かず、フト振りかへり、團八を見て

呼び生けると、團八、心附き

團八　アノ宮路めは

彥巾　べら坊め、今まで女房と一緒だつたぢやアないか。

ト團八、懷を探して

團八　ヤア、さては大事の日の印を、取りやアがつたな／＼。何をおれが知るもので

彥平　此奴は、いろ／＼な事を吐かしやアがる。

團八　知らぬと吐かしやア、殺しても取返すぞ。

彥平　うぬ、親に手向ひが、ならばして見ろ。

團八　しかねるものか。

ト切りかける。

彥平　此奴が／＼。

ト同じく拔いて切りかける。此うち始終薄ドロ／＼、兩人、切りあひながら下座へ入る。矢張りドロドロ、大小の合ひ方になり、障子上がると、德兵衞、印を結びゐる。この時、今の蛙、日の印を咬へ舞臺へ出る。

德兵　岩倉の夜叉丸……ナニ、すりやその印が、佐々木の預かり、日月の印の一つとな。ドレ

ト下りて來て、これを取り、改め見て

誠に……ナナ、ナニ……そりや、氣遣ひおしやるな。飛龍の太刀は、はや某か手に入つたも同

然、安堵おしやれ……ムウ、その浪頭の名鏡は、肌身離さずこの通り、

ト懐より序幕の鏡を出し

飛龍丸さへ取り得し上は、貴殿も我れも、かねての本懐、達せん事は瞬くうち、喜びめされ〳〵

ト始終、蛙と物語りの思ひ入れ。奥にて

葛城　御上使樣、いづれへお越しなされました。

トこの聲にて德兵衞、蛙に思ひ入れ。薄ドロ〳〵にて蛙、また元の所へ消える。德兵衞、鏡と印を懐中して、何氣なき思ひ入れ。合ひ方になり、奥より葛城、飛龍丸の箱を持ち出で

重勝さま、これにお出でなされましたか。

德兵　葛城どの、飛龍丸は、いよ〳〵お上へ。

葛城　サア、名古屋の家の重寶ではござりますれど、義政公の御所望に、任せますも、一つの譽れと、これへ持參いたしました。イザ、お受取り下さりませ。

ト三方へ箱を載せて、德兵衞の前へ出す。德兵衞、トックリと改め

德兵　燒刃金色、飛龍の天に映ずる勢ひ、聞きしに優る天晴れの名作。君にもさぞやお喜び。一振り受取る上からは、最早重勝。お暇申さん。山三どのへも、よろしう頼み入ります。

ト飛龍丸を持つて立ちあがる。葛城、思ひ入れ。

葛城　ア、申し。

ト袖を扣へる。

徳兵　御用かな。

葛城　オヽ堅。

トぢつと手を持つて、恥かしき思ひ入れ。徳兵衞、振りきり

徳兵　如何めさるゝ。

葛城　サア、こりやアノ……伴左衞門さま、惚れました。

ト顏を隱す。

徳兵　ヤ。

ト合ひ方變る。

葛城　女子の果敢ない心から、先刻に初めてお目にかゝり、ても立派な殿御ぢやと、フツと思ふと遣る瀬なう、心で心を幾度か、思ひ返せどいとゞ猶、忘られぬのがこの身の因果。あなたのお氣には染むまいけれど、どうぞ一度は、わたしが願ひを……叶へて下さりませいなア。

六幕目



第二番目序幕



ト思ひ切つて云ふ。徳兵衞、ムツとして氣を替へ

徳兵　ハヽヽヽヽ、こりや、葛城どのには、御酒まゐつたな。新參者と思し召し、重勝を弄らつしやるのか。

葛城　なんの、あなたを、勿體ない。

徳兵　イヤ、云はつしやるな。承つた事がござる。葛城どのは、もと島原、上林の太夫とやら。山三どのと深く馴れそめ、根曳きされての夫婦仲。その元春といふ、夫のある身で

葛城　サア、そこが花にはうつらふ習ひ。昨日までも今朝までも、山三どのより外の男は、見もせまいぞと思うたも、どうした縁に引かれてや

徳兵　そりやアノ眞實

葛城　ハテ、嘘に男に惚れられませうか。

徳兵　茲な、いたづら者めが。

葛城　エヽ。

徳兵　一世をかけたる妹脊仲、それになんぞや操を捨て、初めて逢ひし某まで、人非人と笑はすや。誠に流石流れの身の、素性を顯はす賤しき浮れ女。伴左衞門は武士ぢやぞ……さらばだ。

ト ずつと行かうとする。此せりふのうち葛城、面目なき思ひ入れあつて、この時

葛城　さうぢや。

ト徳兵衛が持つたる飛龍丸に手をかける。徳兵衛、留めて

徳兵　こりや、なんとする。

葛城　なんとゝは重勝さま、思ひあまつて女子の口から、恥かしい事云ひ出して、今のお詞聞いて後、どうして生きてゐられませう。せめてあなたのお刀で、死ぬるがわたしの身の本望。留めずと放して。

徳兵　イヽヤ放さぬ。死ぬるに及ばぬ。

葛城　とは又どうして。

徳兵　それほど我れへ執心なら、心中見た上、得心せう。

葛城　そりやアノ、ほんまに。

徳兵　刀にかけて。

ト葛城、思ひ入れあつて

葛城　その心中は

ト徳兵衛が持つたる飛龍丸を拔いて、手早く箱の上にて指をポンと切る。大ドロ〳〵、これにて徳兵衞、苦しみ、茫然となり、懐より序幕の白氣立ちのぼる。諸所にて數多の蛙の聲する。葛城、白刃を持ち、キツと思ひ入れあつて

さては自らが、巳の年月揃ひし血汐を、飛龍丸へ注ぐ時は、蝦蟇の妖術消ゆるとある、夫の指圖に計らふところ、疑ひもなきこの場の樣子。ハテ、不思議な事もあるものぢやなア。

トしやんと白刃を鞘へ納める。ドロ〳〵打ちあげる。蛙の聲やむ。直ぐに遠寄せ。徳兵衞、心附き、思ひ入れあつて

徳兵　よしなき事に、思はぬ隙入り。ソレ

ト葛城を尻目にかけ、立ちあがる。この時、左右より軍兵四人、四天の形にて槍を持ち、ツカ〳〵と出て、徳兵衞を取卷き

四人　やらぬワ。

徳兵　こりや伴右衞門を何とする。

ト下座にて

小山　ヤア、伴右衞門となつて入込みしは、逆賊の張本、天竺徳兵衞、幼名赤松政則へ、名古屋小山三

見參々々。

トつゝかけにて、小山三先に、宮路、肌脱ぎ、紅絹の襷、長刀を持ち、團八、彥平、脱ぎかけの形にて出て、徳兵衞を取卷く。

徳兵　ヤア、上使に來りし伴左衞門を、何を以て逆賊とは。

小山　ホウ、そも汝の來りしより、彼奴こそと心をつくるに、蝦蟇の奇術を行ふのみか

葛城　心も猛き丈夫の、僅かの小蛇に恐るゝゆゑ、それと察せし天竺徳兵衞。

宮路　この上たとへ爭ふとも、詮なき事と心を定め

團八　降參するがその身の徳兵衞、この志賀內もこれまでの、惡事を悔んで又元の、團八の名に返り忠。

彥平　忠も不忠も內證は、親子の仲で最前は、危なく互ひに討ち果す、命を拾つて幕際へ、似合はぬ顏の實事師。

小山　斯く取卷く上からは、俗性明かして

皆々　降參なせ。

徳兵　ヤア、小癪なる鼠の輩、たとへ本名あればとて、汝等如きに名乘らんや。イデ一々に、目に物見

せん。

ト印を結び、いろ〳〵あつて、その奇特なきゆゑ

ヤヽヽヽヽ、これは。

小山　最早いかほど行ふとも、汝が奇術は消え失せたるワ。

德兵　ナヽ、なんと。

葛城　よも、合點がゆくまい。夫山三が教へに隨ひ、幸ひ自らが巳の年度、揃ひし血汐を其方に近寄り この飛龍丸へ注ぎしゆゑ、蝦蟇の妖術、忽ち消えしと知らざるや。

德兵　すりや、色に事よせ葛城が、その名劍にて切り離せし、指の血汐に妖術を挫きしか。チエヽ、殘念だ。

ト思ひ入れ。

斯くなる上は我が本名、名乘つて聞かせる、よつく聞け。いかにもわいらが推量の通り、件左衛門となつて入込みしは、天竺德兵衛、誠は赤松滿祐が一子、天下を握らん大日丸、政則とは、おれが事だ。

ト肌を脫ぎ、着込みの形にて、キッと見得。

皆々　さてこそな。

徳兵　この上は、切つて〳〵切り死だ。どいつも、こいつも觀念なせ。

小山　ヤレ待て政則、飛龍丸の一腰に、過ちなければ仇なき其方、この場は見遁がす、早まるな。

ト此うち久國出かけ

久國　ヤア、足利の祿を喰みながら、勇氣に恐れ逆賊を、見遁がし歸す大腰拔け。ドレ、某が政則を、

ト拔いて切つて行く。徳兵衞、その手を握つて

敵ながらも仁ある小山三、その返禮に故あつて、我が手に入りし、この日の印、佐々木のゆかりへ、渡しめされ。

皆々　ナニ、日の印とは

久國　それを。

ト振りほどいて取りにかゝるを徳兵衞、下の方へ突きやる。小山三、下の方へ隔てる。印は葛城の手に入る。

小山　ヤア、汝こそ謀叛の大罪。連判添へて、室町御所へ。

久國　イヤ、我れよりはアノ政則。

徳兵　生けよと云ふとも運の窮まり。心に殘るは足利の、この浪頭の名鏡は、他の藻屑と、なすが腹癒せ。

ト鏡を出して其まゝ前なる水船へ打込み、こなし。ドロ／＼になり、一面に水氣立ちのぼる。皆々、これを見て

葛城　すりや、浪頭の名鏡とや。

小山　水氣盛んに、アレ／＼

久國　奇特は眼前

團八　この場の不思議

彦平　希代な事も

皆々　あるものぢやなア。

ト此うち徳兵衛、二重舞臺へ上がり

徳兵　早この上は足利の、惠みに育つ天ヶ下、この土の土は踏まざる政則。

ト一腰を腹へ突き立てる。

小山　殘るは以前の岩倉夜叉丸。取逃がさぬやう

四人　心得ました。
　　　卜久國、葛城の持つ日の印へ心意氣。
團八　久國、動くな。
徳兵　方々、さらば。
皆々　どつこい。
　　　卜二重舞臺に徳兵衞、上の方に小山三、久國に詰め寄せ、葛城は日の印と飛龍丸を三方に載せ持ち、宮路は長刀を構へ、下の方に彦平、團八、軍兵四人、各々引張りよろしく見得。カケりにて　幕
　　　右幕の間遠寄せ。
　　　本舞臺、三間の間、眞中に誂らへの樋の口、左右石垣。この上へ玉椿の垣根。この前通り浪板。爰に前幕の軍兵四人、矢張り四天の形にて、各々槍を掻込んで見得。支度出來次第、引返す。
軍一　赤松政則發起なし、切腹したとはいふものゝ
軍二　いま一人の岩倉夜叉丸、尋ね探して討取れと
軍三　仰せは受けしが、その行くへ、いづくに埋んでうせるとも

軍四　搦め捕つたら褒美の山。まづ樋の口が合點がゆかぬ。

軍一　いづれも、一度に。

三人　合點だ。

ト樋の口へ槍を突ッかける。ドロ／＼になり、四人、苦しみ、目くるめいて左右へ倒れる。バッタリ音して、本神樂のやうなる鳴り物、時の鐘にて、樋の口明くと、中より大蛙、幕前の水船へ打込みし鏡を咬へ、ノタリ／＼と出てくる。この時、四人、心附き

四人　ソレ

ト一度に又槍を突きかける。ドロ／＼にて四人、タヂ／＼となる。蛙は前の水船へ飛びこむ。四人、これを見て

オヽ。

ト驚ろく思ひ入れ、よろしく、ひやうし　幕

幕引附けると、ドロ／＼にて、水船を泳ぎゐたりし蛙、花道へ飛びあがる。この蛙、引拔きにて、中より夜叉丸、坊主、誂らへの形にて、鏡を持ち、スツクと立ちあがり、キツと見得、出端のやうなる誂らへの鳴り物になり、花道を振つてゆく。よき程に正面を向き、印を結ぶと、其まゝ夜叉丸、また

蛙になり、ノタリ〳〵と入る。打込み。

第二番目序幕

生玉境内の場
重井筒の場
木津川堤の場

役名――羽生屋助四郎。赤井長助 實ハ 茨木逸當。木戸番、彌十。見世物師、藤六。質屋番頭、利兵衛。與右衛門妹、お宮。重井筒の女主、妙林。藤六妹、おかね。箱廻し、金五郎。藝者、小さん 實ハ 元信妹、綸合。山住伊平太。村越良助。重井筒下女、おさの。渡し守、又平。木津川與右衛門 實ハ 土佐又平重興。

本舞臺、三間の間、淺黄幕。上の方に石の鳥居、この前に葭簀張りの茶見世。お宮、やつし前垂れにて、茶を汲んでゐる。この床几に妙林、錣のある頭巾、比丘尼姿の拵らへにて、腰をかけてゐる。正面に逸當、居合抜きの拵らへにて、刀を差し、小僧を相手に口上を云つてゐる。下の方に見世物芝居のかゝり、女の立ち姿を描きし看板を出し、この前に彌十、木戸番の拵らへにて、札を持ち、呼んで

ゐろ。下の方に、錢箱に鹽を盛りあげ、柿の蔕に大女淀瀧といふのを立て、すべて大阪生玉、鳥居前の體。幕の内よい口々の仕出し大勢、行き違うてゐる。辻打ちにて幕明く。

彌十　サア〳〵、評判ぢや〳〵、評判の蛇使ひは、これでござい〳〵。

逸當　お立合ひのお方は皆御存じの、拙者定見世は卽ち堂島の御藏前、赤井長助が家の看板、飾り置いたるあの大太刀、後々にては鎖鎌の早業……左樣でござい……毎度御披露いたす齒磨、反魂丹。御用のお方は荷箱の脇へ寄つて、お求めおかれませう……御用なれば居合ひの前方。この間に仰せつけられ下さりませう。

ト齒磨の箱を持つて賣り步く。仕出し皆々、捨ぜりふにて買つて入る。逸當、こなしあつて

ヤレ〳〵、今日は夥しい參詣であつた。

みや　暑いので、さぞ草臥れなさんしたであらう。

逸當　イヤモ、口が酸くなりました。お宮さん、ぬるくして一杯飲まして下さいまし。

ト妙林を見て

オヽ、島の内の井筒屋の御隱居樣、ようお參りなされました。

妙林　先刻にから見物してゐましたが、いつも〳〵、面白い事でございます。

ト辻打ちになり、向うより助四郎、丁稚附いて出て來り、直ぐに舞臺へ來て

助四　イヤア、井筒屋の阿母、この暑いのに信心參りか。

妙林　これは助四郎さん、累が事について、お話し申さねばならぬ事がござります。丁度よい所でお目にかゝりましたわいな。

助四　おれも逢ひたくつて居た所だが、爰ぢやァ話しも出來めえ。いつもの所で一杯飲みながら話すのかえ。嬉しいねえ。

妙林　

小僧　モシ、親方、今の間に、わしは辨當にして來ませう。

みや　そんなら、わたしやちよつと、水を一手桶汲んでくるほどに、長助さん

逸當　見世の留守は、わしが番をしてゐます。

妙林　これは女中さん、お世話になりました。

みや　お靜かにお出でなされませいな。

助四　そんなら阿母、サア、參りませう。

ト辻打ちになり、妙林、杖を突き、助四郎と一緒に鳥居の内へ入る。お宮入る。彌十、下りて

彌十　ヤレ〳〵、今日は思ひの外に錢になつた。太夫どのは、さぞ暑かつたであらう。太夫さん〳〵、

爰へ来て、ちつと風に吹かれなさい。太夫さん

ト呼ぶ。内にて

藤六　アイ〳〵、何の用でござんすえ。

ト藤六、張り子鬘、顔に化粧したる心にて、着流し、前帯、大女の拵らへにて、大團扇を使ひながら出る。

彌十　オヽ、太夫さん、暑いに御苦勞でござりますなう。

藤六　アイ、これも勤めの苦海おやと思や、さのみ苦勞にもござんせぬわいなア。

ト女のこなし。

彌十　時に、今日は大きに入りもあつたによつて、立前を先へ渡すによ。

ト四文錢を一本、錢箱より出してやる。藤六、取つて

藤六　ムウ、そんならこれが、今日の勤めでござんすかいな。

彌十　不承ではあらうが、マア、それで湯でも飲んで下せえ。

藤六　これいなア、彌十さん、今日は入もたんとあつたによつて、どうぞまちつと、心を附けて下さんせいなア。

彌十　ハテ、さう云はずと、それで晩まで不承しなせえな。

　　ト藤六、ムツとして

藤六　なんだ、四文錢一本で、不承しろと云ふのか。

彌十　それだといつて、いくら遣られるものか。

藤六　おきやァがれ、この檑粉木め。さう吐かしやァ、おれもモウ大女は否だ。

　　ト蔓を引ツたくり、尻をからげる。下に足駄を穿いてゐる。

コレ、ヤイ、よく物をつもつて見たがよい。この溫氣な時分に日がな一日、女の眞似をして、長い物を引摺り廻つて、青臭い蛇いぢりは、わしやァしねえワ。コレ、可愛い女にせえ、滅多に貸さねえ代物まで、商賣なりやこそ甞められても堪忍してゐるわえ。なんでも立前を、殖やして寄越せ〱。

逸當　コレサ〱、藤六どん、何も稼業づくの事だ。靜かに云ふがよからう。

彌十　それ〱、初めからの約束、一本で不足ならば、いくら取る氣だ。なんぼ口の戻らねえ木戸番だといつて、そんなに通りは食はねえよ。

藤六　この野郎め、一本やそこらの錢で、じつとしてゐる藤六だと思ふか。うぬァ人を、いゝ見世物に

しやァがつたな。

逸當　ハテサテ、見世物魂ひ百までといふから、彌十どん、こなたにも、もうちつと、大儀をしてやらつしやいな。

藤六　否だ〳〵。錢箱ぐるみ持つて行くわい。

彌十　こいつァ飛んだ事を云ふ。持つて行くなら行つて見ろ。

ト鉢卷をしめ、立ちかゝる。辻打ちになり、藤六、彌十をくらはす。逸當、支へる。向うよりおかれ世話女房の拵らへにて、懷に赤子を入れ、出て來り、この中へ入り

かね　これはしたり、兄さん、マア、待ちなさんせ。

藤六　妹か。邪魔だ、そこを退けやい。

彌十　ぶつならぶつて見ろ〳〵。

ト行くを逸當とめ

逸當　ハテマア、料簡さつしやい〳〵。

ト彌十を連れて鳥居の内へ入る。おかれ、藤六をとめて

かね　コレ、兄さん、もうよいわいなア。

藤六　ヤイ、妹、この兄はナ、この暑いのに女の眞似をして、蛇まで使つて苦勞をするに、わりやァ何をしてゐるのだ。

かね　イヽエイナア、この子の晝寢が、いつもよりはちつと遲い加減かして、飯拵らへや何かで、ツイ隙取つたわいなア。

藤六　べら坊め、うぬは、その餓鬼にばかり打かつてゐるワ。コレ、その子を預けた與右衛門はナ、この頃は井筒屋の内を、叩き出されてゐるとの事だ。

かね　そんなら、また元の、木津川へ戻つてかいなア。

藤六　それだによつて、里扶持の金が埓が明かねえワ。なんでもこれから、この子を與右衛門の所へ連れて行つて、これまで溜つた里扶持と諸入用、算用して取らにやァならぬ。サア、妹、木津川へ歩め。

かね　それぢやというて、與右衛門さんが、大事の子ぢや、頼むというて、預けなさんしたによつて、主ぢやとて、なんの如才がござんせうぞいなア。

藤六　如才も利中散もいるものか。預けを引いても構はねえ。一緒に歩め。

トこの時、赤子の守り袋落ちる。赤子笛。

かれ　マア、待ちなさんせいなア。

藤六　エヽ、うしやアがれといふに。

ト無理に引立て行く。この時、後へ逸當出て、落ちてある守り袋を拾ひ、思ひ入れあつて入る。藤六おかれを引ツ立て、花道へかゝる。辻打ちになり、向うより與右衞門、着流し、一本差しにて出て來る。跡より利兵衞、質屋にて、掛け物の箱を持ち出る。藤六、與右衞門と花道にて行きあひ

與右　見世物師の藤六どのぢやアねえか。

藤六　與右衞門かっいゝ所で逢つた。おぬしに用があつて行く所だ。

與右　そんなら幸ひ。マア、あそこへござりませ。

ト矢張り辻打ちにて、本舞臺へ來る。與右衞門、こなしあつて

藤六どの、見れば妹御に、わしが預けた子を抱かせ、この與右衞門が所へ用とは。

藤六　ハテ知れた事、里扶持の溜り、この子の物入り、諸入用引ツくるめて十兩ほどだ。知つての通り、この妹が、男に別れて歸つてゐるうち、こなさんの賴みといつて連れて來た。初めのうちは里扶持も、月々に寄越したが、この頃ではさつぱり沙汰なし。重井筒へ行つて聞けば、疾に內を追ひ出されたとの事。それで、わざ〳〵妹を連れて、今お身樣の所へ行かうといふのだ。里扶持を勘

定してもらはうかい。

ト利兵衛、こなしあつて、與右衛門が側へ行き

利兵　モシ、與右衛門さん、道々申しました、この一軸の御挨拶は、どうでござります。

與右　質屋の利兵衛どの、その事も承知だが、いま聞く通りの譯だによつて、ちつとの間

利兵　待つてゐるでござりませう。

ト此方へ來てゐる。

與右　藤六どの、段々こなたの云はつしやる通り、無沙汰にしたは悪かつたが、コレ、爰にも急に掛合ひ事。これとてもマア金づく。どうぞ四五日のところを

藤六　これサ、與右衛門、今まで待つた代り、今日は是非とも、逢つた所で笠を脱げだ。十兩の金を算用してくりやれ。

ト此うち揚弓の音になり、鳥居の内より助四郎出て、下の方に聞いてゐる。

利兵　與右衛門さん、此方も急な賣り物、早く挨拶をして下さりませぬか。

與右　サア、その事も今

利兵　埒が明かずば、望み手のあるこの一軸。お前が是非とも買ひたいと仰しやるゆゑ、先樣を云ひ延

して、元金で賣る代物。いま聞いた其方の樣子、十兩位の金を、待つてくれろの口振りでは

藤六　それ〳〵、覺束なすびの松もどき、廿日ぢやァゆくめえ。是非勘定が出來ずば、代官沙汰にしても取るによ。

與右　イヤ、それでは。

利兵　質請けの三百兩が出來ますか。

與右　サア

利兵　外へ賣りませうか。

與右　サア、それは

藤六　十兩の金が出來るか。

與右　サア

三人　サア〳〵〳〵。

藤利　どうするのだ。

トこの時、助四郎、前へ出て

助四　その金、おれが拂つてやらう。

ト ずつと出る。皆々見て

三人　ヤア、こなたは。

與右　羽生屋の助四郎どの、こなさんが、この場の手詰めを

助四　見かねて用立つ男づく。マア、里扶持の十兩をやるがいゝ。

ト 懷より金包みをやる。與右衞門取つて

與右　忝い。兎も角も。

ト 藤六が前に持つて行き

その子の里扶持諸入用、耳を揃へて十兩とは、足下を見て胴慾な……イヤ、足手搦みな、どうで
お世話。いま暫らくのうち、厄介にして下さりませ。

ト 金を遣る。藤六、取つて懷へ入れ

藤六　イヤモ、金さへ取る事なら、いつまでも世話をするのサ。

かね　ほんに、わたしや與右衞門さんに、氣の毒でござりますわいなア。

藤六　ハテ、ナニ氣の毒な事があるものか。妹、われはその子を抱いて、片日蔭の出來るまで、本陣の
所で

かね　そんなら連れ立つて、一緒に歸らうわいなア。

藤六　こりやアどなたも、おやかましうござりました。

ト揚弓の鳴り物にて、藤六おかれ、鳥居の内へ入る。

利兵　モシ、與右衛門さん、私しが方の、この質請けは。

助四　利兵衛どの、待つてやらつしやい。

利兵　エヽ。

助四　今までは與右衛門が、云ひ延べ立てもあらうが、これからはわしが顔づくで、料簡してやつたがよい。

利兵　ムウ、餘人ではなし、助四郎どのゝ挨拶、待つ事は待ちませうが

與右　そりやア長くとは云ふめえ。三日のうちに請け出す、證據はこの一腰。

ト脇差を取つて利兵衛に渡す。

利兵　この脇差を證據とは。

與右　木津川の與右衛門が魂ひ、こなさんに預けるからは、慥かな證據。

利兵　成る程、しつかりと預かりました。

助四　時に、その質物の一軸とやら、ちよつと見ても大事ないか。

利兵　云はゞお前も懸り合ひ。とつくりと御覽じませ。

ト箱を明けて渡す。助四郎、袱紗を開き、鯉魚の一軸を出し

助四　ハテ、噂に聞いた、これが鯉魚の一軸か。

ト いろ〳〵見て

成る程、こりやア三百兩もするであらう。イヤナニ、與右衛門、改まつた事を云ふやうだが、いま用立つた十兩の金の、證文がちよつと書いてほしいが

與右　そりやア何枚でも書いてやりませう。

ト硯の無き思ひ入れ。

利兵　矢立は爰にござります。

ト腰より出してやる。

與右　さうして、文言は。

助四　おれが望むもをかしい。利兵衛どの、こなた、よいやうに。

利兵　ドレ〳〵、そんならわしが、文言を云ひませう。

ト與右衛門、半紙を出して書く。

一札の事、一つ、金十兩なり、右は、我れら急に差支へ入用にて、難儀いたし候ふところ、御恩借にあづかり、借用申し候ふところ實正なり、返濟の儀は、御入用の節、何時なりともきつと返濟申すべく候ふ　後日の爲、仍て一札件の如し。

ト書いてゐる。此うち助四郎、茶見世の火吹竹と一軸を摺りかへ、一軸は懐へ入れ、火吹竹を袱紗に包み、箱に入れ、元のやうにして置く。此うち證文を書きしまひ

與右　これでようござりますか。

助四　よいとも／＼。

ト疊んで懐中する。利兵衛、一軸の箱を取り

利兵　左樣なら、明後日の夕方

與右　木津川の、わしが宅まで

利兵　お尋ね申して參りませう。

助四　おれもこれから、北向の八幡樣へ參つてゆかう。

與右　助四郎さん、今日は思はぬ、段々の深切。

助四　なんの禮に及ぶ事かな。

ト辻打ちになり、助四郎は下座へ、利兵衛は脇差を差し、向うへ入る。與右衛門、殘り、こなしあつて

與右　ヤレ／＼、藤六に預けたあの子の身の上、どうか斯うかと案じたに、質請けの日延べまで、一寸遁がれといふものゝ、井筒の内でとつくりと、累に頼んだ三百兩、明日までには出來るであらう

ト見世を見て

この妹も、見世を明けて、どこへ行つたか……ドレ、手酌で一杯、頂戴いたさうか。

ト藥罐の茶を飲む。派手な流行り唄になり、向うより伊平太、世話侍ひ。小さん、藝者。おさの、仲居。跡より金五郎、廻し男にて、三味線箱を持つて出る。

伊平　なんと小さん、島の内より、また氣が變つてよからうがの。

小さ　わたしやお百度をあけるによつて、早うお宮へ參りたいわいなア。

さの　小さんさんの願掛けなら、わたしも共々、ナア、金五郎さん。

金五　ハテマア、茶見世へ

伊平　サア／＼、來やれ／＼。

ト皆々本舞臺へ來る。與右衞門、矢張り上の床几に腰をかけて莨のんでゐる。

これサ、小さん坊、無性やたらに、お百度〳〵と、神いぢりも大概にするがよい。さうしてマア
なんの願を掛けるのだ。

金五　ハテ、それは云はずと知れた、戀の願ひの願掛けでござりませう。

伊平　なんだ、戀の願掛けだ。

金五　お前樣のお心が知れぬによつて

ト此せりふの間、おさのを小手招ぎして與右衞門、囁く。おさの呑みこみ、鳥居の内へ入る。

伊平　なんと云ふ。身共の心が知れぬによつて

金五　あんまりお前が浮氣だといつて、それで小さんさんが、お百度をあげて

伊平　願掛けとは有り難い。この伊平太に限つて、なんの浮氣な心があらう。その證據は

ト小さんに抱きつくを振り放し

小さ　エヽ、嫌らしい。

ト突きこかす。この時、鳥居の内より、お宮、出て來て

みや　申し〳〵、伊平太さまとは、お前樣でござりますか。

伊平　ムウ、身共だが、なんぞ用でも
みや　いま神樂堂の前の茶見世で、お屋敷の衆が、急に逢ひたいによつて、連れまして來いと、待つてぢやわいな。
伊平　ナニ、屋敷の者が逢ひたいと。
みや　ちよつとお出でなされませいな。
伊平　それでも今爰に、ちよつと仕掛けた
みや　イエ〳〵、早うお出でなされませいなア。
伊平　オヽサ、行くは行くが
みや　マア、お出でなされませいなア。

ト辻打ちになり、お宮、伊平太を無理に連れて入る。

小さ　ほんに、いつも〳〵アタ嫌らしい。あの伊平太づら。
金五　丁度よい所へ呼びに來たといふもの。
與右　そりやアこの與右衞門が、ちよいと思ひ附きさね。

ト前へ出る。

小さ　ヤア、與右衛門さん

與右　あの茶見世で見てゐたが、邪魔になりさうなと見たゆゑに

小さ　そんならお前が

與右　仲居のおさのに云ひつけて、妹を似せ勅使、邪魔は彼方へやりましたが

　　ト思ひ入れあつて、前へ出ると、合ひ方になる。

小さんさま、外ならぬ事、遠慮はなけれども、帶解村にござる兄御、元信さまから、お便りがござりましたか。

小さ　この間、文の便りの御返事に、段々御病氣も、お心よくなりましたとの事ぢやわいなア。

與右　それは何より。兄御の病氣さへ御本復なら、その上にては、追ひ／＼御吉事。それについて、いつぞやお預け申しました、アノ月の御判は

小さ　肌身離さず、持つてゐるわいなア。

　　ト懐より守り袋を出して見せる。

與右　それさへござりますれば、おツつけ世に出る時節もござりませう。隨分ともに御大切に。

　　ト小さん、懐へ入れる。

金五　この金五郎も蔭ながら、こなたの深切、何やかや、小さんの話しに

與右　申せば長い一通り。餘人が聞いては憚る事。私しも爰に長う居りましたら……何かのお邪魔に

小さ　なんの、そんな事が

ト與右衛門、こなしあつて

與右　「三人になつて入るや門涼み」……ゆるりとこれで

ト小さんを押しやり

お涼みなされませ。

ト唄になり、與右衛門、二人へこなしあつて入る。あと合ひ方。

金五　ほんに、いつとても深切な與右衛門どの、二人が事を何となく、粋を通して今の詞。この金五郎は、どうやら氣の毒にもあり

小さ　なんのマア、それ知られたが大事かいなア。樂しみなうては勤まらぬ。あの與右衛門さんぢやとて、累さんに

金五　逢ふ夜の數の重井筒、人目忍んで小格子に、戸のたてられぬ人の口、ふさぐ時には、わしも其方に

小さ　無理云はるゝは女の心で

金五　嬉しいといふはきつい嘘。

小さ　アレ、又あんな事を。

金五　そんなら眞實

小さ　お前に逢はうと、今日の他所行き。

金五　首尾が叶うて

小さ　金五郎さん

金五　小さん

小さ　オヽ嬉し。

トこなしあつて抱きつく。この時、後に伊平太、藤六を連れ、出て來り

伊平　二人ながら、見附けたぞ〳〵。

ト兩人、驚ろき

小金　ヤア、お前は

ト悃り、うろたへる。藤六、鉢巻をしめ

藤六　ヤイ、此奴等は、伊平太さまをはぐらかして、盗み喰ひをしたな。

金五　アヽイヤ、滅相な。そんな覺えはござりませぬ。

伊平　默りやアがれ。おれが後で聞いてゐれば、金五郎さん、小さん、オヽ嬉しいと、抱きついたでないか。おれが不義者見附けた。動くなと云つたは、こりやマア芝居でも極まつてゐるせりふだ。二人ながら覺悟しろ。

小さ　たとへ、どんな事があらうとまゝ、金五郎さんに科はござんせぬ。わたしが放埒。

藤六　ソレ、見やアがれ。叩いて見たら、まだ何を吐かさうも知れぬわい。

伊平　これサ、藤六、あの野郎は云はゞ間男、ぶち殺しても大事ねえ。

小さ　これいなア、どうぞ滅多な事して下さんすな。

藤六　やかましいわい。おれも伊平太さまに云ひ附けられたからは、見世物師の藤六が、いま出來合ひの侍ひになつて、わいらをどうするか見やアがれ。

ト辻打ちになり、後に飾つてある居合拔きの太刀を持つて來て腰に差し、腰に鎖鎌を持つて思ひ入れ。此うち向うより良助、大小、足輕の拵らへにて、赤合羽と柳行李を割掛けにして、菅笠を持ち、息せき出て、舞臺へ來て、小さんを見て、ちよつと思ひ入れあつて、下の方、小屋の前に窺うてゐる。藤

六は、大太刀を差し、前へ出て

コレ、見たか。柄鞘かけて八尺六寸、赤銅作りの、この鎖鎌の早業、うぬらが手足を叩き落すぞ

ト突張り返つて邪魔になるこなし。

小さ　何を阿房らしい。それで人が切られるものかいなア。

伊平　エヽ、いま／＼しい。これサ藤六、そんな眞似をせずと、小さんを引摺つて行けサ。

藤六　合點でござります。

ト行くを金五郎とめて

金五　モシ、藝者は廻しの預かりもの。滅多な事さつしやりますと、料簡しませぬぞ。

藤六　エヽ、やかましいわえ。自體、うぬが邪魔になるわい。

ト矢張り辻打ちにて、金五郎を引附け、鎌にて打たうとする。伊平太、小さんを捕まへる。藤六、鎌を振りあげる。この時、鎌の先抜けて、良助が前へ飛ぶ。良助、思ひ入れあつて鎌を取り、額へちよつと疵を附ける。伊平太、藤六、これを知らず

伊平　サア／＼、藤六、來やれ／＼。

ト小さん金五郎を引ツ立て行きさうにする。この時、良助、前へ出て、伊平太を突き廻し、立ちはだ

かり

良助　お侍ひ、待たつしやい。

伊平　なんだ、此奴は。見ればワイ／＼天王見たいな形をして、この伊平太に待てと云ふは

良助　用がある。

伊平　なんと。

良助　なぜおれが額をぶち割つた。

　　ト鎌を出して見せる。伊平太、藤六、悄りして

伊平　ヤア、そんなら今の鎌が飛んでか。これがほんの、鎌飛び蝶驚ろけども人知らずだ。おらァ知らねえ知らねえ。

小さ　ほんに額に

　　ト小さん、良助を見て

　ヤア、其方は。

　　ト思ひ入れ。

良助　アヽ、イヤ、往來の旅人。御主人の御用で急ぎの道、出合ひ頭に額に疵がついては、料簡ならね

えゝどいつも、こいつも、マアさう思つて居をらう。

ト眞中へドッカリと坐る。伊平太うろたへ、藤六、俄に鉢卷を取り、太刀を差したなり、良助が前に手を突き

藤六　これは〳〵、お侍ひ樣、成る程、これは畢竟、怪我のはずみと申すもの。何分にも御料簡を

良助　やかましいわえ。人の面體へ疵を附けて、料簡しろで事が濟むかえ。

ト脇差をヒラリと拔いて見せる。藤六、ギヨッとする。良助、脇差を構へて

サア、この場に居合せた奴等は、殘らず切つて切り死だ。さう思つて覺悟しろ。

ト構へる。

伊平　アヽ、コレ〳〵、待つた〳〵。早まるまいぞ〳〵。

ト藤六を連れて來て、金で扱ふがよいと仕方する。良助、構へてゐる。

藤六　へイ〳〵……へ、、ハ、、、、、。成る程、段々お腹の立つのは、御尤もでござりまするが、外に誰れも居合せたと申す譯でもなし、近頃不躾ながら、疵の御養生で濟みます事なら、そこの所は此方から

良助　療治代を出さうと云ふのか。

藤六　左様でござります。
良助　料簡いたし憎い所なれど、主人の用先、心が急く。して、その療治代は、マア、いかほど。
　　　ト伊平太、指を二本出して見せる。藤六、見て
藤六　先づ輕少ではござりまするが、金子二兩で
良助　イヽヤ、料簡否だ。
藤六　エヽ。
良助　金二兩で料簡したと聞えては、矢ツ張り切り死がましだわい。
　　　ト脇差を構へる。
藤六　アヽ申し、お待ちなされませ。左様なら金五兩で
良助　イヽヤ、料簡ならぬ。
藤六　左様なら、ズツと飛んで、十兩々々。
良助　ムウ、十兩なれば
藤六　御料簡がなりますか。
良助　して、その金子は。

藤六　畏まりました。

ト伊平太の方へ來て

サア〳〵、いろ〳〵に根切つて、やう〳〵十兩に極めました。

伊平　それはお骨折り。先づ茶を一杯。

藤六　伊平太さま、早く金を出さつしやりませ。

伊平　イヤサ、その金は藤六、おぬし、ちよつと貸してくりやれ。

藤六　エヽ。

伊平　先刻われが、里扶持に取つた十兩、地內で見せたのを、ちよつと貸してくりやれ。

藤六　アノ、この十兩を

伊平　元の起りは、てめえが仕出來した事だ。ハテ、親の物は子の物といふぢやアないか。

良助　サア、十兩は、どうだな〳〵。

伊平　アレ〳〵、あの通りだ〳〵。

藤六　エヽコレ、出しは出すが、伊平太さん、大分お前にも貸しがある。

ト云ひながら、懷より最前の十兩を出して

ハイ、療治代の金十兩。

良助　慥かに受取つた。

藤六　コレ、伊平太さん、何の仲でも勘定は勘定、きつとして下さりませ。

伊平　ハテ、善は急げ、勘定は勘定にするがいゝ。

良助　そんならこれで、小さんとやらの事も

伊藤　云ひ分はねえのサ。

トこの前より妙林、出かゝりゐて、此の時

妙林　イヤ、その云ひ分は、此方にあるぞや。

ト前へ出る。皆々見て

小さ　ヤア、お前は

伊平　重井筒の妙林。

妙林　内の抱への藝者の小さん、廻し男に只なぐさまれては、藝者屋の腮が干あがりますわいの。

良助　すりや、こなたの内の抱へゆゑ

妙林　小さんが揚げ代、しつかりと貰はにやなりませぬ。見ればこなたは、いつぞや島の内の内へござ

つたお侍ひぢやが

良助　いかにも、身共は小さんが身寄りの者。

ト懐より今取つた十兩の金を出し

良助　揚げ代に、ソレ十兩。

妙林　アノ、この金を

良助　取つて置きやれ。

ト妙林、取上げ見て

妙林　今まで、なんぼ損をした事やら知れぬが、雜用ぐるめに、負けておかうか。

ト懷へ捻ぢこむ。雷鳴の音、靜かにする。妙林、思ひ入れ。

アヽ、情ない、夕立がするさうな。

伊平　イカサマ、少しごろつくやうだが

ト下座よりおさの、駕籠舁きに駕籠を吊らせ、出て來て

さの　どうやら夕立が來さうなゆゑ、駕籠を云うて來ましたわなア。

妙林　オヽ、そりやよう氣が附いた。サア、小さん、夕立のせぬうち、早う去にませう。

小さ　わたしや、まだ願掛けがあるゆゑ

妙林　内へ戻つて、晩方なりと行きやいなう。

良助　そんなら、もうお歸りなされまするか。何事も拙者が後から、ナ、御合點でござりまするか。

ト小さんに呑みこます。

妙林　廻し男は猫に鰹節、駕籠にはわしが附いて行くが、併し又夕立で、ゴロ〳〵は來やせまいか。

藤六　妙林どの、よい物がある。この鎌を。雷のまじなひに提げて行くがよい。

ト鎖鎌を妙林にやる。妙林、取つて

妙林　成る程、こりや好い物がある。雷除けに持つて行きませう。

良助　金五郎どのには、外にお話しもあれば

金五　地内の茶屋まで御一緒に

ト此うち小さん、駕籠に乗つて

小さ　そんなら金五郎さん

ト金五郎へ思ひ入れ。妙林、駕籠の垂れを下ろし

妙林　サア、駕籠やつてもらひませうか。

ト辻打ちになり、妙林、鎌を持ち、おさの、駕籠に附いて向うへ入る。金五郎良助、鳥居の内へ入る。跡に伊平太、藤六、殘る。

藤六　なんの事だ。まんまと十兩、棒に振つたワ。

ト呆れる思ひ入れ。揚弓の音にて、下座より助四郎出てくる。

こりやア助四郎さまか。

助四　藤六、どうだ、引ッ張り物は錢になるか。

藤六　蛇使ひの押ッかぶせで、マア、相應でござります。

助四　時に、先刻は云はれなんだが、この間頼んで置いた

藤六　彼の毒かい。

助四　これサ。

ト伊平太へ思ひ入れ。

藤六　ナニ、大事はござりやせん。わたしらが仲間は、どこといふ事はねえ、ほつき歩くが商賣で、見込みで高野の玉川の水を、取つてくれろと頼ましやつたゆゑ、流しの六兵衛に云ひつけて、コレコレ、取寄せたこの毒水。

ト見世物の錢箱の中より德利を出し

こりや何になされますえ。

助四　おぬしに何も隱す事はねえ。おれが首ッたけ惚れてゐる女めに、足があつて邪魔になるゆゑ、若し、いよ〳〵妨げすれば、この毒水でコロリ山椒。

藤六　柳の下で水ぢやァねえ、毒とはいゝ思ひつきサ。

伊平　コレ〳〵、藤六、なんと、おれもちつと入用だが、配分する事はならぬか。

助四　イエ〳〵、わしが取りにやつた物だから、外へは

伊平　成る程、これも尤も。

藤六　いま持つてござりますか。

助四　イヤ〳〵、取りに寄越すまで、預かつてもらひたい。

藤六　そんなら、この毒は、矢ッ張り錢箱へ。

ト元の錢箱へ入れゐ。此うち與右衛門、ちよつと出て、これを見て入る。

伊平　時に、おれも社內に用があれば。

藤六　モシ、助四郎さん、あれを取りに寄越す時、丸じるしは合點かえ。

助四　ハテ、よく錢にびろつく男ではあるぞ。

ト辻打ちになり、伊平太、鳥居の內へ入る。助四郞は向うへ入る。直ぐに逸當、捕り手を連れ、出て來り

逸當　ソリヤ。

捕手　動くな。

ト藤六を取卷くゆゑ、悔りして

藤六　ヤア、居合拔きの長助どの、こりやどうだ。

逸當　我れこそは山名の家來、茨木逸當、姿をやつしたは仔細あつて……家來、大小。

捕手　ハツ。

ト藥箱の後より兩腰を出して渡す。

藤六　して、私しへの御詮議は。

逸當　最前外より預かりしと、其方が妹の介抱の子悴は、佐々木賴賢が忘れ形見、豐若であらうがな

藤六　イヽヤ、一向に覺えござりませぬ。

逸當　隱すまい。證據は最前拾ひ取りし、笹鶴錦のこの守。こりやコレ佐々木家より外にあらざる品。

殊に誕生の年月日時、符合なせば、豐若に極まつた。御主人樣の妨げ、尋常に渡せばよし、異議に及ぶと、藤六、われが身の上だぞ。

藤六 アヽ、モシ〳〵、佐々木とやら、一向に私しは存じませぬが、いよ〳〵それに極まれば、なんのお隱し申しませう。首を切るとも、燒いて食ふとも御勝手次第。

逸當 すりや、某に渡すか。

藤六 サア、渡しは渡しませうが、妹めが可愛がつてゐるゆゑ、譯を聞かせて、密かに私しが

逸當 必らずぬかるな。

藤六 モシ、御褒美は承知かえ。

逸當 豐若と引替へ。

藤六 畏まりました。

逸當 某は罷り歸る。其方は跡に殘り、荷箱片附け夕方に。藤六、キッと申しつけたぞ。

ト神樂になり、逸當、家來を連れ、向うへ入る。藤六に捕り手附き、鳥居の内へ入る。下座より與右衞門・良助、出て來り

良助 土佐の又平重興さま。

與右　コレ。

ト押へる。合ひ方になる。

良助　成る程、今のお名は、木津川の與右衛門さま。よい所で、お目にかゝりました。

與右　村越良助どの、なんぞ火急な御用かな。

良助　サア、改め申すには及びませぬが、後室の惡事より、元信さまの御難儀、妹御も淺ましい藝者奉公、何かにつけて、お世話になるはこなたばかり。佐々木家の若君まで引取り、お世話下さるその中へ、心ないと思し召しませうが、かねて申しあげ置きし通り、彼の月の御判、鯉魚の一軸、差上げなば、佐々木家は元より、元信さまにも本地へ御歸參と、勝元公の御推擧。御内縁ある勝元公、密かにお使ひ。畏まつたと飛んで參つた、仔細は斯くの通りでござります。

與右　サア、その儀もかねて御内意ゆゑ、月の御判は先達て尋ね出し、お妹御小さんさまへお預け申し鯉魚の一軸の儀は、何者か質入れ致しあるを聞き出し、此方へ請け戻す約束なれど、何をいつても三百兩。

良左　左やう承つたゆゑ、僅かで御用に立つまいなれど、忠義のはしくれ、お受取りなされて下さりませう。

ト内がひより百兩包みを出し、扇に載せて置く。

與右　こりや百兩……不躾ながら、貴樣の御身分で

良助　忠義の爲と、たつた一人の娘めを

與右　天晴れ……ハテ、小身者には惜しいお人。

良助　何とぞ跡の二百兩を

與右　その儀は、わしが女房累、今日のうちに拵らへる約束なれど、姑の不機嫌で、家出いたし居れば、わしが名代に、島の内へござつて、女房と對談して下さりませ。

良助　イヤモウ、折々參つて、お見知り申す累さま。

與右　女房を褒めるぢやないが、隨分働らき者、深切もある女一疋。

良助　左樣なら、直ぐにこれから參りませう。

與右　わしも一緒に、そこまで行きませう。

良助　そんなら與右衞門さま。

與右　サア、行きませう。

ト辻打ちになり、兩人、向うへ入る。奥、バタ〳〵にて藤六、赤子を抱き、出て來り、ウロ〳〵する

うち、又バタ〳〵するゆゑ、居合抜きの藥箱へ赤子を隱し、うろたへて下座へ入る。下の方より、お宮、出て見てゐて、藥箱の子を出し、錢箱を明け、中の德利を出し、跡へ子を入れ、德利は今の藥箱へ入れ、下の方へ入る。矢張りバタ〳〵にて、下座よりおかれ、藤六を追うて出て來り

かね　コレ、兄さん、預かつた子を、どこへやらしやんした。

藤六　べら坊め、おれが知るものか。

かね　お前が抱いて來て、知らぬというて濟むかいなア。

藤六　濟まうが濟むまいが、打ツちやつて置きやアがれ。

ト辻打ちにて藤六、藥箱を抱き、おかれを蹴飛ばし、一散に向うへ入る。おかれ、捨ぜりふにて向うへ入る。下座より伊平太出て

伊平　最前聞けば、色の邪魔をする奴を、毒で殺すとは、よい思ひつきぢや。あの金五郎めを

ト見世物の錢箱を持出すところへ、下座よりお宮出て、この體を見て

みや　こりや、この箱を、どこへ持つて行くのぢや。

伊平　エヽ。わいらが知つた事ぢやアない。そこ退け。

みや　イエ、その箱にはちつと

ト錢箱を爭ふうち、金五郎出て、伊平太を留め

金五　何か知らぬがその錢箱、いるなら持つて行くがよい。

みや　下さんすかえ。

ト お宮、錢箱を持ち、辻打ちにて向うへ入る。跡にて伊平太、金五郎、鳴り物なかり、面白きタテ、さま〴〵あつて、「ドッコイ」とゝまる。曲撥にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、世話場。上の方に佛壇、下の方に小袖簞笥、神棚、壁に三味線二三挺かけ、向う長暖簾。下座の口、二階、障子たて、格子附きの門口、いゝ重井筒といふ提灯かけ、すべて島の内の茶屋の體。佛壇の前に妙林、以前の形にて、木魚を叩き、看經してゐる。助四郎、以前の形にて立ちかゝりゐる。流行り唄にて道具とまる。

妙林　南無妙法蓮陀佛々々々々々々々く々。

ト木魚を無性に叩く。

助四　これサノ〳〵、妙林どの、妙な事を云ふ。そりやア何の事だ。

ト妙林、助四郎を見て

妙林　ムウ、羽生屋の助四郎さん。……ちつと志しの佛があるゆゑ、看經してゐますわいの。

助四　サア、看經は聞えたが、南無妙法蓮陀佛とは。

妙林　サア、志しの佛は、この世でも、あの世でも樂がしたさ、宗旨の念佛ばかりでは覺束なさに、それで法華念佛一連かけて、南無妙法蓮陀佛サ。

助四　おきやァがれ、湯屋の欠伸といふ看經だ……時に、今日も今日とて、段々吹込んで置いた、娘の累の事は。

妙林　サア、そりや承知ぢやによつて、あの婿の與右衞門めも、四五日あとに苛り出して、懇ろあひの詫び事もきかず、お前の事を累めに、勸めこんでゐますわいの。

助四　さうして、アノ累が見えぬが、どこへ行きましたえ。

妙林　サア、風呂へ行きましたが、どこを洗うてゐるか。大概、面の皮も擂剝けやう。

助四　イヤ、長いといへば、先刻も生玉あたりをうろついてゐた與右衞門、湯の道で出ッくわし

妙林　惡性根入れるも知れぬ……コレ、おさのや〱。

さの　アイ〱。

トおさのの、暖簾口より出て來り

阿母樣、なんでござります。
妙林　累めが風呂へ行きをつたが、遲いゆゑ、迎ひに行ておぢや。
さの　風呂へ行きなさんしたは今の先、洗ひなさんす間もあらうに。
妙林　又、彼奴が贔屓口。行けと云うたら行き居らう。
さの　ハイ〳〵……お主と病。ドレ、お迎ひに行つて來ませうか。
　　トおさの、下駄を穿いて出かける。誂らへの出の鳴り物になり、向うより累、洗ひ髮、藁たばねの島田、湯あがりの浴衣を抱へ、引摺りを穿き、出て來り、花道にて行きあひ
累　おさの、どこへ行きやるぞいなう。
さの　サア、お前が遲いとて、阿母樣の焦立ち、風呂まで迎ひに行く所でござんす。
累　遲いというて、何も用のある筈は無いが、誰れぞ來てぢやないかや。
さの　アイ、來てゞござんす。ソレ、ちよこ〳〵來て、……ソレ、あのお人の名は
　　ト忘れしこなし。
累　エヽモウ、自烈たい、誰れぢやぞいの。
さの　サア、アノ、宗三に似た


尾上菊五郎
尾上松緑廿三廻忌

累　ムウ、あの羽生屋の助四郎づらか。

さの　アイ、その面でござんす。阿母様と何やら話して

累　そんなら、かねて云うた此方の

　　　トちよつと思ひ入れ。

さの　サア／＼、また遅いと、荒神様が

　　　ト袖を引ッ張る。

累　エヽモウ、辛氣な事ではあるぞ。

　　　ト矢張り、右の唄にて、兩人舞臺へ來て、内へ入る。

助四　オヽ、こりやァ累、洗ひ髪の湯あがり。ほんに坊主も惚れにやァならねえてナ。

累　助四郎さん、ようお出でなさんしたな……おさの、あの鏡臺取つてたも。次手に嗽ひも

さの　アイ／＼、合點でござんす。

累　助四郎さん、お許しなされて下さんせ。

　　　トおさの、よき所へ鏡臺を持つてくる。累、これに向ふうち、はんぞう、その外、化粧道具いろ／＼持つてくる。

妙林　コレ、累、この二三日は、とつけもない長い湯だが、こりやァ捲し出した與右衛門めと、湯あがりに小宿入りでもするのか。
累　なんの母さん、そんな事を
さの　それ〳〵、累さんに限つて、そんな事の無いは
妙林　また口出しせずと、わが身は奥へ行きや〳〵。
さの　アイ〳〵。累さん、用があるなら呼ばしやんせ。
　ト合ひ方になり、おさの、奥へ入る。
助四　時に、阿母、この間から云つて置いた事を、累に打明けて、早く相談に目鼻を附けちやアくれめえか。
累　助四郎さん、わたしに相談とは、何の事でござんすぞいなア。
妙林　その譯を假名で云へば、斯うよ。女の子を小さい時から、お手車でお孃様育ちにするも、末に樂がしたさ。おぬしも十六から自前を稼がせ、先づ二三年は食ひつぶし、やう〳〵去年あたりから藝者一疋。わが身の名から重井筒と、やう〳〵賣ると思ふと、あの與右衛門に腐れつき、不手勝手に眉毛を落し、ごたつくのが否さに、入り聟に入れてやつたところが

助四　あの木津川で、食ふや食はずのうらく者、一日の出入りも出來ねえから、來るより早く泣きの種、どうでじんじやくしねえ事と、阿母が離縁して見れば

妙林　一旦引かせたおぬし、また引き眉毛で座敷へ出したら、猶外聞も惡からうと、助四郎さんに相談したところが、有り難い思し召しなお人よ。

助四　幸ひおれも女房は無し、親は無し、有る物といつちやア、金ばかり。小糠三合持つたら、入り聟に行くなとの譬へは裏表、こんな形の物が腐るほど有つて、聟にならうといふ位、マア、阿母にも樂をさせ、時鳥の走りと鰹を一緒に食つて、芝居はいつでも三日目よ。出來合ひ形の浴衣を着まいと思ふなら、この相談に乘つて見るがよいのサ。

ト累、此うち顏を直ししまひ、貰のみながら思案してゐる。

妙林　コレ、累、助四郎さんが今のやうに云うても、返事の無いは。

助四　得心か。

累　サア、深切に云うて下さんすを、無得心ではござんせぬけれど

妙林　與右衞門に未練が殘つてゐるな。

累　なんのマア。

妙林　イヤ／＼、さうであらう。名を取らうより得の世の中。わが身のやうな馬鹿律氣な者に、見せる物がある。ドレ／＼

ト合方になり、妙林佛壇へのり、五立目の戒名と髑髏を取つてくる。累、恂りして

累　エヽ、氣味の惡い。そりやアノ

妙林　しやれかうべぢやわいの。

助四　日藏院花山妙塔大姉……ムウ、こりや罪人の弔ひに、仕置き場から貰つて來たのか。

妙林　イエ／＼、こりやわしが兄、山城久世の里、世繼甚平どのゝお主の白骨。一昨日、飛脚が來て、狀に云うて寄越すには、おれが高野へ納めに行く筈なれど、年寄つて行く事がならぬゆゑ、どうぞ其方から納めてくれと、賴んで寄越したこの佛。わしも若い時に、恩になつたお人ゆゑ、受取つて置いたが、これについて、怖い話しがござんすわいの。

助四　怖い話しとは、阿母、どんな事だ／＼。

妙林　サア、この佛樣は、近江の國、佐々木さまのお妾。殿樣お薨れなされてより、お國御前さまというて、なに不足ない御隱居樣であつたが、狩野四郎次郎とやらいふ若い男に惚れて、どうやら騙されたというて、戀しいと口惜しいとの戀病、たうとう狂ひ死に、さま／＼の怪があつたとの事

それも何ゆゑ、あまり男に惚れ過ぎるゆゑ。累なども好い手本。與右衛門が事思ひ切つて、風向きの好い船へ、乗りかへるのがマア、當世といふものぢやわいなう。

ト髑髏と戒名を袱紗へ包み、鏡臺の上へ載せる。

累　ほんにマア、そのお國御前さまとやらは、怖い人でござんすなア。

助四　イヤ又、怨念も怖いが、世の中でいつち怖いのは、錢の無え事よ。それに怖くないのは、おれだて。先づ、ちよつと話しに歩くにも

ト懐より財布を出し

二百兩位は小遣ひ。惚れた女がくれろと云やア

累　アノ、下さんすかえ。

ト思ひ入れ。

妙林　累、あの二百兩貰つて、何にしやる。

累　その金を貰うたなら、お前に樂がさせられうと。

妙林　わしに樂がさせたいとは、ヤレ〳〵、孝行な娘ぢや。善は急げ。ドレ〳〵

ト合ひ方になり、妙林、暖簾口より銚子杯を持つて出て、累の前に置く。

助四　祝言とは、有り難い〳〵。

妙林　サア、累、わが身飲んで、助四郎さんに献しや。

累　アノ、わたしに献せとはえ。

妙林　ハテ、祝言の杯。添へ聟、仲人、待ち女郎、七役が流行るから、三役するわいの。

ト助四郎、ニッコリとして、衣紋を直し、嫁らしき思ひ入れ。

累　申し〳〵、そりやマアあまり早急な。云うても身祝ひ。祝儀の物や何やかや。

妙林　なんの、添ひ寢するのが直ぐに祝儀。

助四　それとも氣にかゝるなら、蛤の吸ひ物は、いゝきんだしのこの貝殼。

ト櫛箱より二つ三つ貝を出す。

妙林　島臺代りの鶴龜は。

助四　オット、それには、この燗鍋のつるのつる。龜は無いか〳〵。

妙林　モシ、その龜には、こりやどうでござんす。

ト以前の鎌を出す。

助四　そりやアなんだ。

妙林 ハテ、島臺のつる……かま、といふ地口は、どうでございます。

助四 おきやアがれ。どうしてそんな物が、爰の内にある。

妙林 サア、こりやア先刻生玉で、ごろつきさうなゆゑ、雷の咒ひに、居合抜きのを借りて戻つたが、そんならこれでもゆかず。

ト鎌をそこへ抛つて置く。

助四 アヽコレ、なんぞ鶴龜〳〵。

トいろ〳〵考へ

オヽ、有る〳〵。

ト以前の財布を杯臺の上へ置き

つるかね、は、どうだ〳〵。

妙林 イヤモウ、鶴龜より何よりめでたい、紫摩黄金の島臺、サア〳〵、娘、早う杯ぢや〳〵。

助四 千辛萬苦の、二百兩の金を奉る。ハヽヽヽヽ。

トをかしみに唄ふ。累、不承々々に杯を取上げる。此うち流行り唄、時の鐘にて、良助、以前の形にて、向うより息せきと出て來り、掛け行燈を見て頷き、門口へ來る。暖簾口より小さん、行燈を持ち

出てくる。

小さ　おさのどのが、いま湯を使うてぢやによつて、わたしが持つて來たわいなア。

トよき所へ行燈を置く。

良助　ハイ、ちと御免なされませ。累さんに、ちよつとお目にかゝりたうござります。

ト內へ入る。

累　ヤア、お前は。

妙林　先刻に生玉で逢うた、良助どのとやら。わしが內へ、なんの用があつて。

良助　サア、拙者が參つたは

小さ　アイヤ、大方、與右衛門さんの詫びにでも、ござんしたのであらうわいなア。

良助　成る程、あなたの御推量の通り、何か親御のお心に背き、不緣いたしたと承り、親は後寄り、お詫びに參つてござる。

妙林　コレ〱、無駄口を叩かつしやるな。累は疾に、外の聟を取つたわいの。

小良　エヽ。

ト愕り。

助四　たつた今、祝言の杯も濟んだ。花聟といふは、この羽生屋の助四郎。なんと累も、牛を馬に乘りかへたぢやアないかい

良助　すりや、累どの、眞實か。

小さ　申し、累さん、ほんまかいな／＼。

ト兩方より詰めよる。

累　ほんまでなうてかいなア。

ト助四郎、累に、杯臺の上の財布を見せびらかして懷へ入れる。

母さんの氣に入らぬ、與右衞門どの、どうせ末の遂げられぬ事と、主の事はさつぱり、思ひ切つて助四郎さんと、

小さ　夫婦にならしやんして、女子の道が、立つかいなア／＼。昨日までも今日までも、たとへ添はれぬ義理合ひで、別れてゐても女房ぢやと、眞實見せて與右衞門さんの、手詰めの金まで…………サア、かね／＼云ひ交した事もありながら、手の裏返す今となつて、男を持つて、濟むかいなア濟むかいなア。

ト累の胸ぐらを取つて振り廻す。助四郎、金を見せる。累、キッとなつて

累　濟まぬといふて、どうするえ。

ト振り放す。

小さ　エヽ、お前はなア。

ト寄らうとするを良助、此方へ引廻し

良助　これサ、小さんさま、お前も一旦、主と頼んだ與右衛門さまの事ゆゑ、氣を揉まつしやるも尤もだが、わしも聞いて心は早鐘、つく〴〵思へば何かの樣子。

トちよつとこなしあつて

たとへ誠の不實にもしろ、まだ去り狀もやらぬうちは、跡で存分云はれるほどに、そこが男に生れた強味、急く所でない。マア〳〵、堪へて見物さつしやれ。

助四　ハヽヽヽヽ、去り狀出さうが出すまいが、女が寢返り打つからは、もう叶はねえ。ナウ、累。

累　さうでござんす。かいしよのない與右衛門さんに、飽きが來て乘りかへたお前、これから可愛がつて下さんせ。と云ふもその金。

トちよつと助四郎の懷へ思ひ入れ。

助四　エヽ。

累　トト思ひ入れあるを、累、助四郎の袖より手を入れ

サア、助四郎さん、行て寢やんせう。

小さ　ト引寄せる。助四郎、有頂天の思ひ入れ。

こりやモウどうも

妙林　ト寄らうとするを良助、引留める。妙林、立ちふさがり

小さん、わりや與右衞門が身寄りか。

小さ　エ。

良助　イヤ、身寄りでもござるまいが、舌たるいこの場の仕儀。

助四　イヤ、岡燒餠は、よしにして

妙林　今日出來立ての聟の名披露目。

累　その杯を助四郎さん、……モシ、與右衞門どのへ、よう云うて下さんせえ。

小さ　そりや又あんまり。

累　トまた寄らうとするを、良助、キツと留める。助四郎、立ちかゝるを、累、引廻して

ハテ、構はずと、來なさんせ。

ト獨吟

へ飛鳥川、昨日の淵は今日の瀬と、變る心とつれなさを、云はで焦るゝ螢よ

トこの唄にて累、助四郎を連れ、中二階へ上がり、障子を引立て入る。妙林、兩人に思ひ入れして暖簾口へ入る。良助、小さん殘り、呆れし思ひ入れあつて

良助 小さんさま。

小さ 良助どの。

良助 最前、生玉で、與右衞門さまにお目にかゝり、無ければならぬ鯉魚の一軸、その質請けの三百兩きつと累が拵らへて、渡す手筈と頼もしい、その心とは打つて變つた、今の體裁。

小さ 現在身寄りの、其方やわしが見る前で、人も多いに、あの羽生屋の助四郎の、心に從ひ、あの二階へ、ようも／＼行かれた事ぢや。わしや、腹が立つて／＼、早う與右衞門に、この事云うて、存分に云はせてたも。

良助 成る程。

ト行かうとして

イヤ／＼、與右衞門さまが聞かしつたら、男の役目。

ト切る眞似をして

御主人方の御苦勞を、一人に脊負つた與右衛門さま、もしも御身に凶事あつては

小さ　でも手詰めの金といひ、憎さも憎し、二人の者、

良助　いつそ拙者が、與右衛門さまに成り代り、いよ／＼不義に極まらば

ト殺さうといふ思ひ入れ。

小さ　そんなら、其方が

良助　毒喰はゞ皿、あの金も

小さ　わたしも共々

良助　主家のお爲。

小さ　兄上の爲。

良助　義理と忠義に

小さ　累さんを

良助　コレ。

ト押へる。

〽妹脊變らで逢ふ夜半を、重ね扇の風かをる、ついぞ枕の現にも、忘れぬ人を今さらに、さらぬ別れのしやらほどけ、やがて結ばん、閨の帶。

ト此うち小さん、そこにある風呂敷を取つて、行燈へかける。身拵らへする。良助、寢刃を合せる。よき程に二階の障子を明け、累、以前の金財布を持ち、探り〳〵階子を下りる。小さん良助は二階へ行かうとして、累にゆきあたる。

累　誰れぢやえ〳〵。

小さ　さう云ふ聲は累どの。

良助　不義の成敗。

ト切りかける。ちよつと立廻りに、行燈の風呂敷取れる。

累　早まらしやんすな。不義でない證據はこの金。

ト財布を出す。

良助　なんと。

ト合ひ方。

累　サア、飽きも飽かれもせぬ仲を、義理ある母の慾心ゆゑ、別れてはゐるなれど、心は連れそふ與

右衛門どの、無ければならぬ二百兩、昨日文での頼みゆゑ、この身に心かけてゐる、助四郎が女房になると、蕩して取つたこの金、どうぞ渡して下さんせいなア。

ト良助へ渡す。

小さ　さういふお前の心と知らず、人非人と恨んだが耻かしい。

良助　それ〳〵、貞女と云はうか、賢女と云はうか、この二百兩手に入れば、此方の百兩合せて三包み、鯉魚の一軸手に入れて、元信さまには本地へ御歸參。

ト財布の小判を改めるこなし。

小さ　兄上が元の御身になつて、銀杏の前さまと、天下晴れての夫婦になれば、わたしも願うて金五郎さんと

良助　この二百兩で、三方四方の喜び。

小さ　累どの、仇には思はぬ此お金。

兩人　エヽ、忝い。

ト掠めて時の鐘。累、思ひ入れあつて

累　すりや、その金があれば、狩野四郎次郎元信さんは、本地へ歸つて、銀杏の前さんとやらと、夫

婦にならしやんすかえ。

ト薄ドロ〳〵、燒酎火出る。

兩人　エヽ、恨めしい。

ト大ドロ〳〵、誂らへの合ひ方にて、良助の持つてゐる小判、段々とつながり、蛇の如くになつて、小さんの方へ這ひよる。小さん、悔りして、逃げ廻りながら、側にある莨盆、銚子杯などを打ちつける。良助、一腰を拔いて切り拂へど、身內自由にならぬこなし。此うち累、茫然としてゐる。小さん鏡臺を押しこかすと、鏡臺の髑髏、おのれと累が方へ飛んで、仕掛けにて累が額へ附く。「ウン」と倒れる。一時に小判のひらめき、ドロ〳〵、しやんととまる。

小さ　ても恐ろしい。

良助　何は兎もあれ、累どのゝ氣絕……累どの〳〵。

ト呼びかける。累、ウンと氣の附きたるこなし。

累どの、心が附きましたか。

ト正面向けて引起す。累が額へ、髑髏、吸ひついてゐる。

小さ　ヤア、累どのゝ顔へ
良助　怪しい髑髏。
　　　ト手をかけて、無理に引き離す。累、誂らへの悪女の顔になる。
累　小さんどの。
小さ　ヤア、お前のその顔は
累　わしの顔が、どうしたえ。
小さ　サア
　　　ト小さん慄ふ。
累　コレ、小さんどの、こなたは夫與右衛門どのと、ねんごろしてゐやうがの。
小さ　エヽ、滅相な。なんのマア
累　イヤ／＼、口頃の素振りといひ、良助、わが身、仲立ちか。
良助　どうして拙者が
累　憎いと思ふ小さんどの、誠わが身は、狩野元信が妹　繪合。證據は隠せし月の御判。
小さ　イエ／＼、こりやわたしが大事の守。

累　守もすさまじい。こりや山名さまから、お觸れのあつた品。此方へ渡しや。

ト小さんの懷へ手を入れ、守り袋を引出さうとする。良助、立廻りに突きのけ

良助　何とも怪しい累が有樣。もうこの所に長居はならぬ。小さんさま

小さ　合點ぢや。

ト行かうとするを

累　イヽヤやらぬ。

ト留める。雷の音になり、立廻りのうち、二階より助四郎、暖簾口より妙林、出て來り、有りあふ傘にて小さんに打つてかゝるを、小さん、傘を取つて逃げ出す。

助四　ヤア、累のこの顏ぢやア、もうこの金は

ト取らうとするを

妙林　イヽヤ、こりやアわしが

ト妙林、金を拾ふうち、累、良助の持つて來た赤合羽を引ツかむり、そこにある以前の鎌を持ち、跡追ひかけて向うへ入る。續いて行かうとする良助を、助四郎妙林、金を拾ひながら留めるをかしみ。立廻りよろしき見得にて、ひやうし

幕

時の鐘のツナギにて、直ぐに引返す。

本舞臺、一面の草土手、上下藪疊、よき所に柳の立ち樹、吊り枝。水船の岸に草叢、蓮の葉。、、、木津川といふ榜示杭。一體にこの道具、仕掛け物、物凄き誂らへよろしく、爰にお宮、以前の錢箱を抱へ、行かうとしてゐる。伊平太、立ちふさがつてゐる。時の鐘にて幕明く。ト立廻りあつて

みや　こりやお侍ひさん、道を塞いで、どうするのぢや。

伊平　知れた事、その錢箱の内にやア、おれもちつと欲しい物が入れてある。引ッ浚はうと思ふ所へ、あの箱廻しの金五郎めが、邪魔ひろいだばつかりに、逃がしたと思つた女、雨の晴れ間を土手傳ひ。よい所で逢つた。その品おれに、早く渡せ。

みや　イヽヤ、これには此方も、ちつと大事にせにやならぬ、品が入れてあるこの箱、やはか其方へ渡さうか。道を明けて通しなさんせ。

伊平　うぬ、堅意地をまき出すと、殺生してもふんだくるぞ。いらねえ命の掛替へあるか。

みや　その掛替へは持たずとも、此方も命の根限り。

伊平　渡せ。

みや　そこ退きや／＼。

ト烈しき立廻りよろしくあつて、伊平太、箱を引ツたくり、お宮を突きとばし、下座へ入る。お宮、跡追ひかけて入る。雷、本雨バラ／＼にて、向うより累、赤合羽をかむり出て來り、舞臺へ來て倒れると、跡より小さん、半開きの傘をさしかけて、舞臺へ來る。大雷、小さんも倒れる。雷、本雨、シヤンとやむ。小さん、やう／＼心附きし體にて

小さ　ヤレ／＼、嬉しや。もう爰まで逃げのびたら、よもや累さんが

累　オヽ、その累は、先へ來て待つてゐる。

小さ　エヽ。

ト逃げようとするを引ツ捕へ

累　わたしをそれほどまでに、怖がつて逃げるからは、どうでも與右衛門どのと譯があるの。

小さ　なんのマア、疑ふ事も品による。金五郎さんと譯あるこの身、それが潔白な證據ぢやわいなア。

累　イヤ／＼、今時の藝者の手、主と譯を附けて、年季を踏むもまゝある事。ぶつて／＼ぶち据ゑて根輪際云はせうと思うて、持つて來た鎌の背打ち。カウ／＼／＼

ト小さんをむごく打ち据ゑる。この立廻りに小さんの守の紐切れて落ちる事。累、ちやつと取上げる。

チヨンと月出る。累、見て

こりやコレ、佐々木家を立つる、月の御判とやら。

小さ　アヽコレ、それを

ト取らうとするを引附け

累　これを持つてうせるからは、いよ〳〵お尋ねの狩野元信が妹繪合。お役所へ連れて行く。立ちや。

小さ　イエ〳〵、そりやわたしが大事の守。此方へ返して下さんせ。

累　固意地を吐かすと、この鎌で叩き切つても連れて行く。

小さ　イエ、その守を

ト取りにかゝる。累、鎌にて打つてかゝる。これより凄き合ひ方にて、兩人、タテ、さま〴〵あろうち、守は川中へ打込む。「それを」と立寄るを、小さんへ鎌にて打つてかゝる。小さん、鎌に取りつき、爭ふ拍子に、鎌を正面の藪垣へ打込む。累「ヤア」と鎌を取つて土手へ上がりて、藪垣へかゝる。内より右の鎌にて累を切る。これにて「アツ」と累、土手よりコロ〳〵と草叢へ落ち、また取附いて這ひ上がる。本釣り鐘。

累　ムウ、藪の内より、わしを切つたは

ト蟲の聲。

與右　オヽ、木津川の與右衞門だ。

累　その與右衞門が、なんでわしを

ト立ちかゝるを、コロ〳〵と草叢へ落ちる。途端、藪垣を押分け、與右衞門、右の鎌を振りあげ、下をキッと見下ろす。

小さ　ヤア、與右衞門か。

與右　コレ。

トつか〳〵と土手を下りる。累、與右衞門が袖を引切る。直ぐに膝に引敷き、鎌にて止めを刺す。煙硝火燃える。ゴンと時の鐘、忍び三重。小さん、慄へながら

小さ　すりやアノ累を

與右　逢ふは別れの始めとは、今こそ思ひ累があらまし、良助どのに聞くよりも、宙を走つて木津川堤、あの藪陰でこの場の樣子。日頃に變る嫉妬の惡念。お主になんの女房一人と、不便ながらも鎌の刃に、二十日の月の命も引汐。心がらとはいひながら、不便な最期でござりましたなア。

小さ　悋氣は女の嗜みとはいへ、累の嫉妬は、お國御前の一つは執着、外に仕樣もあらうのに、早まつた事しやつたなう。

トほろりと思ひ入れ。

與右　それも宿世の皆業因。せめて未來は蓮葉に、木津川の水葬禮。

ト死骸を水船へ入れる。

小さ　この流れにこそ大切な、月の御判を

與右　尋ね探すも今宵の闇。明けなば手に入れ、差上げませう。

小さ　そんなら妾は

與右　拙者が隱れ家

小さ　すりや、木津川村へ

ト行かうとする所へ、伊平太、箱を抱へ出て來り

伊平　ヤア、小さんか、いゝ所で逢つた。うせう。

トかゝる。與右衞門、取つて突きのけ

與右　こりやァ伊平太……その箱は

伊平　サア、こりやア
與右　云はずと知れた、毒であらう。
伊平　それ知られたら

ト　かゝらうとして、血に辷り

ヤア、この血は。

ト　かゝらうとするを與右衛門、箱を取つて水船へ打込み、「それを」とくる伊平太を、ポンと當てる。

小さ　これは。
與右　サア、ござりませ。

ト　早見得にて與右衛門、小さんを連れ、向うへ走り入ると、下座よりお宮、走り出て、伊平太に突きあたり、透かし見て

みや　ヤア、お前は伊平太。
伊平　あまめ、又うしやアがつたか。

ト　伊平太かゝるを留めて

みや　最前の箱には、大事のお子が入れてある。どこへやつた。サア、それを云やいなう。

伊平　なんだ、箱の中には大事の子。

ト思ひ入れして

ムウ、そんなら今の箱の中には

みや　早う渡しや。

ト伊平太を捕へる。

伊平　それで様子が知れたわえ。與右衛門が連れて行つた小さんは、慥かに元信が妹繪合。月の御判は、あの小さんが持つてゐるに違ひあるまい。引ッ捕まへて、……さうだ。

みや　さう聞いては猶の事、伊平太、其方はやる事ならぬ。

伊平　エヽ、面倒な。邪魔をすると、ぶち殺すぞ。

みや　今の箱を渡しやいの。

伊平　そこ離せ。

ト立廻り。よき程に月隠れる。忍び三重、見得にて、また立廻り。程よく月出る。よき程に水船より陰火燃える。ドロ〳〵にて、兩人、悶絶する。寝鳥、ドロ〳〵、本水の中より累の亡靈、好みの誂らへ、赤子を抱き、スッと出る。伊平太心附き、起きあがらうとして、與右衛門の小袖を見附け

伊平　こりや與右衞門が袖。なんぞの玉になりさうなものぢや。

ト持つて行かうとして、フツと累の顔を見て、悄りして腰をぬかし、恐れる思ひ入れ。累、赤子をいろ〳〵介抱して、蘆間へ行き、水中に以前打ち込みし御判の入つた守を取上げる。此うち赤子泣くゆゑ、守を口に咬へ、赤子をいぶりつけ、上の方、蘆の間の中に立つて、我が姿と赤子を見て、ホロリと思ひ入れ。ちよつと消える。途端にお宮、心附き、伊平太を見附け

みや　ヤア伊平太、心が附いたら最前の品を、返しや〳〵。

ト云つても、伊平太、腰の立たぬ思ひ入れ、怖いと仕方して逃げようとする。お宮とめる。此うち又ドロ〳〵にて、下の方へ累出る。向うより又平、桐油、菅笠、小田原提灯を持ち、何心なく出て來て伊平太が姿を見て、不思議さうに下の方へ來るうち、ドロ〳〵、累の亡靈、差金にて、伊平太の持つてゐる片袖、おのづと又平が提灯の上へ來る。又平、合點のゆかぬこなしにて

又平　合點のゆかぬ、この袖は

伊平　それを。

トうろめきながら立ちかゝる。大ドロ〳〵、伊平太、連理引きと一緒に、累、上の方へ宙乘り。赤子泣く。お宮、又平に縋る。又平、累の宙乘りに提灯を落される。

累　嬉しやそれで
又平　ハテ、怪しや。
トきつと見上げる。よろしくあつて、ひやうし　幕

第二番目　二幕目　木津川村の場

役名──木津川與右衛門實ハ土佐又平重興。茨木逸當。判人、權九郎。質屋番頭、利兵衛。與右衛門妹、お宮。見世物師、藤六。同妹、おかね。箱廻し、金五郎。藝者、小さん實ハ元信妹繪合。羽生屋助四郎。山住伊平太。渡し守、又平。

本舞臺、三間の間、上の方、押入れ。下の方、大津壁。正面、暖簾口。いつもの所、門口。茅屋根。下の方、下地窓。幕の内より逸當、前幕の形。權九郎、判人の形にて、内へ入りかけてゐるを、お宮、前幕の拵らへにて、これを支へゐる。在郷唄にて幕明く。

みや　こりやお二人さん、どこへ行かしやんす。
逸當　イヽヤ、どこへも參らぬ。夜前、木津川堤にて、女が殺されてゐたとの訴へ。檢分に參つたとこ

ろ、島の內の重井筒の娘の累。この家の主與右衛門が、女房になつたる女ゆゑ、疑ひかゝつた。早く與右衛門に逢はせてくれ。

權九　おれも、その重井筒の懸り合ひ、此ぜげんの權九郎が判で、藝者にやつたあの小さん、昨夜から行くへが知れぬ。もしや廻しの金五郎、元方に縁のある爰の內ゆゑ、與右衛門に逢ふと云へば、留守とも居るとも煮切らぬ挨拶ゆゑ、奥へ踏んごみ、家探しするのだ。

みや　イヽエ、そりやならぬわいなア。小さんさんに縁があればとて、此方へ來やう筈はなし、また累さんぢやというて、一旦縁の切れた兄さんが、知らう筈もなし。逢うて聞かいでもこの通り。外を御詮議なされませいなア。

逸當　イヽヤ、外に勘の附け所は無い。目の附け所は爰の與右衛門。

權九　是非とも奥へ

ト行かうとするを

みや　イヽエ、わたしも與右衛門の妹。逢はすまいと云うたら金輪際。

逸當　面倒な。

トちよつと立廻りあつて、お宮を振り切り、暖簾口へ駈けこむ。直ぐに內より抛り出され、見事に中

返りする。合ひ方になり、暖簾口より與右衞門、浴衣、ちよつと挾み帶、莨盆を下げて、出てくる。
兩人　ヤア、與右衞門か。
與右　夏の月、蚊を疵にして五百兩、晉子が發句に夜を更かし、枕の許をチタバタと、晝寐の夢を覺ました此奴等。妹、どこの唐變朴だ。
みや　サア、この二人はナ
逸當　オヽ、身は當所の役人、茨木逸當。
ト腰の痛むこなし。
權九　おれは島の内のぜけん、井筒屋へやつた小さんが、判人の權九郎だワ。
與右　木津川の人殺し、小さんが駈落ち、この與右衞門が知つてもゐやうかと、それで詮議に來たのか
權九　知れた事だ。
與右　ハヽヽヽヽ、ぜげんが煮燒きをして賣つた小さん、女房といへど緣を切つた果、二人が身の上に、どんな事が起らうとまゝ、この與右衞門が知るものか。
兩人　ヤア。
與右　トサア、突ツ放しても大事ない譯なれど、洗つて見れば緣のある、小さんどのゝ身の上、行くへ

を尋ね、返すとも、年季の金を償ふとも

權九　筋道を立てゝ下さるか。

與右　累が事もその通り、緣は切つても去り狀やらねば、わしが女房、殺した奴を詮議して

逸當　身共に搦めて渡すぢやまで。

與右　兩方ともに、今夜の五ツまで。

みや　兄さん、お前、請合うて

與右　ハテ、待つというても爰は暑い。穢くとも奥で

逸當　そんなら與右衞門

權九　きつと返事を

與右　待つてござりませ。

ト唄になり、逸當、權九郎、奥へ入る。與右衞門、お宮に囁く。お宮、呑みこみ、これも奥へ入る。この唄長く、バタ〳〵にて、向うより金五郎、尻からげ、頰かむりにて走り出て來り、直ぐに舞臺へ來て、門口を明け、ツイと入る。

金五　與右衞門さま、內にござりましたか。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。

與右　金五郎さん、キヨト／＼しい、恟りしたわな。
金五　その恟りより、まだお前の、恟りする事があつて來ましたよ。
與右　まだ恟りする事とは。
金五　サア、木津川の渡し場に、累さんの浮き死骸、疵だらけでゐると聞いて、驚ろくまい事か、駈けつけて見たところが違ひなく、今朝御檢分が來て、それから殺し手の御詮議最中。與右衛門さんなんと恟りしたぢやござりませぬか。
與右　成る程、その話しも、先刻ちよつと聞いたが、人といふものは、いつ何時と知れねえものだてな
金五　そんなら先刻、聞かつしやりまして
與右　南無阿彌陀佛……とサ、心で囘向してゐるのサ。
金五　人殺し、捕つた。

ト側にある莨盆にて打つてかゝる。ちよつと立廻りにて、與右衛門、煙管にて手早く留めて

與右　こりや、なんとなされます。
金五　サア、こりやア、與右衛門さん、お前がもし人殺しと、代官所から今のやうに、捕り方でも來た時にやア、便りに思ふ小さんは元より、お前には大切な、大恩のある叔父御、あの又平さんのお

嘆き。そこ爰を思ひやつて見りやァ、これまで世話になつた恩といひ、わしが代りに名乘つて出る氣。與右衛門さん、なんと、身に暗い事があればあるやうに、明かして云つちやァ下さるまいか。

與右　ウム、累を殺した人殺しが、まだ誰れとも知れぬゆゑ、もしやわしかと案じてくれるは、忝い。現在の女房、そんな事をしていゝものか。

金五　そんなら、いよ〳〵

與右　明日が日縛られる法もあれ。

金五　ムウ。それで落ちつきました。

ト兩人、思ひ入れ。金五郎、門口を締める。障子屋體より小さん、しな〳〵として出てくる。

小さ　お前は金五郎さん、よう來て下さんした。

金五　アヽ、小さん、おぬしは爰へどうして

小さ　サア、爰へ來たにも、いろ〳〵な譯あつて、島の内へも歸られず、それで與右衛門さんを賴んで昨夜から忍んでゐるわいなァ。

金五　そんならァノ駈落ちして……昨日生玉で、二人の譯ある事を、あの妙林婆ァが嗅ぎつけたゆゑ、

やかましういぢりくさつて、内にも居られず、それゆゑに、駈落ちしたら身の代を

與右　ハテ、そりや又與右衞門が、よいやうに

小さ　ほんに、わしゆゑ、いかい苦勞を……又その上に恐ろしい

與右　アコレ……勤めのうちは、そんな事は、いくらもあるものだ。ハテ、落ちついてござりませ。

ト唄になり、向うより助四郎、利兵衞、連れ立ち出て來り、舞臺へ來り、門口をしやくつて見て

助四　こりやァ、なんで晝中に締めてゐる。誰れもゐねえかく。

與右　オイく、誰れだく。

ト與右衞門、兩人に奥へ行けといふこなし。これにて兩人、思ひ入れあつて、上手へ入る。この時、小さん、比翼紋の簪を落しゆく。與右衞門、捨ぜりふにて、門口のかき金を取り、戸を明けて

オヽ、誰れかと思つたら、羽生屋の助四郎さん。

助四　與右衞門、内にゐたか。さてく今日も、暑いぞく。サアく、入らつしやれく。

利兵　ハイく、御免なされませ。

ト兩人、内へ入る。

與右　質屋の利兵衞どの、明日の約束ぢやァないか。

利兵　サア、昨日生玉で、明日とお約束を申しましたが、どうも親方が得心いたしませぬゆゑ、お口入れの助四郎さまと御同道で、脇差も持つて參りました。先づ〳〵これはお返し申しますほどに、お斷わり申して來いと、親方が申しつけでござります。

與右　コレ〳〵、こなたも見世を預かつてゐて、一旦呑みこみながら

助四　サア、その譯をおれも云へど、何をいうても親方が不承知。

與右　ムウ

ト思案のこなし。

して、その一軸は。

利兵　サア、今日金が出來ましたら、あけませうと、持つて參りました。

ト風呂敷より一軸の箱を出す。

與右　これサ、持つてくる位の深切があるなら、長い事ではなし、待つて下さい。この一軸を人手にやつては、この身ばかりか、幾人の憂き難儀、命づくにもかゝはる大事。一日半日を待たれぬといふ無得心なら、この與右衛門も絶體絶命、命一つを切りにかけ、この掛け物はおれが借りた。金出來次第、渡してやらう。

ト思ひ切つてキツと云ふ。

利兵 モシ〳〵、その腹立ちは、親方に仰しやりませ。私しが預かつて來たこの一軸は、持つて歸らにやア濟みませぬ。

與右 持つて行かれるなら行つて見さつしやれ。滅多に渡しはせぬ。

利兵 これは無法な事云はつしやる。キリ〳〵寄越さつしやれ。

與右 イヽヤ、腕づくでも

利兵 イヽヤ、此方へ。

ト兩人、一軸の箱を奪ひ合ふ事。トヾ一軸の包み解けて、中より序幕の火吹竹落ちる。

與右 ヤア、こりや一軸と思ひの外

利兵 ヤア〳〵、ほんにこりやア火吹竹。昨日・生玉へ持つて行つて、直ぐに內へ持つて歸り、戸棚へ入れて錠をおろし、今日明けて來たばかりで、一軸が火吹竹になつてしまうた。こりやア夢なら覺めてくれ。三百兩の質物。三百兩々々々。こりやアどうせう〳〵。こりや斯うしてはゐられぬ

ト狂氣の如くうろたへ、一散に向うへ入る。與右衞門、呆れたる思ひ入れにて

與右 オイ〳〵、利兵衞々々々。マア、待て〳〵。

ト行きかけて

あの一軸が紛失しては……こりや質屋めを詮議して。ソレ

ト一散に花道へ行きかける。

助四　與右衞門、待ちやれ。

與右　なんだか知らぬが、ちつと氣が急く。後でゆつくり聞きませう。

助四　コレ、三百兩といふ代物が、さう早急に出るものか。用がある、マア待ちやれ。

ト合ひ方。

與右　ムウ。おれに用とは。

助四　返してくりやれ。

與右　そりやアノ、十兩の金かえ。

助四　イヽヤ、九十兩だ。

與右　エヽ。

助四　あれほど昨日生玉で、鳥居の先で

與右　その時借りたは十兩。

助四　ハテ九十兩、物覺えの惡い男だ。

ト懷より證文を出し

コレ、しかもおぬしが直筆で、書いたこの證文。云ひかけをせずと九十兩、いま返しやれ。

ト證文を見せる。與右衞門、取らうとする。

ドッコイ、それから御覽じろ。なんと慥かな證據であらうがな。

與右　ムウ。助四郎、こりやアなんだな、十兩の上へ九の字を書き入れて、この與右衞門を、深い所をやつたのだな。

トきつと云ふ。

助四　なんだ、深い所へやつた。コレエヽ、九十兩借りたものを十兩とは、コレ、天道樣が見てござるたつて四の五と爭ふなら、砂利の上へ引摺り出すぞ。でんどへ出たら又どんな、身の疵が出やうも知れぬ。それより貸した九十兩、返して濟ますが、爲であらうよ。

與右　サア、それは。

助四　サア〳〵〳〵。與右衞門、返事は、ドヾどうだ。

與右　ムウヽ。

ト口惜しき思ひ入れ。バタ〳〵にて、向うよりおかれ、前幕の藥箱を引抱へ出て來る。跡より藤六、追ひかけ出て、花道にて

藤六　コレ、その藥箱を持つて、どこへうしやアがる。

かね　知れた事、與右衞門さんから預かつた大事の子、里扶持の金も取りながら、お前が失したといふては濟まぬゆゑ、持つて行て譯云うて、共々尋ねてもらふわいな。

藤六　べら坊め、とても失なつたもの、どうなるものか。打ッちやつて置きやアがれ。

ト云ひながら舞臺へ來り、おかれ、內へ入り

かね　與右衞門さん、お前に濟まぬ、云ひ譯がござんせぬわいなア。

ト奧よりお宮、出て來り

みや　ヤア、おかねさん、何でござんす。兄さんに濟まぬとはえ。

かね　サア、お前から預かつた、大事のあのお子を、兄さんが惡戲やら、どうした事やら、この箱へ入れて、失したといふ事ゆゑ、お前に濟まぬわいなア。

藤六　云ひ譯が無いと、吠え面をかはくが、失したものを、どう仕樣があるものか、料簡さつしやい。

與右　何と云ふ。アノ預けて置いた幼な子を、そりやアどこへ失した。ちつとでも心當りは

みや　モシ〳〵、兄さん、あの子の行くへは知れてゐやんす。昨夜からお前に話さうと思うたれど、どうぞ聞かせずに取戻さうと、人を頼んでやつたが、あの子は山住伊平太といふ侍ひが、連れて行たわいなア。

與右　そりやアどうして。

みや　サア、昨日生玉で、この藤六さんが、どこへやらやると云うて、ソレその箱へ入れてぢやゆゑ、跡へ廻つて、ソツト見世物の錢箱へ入れたを、あの伊平太が錢箱ぐるみ、持つて行たわいなア。

與右　すりや、毒だと思つたあの箱は

みや　預かつたお子を入れて置いた箱ぢやわいなア。

與右　ヤヽヽヽ。

ト當惑の思ひ入れ。

さうとは知らずに和子樣を。ホヽホイ。

トうろたへ、自團駄踏んで泣き伏す。

藤六　なんの事だ。身ぐるみ負けたやうな面をして、餓鬼は伊平太どのが連れて行つたと、現在の妹の詞。此方の肩は拔けたといふもの。ドレ、おらア歸るべい。

ト行かうとして、以前の小さんの簪を拾ひ取り

與右　ムウ、蝶花形に喜の字崩しの比翼紋。こりやァ藝者の小三が簪。

與右　ヤア。

トぎつくりこなし。

藤六　これが爰に落ちてあるからは、重井筒を駈落ちした、小さんは與右衛門、おぬしが隱まつて置くな。

與右　イヽヤ、おらァ

藤六　知らぬものが、どうしてこの簪が爰に落ちてある。

與右　サア、それは。

助四　藝者を引摺り込む位はまだな事、まだ大それた金の云ひかけ。與右衛門、證文通り、恐れながらとやりかけようか。

與右　見す〳〵知れた

藤六　妙林婆ァに頼まれた、小さんを出すか。

助四　でんどへ出ようか。

與右　サア

二人　サア〱。

藤六　慥かに奥が

助四　面倒だ。踏んごめ。

藤六　合點だ。

トこの時、行きかゝる藤六を、與右衞門とめるを振り拂ひ、上手屋體へ踏んごむ。與右衞門は助四郎を引附ける。藤六、奥より見事に返る。上手障子を明け、内より又平、廣袖にて、莨盆を持ち、ズツと出てくる。誂らへの合ひ方。

又平　流れ渡りを横に暮らす、渡し守の浮世又平が御寢所へ、泥濡踏んごみ立ち騷ぐ、うぬはどこの猿松だア。

藤六　オヽ、痛い〱。コレヤイ、おらア猿松ぢやない、見世物師の藤六さまだ。

又平　その藤六が、なんでおらが部屋へ、五體を荷ひ込んだのだ。

藤六　知れた事、重井筒を駈落ちした、小さんが埋んであらうと思つて。

又平　どうしたと。

藤六　サア、先刻ぜげんの權九郎めを、先へ嗅ぎに寄越したが、居ないといふのはお定まり。ところをおれが今爰で、退引きならぬ小さんが簪、斯ういふ證據があるからは

又平　いかにも小さんは隱まつた。

與右　アヽモシ、それでは

又平　ハテ、木津川で親分と、野郎どもに立てられる、この又平が隱まつたと云ふからは、どの道仕埒は附けてやる。わつぱさつぱと騒ぎやァがるな。

藤六　これサ、親分、お前がさう呑みこむものを、わしがごたつくものか。料簡しなせえ。

助四　して、與右衞門、おれが貸した金の方は。

又平　ハテ、それもおれが呑みこんで、濟ましたら云ひ分あるまい。

助四　そんなら、われが

ト思ひ入れ。變つた合ひ方。

又平　與右衞門、爰へ出や。

與右　ハイ。

又平　與右衞門、今日から叔父甥の縁は切つたぞよ。

與右　エヽ。

又平　イヤサ、親なき後は叔父親と、不便を加へ幼少より、育てしところ、町人を賤しみ、武士を好んで佐々木家へ奉公、名も又平といかめしく、大小を挾んだれど、不運にして主家の滅亡。又この木津川村へうろついて來たゆゑ、おれが名跡も讓らうかと、與右衛門といふ名を、われにくれておれはわれが名の又平と、叔父甥の名を變へ〳〵に、世話をする者があつて、累が所へ入り聟に行くと間もなく出て來てから、體裁の惡い今日の仕儀。甥ながらも見下げ果て、名を取返して、今よりおれが木津川與右衛門、われは元の又平と、又あるまじき不孝の見せしめ。

與右　すりや、今日よりお前が元の與右衛門に、おなりなされて

又平　われは又平、緣切つた。それも內證では役に立たぬゆゑ、疾に庄屋へ屆けて置いた。

みや　そんなら兄さんと緣切らしやんして、お前が元の與右衛門ぢやと、アノ庄屋樣まで

與右　お詫びを申すに申されぬ、この身の不始末。

かね　側で聞いても氣の毒な。

藤六　なんの、他人の嘆きは三日も堪へるヿ。して、小さんが身の上は。

ト　この前より又平、一札をサラ〳〵と書いて

又平　其方の存分、片附けてやらうといふ一札。
藤六　文言は讀むには及ぶまい。
又平　藤六どの。
藤六　木津川與右衞門。
又平　助四郎どのゝ證文も、與右衞門が名前、おれが引受けたら云ひ分あるまい。
助四　して、その仕埒は
又平　今宵の五ツ。
藤六　それまで爰でも待たれまい。
みや　狹いが奥で、お二人さん
助四　そんなら與右衞門
又平　奥は蚊がひどい。蚊燻しをして進ぜろ。
助四　きつと返事を、待つてゐるぞよ。

ト唄になり、助四郎、藤六、おかれ、暖簾口へ入る。與右衞門は思案のこなし。お宮は氣の毒なこなし。又平、心にかゝる思ひ入れ。與右衞門、前へ出て

與右　叔父者人の御立腹、御尤もヽも道理とも、一言半句の返す詞は無けれども、拙者が縁をお切りなされて、跡の難儀を引受けて下さるは、まだ私しにお情の

又平　イヽヤ、他人になんの情をかけう。こりや與右衛門といふ名が恥かしいからぢや。

與右　すりや、どうあつても

又平　勘當のしるしには、ムウ、幸ひな物がある。お宮、あのお札箱を爰へ。

みや　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、門口に掛けてある札箱を取り、又平の前へ持つてくる。

又平　コレ、又平や、こりやおれが朝夕拜む、祖師の御首題。現世の祈禱と、我が身を祈つた甲斐もなく、今日の不始末。思へば無理な願ひに、お題目の罰は、性は善なりとやらいうて、生れる時は善心でも、心を鬼にするも佛にするも、氣の持ちやう。サア、このお札もその通り、お題目といへば有り難いが、心は違へど首題と云へば、いまはしい讀み聲。緣切つて、叱り手が無いと思つて、必らずその首の臺へ乘らぬやう、きつと愼しみ居らうぞ。

與右　又も親身のその御意見、有り難うございます。

ト ほろりと愁ひの思ひ入れ。この時、向うにて

庄屋　サア、斯うお出でなされませ。

トてんつゝ、時の太鼓にて、向うより庄屋、案内して、跡より野袴、ぶッ裂き羽織、大小の侍ひ二人
中間附添ひ出て、門口へ來て

サア〳〵、又平どの、ではない、又元の與右衞門どの、甥子にやつた名を取戻したほどに、人別を書き替へてくれと、いま云はれたゆゑ、お役所へその趣き、お屆け申したところ、めでたい事がある、渡し守の與右衞門は、年久しう勤めて居る名といひ、殊にお手傳ひ馬その外御用向きも、神妙に勤める、愛い奴ちやとあつて、今日から川役人に仰せつけらるゝと、アレ、齋藤さまからお迎ひが來ましたわいの。

又平　すりやアノ、この與右衞門を

侍ひ　卽ち武士にお取立てあり、衣服大小は、庄屋方にて着替へさせん。

同　拙者ども同道して、直さま御前へ參り申さう。

みや　そんなら、いよ〳〵叔父さんには

又平　オヽ、侍ひになるは嬉しいが、差しつけぬ大小や着る物。お宮、庄屋樣まで一緖に行て、手傳うてくれ。

みや　アイ〳〵、合點でござんす。

庄屋　サア〳〵、早く步まつしやれ。

ト又平の手を取つて連れて行かうとする。與右衛門、又平の袖をちよつと押へ、ヂツと顏を見上げ

與右　アヽモシ……めでたい御出世に、繰り言は不吉ながら、もしや拙者が、老少不定で

又平　サ、その過ちのないやうに、意見にやつた今の御首題。妙法蓮華經、第二十五の厄年ぢや、よう信心せいよ。

ト與右衛門の袖を拂ひ、門口を締める。時の太鼓になり、庄屋を先に侍ひ、又平、お宮を連れ、花道の中程まで行き、又平、思ひ入れあつて、下に坐り、兩手を廻し

木津川の人殺しは、即ち私し。サア、お役人樣、繩おかけ下さりませう。

侍ひ　神妙の覺悟。出かした〳〵。

ト又平に繩かける。

みや　そんなら、どうでも

又平　コリヤ、見苦しい。何もかも云ひ聞かせ、最前得心したではないか。未練な奴め。

みや　それぢやというて

又平　コリヤ……サア、お引きなされませ。

ト時の太鼓、三重になり、皆々、向うへ入る。與右衞門、門口を明け、向うを見送り、思ひ入れあつて、合ひ方。

與右　叔父者人、須彌山より高き御恩の御意見、懲らしめのため名前まで、お取上げとは思へども、たつてお詫び申さぬは、よく／＼不運なこの身の上。お家を立てうと守り育てし、豐若君と露知らず、現在お主を家來の身で、あの木津川の底の藻屑。元信さまへ差上ぐべき、大切な掛け物も、心を盡せど又ぞろ紛失。不便や女房累まで、忠義々々が殘らず不忠。弓矢神にも神佛にも、見離されたる又平が、どうで死ねとのしめしの御首題。いま切腹をなす體、首の臺とは卽ちお仕置。これを一つの腹癒せに、御免なされて下さりませ。

ト與右衞門、愁ひのこなしあつて、身拵らへして

南無阿彌陀佛。

ト刀を拔き、腹切らうとする。此うち後へ金五郎、窺ひ出て

金五　與右衞門さま、こりや何となさるのぢや。

ト縋り留める。


二役
尾上菊五郎

與右　イヽヤ、死なにやァならぬ譯ゆゑに、死ぬるのだ、そこ退かつしやれ。
金五　コレ、待つた。
與右　エヽ、邪魔なさるな。
金五　イヽヤ、殺しやせぬ〱。
ト與右衞門、腹を切らうとするを、側にある御首題の箱にて留める。いろ〱爭ひ、留める事あつてトヾ、この箱の蓋取れ、中より與右衞門の片袖と、二百兩の包み金、書置、バラ〱と落ちる。
與右　ヤア、お札箱よりこの品は……合點のゆかぬ。
金五　ドレ
ト金五郎、書置を取上げ見て
ナニ〱……「甥又平へ書置きの事」。
ト兩人愡り。
與右　ドレ……ナニ〱……「其方妻累こと、昨夜木津川にて殺され候ふよし、その節不思議に人殺しの證據となるべき、片袖、我れら手に入り候ふ間、持ち歸り見るところ、其方の袖ゆゑ、卽ち我れら元の與右衞門と相成り、人殺しと名乘り出で申し候ふ。

ト金五郎、書置を引取つて

金五　又々妹宮ことも、一軸質請けの爲、金二百兩にて勤め奉公に出し候ふも、其方へ忠義を立てさせ申すべき志しに候へば、少しも我れ／＼へ未練殘され申すまじく候ふ、又平へ、叔父與右衞門。」

與右　ヤア／＼、すりや、この身の罪を叔父者人が

金五　その身に引受け、代官所へ

與右　妹までも苦界の勤め。

金五　叔父は親なり

與右　こりや死ぬにも死なれぬ又平が、身を切り刻めといふ事か。」

金五　又平どの。

與右　金五郎どの、ハテ是非もなき

兩人　事ぢやなア。

ト兩人、腕を組んで愁ひの思ひ入れ。合ひ方にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、眞中暖簾口。上の方、鼠壁、下の方佛壇、膳棚、竈、上流し。竹垣。茅屋根。下座、仕掛けの藪疊、振り出し柳の立ち樹、葉充分に茂り、下手、繩すだれ。いつもの所に門口。すべて與右衛門内奥座敷の體。よき所に丸行燈を置き、二重の上に助四郎、藤六、逸當、權九郎、いづれも臑押しをしてゐる。さんげ〳〵にて、道具とまる。

藤逸　ヨイ〳〵〳〵。

ト拳を打つ。

藤六　オツト、あいこ〳〵。

藤逸　サア、ヨイ〳〵〳〵。

ト又打つ。

逸當　オツト、おれが勝ちだ〳〵。

權九　サア〳〵、押すぞ〳〵。

ト兩人、臑押しをして

助四　オヽ、痛い〳〵。とんだ臑の強い、麩屋の男ださうな。

逸當　サア〳〵、約束通り、頭をくらはせるぞ。

藤六　とんだ事を云つたものだ。虎が婆アに負けるといふ事があるものか。其方をくらはせるぞ。

逸當　ハテ、藤六、おぬしがのは虎ちやアなくて、猫のやうだによつて、婆アにやア負けるが當り前、くらはせるぞ〳〵。

藤六　イヤ、くらはせるといへば、もう五ツをくらはしさうなものだが。

權九　それサ、わしらはお前方より先へ來てゐるが、助四郎さま、お前は又なんの用で

助四　おらア與右衛門に金を貸して、サア〳〵どうだのお定まりぜりふ、果ては今夜の五ツを限り、奥へ入つても餘程の間。

逸當　身共は木津川堤の人殺しの詮議、これも與右衛門めに疑ひかけて五ツの約束。

藤六　わしやア小さんが駈落ちの仕埒。

權九　サア、わしに返事をせうと云つたも五ツ限り。

藤六　おれも又、五ツと奥へ入つたが

皆々　早く五ツにして、挨拶を聞きたいものだが。

助四　それよ、いつもは時の切れで、奥の一間で待つてゐると、いくら入つても、何をしてゐるか知らないからよけれども

藤六　斯う割出して待たされちやア、どうも斯うも仕様がない。
權九　茶も腹の張るほど飲むし、莨には醉ふ。
逸當　臑押しに虎拳。
藤六　白髭明神お渡し申すまで出てしまつたが、これからどうして五ツまで待たうか。
助四　この間、中橋の寄席で聞いた、落し話しにしようか。
權九　イヤ〳〵、それよりは今流行る、畫本を其まゝ、敵討が聞きたい。
逸當　敵討もよからうが、なんでも話しは怪談がよいてな。
藤六　怪談とは、なんの事だ。
助四　知れた事、なんでもおツかない話しの事だ。
權九　アノ、化け物話しか。
藤六　こいつは面白からう。そんな話しと來ちやア、おれが又得手物だ。途方もなく怖いのを一つ、話さうか〳〵。
逸當　オツト、待つたり〳〵。身共は斯う見えても大臆病、聞かぬ先から、ちり毛元がゾッとする。もつと側へ寄つてもらはう。

助四　それ〳〵、先づ行燈を斯う側へ寄せて

トよき所へ行燈を直し

サア〳〵、みんな爰へ、寄つたり〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト皆々、行燈の側へこぞり寄り

藤六　時に、どうで五ッまで待たにやアならぬこの人數。

權九　サア〳〵、燈心もしたゝかぶち込んで

助四　さらば化け物話しを

皆々　始めようか。

ト皆々寄りこぞる。この時、薄ドロ〳〵にて、誂らへ、行燈消え、陰火立ちのぼる。皆々これを見て「ワツ」と倒れ、腰の立たぬこなし。助四郎は下手、權九郎は上手、藤六逸當は向うへ逃げて入る。あと一ッ鉦、凄き合ひ方になり、暖簾口より小さん、ツカ〳〵と出て來り

小さ　アイ〳〵……わたしを呼ばしやんすは、誰れぢやぞいな。慥か呼んだやうなが、行燈も消して、この暗がり。

トあたりを探り廻るうち、いづくよりか赤子の泣く聲する。小さん、聞き耳立て

ハテ、合點のゆかぬ、幼な子の泣く聲。聞けばどうやら豐若さまの……又平どのが誤まつて、あの木津川へ……爰にござらう筈もなく……エヽ、暗うて黒白も分らぬ。どうぞ灯を……オヽ、それ〳〵。

ト火打ち箱を尋ねる事。矢張り一つ鉦、凄き合ひ方、掠めて薄ドロ、燒酎火燃えあがる。仕掛けの行燈の中より累の亡靈、以前の赤子を抱へ、現はれる。行燈より脇へ離れると、矢張り行燈へ灯つく。小さんは此うち火打ち箱を引寄せ、火を打ちゐる。フト行燈を見て、不思議なこなし。赤子笛。

エヽ、氣味の惡い。灯をつけようと思へば、いつの間にやら行燈のともりしは……。

ト赤子、頻りに泣く。

アレ〳〵、又も頻りに幼な子の泣くは、いよ〳〵

トあたりを尋ね、フト累の姿を見附け

ヤ、お前は累さん、アレ

ト逃げようとして逃げられぬこなし、いろ〳〵あつて

この身にさら〳〵覺えの無い事。矢ツ張りわたしを疑うて、恨みを云ひに、迷うてござんしたか

いなア。

ト累、思ひ入れ。

エヽ、なんぢや、恨みは晴れた……そんなら、わたしを恨んだも、お國御前の執着、與右衛門どのに云ひ譯してもらひたさ。二つには、間違ひとはいひながら……豊若さまを木津川の藻屑となせし、夫の不忠が雪ぎたさ、水中より連れて戻つた、と云はしやんすからは、そんならその子が豊若さまか。エヽ、忝い〳〵……なんぢやえ、まだその上に、水底へ沈みし月の御判まで、

ト累の亡靈、懐より御判の入つた守を出し、小さんに渡す。小さん、こなしあつて

サア、取り得て渡すを詫びの種、この世は夫の心に違ひ、果敢ない別れをするとても、未來の縁を與右衛門どのへ、結びくれよと、わたしへ頼みか。

ト累の亡靈、思ひ入れ。

そりやモウ、わたしが云はいでも、さういふ心と聞いたなら、結ばいでなんとせう……なんぢやまだ云ふ事があるとは……ナニ、大切な鯉魚の一軸、行くへなうなつたれど、誠は羽生屋の助四郎が持つてゐる。今宵木津川の川口へ釣出すほどに、手に入れんとや……、月の御判に豊若さま一軸の在所まで……與右衛門どのはさぞ喜び。かゝりや繋がる兄上と、わたしが身の納まり。エ

エ、忝い。

ト思ひ入れ。この時、頻りに赤子泣く。奥よりおかれ出て

かね　ヤヽ、その泣き聲は、與右衛門さまから預かつたお子。

ト累の亡靈を見て、「あれえ」と飛びのき

ヤア、お前は累さん。ナニ、その子が乳に饑ゑてゐると云はしやんすか……さうなうてかいなア

可哀や〳〵。

ト怖々子を抱きとり、乳を呑ませる。赤子、泣きやむ。累の亡靈、嬉し氣にニッコリと笑ひ、思ひ入れあつて

累　嬉しや和子と月の御判、一軸の在所まで告げ知らせ、それをこの身の願ひの種、未來の縁をお前に頼めば、この身の本望、さりながら、戀しと思ふ與右衛門どの、名殘り惜しいは小さんさま、きづなの隙もなき魂の、最早あの世へ、さらば〳〵。

小さ　南無阿彌陀佛々々々々々々。

トドロ〳〵にて、累の亡靈、正面の壁へ消える。心火燃え立つ。おかれ、跡を見て驚ろき

かね　今まで見えた累さんは

小さ　この世を去つた、今のは亡き魂。

かね　エヽ。

小さ　この事必らず世間へは……累どのゝ嫉妬ゆゑ、迷うて出たと云ひ觸らし、この子の事は沙汰無しに。

かね　成る程、わたしも密かに聞きました、この子の素性は佐々木のお胤。

小さ　世にも大事な

かね　豐若さま。

小さ　コレ。

ト押へる。兩人よろしくこなし。ゴン送りにて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、元の道具に戻る。爰に金五郎、藤六を引附けてゐる見得、早めの合ひ方にて道具納まる。

藤六　この野郎め、おれをどうしやァがる。

金五　どうと云つたら、うぬらは寄つてたかつて、與右衛門どのを苛めたばかり、爰の叔父御が名まで取返し、科を引受け、代官所へ行つたゆゑ、それぢやァ濟まぬと與右衛門も、代官所へ駈込み訴

訟。これといふのも助四郎と、ヽぬらがいろ〱の目論見。この金五郎も破れかぶれ。うぬも相手だ、覺悟なせっ

藤六 又平や與右衞門が科人になつたを、ナニおいらが知るものか。うぬが爰にゐるからは、小さんもゐやう。おれに渡せ。

金五 たとへ知つてゐるにもせよ、われに滅多に……まづそれよりは、一緒にうせい。

藤六 小さんを渡せ。

兩人 なにを。

トこれより輕業の鳴り物、三味線入り。兩人、をかしみの立廻り、よろしくあつて、拵らへ出來次第、與右衞門、バタ〱にて向うより走り出て來り、直ぐに內へ入る。

藤六 ヤア、與右衞門か。

與右 金五郎どの、口惜しい。いま一足遲いばかりに、代官所の評定濟んで、叔父御は牢舍、この身の罪と譯を云つても、今日や明日の間に合はず。これといふも、元の起りは鯉魚の一軸。

トこの時、小さん、奧より出て來り

小さ オヽ、與右衞門どの、その在所は知れました。

藤六　なんと。

ト小さんにかゝるを金五郎、引附け

金五　イヤ、その譯を聞かせては面倒だ。此奴は斯うして

ト引据ゑ、藤六が兩方の耳を塞ぐ。

與右　して、在所が知れたとは。

小さ　サア、今の先、アノ累さんが、迷うてござんした。

與右　ヤア、なんと。

小さ　嫉妬につのり、悪い心も、皆お國御前が輪廻の爲す業。それを悔んで迷うてゐた、コレ〳〵、月の御判。まだその上に、木津川へ沈めた若君も、無事に連れてござんしたわいなア。

與右　ヤ、、すりやアノ、藻屑となした若君を

小さ　おかねさん、早うこれへ。

かね　アイ〳〵。

ト赤子を抱き、出て來り

申しいなア、此やうに、まめで戻つてござんしたわいなア。

藤六　ヤア、その餓鬼を
金五　ドッコイ、もうちつと聞かずにゐたり。
　　ト耳を押へる。
與右　ムウ、すりや、御判といひ、若君まで、女房累が……エヽ、忝い。して、一軸は。
小さ　あの助四郎が摺りかへて持つてゐる。今宵川口まで釣出すほどに、奪ひ返せと、これも亡き人のお前へ貞節。
與右　すりや、助四郎めを釣り出す、所も丁度木津川口。
小さ　アヽモシ、これを功に累さんと、未來は縁を
與右　そりや云はずとも、二世の夫婦。
小さ　せめてこの世も附きそふ形見。
　　ト累が緋縮緬の襦袢をやる。與右衛門、取つて
與右　この品は。
小さ　累どのが形見の襦袢。
與右　すりや、これを着て、出入りの場所へ

小さ　難波祭りの練子と見せ

與右　群集に紛れて、あの一軸。

　　ト襦袢を抱へ、行かうとする。藤六、振り放し

藤六　うぬをやつては

小さ　早うござんせ。

與右　合點だ。

　ト双方よろしき見得にて、曲撥、與右衛門は向うへ入る。皆々舞臺によろしく、　滿來
　屋臺囃子にてツナギ、引返し

第二番目　大詰　木津川口の場

役名――山住伊平太。羽生屋助四郎。茨木逸當。箱廻し、金五郎。惡者、雁九郎。同、鳶藏。
木津川與右衛門實ハ土佐又平重興。

一　本舞臺、下の方より大きな橋を見せ、この橋の向うより上の方へ、花車の先ばかり四五本見せ、水際

に誂らへ柳の立ち樹。爰に助四郎、伊平太、逸當、前幕の形。悪者二人立ちかゝり、矢張り祭の太鼓にて幕明く。

助四　ヤレく、先刻には怖い事であつた。

逸當　それサ、四人が五ツを待ち草臥れ、なんのせずともよい事を、化け物話しを始めようと、云ふが早いか行燈から

助四　思ひ出しても、首筋元がゾッとする。なんでもありやア、累の怨念であらう。

伊平　その場に居ないで大きな仕合せ。時に助四郎、おれに何か頼みたい事があると

悪一　わしらを爰まで連れてござつたは

悪二　なんの用でござりますな。

助四　その用は、高くは云はれぬ。

ト兩人に囁く。

悪人　そんならアノ與右衛門めを

助四　コレサ……時に爰はどこだ。

悪者　木津川口サ。

助四　ヤア〳〵、船場へ行くと思つたら、矢ツ張り木津川口へ來たか。こいつは氣味が惡いわえ。

惡一　わしどもで氣味が惡くば、この川筋の船頭どもを、賴まつしやりませ。

助四　なんでも强い奴を、賴む〳〵。

惡二　合點でござんす。……オヽイ〳〵、雁九郎、鳶藏。

兩人　オヽイ〳〵、なんだ〳〵。

ト橋を渡つて雁九郎、鳶藏、船頭の形にて出て來り

雁九　梶六、胴八、おいらを呼んだのは

鳶藏　ヤア、伊平太さまもゐなさるか。何の用でござんすね。

伊平　サア、その用は、おれが聞かさう。斯うだワ。

ト囁く。

雁九　そりやァ氣遣ひさつしやりますな。わしどもが呑みこんだら

鳶藏　どんな奴でも叩き殺して、川へざんぶり、後腹の病めぬ仕事。

雁九　檜垣に乘つたと、落ちついてござりませ。

トばた〳〵にて、與右衞門、以前の襦袢を着て走り出て、皆々を突きのけ、助四郎をとめて

二番目大切





與右　ヤア、助四郎か。
助四　うぬは與右衞門。
與右　ハテ、よい所で逢つたなア。
助四　ハテ、惡い所で逢つたなア。
與右　サア、大切な一軸を、摺りかへて持つてゐる事は、天眼通で知つて來た。この與右衞門に渡すまいか。
助四　ソレ、賴んだは此奴だぞ。
皆々　動きやァがるな。

トばた〳〵にて向うより金五郎、藤六、摑み合つて出て來り、花道にて

藤六　コレ〳〵、與右衞門が爰へ來る〳〵。
皆々　ナニ與右衞門が來る。
與右　べら坊め、與右衞門は疾に先へ來てゐるわえ。
藤六　もう來やァがつたか。サテ早い奴の。
金五　與右衞門どのがゐるからは、おれも加勢に

ト立廻りしい〳〵、兩人、舞臺へ來て

與右　うぬらが爰で落ちあふ事、知つて追ひかけ來たからは、もう叶はない助四郎、尋常に懷の一卷渡せ。

ト助四郎が懷中へ手を突ツこみ、引出す。

助四　何を小癪な。

ト爭ふはずみに一軸を水船へ打込む。大ドロ〳〵、水氣立つて、誂らへの鯉、拔け出てひらめく。與右衞門、キツと思ひ入れ。

與右　さてこそ、土佐の御先祖經隆さま、丹精を凝らし、描きし鯉の一軸、水に寫せば綸絹を放れ、生けるが如く働らくと、噂に聞きしが、アレ〳〵〳〵、いま水中に丈あまりとなつて、泳ぎ狂ふこの場の不思議、希代の名畫も、あるものぢやなア……イデ取上げて、元の掛け地へ。

皆々　さうはならぬ。

與右　小癪な。

皆々　どつこい。

トこれより誂らへの鳴り物にて、與右衞門、皆々を相手に鯉のタテ、いろ〳〵あつて、藤六、柳の樹

にのぼり、落ちる事よろしく、トヾ皆々を切り殺し、掛け地を取上げる。金五郎、鯉の目玉を抉る。

これにて掛け地へ戻る。

與右　まんまと掛け地へ戻つた活鯉。

助四　それを

ト寄るを抉り殺す。

金五　出來た／＼。

トよろしき見得、

まづ今日はこれぎり。

打出し

金幣猿島郡（きんのさいさるしまだいり）

金幣猿島都

第一番目　三建目

九頭龍明神の場
旗指山の場
皷ヶ瀧の場

役名――藤原純友實ハ伊賀壽太郎一子、金剛丸。能勢の源吾近貞。七綾の侍女、櫻木。中村芝藏安面。左大將實朝實ハ高橋文太夫。陸奥三郎角面。雲助、やみの八。同、げんこの六。阿波之助盛遠。純友一子、十太丸。將門妹、七綾姫。無言次郎啞成。犬上兵藤重則。多田の湯の亭主、勝藏。馬士、伊丹の伴七。多田冠者滿成。滿仲息女、瀧夜叉姫。筑波山の強盜、坂東太郎有武實ハ伊豫掾純友。

本舞臺、三間の間、高足。正面、金張り附き、上の方へ寄せて竹の手摺り、毛氈を掛け、燭臺を數多照らし、軒に白紋附きの幕を張り、團子提灯五ツほど吊し、屋體の左右に竹臺に注連繩を張り、下

座の方、青竹の垣根。すべて祭禮の體よろしく、爰に勝藏、多田の湯の亭主にて、二重の上に掛け盤の上へ臺の物を盛りゐる。下に白丁の仕丁四人、富の箱を青竹にて擔ぎ、立ちかゝり、外に若い者、酒肴を取散らし、酒盛りしてゐる。馬鹿囃子にて幕明く。

ト直ぐに神輿太鼓になる。

仕丁　サア〳〵、持つて來たぞ〳〵。

勝藏　オイ〳〵。ヤレ〳〵、忙がしい〳〵。

ト下りて來り

御苦勞々々。そんなら、この箱をお役所から

仕一　アイ、何だかお前に、屆けろとの事ゆゑ

仕二　酒の片手間に擔いで來やしたが、こりやア何だえ。

勝藏　エヽ、貴樣達も野暮を云つたものだ。これが今はやる富の箱よ。

仕三　ハヽア、さては何か、御趣向のある事と見えるね。

勝藏　サ、今日はこの九頭龍明神の御祭禮で、この多田の滿仲公の御所へ、左大將實朝公、內々で祭見物にお入りとの事。その折、何か思ひつきのある事であらう。それゆゑ、わざ〳〵此やうに、掃

除も新たに掃き清め、迂濶に人を許さぬといふもの。

仕四 ヤレ／＼、それで解りました。併し、誠に大入りな群集。全く爰のお殿様の、御武功が見えるではないか。

仕一 さればサ、こちとらまで旨い物の食ひ飽き。ほんに、めでたい事よ。

勝藏 それにしても、實朝さまの御家臣、犬上さま、もう見えさうなものぢやがなア。

トこの時、向うにて

四人 怪しい曲者、おいらと一緒に、歩びやアがれ。

ト渡り拍子になり、向うより兵藤、猿田彦の面をかむり、裝束、鳥兜、足駄を穿き、鉾を持ち出て、これを手古舞ひ四人、絆纏股引、對の形にて、花笠をかむり、取巻いて出て來り、直ぐに舞臺へ來り

手一 怪しい異人め、キリ／＼會所へ

皆々 うしやアがれ。

勝藏 こりやアいづれも、何事でござる。

ト下りてくる

手一 サア、今日の祭の手古舞ひに、雇はれ仲間のおいら四人、祝儀の酒の眞中へ

手二　何だか解らぬ時代な姿。今年の三建日には、こんな奴は出ぬ筈。

手三　高をくゝつて氣をゆるし、折角醉つた醉を醒ましたその上に、挨拶もせずノソ〳〵と

手四　一大事の場所を踏み荒す、得體の知れぬ化け物め。

四人　うぬ、正體を。

トかゝろ。ちよつと立廻り、面落ちる。勝藏、見て

勝藏　ヤア、あなたは犬上兵藤さま。

兵藤　今日の祭を見物と號し、誠はいつぞや亡びたる、將門純友が殘黨餘類、當家へ恨みを含む者、群集に紛れ、入込まんも計られずと、姿を變へて詮議の某。それとも知らず無禮の下郎め、と云ふものゝ、身共も日頃から、馴染み重ねし湯女どもが、祭りの練り物見たいばつかり、役目を包むこの姿。なんと、猿田彦ともあらうものが、戀には憂身をやつすでないか。

勝藏　イヤ、日頃堅いに引かへて、裁けたお詞。隅へは置かれぬ　先づ〳〵、あれへ。

兵藤　然らば許しやれ。

ト上へ通る。

勝藏　最前から、あなたのお出でを待つて居りました。即ち、お誂らへの箱も、これに取寄せ置きまし

た。

兵藤　オヽ、御大儀々々々々。あの品は今日の趣向。常々から身共は元より、朋友どもが心を掛けし當所の湯女ども。今日は是非々々身請けして、連れ歸らんと思へども、皆それ〴〵に數多の客に、それゆゑ富にて、めい〳〵客の名前を記し、一に當るは湯女の誰れ、二番は誰れと高下を極め、その時こそは天運次第。

手一　そんなら富にて縁定めか。併し、此方が馴染みの女、たとへどなたが突き當てゝも

皆々　滅多に外へやるものか。

兵藤　此奴が〳〵。忝くも、主君左大將實朝公の御計らひ、下素の身として、いらざる事を。女は朋友へ根曳き致さねば、猿田彦かぶつた面の鼻がひしやげる。

手二　たとへ左大將でも實朝でも、客となれば一蓮托生。

皆々　こればつかりは

兵藤　うぬ、詞が過ぎたら手は見せぬぞ。又しても仰せをもどく不敵な奴等。

ト立ちかゝる。勝藏とめる。この時、下座にて

呼び　練り物の刻限。

手古 ヤア、練り物の刻限とは。

勝藏 いはゞめでたい今日の祭禮。あなたも爰はワッサリと

兵藤 成る程、相手にするも大人氣ない。いづれ祭の濟んだ上

手古 女は此方へ。

兵藤 イヤ、是非とも身共が根曳きして、朋友どもが顏を立て、その時こそは猿田彥。

呼び 練り物の刻限。

ト誂らへの唐人囃子に四ツ竹の入りたる所作の鳴り物になり、下座より湯女三人、白の形に平括けを締め、腰衣、淺黃の頭巾、團扇を手に持ち、小さき笠鉾の附きたる萬燈を持ち、出てくろ。向うより盛遠、袖無し、よだれかけ、飴賣りにて、雨掛けの飴の荷を擔ぎ、唐人笠をかむり、出て、舞臺へ來り、小短かき所作よろしくあつて納まると、神輿太鼓になる。

兵藤 ヤレ〳〵、出來た〳〵。サヽ、みんな爰へ來て飲みやれ。誠に、賑はしいこの群集。思へばその筈の事よ。この御神は元、田原藤太秀郷が亡ぼした、近江の三上山の百足、その一念が固まり

勝藏 この山奧の谷間に大蛇となり、人民を惱ましたところ

手一 住吉のお告げにて、爰のお大將、多田の滿仲さま

手三　退治た跡へ御所を建て、多田と名けしこの別莊。

女三　これといふのも、源家の御武勇。

盛遠　サア、それゆゑにこそ情ない、餘類の榮華に引かへて、果敢なき主君の御運の末。

兵藤　待て〳〵、見れば見馴れぬ商人め、今ぬかした身の述懷、どうやら怪しい汝が素振り。

盛遠　これは思ひもよらぬお疑ひ。高の知れたる小商人、その日送りの私しが、怪しいと申してからが蟻の思ひ。

勝藏　その蟻も一念凝つては、天上しようと及ばぬ謀叛。行く〳〵知れざる將門純友が、殘黨餘類。

兵藤　キリ〳〵身許の白狀いたせ。

盛遠　これは又お情ない。どこがどこまで私しは。

兵藤　白狀せずば汝が荷物、中改めたその上で、いかにも疑ひ晴らしてくれる。

盛遠　滅相な。これは大事の商賣もの。

兵藤　そんなら、いよ〳〵殘黨餘類か。身共が引立て、糺明せうか。

盛遠　サア、それは。

兵藤　改めようか。

兩人　サア〳〵〳〵

兵藤　キリ〳〵身許を、吐かしてしまへ。

ト この時、向うにて

實朝　者ども扣へい。左大將實朝、直に詮議いたしてくれう。

ト 三味線入り下がり葉になり、向うより實朝、刺貫、壺折、庭下駄を履き、白の置き頭巾、銀摺りの杖を突き、跡より仕丁、長柄をさしかけ、四人附き、出て來り

詩歌管絃に引かへて、神をいさむる今日の祭禮、非常を糺すは自ら、庭木も笑ふ陽氣な別莊。ハテ、賑はしき事どもよなア。

兵藤　これは〳〵、いつの間にかは實朝公。まづ〳〵これへ。

女三　お入り遊ばされませう。

ト 矢張り鳴り物にて、實朝、舞臺へ來り、二重の上に住ふ。

實朝　して、疑ひかゝりしあの者は。

兵藤　即ち亡びし將門純友が餘類。純友は先達てより行くへ知れず、まだその上に、子悴の十太丸、家來が密かに守り育て、諸所を遍歴するとの風聞。それに符合の怪しき商人。それゆゑこの場で、

彼奴が身許を

實朝　すりや、それゆゑに。ハテ、些細な事。今日の神事に事寄せて、殘黨餘類の入込まん事を悟り、出口々々は配符の切手、嚴しき詮議、どうして迂濶に……大方彼れは、祭の練り子であらう。

兵藤　エヽ、見す〳〵詮議と思ひの外

實朝　たとへ何でも彼れ一人、何ほどの事あらん。この場に用無きそな商人、早く立たぬか。

盛遠　ハイ〳〵、お疑ひが晴れましたら、お暇を致しませう。

ト荷を擔ぎ

併し、この場を見遁がした、あの左大將。

ト實朝を見て、思ひ入れあつて

イヤ、左樣なら、ドレ、お庭の方を廻つて來ようか。

ト聖天になり、盛遠、荷を擔ぎ、奧へ入る。

實朝　まだ外に賤しい下郎ども。何ゆゑこの場を

兵藤　この儀は、先達てより願ひ置きたる、三人の湯女、朋友どもが身共へ賴み、神事終らば、早速身請けと存じたれど、客の大勢、それゆゑに、今日の趣向の富の札、それを支へるこの者ども。

實朝　たとへ妨げなすとても、身が云ひつけしにナニ違背。キリ〳〵用意を
女三　そんなら、どうでも
手古　この場で富を
實朝　勤むる役目は身が家來。早くこの場へ
兵藤　誰れかある、呼び出しめされ。
勝藏　ハイ〳〵、畏まりました。
　　ト花道の方へ行き
今日の神事の花樣に、車舍人に扣へたる、陸奥三太郎角面さま、急いでこれへ。
　　ト向う揚げ幕にて
角面　畏まつてござります。
　　ト鳴り物になり、角面、赤塗り、厚綿、黑かちんの牛素袍、股立ちにて、大きなる錐を擔ぎ出て、花道にとまる。
兵藤　三太郎、お來やつたか。
角面　お召しに從ひ、陸奥の三太郎角面、怯めず臆せず揚げ幕から、出面も赤い酒の科、これまで參上

仕つてござりまする。

實朝　出かした角面。かねて汝へ申しつけ置いたる、この女どもの、客を定むる富の札數。

兵藤　その一番の突き富を、身共が取るか、但し又、外の奴等に取られるか、女房定めは今この時。

手古　サア、お手柄が、見たいな〳〵。

角面　仰せまでも候はず、客の名前も一々に、札に音して突きあてる、今日の趣向の縁定め。取るか取らぬは互ひの信心。即ち札を突きとめる、錐の役目はこの角面。

實朝　急いで富を、始めてよからう。

角面　委細、畏まつてござりまする。

トどろんと三保神樂になり、角面、股立ちを取る。此うち仕丁、アリヤ〳〵の聲。實朝は二重舞臺、上の方。女形三人、下の方に、手古舞ひ四人。仕丁、富の箱を眞中へ直し、仕丁八人、上下へ四人づつ別れろ。此うち角面、舞臺へ來り、肌を脱ぎ、錐を持ち、キツとなる。

角面　いま左大將の仰せをうけ、緣を定むる一の富。

勝藏　女房定めの錐の切尖。

兵藤　信心するは今この時。方々、心に願ひを掛けよ。

女三　日頃信ずる冥加の神々、よい客授けたび給へ。

皆々　奇妙頂來々々々々。

兵藤　それが即ち大般若。經文すめば、早々これにて、今が時刻だ。

角面　一番、當てゝくれべいか……ドリヤ。

ト錐を構へる。この時、向うにて

啞成　しばらく。

皆々　イヤア。

角面　待て〳〵。今この角面が仰せを蒙むる一の富。錐を突かんとするところ、はるか向うの揚げ幕から

兵藤　暫らくと聲をかけたぞよ。

皆々　イヤア。

實朝　ア、、コリヤ〳〵、者ども、必らず騷ぐまい。當時日本は偖措き、三ケ津にも、この中島が向う面、暫らくと聲をかける奴は無い筈だが。

兵藤　それ〳〵、左大將實朝公の、御座をも恐れず、暫らくと聲をかけたは

皆々　何奴だエヽ。
兵藤　イヤサ
皆々　何奴だエヽ。
　　　トまた向うにて
啞成　しばらく
皆々　イヤア。
啞成　しばらく／＼。
　　　ト、トヒヨになり、仕丁「アリヤ／＼」の聲。向うより啞成、暫らくの拵らへ、栗梅に升の紋附きの素袍、大太刀、懸け烏帽子、筋隈にて出て來り、吉例の所へ住ふ。此うち後見、上下にて、湯呑と床几を持ち、出て來り、啞成の後に住ふ。
兵藤　待て／＼。今しばらくと聲をかけ、つん出た奴をよく見れば、小僧のやうな翁イの童め。そもまづうぬは
皆々　何奴だエヽ。
角面　イヤサ

皆々　何奴だエヽ。

ト云へども啞成、眞面目になつて默つてゐる。後見、見かね、後より啞成の袖を引く。啞成、矢張り默つてゐる。

角面　キリ〳〵物を

皆々　吐かしやアがれ。

ト啞成、思ひ入れあつて

啞成　それ……

トばかり云つて默つてゐる。

皆々　それ、とは。

啞成　それ……

ト云つたぎり默つてゐる。後見、また袖を引く。啞成、思ひ入れあつて、ノロ〳〵と懐より本を出し

皆々　どうだエヽ。

啞成　それ……

ト云ひながら出す。後見、不思議さうに本を開く。これをキツカケに又、啞成、思ひ入れあつて

それ……

ト後見、本を見て、讀む思ひ入れ。

後見　當時難儀、よく／＼困窮、されば納まる周の春、天正月の曠れ布子、とんと自力に叶はねば、奉加の爲に暫らくと、一聲かけて初鰻、裸で道中がなるものか、それでやう／＼古袷、合せ物は離れ物と、最早それさへ質屋へ入れ、百五十とはいづれも様、情ないぢやァござりませぬか。それからいくら口說いても、素袍の糊の情強に、この虎藏も同じ事、さつぱり分らぬ番頭手代、困り入谷の鬼子母神、妙といふ當も出かけません。そこでみんなの厄介者、當年つもつて五十七、まだだつもつて五十七、年も分らぬ萬年男、菅家の内の裏門番、古今獨歩の古者と呼れたる、無言次郎啞成が、果敢ないツラネのお目見得も、下らぬ奴と大目に見て、おくんなんしの梅屋敷、お通りの節御苦勞と、懸け烏帽子から大太刀も、拔かぬ高名のらくらと、鰻の筋隈角前髮、人に交はる人眞似も、猿島内裏の三建目と、ホヽ敬つて

トこの時、啞成、後見の口を押へ、思ひ入れあつて

啞成　申す。

皆々　どつこい。

ト納まる。啞成、無性に後見の持つたる湯吞を取つて飲む。

手一　おきやァがれ、なんのこッた。おいらが馴染みの女三人、外の奴等に取られるがむやくしさ

手二　今日の富の邪魔をしてもらはうと、仕込みに仕込んだ暫らくの

手三　一聲かけた所はよかつたが、なんだかさつぱり啞のやう。女の事はさて措いて

手四　うぬが無心の奉加帳、ツラネも餘ッほど押しが強い。もう斯うなりやァ自棄無茶だ。

手一　お祭の引立て前、いつそ手短かに叩き殺せ。

啞成　イヤア。

四人　旦那寺へ人をやれ。

啞成　イヤア。

四人　さらば彼奴を、引ッ擔ぐべいか。

ト皆々立ちかゝり、花道へ來る。後見、向うより留めて

後見　アヽ、コレ〳〵、成る程、尤もだが、マア、待つてもらはう〳〵。おれも賴まれて後見に出たが成る程、こんな解らぬ暫らくは初めて見た。後見のおいらに、奉加帳を讀ませた上、ガブ〳〵と湯ばかり飲んで、アヽ、眞面目な顏を見たがいゝ。いつそ一緒に手傳つてやらう。

四人　それがいゝ、サア、みんな來い〱。

ト　これにて啞成、ブル〱して、奉加帳を懷へ入れ、花道の方へ行かうとする。皆々來て、啞成を捕へ、引据ゑ、舞臺へ引いてくる時、啞成の素袍、着物とも脫げ、鼠の布子、下へ越中褌下がつてゐる。烏帽子鬘取れて坊主になり、啞成、手を合せて皆々を拜む。

兵藤　ヤア、さては其奴は

後見　ナニ、雇つた來た暫らくサ。

角面　さうとは知らずに少しの間も、あつたら膽を

兵藤　なんのこれしき。もうこの上は手短かに、女は身共が

手一　どつこい、さうはならねえ。暫らくが役に立たにやア、腕づくだ。實朝でも何でも、おいらが相手だ。第一、何よりも、その高座が氣に食はねえ。引摺り下ろせ〱。

兵角　オヽ〱。

ト　思ひ入れ。

實朝　アヽ、モシ〱、御免なさいまし。もう脫ぎます〱。

兵角　コレ〱、それぢやアおいらが

實朝　イエ〱、どうあつても御免なさいまし。

ト上着を脱ぎ、頭巾を取ると、袢纏、股引、やつしの形。

勝藏　イヤア、左大將と思ひの外

女三　こりやマァお前は

實朝　ほんの雇はれの實朝さまサ。ヤレ〱、窮屈であつた。これより、仕馴れたお話し賣りが、餘ッほどましだものを、そこにお出でなさるお侍ひが、左大將になつてくれと、たつての頼み。爰で一番仕負ふせたら、今まで取られた賣附けより、うまい仕事の近道と、請合つて鹿爪らしく、高い所へ坐つてゐたが、こんな役に立たぬ暫らくとは知らず、先刻ちよつと見た時は、どうなる事かと　ブル〱もので、今だにコレ、體中に、汗が浮くやうでござります。

勝藏　イヤ、こいつはとんだ話しだわえ。

後見　左大將が斯うなつちやア、女はみんな此方のもの。

手古　なんと、二人のお侍ひ、云ひ分ねえか。

兵角　エヽ、いま〱しい。

女三　さうして此方の暫らくさん。

手二　この上、何にも云ふ事は

啞成　ねえ。

後見　イヤ、とんだヨイ〳〵天王だ。これからワッサリ酒にしよう。

實朝　おいらも差詰め、附飮みだ。

手古　引摺つて行け〳〵。

女三　ほんに、それがよいわいなア。

實朝　よい〳〵天王のお入り。

手古　さらば御輿をかきあげようか。

ト神輿太鼓、トヒヨになり、皆々、啞成を引立て、女形附いて奧へ入る。兵藤、角面、殘り

兵藤　いらざる事にかゝつて、暫時の遲刻。身共はこれより、猶も殘黨餘類の詮議。それにつけても、多田の滿仲が末弟たる、多田の冠者滿成どの、左大將實朝公と心を合せ、かねての大望。また、文珠丸賴光は、將門の妹七綾姬と、不義の汚名、その身は國遠したれども、その恥辱を雪がんには、かねて失せたる村雨の劍、行くへの知れるそれまでは日蔭者。まつた、兼基の娘、瀧夜叉姬は、將門と密通なし、子まで出來たを人知れず、能勢の源吾が誘ひ出し、おッ殺したとも、また

存命とも、あやの分らぬ瀧夜叉姫、いづれ穿鑿は追つての事。

兵藤　先づ差當るは、伊豫掾純友が殘黨、まつた子悴十太丸、没落より今に行くへ知れず。慥かにこれと思ふのは、最前入込む怪しい飴賣り、彼奴を捕へて一詮議。

トこの折、啞成、窺ひ出て

啞成　樣子は聞いた。

トこれにて兩人、悄りして飛びのくと、啞成、兩人の眞中へニヨツキリと出る。

兵藤　エヽ、ヨイ〳〵め、また邪魔立て。

角面　いつそ身共が

兵藤　イヤ、殺すに及ばぬ、この馬鹿者。まだ心がゝりは、旗指山に異形な行者、棲むとの取沙汰。てつきりこれも殘黨餘類。

啞成　オヽ、樣子は聞いた。

ト角面を突きのけ、眞中へ出る。

角面　エヽ、面倒な。

ト蹴倒す。これにて啞成「ウン」と倒れる。

兵藤　ござれ。

ト聖天の鳴り物にて、兩人、上手へ入る。奧より女形三人と、後見、勝藏、手古舞ひ四人出て來り

女三　ヤアヽ、また暫らくさんが倒れてぢやわいなア。

勝藏　ヤレヽ、困つたヨイヽだ。懸り合ひにならぬやうに、抛り出せ。

皆々　それがいゝヽ。

勝藏　丁度幸ひ、みんなに手傳つてもらはうヽ。

ト手摺の竹を取り、注連繩にて啞成を縛りつけ、左右に立てたる簓を脊中へ立て

サアヽ、これが今日の附け祭だ。

ト扇を持つて先へ立つ。

後見　若い衆、じゆんわりとやつてもらはう。

手古　合點だヽ。

ト先へ立つて綱を取る。後見は啞成を押へてゐる。この時、啞成、心附き

啞成　ヤア、こりやアひどい目にあはせたな。ても情ない暫らくの成れの果。併し、おれも引込みに、默つてもゐられまい。一生の思ひ出に、おれが音頭を取つてやらう。

皆々　こいつは面白い。早く聴きたいな。

ト唖成、思ひ入れあつて

唖成　さればサ、木遣りにせうか、音頭にせうか。

皆々　さうさの。

唖成　いつその事に、よしにしようか。

皆々　エヽ、おきやァがれ。引出せ。エンヤリヨ〳〵。

ト屋臺囃子になり、勝藏先に、手古舞ひ四人、綱を曳き、後見女形附いて向うへ入る。矢張り神輿太鼓、バタ〳〵になり、奥より實朝、實は文太夫、跡より盛遠、以前の荷を擔ぎ、出て來り

盛遠　珍らしや高橋どの、不思議な場所でこの面會。

文太　サア、最前もこなたの素性、どうやら二人が悟つた樣子。ウカ〳〵しては身共の難儀。して、若君十太丸さまは。

盛遠　箱崎の沒落より、密かに某、この内に、忍ばせ申して今日まで。

文太　すりや、その内に……出かしめされた。さうとは知らいでお行くへを、日頃尋ねし文太夫。然らば、これより貴殿と同道。

盛遠　人目に立たぬ其うちに

文太　この場を早く

トこの時、兵藤、角面、窺ひ出て

兵藤　さてこそ、わいらは、純友が殘黨餘類。

角面　十太丸こそ、慥かにその內。

トかゝらうとするを盛遠、支へる。文太夫、荷を擔ぐ。

盛遠　さう知られたら破れかぶれ、貴殿は大事の、その荷物を

文太　しつかり身共が預かつた。

兵藤　それをやつては。

盛遠　ござれ。

ト文太夫、飴の荷を擔ぎ、向うへ入る。盛遠、兵藤に角面を支へる立廻りよろしくあつて、見得。馬鹿囃子にて

幕

山颪しにてツナギ、引返す。

ト知らせにつき、ドンチャン烈しく、勢子太鼓になり、向うより大鹿一疋、走り出て來るを、百姓四人、簑笠、割り竹を持つて追ひ廻し、出て來り、トゞ鹿は幕の引附けへ入る。

百一 ヤレ〳〵、とんでもない。この節、この多田へ、大きな鹿が荒れ出し、耕作には目をくれず。

百二 人の家や寺院と見れば、なんでも駈込み、夜晝なく

百三 そこで、滿仲さまより、なんでもそれを取押へ、決して命を取るなとあるゆゑ

百四 此やうに割り竹にて、捕へんとすれど、どうして〳〵。命を取るなとお指圖も、どうやら樣子がありさうな事。

百一 何は兎もあれ、狩り出しませう。ござれ〳〵。

皆々 合點だ〳〵。

ト矢張りドンチャン烈しく、この人數、幕の引附けへ入る。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、上下に杉の立ち樹、同じく杉の吊り枝、下の方、多田の湯道と書いた榜示杭。すべて攝津の內、旗指山の麓、幕の內より文太夫、股引、大小、半合羽の、葛籠を脊負ひ、立つてゐる。八、六 雲助にて、四ツ手駕籠を舁き、文太夫に立ちかゝつてゐる。馬士唄、山颪

しにて幕明く。

兩人 これサ〳〵、どうするのだな〳〵。こんなに譯を云ふのに。

文太 これは又しつこい。此方は中國筋より、都へ用があつて相通る。殊には葛籠を此やうに、これぢやもの、どうして駕籠に

八 だによつて、乘んなせえ。ハテ、乘らずとその葛籠、殊によつたら小揚げ代り。ナア、さうぢやアねえか。

六 さうだ〳〵、斯う云つちやアどこまでも、否でも應でもお侍ひさん

文太 すりや、どのやうに斷わり云うても

八 只でも乘せるワ。

兩人 乘んなせえ〳〵。

ト文太夫、迷惑のこなし。矢張りてんつゝになり、花道より、七綾、廣振り袖、姫の形の上へ浴衣を引ッかけ、扱帶を締め、杖を突き、櫻木、矢張り浴衣の上ッ張り、高からげ、長き苞を横たへ、自分の笠と一つに持ち、跡より伴七、大阪手甲、腹掛け、脚絆、廣袖にて、三尺帶、馬士にて、腰に藁沓を提げ、少し醉つたるこなしにて出て來り、花道にて

伴七　モシ〳〵、もう日も暮れる。湯場まで行くにも、爰からは石道。氣のよい馬だ。荒神で、どうだね、どうだね。

七綾　コレ〳〵、わしや草臥れたというても、其やうなものには

櫻木　どう致しまして、お危なうござりまする。此方に望みは

伴七　モシ、さう云はずとも、どうでもお二人。

ト寄るを突きのけ

櫻木　これはしたり、いらぬといふに。

ト矢張りてんつゝにて、舞臺へ來り、思はず文太夫と顏見合せ、悄り思ひ入れ。

文太　ヤ、あなたはこれへ。

七綾　そんなら、わが身も

ト云ふを櫻木、押へて

櫻木　アヽ、モシ〳〵、國を隔てゝあなた方、知らぬ筈では

文太　ほんに、どうして遠國のお方になぞは

七綾　それぢやというて

櫻木　これはしたり、無い筈でござりますわいなア。

トこなし。

伴七　なんだか味なこの樣子、四の五はいらねえ。姐さん達、乘つて行きなせえ。

八　さうだ〳〵。此方もなんでも、この駕籠が、否なら馬も出來た。馬でも駕籠でもお望み次第。

六　選り取り見取り三十八文。モシ、酒手でゆきませう。どうだね〳〵。

伴七　誰れかと思へば、闇の八に拳固の六。そんならわいらも、そのお方へ。

文太　いらぬといふを無理無體、實に急ぎのその旅を

櫻木　わたしらとても、同じ事、急がば廻れ勸めても、二いろともに望みは

伴七　無くば酒手を置いて行け。ハテ、お觸れのあつたこの道筋、朝敵將門の妹たる七綾姫、諸所方々へ辻々に、人相書まで廻つてゐるのだ。女中さん、なんと酒手で、爰を内々。

櫻木　すりや、御主人の……サア、覺えなき身を其やうに

七綾　いはゞ下賤の我れ〳〵二人。

文太　かけ構ひなき此方も、何やら氣がゝり。

八　イヤ、こなたもお尋ねの、あの箱崎にて合戰の、中を切りぬけ、行くへなき

六　その純友の忰たる、十太丸は詮議もの、何か怪しい葛籠の內。
伴七　それゆゑ爰に頑張つて、今日の酒手に
三人　するのだヮ。
文太　すりや、我れ〳〵を餘類とも
櫻木　思ひ違ひか、この場の難儀。
文太　跡先遠きこの山道、それを見込みに
伴七　附けこむ代物。
八　先づ差當るその葛籠。
六　女は此方が。

ト寄るを文太夫、兩人を突きまはす。伴七、寄るを櫻木、ちよつと投げ、懷中より金の包みを出し、伴七に打ちつける。文太夫も同じく兩人へ投げつける。三人、こなしあつて、金を取上げ

伴七　こりやコレ金を
八六　しかも澤山。
文太　望みに任する、この場の酒手。

櫻木　これでは云ひ分

文太　無くば、この場は

三人　どうでも怪しい

ト寄るを文太夫、櫻木・ちよつと突き廻して

文太　人足・大儀。

ト伴七、寄るを、櫻木・ちやつと止めて

櫻木　サア、ござりませ。

ト唄になり、文太夫は葛籠を脊負ひ、櫻木、七綾を介抱して、下座へ入る。兩人、伴七の顏を見て

兩人　伊丹の伴七、なんでも睨んだあの侍ひ。

伴七　此方も同じ女連れ、道を行くとも先々へ、人を廻せば大方爰へ……わいらは跡から、合點か。

兩人　合點だ。

ト山颪しになり、兩人、下座へ入る。伴七、殘つて

伴七　慥かに今のはお尋ね者。二人の奴等が知らせるまで、落葉を焚いて寒さを凌ぎ、一服やつて待たうかえ。

ト伴七、あたりの落葉へ焚きつけるこなし。風の音して、日覆より、雉子一羽、飛んで出る。これをキツカケに、鼓の入りし合ひ方になり、向うより滿成、摑み立て、棒茶筌にて、馬乘り袴、弓小手をかけ、大小、立派なる弓矢を持ち、ツカ〳〵と出て來り、上を見やつて、キツと思ひ入れ

滿成　いま滿仲が養子たる、多田の冠者源の滿成、今日の狩倉に、獲物一疋なさゞれば、諸所を尋ぬる雉子暇、これ幸ひと思ふに飛び去り、いつともなしに程經たる、旗指山の麓まで、我れを引きくる憎くきあの鳥。イデ、某が一矢にて、今日の獲物に

ト弓矢を番ひ、射ようとする。この時、風の音烈しく、雉子は飛んで空へ上がる。滿成、ツカ〳〵と舞臺へ來て、上を見やり

南無三、又ぞろあの雉子を

トこれにて伴七、滿成を見て

伴七　ヤ、あなたは御主人、滿成さま。

ト下へ下がる。

滿成　もと召仕ひの其方、何ゆゑこれに。

伴七　あなたのお賴み、落人の、慥かそれぞと仲間の奴等、その安否をば、暫らくこれにて

満成　出かした〳〵。悪い事には、拔け目なきわれに、內々賴みし樣子。それといふのも、この滿成もと某は、六孫王經基の末の子、滿仲には弟たれど、滿仲、子無きを憂ひ、我れを假に養子となす。然るにその後、文珠丸賴光、誕生あつてより、義理ある我れを追ひ退け、彼れを源氏の棟梁に立つる奇ッ怪。それゆゑに、彼の將門が妹たる、七綾姬との密通を、禁庭へ奏聞、その疑ひ、たうとう彼れは都をば……歸り來るには村雨の、劍の詮議、それゆゑに、國遠なしたる弟賴光。

伴七　それにつけても心得ぬは、あなたの爲にも姉君たる、瀧夜叉姬のお行くへ。これをもより〳〵尋ぬれど、今に知れざる御在所。

滿成　それこそ我れにも現在の、姉の瀧夜叉、秀鄕と、親の許せし云ひ號け。それをば嫌ひ朝敵の、汚名の小次郞、姉上にも、同じ謀叛の餘類ぞと、疑ひかゝつて父經基、首打ち來れとその役目、受けしは滿仲家來たる、能勢の源吾近貞が、館を連れ出でその後は、首打つたとも、存命とも、生死知れざる姉瀧夜叉、それゆゑ源吾を人知れず

伴七　尋ね出だして御行くへ、また一つには、左大將實朝公、心をかけたるその七綾こそ、慥かに見附けし今の旅人。

滿成　餘類の輩召捕つて、彼の村雨の御劍、滿成、詮議いたしなば、それを功にて源家の跡式。その時

こそは其方にも

伴七　拔群の御褒美、それ樂しみに、お旦那樣。

滿成　家來伴七。

伴七　サア、ござりませ。

ト兩人こなしあつて、山颪しになり、奧へ入る。バタ〳〵になり、下座より文太夫、以前の葛籠を脊負ひ、下の杉の蔭より七綾と櫻木とを連れ出て

文太　諸所に立つたる新關は

七綾　朝敵詮議にいかめしう

櫻木　立てつらねたる用意の有さま。首尾よう關を

三人　越えたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、文太夫、葛籠の中より十太丸、廣袖、小袴、馬手差し、右の搾らへにて出るを、文太夫、同じ葛籠より紫の裝束を出し、葛籠の上へ直し、はるか下がつて思ひ入れ。櫻木、十太丸を眞中に直し、兩手を突いて

櫻木　誰れござりませう、藤原純友公の御嫡男、十太丸さまともあるべき御身が

文太　晝は人目を憚りて、葛籠の内へ忍ばせ申し、夜陰に至ればやう〳〵に、暫しの憂をこの如く……まつたそれなる裝束こそ、御父伊豫の純友公、關白職に上らんと、かねて用意の御衣服。御父上の御行くへ、尋ね求むるそれまでは、父上の御形見、朝夕にも

櫻木　兄君將門公の御最期の折、形見と手づから、お渡しありしこの劍、君と思うて、七綾さま。

ト錦の袋に入れし髑髏と、寶劍とを、苞より出して見せる。

七綾　おなつかしい兄上樣、同胞緣を切りたまふ、しるしに賜はる御劍は、かねて心の詞の謎。

文太　いかなれば敵味方と、引別れたる滿仲公。その姬君たる瀧夜叉どのは將門公。また將門公の妹に

七綾　この七綾は賴光さまと

櫻木　斯くまで惡緣、さま〴〵に、結ぼれ解けぬ御苦勞も、やがて戀しう思し召す

十太　すりや、父上や

七綾　文珠丸さまに

文太　やがてめでたう

櫻木　お逢はせ申しませうわいなア。

ト この後に伴七、八、六、窺ひゐて、この時、ツカ〳〵と前へ出て

伴七　さてこそ朝敵、將門が餘類。
八　まつた伊豫にて亡びたる、純友が一家の落人めら。
六　そこ一寸も動きやァがるな。
　　トこれにて文太夫、裝束を葛籠の中へ入れ、十太丸を圍ひ、櫻木は七綾を介抱なし、こなしあつて
文太　すりや、最前よりの樣子をば、聞かれし上は是非もなし。
櫻木　女でこそあれ將門公の、御内に育ちしこの櫻木。
文太　伊豫にてその名を知られたる、高橋文太夫時家が、切つて〳〵切り散らし、御主人方の御供する道明けて通すまいか。
伴七　面倒な。疊んでしまへ。
　　ト禪のツトメになり、八、六。文太夫へ打つてかゝる。伴七、七綾を引立てようとする。文太夫、これを引戻し、三人の目先へ白刃をさしつけ
文太　この間に早う。
櫻木　ござりませ。
　　ト三重になり、櫻木、七綾を連れて向うへ走り入る。

作七　ヤア、二人の女は此おれが。其うちわいらは、この老ぼれを。

文太　何を小癪な。

ト矢張り禪のツトメになり、兩人かゝる。伴七、十太丸を引立て、一散に向うへ入る。文太夫、南無三しと行きにかゝるうち、杉の下より、頭巾に顔を隱せし廣袖の男出て、葛籠を引ツ抱へ、下座へ走り入る。文太夫、見て

南無三、裝束入れたるあの葛籠。それより大事は十太丸さま、跡追ひかけて

兩人　ドッコイ、やらぬワ。

トかゝる。これを振り切つて、文太夫、向うへ入る。兩人、追つて入る。知らせにつき、黒幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、九尺の高足、岩組み、崖づくり。上に九頭龍明神といふ額をかけたる祠あり、葭簀をかけたる古き宮の體、諸所に蔦、左右に杉の立ち樹。上の方に、油紙帳、この所に六部の笈。東西岩組み、山の峰の心。杉の吊り枝、紅葉の蔦をあしらひ、山颪しにて道具納まる。

〽それ、風水地下に歸すれども、猶も恨みの晴れやらず、瞋恚の災忽然と、いま立ちのぼる・
煙さへ、迷ひの雲とやいひつべし。

ト大薩摩切れると、山颪しになり、日覆より以前の雉子、舞ひ下がる、よきキッカケに鈴の音になり、葭の簾を切つて落す。内に金剛丸、鼠の頭巾、白の着附け、淺黄の刺貫、鼠紗のやうなる衣、肌を荒繩にて卷き、おどろの拵らへ。前に經横を直し、その上に香、卷き物を並べ、花活に樒の花を入れ、うしろ見附け、扉、この前に注連を張り、壇を構へ、燈明を捧げ、素燒の鉢へ鳥類畜類の頭を並べ、よき所に小さき壺、これにも注連を張り、すべて荒行の見得。眼を閉ぢ、いらたかの珠數を爪ぐりゐる。この時、眼を開き、雉子を見て、思ひ入れ。しめやかなる合ひ方、木魂をかぶせ、よろしくあつて、

金剛 『物云へば、父は長柄の人柱、雉子も鳴かずば打たれまじきを』と、古歌によるべや幸ひと、今宵ぞ滿つる願望の、一千餘座の御神へ、捧ぐる生血も只一品、取得んにも飢渇の行、心を碎く折からに、羽打つて飛びくるあの鳥は、神の不思議に寄りくるとも、生ある物を斯程まで……それもこの身を天帝へ、捧げし上はあの鳥の、神の應護に叶へるか、叶はざるのは今日前。とは云ふものゝ、さは知らず、塒たづねて呼子鳥、打たれし跡にて妻鳥の、さぞや嘆かんその事を、思ひ合せば我れ人とも、定めなき世の習ひぢやなア。

トこなしあつて

我れながら心弱し。少しも早く彼の鳥を

ト樒の枝を取り、覘ひを定め打ちつける。雉子はこれにて金剛丸の側へ落ちる。金剛丸、見て

瘦腕なれど覘ひの的、これぞ誠に神力に、叶へる血汐は一つとなし、殘る一つは何とやら、尋ね行かんも日蔭の雪、消ゆるを待つ身の心ぢやなア。

トこれにて合ひ方、篳篥の音聞える。金剛丸、雉子を引裂き、注連を張りし壺へしたみ、元の所へ直してゐる。この時、紙帳を明け、源吾、剃立て袋附き、髮を後へ下げ、鼠布子、六部の拵らへにて、錫杖を突き、足の痛むこなしにて、そろ／＼と前へ出る。金剛丸、これを見て

金剛　こりや六部どのか。

源吾　御出家には、未だお休みなされぬか。

金剛　左樣でござる。見らるゝ通りのこの山中、夜風強き峰の吹雪、イヤ、六部どのにも、さぞかし御難儀。

源吾　今日で大方四五日これにて、其うち段々とこなたのお世話。殊には日毎さま／＼と、不思議の行法いつにても、見た事もないその大行。して又、何ゆゑこの神を、お祈りなされまするぞ。

金剛　この神こそ、天竺にては一角仙人、祈願を籠めし獨鈷こそ、後に守敏僧都に傳はつて、さま／＼

の不思議。三上の忍術籠められしゆゑ、その埋めし山をば、三上山と云ひ傳ふ。然るに、三上の獨鈷には、數多の百足守護なして、一つに凝つて丈拔群、廿尋あまりとなつたるを、彼の藤原の秀鄕が、射留めし執念、猶やまず、大蛇となつてこの峰に、諸人を惱ます惡靈をば、獨鈷を取出し、この宮へ、封じ納めし九頭龍明神。その神託を仰がんには、かゝる荒行さまぐ\に、祈願を籠めねばなりませぬて。

源吾　人を救ふを神佛と、申すに違ふこの有樣。數多の生類の血汐を取り、それでも神と……とサ、佛道に歸依したら、此やうに云ふであらう」

ト金剛丸、こなしあつて

金剛　六部どのゝ仰せながら、信濃の鎭守諏訪はじめ、人身御供を供ふる神は、諸國に數多。

源吾　でも、それにては神力とは

金剛　ハテ、くどい事を。一々答へ聞かさんも

ト この時、下座にて、時の鐘を打つ。金剛丸思ひ入れ。

ありやモウ四ツか。それなれば今一時、この身の行法、又ぞろ無言の其うちは

源吾　訊けども答へず、云へども聽かぬ。

金剛　無言の行に外々より、詞かくるは、ゆるさせ給へ。

源吾　ハテ、堅ましき行者どのよなア。

トこなし。金剛丸、松葉を咬へ、鈴を持ち、眼を閉ぢて思ひ入れ。向うバタ〳〵になり、伴七、十太丸を引ツ抱へ、走り出て來り、息をついて

伴七　ヤレ〳〵、今の老ぼれめ、よもや爰まで

ト十太丸を下ろし

サア、十太丸、連れて來たこの山中、怪しい行者は純友か。その本阿彌を子悴でも、爰にてとくと。

十太　ナニ、父上が、この所に

伴七　疑はしくば、ソレ、そこへ行て、とつくり面を

ト上へやる。

十太　ヤア、父上。

トこの折、金剛丸、頭を振つて思ひ入れ。

イエ、こりや父上の、純友さまでは

作七　エヽ、この餓鬼は間違へ居るな。早く純友だと云つてしまへ。サア、吐かしやアがれ。

ト打ちのめす。十太丸、泣き出し

十太　もう堪忍ぢやわいなう。

トこれを源吾、見て

源吾　これはしたり、この人は、頑是もないその幼な子、殊には下賤匹夫の身で、殘黨餘類の詮議とは

トこの前より滿成出て、これを窺ひ、この時、前へ出て

滿成　その詮議も、身が申しつけだワ。

ト源吾、思ひ入れ、

源吾　さいふ御身は。

滿成　多田の冠者、滿成だワ。

源吾　ナニ、滿成さまとや。さすればお主の御血筋。この場にどうも

ト立ちかゝるを、滿成、引きつけて

滿成　アノ爰な不忠者め。某が姉瀧夜叉姫、朝敵たる將門と、内々にてどれ合ひし上、懷姙なせしを連れ退きし其方。サア、姫君は、いづくにある。在所を云はねば、この場にて、カウ〳〵。

ト弓にて打つ。

これでも白状いたさぬか。

源吾　御尤もなる御折檻、さりながら、云ふに云はれぬ姫君の

作七　行く〳〵の御詮議、滿成さま、此方はこれにて純友の、實正吐かせ、白狀しろ。

十太　それぢやというて

作七　云はねば、カウ〳〵。

トぶちのめす。

十太　すりや、どうあつても

源吾　云ふ事ならぬこの身の越度。申し譯にはこの場にて、只一思ひ

ト源吾、差添を拔き、腹へ突き立てる。十太丸、これを見て

十太　この身も共に

ト十太丸も同じく腹へ突き立てる。金剛丸、思ひ入れ。

滿成　ヤヽ、兩人一緒に生害なせしは。

作七　合點のゆかぬ出家の有樣。イデ、引立てゝ

ト つか〳〵と上へ上がり、金剛丸の腕を取つて

サア、きり〳〵吐かせ。吐かさずば今目前、この場に於て

滿成 いつそ身共が踏みにじつて

ト金剛丸へ踏みかゝる。ドロ〳〵になり、滿成、タヂ〳〵となる。この時、鐘鳴る。金剛丸、眼を開き、思ひ入れ。

ヤヽ、五體竦んでこの如く……もしやは所持する

金剛 三上山より掘出す獨鈷、その威德にて忽ち苦惱。ハテ、爭はれぬ。

滿成 すりや、おのれこそ。

伴七 始めて聲を

金剛 神に誓ひし無言の行ゆゑ、可哀や目前、忰が最期。これと申すも犧牲の、血汐の入用。よくこそ腹を

源吾 さてこそ違はぬ伊豫掾。

滿成 純友なれば

伴七 伴七が

ト寄るを、立廻つて金剛丸、ちよつと當てる。滿成、續いて寄るを突き廻し、これもちよつと當て、

　　摚と座す。

源吾　ヤヽ、弱りし御身がさほどまで……流石は伊豫の

金剛　この純友。

源吾　さてこそ可哀や、純友公には

十太　父上様。

　　ト金剛丸、十太丸を抱へ

金剛　よう死んでくれたなア。

　　ト思ひ入れ。篠入りの合ひ方になり

この身の願ひに百日の、祈願に供へる其うちにも、我が血筋を犠牲に、供へる血汐は、コレ

　　ト懷中より袱紗に包みし獨鈷を出し

これなる獨鈷へ注ぎなば、忽ち生魂呼びかへす。それと申すも將門どの、再びこの土へ呼び迎へ、旗揚げなしてこれまでの、汚名を雪がんばつかりに、生血の數は揃へども、別れ程經し忰の其方、殊に親子は日陰者、いつくにあつて暮らすかと、案じ煩らふ今日只今、我が願望の生血の一つ、

最前これへ連れ來るは、神の導き給ふかと、嬉しくもあり、心には、不便の念に氣も消え〲、……流石は悴、匹夫たる、下郎の手にはかゝらずと、よくこそ腹を切つたるぞ。コレ、かほど心を盡せしも、朝敵汚名を何卒して、消えさせせんと思ふばかり。子孫の榮えを見る事か、一人の子を殺すのも、浮世の習ひ。一旦約せし武士の、心は金鐵。思ひ廻せばコレ悴、因果な武士に、コレ、生れたぞいやい。

ト思ひ入れ。

源五　ホヽウ、惡人なりとも義心は金鐵。我れもいつぞや姫君が、朝敵將門の胤を宿せし大罪によつて人知れず討てとある主君の嚴命。この山中に引入れ、邪慳にも姫を討つて捨てしが、切り口より生れし御子は、女房に預けん爲、廻國修行し、やう〲手渡し、一周忌の今月今日、屍埋めし鼓ヶ瀧。それゆゑ爰に人知れず、心ばかりの手向けの念佛。その夜に至りこの場にて、死なねばならぬ廻り合せは、矢張り主人の御罰なるか。とはいへ形見に殘せし振り袖。

ト笈より廣振り袖の衣裳を出し

朝夕これを姫君と、思うてこれまで

金剛　それぞ幸ひ將門の、魂魄を呼び返すとも、戻るべき五體無し。幸ひなるかな瀧夜叉の、五體を假

三立目



後之立目



の小次郎將門。
源吾　すりや、姫君の骸をば
金剛　あばき出して生魂の、奇特はこれなる、我が子の生血。
十太　ちつとも早う、父上様。
ト思ひ入れ。金剛丸、こなしあつて
金剛　不便ながらも、臨終稱念。
ト引寄せ、短刀にて咽喉を貫く。
源吾　ヤヽ、現在親が
金剛　手にかけたるも、これ偏へに、恨み重なる源家の滿仲、又は討手の貞盛秀郷、思ひ知らせん、やはや恨みを
源吾　すりや、御身には
金剛　又も四海を惱ます毒蟲。しるしはこの場で
ト上を見やり、獨鈷を出し、キツと見得。ノツトになり、こなしあつて
いかに梵天帝釋、魔界の修羅王。逆徒といへど臣たる道、誠に變る事あらんや。いま眼前に我が

子の血汐、調ひ揃へば生魂の、再び小次郎將門が、怨念爰に呼び下し、力を添へてたび給へ。奇妙頂來、奇妙頂來。

ト以前の壺の血汐を獨鈷に注ぎ、立ち身にて、天へ向つて思ひ入れ。大ドロ〳〵になり、この獨鈷を日覆へ引上げる。金剛丸、思はずタヂ〳〵として、高足へ上がり、空を見上げ、キツとなつて見得。

早目のやうな合ひ方になり、金剛丸、思ひ入れあつて

アラ有り難や、喜ばしや。今ぞしるしの、ありつる上は

ト經机より白衣と鍬形を出し

この鍬形と裝束こそ、今日まで祈る法力の、形代となるこの二品。獨鈷の德に將門が、蘇生の人に手渡しなし、再び開くる太政大臣。アラ、有り難や

トきつとなり

喜ばしやなア。

トこの時、滿成、伴七。起きあがつて

滿成　さてこそ謀叛の伊豫の純友。

伴七　先づ差當る白衣と鍬形。次手に姫の振り袖も、下郎が得物。

ト手をかけるを、支へて

金剛　我れはこれより姿をも、變へて尋ぬる將門君。

源吾　我れはあの世の、御主人様へ

滿成　その道連れに、純友觀念。

ト切つてかゝる。この時、六、八、現はれて、源吾へかゝる。伴七、經櫃へ白衣と振り袖を押しこみ、これを抱へ、下の切り穴へかゝる。源吾、上の切り穴にて、兩人を小脇に抱へ、三方よろしく、金剛丸は鉄形を持ち、キツと見得。この時、風の音して、一疋の鹿あらはれ、經櫃を抱へ、下の切り穴へ飛びこむ。金剛丸、これを見て

金剛　南無三、經櫃

滿成　いそふれ伴七。

伴七　心得ました。

源吾　いでや冥土へ

ト兩人を抱へしまゝ、切り穴へ飛びこむ。金剛丸、双方を見て

金剛　怪しきこの場の

ト この時、伴七、金剛丸へかゝる。金剛丸、滿成を片手にとめ、伴七を踏みしき、キツとなる。

有様ぢやなア。

ト 兩人を引附け、キツとなつて見得。これより誂らへの鳴り物。この見得にて、この舞臺を一面にセり上げる。この下へ山幕附いて上がり、よきキツカケに切つて落す。

本舞臺、三間の間、打抜き岩間、段々に瀧流れてくる見得。後に四尺ほどの高さの塚。この上に五輪尤も碎ける仕掛け。草の茂み、東西は矢張り杉。上下、張り物の岩。よき所に大きなる丸物の古塔婆すべて津の國、鼓ヶ瀧の道具に納まる。

ト 直ぐに鳴り物になり、芝藏、凛々しき好みの形、百日にて、經櫃を抱へ、以前の葛籠を下の方に置き、上より落ちたる鹿を踏みしき、この見得にてセリ上げ、キツと見得。

芝藏 いま滿仲が一子たる、滿成公の股肱耳目、中村芝藏安面が、師匠も臆せず搔きのせて、出面の所へ經櫃を、抱へて飛びくる怪しの鹿。うぬも只の鹿ぢやァあるめえ。踏み殺されぬ其うちに、キリキリ經櫃、渡しやァがれ。

ト きつとなり、芝藏、鹿を踏みかけようとする。この鹿、起きあがつて、芝藏を裏向きにて咽喉を締

める。芝藏、正面向きにて苦しむ。これを踏みとばし、鹿の毛をかなぐり捨てる。坂東太郎、好みの形、キツとなる。木魂の合ひ方。こなしあつて

太郎　東風吹かば、沖津白浪龍田山、夜半には一人山々を、棲家と働らく強盜の帳本、坂東太郎がその前で、いらざる木ッ葉の葉武者盜人。なれども抱へし經櫃こそ、仔細ぞあらん。その一品、取得ん爲に無益の殺生。地獄なりと、極樂なりと、勝手次第に

ト芝藏を踏みにじる。これにて芝藏の眼の玉飛び出る。

うしやアがれ。

ト芝藏の死體を後へ蹴退ける。此うち後へ伴七、窺ひ出る。太郎これに構はず

思はず手に入る葛籠と經櫃。なんぞの役に

ト經櫃へ手をかけようとする。伴七、この經櫃を捕へる。太郎、突き廻し、ちやつと當てる。伴七、これにて「ウン」と倒れる。この折、ドロ〳〵烈しく、以前の獨鈷、日覆より舞ひ下がり、五輪の後へ引いて取る。太郎、心得ぬこなし。伴七をポンと蹴る。伴七、見事にかへる。太郎、キツと見得。誂らへ、一つ鉦の合ひ方になり、この途端に五輪碎け、中に、緋の袴、生なりの髑髏、坐つてゐる。太郎、これに構はず、經櫃の側へ立ちより、手をかける。ドロ〳〵になり、髑髏、眼を開き、手を伸ばし

とめるこなし。太郎、思はずタヂ〳〵として、振りかへり、髑髏を見て、ギヨツとして、上へ行かうとする。伴七、心附き、起きあがつて後より太郎にかゝる。太郎、振り切るゆゑ、伴七、ヨロ〳〵として、塚の上へ飛びあがり、髑髏を見て、ギヨツとこなし、逃げようとする時、髑髏、伴七の襟髪を摑む。太郎、あたりにありし大塔婆にて打たんと振りあげる。大ドロ〳〵、太郎、タヂ〳〵として跡へ下がる。伴七、立ちながら殺されし思ひ入れ。髑髏、瀧夜叉の顏に變り、片手に獨鈷を持ち、ニツタりと笑ふ。太郎、下より塔婆にて伴七の足をすくふ。伴七、前へポンとかへる、その塔婆を瀧夜叉、右の手に抱へ、左に獨鈷を持ち、太郎は下にて塔婆を摑み、兩人、キツと見得。鳴り物變つて瀧夜叉おどろなる髪、白袷の振り袖、破れたる緋の袴、その先を破り、ちぎれし所より片足出し、上に薄き袷の三重衣、白の扱帶、女の姿にて心は男にて、太郎の引く塔婆と共に下へ飛び下りる。太郎、女と心得、あざ笑ふうち、瀧夜叉、大塔婆を引ツたくり、打つてかゝるゆゑ、太郎、急にあわて、拔かんとするうち、烈しく太郎をまくしたて、ト、太郎を打ち据ゑ、塔婆を振りあげ、キツとなる。太郎、後へ手を突き、呆れし見得、これより打つてくる塔婆を打ち落し、經櫃を引ツ抱へ、瀧夜叉は行きかける。太郎、とめる。瀧夜叉、これを振り切り、ツカ〳〵と元の臺の上に上がり、太郎、續いて塚に踏みかけ、拔きかける。瀧夜叉、經櫃を抱へ、片手に獨鈷を出し、九字を切る。これにてドロ〳〵、下

へセリ下げる。太郎、放心して、あたりを見廻し、瀧夜叉見えぬゆゑ

太郎　ヤヽ、すりや妖術にて、この場をば

ト思ひ入れ。この時、下の岩間より六部出て、笠をかむりしまゝ、錫杖を持ち、太郎を後より押へつける。鳴り物打上げ、太郎、振り切り、抜かうとする。この時、八、窺ひ出て、葛籠を浚ひ、行きにかかる。太郎、やらじと留める。六部、切つてかゝる。八、この間へ交り争ふうち、六部は鐵形を落す太郎、これを取上げ、行きにかゝる。六、出て、ちよつと留める。太郎、突き廻し、葛籠を脊負ひ、ツカ／＼と花道へ行く。此うち、六と八は六部へかゝる。六部、八を當て、仕込みにて六の肩先へ切りこみ、こなしある。この時、太郎

なんでも曲者。

六郎　取逃がしたか

ト太郎、東の花道にて、當てる。八、ポンとかへる。六部、白刃を引く。六、かへりながら、六部の笠を取る。この六部、金剛丸にて、白刃を構へ

口惜しい。

ト白刃を拭ふ。この仕組みよろしく、大ドロ／＼にて、ひやうし

幕

ト幕の外、ドロ〳〵にて、直ぐに花道へ瀧夜叉姫、すべらかし、結構なる廣振り袖、紫の扱帶、經櫃を脊負ひ、獨鈷を咬へ、印を結び、素足にてセリ上がる。太郎、鍬形を出し、ニツタリと笑ひ、懷中する。瀧夜叉、獨鈷を見て、同じく懷中する。兩人、表の方を向き、手を組み、キツとなつて見得。これより華やかなる唄に岩戸をかむせ、太郎、振つて向うへ入る。瀧夜叉、男の心にて、同じく振つて揚げ幕へ入る。よろしく知らせにつき、シヤギリ。

第一番目　四建目

宇治通圓の場
橋姫社の場

役名――田原の千晴。通圓の如月尼實ハ將平姉御厨。北白川の安珍實ハ文珠丸賴光。侍女、櫻木。鹿ヶ瀬十太。犬上兵藤。將門妹、七綾姫。山伏、滿海實ハ大内之助安倭。寂莫法印。大芦原四郎將平。如月尼娘、お清。坂東太郎有武實ハ伊豫掾純友。右衛門尉藤原忠文。

本舞臺、三間の間、高足、大和葺きの屋體。伊豫簾。正面、暖簾口。上の方、誂らへの破れ障子。下手は三尺の瓦燈口。これに通圓と書きし額をかけ、その脇に好みの棚を吊り、いろ〳〵なる茶壺を並

べ、この下は襖ズッと上手、一間の附け屋體。下に三尺ほど出し、茶の臺、この上に風呂釜をかけ、茶筌、茶碗、側に低き臺、これに小さき茶壺を八ツ並べ、すべて宇治通圓の道具、下手よき所に櫻の大樹、同じく吊り枝。爰に櫻木、前垂れ、襷、草履を履き、茶を立てゝゐる。上手に茶摘み娘五人、いづれも褄をからげ、笊を持ち、床几に腰をかけ、下の方に兵藤、十太、木綿やつし、百姓の形。兵藤は制札、十太は繪姿を貼りし高札を持ち、伴藏、金毘羅參りの姿にて、皆々茶を飲んでゐる。かすめたる浪の音、茶摘み唄にて幕明く。

兵十　ヤレ〱、イヤモウ、きつい御馳走でござつた。

櫻木　サア〱、もう一つ飲ましやんせいなア。

兵藤　イヤ〱、なんぼ施しだといつても、此やうに御造作になつては

十太　それ〱、結構なお茶を先刻にから

櫻木　イエ〱、大事ござりませぬ。お前、もう一つあげうかいな。

伴藏　イヤ〱、もう濯山。この樣子では、丸龜あたりまでは咽喉は渇くまい。こんな結構なお茶を、また鱈腹飲むも、金毘羅樣の御利益。成る程、宇治は茶どころ緣どころ、イヤ、御緣があらば、また御馳走になりませう、……これはどなたも、御免なされませう。

ト奥へちよつと思ひ入れあつて

ドレ、下向にお禮にあがります。

ト伴藏、こなしあつて入る。

兵藤　成る程、誰れが云ふとなし、此やうに茶を振舞うての施し。

十太　なんぞ深い譯のある事であらう。

櫻木　サア、深い譯といふてはなけれど、此やうに毎日々々施しするも、如月さまのお志し。それといふも、あのお娘御のお清さまの御眼病、直したいとて、いろ／＼の立願。

女一　サア、わたしらも共々に、どうぞと思へど叶はぬ御病氣。

女二　それいなア、男ゆゑに盲目になるとは、モウ、よく／＼な事。

女三　それ程までに思うても、その戀男の顏どころか、お名さへろく／＼知れぬもの

女四　そんな屆かぬ色事より、こちらはいつも朝夕に、ほんに好い茶の匂ひばかり。

女五　男で苦勞しようより、なんと氣樂ぢやないかいなア。

女一　サア、それといふも、この頃は、時ならぬ、裏の畠は一面に、卯月に變らぬ新茶の芽ざし、殊に櫻の返り咲き、これもてつきり如月さま、後生心で此やうに、施しての御立願。神や佛の御利

盆であらうかいなア。

兵藤　成る程なア、爰の娘のお淸どのは、器量といつては云ひ分なし。イヤ、お淸といへば、この宇治橋には、前々から橋姫といつて、緣切りの神、それはこの向うの橋詰め、また此方の岸はお淸女郞、それからいつか向うの橋姫と、此方のお淸を混雜して、今ではたうとう淸姫といふが、云ひ馴れて見れば、さのみ云ひ憎くもないものぢやの。

櫻木　サア、今では皆さんが、お淸とは仰しやらいで、淸姫々々と呼んでばつかり。それぢやによつてあの橋姫さまにあやかつて、思ふ男に緣の薄いのではないか。エヽ、此やうな事云うてゐるうち出花の香がさめては惡い。お前方、もう一杯あげうかいなア。

兵十　そんなら、また御造作にならうか。

櫻木　サア〳〵、たんと遠慮なう、……ドレ、出花を汲んであげうかいなア。

ト茶を汲んで出す。矢張り茶摘み唄、この中へ靜かに禪のツトメを打込み、向うより寂寞、いがぐり坊主、鼠の裏袖、黑の麻衣を着て、大八車へ誂らへの釣り鐘を載せ、これに三井寺鐘樓堂建立と染めし幟を立て、これを曳きながら出て來り

寂寞　三井寺鐘樓堂、建立々々……エヽ、いま〳〵しい奴等だぞ。おれにばかり預けて置いて、重くて

なるものぢやァねえ。併し、もうちつと、やらかせ〳〵……三井寺鐘樓堂、建立〳〵。

ト云ひながら舞臺へ曳いてくる。兵藤、十太、見て

兵藤　ヤア、寂莫か。なんと、大さうな物を一人で曳くな。

十太　また講中に、何ぞの尻尾を見られたと見える。

寂莫　サア、聞いてくんなさい。こんなに建立〳〵と怒鳴つて歩いても、鼻の下の建立に追ひ立てられ取つても〳〵元の杢阿彌。それゆゑ講中には見限られ、よんどころなく力業。誠にこれが、なんとせう幸四郎、どうでも建立と、お定まりの鐘樓サ。

櫻木　ホヽヽヽ、そんな事では、講中のお方の、世話燒かしやんせぬも尤も。さうしてマア、その鐘は、始終はどうなさんすのぢやえ。

寂莫　ハテ、この鐘は、藤原の秀鄕どのが、三上山の百足を退治のその折、龍宮から授かつた鐘を、三井寺で貰つて迷惑。鐘樓堂といふ所を、つけ込んでのこの建立サ。イヤ、鐘の事より、お前方、又お觸れかえ。

兵藤　サア、この制札は、今度藤原の忠文、將門の討手を蒙むりながら、作病かまへて朝敵を見遁がした科、官位所領を取上げられたれど、この宇治は、忠文が代々の所領ゆゑ、昔の恩を忘れぬ者、

十太　忠文に不便をかけまいものでもない、もし忠文をいたはる者あらば、曲事たるとのお觸れの高札
十太　また繪姿は、將門が妹の七綾、今以て行くへ知れねば、見附け次第に首討てとある人相書。左大將實朝さまより仰せ渡され。お坊も隨分心を附けて、御褒美に有りつくがよいワ。
櫻木　そんなら、その高札は、アノ姫君……イヤサ、將門とやらの妹御を。
十太　探し出せとの人相書よ　これはいつもの村境へ、立てゝ置かずばなるまい。それはさうと、貴樣が先刻から持つてゐるのは、なんだ。
兵藤　アヽ、これか。
ト提げてゐる黑油の紙袋を、ちよつと見て
これは、隣村の太郎兵衛が後家に賴まれた黑油、彼奴もよい年をして、色氣な奴よ。併し、役目をしまふまで邪魔だ。お組さん、どうぞ、後まで
櫻木　アイ、幸ひあそこに、淸姫さんの鏡臺、あの抽出しへ入れて置くぞえ。
十太　淸姫女郞の抽出しへ、黑油でもあるまい。ハヽヽヽヽ。
ト兵藤、渡す。櫻木取つて、二重舞臺にある鏡臺の抽出しにしまふ。
兵藤　ドレ、そんならこれから、わしら二人は

十太 高札を立てに行かうか。

櫻木 その高札の繪姿で、配符の廻る上からは、笑の内にも劍を研ぐと、滅多に油斷は

兵十 どうしたとえ。

櫻木 サア、油斷なくわたし達も、見當り次第に訴人して

寂莫 褒美の金で溫まり、株でも買ふがマア當世。さりながら、先刻にからの詞の端、なんだか胡亂な

櫻木 エ。

寂莫 イヤ、胡亂な奴と見たなら、なんの人手に、うまい仕事をさせるものだ。

兵藤 成る程、顏に似合はぬ、慾張つたお坊だぞ。

女一 ほんに、先刻にから遊んでばつかり。ドレ、わたし達は畠へ行て

女皆 摘んで戻つた若葉の手返し。

寂莫 愚僧も一緒に手傳はうか。

櫻木 エヽ、措かしやんせ。お前は似合うた鐘の建立。わたしもこの間に一休み。

兵十 ドレ、此方もお暇と出かけませう。

ト矢張り茶摘み唄。兵藤と十太は、めい〳〵高札を持ち、向うへ入る。櫻木、茶摘み女殘らず奥へ入

る。寂莫残り、下の方へ釣鐘を据ゑ

寂莫　ヤレ〳〵、草臥れた〳〵。併し、これも身から出た錆サ。

　ト あたりを見廻し

いつぞや、大納言貞頼どのより頼まれて、相馬内裏の没落に、ちよろまかした八聲の名鏡。それといふも、貞頼どのがかねての謀叛。その大望成就まで、隠し所に事を缺き、この櫻の下に埋めて置いたが、寶の奇特は櫻の盛り、街の人の不思議も立てば、もう隠しても置かれめえ。幸ひ人目の無いうちに

　ト そこにある竹切れを取つて、櫻の下を掘り返し、鏡を出し

先づ御安泰で忝い。どうぞ暫らく所を變へて

　ト 懐中して

それにしても、胡散臭いこの家の内。あの如月が、お尋ね者の七綾姫を、隠まふに違ひねえ。忍んで實否を糺した上、訴人すれば出世の小口、こいつは建立より餘ツほど近道。裏へ廻つて……さうだ〳〵。

　ト 禪のツトメになり、寂莫、下の方へ入る。禪のツトメ打ちあげる。ゴン、と本釣り鐘、櫻の花、バラ

パラと散つてくる。これにて誂らへの琴唄やうの出の唄になり、向うより如月尼、胡麻鹽切下げ髪、鼠の小袖、小巾の帶を締め、老女の拵らへ、珠數を持ち、片手に花桶、その中へ茶の花を入れ、これを持ち、庭下駄にて出て來り、櫻に目をつけ、思ひ入れ。

如月「鐘の音に、殘り少なく散る花は、かねて物憂き春の夕暮れ」古歌に引替へ、時ならぬ、今を盛りと櫻木の、咲き亂れしも、この日頃、娘の病、癒さんと、佛へ立つる願望に、往來の人へ施しの、心屆きしその奇特と、思へば尊く、今日も又、先立ち給ひし人々へ、只一遍の手向けにと、手折り來りし花にさへ、無常を告ぐる心の入相。ハテ、しほらしい眺めぢやなア。

トよろしくこなしあつて、本舞臺へ來り

いま戻りましたぞや。娘々……こりや、誰れも居やらぬか。

トおます、茶臺に茶を載せ、持ち出て來り

ます　只今お歸りなされましたか。

如月　娘は何して居やるぞいの。爰へ呼びや／＼。

ます　ハイ／＼……モシ、御寮人様、お清さま。阿母様のお歸りでござりますわいなア。

きよ　母様がお歸りなされたかいなア。

ト誂らへの合ひ方になり、お清、世話娘、眼病の拵らへ、目拭きの裂れを持ち、探り／＼出てくる。

如月　オヽ、娘、いま戻りましたわいの。

きよ　母様、お早うお戻り遊ばしました。

ます　ようお草臥れも出ませぬなア。

如月　何と云うても老の足、思ふやうにござらぬわいの。オヽ、其方はこれを、早う佛壇へお供へ申してたも。

ます　ハイ／＼、畏まりました。

ト花手桶を持ち、奥へ入る。

如月　娘、見れば眼の悪いに、よう髪を結やつたの。オヽ、美しう出來ましたわいの。

きよ　イエ／＼、取上げは致しませぬ。あんまり亂れましたゆゑ、ちよつと掻撫でゝ置きましたわいな。それはさうと、今日はお國でお果て遊ばした父さん、眞名古の庄司さまの御命日。わたしも共々お寺參りと思うたれど、何をいうても眼は叶はず。せめて内で香華なりと……サア、それさへ思ふに任せぬこの身。

如月　オヽ、尤もぢや／＼。シタガ、心に忘れぬが直ぐに孝行、佛事の事は母が相應。其方の心に任せ

ぬ事、庄司どのも、御承知であらうわいの。

きよ　それぢやというて勿體ない。それゆゑせめて、父さんの御菩提に、髪をおろして尼法師と、日頃願へど今以て、お聞濟みなき母上樣。今日は幸ひ父さんの御命日。どうぞわたしがお願ひを

如月　成る程、男を慕うて泣き焦れ、その身になつた事ぢやもの。再び逢はれぬ身を悔み、後の世頼む尼法師と、盛りを捨てる日頃の願ひ、聞く度々に其方より、母が心の切なさは、サ、同じこの世にある人でも、行くへは元より名も知らぬ、雲を闇なる尋ねもの。せめては似寄りの人にてもと思ひついたる施しも、二つは其方の眼の病、癒さんものと神佛へ、朝夕願ふ母が心願。これほど心を盡すのも、みんな娘が不便さゆゑ。それにわが身は出家の願ひ。よしそれならずとも、この事ばかりは、どうも母は許されませぬ。

きよ　そりや又なぜでござりまする。

如月　オヽ、許されぬといふ譯は、其方が菩提を弔はうといふ、妾が連合ひ、庄司どのは、まこと父ではないわいなう。

きよ　エヽ、庄司さまが私しの、誠の父ではないとはえ。

如月　オヽ、不審に思ふは道理々々。今まで隠した其方の素性、この身の因果も一通り、語り聞かせん

コレ、娘、ようとつくりと聞きやいなう。

ト誂らへの合ひ方になり

もと妾は、將門公の身内、大芦原が姉御厨、波濤を隔てゝ日高の郡、庄司どのへ縁附きしに、夫は都在番の、留守のつれ〴〵、文月に、暑さ凌ぎと日高川、船に搖られて秋風の、誘へばこの身はいつとなく、まどろむ船へ忽然と、さも恐ろしき女性立出で、今より汝が胎内を、假に宿れる我れこそは、神代の昔、出雲の國、簸の川上の峰に於て、素戔雄尊の御手にかゝり、亡び失せたる八岐の大蛇が怨靈なり。その節所持の寶劍、蛇體の身にて人界へ奪ひ取られしと、八大龍王恒沙のうろ屑、現世は譏り、來世には、惡逆なしたる報ひにて、八萬地獄を出でやらず、長く蛇體の苦を知らねば、一度人界へ身を交はり、劍を取り得て海底へ、戻せし上にて苦を遁がれ、佛體を得るそれまでは、汝が皮肉に分け入ると、詞は忽ちそよ吹く風、袖に入るより目覺めしが、それより妾は只ならず、月滿ちて懷妊したれど、夫は都在番ゆゑ、人の譏りを憚りて、一先づ故郷下總へ、立歸つて其方を平産、同じ年に姫君の、乳人となりしこの身の始終、樣子といふは、この通りぢやわいの。

きよ　始めて聞いたそのお話し。さういふ事なら猶以て、行く末知れぬ身の業因。生れて憂き目見よう

より、いつそ死んだら後の世も……たゞ忘られぬは過ぎし年、遠き東の中山寺、下向の道にて見染めしお方。目は見えいでも目の内に、只その時の俤が、殘るも矢ツ張り深い悪緣。

如月　サア、それを思へば、よく／＼因果な……娘。

きよ　母樣。

如月　あるに甲斐ない

きよ　身の上でござりますわいなア。

　　ト思ひ入れ。三味線入り、禪のツトメになり、向うより賴光、前髮、茶筌、一本差し、好みの形。跡より安俊、法印にて、風呂敷包みを脊負ひ、出て來り

安俊　まづ／＼、お靜かにおひろひなされませ。ヤレ／＼、マア、不思議な緣に御對面。拙者めは大和路をめぐり、歸り詣でに思はずも、絕えて久しき御主人樣。

賴光　サ、父の勘氣に是非もなく、失せし寶を日毎の詮議。好き折からに其方への面會。最早黃昏、心も急げば、汝が推擧に、あたりへ宿を。

安俊　畏まりました、幸ひ向うに報謝宿。私しと御一緒に……併し、そのお姿では……オヽ、弟子の所へ屆けてやる、兜巾篠懸、丁度幸ひ。これにて暫し人目の關。

ト脊負ひし風呂敷を解き、中より兜巾、衣、輪袈裟を出し、賴光に着せ

サア、これからあなたは、北白川の安珍といふ山伏。向うへ參りましても、兎角その心得にて、ナ、モシ、御合點でござりまするか。

賴光　オヽ、承知々々。そんなら今宵は、その北白川の安珍といふ、修驗者よな。

安俊　左やう〳〵。俄法師。悟られぬやう、心を附けて、サ、お出でなされませう。

ト安俊、先へ立つて、舞臺へ來り

サア〳〵、如月さま、只今戻つて參りました。

如月　オヽ、滿海さま、ヤレ〳〵、よう早う歸つてござりました。見れば、どうやら、外面に人が

安俊　ハイ、あれは、私しが、連れのお方でござりまする。

きよ　さう云ふ事なら御遠慮なう、サア〳〵、此方へ。

安俊　それは近頃……サア〳〵、お入りなされませ。

賴光　左樣なら、御免なされて下さりませ。

ト内へ入る。

安俊　コレ〳〵、如月さま、これは手前が師匠の御子息。何分よきに賴みますぞや。

賴光　ハイ〱、私しは、北白川の安珍とやら申す山伏で、不思議な御縁でお宿の御無心。今宵は、いかい御厄介になりまする。

如月　これは〱御挨拶。イヤモウ、皆樣にお宿申すも、目かいの見えぬ娘が爲、施しというではなけれども、何もお構ひ申しませぬ。風呂へなとお入りなされ、ゆつくりとお疲れを、お休めなされませや。

安倍　オヽ、ほんに、さうしませう。サア、お前樣、御一緒に。

賴光　左樣なら、お世話樣にあづかりませうか。

ト立ちあがる。此うち七綾姫、廣振り袖、袋入りの劍を抱へ、後に出かゝりゐて、この時、ツカ〱と賴光の側へ來て

七綾　我が君、賴光さま、おなつかしうござりましわいな。

ト縋る。

賴光　ヤヽ、其方は七綾。

如月　アヽコレ……すりや、文珠丸賴光さまは

七綾　あなたぢやわいなう。

ト嬉しきこなし。

安綾　南無三、たうとう化けが顯はれたか。

ト賴光、七綾を振りきり、奥へ行かうとする。七綾、留めて

七綾　ア、コレ、何ゆゑあつて、あなたには。

賴光　親の許さぬ約束より、朝敵小次郎將門が、妹と不義の汚名にて、斯く浪々の文珠丸、歸參の願ひは村雨の、サ、その寶劍、取得るまでは大事の身の上。それゆゑ今は、其方に詞が

七綾　そんなら、それゆゑ……いつそこの場で

ト持つたる劍を取り直し、自害せうとする。如月尼、お清も、探り〳〵留める。

如清　マア〳〵、お待ち遊ばしませ。

七綾　イヤ〳〵、あなたに離れ、何樂しみ。放して殺してたもひなう。

如月　ア、コレ、早まり給ふな。あなたの願ひを叶へませう。

七綾　エ。

如月　サア、賴光さまなら、あなたとは、敵同士であらうとも、今は修驗の安珍さま、今宵お寢間の起臥しの、御用を聞くは娘清姫、サ、きよ……姫、ナ……親の許した上からは、誰れ憚らず、あな

たのお側へ。

きよ　それは母様の、よいお心附け。安珍さまも一夜の恩、よもや否とは仰しやるまい。

如月　サアどうやら、心ありさうな、娘の心を汲むは親。サ、母が許した、コレ、清姫。

ト劍を取つて七綾を頼光の側へ突きやり

隨分御介抱申しやいなう。

頼光　成る程、折角主の寸志。詞に任せて、今宵は何かと。

きよ　お心置きなう何事も、わたしに代つて、お寢間の御用。

頼光　七綾ならぬ清姫が

安俊　積り／＼し日頃の願ひ。

頼光　サア、姫の戀病。

きよ　イエ、わたしが病を

安俊　癒すは修驗の功力にて

如月　今宵はゆるりと

頼光　何かとお世話に

きよ　ドレ、御案内いたしませう。

ト唄になり、七綾、顔を隠し、頼光ともに、お清光に、探り〳〵、安俊附いて奥へ入る。あと合ひ方。

如月　この如月が手しほにかけ、育てあげたる姫君の、戀ひ焦れ給ふは、あの文珠丸頼光どの。現在敵といひながら、縁につるれば主人も同然。姫の願ひは叶へども、それに引かへ娘清姫、いづくの誰れとも當途なき、戀に亂れてあの眼病。アヽ、一つ叶へば又一つ。心に任せぬ世ぢやわいなう。

ト思ひ入れ。時の太鼓になり、向うより兵藤、十太、下ばかり、股立とり、大小にて、捕り手六人連れて出て來り

兩人　ソリヤ。

トばら〳〵と取卷き

捕手　動くな。

如月　こは仰々しいお役人。何ゆゑあつて、わたしが宅へ、この狼藉。

兵藤　ヤア、狼藉とは奇ッ怪至極。先達て亡び失せたる、將門が殘黨、行くへの知れぬ七綾姫、實朝公の上意により、配符を以て嚴しき詮議。

十太　賤の姿に身をやつし、日毎に窺ふこの家の內。胡散臭いと思ふに違はず、姫を隠まひ置いたる事

慥かにそれと見届けたゆゑ、討手に向ひし我れ〳〵兩人。遁がれぬ所と尋常に、首討ち落すか、
但し又

兵藤　家探しなして面縛しようか。返答次第で汝も同罪。老女、キリ〳〵

兩人　返答ぶて。

如月　ホヽ、これは思ひもよらぬお疑ひ。七綾とやら姫とやら、高位のお方を、なんでわたしが

兵藤　覺えないとは横道者。慥かな證據ある上は、遁がれぬ所だ

皆々　白狀いたせ。

如月　證據とは面白や。して又それは、何を證據に。

トこの時、寂莫、出かゝり

寂莫　オヽ、證據といふはこの寂莫。鐘の供養に事よせて、密かに入りこむこの家の內、見極め置いた七綾姫、殊に喜撰のお組といふ、茶汲み女も慥かに曲者。斯ういふ犬が居るからは、コレ、阿母隱してももう叶はぬ。早く白狀してしまやれ。

如月　オヽ、成る程、遁がるゝだけはと包み隱せしが、證據があれば是非もなし。いかにも姫は隱まひました。併し、現在朝敵の、惡名遁がれぬ將門が、妹君の七綾姫、お覺悟すゝめ、この母が、

十太　ヤア、死ぞこなひの老ぼれめ、口巾ひろきその雜言。

兩人　イデ、我れ〳〵が息の根とめて

ト立ちかゝる。寂莫とめて

寂莫　アヽ、モシ〳〵、それは近頃料簡違ひ。いま踏んごめば先も瀬戸際、死物狂ひ。それより素直に姫の首、討たせて受取り、似せ首か、替へ玉なぞは寂莫が、見る眼嗅ぐ鼻、頑張つて、貧乏ゆるぎもさせやアしませぬ。

兵藤　オヽ、上へ對して忠義の其方、過分々々。然らば汝はこの家に殘り、今宵九ツの鐘を合圖に、又ぞろ姫が首の催促。

十太　それまで出口は十重廿重、時刻過ぐればこの家の滅亡。

寂莫　愚僧はそれまで奧で張り番。

兵藤　然らば老女、必らず時刻を

如月　御念に及ばぬ。
寂莫　へヽ、立派に云へど、後に吠え面。
如月　頭に老は積れども、妾も武士の
寂莫　ムウ、二言は無えか。
十太　ハテ、小氣味のいゝ。
兵藤　そんなら老女、必らず詞を番つたぞ。
寂莫　ドリヤ、九ッの瀬戸を待たうか。

ト唄になり、兵藤、十太、先に、捕り手附いて向うへ、寂莫はこなしあつて奥へ入る。如月尼殘り、思ひ入れあつて

如月　遁がれぬ切端に是非もなう、詞番うて歸したれど、今宵ぞ告ぐる九ッの、姫君樣の最期の知死期。というてお命助けても、遁がれ難なき討手の大勢。こりやモウ妾の一生懸命。とつくり思案をせにやならぬわいなア。

トこの時、奥にて

きよ　思案定めるまでもなう、所詮遁がれぬこの七綾。御厨、其方の手にかけて、討手の者へ渡しやい

なう。

如月　エヽ、なんとえ。

ト眺らへ篠入りの合ひ方になり、奥よりお清、探り／＼出てくる。

きよ　ヤヽ、其方は娘。そんなら今の様子を聞き、母が苦患を助けん爲、七綾さまの御身に替り

アイ、所詮この世で逢はれぬ戀人、いま眼前にあるとても、目かい叶はぬわたしが因果、フッツリ思ひ切りました。せめてはお主の姫君の、お役に立つて死ぬるのが、後の世頼む罪亡ぼし。不孝と知れどお主の身替り。母さん、お慈悲に、お前の手にかけ、早う殺して下さんせ。長らへる程いつまでも、わたしや輪廻に迷ふわいなア。

ト涙ぐんで思ひ入れ。如月尼、側へツカ／＼と寄り、お清の顔をヂッと見て

如月　オヽ、尤もぢや、健氣な娘、出かしやつた。エヽ、これほどまでに慕ふもの、一度殿御に逢はせもせで、なんの手にかけ殺されう。たとへお役に立つたるとて、その戀人のせめて行くへを……神ならぬ身は、それも叶はず、この世からなる闇の闇。賽の河原へ行く時は、多くの子供が父母と、泣いて尋ぬるその中へ

きよ　殿御よ妻よと泣き叫び、死んでも因果の消えやらで

如月　嘆きさまよふ心根を、思へば悲しい、なんのマア、それで佛になられうか。なんぼお主の爲ぢやとて、どうも刃が當てられぬ。老い年積ればいろ／＼な、憂き目を見る事ぢやぞいなう。

ト泣き落す。お清もこなしあつて、この時、奥より

賴光　老母が嘆き、さる事ながら、娘が成佛得脱の、祈りは修驗の安珍が、只今それにて授け得させん。

ト笙の入つたる誂らへの合ひ方になり、奥より賴光、七綾姫出て

七綾　始終の樣子はあれにて聞く。兎角不便の娘が心根。聞けは聞くほど七綾が、あるにあられぬ心の切なさ。淸姫どのはそれ程に、思ふ殿御のある身の上。妾とても遁がれなき、朝敵謀叛の妹ゆゑ、覺悟は疾より極めしぞや。討手の來らぬ其うちに、妾が先へ

ト死なうとする。お清、探りながら留めて

きよ　イエ／＼、なんの勿體ない。この世に望みの無いわたし、せめてあなたのお身替り。モシ、母様謀叛人の將門が、妹の七綾、この場で死ぬれば、この後とても、その淸姫と安珍さま、天下晴れての御祝言。今際の際のわたしがお願ひ。賴光さま、必らずともに姫君を

賴光　切なる其方の志し、いかにもこれなる淸姫と、未來永々。

七綾　そんならいよ／＼、あなたを二世の

賴光　その喜びに引替へて、云ふも甲斐なきこの場の仕儀。

きよ　イエ／＼、わたしは覺悟の身替り。生きてゐるほど未練が殘る。サア、母樣、逆さまながら御介錯。

如月　オヽ、出かした娘。とはいへ、どうも

きよ　時刻うつれば、お前の御難儀。サア／＼、早う

賴光　是非に及ばぬ。

如月　臨終稱念。

きよ　南無阿彌陀佛。

ト合掌する。

如月　南無阿彌陀佛。

ト思ひ切つて如月尼、以前の劍を拔くと、ドロ／＼になり、お清、「アツ」と苦しみ、目くるめき、後へ撞と倒れる。ト空にて大雷。これにて如月尼、氣を替へ、皆々空を見上げ、キツとなつて

如月　ハテ、心得ぬ。今この一腰、娘が最期に拔き放せば、時を違へて雷の

賴光　俄に一天掻き曇り、陽氣發するこの場の動搖。さては尋ぬる村雨の、もしや劍が

ト思ひ入れあつて

何にもせよ。

ト如月尼の劍を取り、見て

ヤヽ、紛ふ方なき村雨の寶劍、再び我が手に入つたるか。チエヽ、忝い。して又、この御劍は

どうしてこの家に。

ト云ひながら劍を納める。

如月　かねぐ\主君將門公、密かに隠し、討死の折、姫に劍をお渡しありしが、源家に失せたる品ゆゑ

に、せめてそれをばあなたと思ひ、片時離さぬ七綾さま。

賴光　何は兎もあれ、御劍我が手に入る上は、勅勘もゆり、今日より、以前の如く源家の棟梁。七綾、

喜べ。

七綾　我が君樣。

兩人　エヽ、忝い。

ト劍を戴き、思ひ入れ。

如月　さすれば、いよ〳〵七綾姫の御首、劍と共に御持參あり、これまで暗き雲霧を、拂ふは娘のお身替り。せめては後世を助かるやう、その劍にて娘の首を

ト劍を取り

コレ、娘、どうしやつた。其方が願ひのお身替り。サ、覺悟はよいか。

ト刀を持つたまゝ引起す。薄ドロ〳〵、お清、其まゝ起きて眼を開き、あたりを見て思ひ入れ。如月尼、刀を持ち、立ちかゝり、思ひ入れあつて、お清の顏をヂツと眺めて

今際の名殘り。

トほろりとして心弛みし思ひ入れ。此うち、お清、フト眼の開きたるゆゑ、心附き、あたりを見て思ひ入れ。

きよ　モシ、母さん、わたしや眼が、明いたわいなア〳〵。

如月　誠に其方の眼病が、どうして忽ち

ト思ひ入れ。

もしや劍の威德なるか。死ぬる今際に眼の明いたも、矢ツ張り因果の

トほろりと思ひ入れ。お清、いろ〳〵見廻し、賴光を見て

きよ　ヤア、あなたぢや〳〵。オヽ、あなたぢや〳〵、お前ぢや〳〵。

ト起きあがり、頼光の周圍をウロ〳〵廻り、また下へ來り、ベツタリと坐る。

ほんに、あなたぢやわいなア。

トよく〳〵見て、如月尼の側へ寄り

申し、母さん、あなたに違ひはないわいなア。

如月　そりや何の事ぢやぞいの。

きよ　サア、わたしが慕ふ戀人は、あなたぢや〳〵、あなたぢやわいなア。

如月　ヤア〳〵〳〵

ト愕り。兩人も、いろ〳〵思ひ入れ。

そんならアノ、頼光さまを

きよ　アイナア。

ト恥かしき思ひ入れにて顏を隱し、いろ〳〵こなしあつて

ようマアお出でなされて下さりましたなア。モシ〳〵、あなたにナ

ト頼光の側へイツ〳〵と寄らうとする。如月尼とめて

如月　コレ、娘、滅相な。あなたは、わが身のお主ぢやぞや。

きよ　サア、お主であらうが、なんであらうが、心の丈を云はねばならぬ。

トまた行くを、如月尼とめて

如月　コレ、其方は今お身替りに、死ぬるのぢやないか。殊にはお主の姫君に、連れそふお方、どうしてわが身か

きよ　サア、お主はよう知つて居れど、斯うなつては、お主も家來も、もう無茶苦茶ぢやわいなア。

如月　それではわが身、濟まぬぞや。ムウ、今まで云うた忠義の道も、戀しいお方に逢うたので、氣がのぼつて忘りやつたの。

きよ　イエ〳〵、なんの忘れませう。お主の爲のお身替り、よう覺悟してゐるけれど、死ぬる今際に戀人の、お顔を見ながら、これがマア、どうマア死なれう、死なれませう。どうで一度は死ぬけれどナ、今まで思ひ思うたる、積る恨みの數々を、十日も廿日も、百年も、ようとつくりと話した上、其うち飽いたら仕樣もなし、マア、それまではお身替り、どうぞ免して下さんせいなア。

如月　エヽ、腑甲斐ない。そんなら今さら卑怯にも、わが身は命が惜しうなつたの。

きよ　アイ、惜しうござりまする。アイ、命が惜しいわいな。これが惜しうあるまいか。三年この方戀

ひ焦れ、目まで叶はぬ戀病も、所詮この世で逢はれねば、いつそ死んでと思ひつめ、それゆゑにこそお身替り、眼前戀しいそのお方が、爰に居るとも見えねば知らず。死ぬる今際にさつぱりと眼の明いたのは、よく／＼の、緣と思へば猶更忘れぬ。わたしが死んだらその跡で、誰れ憚らずお二人は夫婦。それを思へば嫉ましい。死ぬのは否ぢや、否ぢやわいなア。

ト如月尼、此うち思ひ入れあつて

如月　オヽ、尤もぢや。

ト云はうとして、賴光を見て、心を取直し

アノ玆な不忠者めが。知らぬ昔は兎も角も、もう斯うなつては猶ならぬ。サア、あなた方、構はずと、奧の一間へ

賴光　身に覺えは無けれども、娘が心根、何とやら。

七綾　聞けばどうやら、身につまされ

如月　ハテ、何事も妾次第。御劍持つて、お二人とも

賴光　然らば其方が詞に任せ、サア、七綾、おぢや。

ト七綾姬の手を取り、行かうとする。お淸、如月尼を突きのけ、賴光と七綾姬を兩方よりキッと捕へ

て

きよ　そりや胴慾ぢや、文珠丸さま。これほど慕ふわたしを捨て、まざ〳〵一緒に寐ようとは、聞えませぬ……それといふも、戀の仇なる七綾どの、お前は朝敵の妹ゆゑ、死なねばならぬ身を以て、大事の男を、ようも〳〵寐取らつとは、コレ、お前は今、死ぬと云うたぢやないか。死なしやんせ、死なしやんせ。敵同士の頼光さまと、どうで添はれぬお前の身の上。早う死んでしまはしやんせ。サア、死なしやんせぬか。早う死んでしまはしやんせぬか。エヽ、矢ッ張りわたしをお身替りにして、頼光さまと添ふ心かえ。エヽマア、腹の立つ。そんなら今死なうと云うたは、騙したのぢやな。ソレ、その口で云うたのか。エヽ、見れば見るほど、猶さら胸が

ト手荒く引倒す。如月尼、支へるを振りほどき、姫にかゝるを、キッと捕へて

如月　コレ〳〵、無禮な。お主を手籠めに……こりやモウ所詮、さういふ心では、お身替りは得心せまい。いつそ母が手にかけて

ト立ちかゝる。お清、これを聞き、如月尼へ體を寄せて

きよ　サア、切らしやんせ〳〵。早う切られて死んだなら、今の思ひはあるまいもの。因果な事に眼が明いて、なまなか忘れぬ心の煩惱。これも誰れゆゑ

ト矢庭に姫へ立ちかゝり、髻を捕へる。七綾、逃げるを、手ひどく引戻す。兩人とめるを、振り切り

振り切り、七綾を捕へ、櫛を咬へてキッとなる。

エヽ、恨めしいわいなう。

トむしやぶりつくゆゑ、如月尼、お清を手荒く引きのける。お清、また行くを突き廻して、當てる。

これにてお清、倒れる。

如月　とても心の亂れし娘、今討つ事は思ひもよらぬ。身の縛めは、幸ひ〳〵。

トお清を引起し、下の方に据ゑある鐘の綱にて、しつかりと縛りつけ

サ、その縛めも母が慈悲、緣にしがらむ縛り繩、解けぬ心を解きほどき、心鎭めたその上で、よう合點して、お身替りに

賴光　聞けば聞くほど切なる心根。望みを叶へ得させんにも、二世と交せしこの七綾。さはいへ、とつくり心を鎭め、淸き最期を勸めなば、もしやは心の角折れて

如月　それも一つに親の慈悲。

トお清の姿を見て

アヽ、心がらとて

頼光　とはいへ不便の
　　トお清へ寄らうとする。
如月　アヽモシ。
　　トぢつと留め、お清の有様を見て、ホロリと思ひ入れ。これをキツカケに誂らへの獨吟になり、如月尼、二人を上の屋體へ入れ、お清へこなしあつて奥へ入る。ト伊豫簾、靜かに下りる。この時、上の屋體へ灯ついて、頼光と七綾の影法師うつる事。よき時分、お清、心附き、行かうとして行かれぬこなし。よろしく、獨吟一くさり切れる。合ひ方。お清、フト上手の障子を見てのぼせたる思ひ入れにて
きよ　アレ〱、障子にうつるは頼光七綾。エヽ、嫉ましい、口惜しい。あそこへ行きたい。
　　トいろ〱身を踠き
情にかけし㐧様の、縛り繩も恨めしい。
　　トよろしく思ひ入れ。この時、雨降つてくる。
アレ〱、雨が降つて來た。コレ、此やうな憂き目を見るも、みんなお前ゆゑぢやぞえ。たとへこの身は雨に打たれ、霜に凍えて死んだとて、さら〱恨みと思はねど、只悲しいは、わたしが

死んだら、さぞマア二人が睦まじう、……それを思へば腹が立つ。わたしや口惜しい、口惜しいわいなア。

ト思ひ入れ。また獨吟になり、雨、だん〳〵降つてくる。お清、いろ〳〵雨を凌ぎかねたるこなし。此うち上の屋體の灯、次第に暗くなる。これにてお清、いろ〳〵身を踠く。これまで獨吟、一ぱいに切れる。

アレ〳〵、灯が消えた、暗うなつた。そんなら二人は、もう寐やるか。エヽ、腹の立つ。枕かはさば二世三世、その睦言の度々に、大方わたしを譏りくさらう。寐物語りに笑ふであらう。エヽ、この胸が、沸えかへるわいなう。こりやマア、どうせう。なんとしたらよからうぞいなア。

ト泣き落す。この時、上手の灯、バッタリ消える。お清これにて思はず撞と下にゐる。障子を睨みつけ、キッと思ひ入れ。この時、下座にて四ツの鐘の頭を打つ。

ムウ、いま打つ鐘は慥かに四ッ。最前來りし役人の話しでは、今宵九ッの鐘を合圖に、七綾姫が首打つ契約。幸ひ今打つあの四ッに、數を合せて九ッの、かねて恨みの七綾姫に、憂き目を見するは今眼前、思ひ知らせん、オヽ、さうぢや。

ト此せりふまでに四ッの鐘を打ち切る事。お清、据ゑある鐘をキッと見て、思ひ入れ。早目の合ひ方

になり

男ゆゑには石ともなる、ひれふる山も今爰に、我が身に辛き戀の仇。思ひの一念、この釣り鐘、やはか打たいで置くべきか。

ト立ちあがり、釣り鐘の側へ來り、肩にて、いろ〳〵打つ思ひ入れあつて、鳴らぬゆゑ、いろ〳〵氣をあせり、トヾ頭を釣り鐘へ打ちつけると、掠めてゴンと本釣り鐘。お清、「ウン」と倒れる。この前より寂莫、刃物を持ち、出かゝりゐて

寂莫　いま頼光と七綾めが、うまく寐入つた其うちに、首を取らうと思つたが、頼光が目を覺ましてはおれが身の上。早く討手を呼び入れて、寐首を取らば手間隙いらず。幸ひ四ツに打ち合せた、女が一念うけついで、打つ九ツが討手へ合圖。さうだ〳〵。

ト側へ置きたる高札を取り、これにて釣り鐘の突座を突く。また本釣り鐘。寂莫、思ひ入れあつて四ツほど、打つと、向うにてゴンと時を合せる。寂莫、これを聞いて

奇妙々々……いま打つ鐘が姫の寂滅。ソレ、九ツの打ち切りだ。

ト思ひ入れあつて、また打つ。下座にて本釣り鐘。矢張り向うにて時を打つ。この時、向う揚げ幕にて

大勢　ヤレ來いエヽ。

ト聲する。寂莫、さてはト思ひ入れ。この聲、耳に入り、お清、心附き、ムックと起きあがる。

寂莫　あの人聲こそ正しく討……コリヤ、女、願ひの通り九ツの、數を合せたゆゑにこそ、姫が討手は今爰に。サ、それより先に、其方の恨みを

ト繩を切る。

きよ　そんなら、お前が

寂莫　見かねて打つた九ツも、其方の思ひを晴らしてやりたさ。ソレ、この刃物で、心のありたけ。

きよ　そんならこれで、七綾を

寂莫　切つてしまやれ　よもや生けては置かれまい。

きよ　オヽ、今ぞ恨みを、オヽ、さうぢや。

ト刃を持ち、奥を見込む。薄ドロ〳〵、雷、お清、上手へ入る。

寂莫　よし〳〵、これにて姫は手を濡らさず、寐鳥を刺すより慥かなもの、併し、難儀はこの鏡、どうぞ仕樣が

ト此うち後へ安俊、出かゝり

安俊　邪魔な物なら預からうワ。

トてをかける。寂莫、拂ひのけ

寂莫　エヽ、ついぞ見馴れぬ法印め。この鏡を何とする。

安俊　オヽ、山伏姿で入込んだも、主人と共々寶の詮議、大内之助安俊が、目にかゝつちやァ叶はねえ

キリ〳〵此方へ渡してしまへ。

寂莫　オヽ、さう聞いては猶の事、大事の名鏡、まざ〳〵と、うぬらに渡してなるものか。

安俊　イヽヤ、是非とも

寂莫　なにを。

ト兩人、鏡を奪ひ合ひ、立廻りあつて、トヾ爭ひながら兩人、上手へ入る。時の鐘、雨車、向うより

兵藤、十太、上下にて、高股立ち、捕り手を連れ、出て來り

兵藤　ヤア〳〵、この家の老女はいづくにある。約束通り九ツの、鐘を合圖に向うたり。

十太　サア、速かに、七綾の首を渡すか。

兩人　なんと〳〵。

トこの時、簾の内にて

如月　ヤア、仰々しい。侍ひとても白らが、居間近く立ちはだかつて、慮外な匹夫め。キリ〳〵そこを立去るまいか。

ト三味線入り音樂になり、正面の伊豫簾上がる。眞中に如月尼、白の廣振り、同じく裲襠、その上へ紫の抱へ帶、黒き髮の鬘に變り、鏡臺に向ひ、硯引寄せ、筆を持つて引き眉をしてゐる。この側に櫻木、白の形、紫の扱帶にて、雪洞を捧げゐる。後に以前の茶摘み女五人、いづれも實は腰元にて、白の形、同じ紫の扱帶、襷をかけ、めい〳〵雪洞を片手に、竹槍を持ち、すべて七人の見得よろしく、住ひゐる。兵藤、十太、見て

兵藤　ヤア、落ちつき自慢の七綾姫、キリ〳〵首を

兩人　受取らうか。

如月　ヤア、過言なり匹夫ども。この七綾こそ誰れあらう、桓武天皇の後胤、平親王將門が妹、天運盡きて討死なす、徒黨の人數も七綾と、同じ出立ちは將門が、最後に殘す七人の、その影武者を今爰に、寫すも白き雪の夜に、血汐染めなす紅葉の落葉、再び枝に返らぬあの世。

櫻木　その討死の門出に、血祭祝ふ討手の人々。たつてとあらば相手は嫌はぬ。お側去らずの櫻木が、今こそ殘す末世の手本。

女一　必死と覺悟のこの場の働らき。女と侮り、切り入らば

女二　生けては歸さぬ、冥土の道連れ。覺悟きはめて

女皆　ござんせいなア。

トこれにて兩人、ギョッとせしが、キッとなつて

兵藤　ヤア、たとへ七人八人でも、高の知れた女の腕。

十太　片ッ端から討つて取る。者ども、ソリヤ。

トどん／＼になり、皆々ゴッチヤの立廻り。如月尼、腰元、皆々捕り手を追ひ込み、奥へ入る、兵藤、十太、殘り、櫻木と仕拔きの立廻りよろしくあつて、トゞ三人切り結んで居る。ドン／＼、早笛になり、正面上手の障子を破り、捕り手一人、投げられて出ると、如月尼、大わらは。拔刀にて出るを、捕り手、大勢取卷き出て來り、大まくしの立廻り。トゞ、タヂ／＼として思はず二重へこけかゝり、ホッと思ひ入れ。これより遠寄せ、竹笛入りの鳴り物になり、如月尼、疲れし思ひ入れにて立廻り。下手の手桶を引寄せ、柄杓を取上げ、水を飲まうとして、震へるゆゑ、刀を側へ置き、兩手にて水を飲まうとする。この時、捕り手かゝるゆゑ、持つたる柄杓にて捕り手の眉間を打つ。これにて捕り手、ハッと倒れる。如月尼、また水を汲みあげ、飲まうとする。また捕り手起きあがり、かゝるゆゑ、よ

ろしく抜き身を取り、立廻りにて切り倒す。この時、捕り手大勢出て、取卷くゆゑ、如月尼、長刀にて皆々をまくし立てる。これにて捕り手、アリヤ／＼の聲にて、下手に据ゑある釣り鐘を引きおろし、如月尼を支へる。これを枷に立廻りあつて、トヾ皆々を向うへ追ひこみ、撞となる。奥バタ／＼になり、櫻木、大わらは、手負ひにて出て來り

櫻木　ヤア、御厨さまには手を負うてか。

如月　妾を始め、誰れ／＼も、忠義に凝つたる覺悟の討死。この間に早うお二人樣、劍も共々守護なして、早うこの場を、落ちた／＼。

櫻木　女ながらも櫻木が、お二人樣に附き添うて、遁がるゝだけは……とは云ふものゝ、この場を見捨てゝ

如月　この期に及び、返らぬ事を。

トきつと云ふ。奥バタ／＼になり、頼光、劍を持ち、七綾姫もろとも出てくるを、跡よりお清、刃物を持ち、追ひかけ出て來り、兩人を捕へ

きよ　恨みの女、思ひ知つたか。

ト切つてかゝる。如月尼、引附け、刃物を取り

如月　サヽ、早うこの場を
頼光　そんなら御厨。
櫻木　姫君樣。
頼光　さらば。

ト三重、ドン〳〵にて、頼光、劍を持ち、七綾姫の手を引き、櫻木附きそひ、向うへ入る。矢張り薄ドロ〳〵、魂ひ、この跡を追うて行く心にて、花道の上を引いて行く。お清、心附き、起きあがり、向うを見て

きよ　エヽ、口惜しい。たとへこの場は落ちゆくとも、一念凝つたる我が恨み、やはか晴らさで置くべきか。

ト行かうとする。如月尼、お清を引戻す。お清、振り切るはずみに、こけかゝり、二重の上に如月尼、下手にお清、兩人キッと見得、この前に幕明きの八ツの茶壷並びある事。これより凄き合ひ方、遠寄せになる。

如月　姫君落し參らせたれば、今ぞこの身の念願成就。將門公の妹君の、お身替りになるべき其方が、及ばぬ戀路に引かされて、お主を恨む嫉妬の愛着。所詮望みは叶はねば、母ともろともこの場に

於て、潔う死んでくりや。

ト帶の端を捕へ、ホロリとして氣なかへ、こなしあつて

サア、誰れかある。七綾を討つて手柄を現はさぬか。討手は無きか〳〵。ムウ、さては殘らず討取りしか。さりながら、とても覺悟の七綾姬、又もや討手の來らぬうち、サ、娘も共に

ト引寄せようとする。此せりふのうち、お清、帶の端を捕へられたまゝ、ヂリ〳〵と花道へ行く。此うち薄ドロ〳〵、この帶尤も萠黄に青海波の模樣、自然と尾に見ゆる仕掛け。この帶、だん〳〵と伸び、帶の先は如月尼の手に捕へられながら、お清は花道の附け際まで行く。如月尼、フト心附き、この有樣を見て、恟りして

如月　ヤヽ、さてこそ娘は正夢の、業因盡きず、恐ろしい、嫉妬の念に形さへ、蛇體を現はす、この場の不思議。

きよ　凝り固まりし嫉みの一念、本體現はす上からは、おのれ、女め。

ト きつと向うを睨みつめる。捕り手二人、窺ひ出て

兩人　さてこそ怪しい

ト如月尼とお清へ後より組みつく。兩人、其まゝ、ヒヨロ〳〵として、如月尼は組みつかれたまゝ、

四立目 同じく





刀を腹へグツと突ツ込む、お清は捕り手を振りほどく。はずみに如月尼の捕へし帯の端離れて、下の方に掛ゐある釣り鐘に巻きつくを、如月尼見て

如月　ハテ、恐ろしい執着よなア。

ト如月尼肩をかはすと、後の捕り手、見事に前へかへる。お清、行かんとせしが、鐘に帯からみつきあるゆゑ、龍頭に手をかけ、キツとなる。如月尼、二重へ撞となる。双方一時に木の頭にて、キザミと共に、お清の後より、魂ひを日覆へ引きあげる。ひやうし

トお清は龍頭を捕へ、向うをキツと見込む。如月尼は刀を引廻す。この仕組みよろしく、大ドロ〳〵にて、キザミと共に、お清の後より、魂ひを日覆へ引きあげる。ひやうし幕

引附けると、浪の音にて、ツナギ、引返す。

本舞臺、うしろ黒幕、松の大樹、同じく吊り枝。爰に頼光、劍を持ち、七綾姫もろとも立ちかゝり、これを櫻木、圍ひゐる。左右に兵藤、十太、捕り手四人、詰めかけてゐる。時の鐘にて幕明く。

皆々　動くな。

櫻木　こりや何ゆゑに、頼光さまへこの狼藉。

兵藤　たとへ頼光どのにもせよ、朝敵たる將門の、妹を庇ひあるは

十太　取りも直さず朝敵同然。殊に勅勘蒙むりし、云はゞ今では日陰者

頼光　その勅勘も御劍ゆゑ、身が手に戻る上からは、再び源家の棟梁頼光。慮外なしたら許さぬぞ。

兵藤　劍は出ても實朝公の、仰せを受けて七綾の、首討つ邪魔をしたが最期、側杖くらふが合點か。

櫻木　さう聞いては猶の事、この櫻木が附添ふからは、滅多に姫君

兩人　ヤア、邪魔な女め。

ト引きのけ、立廻りに頼光、七綾は上手へ入る。兩人、續いて行かうとする。櫻木支へる。立廻り。

トヾ櫻木、皆々を追ひ込み、奥へ入る。知らせにつき、黒幕を切つて落す。

本舞臺、三間の間、眞中に九尺の破れたる古宮、戸帳をかけ、これに橋姫社と書き、左右に苔蒸したる石燈籠。下手、一面の枯れ蘆、好みの道具に納まる。時の鐘、浪の音。

ト下座バタ／＼にて、頼光、七綾の手を引き、やう／＼出て來り、あたりを見廻し、ホツと思ひ入れ。

頼光　又もや追手の來らぬうち、一先づこの場を……とはいへ、かよわき女子を連れ、行く先とても討手の大勢。櫻木の戻るまで、せめて暫しは、雨の晴れ間を

七綾　そんならこれにて……さりながら、今の騒動、どうやら痞へが

ト思ひ入れ。

頼光　アヽ、時も時、折も折。そんならわしが、ドレ、介抱してやりませう。

ト七綾の手を取り、正面の古宮へ入る。誂らへの合ひ方、雷の音、本釣り鐘。雨車になり、向うより忠文、おどろなる惣髪、藁にて結へ、古き綸子の小袖、淺黄の刺貫、黒の破れし裝束を引ッかけ、下駄を履き、白張りの破れ傘をさし、文を見ながら出て來り、花道にとまり、こなしあつて

忠文「さむしろに、衣かたしき今宵もや、我れは待つらん宇治の橋姫」……アヽ、誰れあらう、參議右衛門の尉忠文が、かゝる姿も何ゆゑぞ。七綾姫が色香に迷ひ、朝敵退治の勅諚蒙むり。討つべき者は七綾が、血筋にからむ兄の將門。戀にほだされ、勇氣もたゆみ、矢竹心の矢先も挫け、既に東國西海まで、征伐はしたれども、戀風立つて浪荒く、漂ふうちに貞盛や、あの秀郷に先駈けされ、二人の者は官位昇進。この忠文は、武門にうとき武士と、末代、人の口の端に、かゝる恥辱は何ゆゑぞ。

トまた文を見て

これこの文に將門が、命を助けくれたなら、色よい返事をせうとある、その七綾が行くへさへ、

とても叶はぬ戀なれば、思ひ切りたい、忘れたいとは思へども、身は煩惱の忘られず。浮世を宇治の橋姫へ、今宵で丁度九十九夜、はや明日の夜は百夜の結願。夜とても通夜なし……オヽ、さうぢや。

ト文を懷中して舞臺へ來り、空を見て

時ならぬこの雷、雨も小止みさうな。

ト傘を捨て、落葉を取つて塵手水をなし、こなしあつて

南無當社宇治の尊、何卒七綾姫と賴光が、戀仲を裂き給へ。南無や宇治の尊。

トこなしあつて

神慮の程も恥かしけれど、何卒姫が行くへをば、夢になりとも告げ給へ。それも叶はぬ事なればいま立ち所に忠文が、一命斷つて速かに、かゝる苦患を救はせ給へ。

ト此方を向き

とはいふものゝ、七綾どのに只一目。

ト思ひ入れ。始終雷の音。この以前より賴光、これを聞き、合點のゆかぬ思ひ入れ。

賴光　ナニ、七綾とは、同じ名を

忠文　ヤ。

ト思ひ入れ。

頼光　お尋ねなさるは、いづれの御方。

忠文　戀慕の闇の深き夜も、七綾慕うて、夜毎の立願。

頼光　して、その七綾とは。

忠文　朝敵、平の將門が

ト七綾姫、ギヨッとする。

頼光　すりや、その妹を斯くまでに、戀ひわび給ふ、御身は何人。

忠文　これは參議右衛門の尉忠文が、姫の在所を尋ねさまよひ

七綾　エヽ、すりや、さほどまで自らを

ト忠文、聞き耳立て

忠文　ナニ、自らとは

トつかつかと縁へ上がり、側へ寄つて

もしやは尋ぬる。

ト探り寄つて捕へんとするゆゑ、頼光、支へる。ちよつと立廻りに思はず頼光の脾腹を突くゆゑ、頼光、タヂ／＼となる。姫は此うち逃げようとするを、忠文、捕へて引戻す。よきキツカケにて月出る

忠文、キツとなつて

ヤ、七綾姫か。ようマア來て下されたなう。

ト捕へて思ひ入れ。これより横笛の入りたる合ひ方になり、七綾姫、慄へゐる。

七綾　不束な自らを、それほどまでに……とは云ふものゝ。

忠文　サ、主ある御身、くどうは云はぬ、せめて一夜さ心よう、枕かはして下されい。道ならぬとはいひながら、よく／＼の事なればこそ、神も納受したまひてか、思ひもよらず今爰で、めぐり逢うたも神の惠み。それに振り捨て、逃げようとは、そりや辛ないぞよ。七綾どの。コレ、この文に覺えがあらう。

ト文を出し

兄が命を助けなば、その時こそは我が戀を、叶へてやらうと書いたのは、こりや僞はりか、空事か。コレ、それゆゑにこそ忠文が、この身になつても飽くまでも、思ひを遂げにや死にきれぬ。命に代へても抱いて寢る。

七綾　それぱつかりは

忠文　但しは否か。

兩人　サア

忠文　どうぞ叶へて、下されいなう。

ト袖を扣へて寄りそふ。七綾、振りきり逃げるを、又捕へる。頼光、心附き、支へるを、共に引据ゑ

キッとなり

エヽ、おのれはなア。

ト無念の思ひ入れ。三味線入り禪のツトメになり

さほどまでに辛かりし、その心とは露知らず、送りし文を誠と心得、武名を穢せしのみならず、所領まで沒收されしは、皆誰れゆゑぞ。逃ぐるとて逃がさうか。もうこの上は飽くまでも、抱いて寢にやエヽ、おかぬ。否だと云へば戀の仇なる、男子も共に

ト七綾姫にのしかゝる。頼光、また支へるを共に引附ける。この時、奥より寂寞、一本差しにて走り出て來り、これを見て、忠文をちよつと當てる。この時、薄ドロ〳〵にて、以前の魂ひ空より下りて來り、忠文の後へ引いて取る。

寂莫　慥かに七綾、劍も共に。

賴光　して、其方は。

寂莫　アヽモシ、お氣遣ひはござりませぬ。矢ッ張りわしも源氏の身寄り、兎や角云ふうち早追手。

賴光　然らば爰を、ちつとも早う。七綾、おぢや。

ト兩人を先に立て、行きにかゝる。この時、忠文、心附き、起きあがつて姬を捕へ

忠文　イヽヤやらぬ。殊には賴光もろともに、エヽ、腹の立つ。この身も共に、サア／＼、一緒に

ト立ちよるを、賴光とめて

賴光　こりや、さほどまでに

寂莫　此奴に構はず、とく／＼爰を

賴光　併し、此まゝ

忠文　イヽヤ、女は

ト寄るを寂莫、突きのけ

寂莫　ござりませう。

ト矢張り雷の音。賴光、七綾の手を引き、行きにかゝる。忠文、やらじと寄るを、寂莫、引戻し、ト

ト宮の上に上がり、引留めてキツと見得。忠文、立ち身にて向うを見やり、キツとなつて思ひ入れ。

これにて道具ぶん廻す。向うの兩人、直ぐに揚げ幕より東の歩みへかゝる。此うち舞臺は廻る。

本舞臺、眞中に高き蛇籠、左右、枯れ蘆。この臺の上に以前の高札。下の方に渡し場。爰に木津川渡し場と書きたる傍示杭。左右、浪板。道具とまる。

ト花道の兩人、舞臺へ廻つて來り、撞と座して

賴光　ヤレ〳〵、ひよんな人に逢うて、其方も怖りしたであらう。隨分、心を慥かに持ちや。幸ひ爰は木津川の渡し場。ちつとも早う、向うの岸へ。

トこの時、船の中より船頭出て

船頭　渡るのかえ。サア、乘んなせえ。

賴光　サア〳〵、其方も早う

ト介抱する。

七綾　すりや、あの船へ

船頭　サア、乘んなせえよ。

ト浪の音、捨て鐘になり、兩人、船に乘り、賴光、七綾を介抱してゐる。船頭、棹にて花道よき所へ船を出す。この時、バタ〳〵にて、寂莫、走り出て

寂莫　オイ〳〵、その船へ、おれも一緒に

船頭　合點だ……サア、舫ひを投げるよ。引いてくんな。

寂莫　よし〳〵。

ト浪の音になり、船頭、舫ひ綱を舞臺へ投げる。寂莫、これを取ろうち、奥バタ〳〵になり、忠文、走り出て、寂莫を搔きのけ、舫ひ綱を取上げ、キッとなつて見得。

忠文　サア、その船へ、この身も共に。

賴光　又ぞろ爰へ忠文どの。

船頭　こいつは船は返されめえ。

忠文　サア、その船へ、この忠文を……この身も共に。

ト立ちかゝる。寂莫、忠文を上へ突きのける。船頭、花道に棹を立て、莨のみゐる。

寂莫　これサ〳〵、イケうるさい忠文どの。とても叶はぬ戀爭ひ。どうして船へ一つには

船頭　錢を出しても、この船へは

寂寞　ならねえワ。
忠文　そこを只管、其方どもへ……あの女ゆゑこの如く、今をも知れぬこの大病。積る恨みを船中にて……今は兎もあれ、その昔は、人も敬ふ右衛門の尉忠文が、匹夫下郎へこの如く、両手を突いてこの場の願ひ。慈悲ぢや、情ぢや、両人とも、コレ、手を合せて拝むわいやい。

ト思ひ入れ。

寂寞　コレ／＼、なんぼ坊様でも、まだ佛にやアならねえ。いくら手を下げ頼んでも、情を掛けぬは高札の、掟に書いたあの觸れ書。朝敵退治にやみ／＼と、二度の後れに國郡、沒取のうちにも、宇治郡は、こなたのござつた所ゆゑ、情をかけなと實朝さまより、お觸れのあつたを知らないか。
忠文　ナニ、觸れ書に忠文を
寂寞　立てた高札、この場にて、眼を開いて、とつくり見ろサ。

ト忠文を捕へ、高札をさしつける。これを見て

忠文　ヤヽ、すりや某が身の上を
頼光　いはゞ禁裏へ不忠の憎しみ、兄の忠義に引かへて
寂寞　臆病未練の卑怯者。此奴に構はず、とく／＼船を

忠文　イヽヤ、滅多に

ト寄るを寂莫、引据ゑ

寂莫　エヽ、船を出せ〱。

ト舫ひを投げてやる。

船頭　合點だ。

ト向うへ漕ぎ出す。忠文、いろ〱あせる。此うち船には頼光、印籠より薬を出し、姫に服ませ、いろ〱介抱する事。船頭は、そろ〱棹をさす。この船、だん〱花道へ行く。忠文、いろ〱思ひ入れ。

寂莫　オヽ、口惜しからう。尤もだ〱。アレ〱、女はあの通り積が起つて、男の介抱、薬を出して口から口。それ〱、抱きついたワ。アヽ、口惜しいか〱。船の内にはあの二人、エヽ、業が沸えるワ〱。こなたの身には口惜しからう。尤もだ〱。おれなら直ぐに飛びこんで、ソレ、其方から行きな。ソレ、此方から行きな。どうだ〱。飛びこまねえか。どうして〱こなたは、川へはまれば土左衛門忠文。直ぐに御戒名。ヤレ、おッかねえ……オヽ、可哀さうに〱。

ト焚きつける。忠文、キッと向うを見詰め氣をあせる。此うち船は揚げ幕の際へ行く。と綾姫、船よ

り上がり、また塚への起りし心にて倒れる。頼光、抱きおこし、手を取つて連れ立ち、船頭も共に介
抱して、東の揚げ幕へ入る。

寂莫　オヽ、たうとう二人は、手に手を取つて

忠文　ヤヽ、兩人はアノ向うへ

寂莫　首尾よく渡つて夫婦の固め。大方今宵は新枕。あの美しい姫を手籠めに

ト忠文の背中を叩き

畜生め……これではよもや、こなたは

忠文　どうでも胸が

ト向うを見て、無念の思ひ入れ。この影、前の流れにうつりし心。寂莫、これを見てちやつと飛びの
き

寂莫　いま映つたは鬼神の影。よもや爰らに

ト覗き見て

オヽ、コレノヽ、忠文どのが鬼になつた。コレ、こなたの影がアノ鬼に

忠文　鬼ともなつてあの頼光、取殺したき存念も、流石凡夫の

寂莫　凡夫にあらず鬼畜の相、疑がはしくば、こなたの影、とつくり爰で
　　ト忠文を蹴る。忠文、坐つて、思はず流れへ顔をうつし、ギヨツとして飛びのくを、寂莫、捕へるはずみ、懐中より以前の鏡を落す。忠文、これをちよつと取り、立廻つて、兩人、鏡を引合ふはずみ、忠文、キツと顏をうつし見て、よろしくあつて

忠文　ヤヽ、そんならこの身は生きながら、鬼神となつたか。コレ……わしや鬼になつたわいの。斯く淺ましき姿にて、なんの七綾……
　　ト泣き落す。

寂莫　尤もだ〳〵、成る程、こなたは因果もの。今までさへもあの女、嫌つたものをその上に、鬼となつちやア何として。大方二人は今頃は、さぞ引附いたり、取附いたり、可愛々々の睦言にも、こなたをさぞかし譏るであらう。譏られても、どうしても、あの可愛らしい女をば、鬼となつて慕うたとて、所詮この世で、こなたの望みは

忠文　叶はぬ上は、やみ〳〵と、なんの添はさう、添はせはせじ。人また我れに辛ければ、我れ又人に辛きの譬へ、今に恨みを

寂莫　晴らす心か。さうだ〳〵。こなたが死ねば、おれも又、實朝どのに云ひ上げて、願ひの通り立身

出世。死んで恨みを晴らさつせえ」

ト忠文、ずつと立ちあがり、向うを見て。キッと見得。これをキッカケに本釣り鐘、凄き合ひ方、浪の音になり

忠文　傳へ聞く、阿部の仲麿は、鬼神となりしその例し。それとこれとは變れども、戀しと思ふ一念の凝り固まつて鬼となり、末世末代忠文を、うつけよ白痴、女ゆゑ、鬼畜となりしと譏らば譏れ・恨み重なるあの女、頼光もろとも引裂き捨て、思ひ知らさで置くべきか。

ト向うを見詰め、無念のこなし。此うち寂莫、一腰を抜き、忠文を切る。切る度に肌着、だん〳〵に切れて、血汐に染みし下着となりても、忠文、猶向うを見詰めゐるゆゑ、寂莫、脾腹へ白刃を突き通す。忠文、これにて少し心附き、寂莫をヂロリと見やり、白刃に諸手をかけ、寂莫を下へ廻し、白刃を咬へ、寂莫の肩へ踏みかけ、キッとなつて

口惜しやなア。

ト見得。寂莫、呆れしこなし。

斯く淺ましきこの姿、何とて人に見えんや。この川水に身を沈め、やがて恨みを……オヽ、それよ。

ト早日の合ひ方になり、寂莫を突きのけ、よろぼひ〱、臺へ上がり、高札をキッと見やり、思ひ入れあつて

これに立てたる高札は、我れへ心を寄せざるやう。時にとつてのコレ捨て札、恨み重なる實朝にこれを准らへ、一口に

トかゝる寂莫を引ッ摑み、咽喉元へ喰ひつき、裏向きになり、この血を高札へ吹きつける。大ドロドロになり、此うち仕掛けにて、高札にかゝりし血汐、火炎となつて燃えあがる事よろしくあつて、忠文、寂莫を其まゝ川へ打込み、その身も共に飛びこむ。これにて水鳥、バタ〱と日覆へ引上げる。上手の蘆間より、千晴、袴、着流し、大小にて出る。下手より將平、着込み、船頭の形、百日鬘にて探り〱出て、前の鏡に兩人、手をかけ、キッとなつて見得。これより鳴り物變り、將平、鏡へ手をかけるを、千晴、支へる。これにて立廻り。此うち浪の音になり、向うより以前の船頭、船へ乘り、靜々と漕いで來り、舞臺下の方へ來て、舫ひを繋ぎ、舞臺へ上がり、兩人の中へ入るゆゑ、兩人、船頭を引退ける。船頭、落ちたる鏡を見附け、取上げる。この光に兩人、窺ひ寄つて 一時に船頭を切る。船頭、苦しみ、鏡を落す。兩人、白刃を引くと、船頭、ポンとかへる。これをキッカケに蘆間より坂東太郎、簑笠、船頭の形にて出る。兩人、これに構はず、白刃の血を拭ひ、鞘へ納め、窺ひ寄つて

鏡へ手をかける。この時、太郎、何心なく兩人の中へ入るゆゑ、兩人悔り、立廻りあつて將平は鏡を懷中する拍子に、懷より密書落ちる。千晴、太郎、立廻つてこれを爭ひ、ト〻名前の方は太郎の手に入り、末は千晴の手に殘る。太郎、船に乘り移り、棹にて出さうとする。將平、舫ひ綱を捕へる。千晴、眞中より白刃にて丁と切る。これにて船は花道よき所まで行く。將平、タヂ〳〵と跡へ倒れる。舞臺の兩人、花道を見やつて、千晴は白刃を上へヒラリと見せる。將平、後へ飛ぶ。太郎は着物をスツポリかぶる。これを木の頭。よろしく、ひやうし幕引附けると、捨て鐘になり、太郎、懷中より手紙を出し、揚げ幕の方を見て

幕

太郎 オヽイ〳〵、當るよ〳〵。

ト佃やうの浮いたる唄になり、向うへ漕いで入る。知らせにつき、シヤギリ。

第一番目 大詰 筑波山塞の場

役名――六郎方界實ハ伊賀一子金剛丸。能勢源吾妻、八重垣。瀧夜叉乳人、しみの戶。神澤彌九郎照宗。手下、男體山の石黑實ハ伊豫太郎純信。同、女體山の岩藏。同、屏風坂の苦平。同、劍の峰眼助。同、山霧の雲太。同、水無の川の瀧太。同、天狗宿りの杉太。同、風元の飛八。同、

梯子登りの猿松。郎黨、幸崎兵太。同、津守伴藏。同、鹿島三吾。同、安波大久。同、木嵐源太。同、小見川傳藏。同、土浦蓮平。生田七郎信良。箕田の仕。四ツ塚大作實ハ伊賀壽太郎有信。滿仲息女瀧夜叉姫實ハ相馬小次郎將門の亡魂。秀郷妻、矢橋。田原藤太秀鄉。筑波山の強盜、坂東太郎有武實ハ藤原純友。

本舞臺、三間の間、高足通しの屋體、木柱、丸木の縁側、これに塗り物の欄干。雪のつもりし巖窟、これに所々破れし古簾をかけ、尤も上げ下ろし。正面、銀張りつき、前に塗り高欄の上がり段、左右冬木の立ち樹、これに烏瓜、照り葉澤山下げ、この立ち樹の後へ下げて岩組み、雪のつもりし松の吊り枝。平舞臺よき所に圍爐裏、これに鑵子を掛け、上の方、岩組みに少しの瀧、この前に浪板。誂らへの釜、茶釜をかけ、上の方、枝折り戸、すべて下總の國、筑波山、雷ヶ洞の道具。誂らへの通り飾りつけ、幕の内より石黑、廣袖、平括け、五十日にて、圍爐裏の焚火にあたつてゐる。岩藏、同じ拵らへ、上の瀧にて右の釜と茶釜を洗つてゐる。眼助、同じ形にて、あたりへ道具箱を置き、金鎚にて欄干を打ちつけてゐる。下の方杉太、瀧太、猿松、飛八、苔平、いづれも裁附け、廣袖にて、草鞋を穿き、一本差し、この前におべく、おけな、おもよ、おまれ、いづれも田舍女郎の形にて並びゐる。

側に八重垣、屋敷風俗、抱へ帶にて、下にゐる。皆々よろしく、山颪し、てんつゝにて幕明く。

石黑　コレ、岩藏、われも餘ッほど、器用の上に不の字が見えるなア。

岩藏　さう云ふな。この節、職人は、鬱陶しいほど金が降るに、遊んでゐる間拔けだものを。

眼助　石黑も岩藏も、面ばかりかと思つたら、口まで惡いな。おれにばかり骨を折らして、火にばかりあたつてゐるとは、いゝ株を買つたな。

岩藏　さうよな。併し、おいらがやうに、元手いらずに働らいて

石黑　この雷ケ洞へ、相馬の古御所を、只引ッたくつて來て此やうに

眼助　盜む物に事をかいて、家を盜むとは、今度が初めてだらう。その上、手間は寄つてたかつて

岩藏　みんな手仕事で不自由知らず。

石黑　不自由なのは女ばかりよ。

瀧太　その不自由をさせめえ爲、飯盛り女郎を頑張つて

苫平　女房約束かけ流し、手管も洒落もいらねえから、出會ひ頭に轉び寢と

杉太　云つて聞かせて連れて來た。その代りにやア手間の手合ひ。

飛八　亭主約束こぢつけて、足の指切り心中に、月代なぞを剃つてやつちやア

猿松　そこは法度だ。併し又、驅けこみ女房の瀧夜叉さまを、頭ばかりは抱いて寢て、それを見せちやア置かれまいと

瀧太　頭の情、どこからでも、田舍女郎を捲きあげろと、おいらが寄つて

飛八　みな誘拐かして來たのでごんす。

べくサア、年季も金も添へてやる、ちつとのうちの辛抱ぢや。どこでせうとも勤めぢやとけなそれ樂しみに山中の、毎日毎日の苦勞も無くまね氣まゝ勤めはよけれども、親方さんに見附かつたら、山から里へ又鞍替へ。もよ多くの客を取るよりも、氣がねのないがいつそ増し

皆々　嬉しいわいなア。

ト此うち八重垣、涙ぐみ、ふさいでゐる思ひ入れ。

石黑　成る程、流石は商賣人、人を人とも思れぬ中に

岩藏　コレ、てめえは悲しいか。但しは眠いか。

眼助　又ひよつと、亭主の事でも思ひ出したか。どういふ事だ、コレ、姐え。

ト皆々立ちかゝつて

皆々　キリ〳〵性を附けさつしやい。

ト　これにて八重垣、思ひ入れあつて

八重　サア、なんの、そんなよい氣な事ぢやござりませぬ。命に替へてお守り申した、大事の若君……大事の我が子を、あなた方、よう邪慳にも

石黒　それで泣くのか、悲しいのか。

八重　サア、大事のその子を情なう、千尋も知れぬ谷底へ、ようマア捨てゝ

ト　きつとなる。皆々、後を向く。

皆々　それがどうした。

八重　サア、さぞ今頃は、この雪で

ト　わつと聲を立てんとして、くひしばり泣く。

眼助　カウ〳〵〳〵、必らずそれを案じなさんな。案じたとて後の祭り。どうして今まで、あのちよつぺい。

猿松　骨も胴も粉々に、猪狼が腹の肥しサ。未來成佛、南無阿彌陀佛だ。

ト　八重垣、こなし。

杉太　それだによつて精出して、おいらが小僧を、なう、姐御。

飛八　どうで寂滅、あの餓鬼に、三途の川からもそつと先

瀧太　極樂淨土へ行き着く時分だ。死んでしまつて

皆々　屍も見えまい。

　　　トきつと云ふ。八重垣、悄り、キツとなつて

八重　すりやアノ大事の

　　　ト思はず立ちあがり、ウンと悶絕する。石黒見て

石黒　それ〳〵〳〵、女が倒れた〳〵。

　　　ト皆々うろたへ、介抱する。

皆々　オヽイ〳〵、姐御、氣をしつかりと持ちませうぞ〳〵。

　　　トいろ〳〵介抱して、八重垣、心附きしこなし。皆々、雪なぞを含める。

八重　もうよろしうござりまする。これは有り難うござります。

瀧太　氣が附いたら、どうしませう。

岩藏　どうするものか。わいらがしよびいたこの女郎と、一つにして直ぐに頭へ。

眼助　そんなら奥へ、女中さん、おいらと一緒に

ト八重垣の手を取る。

皆々　歩びなせえよ。

ト眼助、瀧太、兩方より八重垣を抱へ、介抱しながら先に立ち、女形殘らず、右の人數上の方へ入る。石黑、岩藏、殘る。始終山颪し、消け殺しよろしく、皆々入ると、木魚入り、靜かなる禪のツトメになり、兩人、焚火にあたりながら

石黑　オヽ、麓の寺で勤めだわえ。さうして見ると、日暮れに近いな。

岩藏　オヽ、さうかの……そりやアよいが、この頭の女房の瀧夜叉どのは、駈けこんで來た程だから、大方今日もくツつき合ひでござらうが、どういふ心で、あの頭に

石黑　さうよの。一體あの瀧夜叉どのは、將門とも乳繰り合つて、滿仲が腹を立たれて、手討ちにしたとも、國遠したとも、どうも樣子が知れぬとの事。

岩藏　どうで盗人合點で、駈けこんでくる女なら、あんまり身許は慥かでもあるめえ。

石黑　それに、親といへば、一國なあの大作。

岩藏　無理我まゝは云ひ次第。なんぼ盗人の手下でも、これぢやア實に

兩人　立ちきれねえわい。
ト思ひ入れ。向うバタ〳〵になり、雲太、裁附け、廣袖、山刀を差し、草鞋にて、大笠をかざし、矢張り手下の姿にて出て、花道にて

雲太　申しあげます。
ト手を突き、笠をかざし云ふ。

石黒　わりやア關番の山霧雲太。申しあげますその樣子は。

雲太　申しあげます。

岩藏　何を申しあげます。早く云へよ。
ト兩人、立ちかゝり、そろ〳〵下の方へ來る。

雲太　申しあげます。

石黒　何を申しあげる。うぬに申しあげられて堪るものか。とんだ奴よ。

雲太　申しあげます。

岩藏　申しあげますその用は何だよ。
ト思はず兩人、雲太の側へ來る。

雲太　申しあげます。
兩人　此奴は誠に困りものだ。
雲太　モシ、これでござります。
ト懐より銚子を出す。兩人、見て
岩藏　そりやアなんだ、銚子ぢやアねえかよ。
石黑　こいつは何だか、さつぱり解らねえ。
ト兩人、顔を見合せる。この時、向うにて
呼び　上使。
トこれにて
雲太　アレ、あの通りでござります。
ト手を突き云ふ。
岩藏　ハヽア、これで解つた。こいつは銚子。
石黑　そんならわれは、忘れぬやうに
トこの時、又向うにて

照宗　上意を蒙むる神澤照宗、それへ參つて申し聞かせん。

ト小鼓の入りし合ひ方になり、石黑、岩藏、雲太、本舞臺へ歸る。此うち向うより照宗、衣裳、上下、大小、赤ツ面にて、跡よりしみの戸、老女の拵らへ、襠裲高からげにて、兩人とも下駄がけ、蛇の目の傘をさし出てくる。これに引添うて、伴藏、三吾、大久、源太、傳藏、運平、いづれも胴丸、絆纒に、大小にて、片身の剝身笠をかざし、出て來り、花道に居並ぶ。皆々、こなしあつて

岩藏　ハヽア、上使と吹いたあの風は

石黑　そんならお前が

ト思ひ入れ。照宗、キッとなつて

照宗　いかにも、源家の棟梁、滿仲公の昵近たる、若狹の國の住人、神澤彌九郎照宗。兄君より姬君へ上使でござれば、この趣き

しみ　憚りながら、お取次ぎとは申せども、御幼年より姬君を、お育て申せし此しみの戸、それゆゑ共共附き添うて

兵太　その名も幸崎兵太。

伴藏　津守の伴藏。

三吾　鹿島三吾。
大久　安房大久。
傳藏　小見川傳藏。
運平　土浦運平。瀧夜叉姫へ、上使のお供。
ト石黑、岩藏、顏見合せ、落ちつきし思ひ入れ。
石黑　そんなら頭のかみさんへ……それで、やう〳〵落ちつきました。
岩藏　おいらは又、泥坊だから、この手合ひが、討手にでも來たのかと思つた。
石黑　大きに膽を冷すやつサ。
ト奥を向いて
オイ〳〵、みんな、上使が來なすつたよ。早く來い〳〵。
ト奥にて
皆々　オイ〳〵〳〵。
ト山颪しの管絃のやうに打込み、苔平、眼助、瀧太、杉太、飛八、猿松、めい〳〵廣袖の上に冠り、裝束を着て、出て來り

眼助　カウ〳〵、上使が来たといふから、一番公卿で
皆々　見知らせてやらう。
石黒　そいつはよい〳〵。モシ〳〵、御上使さん。用があるなら、ズッと此方へ。
　ト照宗、思ひ入れあつて
照宗　上使でござれば、上座へ罷り通るであらうワ。
岩藏　イヤ、大束にやらかしたな。
　 トこれにて照宗、舞臺へ通る。次に、しみの戸、以下の侍ひ床几にかゝる。岩藏、思ひ入れあつて
　モシ、御上使さん、莨でものみなせえ。
　ト金玉火鉢へ圍爐裏の焚さしを入れて出す。眼助はじめ、皆々立ちはだかつて
眼助　座に連なりし麿達は、劍の峰大納言眼助。
瀧太　水無の川少將瀧太朝臣。
杉太　戻り岩垣大將杉太卿。
眼助　斯く深山の御所なれば
皆々　皆我れ〳〵は、雲の下人。

トちろりと見やり、思ひ入れ。石黒、前へ出て

石黒　モシ〳〵。斯う並んだところは、古雛の天道干しを見るやうだが、こりやアお前方への御馳走サ。して、御上使の云ひ草わえ。

照宗　イカサマ、御上使の御口上

しみ　申したとても其方達に

トで石黒、岩藏、思ひ入れ。兵太等、こなしあつて

兵太　姫君御座所でなからうなら、一々召捕る盗賊なれど

伴藏　何を申すも姫君の、御殿とあれば見逃がし置く。命冥加な

皆々　山賊夜盗。

トきつとなる。石黒、岩藏、思ひ入れあつて

石黒　なんだ、此奴等ア、巾つてえ熱を吹くな。コレエ、、扶持方棒をきめたなら、御上使は怖からうが、盗人のおいら達は怖くねえワ。

岩藏　さうだ〳〵。上使にお世話。これまで假名で云やア奇特なべら坊。痴言をつくと、上使たア云はせねえぞ。

石黑　上使か唖か解らねえ。寄つてたかつて
皆々　叩き殺せ〳〵。
　　　ト立ちかゝる。照宗、惘り、しみの戸、立ちかゝるを、押へて
照宗　アヽコレ、滅多な……あまりと申せば武士の作法も……いづれに致せ、姫君へ
しみ　お目通りして、この様子。
　　　ト照宗、しみの戸、思ひ入れ。
皆々　そんなら頭へ、この事を
　　　ト皆々奥へ思ひ入れ。この時、簾の内にて
太郎　「雪降れば、木毎に花ぞ咲きにけり
瀧夜　いづれを梅と、分けて折らまし」
照々　そんなら、あなたが
皆々　瀧夜叉さま。
　　　トこれにて皆々、よろしく住ふ。
太郎　アヽ、鬱陶しい。誰れぞ簾を引揚げろエヽ。

ト琴唄やうの唄になり、これに木魂をかぶせ、簾上がると、内に坂東太郎、大百日、廣袖、平括けの上へ切溜ざの割鐵を着流し、結構なる搔卷を引ッかけ、熊の皮の褥の上へ坐り、大火鉢へ平鍋をかけ、あたりに酒肴取散らしあり、側に瀧夜叉、錦襴の上へ鹿の股を置き、切繼ぎの廣振り袖、扱帯を横に締め、兩天の櫛を横に差し、出刃にて鹿の足を切つてゐる。側に結構なる蒔繪の懸盤、これに葱を載せ、軒に兎、鹿の股、山鯨やうの物を吊し、よき所に鹿の角の刀掛け、これに大小を掛け、悠々と酒盛りの見得。

石黑　さては頭はしつぽりと、瀧夜叉どのと差向ひ。

岩藏　ちん／＼鴨の煎り鳥鍋、この又雪にやァ

皆々　大當りでござります。

ト瀧夜叉、思ひ入れあつて

瀧夜　サア、綸て見た事も噂さへ、聞いたばかりのこの獸、その恐ろしさに引かへて、可愛い男の側にゐて、手鍋代りの手に馴れて、世帶事して樂しみの、琴の組より中組みの

太郎　それも互ひの緣ねぶか、切り刻みとは措いてくれ、新女房の忌み詞、ほろ／＼醉ひの寒紅梅、肱を枕に轉び寐の

瀧夜　氣まゝ暮らしの活計歡樂、うまい仲では

ト太郎を見て、ニッコリ思ひ入れ。太郎、大杯を受けながら

太郎　嘸ア、もう一つ注いでくれ。

瀧夜　アイ。

ト酌をする。石黑、岩藏、思ひ入れあつて

石黑　イカサマ、源家のお娘御、殊に駈けこみ女房とは

岩藏　成る程、頭は

皆々　あやかり者だ。

ト照宗、こなしあつて

照宗　アヽ、押しも押されぬ源家の棟梁、滿仲公より某へ、行くへの知れぬ瀧夜叉姫、この山中に御座あると、風の便りにはるぐ\と、東國下向の御大將、次手ながらに姫君へ。

太郎　山魚を取る漁師達か、木樵ならでは通はぬ山路、人跡絶えたる一軒家、大きに御苦勞。併し、御用は。

ト瀧夜叉、思ひ入れあつて

五立目



六立目



瀧夜　なにサ、どうで野暮な話しだわな。源氏の大將の娘だから、泥坊にやァ添はせねえと、大方兄貴の金兜。いくら女郎に振られても、性懲りもない野暮ばつかり。こんな上使に來たのだらう。まだこの外に、なんぞあるかえ。あのマア野暮な、堅い形は……ホヽヽヽ。

石黑　こりやァそれに違ひあるめえ。得て顔見世の上使といふと、寳を渡せの、疑ひがかゝつたのと、無理ばつかり云やァがる。

岩藏　それよの。揚句の果が首を切れ、トヾが困つて身替りとは

石黑　いつもある手だ。今年は上使は怖くねえ。寳は元より身替りもねえぞ。この高山へ足駄がけ、寒い時分に、上使に御苦勞。茶でも飲んで、キリ〳〵爰を

皆々　歸らつしやいな。

ト立ちかゝるを、太郎、押へて

太郎　アヽコレ、わいらは何を云ふ。サア、御上使とあるからは、その一通りを、この太郎へ。

ト照宗、しみの戸、顔見合せ、困りし思ひ入れ。

照宗　サア、その上意の趣きは……瀧夜叉姫の御意の通り、イヤモウ、强盜野武士はさて措いて、以前は朝敵將門とも、心を通はし、その跡が、いま其許へ綱渡り。

しみ　こりやモウいつそ輕業師に、なつてお出で遊ばしたら、滿仲さまの御苦勞も

　　ト此うち瀧夜叉、ヂツと兩人を見てゐて

瀧夜　この瀧夜叉が首討てと、云ひつけられて來やうがの。

照宗　ヤア、まるでなんにも

しみ　云はずと其まゝ。

瀧夜　なんと違ひは、あるまいがの。

照宗　それも主命、是非なくも

瀧夜　こりや面白い。兄滿仲の御主命で、血筋の妹の自らに、其方二人が附け人なりや、矢ツ張り主のこの瀧夜叉、その首討ちにノメ／＼と……いかにも首は渡してやらう。併し二人は主殺し、我が首やるは後での事。先づ差當る二人が成敗。方々、これにて切つて捨てよ。

　　ト立ちあがり、キツとなる。照宗、しみの戸、惆り慄へ出し

照宗　すりや、我れ／＼が、命をこの場で

瀧夜　いかにも。この瀧夜叉が云ひつけた。猶豫いたすな……それにマヂ／＼道連れの、吹けば飛びゆく木の葉武士、冥土へ晴れの先供に、刃の錆に討つて捨てよ。

ト兵太、伴藏、顔見合せ

兵太　アヽ、ナニ、私しどもは筑波参詣。お跡に附いて

ト立ちかゝるを

石黒　面白いわえ。サア、御上使、貴様の首を引ッこ抜く。

皆々　おいらも爰で、手傳ひませう。

ト照宗、しみの戸、顔見合せ、思ひ入れ。

岩藏　おれは上使のめいたの首。わいらは跡のがらくた武士。

石黒　サア、慰みに、叩き殺せ〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト裝束を脱ぎ、ぐる〳〵卷きにして、手拭にて結へ、めい〳〵支度する。

兵太　こりやア爰が軍法。敵に前を見せては堪らぬ。

伴藏　逃げるが奥の手。續け〳〵。

ト山颪しになり、八人殘らず、一散に逃げて入る。皆々あと見送り

皆々　惜しい小鳥を逃がしてしまつた。

ト皆々あと〳〵住ひ、石黒思ひ入れあつて、照宗に立ちかゝらうとする。これにて兩人、わな〳〵して這ひ出すを、石黒は照宗、岩藏は、しみの戸を捕へ

石岩　わいらは、どこへ行く。

照し　エ……ちと緣の下に落したものが

石岩　何を吐かす。

ト照宗しみの戸を蹴倒し

石黒　サア、御上使さん。今が最期だ。觀念。

ト白刃を振りあげる。その手に縋つて

照し　これサ〳〵　其やうにせずと、そこはナ、コレ、悴め、通り者め。

ト這ひ出して逃げようといふ思ひ入れ。瀧夜叉、見て、笑つてゐる。

石黒　否だ〳〵。

ト兩人、手を合せて拜むを引据ゑ、白刃を振りあげる。此うち太郎、下りて來て、この中へ入り、石黒と岩藏を引退け、兩人を圍ふ。

石岩　こりやァ頭、何をさつしやる〳〵。

太郎　イヤサ、この衆達も好き好んで、草臥れ儲けに、下駄がけで、この山中へ來るものか。畢竟主命
是非なくも

照し　左やう／＼。

ト手を合せて思ひ入れ。

太郎　そこを思へば、この二人に、科も報ひも無さゝうな。腹を直して、どうぞ瀧夜叉。

照し　何分どうぞ御堪忍。

ト蹲つてあやまる。

瀧夜　憎い奴ぢやが、お前のお詞。併し、一旦云ひ出した、首を討てとの云ひ條を

太郎　そりやァ云はいでも、ぶち放す首。

照し　エ。

瀧夜　サア、わたしが詞の立つやうに。

ト太郎、あたりを見て

太郎　オヽ、幸ひ。

ト瀧の下にある茶釜と釜を持つて來て

サア、この釜二つは、この後とも、どのやうな事があらうとも、かまはぬといふ掟の誓詞。

ト照宗に釜、しみの戸に茶釜をかぶせる。

石黑　手を叩いたら

皆々　狸に變れか。

太郎　これにて首を切つたも同然。首が無けりやァわが身の云ひ條。これにて大方、瀧夜叉には

瀧夜　併し目の前、二人の首、もし見えたなら、その時は

太郎　ハテ、いつ取らうとも其方の勝手。

ト照宗、しみの戸、落ちつきし思ひ入れにて

照宗　我が物ながらこの首を

しみ　暫時が内は

太郎　此方の預かり。わいらも行つて休息しろ。

石黑　時に、上使で思ひ出した。昨夜、麓へ野稼ぎのその折、番屋にコレ、これが貼つてあるゆゑ、ひん剝つて持つて來ました。コレ、頭、なんぞの役に

ト懷中より純友の人相書を出す。太郎、取つて

太郎　こりやコレ正に伊豫掾、いはゞ主人の人相書。

岩藏　ドレ〳〵、ちよつと此わしにも

ト取上げ、よく〳〵見て

ハヽア、先刻麓へ豆腐買ひ。その折札所の觀音堂、逢つた六部が。この面體に。

トこれを聞いて太郎、思ひ入れして

太郎　そんならこれに似寄りの六部、アノこの麓に。

ト思ひ入れ。

石黑　このゴタツキの濟む上は

岩藏　おいらは奥で德利酒。

皆々　そんなら、お頭。

石黑　後に逢ひませう。

ト山颪しにて、この人數、殘らず奥へ入る。跡、簾一ぱいに下がる。眞中に火鉢を直し、照棟、しみの戸、釜をかぶつたまゝ床几にかゝりゐる。太郎、瀧夜叉、こなしあつて、合ひ方になり

太郎　エヽ、コレ、上使のドサクサで、すつかり醉ひが覺めてしまつた。もう一度飲み直して、次手に葱

もその鍋へ

ト懸け盤の葱を瀧夜叉に渡す。

瀧夜　入れて煮るのかえ……サア〳〵、これから、お前と二人

トちよつと銚子をいぢつて、燗を見ようとする時、この鍋、煮え立ちし心にて、銚子を下に置き、鼻紙にて灰を拂ひながら蓋を取らうとする。

太郎　何をするな。

瀧夜　それでも此やうに煮え立つわな。

ト蓋を取る。

太郎　イヤ、煮るほど段々味が出る。ア、、旨さうに、煮えるワ〳〵。

ト瀧夜叉、酌をして、太郎、酒を飲む。此うち照宗、しみの戸、釜を取り、鼻をヒコつかせながら

照宗　旨い匂ひが

しみ　せめて汁でも

ト左右より顔を出す。瀧夜叉、箸にてちよつと頭を打つ。

瀧夜　アレ〳〵、首が

ト兩人、顏見合せ、恟りして

照し　オツト閉口。

トまた兩人、釜をかぶる。太郎、思ひ入れあつて、酒を飮みながら

太郎　イヤサア、心柄とは云ひながら、淸和源氏の棟梁たる、多田の武將の姫君が、この强盜のおれが女房に

瀧夜　成るわな。成る氣なりやこそ駈けこんで、わたしが方から仕掛けたわな。親の勘當、兄の義絶、まだ／＼この上艱難は、裙を肩へ結んでも、お前ゆゑなら、どうでもよいわな。

ト太郎に寄りかゝる。照宗、しみの戸、これを聞いて思ひ入れ。

太郎　さういふ心であらうとは……併し、わが身もいろ／＼なお大將、食つたあがりが此おれに、山賊承知で駈けこみ女房。

瀧夜　氣に入らぬのかえ。

太郎　イヽヤ、わが身が

ト引寄せる。

瀧夜　なんの疑ひ、二世かけて

太郎　女房の瀧夜叉。

瀧夜　必らず見捨てゝ下さんすなえ。

ト抱きつく。この時、照宗しみの戸、思ひ入れあつて、ツカ〳〵と行き、双方よりキツとなつて

照宗　チエヽ、血で血を穢す瀧夜叉さま。イヤサ、血筋正しき經基公の御娘、滿仲公の妹君、將家淸家の政所　いかなる武將の簾中とも、仰ぎ侍く御身にて、あるが中にも朝敵の

しみ　あの將門にコッソリと、それゆゑにこそお行くへ知れず。

照宗　たま〳〵御座所が知れゝばとて、氏も素性も賊徒の妻、それもあなたのお望みで、飛んで火に入る夏の蟲。いかなる天魔が見入りしか。思へば〳〵

ト兩人、思ひ入れあつて、ちやつと釜をかぶつて

照し　エヽ、お情ない。

トきつと云ふ。瀧夜叉、腹の立つこなし。

瀧夜　また自らにその諫言……惡い吹矢を見るやうに、なんぞといふと出る首が、化け物屋敷ぢやあるまいし、どうでも二人のその首は

ト立ちあがるを、太郎、思ひ入れあつて、ちよつと留め

太郎　ハテ、わしが預かり、一先づ奥へ。
照宗　爰に居たなら蘆尾釜。
しみ　ちん〱鑵子の差向ひ。
瀧夜　無駄言云はずと、その首を
照宗　アイヤ、切られた時には
しみ　オヤ、どうせうねえ……爰らで唄に。
瀧夜　エ、やかましいわえ。
照宗　御覧の通り、薬鑵でござらぬ。とはいへ二人がこの姿。
しみ　草双紙にもあらまほし。せめてあなたは
　　ト両人、釜を取らうとするを、太郎、押へて
太郎　首が見えたら、直さまバッサリ。
照し　ヤ。
　　ト首を縮めて
土瓶の二人が、成行きぢやなア。

ト手を取りかはし、こなし。唄になり、兩人、手を引きあひ、奥へ入る。太郎、瀧夜叉、跡見送つて笑ふ。合ひ方。

瀧夜　いかつがましき上使の二人、なんのいらざる口ゆゑに

太郎　さう云ふのも此方の無理。天下の武将の娘御が、どうしておれの女房に……味な望みとその胸がどうも未だに合點がゆかぬ。

瀧夜　そりやお前でもあるまいぞえ。戀に貴賤の分け隔て。惚れたら高位の娘でも、一筋なのが實とやら。

太郎　サ、それほど情を立てるなら、なぜ其方には帶紐を

瀧夜　エ、。

ト思ひ入れ。

太郎　解けぬ下紐結ぼふれ、心の内の綾錦、高位の姫を女房とは、及ばぬ月を猿猴の、猿が冠りの、相馬の一族。

瀧夜　エ。

ト思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり、太郎、こなしあつて

太郎　雲井はるかに棧橋の、昇るとすれど便りだに、屆かぬ願ひも一時に、さもやごとなき大内裏、月卿雲客殘りなく

瀧夜　姿は消えて雲霧の、果しなき世といひながら、穢れたる名を世に殘す。望みは夢の跡なくも、噂は人の口の端に、思へば〳〵

トきつとなる。太郎、思ひ入れあつて

太郎　口惜しいか。

瀧夜　アイ……なんの、わたしが

トこなしあつて

似合はぬとても二世かけて

太郎　サア、この山賊の女房に、推してならうと引越しの、姿、面差し、どこやらが

瀧夜　そんならお前は、アノわたしに

ト瀧夜叉、思ひ入れ。太郎、こなしあつて

太郎　よく似たものは……オヽ、津の國の

ト兩人、思ひ入れ。合ひ方になる。

瀧夜　鼓ヶ瀧の音澄みて

太郎　木の葉嵐か村雨の、振り袖姿の面影も

　　ト瀧夜叉、スツクと立つ。太郎、ギヨツと思ひ入れ。引廻して

　苔蒸す塚の朧影。

瀧夜　更けゆく空も

　　ト太郎の懐へ、ちよつと思ひ入れして

　烏羽玉の

太郎　黒髪垂れし男とも

瀧夜　脛もあらはに女の形相。

　　ト入れかはり

太郎　すりや、その時に

瀧夜　戀しと思ふ

　　トつか〳〵と前へ出て、ちよつと思ひ入れして

太郎　女房へ心中。

ト鍬形を出してやる。瀧夜叉、取つて

瀧夜　これこそ覺えの

ト持つてキツとなるを

太郎　エヽ……手活けの花嫁。

ト手を取る。これにて瀧夜叉、心附き

瀧夜　床杯を、待たうかいなア。

ト振りむき、氣を替へ、手を振り切つて女になり、袖にて顔を隱し、恥かしき思ひ入れ。太郎、心得ぬこなし、手を振り切られて撞と後へ手を突き、思ひ入れ。瀧夜叉、思ひ入れあつて

寢ぬ夜の友に

トつか〳〵と太郎の側へ行かうとして氣を替へ

媚つけうかいなア。

ト唄になり、瀧夜叉、こなしあつて上の方へ入る。太郎、跡見送つて思ひ入れ。

太郎　合點のゆかぬあの瀧夜叉、强盗夜盗のこの太郎、素性を知つて押しかけに、この頃爰へ引越し女房。心の底に、何か樣子の……ムウ。

ト この時、簾の内にて

大作 ヤア、アタやかましい傀儡めら、とつとゝ次へ無くなり居れ。

ト太郎、思ひ入れあつて

太郎 ヤヽ、慥かに親人大作さま。

大作、不孝な悴め、そこ動くな。

ト山颪しをかぶせ、木魂の合ひ方。簾まきあがる、内に大作、摺りへがし、熊の皮の大廣袖、結構なろ切繼ぎの袖やつし、平括けにて、褥に座し、八重垣、女郎四人、以前の形にて並びゐる。

太郎 すりや、この太郎を、親人には

大作 不孝の大罪、聞き居らう。

ト誂らへの合ひ方。大作、思ひ入れあつて

頭に雪の今日が日まで、忠義を知つて道を立て、下賤匹夫と成り下がれど、二君へ仕へぬこの大作。親に似ぬ子の汝が不孝。三つ子の魂ひ百までと、幼立ちから小盗みの、親を振りすて、家を出て、心は鬼の强盗と、聞いて勘當、血を絶つて、世を見限つて土民となり

太郎 サア、鳥すら反哺、三枝の禮、ましてや人に於てをや。心附いたるこの太郎。それゆゑお行くへ

穿鑿なし、お供いたしてこの山中、心一ぱい、身のありたけ、お心任せ第一と、殊に傅く女子まで……それに何ぞやそのお怒り。

大作　コリヤ、この親は、口から先へ産みはせぬ。コレ、この親はナ、今でこそ大作といふ、身は木樵でも、その元は、伊豫の城主、太宰の少貳經則が、謀叛の諫言、それゆゑに、勘當うけたる伊賀壽太郎。家出の跡にて親子とも、旗揚げなせしも忽ちに、亡び失せたは誰れあらう、瀧夜叉が親兄ゆゑ、主人は沒落。敵同士と緣に組む、不忠な悴に引かへて、忠心無二の某が、なんでこの家にノメ〳〵と、日夜も分たぬ馳走たつぱい。切り取りひろぐ穢れの穀類、やはか咽喉に

太郎　すりや、それゆゑに、この岩窟へ

大作　何しに足を止めんや。アノ𢙣な不忠者めが。

トきつと云ふ。

太郎　成る程、これは御尤も。さりながら、切り取り致すは武士の習ひ。まつた敵たる瀧夜叉を、繫ぎ置くのも忠義の一つ。

大作　こりや面白い。切り取りするが武士の習ひ、まつた敵と緣組みが、なんで忠義だ、それ聞かう。

太郎　あの瀧夜叉こそ經基の、姬とはいへど御主人の、假にも相馬の平親王、將門公のお胤まで、宿せ

ば矢ツ張り主人同然、それゆゑ引込みあるとても、臥床を分つが將門公、まつた源家へ縁組みせぬ、證據は眼前、その上に、この家にあるは人質同然、今まで主人の御在所、知れたる時はこの太郎、多くの手下を先手となし、立向ふとも人質の、あらばいつかな源氏にも、敗れを取る事あらんや。斯くまで心を碎きたる、その心底は御存じなく、矢張りこの身は勘當にて、この岩窟を出でられんとは、憚りながら親仁様、ちと御料簡違ひかと存じまする。

大作　イカサマ、口は調法なもの。すりや、忠心孝道には、いかなる辛き憂き目をも

太郎　憂い目辛い目なすとても、主親の道、なんのお恨み。さればこそこの程の、日夜の無理や我まゝを、仰せあつてもこの家の内

大作　外へも出さず活計歡樂。

太郎　それも何卒御勘當

大作　免りたく思へば

ト大作、太郎の肩先へ踏みかける。太郎、キツとなり、氣を替へて、兩手を組んで見得。大作、踏みかけしまゝキツとなる。大小入りの合ひ方になり

ヤイ、忰、主親の恩は須彌大海、天に表せしこの親が、眼前足下に我が子の魂ひ、見拔かん爲の

この場の非道。なんぼ孝心忠心でも、よも辛抱はなるまいがな。

ト きつとなつて云ふ。太郎・嘲笑ひながら

太郎 身體髮膚を受けつぎて、人となつたるこの體、お氣に染まずば、いか程なりと。

大作 すりや、この通り……サ、まツこの如く、踏み蹂つても

ト 太郎を蹴る。

太郎 親のお心、直る事なら

大作 そんならこの家を

ト 行くを留めて

太郎 やられぬゆゑに、あなたの自由に

大作 なつても矢ッ張り

太郎 この家で孝行。

大作 それが嫌なら、無理の有りたけ

太郎 きくも、あなたへ

大作 ハテ、迷惑な……イヤ、孝行だなア。

ト大作、高足の上へ上がる。時の太鼓になり、向うより以前の八人、めい／＼弓と矢を持ち、出て來り、太郎をバラ／＼と取卷き

皆々　動くな。

太郎　合點のゆかぬ。又ぞろ先刻の侍ひども。

兵太　照宗どのゝ指圖により、主人の假家へ其方を

伴藏　伴ひ行かんとこの山奥、はや十重廿重に取卷けば

三吾　最早遁がれる透もない。

大久　君の御座所へ召連れ行く。

皆々　キリ／＼、立たう。

太郎　すりやアノ我れを滿仲が

ト上手より照宗出て

照宗　申しつけたは斯く云ふ照宗、姫の實否を糺した上、樣子によつては其方を、召連れ來れと主人の嚴命。イザ、この場より坂東太郎、旅館へキリ／＼

皆々　立ちませい。

太郎　ハテ、仰々しいうんていめら。盗賊野武士のはびこるは、狩つても盡きぬ世界の蟲、それを制する器量の大將、普く天下に見當らぬ　血氣に逸る馬鹿大將、滿仲が葉武者を以て、迎ひとは片腹痛いこ。併し、行かずはこの太郎　卑怯未練と云はれては、仲間の者へ、この面が……よいワ、おれが方から行つてやらう。ビク／＼するな。ドレ、おれが腰の物。

トこれにて女形、刀懸けの大小を取つて出す。照宗が差して來し傘と下駄を、太郎履く。左右に皆々、矢襖を作り、照宗附いて花道へかゝり、思ひ入れあつて

次第に降りくるこの大雪。親仁様にはお年の上。あの女房の瀧夜叉に云ひつけ、何かの御馳走。

女形　さほどお心附けられても

大作　いつかな免さぬ。

照宗　道の固めを。

太郎　この上免すは

大作　忠孝二つ。

太郎　その忠盡す御主人の、顏だに太郎は

大作　知らぬ山路

太郎　迷はぬやうに

照宗　キリ／＼、太郎を。

皆々　立ちませい。

太郎　やかましいわえ。

　ト皆々「ウム」と寄る。太郎、傘をちやつとさし、キツとなつて見得。唄になり、この人數殘らず向うへ入る。

八重　サア、この上は、親仁樣、ちとマアお横に。

大作　イカサマ、起きては年の加減が

　ト横になり

腰なと捻れ。

女皆　そんなら、あなたの

大作　キリ／＼と、揉み居らぬか。

　ト女形皆々、腰を揉む。八重垣、茶を持つてくる。この時、六部の合ひ方になり、揚げ幕にて鉦鼓の音する。雪頻りに降る。向うより金剛丸、鼠木綿、頭巾、六部の拵らへ、笈を脊負ひ、出てくる。

跡より信良、上下衣裳、股立ち、大小にて、肩簑を引ツかけ、竹笠をかざし、跡より黒四天の捕り手四人、金剛丸を窺ひつけて出て來り、花道に窺ふ。金剛丸、思ひ入れあつて

金剛 アヽ、降つたる雪かな。豊かな御代の貢ぎとは、世にある人の云ふやらん。爰は所も筑波山、峰より落つる木枯しの、降ると思へば散る雪の、身は雲水のやる方も、今宵の宿にはいづくの軒、月洩る草の辻の庵さ。アヽ、身に憂き雪の、夕暮れよなア。

ト思ひ入れ。この時、信良、後より「ウム」と思ひ入れ。これにて金剛丸、振りかへり、こなしあつて

こりやお侍ひ。何ゆゑに。

ト思ひ入れ。

信良 ヤ……それノヽ、行き暮らしたる旅の修行者。定めて御難儀。

トちつと見て

殊に血縁の志し。それゆゑお跡を

金剛 ハヽア、左樣かな……左樣ござらば御回向を

ト鉦を打つ。信良、手の内を出す。金剛丸、受取り

光明遍照十方世界、念佛衆生、南無阿彌陀佛。

ト回向する。この時。捕り手「ムウ」と十手を振りあぐるを、信良、早いといふ思ひ入れ。行けトこなし。捕り手と共に向うへ引返して入る。此うち金剛丸、回向をしまひ、あたりへ思ひ入れあつて

合點のゆかぬ今の侍ひ……アヽ、降るワ〳〵。ドリヤ、塒を尋ねようか。

トまた合ひ方、時の鐘になり、本舞臺へ來て、門に彳み

行き暮らしたる旅の修行者、一夜の宿の、御報謝にあづかりたい。

ト八重垣、これを聞きつけ、こなしあつて、枝折り戸の方へ思ひ入れして

八重　それはマア、この大雪に、さぞかし御難儀。

皆々　ほんに、これへ呼び入れて

ト皆々立ちかゝるを

大作　アヽ、イヤ〳〵、今時、廻國修行の六部、どうでろくな奴ぢやあるまい。捨てゝ置いて、わいらは風呂の加減を見ろ。

八重　左様なれば、私しどもは

ト女形皆々に、來いトいふこなし。

大作　キリ〳〵奥へ、行きをらぬか。

ト合ひ方になり、八重垣、おづ〳〵思ひ入れあつて、女形皆々を連れ、奥へ入る。大作、枝折り戸の方へ思ひ入れして、ヂツと見る。此うち金剛丸、笈を下ろして

千晴　アヽ、いかさまなア、人の修行は我が修行、情で叱る門あれば、邪慳で受くる布施もあり……ヤ、こりや段々とこの雪では……ドリヤ、麓の方へ、出かけて見ようか。

ト笈の雪を拂ひ、袖を通して脊負ひ、立ちあがらんとする時、

大作　アヽコレ、お修行者、暫らくそれに

ト合ひ方になり、そこにある大黒傘を持ち、枝折り戸の側へ來て

お修行者、麓へ雪の山坂より、暫時がうちのこの布施物。

ト傘をひろげ

これぞ六十六本の、傘の宿りが今宵の報謝。身を柄の下へ屈するとも、やがて雲井に日の光り。

ト内より金剛丸に傘をさしかける。金剛丸、思ひ入れ。

金剛　イカサマ、これぞ天ケ下、心ありげな雪の傘。

ト兩人、顔見合せ

さては其方

ト思ひ入れ。

大作　モシ

ト兩人、あたりへこなし。誂らへの合ひ方。

サア、時にとつての六十六國、草木に心置く霜の、夜道も雪の心がら。そこを思うて某が……底は知れざる悴が軒、針の莚に座せんより、傘の主がこなたの望み。但し、この下、望みにねえか。

金剛　サア、それは。

大作　破れ傘にて古骨の、たとへ節々濡るゝとも、今宵一夜はこの下の、主となつて四海の棟梁。この下ばかりは出られまい。

ト傘を金剛丸に渡す。金剛丸、思ひ入れ。

金剛　いかにも、この雪風に凍えるとも、せめて雫の傘の下、我が手の内に六十ろくろ、握る瑞相。

大作　すりや、氷の槍先に

金剛　貫かるゝともナニそれしき。ハテ、心よき末廣と

大作　祝ふ詞の傘の謎。

金剛　我が念願の吉瑞よな。

　　トきつと思ひ入れ。大作、こなしあつて

大作　サア、その心を直さん爲、公連、某、心を合せ、諫言なすとも聞入れず

金剛　將門はじめ、この純友。

大作　それゆゑ國を亂せし上、斯くさまようても、御身には

金剛　心は變ぜぬ。いつかないかな。

大作　すりや、どのやうに申しても

金剛　うるさき諫言、聞く耳持たぬ。

　　ト傘を持ち。行きにかゝるを

大作　すりや、こなたには。

金剛　これより麓の

　　ト振り切つて

宿ある方へ。

ト行かうとする。また入れかはつて留め

ト金剛丸を跡じさりに高足の上へ追ひあげ、思ひ入れあつて

大作　こも情ない

ト　きつとなるを

伊豫掾純友さま。

金剛　コレ。

ト入れかはつて思ひ入れ。大作、金剛丸を撻と引据ゑて

大作　こなたはなう。

ト　きつと思ひ入れ。唄になり、簾下りて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、通しの屋體、本緣側、藁葺きの間ゟ、古き鼠壁、前へ出して上の方た障子にて仕切り、内に二枚折りの蓆屏風を立て、この上に大石を吊り、その綱、下の柱に繋ぎてあゝ、よき所に圍爐裏、雪の岩組み、瀧の落ちる仕掛け。下の方、竹簀の門口、照り葉の吊り枝、山颪しにて道具とまる。

ト大小入りの合ひ方、山颪しをかぶせ、赤斑の狼、赤子を咬へ、引摺つて來る。跡より秀郷、棒茶筌、大小、裁附け、草鞋にて、簑を引ッかけ、竹笠をかざし、卷き火繩を持ち、狼の跡をつけて出て來り、花道に立ちどまり、狼は花道にとまり、手先にて赤子をいぢる。秀郷、これに目を附け

秀郷　それ猛獸は猛しと雖も、よく人の勇氣を察す、もと陰より起つて生を受くれば、陽氣盛んなる時は、果して仇せん事を憂ふ。今いぢらしき幼な子を、目前これにて不思議にも、喰ふと思へど、アレ〳〵〳〵、却つて毛を垂れ、尾を下し、恐るゝ樣子は、これ正に、英雄豪傑後々には、名をも發する小兒なるか。又は威德の持ちつるか。何は兎もあれ、小兒にとつては、ひやいな有樣

ト火繩を振り、小柄を拔き、手裏劍に打つ。これにて狼、逃げて入る。秀郷、ツカ〳〵と行き、赤子を抱きあげ、守り袋より書附を出し、見て

ホヽウ、さこそ〳〵。將門が一子、將軍太郎、朝敵の胤ながら、捨ておき難し。村も稀れなる山中に、もしや殘黨餘類の輩が……何にもせよ、麓の方へ。

ト行きかゝると、日の暮れたるゆゑ、窓蓋を下ろす。

ハヽア、短日といひ、道に迷ひしゆゑか、最早日の入り、物の黑白も、殊に大雪、せめて一夜を

ト思ひ入れ。この時、奧にて

瀧夜　これはしたり、誰れぞ持つて行かしやんせいな。

秀郷　ありや女子の聲。然らばこれにて、一夜の宿を頼まうか。

ト合ひ方になり、奥より瀧夜叉、傘を持ち、出て來り、跡より石黑、同じく下駄を提げ、出て來り、瀧夜叉を留めながら

石黑　これナノ〱、お姫さん、お前、其やうに腹を立つちやア

瀧夜　それぢやというて、内のが、何ぢややら、兄さんが用があるというて、呼びにおこして行かしやんしたげな。それにマア、履物というたら、慥かに最前の上使にうせた、あの者が履いた物で行かしやんした。それをマア持つて行けと云ふに……ぢやによつて、自身にわしが

石黑　これサノ〱、そこをお前が行つちやア悪い。此やうに降つて降りぬく大雪に

トこの時、秀郷、思ひ入れあつて、門口へ赤子を寐かし

秀郷　道に迷ひし參詣の者、一夜の宿を

石黑　なんだ、宿を貸せ……とんだ話しだ。盗人の内へ宿を貸せとは、餘ッほど此奴は身知らずに。オイ、宿を貸さう、命がいらざア

ト云ふを、瀧夜叉とめて

瀧夜　アヽ、コレ〳〵、そんな事を。マア、さう云はずとも、わしも爰へ押かけ女房。亭主が盗みするからは、此方も共々、ぢやによつてな。

ト囁き、石黑呑みこみ、下駄を提げ、傘を持ち、上の障子屋體へ入る。瀧夜叉、出て來り

左様なれば、道にお迷ひなされたのかえ。定めて御難儀。見苦しけれど、今宵一夜は

秀郷　一樹の陰、一河の流れ、袖振り合ふも

瀧夜　他生の御縁。お心おきなう

秀郷　然らばお世話になりませうかな。

ト捨て鐘になり、內へ入り

ハヽア。大分これは

瀧夜　暗うござります上、まだ暮れて灯をともしません。殊に爰らは山中にて、何かと不自由。それゆゑ焚火で

秀郷　猶さら御馳走。吹雪にまみれし五體の冷を

瀧夜　只いま爰で

ト鉈、薪を持ち來り、眞中にこれをくべ

サア〳〵、これが何より今宵の御馳走。打寛ろいで

秀鄕　イヤモウ、實に蘇生の心地。とはいへ、これなる山中に、女子ばかり

瀧夜　淋しけれども、そこが故鄕、住めば都

ト　この時、段々火を焚きつけ、兩人、思はず顏見合せ、こなしあつて

ヤ、お前は。

秀鄕　こなたは滿仲どのが妹の瀧夜叉。

瀧夜　幼なき頃より父上の

秀鄕　許しを受けて二世の誓ひ、堅い約束いつしかに、破つて故鄕を

瀧夜　國遠なしたる、その折に、慥かお前は

秀鄕　親御の許しの、こなたの連合ひ。

瀧夜　ほんに田原の

秀鄕　いかにも秀鄕。不思議な所で

ト　この時、瀧夜叉、ズツと立つて奥へ行きかゝる。秀鄕、この裾を捕へる。瀧夜叉、振り切る。その
手を秀鄕取り、ちやつと坐らせ、立ちあがるを、チツと留めて

ア丶コレ、ようマア無事でござつたなう。

ト誂らへの合ひ方になる。

瀧夜　成る程、親が許した妹脊仲、それを嫌うてこの瀧夜叉

秀郷　あの將門と人知れず、子まで生したと聞いた時、實はモヤ〳〵、この胸が、張裂くばかり、其うちに、將門を討手の人數、その大將は貞盛と、某へ下知蒙り、下世話で云はゞ女敵の、將門討ちしと云はれては、武士の面體相立たずと、思ふ折から貞盛が、放つ矢尖に將門は、落命なせばこの秀郷、是非なく首討ち、凱歌を、あげし喜び聞くと早、家出の御身、それゆゑに、妻も迎へぬこの秀郷。

ト瀧夜叉の手を取り

矢張り其方へ執心の、それゆゑにこそ當山へ、妹と脊願ふ參籠に、思はず逢うたる女房瀧夜叉。結ぶの神の、引合せぢやなア。

ト此うち瀧夜叉、秀郷の顏を見詰めて、無念の思ひ入れ。また氣を替へて

瀧夜　ほんにマア、元木にまさる裏木なしと、現在お前と約束の、それをば捨てゝ朝敵と、不義密通のわたしが科。それゆゑ跡をくらまして、お前の前では云ひ憎けれど、云ひ交したるその人の、せ

めては國の筑波山、妹脊の神を頼みにて、今日まで過せど女の手一つ、案じるうちに、思ひがけない……サ、思ひもよらぬお前に對面。これまでの身の不體裁に、定めて愛想は盡きさんせうが、わたしやお前に、逢ひたかつたわいなア。

ト寄らうとする。この前より石黑出て、この時

石黑　ならねえぞ／＼。てつきりこんな事であらうと思つた。こなたはマア大それた。とんだ男を引込んで、今にも頭が歸つたら、大騷動が起るであらう。長居はさせねえ。キリ／＼爰を出しなせえな……出やァがらにやァ引ッ剝いでも、引摺り出すぞ。

ト立ちかゝる。瀧夜叉とめて

瀧夜　これはしたり。お前も呑みこみの惡い、このお方は、實はわたしが約束した

石黑　それだによつて

ト立ちかゝるを

瀧夜　ハテ、今宵は是非とも……サア、是非とも泊めて、命かぎり、これまで積る……サア、積る話しのありたけを、云ふには却つて何かの邪魔。ぢやによつて、機轉きかせて、サア、切つて

ト切れといふ仕方して

サア、キリ〳〵内を、出て行かしやんせいなア。

ト石黑、呑みこみ

石黑　成る程〳〵、そんならわしは、この家を離れて、今宵も夜仕事。寢鳥を射るが此方の獲物。そんなら旅人、爰にゆるりと。

秀鄕　今宵は夜とともに

瀧夜　話すぞえ。サア、話さにやならぬこれまでの、積る恨みは

秀鄕　そりや此方にも、これまでいろ〳〵

石黑　其お話しはお跡にて、開くは仲人。

瀧夜　心きかして

石黑　ドレ、出かけようか。

ト捨て鐘、合ひ方になり、奥へ入る。奥口より岩藏、種ヶ島を提げ、眼助と苔平、窺ひ出る。石黑、これに囁き、向うへ入る。三人は上下へ忍ぶ。瀧夜叉、跡先を窺ふ。秀鄕、此うち裁附けの紐を解き

秀鄕　ヤレ〳〵、草臥れた。

ト立ちあがる。これにて裁附けは袴になる。瀧夜叉、百日紅の莨盆を持ち、秀鄕の側へ行き

瀧夜　この大雪に、さぞ草臥れさんしたであらう。ちよつとわたしが、肩なと揉んであげうかえ。

秀郷　それは何より。そんなら、ちよつと。

瀧夜　アイ〳〵。

ト瀧夜叉、秀郷の後へ廻り、肩を揉む。

秀郷　イヤモウ、斯うしたところは、晝間の憂も忘れ、とんと極樂。イヤモウ、この大雪では、晝間は地獄で

トこの時、高足の眞中にて、疊を上げ、苔平、白刃を持ち、顏を出す。後の壁の破れより、眼助、顔を出す。瀧夜叉、これを見て

瀧夜　ア丶、コレ〳〵、まだ早いといふに。

トこれを聞き、秀郷

秀郷　コレ〳〵、何が早い。

瀧夜　サア、早いといふは、まだ寐るのが

ト秀郷の耳をふさぎ

サア、よい時分には合圖する。それぢやによつて

ト兩人、顏を引く。

秀郷　ヤ、これは上手ぢや。とてもの事に、頭のあたりを、もそつと强う

瀧夜　取分けわたしは、いつでも耳に

ト耳へ指を入れ

將門は、米かみよりぞ射られける、俵藤太が計略と、人も知つたるその恨み。天運來つて今宵のうち、やがて恨みを。おのれ秀郷。

トきつとなる。

秀郷　アイタヽヽヽヽ。

ト瀧夜叉、ちやつと指を拔き

瀧夜　ほんに思はず

秀郷　痛い馳走に

瀧夜　もそつと揉んで

トまた肩を揉みながら、和らかになり

あけるぞえ。

ト こなし。この時、門口で赤子頻りに泣く。瀧夜叉、これに聞耳立て

秀郷　何ぢややら、慥か門にて幼な子の、この大雪に埋もれて、今に命も消えぐ〜に。消えてゆく子は將門が、血筋殘せし將軍太郎。

ト これを聞き、瀧夜叉、愕りして

瀧夜　そんなら、門のが

ト 門口へ思ひ入れ。

秀郷　コレ。

ト 秀郷、瀧夜叉へ思ひ入れ。瀧夜叉、ちやつと肩を押へ、兩人キツとなつて思ひ入れ。捨て鐘。合ひ方變つて

その良門こそ其方と、契りをこめし將門が、汚名を殘す朝敵の、その嫩たる將軍太郎、今改めて某と、親の許しの夫婦とならば、横合ひより指も差させぬ。併し世につれ現在の、父は果敢なく母親は、ありとはいへど餘所の女、眼前朝敵の身寄りの倅、それ打捨てゝも女房には、門なる幼な子、抱く心か。

瀧夜　サア、それは。

秀郷　今となつては夫の義理。これぱつかりは抱かれまい、

瀧夜　なんの、わたしが彼の捨て子。たとへ身腹は痛めるとも、腹は借り物、胤こそは、忝くも桓武の正統・常陸の大掾國香が弟、相馬の小次郎將門が、關八州に威を振ひ、並ぶものなき吾妻内裡。その悴なる幼な子こそ、自ら名けて將軍太郎。母は現在、目の前に

　　　トこなし。

秀郷　俵藤太が矢尖にて、空しく消えても消えやらぬ

瀧夜　心の恨み、再びこの土へ精魂の、形は假の……今ぞ四海を

　　ト瀧夜叉、思ひ入れ。

秀郷　こりや女房には……コレ

　　　トこれに構はず、瀧夜叉、向うを見て無念の思ひ入れ。

　　コレ。

　　　トこれにて瀧夜叉、氣を替へ

瀧夜　ほんに思はず、昔語りを

秀郷　後へ殘して、今宵は夜とともに

瀧夜　そんなら、先へ
秀郷　寐るのが勝手。
瀧夜　打寛ぐのも
秀郷　女房の內ゆゑ、雪の肌を
瀧夜　解けるは床の
秀郷　寐間溫めて

ト瀧夜叉と顏見合せ、思ひ入れあて

待つてゐるぞよ。

ト唄になり、秀郷、刀を提げ、上の障子屋體へ入る。瀧夜叉殘り、こなしあつて、ツカ〳〵と門口へ行き、子を抱きあげ、思ひ入れあつて

瀧夜　コリヤ、忰、さぞかし難儀であらうなア。これといふもこの將門の、身にも應ぜぬ大望の、直ちに報ひ朝敵の、汚名を受けて口惜しや、身は果敢なくもこの世をば、去らぬ恨みは精魂の、後に又ぞろ歸り來て、宿る姿もあらざれば、深き契りの其方が、母の瀧夜叉五體をば、假に宿りの相馬小次郎。それゆゑ人は瀧夜叉と、思へどいつかな魂ひの、變れば不便や忰にも、父とはいへど

母親にて、母とはいへど父なるゆゑ、乳房なければこの如く、飢渇の苦難はこれ餓鬼道、降り來る雪は八寒の、親は側にて焦熱の、燃ゆる涙のその元は、みな修羅道の横しまの、積り〳〵て情なや。現在我が子に報ひしか。思へば〳〵かほどまで、不便の者の、有樣ぢやなア。

トきつとなつて

これといふのも彼の秀郷、この家へ來るは天運の、盡きたる彼れに見ゆる幸ひ。卑怯ながらも將門が、恨みの一心、一門一類、今宵ぞ報ふ。おのれ秀郷。

トぢり〳〵と立ち、鉈を咬へ、キッと見得。本釣り鐘、圍爐裏の火消えて暗がりの心。瀧夜叉、赤子を抱き、高足の上に置き、鉈を持つて窺ふ。岩藏、鐵砲を持ち、眼助、苔平、白刃を持ち出る。瀧夜叉、これに囁く。岩藏、心得て、元の所へ入る。瀧夜叉、そろ〳〵上へ上がる。苔平、白刃を持ち。續いて上がり、後へ忍ぶ、瀧夜叉、上手の障子を明ける。秀郷、起きあがつて窺ふ。

モシ、秀郷さん、お前もう、お寐つたかえ。

ト秀郷、思ひ入れあつて

秀郷　アヽ、思はず知らず、ツイ、とろ〳〵と

ト云ひながら、ソッと前へ出て、赤子を抱きあげる。

瀧夜　目が覺めずば、火をあげうかえ。

　　ト圍爐裏の側にある煙管へ菸をつけ、一口のみ

サア、あげるよ。

　　ト差出す。秀鄕、手を出してこれを取り

秀鄕　イヤモウ、斯ういふ時には、菸に限るて。

　　トのむ。この時、横手の障子を眼助しめるゆゑ、秀鄕、長煙管を敷居の溝へあてる。障子立たぬ事。秀鄕、障子の外へ拔ける。入れかはつて眼助、切りこむ。瀧夜叉、思ひ入れあつて石の綱を切る。石落ち、眼助に當つて、眼助死ぬ。秀鄕、外へ行きにかゝる。苔平、鐵砲を持ち、秀鄕に行き當つて

苔平　首尾は

　　ト秀鄕、これを聞き、身をかはすゆゑ、苔平、前へ出るとて、誤まつて火蓋を切る。この火、圍爐裏の粗朶へ燃えつく。瀧夜叉は前の屋體へ行き、鐵砲の音に驚ろき、秀鄕は苔平を投げのけ、兩人キッと見得。粗朶の灯にて、瀧夜叉、秀鄕を見て

瀧夜　網裡の魚に等しき秀鄕。

秀鄕　急を遁がれて卽ちこれに。

ト此うち岩藏、種ヶ島を持ち、窺ひ出る。この種ヶ島を瀧夜叉取つて、秀郷を打たんとする。秀郷、

赤子をさしつけ

これを打たぬか。

瀧夜　ヤ。

ト見て

さては良門。

秀郷　疾より我が手に

瀧夜　打つに打たれぬ

秀郷　的は幼な子。

ト鐵砲を打ちつける。

瀧夜　チエヽ。

秀郷　ハヽヽヽヽ。

ト嘲笑ふ。唄になり、悠々と向うへ入る。瀧夜叉、向うを見詰め、思ひ入れ。

岩藏　瀧夜叉どの。

瀧夜　袋の鼠と思ひの外

岩藏　運よくこの場を遁がれた秀郷。

瀧夜　落ちゆく先は九十九折。

岩藏　絶所難所も知れたる近道。

瀧夜　先へ廻つて秀郷を

岩藏　今度は遁がさず

瀧夜　少しも早く。

岩藏　合點だ。

　　ト捨て鐘、送りにて、向うへ入る。瀧夜叉、向うを見て

瀧夜　これといふのも不思議にも、手に入りたりし三上の獨鈷、それ無きゆゑに忍術まで、殊にはそれも秀郷が。まだその上にこの身の樣子。こりや一時も秀郷を、もう助けては置かれぬわえ。恨み重なる藤原の

　　トこの時、奥にて

太郎　その秀郷を取逃がし、討ち洩らしては女房瀧夜叉、太郎に云ひ譯あるまいがな。

ト小鼓の合ひ方になり、奥より坂田太郎、廣袖の上へ結構なる長上下、大小にて出てくる。瀧夜叉、

これを見て

瀧夜　ヤヽ、合點のゆかぬお前の姿。殊には秀郷討たいではと、お前の心は

太郎　知れた事、云ひ號けの秀郷でも　子まで生したる將門でも、今となつてはこの太郎が、押しのけて我が女房、その秀郷を討ち洩らしては、今の夫へ云ひ譯あるまい。それとも女房と思ふなら、あの秀郷の首を討ち、持ち歸りなばその時は、一世の夫婦は取措いて、三世の緣の主從も

瀧夜　こりや面白い。どうで恨みの重なる秀郷。よしさなくとも幼な子の

太郎　これから跡を追ひついて

瀧夜　取返すのが互ひの固め。

太郎　鬼の女房に

瀧夜　鬼神の譬え。

太郎　急いで瀧夜叉

瀧夜　オヽ、さうぢや。

ト有りあふ一腰を持ち、一散に向うへ入る。

太郎 今の女房の詞の樣子。よも秀卿を安穩では…… 首尾よくゆかば源家の花聟。それを囮に大望の

ト此うち後へ金剛丸、大作、窺ひ出て、こなしあつて

金剛 すりや、この者が伊賀壽が悴。どてら姿に似合はざる

大作 上下大小いかつけに、さては汝は瀧夜叉と

太郎 二世の誓ひに滿仲へ、いま改めての花聟と、作り立つたる衣服大小。

金剛 然らば源氏へ、いよ〳〵心を

大作 寄せると察し置いたるゆゑ、許さぬ勘當、不忠不孝の我が悴。

太郎 イヽヤ、某は大忠臣。今ぞ主人や、親人の、疑念を晴らす門出の一言。

ト つか〳〵と高足の側へ行き、撞と座して

親人さま、正しくこれなる修行者こそ、草を分つて詮議なす、慥かに伊豫の

金剛 純友などとは思ひもよらぬ。身は廻國の六部方海。

大作 なんの、あなたが御主人で

太郎 すりや、どこまでもこの太郎、疑ひあるはさる事ながら、これまであなたを泊め置きて、面體知らぬ純友公。お出でとあらば共々に、語らふ野武士強盜も、一つになりて瀧夜叉こそ、正しく招

魂の祕法にて、再びこの土に將門公、一つとなつて旗揚げと、思ふに幸ひ滿仲に、一つの功のある時は、關八州は汝にと、舌三寸に藥を。しや事をかしと思へども、わざと請合ひ立歸るは、この事お知らせ申せし上、我れは謀つて滿仲へ、近寄り、不意に差し違はゞ、その虚を計つて御主人が、我が郎黨と二つになり、殘る葉武者を切り立て追ひ立て、この男體山へ閉ぢ籠らば、討手の勝利は、いつかないかな、片時も早くこの計略、行ひ給へ、お二人樣。

金剛　イヽヤ、知らざる修行者が、何ゆゑ滿仲へ弓引かんや。そりや朝敵の餘類ゆゑ。我れは廻國修行の方海。

大作　名乘れなぞとは無理無體。

太郎　すりや、此やうに申しても。

金剛　いつかな知らぬ

大作　覺えは無いわえ。

ト　これにて太郎、こなしあつて

太郎　イカサマ、薄の穗にも怖ぢるの譬え。それも何ゆゑ臆病の、附きし起りは箱崎の、只一戰に敗北せしゆゑ。

ト　これにて兩人、キッとなつて

大金　何がどうした。

ト兩人、キッと思ひ入れ。肥前節の合ひ方になり

太郎　頃は天慶四年の夏、しかもその日は五月雨の、二十四日の宵闇に、名にし聞ゆる箱崎の、その名城も天運の、盡くれば敵にやみ〳〵と

ト此うち後に杉太、飛八、四天の形にて窺ひ出て、この時、ツカ〳〵と出て

兩人　さてこそ尋ぬる。

ト金剛丸にかゝる。金剛丸、杉太を引敷き、飛八を下へ投げる。飛八、大作へかゝるを、大作、これをキッと押へて

金剛　源氏の棟梁、六孫王經基はじめ、悴滿仲、從ふ勇士の計略に

ト杉太を投げ、キッとなつて

大作　不意に起つて味方は敗軍。やう〳〵沖へ

ト飛八を投げ、キッとなつて

太郎　主從は、心細くも長門の國、殘せし軍卒從へて再擧を計る純友が、主從すぐつて三千餘騎、暗きを賴み小船にて、經基が詰め所なる、博多の陣所へ夜討の手段。

ト杉太、これを見て

杉太　さては頭も純友へ

トかゝるを引敷き、キッとなり

太郎　その純友を先手となし、陣所の裏へ押しよすれば、敵はそれとも白浪の、艪を押しきつて純友公。

金剛　切り立て突き立て薙ぎ立つれば、不意を討たれて敵は敗亡、すはや戰は勝ちたると、勢ひこんで

ト飛八かゝるをグッと捻ぢあげ

追ひかけしに。

トこれにて杉太、振りほどき、大作にかゝる。これを押へて

ノ

大作　數千の松明、投げかけ追ひかけ飛びめぐれば

太郎　猛火は味方の船に燃えつき、次第々々に燃えあがり、さしもに廣き青海原、天も焦せと燒き立つれば、今ぞ最期と大音あげ

ト また立廻りあつて

金剛　伊豫掾純友が、討死なすをこれ見よと。叫ぶを聞いて家臣の面々、主人を討たせナニ面目、我れも〳〵と、

ト立廻りあつて

討死に

大作　凱歌あげし官軍に引かへ、味方は今にやみ〳〵と

太郎　時到らねば浪の泡、消えて果敢なき敗軍の、汚名を雪ぐお心無いか。

金剛　サア、それは。

太郎　現在主人を痴呆ぞと、笑はせるのが忠義と云ふか。

大作　サア、それは。

太郎　サア

兩人　サア

三人　サア〳〵〳〵

太郎　よも安穩では居られまいがな。

トこれにて兩人、無念のこなしあつて

金剛　云ふまでもなく現在の、親より受けつぐ謀叛の根ざし。

大作　育てし伊賀壽が、後詰となつて

太郎　さてこそ違はぬ伊豫掾

金剛　藤原の純友なるワ。

ト引拔いてキツと見得。

大作　アヽモシ

ト押へて、太郎と顔見合せ、思ひ入れ。

太郎　ハヽ、初めてお顔を拜せし御主人。それと推察いたせしゆゑ、わざと嘲り敗北の、怒りに思はず御主人と、知れたる上は、この後とも

金剛　幼年の折別れしゆゑ、面體形は知らざる汝。

大作　御主人伊豫の純友公。斯くなる上は其方には、いよ〳〵立越え、滿仲と

太郎　刺違へんはナニ手間隙。まつた敵の秀鄕は、瀧夜叉姬が跡追ひかけ

金剛　その瀧夜叉こそ將門公、在所尋ぬる今日只今

大作　一つとなつて源家の奴ばら

太郎　討ち亡ぼすとも肝心の、家に傳はる兩家の御旗、それ無き時は旗揚げの

金剛　それこそ純友

　　肌身離さず

　　　　ト懐中より赤旗を出し

大作　我れもいつぞや亂軍に紛れ、密かに取り得し繋ぎ馬、相馬の旗はコレ爰に。

　　　　ト太郎、兩方の旗を取上げて見て

太郎　初めて見たる兩家の指し物、家にとつては系圖も同然。二品揃へば大望の、今ぞ太郎が

金剛　これより立越え、滿仲を

大作　いよ〳〵其方

太郎　討取る役はこの太郎、併し命は風の前、それも何ゆゑ主親の、爲にはやはか……その代りには、

　　この場にて、三世の誓ひに一世の親人。

金剛　いかにも家來と約束の、杯ごとは、この場にて

大作　親もろともに

兩人　其方へ。
太郎　ナニ、お杯を私しへ……幸ひ爰に不老の銘酒。ヤア〳〵石黑、申しつけたるその杯、急いでこれへ。
石黑　畏まつてござります。
　　　ト合ひ方になり、奥より石黑、三方に大杯、大銚子を持ち、出て來り、よき所へ置いて
頭の心を用ひたる、この不老酒を、この場にて
　　　トこれより條入り合ひ方。
金剛　急いでこれへ。
石黑　ハア。
　　　ト金剛丸、杯を取上げる。石黑、酌をする。金剛丸、一つ飲んで大作へ獻し
金剛　伊賀壽、よしなに。
大作　ハツ……いかにや悴、御主人より下し置かるゝこの杯。それにてとくと
　　　ト飲んで太郎へ渡す。太郎、取つて前へ置く。
太郎　ハツ、有り難や。今ぞ念願達せし上は、この世の本懐、未來の土產、門出を祝し、この場に於て

ト思ひ入れ。

一張の弓の勢ひたり、東南西北の敵を容易く……ハヽヽヽヽ。

トこなしあつて

亡ぼせり。

ト此うち上の兩人、毒の廻りし心にて、いろ〳〵こなしあつて

金剛　ハテ、心得ぬ。今の一滴、咽喉へ通れば忽ちに

大作　五臟を破るこの苦しみ。もしやは、これなる

兩人　不老酒は。

太郎　疾より仕込みし毒藥だワ。

兩人　ヤヽ、なんと。

ト金剛丸は錫杖、大作は一腰を抜き、キツと見得。太郎、悠々と思ひ入れあつて

太郎　斯うせう爲に老ぼれを、無理に引込み、我まゝを、聞いてゐたのは面體を、知らぬ純友誘きよせ、旗を取り得ん此方の計略。それとも知らずウカ〳〵と、網にかゝつたうつけの兩人。キリ〳〵爰で、くたばつてしまへ。

金剛　ヤア、さは知らずしてやみ〳〵と

大作　現在主人やこの親まで。斯くなる上は

ト高足より下りようとする。この時、杉太、飛八、起きあがつて、かゝるを、金剛丸、大作、舞臺へ投げる。これをキツカケに、上手より瀧太、下の方より雲太、これに右の兩人一つになり、めい〳〵鐵砲を持ち、金剛丸大作を取卷き

石黑　ビクシヤクひろぐと

皆々　二ツ玉だぞ。

金剛　仕込み〳〵し大惡人。

大作　卑怯未練な、不忠者めが。

ト此うち太郎、懷中より毛拔を出し、髭を拔いて

太郎　こなた衆二人の眼より、不忠と見ゆる太郎には、眼前主人のその罰で、のたうち廻る痴呆の親子不忠の天命、思ひ知つたか。

金剛　ナニ、我れ〳〵が親子とは。

大作　不忠者とは。

太郎　この場に於て不忠のあらまし、語り聞かするその間、苦痛を堪へて

トつか〳〵と上へ上がり、兩人を下へ突き落し、キツとなつて

承れ。

トきつと見得。

金大　ヤ、、なんと。

トこれより大小入りの合ひ方になり、こなしあつて

太郎　我れ幼年の昔より、兎角に父に疎まれしゆゑ、七歳にして家出なしたる金剛丸。然るに母は我れを慕ひ、波濤を越えてこの吾妻路、來り給ふを育みの、爲にいつしか强盜の、世渡りなせば母人の、それを氣病みに末期の一言、まこと御身は伊賀壽太郎が一子に非ず、同年にして主人たる、太宰の少貳經則が三男にて、産屋の内に入れかへ置き、後の憂ひと情なくも、當りしゆゑにこの吾妻路、それゆゑ我れは御跡を、慕うてはる〴〵下りしと、事こまかなる物語り。さては父こそ太宰の少貳、その大望を受けつがんと、寄り〳〵味方を集むるうち、將門純友旗揚げも、親の讓りの念願と、思へど空しく純友には、敗軍なせしはこれ幸ひ、孝行ごかしに大作を、引込み置くも純友を、誘き出して家の旗、取返して首打ち落し、源家へ近寄り、因みを結び、時得て旗揚げ

なさんず計略、瀧夜叉姫を引込むも、源家へ近つく一つの近道、果して最前滿仲が、一つの功に連枝の因み、請合ひ來るは不忠の兩人、まッ斯くなして關八州、我が手に握る苦肉の計略、家のしるしに將門の、御旗手に入る上からは、不日に旗揚げ、何の手間隙。我れこそ誠に經則が嫡孫伊豫掾藤原の純友が、念願達する今この時、アラ有り難や、心よやなア。

ト二つの旗を持つて、キッと見得。

石黑　それゆゑにこそ我れ〳〵も、御手に屬し、汝等を、誘き寄せたる不忠の兩人。

皆々　天命、思ひ知つたるか。

金剛　ヤ、、初めて聞きしこの身の素性。さては我れこそ、家來たる

大作　惡事千里の世の譬へ、いかにも産屋に人知れず、入れかへ置きしその事を、現在妻の口外ぶり、事綻はるゝもこれ天命。それゆゑ主人に朝敵の、汚名を取らすが悲しさに、諫言なせしも、我が子が可愛さ。

金剛　それとも知らず經則を、實の親ぞと御謀叛を、受けつぎしゆゑ將門と、心を合せし純友は、今となつては御家來の、伊賀壽太郎が悴の金剛。

太郎　それをば隱し、純友と、矢張り僞はり、親子の首級、坂東太郎が引ッ提げて、おッつけ參るとこ

の様子、あの滿仲へ、其方どもは

岩藏　然らばこれより

皆々　我れ〳〵は

ト皆々花道へ出る。

太郎　いそふれ、方々。

皆々　心得ました。

太郎　行け。

ト山颪しになり、皆々向うへ入る。

金剛　この上は、せめてもの、不忠の親子が首級をば

大作　御持參あつて大望の、せめて助けとなし給へ。さはさりながら、國の重寶八聲の名鏡こそ、大蘆原四郎將平、密かに我れに贈りしゆゑ、觀音堂の櫻の根本、埋め置きたる奇特にや

金剛　時を違へし櫻の盛り、實に名鏡の威德にて、又も朝家に返り咲き。

太郎　この土に返る瀧夜叉の、平親王と合體なし、不日に旗揚げ。

金剛　その血祭りは

兩人　まツこの通り。

ト腹へ突き立てる。

太郎　すりや、兩人は

トこの時、傳藏、大久出て

兩人　誠の純友、捕つた。

トこの時、太郎、兩人を切ると、後にて遠寄せ。

金大　はや〳〵首を、討ち給へ。

太郎　今ぞ願ひの

ト太郎、段へ踏みかける。この時、下家より槍の穂先、數多突き出す、これにて太郎、後へ飛びあがる。兩人、前へ踏み出す。木の頭。

アラ、嬉しやなア。

ト劍なかつぎ、キツとなる。金剛丸、大作、引廻す。これをキザミ、よろしく、ひやうし　幕

ドン〳〵のツナギにて、引返す。

本舞臺、通し、五尺ほどの雪の石段。左右、岩組み。眞中に櫻の大樹。中は洞になつてゐる。同じく吊り枝。この脇に朱塗りの觀音堂。觀世音と書きし建て札。うしろ黑幕。上の方に岩間。中臺一面に雪布を敷き、二重臺前、雪板、爰に、石黑、岩藏、前幕の形、尻からげ一本差しにて、立ち身。これを手下四人、四天の形にて、十手を持ち、詰め寄せてゐる。雪颪しにて幕明く。

四人 動くな。

石黑 見ればうぬらは仲間の奴等。

岩藏 おいら二人を

兩人 どうするのだ。

手一 オヽ、その不審は尤も。返り忠せし太郎こそ

手二 誠は彼れが伊豫掾

手三 その純友へ加勢の二人。

手四 逐一露顯の上からは、最早叶はぬ。サア、尋常に

四人 腕廻せ。

トきつとなる。

石黑　仰々しいおと骨立て、古風な事を云ふ奴等だ。關八州を食ひつめて、雷が洞でごろついたは、首も廻らぬ借金から。どうして腕が廻るものか。

岩藏　覺えも無い事並べ立て、雪の降るのに餘計な仕事だ。ひやいな憂目を見ぬうちに、ほてゝんがうはよしにしろ。

四人　何を小癪な。

ト矢張り雪颪しになり、よろしく立廻りあつて、東西へ逃げて入る。兩人、同じく追うて入る。

奥より雲太、窺ひ出て

雲太　主人の云ひつけ、御鏡の、在所は慥か此あたり。雪降む下に……オヽソレ

ト舞臺前の雪板へ手をかける。この時、奥にて聲して、「エイ」と手裏劍を打つ。これに當つて雲太、苦しみ、倒れる。本釣り鐘、上手より瀧夜叉姬、下手より秀郷、出て、鋤と鍬を一度に打込み、思はず顏を見合せ、キツとなる。瀧夜叉、思ひ入れあつて

瀧夜　風、雪を覆へば、千斤の斧も碎く事難し。

太郎　春暖時を得て、谷川に漲り落つれば、山花自と笑ふ。

瀧夜　この日の本を天照らす、御神とても女子なれば、その魂ひの鏡をば、ひそめあるを掘り出して

太郎　すりや、埋めし事を、瀧夜叉には

瀧夜　太郎といふも藤原の、あの純友に二度添への、お前に見かへておしつけの、女房が望みは指よりも、切つて欲しいはこなたの首、添へて受取る肴にと、獨鈷も共に秀郷どの、サア、自らに渡さんせいなア。

秀郷　まだ寢もやらぬ其うちに、さりとは無理な心中立て。帶紐解いたその上で、此方の實も、其方の術も

ト懷より袱紗包みの獨鈷を出す。瀧夜叉、これを見て、ギツクリ思ひ入れ。

これが欲しいか。イヤサ、獨鈷がか。ハヽヽヽヽ。死損なひの瀧夜叉が、叶はぬ惡念受けついで、それぞ誠に蟷螂が斧、女だてらに及ばぬ大望。曇らぬ御代を猿猴が、屆かぬ腕で月の照り、水の底意も恐ろしく、もう此方から三下り半。

瀧夜　その心なら又外へ、氣まゝ氣隨に身のありつき。とはいへ女の手道具は、先づ差當るその鏡。

ト鍬を突き立てる。秀郷、これを鋤にて押へ

秀郷　イヤ、鏡はおろか箸片々、どうして／＼渡さうか。

瀧夜　去つた女房の手道具を、男らしくもない仕方。

秀郷　そりや知れた事、嬉しい、破れかぶれに、鏡は此方へ。

瀧夜　イヽヤ、是非とも瀧夜叉が

ト来た突きかゝるを留め、兩人立廻つて、瀧夜叉は鏡を抱へ、石段の上へ登り、秀郷、鉾を持ち、中段にキツと見得。これより誂らへの鳴物になり、雪、頻りに降つてくる。兩人よろしく立廻りのうち、秀郷の懷中より以前の獨鈷を落す。瀧夜叉、これを取上げる。此うち秀郷、手早く雪を掌つて鏡を取出し、瀧夜叉「それを」と寄るを秀郷、突き廻す。この時、奧より信良、金剛丸の首を持ち、走り出て來り、瀧夜叉の持つたる獨鈷を打ち落し、取りにかゝるを、瀧夜叉、信良の持つたる首を打ち落す。この血汐、獨鈷にかゝり、大ドロ〳〵になり、あたりの雪、仕掛けにて紅ゐになる。これにて瀧夜叉、タヂ〳〵となり、秀郷、取り得し鏡をさしつけ、信良は手早く獨鈷を取上げ、キツとなる。

烈しき合ひ方になり

秀郷　さては能勢の源吾近貞どの、旗指山にて失ひしを

信良　邪法を行ふ純友が、誠は彼れも金剛丸、それにて再び精魂の、屍は假の瀧夜叉でも、その魂ひは相馬の小次郎。

秀郷　サア、俗性を

兩人　名乘つた〳〵。

瀧夜　エヽ、口惜しや、殘念や、一度冥府へ赴けども、再びこの土へ歸りくる、招魂の祕法を以て、姿を變へし我れこそは、桓武天皇の後胤、葛原親王より五代、鎭守府將軍良門が二男、相馬の小次郞、自ら名乘つて平親王

秀郷　その將門で

兩人　あらうがな。

瀧夜　たとへ形は女にもせよ、魂ひは乘り移り、恩愛妹脊に姿を借り、思ひ立つたる我が望み。血汐の穢れに祕法も挫け、あまつさへ悴將軍太郞まで、虜となつて憂目を見するか。エヽ、思へば〳〵かほどまで、淺ましき身の

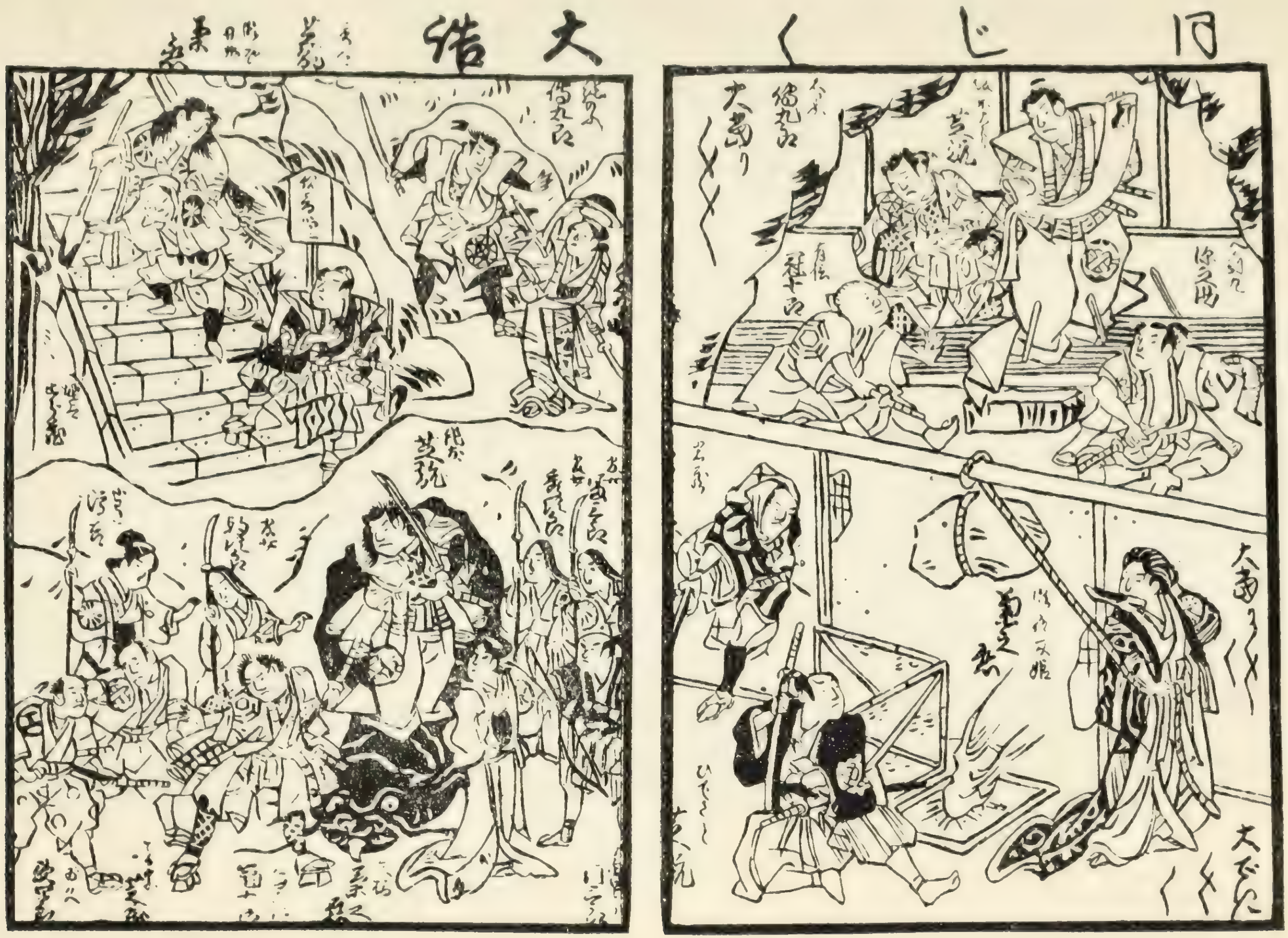
　トこの時、後より杉太、瀧太、窺ひ寄つて

杉瀧　怪しい女め。

　ト瀧夜叉に組みつく。これを振り切るはずみに、引拔き、白衣、裝束の形になつて

瀧夜　成行きぢやなア。

　トきつとなる。



秀郷　修羅の妄念晴れやらず、又もこの世に迷ひ來て、障化をなさんずその惡靈。

信良　及ばぬ事と諦めて、善心に立返らば、未來の苦患も免がれん。

瀧夜　たとへこの身は罪深く、八萬地獄へ落つるとも、やはか此まゝ置くべきか。

秀郷　元より朝敵謀叛の靈魂。なに正法に敵せんや。名鏡の威徳を以て

ト鏡をキッとさしつける。

信良　怨敵退散々々々々。

ト信良、獨鈷を以て散々に打つ。大ドロ〳〵になり、石段の上だけ黒幕を落す。

杉瀧　イデ、正體を

ト切つてかゝる。ドロ〳〵にて、兩人、目くるめき、瀧夜叉、撞と座す。兩人、ポンとかへる。煙硝火立つと、瀧夜叉の形、骸骨となつてスツクと立つ。

秀郷　惡靈消滅。

信良　怨敵退散。

トこれを打つ。大ドロ〳〵にて、骸骨バラ〳〵と砕け、魂ひを日覆へ引上げる。兩人、空を見上げ、キツとなつて

秀鄕　ハテ恐ろしい
秀信　執念ぢやなア。

　トきつと見得。大ドロ〳〵、カケリにて、山幕を振り落す。

本舞臺、一面の山幕、眞中に雷ケ洞と書きし戸帳をかけし洞穴。直ぐにバタ〳〵になり、奥より捕り手四人、十手を持ち、出て來り、洞の中を窺ふ。本神樂になり、洞の中より石黑・廣袖、丸ぐけ、錦の肌脫ぎ、拔刀にて窺ひ出てくる。四人、取卷き

四人　動くな。

　トきつとなる。石黑、これを見て

石黑　又しても〳〵、お仕着通りのうぬらが云ひ草。生てゐるから、動きもするワ。惡く留めだてするが最後、矢ッ張り古いやつながら、片ッ端から、死人の山だぞ。
四人　何を小癪な。

　トどん〳〵になり、よろしく立廻りあつて、皆々向うへ逃げて入る。石黑、キッとなる。かすめたる遠寄せ。

石黒　事露顯の上からは、伊豫の太郎澄信が、刀の刃金の續くだけ、切つて〱切りまくり、この場を切りぬけ、又の會合とはいへ大切なる、忘れ形見の將軍太郎、能勢の源吾が妻の八重垣、傳さあるとはいひながら、かゝる敵地に心元なし。

ト思ひ入れ　この時、捕り手一人、窺ひよつて

捕手　純信。觀念。

ト切つてかゝるを、ちよつと立廻つて見事に切り下げ、キッとなつて

石黒　さうだ。

トどん〱になり、一散に向うへ入る。奥バタ〱になり、しみの戸、茶釜をかぶり、小褄引上げ、長刀を小脇にかいこみ、出て來る。下手より兵太、伴藏、三吾、源太、いづれも凛々しき形にて出て來り、これを見て、惘り、十手を構へ、キッとなる。この時、ドロンといふ遠寄せの頭を打込む。兵太十手にて茶釜をしたゝかに打つ。これにてチヤンと音する。しみの戸、下の方へ行きにかゝる。伴藏、立ちふさがる。又、ドロンと遠寄せ。伴藏、十手にて打つ。チヤンと音する。しみの戸、長刀を取り直し、見えぬゆゑに無暗に振り廻す。四人は後へ廻る。又、ドロンと太鼓になり、三吾、打つ。チヤンと鳴る。しみの戸、スックと立つ。ドロンとなる。源吾、また打つ。チヤンと鳴る。これより四人、

續け打ちに打つゆゑ、ドロン、チヤン／＼と遠寄せ早目になり、トヾ茶釜の前の方割て、しみの戸の
顔出るゆゑ、皆々キッとなつて

兵太 承平の亂れより、朝敵將門亡ぶといへど

作藏 諸所方々に殘黨餘類。鎬を削るその中へ

三吾 炭も削らぬ汚ない茶釜、猪首に着なしさまよふは。

源太 雷門の賣れ殘りか。手拍子打たぬ其うちに、早く正體

四人 顯はすまいか。

トしみの戸、キッとなつて

しみ 缺けたる上は何をか包まん、鑵子天皇七代もち、それから伊豫の純友が、尻を無性に瀧夜叉姫、
その乳人たる、しみの戸とは我が事なり。

四人 イヤ、とんだ茶釜だ。

しみ 惡く寄つたら、炭が附くぞ。

ト長刀を構へ、キッと見得。

四人 エヽ、面倒な。叩き賣れ。

ト誂らへの鳴り物になり、なかしみの立廻りあつて、トヾ皆々向うへ入る。ドン／＼、早笛になり、眞中の戸帳を切つて落す。中より大百足の形にて大勢の者殘らず栗梅の四天、同じ色の帶、襷、黄から茶の手甲、百足の頭、同じ姿にて並び出て、振返つて揚げ幕の方を見る。サラシになり、この百足、一散に花道へかゝる。向うより仕丁、着込みの上へ素袍、股立ち、掛け烏帽子、厚綿にて、下駄を履き、笠をかざし、花道眞中にて行きあひ、押し戻し、百足の頭をあげ、キッと見得。

仕　それ、さへりやうもでんにあり、時到れば廿尋の、大蛇ともなる古人の教へ、聞いてはゐれどおやつかな、それに異る大百足、三上の山にて秀郷が、矢尖に當つて津の國の、矢當が池に形を變じ仇をなすとは聞きつるが、又ぞろ爰にその毒蟲。たとへいか程働らくとも、滿仲が隨身たる、箕田の仕が引ッ捕へ、油藥か天麩羅の、看板にしてやるべいか。それが否なら我が前を、キリ／＼消えて、失くなれエヽ。

ト百足の眞先、岩藏にて

岩藏　吐かしたり、ほざいたり、純友どのゝ身内にて、えせ物ありと呼ばれたる、關屋の五郎篤貞も、この場を立退く向う面、惡く邪魔立てするが最後、毘沙門天の鉾先より、尾尖の劍で突き立てるが、キリ／＼爰を、失くなるめえか。

仕　うぬが方では百足でも、おれが目からはゲヂ／＼同然。捻り殺してくれべいか。

岩藏　何を小癪な。

ト大太鼓入りの鳴り物になり、仕、これを押し戻し。トゞこれを上へ追ひこみ、續いて入ると、山幕切つて落す。

本舞臺、向う一面の雪山、よき所に立ち樹、眞中に大岩、矢張りこの鳴り物にて、向うより坂東太郎長上下の肌を脱ぎ、大わらはにて、捕り手八人と立廻りながら出て來り、舞臺にて入れかはつて、皆皆よろしく取卷き、キッとなつて

八人　やらぬワ。

太郎　ヤア、事をかしきうんざいめら、近く寄つたら、撫切りだぞ。

八人　なにを。

ト鳴り物になり、皆々よろしく立廻りあつて、トゞ皆々向うへ逃げて入る。これを追うて行く。この時「エイ」と矢聲して、矢一筋來る。太郎、これを打ち落し、キッとなつて

太郎　ナニこれしきのへロ／＼矢、我れを目當に射かけしは。

ト この時、向うにて

矢橋 「将門は、このかみよりぞ射られけり。

太郎 何が、なんと。

矢橋 俵藤太が計り事にて」。

太郎 ヤヽ、なんと。

仕 その将門と同腹たる、伊予掾純友へ

矢橋 秀郷が妻の矢橋。見参々々。

トどんちやん、ツツカケになり、向うより矢橋、着流し、狩衣を腰に巻き、弓矢を持ち、出てくる。跡より仕丁、上下大小。八重垣、赤子を抱き、前の田舎女郎、いつもの緋の袴。手下四人。次に信良、上下脱ぎかけ。照宗、同じ形にて、四天の捕り手八人連れ、舞台へ来り、太郎を中に取巻き、キツと見得。

太郎 ヤア、心得ぬその一言。坂東太郎を純友とは、何を以て。

矢橋 それぞ伊賀寿が前非を悔ひ、入れかへ子ぞと自身の白状。

仕 誠の主人は坂東太郎、何卒後々一命をと、願ひに知つたる汝が實名。

信良　包まず名乘つて降參なさば、命助けて肥前へ流罪。

照宗　斯くまで情の寛仁大度。

仕　たつて爭ふその時には、幼少の將軍太郎、いかに朝敵將門が

八重　胤とはいへど瀧夜叉さま、お腹に宿せし上からは

信良　御成長のその後は、御出家勸め奉らん。

仕　但し眼前幼な子の

矢橋　一命斷たうか。

太郎　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵

矢橋　とく〳〵この場で

皆々　名乘つた〳〵。

太郎　チエヽ、口惜しや、殘念や。その人質に是非なくも、今ぞ名乘らん、よつく聞け。伊賀壽太郎が一子と呼び、一度山賊強盜となつて、關八州に威を振ひし、坂東太郎有武こそ、桓武天皇七代の後胤、太政大臣義則の孫、太宰の少貳經景が三男、一天四海を掌握なさん謀叛の張本、その名も

轟く日本の毒蟲。伊豫掾藤原の純友とは、おれが事だワ。

ト引抜き、紫の裝束、疊みあげし形にてキツと見得。

皆々　さてこそな。

太郎　斯く本名を明かす上は、忘れ形見の將軍太郎。

仕　奥州岩木中村へ、八重垣もろとも、これより直ぐに。

太郎　情は情、仇は仇、いま別るゝとも、又の參會、首を洗つて待つてけつかれ。

矢橋　討ち討たるゝは互ひの戰場。

仕　先づそれまでは

矢橋　藤原の純友。

太郎　方々

皆々　さらば。

太郎　これより二番目所作事始まり。

ト打込みになり、太郎、上へのぼり、百足の若い者、この後へ段々帶に取りつき、下の方へ行く。四天の捕り手、前に取卷き、矢橋、上にて立ち身、仕は下手に詰めかけ、皆々よろしく、キツと並び、

ひやうし

第二番目

所作事「道成寺思戀曲者」

常磐津連中
富本連中
長唄連中

役名――八坂の淫藏。文珠丸、源の賴光。小次郎將門の妹、七綾姬。鯰坊主、白雲坊。同・黑雲坊。粟津の晴當。堅田の雁當。瀨田の照當。石山月當。三井の晩當。矢橋の帆當。比良の雪當。唐崎雨當。瀨川菊之丞。白拍子花子實ハ狂言師升六實ハ忠文淸姬の亡靈。

本舞臺、一面道具の雛段、上に富本連中、下に常磐津連中、眞中に囃子連中、この間、上の方へ寄せて櫻の大幹。下の方、跳らへの枝折戸、この外に高札を建て、草土手。尤も櫻は二段の吊り枝。これに跳らへ銀張りの瑠璃燈を提げ、よき所に跳らへの地車、釣り鐘、これに紅白撚交ぜの太綱を附け幕の内より晴當、雁當、照當、月當、晩當、帆當同じ花四天の形にて、これを引きつけし心にて住ひ雨當は淺黃木綿の投げ頭巾、輕衫、三尺手拭、中拔き草履にて、金の采を持ち、雪當は同じ形にて、幣の附きし棒に、跳らへ紫の括り頭巾、大黑の面、太鼓持ちの面、女の面、三つ附けしを持ち、めい／＼黑骨の草花もやうの扇を持ち、よろしく住び、十二座の岩戸神樂にて賑やかに幕明く。

皆々　アヽ、エンヤナ。

ト引きつけし思ひ入れにて、皆々、扇使ひなして

晴當　サア〳〵、もうよい〳〵。一息入れよう〳〵。

皆々　ヤレ〳〵、重かつた〳〵。

トよろしくこなし

雁當　さうだらう〳〵……時に今日、この鐘の供養。どういふ事か男禁制。

照當　その上直さま十二座の、神樂の役まで勤めるとて。

月當　天照春日の作の面。

ト面を取出す。

雨當　天の鈿女か生娘か。

ト見物に見えるやうに出す。

晩當　女郎姿に太鼓持ち。

トまた太鼓持ちの面を出し

雪當　福大黒か大盃の

ト同じく面を出す。

帆當　湯花仇花床花の

晴當　神の昔も色事の

鴈當　妹脊をうつす庭神樂。

照當　三つ揃つた神遊び。歌舞の菩薩の淨瑠璃世界。

月當　法會が濟んだら神すゞしめ。

晴當　入込む人數を警固の役目。滿仲のお側去らず、粟津の晴當。

鴈當　堅田の鴈當。

照當　瀬田の照當。

月當　石山月當。

雨當　唐崎雨當。

晩當　三井の晩當。

帆當　矢橋の帆當。

雪當　比良の雪當。今日神樂の終るまで、この面は鐘樓の下へ。

皆々　飾つて置かうか。

ト雪當、三方を取るとて、淨瑠璃觸を載せあるを持つて來て、不思議さうに

雪當　何やらこれに書き物。

ト出す。晴當、これを取つて

晴當　もう大切なのに、書き物とは

ト雨當と引張り合つて

淨瑠璃名題、聞いたか〳〵、向う梅の替へ紋に、白拍子と聞くも濡れ事。道成寺思戀曲者……

淨瑠璃太夫、富本豐前太夫、ワキ………

ト讀む。

雨當　同じく淨瑠璃、常磐津小文字太夫、ワキ………

ト讀みあける。

晴當　三味線、岸澤仲助。上調子、………右掛合ひ。相勤めまする役人。

雨當　中村芝翫。其ため口上

皆々　左やうに。

ト讀みしまふ。面はよき所へ直す。

隨當 おきやアがれ。餘計な仕事だ。

皆々 サア、來やれ。

ト矢張り神樂にて、この人數、奧へ入る。大小入りの合ひ方になり、向うより白雲坊、鐘供養と書いた高札を擔ぎ、黑雲坊、紅葉の枝に柄樽を附けたるを擔ぎ、兩人、鯰坊主、羽織衣裳、大小、中啓を持ち、出て來り

白雲 聞いたか〳〵。

黑雲 聞いたぞ〳〵。

ト兩人、本舞臺へ來り、よろしくあつて

白雲 おぬしが聞いたぞといふのは、何を聞いたといふのだ。

黑雲 サア、おれが聞いたぞといふのは、秀鄕どのが龍宮から、脊負ひ込んだこの釣り鐘、鐘樓へ引上げられたといふ、三井寺衆徒の一山へのお觸れ。おぬしが又、聞いたかといふのはなんだ。

白雲 サア、おれが聞いたかといふのは、文珠丸賴光さま、御劍を手に入れ給ひ、七綾さまも身替りにて、事濟んだから、その噂を

黒雲　ハヽア、それで讀めた。そんならそれで文珠丸さま

トこの時、奥にて

頼光　聞いた〳〵。

ト次第になり、頼光、もうす、衣、括りを穿き、附け太刀、中啓を持ち、出て來り

これは當山に暫らく世を忍ぶ、文珠丸にて候ふ……いかに両僧、なんと、我れに知らする事あるか。

ト白雲坊、前へ出て

白雲　モシ〳〵、その眞面目はとりおいて、あなたの曇り霞みのない事は、どなたも御存じ。日本晴れのしたやうなもの。何も遠慮はございませぬ。誰れ憚らず七綾どのと

黒雲　それ〳〵、御夫婦におなりなされても、どこからも、しやつとも云ひ手はござりませぬ。

頼光　いやとよ、兄より許しの無きうち、婚儀の沙汰に及ぶべきや。再び武運の開くまでは、この三井寺に假の法衣、何は兎もあれ師の坊の、仰せの程の重ければ、とく〳〵鐘を曳きあげてよからう

ト両人「ハッ」と辭儀して

白雲　ハヽア、樓の盛りも大悲の誓ひ。

ト鐘に太綱を掛けにかゝる。

黒雲　イヽヤ、大事の村雨の、劍は慥か

ト白雲坊を突きのけ、櫻の下へ行かうとするを、ちよつと留めて

賴光　如何なせしぞ。

白雲　何をするのだ。手傳へ／＼

ト綱をあてがふ。この繩を持つて

黒雲　正しく鐘の

ト思ひ入れする。

賴光　はや／＼鐘樓へ

兩人　心得ました。

ト下へ廻つて

白雲　よんやな。

黒雲　これわいな。

ト右の櫻の枝へ振りよく引上げる。管絃になり、中より、白絹、薄衣をかむり、廣振り袖の七綾姫、ツ


五代目 瀬川菊之丞
当顔見世狂言 弐番目ニ相勤申候
五渡亭国貞画

カ／＼と出て、頼光の側へ寄りそひ

七綾　我が君様。

ト白衣を片手に持ち、思ひ入れ。

頼光　其方は七綾、いつマアそれに。

黒雲　サア、その譯といふのは、この入道がお供して、連れて來たお二人。お寺に女はならぬゆゑ、隱し所に困つたから、今日まで上げぬを幸ひ

白雲　それ、この釣り鐘の中へ、こいつは新手な圍ひもの。

頼光　すりや、それ程までに某を

七綾　兄の許せし妹脊仲。

白雲　朝敵も強敵も、こみやり濟んだ上からは

黒雲　今宵奥にて人知れず

ト七綾を突きやる。

頼光　そんなら七綾。

七綾　我が君様。

ト手を取り、立ちかゝるを

兩人 サア、ござりませ。

ト音樂になり、賴光七綾を奧の方へ突きやる。これにて兩人、思ひ入れあつて奧へ入る。白雲坊、黑雲坊、思ひ入れあつて

黑雲 サア／＼、この事を聞いて、また滿成や實朝の、岡燒き餅が來ぬうちに

白雲 それ／＼、女人の外は禁制と、打つて變つた男禁制、この高札を建てゝ置かうか……いかに方々聞き候へ。今日この所にて、鐘の供養と申せども、實は二人が內々の、この方丈を借り座敷。

黑雲 これによつて、男たる者は、決して無用の段、しかと心得候へや。

兩人 心得候へ。

トきつかけにて上下の段幕を切つて落す。上に富本連中、下に常磐津連中居並び、前彈きにかゝる。此うち白雲坊、右の高札を枝折りの外の土手へ差し、よろしく住ふ。

淨瑠璃兩吟〽月は程なく入相の。

富本〽雨と名に呼ぶ花吹雪。

常磐津〽濡れなば濡れよ若芝の、野にも山にも色盛り、こちに送りて。

富本〽情盛りに、

兩吟〽向う梅。

ト矢張り出の合ひ方になり、向うより花子、ひらり帽子、廣袖、紅草履、金銀房附きの女扇を持ち、扱帯結び下げ、白拍子の拵らへにて出て來り、花道にとまる。

富〽作りし罪もいたづらも、迷ふが中の色衣。

常〽着つゝ馴れそめ云ひ出しかねて、寄する男浪の名に立つばかり。

富〽逢うて話しの捗らぬ、おぼこ娘の一筋に。

常〽鐘も碎けよ。

富〽撞木も折れよ。

常〽さりとては、胸の炎の身を焦す。

富〽手持ちないのが可愛らし。

常〽戀をする身は濱邊の千鳥、夜毎々々に袖しぼる、しよんがえ。

富〽君に逢ふ夜は梢の烏、可愛々々と引締めて、しよんがえ。

常〽人目恥かし。

富〽なまめかし。

常〽千草結びも帶ならで、霞も花の振り袖の。

富〽卯の花かをる時鳥、螢の火影夏たけて、さら／＼さつと初嵐。

常〽時雨も雪と降りかはり、獨り憂寢を敷妙の、枕の上に鳴る鐘も。

富〽幾夜の恨み消えなんと。

常〽櫻を三井の法の庭。

兩吟〽供養の御寺に着きにけり／＼。

トよろしく本舞臺へ來り、枝折り戸の外に住ふ。此うち黑雲坊、居眠りをしてゐる。この時白雲坊、思ひ入れあつて

白雲 ヤイ／＼、黑雲、なぜ居眠りをする。

黑雲 イヤサ、これは……それ／＼、大津の柴屋町、何か女郎に惚れられて、その最中を起された。

白雲 何を云ふ。このマア匂ひが、鼻へ入らぬか。

黑雲 成る程／＼、入つた／＼。

ト兩人、立ちあがり

白雲　このマア匂ひは、どこであらうな。

ト兩人、下の方へ來て、花子を見附け、思ひ入れして

兩人　ヤア、美しいワ〳〵。

ト取つて返し、兩人、顏見合せ、思ひ入れ。

白雲　なんでもこれは、舞ひ子だわえ。

黑雲　イヤ〳〵〳〵、こいつ正しく白拍子だわえ。

白雲　イヤ〳〵、舞ひ子だワ〳〵。

黑雲　イヤ〳〵、白拍子だワ〳〵。

ト爭ひ、最前の酒樽を持つて來て

サア、丁度よい。舞ひ子と云うたら、この酒はおぬし一人で、おれは見てゐるし、また、白拍子と云つたら、おれが一人で飲んで見せる。

白雲　よし〳〵、そんなら仲よく一時に。

ト行かうとする。この時、花子、思ひ入れあつて

花子　いかに案內申し候ふ。

兩人　そりやこそ、案内だ〳〵。

黑雲　案内とは、白拍子にて渡り候ふか。

白雲　但し、舞ひ子にて御入り候ふか。

花子　これは此あたりに住居する、花子といへる、白拍子にて候ふ。

　トこれを聞き、白雲坊、驅けて來て、酒樽へ手をかけるを、黑雲坊取つて

黑雲　ドツコイ、この酒は、この入道が、一人にて飲むにて候ふ。

白雲　エヽ、いま〳〵しい……その又、白拍子が、この三井寺へは

兩人　何ゆゑに。

　ト花子、思ひ入れあつて

花子　サア、この御寺に、鐘の供養があるとの事。枯れたる木にも花の色、うつりにけりないたづらの少しは罪も消えなんと、わざ〳〵これへ參りました。どうぞ二人の坊さん達、鐘の供養を、拜ませて下さんせいなア。

黑雲　ハテ、ようしやべる女な。時に、白雲、拜ませてやらうか。

白雲　イヤ、この助平坊主めが。なんぼ生來の生臭でも、斯うしてゐれば作僧同然。男は勿論、今日ば

かりは

黑雲　女も叶はぬ。

兩人　歸つた／＼。

花子　ても、すけない、木の端か、炭の折れかのお二人さん、ちつとは粋にならしやんせ。ほんに笑止な、坊さん達ではあるわいなア。

ト兩人、ムツとして思ひ入れ。

白雲　おいら二人を堂守りか、はつち坊主と思つてゐるか。一體、鯰のおいら二人を

黑雲　鰌とでも見違へたか、剛氣と下直にやつてのけた。サア／＼、これから頭役。一不審持つて行かうか。

兩人　それがよい／＼。

ト兩人、立つて行き、枝折り戸の側にて

黑雲　いかに女人、一問答仕らん。

白雲　それ法華經の妙法は。

花子　妙なる法と說かれしなり。

ト兩人、顏見合せ、困りし思ひ入れにて

黒雲　そんなら、天蓋とはこれ如何に。

花子　枝垂れ櫻であらうがな。

黒雲　イヽヤ違つた。生蛸なり。

白雲　廿四孝の比翼の鳥とは。

花子　鳩に三枝の、烏に反哺。

白雲　イヽヤ違つた。夜鷹の事なり。

花子　そんなら、これ何ぢやえ。

ト握り拳を出す。兩人、悄りして思ひ入れ。

黒雲　コレ〳〵、白雲坊、ひだるからうで、おいら二人へ、握り飯をやらうと云ふのか。

白雲　イヤ〳〵、此奴、先刻の酒を嗅ぎつけて、いぼ燒で一杯飲まうといふ通り者か。

花子　サア、この手の内なは、雀ぢやわいなア。生きてゐるか、死んでゐるか。當てゝ見なさんせ。

白雲　此奴、横着な女だわえ。生きてゐると云うたら、そつと一思ひに。

黒雲　死んでゐると云うなら、パッと放さうでな。

白雲　その手は喰はぬぞ、
黒雲　其やうな事は、芝翫々々。
花子　それ。

ト手を開く。

兩人　何も無いワ。
花子　サア、有ると思へば無し、無いと思へば有り。色則是空、空則是色。
白雲　提婆が惡も
花子　觀音の慈悲。
黒雲　また般特が愚痴も
花子　文珠の智慧、
白雲　柳は。
花子　みどり、禿の名。
黒雲　花は。
花子　くれなゐ、女郎の名。

兩人　好かぬといふは。

花子　いとしいから。

　　ト云はうとする。

白雲　オットそこまで。それを聞いたら云ひ分なし。

黑雲　サア〳〵、此方へ、入つた〳〵。

　　ト兩人、花子の手を取り、中へ入れ、白雲は三方に烏帽子の載せたるを持つて花子の前に持ちゆくと
　　鳴り物になる。

白雲　幸ひこれに烏帽子の候ふ。

黑雲　これを着て、面白う一差し、御舞ひ候へや。

兩人　御舞ひ候へや。

花子　心得申して候ふ。

　　ト笛のあしらひ。花子、よろしくあつて正面を向く。

謠がかり富本〽嬉しやさらば舞はんとて、烏帽子をしばし假に着て、既に拍子を進めけり。

常磐津〽三井寺の、花の盛りを來て見れば、名に紫のあと垂れて、やさし詠めや殘るらん。

富本〽嵯峨々たる法の庭、石山寺と名けたり。

ト誂らへ亂拍子がゝり。富本常磐津三味線入り、舞ひ一段あつて、あと大小入り、いつもの通り舞ひ鐘見よろしく、打ちあげる。一時に段幕切つて落す。囃子連中居並び

長唄〽鐘に恨みは數々ござる。初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり、晨鐘の響きは、生滅々爲入相の、寂滅爲樂と響くなり、聞いて驚ろく人もなし、我れも後生の雲晴れて、眞如の月を詠め明かさん。

トこの時、花子、烏帽子を打ち落すとて、鬘とも脫げて、ほつとせの頭になる。兩人、悄りして

兩人 ヤア、なんだ〳〵。

白雲 こりやア娘と思ひの外

黑雲 うぬは詰まらぬ素奴だな。

ト花子キヨロ〳〵して

花子 こいつは爰には

ト駈け出さうとするを、兩人、立ちかゝつて帶を捕へる。これにて上着脫げて、下は狂言音頭の形、段熨斗目、袖なしやうの肩衣、狂言袴、輕衫、石帶、鶉皮の足袋、大藏流一筆彩色の扇を差したる

誂らへの形になる。兩人、花子を捕へて

白雲　イヤ、此奴が〳〵。男禁制のこの所へ、女の形でよく化けた。

黑雲　それといふのも、われが全體女に、のろいから。といつて此方も、ちつと惡かつた。

白雲　うぬはどこから頼まれた。サア、有やうに吐かしやァがれ。

ト花子を兩方から取つて押へる。花子、思ひ入れあつて

花子　モシ〳〵、お二人樣、これには段々深い譯が

兩人　譯も糸瓜もいるものか。サア、覺悟しろ。ぶんのめせ〳〵

ト立ちかゝる。この時奥より菊之丞、振り袖、羽織、樂屋形にて出て來り、兩人を留めて

菊之　マア〳〵、待つておくれ〳〵。

ト花子を圍ふ。花子、思ひ入れ。

花子　カウ〳〵、お前ゆゑにこの災難。どこの國にか振り袖で、否だと云ふのを無理無體。モシ、御見物樣え。わたしやァ、これだによつて否だと云ふに、何か寄つてたかつて、結綿の紋附き、娘道成寺だつサ。オヤ〳〵、奴が娘形とは、ほんに芝居始まつてこの方、呆れが禮に來ませうがね。もう否だ〳〵。もう〳〵否だ〳〵。サア〳〵、これをば其方へ、返す〳〵。

ト衣裳を菊之丞へさしつける。これにて菊之丞、こなしあつて

菊之 これはしたり、それは尤もぢやが、モシ、いづれも様え。私しも有やうは、この秋から大病で、出られぬ所を、やう／＼と、あなた方のお顔を見たさのまゝ、推して出ましてござります。それゆゑに浄瑠璃も、ぬしを頼んで二人前。その代り、死ぬほど踊らしてもようござります。

花子 これサ／＼、お心安立てなあなた方、なんのお怒りもあるまいが、お前が休んで、おれが踊るのでは、どうかおれが殺されさうだ。

ト衣裳を突きつけ

菊之 サア、そこをどうぞお前

たゞ何事も

トそこへ押出す。

長唄 〽云はず語らぬ我が心。

ト此うち振り袖を引ッかけてやる事よろしく

常磐津 〽亂れし髪も宵のまゝ。

富本 〽歸るを送るさらばがき。

唄 〽見返り柳、月の眉。
常 〽鐘の鳴るまで面影の、思ひ出す身のつれなさは。
唄 〽どうでも男は惡性者。
富 〽去なしやせぬとの爭ひに、かをる夕日の照り紅葉。
兩吟 〽嬉しからうぢやないかいな。
唄 〽嘘と誠を昨夜の口舌、勤めさへ只うか／＼と。
常 〽どうでも女子は惡性者。
唄 〽都育ちは蓮葉な者ぢやえ。

ト花子、よろしくあつてとまると、菊之丞、これを見て

菊之 イヨ／＼、濱村屋ア／＼。

ト花子を突き倒して、奥へ逃げて入る。花子、起きあがつて

花子 アヽ、コレ／＼、逃がしはしねえ／＼。

ト行きかゝるを、兩人、捕まへて引いて來り

黒雲 これは又、どういふものだ。男禁制のこの場へ、女に化けて來るさへあるに、逃げようとは

白雲　一體、われが素性はなんだ。

花子　これはしたり、お二人樣、今時そんな古手なせりふを……さしづめ知れた大内の、狂言音頭の升六といふ者サ。

白雲　狂言師なら、それにして

黑雲　われが身元の云ひ譯を

升六　云へとあるとて、これがマア

　ト頭を搔き、困りし思ひ入れ。

兩人　云はにやアこれから、引摺り出さうか。

　ト立ちかゝる。

升六　エヽ、仕方がない。……サア、それは。

富本〽昔々その昔、爺樣と婆樣のほんぞ孫。

長唄〽一人娘に二人聟。

常磐津〽焙祿割りの味知らず、二人袴の綻びて、尻尾をちらと三つ鼎。

唄〽ついに花子に嫌はれて。

富〽とんと頭を柿山伏、これぢや詰まらぬ伯母が酒、まぐれ出したるのらくらも。

常〽一寸先はどぶかつちり、行きあたりたる身の詰まり。

唄〽闇の礫に猿座頭。

富〽身まゝ居喰ひの居候ふ、煮やき栗やき清水くみ、給仕いたすも太郎冠者、夫婦喧嘩の宗論に、ちよつと大家を釣り狐、早うこんくわい早迎ひ。

常〽八人喧嘩の宗匠と、突き袖せうには薄衣。

唄〽人目を包む隠れ簑。

常〽意見も親の稲光り。

富〽がら／＼ぴつしやり。

唄〽雷の。

常〽桑原々々、免させ給へと手を突いて。

富〽身の上話し、先づ斯くと。

唄〽餘念聞き入るばかりなり。

とよろしく納まる。管絃になり、奥バタ／＼にて、頼光、着流し、錦の袋入りの劔を持ち、跡より七

升二だんめ大切不作





綾、追うて出て來り、頼光に縋るを、白雲坊黒雲坊これを隔て

兩人　こりやアあなた方、どういふものだ。

七綾　サア、折角お目にかゝつたに、朝敵の娘ぢやと、アノ胴慾な頼光さま。

頼光　サア、二世の固めは、免してたも。

黒雲　これはしたり、野暮堅い。オヽ、それ〳〵、コレ〳〵、升六、爰は一番おぬしが役。

升六　イヤ、どうして〳〵、この取持ちは

白雲　否と云はうと、應と云はうと、させねばならぬこの仲人。

升六　これは又、無理ばつかり。殊に素面で、どうしてこれが

黒雲　酒はあるから飲ませもせうが……オヽ、幸ひ〳〵

ト以前の面を取つて來て

丁度、神樂のこの面が

升六　成る程、これは好い物がありました。……先づ、さしづめこれが大盡のお客樣、こちらが相方の女郎。仲を結ぶの太鼓持ち。

兩人　それで一番、やつてくれ〳〵。

升六　これは父、迷惑な。

ト三ツ面の踊になる。

長唄〽花の都の賑はひは、出口の柳、深緑。

富本〽蝙蝠の巻き羽織、彼の山路の夕暮れや。

唄〽浪花の梅の香に匂ふ。

常磐津〽仲居の色を引舟や、一拳りやんの拳酒に、太鼓が浮かす大盡は、エヘン、罷り出でたる大盡は、づんと行き屆かぬ、だゞら大盡にて候ふ、コレ、誰れぞ來い〱。

富〽これは旦那、待ちかね山の裏茶屋に、彼奴を待たせて沖の石、コ、こゝな色大盡樣め、こちの太夫さんが聞いたなら、先刻から待ちかね、それ〱、金、アハヽ、金でござります。

常〽やかましいわえ、なんの彼奴がおれを待たう、歸るワ、留めるな、歸る〱。

富〽これ申し、待たしやんせ。

常〽歸る〱。

富〽エヽ、そりやマァなんの事ぢやいな。

常〽ほんにお前に悪性で、女子さへ見りや不器量でも、構はず問はず滅多惚れ、エヽ／＼、あんまりおすきさんは、いつでもまん丸こい／＼、やれこい、さりとは戀知りさんではあるぞいな。

富〽こりや太夫さん御尤も、もう／＼口舌はとり箒、はいてお歸りなされませ、座敷上手に彈く三味の。

唄〽戀は心の外とはいへど、口說くは正體なし、口說くは正體なけれども、色と情は、君はなぜに、叶へて下さんせぬぞいな、一夜さ二夜さコレ、どうぞなるまいかいな、膵かんせ。

常〽お前の御心が、有るやら無いやら、品玉男の、この／＼よい子の、立派にゆすつてめかしてお出でも、地獄の沙汰もぢや、お歸りなんしと、つれない詞に。

富〽オヤ／＼、ふんばり女郎のくたばりめ、あなぢよりにあなぢよるな、おらどもを何と見た金ふんたく持つてるる、値の高いうぬめさを土産に、國さへ持つて去ぬ、こやさせものめ、よつく聞け、竹の皮さにおッつゝみ、肌でぬくめてさめたなら、又も國さで蒸籠にかけて、一口食つて見る、こや／＼／＼、うせさらせ。

常〽おゝつらや、おゝなめや。

富　〽つらや千年なめ萬年、たうどう去つてうゝせんかい。

常　〽こちやいやいな、マアべかこ。

富　〽エヽしめた。

唄　〽エヽ、君は兎角祭りの、そろへいちりの太鼓持ち、ちよつと一口淀川の、水も洩らさぬ仲
仲に、肱を枕に假寢の夢も、鴛鴦の衾の死ね殺せ。

兩吟　〽深い仲ではないかいな。

升六　ヤレ／＼、草臥れた／＼。どうぞ湯呑を貸してもらひたい。

ト頼光七綾、湯呑をやる。升六、湯を呑む。

白雲　なんの、おきやアがれ。女郎と客の口舌爭ひ。それでどうしていかうと思ふか。

黑雲　二人一緒におツ搦め、寢かさにやどうで初戀は

升六　イヤモウ、いくらおツつけても、お二人ながら斟酌して

白雲　そこを口說くも今一手。七綾どのに、手とやらいふ

黑雲　その魂膽を、教へてくれ／＼。

升六　モウ／＼、眞平御免だ／＼。

ト手を合せるを

黒雲　ハテ、さう云はずとも、幸ひ爰に、この振り袖を引ッかけて

ト振り袖を引ッかけ、手拭にて頭を巻く。

升六　これは又情ない。とは云ふものゝ、おれが役は濟んであれど、濱の太夫と二人前。サア、爰からが菊之丞、女姿を幸ひに、恥かしながら、サアそれは。

富本　〽過ぎし手古奈の櫻時。三年焦れし娘氣は、作らぬ顔の花見幕。フッと見交す戀衣。

長唄　〽つれなく歸る別れより、來ぬるつもりで恨みては。

常磐津　〽届かぬながら幾度か、筆に云はせて巻き紙の、うら〳〵で繰りかけて。

唄　〽知れて破れて。

常　〽投げて見て、ついそれなりに癪の種。

唄　〽ふッつり悋氣せまいぞと、嗜んで見ても情なや、女子には何がなる。

富　〽世に棲みながら儘ならぬ。

常　〽エヽなんぢやいな。

ト頼光に寄りそふ。頼光、升六の顔を見て、愕りして

頼光　ヤヽ、我れを慕ひし清姫に、姿ばかりか面ざしまで

ト逃げようとするをヂッと捕へる。頼光、思ひ入れ。

常磐津〽惚れたわたしが憎いかえ。

長唄〽二人添ひ寝の起き臥しに。

富本〽お前の無理を樂しみと、思ふにつけて悲しさの、解けて亂れて。

唄〽關の戸の、心に殘る思ひ草。

常〽枕に塵のつもりなば。

富〽身の隱れなく寄りそへば。

トよろしくあつてとまる。

白雲　アタ嫌らしい、おきやアがれ。

ト升六を突きとばる。升六、これにて後へ倒れる。

黑雲　サア〳〵、もうこの上は、おいらが寄つて

白雲　サア、七綾どの。

ト七綾が手を取り、連れて來り

思ふ事を、云つたり〳〵

ト押しやる。七綾、恥かしき思ひ入れ。

七綾　サア、自らが、切なき戀路の叶はねば

白雲　それ〳〵、あなたのお手にかゝりませうと、云つたり〳〵。

ト無理に頼光が持つてゐる劍の袋へ手をかけさせる。

頼光　アヽコレ、滅多な。

ト劍を圍ふ。

七綾　そんならどうぞ、頼光さま。

頼光　サア、それは。

ト思ひ入れ、口說き模樣のかゝり。これより四人、手踊りになる。

常磐津〽そりや聞えぬぞえ我が君樣、辛い月日を待たせて置いて。

長唄〽神々さんの仇結び、いつほどけてか恨み侘び。

常〽月の桂男水性で、受けて流してそれなりに。

富本〽合せ鏡のつきあひは。

常〽わたしや誠と誓文かけて。
富〽そのお歯黒の金性で。
唄〽堅い誓ひぢやないかいな。
富〽二人寝よとの比翼の松葉。
常〽落ちて散るとも離りやせぬ。
兩吟〽實さうぢやいな。

トよろしくあつて、黒雲坊は、頼光、白雲坊は七綾、双方より抱きつかせ、黒雲坊これを押へゐて、白雲坊に思ひ入れして綱を解かせる。これにてグワン〱と音して、頼光七綾の上へ、釣り鐘かむる。白雲坊黒雲坊、恟り思ひ入れ、耳をふさぎ

兩人　桑原々々。
白雲　と云つて驚ろく事もない。サア、この上は、おいらも奥で
黒雲　ドレ、寝酒で温まらうか。
白雲　サア、來やれ。

ト管絃になり、兩人、奥へ入る。升六、ソロ〱起きあがつて

升六 ヤレ〳〵、なんだか無性に、女にしたり男にしたり、此やうな目にあはせるとは、さつぱりおれにやア譯が解らぬ。ヤ、ほんに、今まで爰に

トあたりへ思ひ入れして

常磐津〽仇花の、しかも二八の長さしき。

富本〽何を手にしてからみつく。

長唄〽はつて行くへも。

ト此うち升六、よろしくあつて、釣り鐘の側へ行き、聞き耳立てる思ひ入れ。

富〽洩れてやものを岩躑躅。

常〽けしきほふたる執着の。

唄〽姿恐ろし、恥かしや。

ト薄ドロ〳〵になり、キツと思ひ入れ。此うち以前の四天八人、後に出てゐて

晴當 さてこそ怪しい升六が振舞ひ。

晩當 けしきほふたる有様は。

ト左右より取卷く。

升六　ハテ、戀慕に迷ふ忠文が、鬼畜の念と知らざるか。

　　トきつとなる。

八人　なにを。

　　トどろ〳〵になり、釣り鐘へかゝらうと、ヂリ〳〵行くを、支へる。これにて立廻りあつて

唄鼓唄〽けにや流轉の假の世に、火宅の夢の情なや。

常磐津〽鬼畜となつて忠文が、

富本〽修羅の苦驗に迷ふらん。

　　トよろしく、升六、誂らへの引抜きになり、鐵杖を持つてキツと見得。

八人　どつこい。

　　トこれより三方鞨鞁の合ひ方になり　四天八人を相手に立廻り。

唄〽あら面白の鳰の詠めや。

富〽志賀唐崎の一つ松、漁る船のいさり火や。

唄〽サアサ小波、蘆の葉の音。

常〽比叡の嵐どう〳〵として、元より鼓は浪の音。

唄 〽寄せては岸を琴と打ち。

富 〽汀の海づら名に寄せて。

唄 〽律の調べや響くらん。

ト羯鞁三方、打合せよろしくあつて

常 〽實にも興ある。

唄 〽風情かな。

八人 どつこい。

ト納まる。

升六 戀の恨みの七綾賴光、イデ釣り鐘を、引摺り上げて

ト行きかゝる。皆々支へる。これを千鳥に搔きのけ、鐘に手をかけ

常 〽すは〳〵動くぞ、鬼畜の念力、凝り固まりて。

富 〽つき鐘こそ、念なう鐘樓に引上げたり。

トどろ〳〵、鐘の音して、この鐘を引上げる。中より賴光、劍を持ち、七綾も續いて出るを、連理引きにて左右へ引附けんとする。此うち後へ白雲坊黑雲坊出て來て、賴光は劍を袋のまゝ差しつけ、こ

れにて升六、ヨロ／＼として、七綾を引附け、キツとなつて見得。

白雲 さては忠文、淸姫が、執念ともに合體なし

黑雲 賴光公や七綾姫に、恨みをなさんと來りしよな。

升六 おろかや、そこ退け。

兩人 何を小癪な。

ト支へる。賴光は度每に劍をさしつける。これにて升六、タヂ／＼となり、七綾を引附けて、鐵杖を振りあげる。

富本〽今の恨みはありし報い、瞋恚の猛火は身を焦す。

長唄〽思ひ知らすや、思ひ知れと、鐵杖振りあげ、その勢ひ。

常磐津〽花もちら／＼、嵐につれ。

富〽飛びかゝらんとする所へ。

常〽さしもに猛き八坂の淨藏、それと見るより走せ來り。

ト此うち賴光七綾を升六よろしく追ひ廻し、トゞ花道まで追うて行く。七綾を引立てんとするを賴光、これを支へ、三人よろしくとめると、大太鼓、サラシになり、向うより淨藏、緋の衣、露を取り、兜

巾條懸、緋附き括りつけ太刀、大法螺貝を持ち、金剛杖、足駄にて出て來り、大太鼓法螺になり、升六を押し戻す。

皆々　どつこい。

淨藏　ハテ、心得ぬ。怨敵退治の荒行者、三井の先達淨藏が、來かゝる道の向う面、出ッくわしたる怪しの妄念、惡鬼妖魔の嫉妬の念、恨みの靈魂忠文と、合體なした化け物め。大法降魔の利劍の德それよりいつそ手短かに、金剛杖か金剛力、叩き殺すが惡靈め、キリ〳〵消えて、なくなるめえか。

升六　共に冥土へ連れ行かん。來れや來れ。

淨藏　なにを。

富本〽勇士の威勢に惡靈も。

常磐津〽忽ち失せて豐なる。

長唄〽榮え銀杏の源氏の御代。

三吟〽めでたかりける。

ト此うちドロ〳〵、「アリヤ〳〵」の聲。眞中二段の岩臺の上に、升六、釣り鐘を差上げ、キッと見得。

下に淨藏、その次に七綾を圍うて黒雲坊。上手に賴光を圍うて白雲坊。四天の八人、めい／＼弓張りを持ち、蛇形に並んで、しまひの四天は尾尖の心にて、逆立つ。賴光、劔を抜きて、蛇形の劔の心にて見得。尾尖の足元よりさしつける。この見得、誂らへの通り、引ッ張りよろしく、段切れにて

めでたく打出し

白雲 先づ今日はこれぎり。

昭和二年八月二十二日 印刷
昭和二年八月二十五日 發行

『大南北全集第十五卷』

非賣品

校訂 坪内逍遙
編纂者 渥美清太郎
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦
東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江關武
東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂

